

AC Gunsho ruiju
145
G855
1939
v.17

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

<http://www.archive.org/details/gunshoruij17hana>

昭和十四年版

羣書類從

第拾七輯

東京
續群書類從完成會



AC
145
G855
1939
v.17

群書類從第拾七輯目次

連歌部

卷第三百三

筑波問答……………良基……………一

吾妻問答……………宗祇……………一七

卷第三百四

さゝめこと上……………心敬……………三一

同……………下……………同……………五一

卷第三百五

老のくり言……………心敬……………六八

老のすさみ……………宗祇……………七六

卷第三百六

若草山……………九六

連歌本式……………兼載……………一〇二

連歌新式追加並新式今案等……………一〇三

漢和法式……………一一四

物語部

卷第三百七

伊勢物語朱雀院塗籠御本……………一二一

卷第三百八

大和物語上……………一五四

同……………下……………一八七

卷第三百九

竹とりの翁物語……………二一九

卷第三百十

住吉物語……………二四六

卷第三百十一

秋の夜の長物語……………二八六

鳥部山物語……………三〇九

松帆浦物語……………三二四

兒教訓……………宗祇……………三三六

卷第三百十二

無名草子……………三四七

卷第三百十三

拾遺百番歌合物語百番歌合……………四〇二

百番歌合源氏狭衣歌合……………四二七

源氏物語願文……………四四九

卷第三百十四

伊勢源氏十二番女合……………四五—

源氏人々の心くらへ……………四七四

卷第三百十五

源氏物語奥入……………四七九

卷第三百十六

原中最秘抄上……………五一三

同……………五三四

卷第三百十七

弘安源氏論議……………五四九

卷第三百十八

仙源抄……………長慶院法皇五六七

卷第三百十九

源語秘訣……………兼良六五七

源氏物語竟宴記……………六七〇

群書類從第拾七輯目次終

群書類従卷第三百三

連歌部一

筑波問答

後普光園院攝政良基公

過にし春の比かとよ。舊池の亂草を拂て蛙樂を愛する事ありき。彼紅乳蛙をまなばされども。折にふれては。聲々すだく霞がくれの水の面は。實兩部の鼓吹とも聞なしつべし。物ふりたる松のすがた。苔ふかき巖のさまも見處なきものから。わざとめきたる此比の山水よりは。代々の昔がたりとはまほしき水の心ばへなり。そことなきみ草がくれにふりはてぬるものとなさけなき心地ぞするや。春雨しめやかにうちつゞきはれまなきころは。老の哀も數そひ。袖のみかさもまさるこゝちしてながめいだしたるに。松の戸をうちたゞく人あり。誰ならむとゆかしければ。いづくの人ぞと尋侍るに。かたみ中よりのぼりたる翁の。此山水ゆかしくてわざとまいり侍る。あけてたゞひとめみせ給へといへば。すべて見所なくつゞましけれど。何かはゞかり申さむとてあけていれぬ。此翁。年は八九十にも

檢校保己一集

成ぬらんとみえて。まことにひなの長路にとろへたるさまなれど。ひとへに賤の男などとはいひがたく。よにきよげにて心あるさま也。先水上に立よりて。哀いさきよき水の流かな。水には。たち水ふし水といふ事の有なり。是ぞまことにたち水にて侍らん。むかし仲尼といひし聖人の。水なるかなやとほめられたるもげにことはりなるべし。晝夜をすてずながれ行さま。よろづの事につけてすゝむ心ざしあれども。しりぞく事のなければ。その事みな成ずる也。されば丘陵は山をまなべども。すべて山にをよぶ事なし。百川はすゝむ事のをこたらざれば。やがて海とも成侍なりなどいふを聞に。いと心にくゝ耳にたち侍しかば。わらはべを出して。いづくよりいかなる人にてかく立より給へるぞととへば。此翁のいはく。あづまのおく常陸の國に住侍る也。年若より山水にこゝろをすまして。よろづの所へあくがれて。八九十年にも成ぬらむ。此み池をもたびく

おがみ奉りたるに。たびごとにさまかはりていと面白ぞ侍る。
 物のときにしたがひて。風のうつりかはり侍るありさまも。か
 くこそとおもひあはせらるゝ也。東海の三たび桑原に成ける
 を見侍りけん仙人もかくこそと。我からよはひのほども今更
 おどろかれぬるとかたれば。心もしらぬ中人に。やがてかた
 らひよらむも。はゞかりおほけれど。事のやうのあまりにやさ
 しく。心にくゝうけ給はりしかば。此わらべしていふやう。東の
 おくよりはるゝ思ひたゝれたる心さしのいとありがたく侍
 て。しるしらずなにかあやなくなど申ふる事も侍れば。たゞ此
 かうらむのもとへより給へ。みづから昔語も申さんといへば。
 かゝる仰事うけたまはるは。老のさいはひに侍れども。東路の
 おとろへもあまりにおそれあるさま也。よきやうに披露ある
 べしなどいふを。たびくゝもとへといへば。かせづえにす
 がりて。かうらんのもとへよりて。かうべをたれておそれたる
 さまも。よに人々しくぞみえし。うはのそらに申より侍る事も
 さまかはりたる様なれども。べちのことは侍らず。たゞむかし
 がたりのきかまほしく侍る也。ふるき日記などはおぼつか
 からねど。まさしくその時の人に見参して。ありのまゝにうけ
 給たく侍るなり。人の命は百とせ。三万六千餘日とかやうけ給
 りをきたれども此ころは五そぢ六そぢにをよぶ人だにまれに

なりゆけば。はかなき昔がたり申べき友だにすゝなく侍る也。
 翁のすがたをみるに。今はさだめて九十にもあまり給ぬらむ。
 きゝをき見をき給しことをありのまゝにかたり給へといへ
 ば。そのことに侍る。翁が年にをよぶ人も。今は我國のうちに
 よも侍らじ。後鳥羽院の末つかたの事より此かたのことは。
 いたく忘侍らぬ也。さりながらいづくをはじめと申すべきにも
 あらず。たゞそのことゝ御尋につきては。はしゝも申さむと
 いふに。いとどふしぎに覺えて。京へは。さて何度ばかりのぼり
 給ぬらんといへば。今は五六十度にも成ぬらん。この御所のあ
 りさまも。後の鳥羽院の御時よりよく見侍し也。此水はむかし
 より名池にて侍しかども。ことさら承元二年の比かとよ。後鳥
 羽院。三條坊門殿とてときみがきつくらせ給て。詩歌管絃の御
 遊所にて侍りき。後の嵯峨の御時は。此泉殿にて御連歌。年ごと
 に庚申日はかならず侍しなり。辨内侍。少將内侍などいふ女房
 連歌師は。みすのうちより紅のはかま衣の妻口をし出して。か
 ほりみちて心もをよばぬ句ども申出され侍しかば。人々感に
 たへず。高聲に吟詠せられき。又御腹取の尼とて七八十になる
 連歌しも侍りき。それは京極中納言入道殿などおなじ時の人
 にて侍しやらん。此比は女の連歌しなどの侍らぬ無念の事也
 など 袖うちぬらしかたるに何事よりもみゝにたつことなれ

ば。さていづくの國にておいたち給へる人ぞ。歌連歌の道はならひ給へるかとおへば。ひたちのつくばのあたりのものなり。むかし日本武の尊の。にむばりの郡を過て。甲斐國酒折の宮にて連歌し給ひし跡も。いまだ侍るなどかたるに。いよ／＼ゆかに成て。さては歌連歌もこのみ給つらん。此道の事。むかし聞えき給つらむふし／＼を。のこさずかたり給へといへば。すべて非器の身にて侍れば。我とりもちてし侍しこともなかりしかども。みち／＼の物の上手に。みな尋きはめ侍りき。連歌の事は。まだいとけなかりし比より。京極の中納言殿。民部卿入道殿などにもこのえむありて。時々まいりかよひしかば。をる／＼たづねあきらめ申き。地下の人々は。又明匠代々に數しらず侍し事も。みな翁が命のうちの事なれば。をのづから御不審も侍らば。うけ給りをきし事もありのまゝに申べき也といふにつきて。先連歌のことをさま／＼問答し侍しほどに。永春日も暮がたになり。入會の聲もうちしきりしかば。忘れじとてふる懷紙のうらに書つけ侍る也。心ざしあらむ人は御覽じて。さもとおもはれん事には。點をあはせ給べしと也。

一問曰。連歌は此蘆原の國ばかりもてあそぶ物にて侍るか。又人の國にも侍る事にや。翁答云。いと事あたらしき御尋にも侍る哉。連歌は天然にては偈と申也。もろ／＼の經に偈をと

きたるは則連歌也。唐國にてはれん句と申なり。我國にては歌をつらねたれば連歌と申にや。むかしの人はつゞけ歌とぞ申侍し。

一問云。連歌はいづれの代よりはじまるにや。つたはれるさまもこまかにうけ給るべし。答曰。古今假名序に。貫之のかけるあまのうきはしのえびす歌といふは則連歌也。先お神の發句に。

あなうれしゑやうましをとめにあひぬ
とあるに。女神のつけてのたまはく。

あなうれしゑやうましとおとこにあひぬ

と付給也。歌を二人していふを連歌とは申なり。二はしらの神の發句。脇句にあらずや。この句卅一字にもあらず。みじかく侍るは。うたがひなき連歌と翁心えて侍るなり。古の明匠達にも尋申侍しかば。まことにいはれありとぞ仰られし。又連歌といひをきたるは。さきに申侍りつるやうに。日本紀に景行天皇の御代。日本武の尊のあづまのえびすしづめに向給て。此翁が此比すみ侍しつくばを過て。甲斐國酒折宮にとどまり給し時。日本武尊御句に。

耳比磨利菟玖波瑠須擬底異玖用加禰菟流
すべて付申人のなかりしに。火をともしいはけなきわらは

の付て云。

伽絨奈倍底用珥波虚々能用比珥波菟搗伽搗

と申侍ければ、尊にめ給けるとなん。其後万葉集に入たる家持卿の。

さほ川の水せき入てうへし田を

といふに。尼。

かるわさ稻はひとりなるへし

と侍侍る。かやうの事共。次第におほうなり。拾遺。金葉などよりは。勅撰に入侍る也。されどたゞ一句づゝ言すてたるばかりにて。五十句百句などにをよぶ事はなかりき。しかあるに。後鳥羽院建保の比より。しろくろ。又色々のふし物のひとり連歌を。定家。家隆卿などにめされ侍りしより。百韻などにも侍るにや。又さま／＼の懸物などいだされて。おびただしき御會ども侍りき。よき連歌をば。柿本のしゆと名付られ。わるきをば栗のものと衆とて。別座につきてぞし侍し。有心無心とて。うるはしき連歌と狂句とをませ／＼にせられし事もつねに侍り。土御門院。順徳院などの御製は。ことに比類なくぞ承をき侍し。其後後嵯峨院の御代に。殊更興行ありて。民部卿入道殿。爲氏大納言殿などいにしへにもたちこえたるよしうけ給侍し。大かた京極中納言入道殿も。老後

には日ごとに連歌をせられ侍し也。御腹とりの尼とかや云もの。上手にて常に張行するよし彼日記にもこまかにしるしをかれたり。誰もさだめて御覽じ侍らん。又後嵯峨の御時。福光園關白殿。圓明寺攝政殿。庚申の御連歌にもたびたびさぶらはせ給ひき。いづれも名譽の上手にて侍けるとかや。女房には弁内侍。少將内侍。うへしたをあらそひたる堪能にてぞありし。九條内大臣基家。衣笠内府家基。知家。行家卿など其時聞えたる人にて侍るやらん。地下にも花の本の好士おほかりしかども。うへさま道の人々の上手にて有しかば。取分てぬけ出たるも侍らず。道生。寂忍。無生などゝいひしもの等。毘沙門堂。法勝寺の花のもとにてよろづのものおほくあつめて。春ごとに連歌し侍し。それより後ぞいろいろに名をえたる地下の好士もおほく成侍し。近くは。爲世。爲相。爲藤卿など思ひ／＼の式目をつくられなどして賞翫せられし事は。無下にちかき事なれば。さだめて御覽じもをよばせ給ぬらん。又鶯の尾の花の本にても。院の御車など立られたることも侍き。又後光明照院殿は。年ごとに御車たてられて御發句なども有しにや。關東にも代々の管領ことにこのまれし事なれば。申にをよび侍らず。ちかくは等持院ことに御數寄にて勅撰の執奏もありしにや。善阿とい

ひしもの。ならびなき上手にて。門弟ども今に此道の堪能にて侍るにこそ。但連歌のやうは師説を受たれども。すべて時にしたがひて風のうつりかはれば。あらぬ物になりゆき侍る也。救済も善阿が弟子と承りつれ共。其すがたはたとあらぬ物にてぞ侍る。青きことはあゝよりいでゝ藍よりあをく。氷は水より出て水より寒しといふ事のあれば。末の世にもいかに成行侍らむ。おそるべきは後世なりと申事の侍にや。をよそ連歌は。此比のすがたは本にてあるべき也。勅撰をえらばれて。おほくのすがたを残しをかれたれば。後の人はそをあふぐべきにや。いにしへの連歌は。秀句。對句をたゞ一兩句云つゞけたる計也。中比は又一句の成ぜざる句を。歌のやうに云つゞけたる也。近比よりぞ心ふかく。詞もゆふげむなる事共承りしかども。此比のやうに心をまはし詞をみがきて。當座の興をもよほす様な事は。翁いまだ聞侍らざりき。適御ふる懷紙など見をよび侍るにぞ老の命も猶のびぬべき心地し侍る。おほかた歌の道は。心なき民のみゝ近くてこそ。國の風をもうつし侍るべけれ。毛詩といふ文に。こゑのあやをなすといふも。詞の花のことにや。又おなじき文に。嗟嘆するにたへざれば。詠歌すといへるも。たゞ聞所の面白を申侍るにや。歌の道は秘事口傳も有らむ。連歌は本より。

いにしへのものやうさだまれる事なれば。たゞ當座の感をもよほさむぞ興はあるべき。上手といひて。わづらはしく。こはばり聞にくからむ事ゆめゝ用給ふべからず。五條の三位入道の。歌の事を申されたるにも。たゞ詠歌とてうちながむれば。などやらんおも影そひたるをこそほめられけれ。月やあらぬ春やむかしなどいへる歌は。ことはりをきかざるより。うちながむれば先身にしむ心ちぞする。春の花のあたりに霞のたなびき。垣ねの梅に鶯のなきなどしたるけいき風情のそひたるをぞ歌にもほめられたる。連歌の道も又かくこそ侍らめ。かまへてゝ數寄の人には。先幽玄の境に入て後。ともかくもし給ふべきなり。晚唐の詩といふ物をみれば。すべて心もしらぬさきより。吟の面白て心にしむやうに覺侍る也。詩歌の道はたゞ心たしかにて詞の花をさかせ。玉の中に玉をみがくべきもの也とぞうけ給をき侍る。

一問曰。連歌は。國のまつりごとしたすけなどにも侍るべきなど申人のあるは。あまりの事にや。答曰。返々もことあたらしき御尋かな。おほかた歌といへるは。政のわるさをも。まさしくは申事のおそれあれば。物によせて歌を作ておとし文にし侍る。國王諸侯もこれをお覽じて。國の政をなをされし也。唐の歌は。毛詩といふ文にも皆この歌共なり。さてこ

そ申人は罪なくて。政はなをる事にて侍れ。我國にも日本紀の歌は。みな童謡とおとし文にて侍也。万葉よりぞたゞ月花にたいしたる歌は。おほく詠じ侍る。されば古今の序にも其實みなおちて。その花ひとりさかふと云は是也。又まめなる家にはもてあそばさず。色このみの中たちとなるるもみな歌のやうくすたれ行さまをいへり。今の歌はたゞ花をもてあそび月をめだたる計にて。風雅のすがたのなきにや。連歌はまして世理にたがひ侍るまじきものなり。いかに面白句にてもあれ。聊も道理にそむきたるはいたづら物なり。一字のてにをはをもひがごとをいはず。正理にあてゝ案ずるを連歌の上手と申也。をのづから心のよこさ。まに行て。僻ごととの句だにもいできぬれば。そのあまりの連歌は。七八句もみなそんじ侍る事也。されば佛法も世法も。道理もいふ二の文字にて侍よし。慈鎮和尚もくれぐれかきをかせ給ふなり。心たゞしく詞すなをならむするは。まことにおさまれる世の聲にもかなひて。風雅の連歌にて侍るべき也。

一問云。連歌は善事にてあれば。此世一ならず。菩提の因縁にもなり侍るべしなど申は。あまりのことにや。答曰。おほかた過去現在に諸佛も。歌をとなへ給はずといふ事なし。あらゆる神佛。いにしへの聖だちも。歌にもおほく群類をみちびき給

へば。今更申にをよばず。連歌はことに心あらむ人。おもひ入てし給ふべきにや。されば近くは佛國禪師。夢窓國師など晝夜もてあそばれし事。さだめてやうあるらむ。定て心得も侍るべし。情是を案ずるに。連歌は前念後念をつがず。又盛衰憂喜のさかひをならべて移りもて行さま。浮世のありさまにことならず。昨日と思へば今日に過。春とおもへば秋になり。花とおもへば紅葉にうつるふさまなどは。飛花落葉の觀念もなからんや。歌の道は。むかしの人のあまりに執心し侍りしほどに。或は一首に命をかへ。難をおひては思ひ死にしたるためしも侍りき。連歌は。さやうの事は侍らぬ事なり。たゞ當座の逸興をもよほすまでなれば。さのみ執着執心なきことなるうへ。一座も更に餘念なければ。惡念もをのづから盛に侍るべき事もなし。あまりに入ほがなるや強侍ると翁が心の中に思ふ事ありのまゝに申ば。さだめて吹毛の難もほく侍らん。

一問云。初心の時。いかやうに稽古して。連歌はこのみ侍るべきや。答曰。人情さまぐなる物也と古人などは申つたへ侍る。孟子と云文には。生れつきの性はよき物なれども。わろきことになればわるくなるともいひ。荀子と云文には。生得の性はわるきものなれども。學問などしてよくなるとも

いひ。楊子といふ文には。人の性は本より善惡まじわる物なれば。よきかたにひかるればよくなり。あしき方に引るればあしくなると申せり。此三のをしへみなそのいはれ有にや。連歌も生れつきより天性をえたる上手もあるべし。又生得のいたづらものもあり。是ぞ古人の上智と下愚とはうつらずとて。いかにすれども。よきはよきまゝにてとをり。あしきはあしきまゝにてはつる也。又善惡のまじはりたる性は。稽古によるべきにや。うるはしく無上のものゝ上手になるは。此世一ならぬ事也。八雲御抄にも。歌の道も。大聖文殊の智恵よりおこりたるとかゝせ給ひたるにや。げにも定家卿などよまれたる歌は。十六七の比詠ぜられたるにも名歌共おほきなり。天のはらおもへばかはる色もなしなどよまれたるは。最初の歌とこそ承り侍れ。連歌も器量の人は。初學より面白く。秀逸をし侍るべき事也。されどもうるはしき稽古入てこそ。句躰はそろひ侍るべけれ。初心の人おほくは。連歌のつまり侍る也。かまへて初學には。うき／＼と句ばやに。ちとど共なきやうなる事を散々にして。上手にまじりて次第に詞をもみがき。風情をもめぐらし侍るべき事也。最初より上手めき面白からんと案じて。句のつまりたちぬれば。次第に詞もうせ心もうせて。すべてあがる事のなき

也。おほく昔より。上手といふ人の初心の時を尋しかば。胸の中に句がおほくわきて。たふ／＼と句ばやにし侍りけるとのみうけ給をき侍し也。さればとて。そのまゝにて稽古なからむには。たゞふしかはある荒木にてこそやむべき。うつくしくけづりみがきてこそうるはしき良材にもなり侍べけれ。むかし難波の三位入道殿。人に鞠ををしへ給ひしをといひ奉しに。手もちはいかほどもひらきたるがよきとをしへられき。その次の日。又あらぬ人にあひて。鞠の手もちやう。いか程もすはりたるがよきと仰られき。是は其人の氣に對してをしへがへられ侍るにや。後日にたづね申侍しかば。其事に侍り。さきの人は。手がすはりたりし程にひろげたるが本にてあるとをしへ。後の人は。手がひろごりたれば。すはりたるが本にてあると申し也。佛の衆生の氣に對して。よろづの法をとき給へるも皆かくのごとし。連歌もあまりにどこともなからん人には。案じたるがよきと申べし。しづみたらむ人には。案ぜぬがよきとをしふべきなり。但二にとれば。はやくて。どこ共なき中に。無上の堪能はをのづから出來べき也。しづみはてたらん人は。うるはしき上手にはなるまじきにや。たゞ上手にはじめよりそひて心詞をまなび給べし。下手にそひてわろきかた執着しぬれば。すべてなをり

がたき事也。初心の程ゆめ、万葉已下のふるき事をこのみ給ふべからず。たゞあさくとしたる句の。やすくとしたるを。詞やさしく句がるにし給ふべき也。なにとがな面白からんと案じ給ふこと。ゆめ、あるべからず。いかに沈思し給ふともよきはあるまじき也。かるくとし給ふとも。さのみわるき事のみにては侍るまじ。其様は師匠のはからひ申べき事なり。万の道の事も難をよく人にいはれてこそあがる事なれ。我身をよしとおもひては。すべてあやまりのおほかるべき事にや。人のならひ。皆我事は是とおもひ。人の事は非と思ふ也。連歌もいかにしたりがほにおもはん人も。世のゆるさねば。やぶ連歌など申物に成はて侍る事也。かまへてかまへてよき先達にあひて。能々練習すべき事にて侍るぞと。いにしへの名匠たち申されしか。

一間云。連歌はいつもおなじやうに。上手はし侍るにや。又ちと風情もかはる事あるべきにや。答曰。大かた秀逸の躰は。さだまれる事なれば。いつもうるはしき姿をこそすべけれ共。時の好士によりてちとかはる事もあるべき也。千句のはじめの一二百韵などをば。ちとおもはせてし侍るべきにや。當座の百韵は。如何程もうきくとさゝめかして面白きやうにすべし。千句に成ぬれば。發句よりたけたかく。きずも

なき連歌。まことしきをしととし侍る事也。又たゞの連歌にも。一の懷紙の面の程は。しとやかの連歌をすべし。てにをはもうきたる様なる事をばせぬ事也。二懷紙よりさゝめき句をして。三四の懷紙をばことに逸興あるやうにし侍る事也。樂にも序破急のあるにや。連歌も。一の懷紙は序。二の懷紙は破。三四の懷紙は急にて有べし。鞠にもかやうに侍るとぞ其道の先達は申されし。連歌面に。名所めづらしき詞。又常になき異物。うかれたるさまなるてにをは。ゆめゆめし給ふべからず。是先達の口傳也。

〔二〕問云。上手の連歌は。句ごとに面白侍るべきやらん。又地連歌などには。宜からぬもあるべきやらむ。答曰。いかなるものゝ上手も。時によりて一座のしまぬ時は。おもふやうならぬ事も侍る也。大方連歌は。みぐるしからぬ句の。心あるやうなるを地連歌にして。一座のうちみゝにたつやうに。秀逸を二三句もし侍らんをこそ上手のしるしにもあるべけれ。いかでか句ごとによきことははむべるべき。百首の歌にも地歌をよみて。秀逸をば所々にまざるべきとぞ古の人も申侍し。但上手といはれむ程の人は。地連歌にも。放埒のわるき句をばせぬ事なり。いかによき句をしたれ共。正わるき句をませ侍る程は。いまだ上手のさかひにいらぬにてあるべ

き也。よからぬ句にてありとも。點者は見知侍るべき事にや。凡萬の道によき事おほく。あしき事のすくなきを物の上手と申なり。あしき事はおほく。よき事のすくなきを物の下手と申也。古堯舜など申侍し聖代も。あしき事のなきにはあらず。又桀紂とてあさましき惡王の代にも。よきことのなきにはあらず。たゞ大かたにつきて賢王共惡王共申侍し也。人にもよきことおほからむには。少々惡敷ことをゆるさるべきにや。連歌の一道にもかぎり侍るまじき事なり。

一問云。發句はいかやうにすべき物ぞや。答云。當道の至極の大事。發句にて侍る也。發句わろければ一座みなけがる。されば堪能宿老にゆづりて。末座に斟酌あるべき也。よき發句は。みな同類をのがれてあたらしき又侍^{人か}がたし。返々道の至極にて侍也。いるかせにし給ふべからず。先發句のよきと申は。ふかき心のこもり。詞やさしく。けだかく。あたらしく。當座の儀にかなひたるを上品とは申也。一もかけたらむは。うるはしき秀逸にてはあるべからず。むかしの發句は。みな大やうに侍り。爲相卿。

かすむとも雲をはいてよ春の月
といひ。二條の後光明照院關白殿の。

九重につもれはふかし庭の雪

などせさせ給ひたるをこそむかしの秀逸とは申けれ。今はかやうのことも。猶大やうにきこえ侍にや。但爲相卿の又。雪消て日影にぬるゝ落葉かな
とせられ。同關白の内裏の七夕に。

雲のうへに今日せく水や天川

などせさせ給ひたるは。今日あすにて有とも面白ぞ聞え侍らめ。いかなる堪能も。當座の百韻などには。たゞあさ／＼と同類なきやうにするが一の躰にてあるにや。心をふかくせんとすれば。いかにもふるきものになる也。此比はたゞ句も發句のやうに心をくばり。一かど有やうにし侍れども。殊更發句は其詮のあるやうに一ふしを案じ入てする事也。其姿さま／＼おくにしるし侍り。了見し給ふべし。千句の發句の姿。當座の發句のすがた。聊差別あるべきにやとぞうけ給をき侍し。

一問曰。脇句はいかやうにすべき事ぞや。答云。脇句は發句をうけてする事なれば。さのみ心こもる事はあるまじけれど。是もあまりに平懷ならんはわるくや。たゞする／＼と詞やさしく。心あらむ事をし給べき也。わづらはしきやうなる脇句は返々わるき事なり。たとへば万葉などの長歌に。後に反歌とて。長歌の心をうけて卅一字の歌を必よみそへ侍る

にや。それは長歌の心をうけて。しかもつゞまやかにする事なり。脇句もさやうにや侍らむ。但發句のおなじ心なる様なる事はわろく侍る也。別の事をのかぬやうにすべきにやとぞ古人申侍し。脇句の名句はいたくなき事なれば。本様にいたし侍るまではなけれども。是又道の大事にて侍る也。末座の人斟酌あるべし。何様にもたゞ。下句にはかはり侍べき事にや。

一問曰。連歌には。點が勝負にてあれば。兼て點者など定めたるには。其躰を心得てしかへ侍る事も有べきやらむ。又點をば。初心よりことに稽古すべきか。こまかに口傳し給べし。答云。初心の人返々點をば執し給まじき也。たゞ句がらを幽玄に稽古し給べし。點はいかなる上手も。當座におもひわたる事のあるべきなり。されば上手のしたる句も。はづるゝ事のみ有にや。又勝負などには。いかにも寄合をのこさず。四手につけて點をねらはむとのみしらへる連歌は。きたなき物なり。初學のほどは。點のはづれんを返々いたみ給まじき也。姿こそ本には侍れ。弓などの事をも人に尋侍しかば。先すがたを能ならへば。をのづから的にあたる事也とぞ申侍しまことにやあらむ。連歌もかくのごとし。大かた上手の句躰は。別の物にてあれば。うるはしき秀逸。點のはづるゝ

事はあるまじけれども。いかにも點者の物忘などにあひ侍る時は。みおとしも有べき也。連歌には。唐の文世俗の事寄合にはなり侍れば。點者の位の人は。ひろく稽古なくては。叶まじき事にや。此比は朗詠樂府などの寄合。つねに見及侍也。からの文をとらば。毛詩などこそ歌のおこりにてもあれば。興ある寄合も侍べけれ。草木鳥獸の名などにも。よき寄合侍るにや。ふるき歌に。おほくとりたる事にて侍り。きりながら我國のふることだにも稽古なくて。人の國のことまでは。あまりの事にやとぞおぼゆる。和漢連句には。こと更かやうのふるき詩の心などは。興あるべき事也。大かた和漢連句をば。心を付て詞をまはすとぞふるき人は申侍し。又點者によりて句をしかふるとかや申人のありし。翁が所存には。すべて心得ず侍る也。よきすがたをすてゝ。點者のかはりたればとて。わろきにはいかゞし侍るべき。うるはしき堪能にならぬ程は。すべて點數の不同も侍る事也。それは地連歌のそろはぬゆへなり。地連歌だにも津に入ぬれば。點もさだまらべきなり。かやうの事。よく稽古あらば。次第に了簡も有べきにや。

一問云。鞠は上は人にて人數もさだまり侍り。連歌は會衆の多少によりて善惡も侍るべきか。何人ばかりがよき程にて有

べき。答曰。その事に侍り。連歌は眞實のよき會衆七八人にてうき／＼としなしたらんは。一座の後見も興あるべき事なり。あまりに人數すくなければ。句つまりてわろく。又人おほく成ぬれば。物念になりて。すべて一座のおもふやうならざるなり。但堪能に成ぬれば。人はいかにおほけれども句をよくくばりて。すべて人をめにつけぬ事にてあれば。會衆の多少にもよるまじきにや。大かた秀逸の出来ぬれば。其あたりの二三句はさめきて面白也。下品の句出来ぬれば。又二三句はかならずつまる事なれば。かまへて／＼上手を撰て會合あるべき事にや。一座のしづみたちぬれば。いかにも興有事のなき也。物念ならで。然もうき／＼としなすべき也。難波三位入道の鞠は。よど川の水のやうに有べしとつねに申されし也。しづかにて下はやき也。連歌もおなじ事也。上手の打越連歌などは。中々興ある事にて侍とぞ。

一問云。連歌稽古には。なにか肝要の物にて侍るべき。和漢の古事。いづれも寄合にて有べければ。先いづれの事を稽古し侍るべきや。答云。上手は一紙の物をみても。やがて用に立侍る也。下手は百卷をみても。それが用になるはあるまじきにや。崑山と云山に入て。一顆の玉をだにとらぬ事もあるべし。連歌も其人の堪否によりて稽古あるべきにや。此比

は。万葉はやりて侍り。まことに歌の根源にてあれば。よく御覽すべきにや。其外日本紀。風土記は。國の名所のおこりなどかきたる物なれば。ふかく稽古あらん人は御覽すべきにこそ。又源氏物語。伊勢物語。古今以來代々の撰集。名所の名よせなどやうの物を常にみ給ふべきにこそ。たい先上手をあつめて。一二万句も座功を入て。我物になし給より外の事はあるまじきにや。

一問曰。連歌の根源の事の様はみなうけ給ぬ。さて眞實の風躰。いかなるをか本とはさだめ侍るべき。さま／＼のしなをも。たいこまかに口傳し給べし。答曰。物の才覺を申はやき事なり。まことに愚者をみちびきて。やがて撥迷せさする事はあるまじきにや。玉屑と云物に。詩をまなぶべき事をかきたるにも。たい禪におなじとて。心にてこゝろを傳べしと見えなれば。此道も又さやうにぞあるべき。先いにしへよりの連歌のすがた。さま／＼の品をいだして申侍らん。此内にはこそまなびたれとおぼしめさむ句に御心を入て。晝夜をすてず工夫し給はゞ。つゐには句の躰にもとづき給べきなり。其品々。

一上古躰。

日本紀
にゐはりつくはをすきていくよかねぬる

やまとたけのみこと

にゐばりつくば。ひたちのこほりなり。つくばはつくば山なり。顯昭云。にゐばりとは。あたらしく野をかる儀なり。

乗燭の人つけていはく

かゝなへて夜には九夜日には十日を

かどなべては。かぞふればといふ心なり。

家持卿

さほ川の水せきいれてうへし田を

あまのつけていはく

かるわさいねはひとりなるへし

一中古跡。

天曆御門

さ夜ふけていまはねふたく成にけり

滋野つけていはく

夢にあふへき人やまつらむ

頼經法師

もゝそのゝもゝの花こそさかりなれ

公輔朝臣

梅津のむめはちりやしぬらむ

田の中に翁のふせるをみて

僧正眞覺

田の中にすき入ぬへき翁かな

宇治入道關白

このみなくちに水をいれはや

賀茂川を渡るとて

頼綱法師

かも川をつるはきにてそわたりける

信綱

かりはかまをはおしとおもふか

〔一〕近來跡。

をとめ子かかつらき山にはるかけて

從二位家隆

かすめといたまたみねのしら雲

さゝ竹の大宮人のかりころも

前中納言定家

ひとよはあけぬ花の下ふし

谷のを川や承まさるらん

前大納言爲家

山ふかき春のみゆきは下きえて

たちそむるかすみの袖はなをうすし

少將内侍

うらはかとりのはるのあけほの
たれに心のうつるとかしる

前大納言爲氏

色までもうたてあたなるやま櫻

したの心やはなれさるらむ

弁内侍

ゆく春のかすみのころも身になれて

小萩はらふかく露けきゆふくれに

従二位家隆

鹿のうは毛のほしやかぬらん

寶治元年八月十五夜仙洞御連歌に

山里はかせのたよりに人はこて

少將内侍

そよともすれは萩のうはかせ

前大納言爲家

さらぬたにね覺かちなる秋のよに

寛元四年三月法勝寺の花のもとにて

わかなつみにといそくころかな

寂忍法師

梅花にほふあたりは過やらて

寶治元年二月毘沙門堂花のもとにて

さくら色に空さへみつる木すゑかな

無生法師

花にもりくるうくひすのころ

同三年三月毘沙門堂の花の本にて

花もすきぬやかつらきのやま

道生法師

うちなひく柳かえたのなかし日に

心なき身も春やしるらむ

岡本前關白

山かつの梅のかきほにはな咲て

元亨三年四月龜山殿百韻連歌に

おなし雲ゐの春そこひしき

後宇多院御製

老か身にかすめる月はへたゝりて

法輪寺千句れんかに

あは雪ははるのしるしにきえそめて

善阿法師

うすきけふりは草のしたもえ

かねておもふもはるはおしきに

前中納言爲相

ちらぬより風になゝれそ山さくら

正和四年六月百韻御連歌に

くれゆくかねのをとそかなしき

伏見院御製

花まじる檜はらにあらし吹そひて

人丸にゝてうたやよむらむ

前中納言爲相

かきのもとをなかるゝ水になくかはつ

かはるやうたのこゝろなるらん

民部卿爲藤

あすか川きのふのふちににくかはつ

夕くれのうはの空にそまだれける

前大納言爲世

山ほとゝきすひとこゑもなけ

おもふほとにはいまたらみす

善阿法師

風かよふなつのゝまくすわかはにて

幽玄舂

風情句

詞付句

本歌句

古事句

心付句

眺望句

對揚句

歌寄合句

てにをはの句

季替句舂

誹諧

鬼拉

狂句

初學舂

一問云。連歌の式目は。いづれの比よりおこる事ぞや。答曰。中

古までは一二句をつらね。或ひとり連歌。有心無心の句など

にて有し程に。まことに式目を作たる事もなし。然るに文和。

弘安の比より本式。新式など云物出来侍り。鎌倉には爲相

卿藤がやつての式目とて。北林と號していたされたり。當時も

ちゐたる新式は。大納言爲世卿作られ侍るにや。しかあれど

も地下のともがらおほし。當座の了見によりてふるき式を

そむく事侍り。翁が存處の式目を出し侍る也。ことなるあや

まりなくば。是を用られ候べきにやとて。懷中より一通を取

出し侍しかば。有の儘に寫とゞめ侍るなり。

一問云。賦物連歌は。いかやうなる事にて侍やらむ。答云。昔は

二字三字の中略物の名など。後鳥羽院御時は。ことさら賦も

のを御このみありき。近頃は源氏國名などつねに用侍るに

や。うるはしき賦物のふるき抄ども。むかしよりおほく侍れ

ば。今更申にをよばず。大かた初心の人には。賦物は連歌ぞん

ずる事にて侍るとぞうけ給をきし。堪能にだに成ぬれば。い

かなる賦物もやすき事にて侍とかや。限あらんふしものは。尤覺悟すべき事也。此頃は面ばかりだにも。まことしくとり侍らざるにや。無念の事なり。但先秀逸の跡を至極稽古して。賦物の沙汰はあるべきなり。

一問云。連歌に百韻と申事は。いはれあるにや。聯句は韻字ををけばこそ百ゐんとも申せ。連歌はさだまれる韻の文字なければ。たゞ百句などこそ申さめと云人のあるは。まことに侍るにや。

答曰。其事に侍り。京極中納言入道殿も。連歌を百韻など申しかるべからず。聯句をこそ韻の文字あれば。さやうにも申せ。連歌はたゞ百句などにて有べしと仰られし。さらば脇句を入韻とこそ申侍らめ。それは又たゞ脇句とこそ申せ。去ながら近比申付たる事にて侍れば。今更本説をたゞしても詮なき事にてぞ侍るべき。大かたはいはれなき事とぞうけ給をきし。

一問曰。連歌は執筆以下文字作法にも故實侍るべきにや。答云。さしたる作法は侍らねども。會衆座さだまりて。先執筆の人すゝみよりて。圓座のほとりにひざまづき。主人の御目にしたがひて。圓座につきて。硯をひらきて。紙を取てをし折て。前にをきて。墨をする。の又字ナリ。一文字ナリ。兩説也。次に筆を

とりてさきをみて。二管ばかりを墨をそめて。用べき筆をぬらして。筆臺のしりをはづしてをく。うるはしく物を香に二管を用者なれ共連歌はとりかへて用もナリ次に御目をうかひて。賦云文字を書。發句出て後。賦物を當座の堪能などに商量して。次第に書べし。一會句先發句より執筆かきて。讀あげて後詠吟すべし。嫁物よく覺え申べき也。作者名字。所によりて能々分別すべきなり。内裏。仙洞。執柄家にては。公卿は官。殿上人は名朝臣。五位は名計。六位は姓名なり。其外次々の會。さだまれる式あるべからず。抑連歌を高聲に感じなどする事は。公宴などにては其道にいたらざらむ人はあるまじき事也と申せ共。毛詩と云文には。嗟嘆するにたらざれば詠歌をし。詠歌するに足されば。手の舞足のふむ所をしらずといへるもまことにや。面白からん時には。舞もすべき事なり。唐國の法にて侍は。秀逸の句を高く吟じかむせんも。連歌などにはなにかくるしかるべき。詠吟せねば。當座のしまぬ事にて侍るにやとおぼゆるなり。さりながら末座末練の人は斟酌あるべきなり。

翁云。今日おもはざる外に。玉の砌へ參侍だに。身の幸にてあるに。さまゝの事をさへ申侍りぬる事。此世の思出なり。いままでためしなきよはひにてながら侍りけるも。ただ今日のために侍りけり。一樹の雨やどりだに此世一なら

ぬことゝもこそ申せ。うれしさはげに昔の袂にもあまりぬる心地ぞし侍る。御すきのおもしろく覺侍れば。さだかならぬ事を申つゞけ侍るもいとつゞましく侍る也。あなかしこあなかしこ。御披露あるまじきなり。此比の人は。万わしきやうにのみ連歌の道も成行なり。昔より肩をならぶる名匠達は。いづれの代にもおほかりき。心のうちはさこそあらそひけめ。人丸。赤人などの事はしり侍らず。貫之躬恒より。歌にも代々に名をえたる人の。ならびたるもおほかりき。中古の比は。定家家隆卿も内心はあらそはれるにや。後鳥羽院は。なを家隆の歌をぞめでたく覺しめしける。されども定家は其家にて有しうへは。左右なき事なりき。よき歌を人のよみたる時は。かならず家隆卿には見せたるかとぞ。定家卿は申されし。かやうにさまかはりたれども。たがひに上手の境をばしりてこそやさしくも侍しことなれ。本より歌は。たけ

き人の心をだにも。やはらげ侍らんためなり。風人墨客のありさま。月にめで風にあざけりて秀逸をもとめ侍るより外は。餘念もあるまじき事也。万の事心にもかくれず。人もみな心えて侍るを。よき事をもあしきさまにいひなし。わるきことをもよきさまにとりなし侍る事の心得ざる也。よろづのみちも。かまへてノゝあだかたき成とも。よからむをばか

むじ給ふべし。又連歌もかまへてノゝ心づかひを幽玄にやさしくもち給て。住吉玉津嶋の冥慮にかなひて。つゐには道の管領とも成侍るべしとぞ。代々のかしこき人は物語し侍し。今はいとま申さむとて出侍し。よになごりおほき心地し。てつくばの人と申侍しかば。げに。は山茂山までもおもひ入たくぞ覺侍し。

應安第五天初春仲旬之候以或人之秘本書之畢

吾妻問答

一問曰。連歌の道。中古當世とて人申侍は。いつの頃を中古とし何の代を上古とするや。此外にかずく不審の事侍るを尋ね申べし。月待出る程のこと種にの給ふべくなむ。答曰。連歌の事。大かたは歌を二に分て上句下句と申ばかりにて。昔は必連歌共不_レ申哉侍けむ。只上句をいひかくれば。下句をつけ。下句を申せば。上句を付けるなるべし。業平。齋宮にあひ奉りし朝。かち人のわたれどぬれぬえにしあればと。いひ出させ給けるに。又あふさかの關はこえなんと。つい松のすみにて盃に書けるとなむ。是を筑波集に入侍り。拾遺集にも連歌とて入侍ぬれば。上古とはさやうの時をこそ申侍べけれ。此道の再興は。故二條攝政殿このみすかせ給て。好士をえらび給ひしに。そのころの達者。善阿。順覺。救濟。信照。周阿。良阿など侍や。當時も。千句などいふ事侍れども。式目をさだめ法度をたゞしくせられて末代に其旨を守るは。彼御時よりの事なれば。此折節をさして上古とは可_レ申哉。句の様も長高。有心にして歌に其心ひとしく。殊勝の事おほく侍り。然はあれど。うたの繼句などのやうにいひかけて。一句にえの理なきも侍けるにや。侍公うせて後。周阿一人の

風を残して。天下に是をたよりとして學びけるに。救濟に心不_レ及や有けむ。一句を嗜心ばかりにて。前に大權なる句侍なるべし。され共周阿が句には。猶以前句にも能付侍けめ共。有心の様などをくれけるを。其後の好士周阿にも又難_レ及ければ。次第に心劣り來て。世上皆侍公の心に少も似たる事なし。梵灯庵主といひし人。周阿已後の上手にて。門弟おほく侍けるにや。かやうの頃を中古とは申侍ける也。當世と申侍は。宗砌法師此道の明鏡にて。上古中古をよくみあきらめて。救濟。周阿が風骨をうつして中古の風情を捨けるにや。宗砌も我身は梵灯の門弟たりしかども。松月庵と申ける名匠にちかづき奉りて。源氏の物がたりをならひ。歌の道のふかき旨を學びて。をのづから至り深く侍によりて。連歌をよく用捨して。古風の有心幽玄の姿をしたひて。然も一句たゞしからぬ事などを除て。直旨を守り侍りし也。是を中古の人たまゝ殘て侍るが。心をば不_レ尋して。只いかで中古の梵灯。滿廣。信永。持政。重阿。相阿などいふ人には。まさるべきと申侍は。以外淺智の至す所なるべし。只此道は上中當の三の時を能分別して心中に私なからむ事。神慮佛意にも可_レ叶にや。

一本歌のとり様侍とは。いかやうの事にや。答曰。本歌の取様

の事如二式日〔作者。堀河院時代までを本とせり。集は新古今までをとれり。當初より堀河院までの人をば。いまだ集に不レ入侍といへども可レ用レ之。其後の作者は。新古今已後の集に入侍るをば。本歌にとる事あるべからず。但名所などの歌に。末集の作者ならでは侍らぬ事あり。さやうならんは力なかるべし。夫もその所によみて。舛有ものをば取て付侍べし。ことばの字などを取侍らん事はいかゞと覺侍也。同本歌を取といへ共。其心似合侍らぬは。その詮なし。歌をもつて分別して申侍べし。

烏羽玉の夜の更行は楸生る清き川原に千鳥なく也

此歌は。よし野に行幸侍ける時。山邊の赤人のよめる歌也。此歌をとりて付侍らんに。清き川原と侍らんに千鳥とも付。千鳥と侍らむに清き川原とも付侍らむは。能似合侍べし。又楸に清き川原も尤可レ然。夜の深行ばと云句に。楸はさらさら似合侍らず。此夜の深行ばと侍るは。鳴也といふ詞に落着たる心なれば。千鳥鳴也と侍らむは。無_二子細_一侍べし。又。今夜たれす、吹風を身にしめて吉野の嶽の月をみるらんす、吹風によし野の嶽。又月をみるらん。よしの、嶽も似合侍るべし。身にしめてと侍らむに。よし野のたけは事たがひ侍べし。身にしめてと侍らんに。す、吹風はよく付侍

らむ。又。

うちま山朝風寒し旅ねして衣かすへきいもゝあらなくに
此歌はいづかたを付ても。皆似合てや侍らん。又。

武庫の海のはよくあらし漁りする蟹の釣舟浪の上こゝ
是も皆水邊の縁ある物共にて。いづれも、通じて付侍るべし。戀の歌などは。五句の内。皆似合事おほかるべし。只心のすぢ目をよく、分別すれば。初たる歌などを御らむ候とも。やがて寄合の題。其覺悟あるべく候。

一源氏の物語の付様。いかやうに仕べく哉。答云。彼物語は。昔より是を用て。歌人もほめたるものなれば。連歌に取て付る事尤事也。乍去或はみづから見。或は聞取分にては。寄合とせんこと如何と覺侍也。但又當時此物語にふかく心を得たる人。いかでかおほくは侍らむ。只古人の付來たるやうなどを聞ばかりにても付事多かるべし。寄合その中に事ひろく侍らぬ人は。同卷の事を三句も四句もつづけて付もて行事あり。式目にも三句にわたるべからずといへり。卷かはりて別のかたへ付なし侍らば。三句もくるしかるまじく候。如何となれば。明石の卷の事。二句來て侍らんに松風の卷。薄雲の卷の事を心にかけて侍べし。其故は。明石の上は松風の卷に。京へのほり大井の宿をあらためて住給へり。其役薄雲

の巻に。明石の姫君をはかまぎの時に都にわたして紫の上の子となせり。かやうの縁あること侍ば。巻をかへては。三句も苦しからず。又宇治巻は十帖侍れど。みな宇治の事に侍らばあしかるべし。此内に京にての事さま／＼侍ば。宇治といふ句に難_レ付候事有べし。菊をかけものにして基をうちたる事などは。當今かほろの大將と神な月の頃。女二のみやをかほるにあはせ給はむために。菊を一枝ゆるすなどのたまへりしは。都にての事なれば。ゆめ／＼宇治に不_レ可_レ付候。只宇治と云句侍らば。しげ木の中。嶺の梯。岩のかけ道。川ぞひ柳。葛藟。常盤木。蘆垣など侍らんに。宇治のみやなど付候はむ事。肝要にてあまりに事おほければ。不_レ及_レ申候。

一當時。木に名木を付。草に名草を付る事を嫌侍とは。如何様事ぞや。答云。昔より中古までは。さやうにこまかに分別する事なく侍し也。深山のこずゑなど侍らんに。いづれの名木を付侍とも。何かくるしく侍らむ。常盤木といふ句に。松。杉。檜原。橘などは。事の外不_ニ庶幾_一侍也。草に名草の事。草のはらなど侍に。萩が花。菊の露など侍らんは。よも嫌侍らじ。小野の草むらなどあるに。淺茅生と付。花さく草など侍に。萩。又女郎花。萩といふ句に山下草。軒端の草などは。事の外

あしく侍也。只同事を二度いひたるなるべし。戀の句に忍とも忘るゝとも侍に軒の草と付るは宜候。直に忍の露など侍に軒の草は以外あしく侍べし。御尋の外に侍れども。次ヲ以テ申候。山里と侍に庵とも柴戸とも自然付侍は。無_ニ子細_一候。山里に契りし庵やなど侍れば也。柴戸と侍に庵と付事不_レ宜候。かやうの事は。師匠と申事。さのみあるまじく候。只我と心得て分別し給ふべき也。歌をあそばし候はん時。山家と云題にて。柴戸とよみ侍らむに又庵といふ事よみそへ給ふまじく候。然ば連歌の上下。あひかはるまじく候。よくよく料簡あるべき事なり。

一或は名所を好み。或は名所を嫌ふ人侍は如何。答曰。大方名所の事は。八雲御抄にも詮とすべき所をのせられ侍ば。常に侍らぬ名所を不_レ可_レ讀と也。連歌も同事候。餘りに人のしらぬ事を好て仕れば。初心の人などは。付にくゝ候て。當座遅遅する事侍れば。無興の事も侍べし。但又連歌は。歌にちとたゝずまひかはりて。思よらぬ事出来る事侍り。さやうの時は。名所をもて。やすらかに付て遣事あるべし。宗硯は名所をおほく仕し也。當奉行能阿も好侍にや。これはたゞ好とは侍らねども。事をひろく學びおぼえて侍まゝに。似合たる事には取出してをのづから付侍計也。又名所の句をする時。そ

の名處の事をばよせ候はで。一句に詮なき事などの侍はみぐるしく候。たとへば。よし野には雪や花などをそへ。龍田には紅葉鹿などをいひ。弓梶が嶺には雲をそへ。淺間の山には煙をそへなどの事に候。惣じて名所を好み嫌ふ事。無學の人の我しらぬまゝに。人のしたるを嫌はおかしき事なり。又よく見覺えたる人の。たてゝ是を仕候も口惜候。時宜に可_レ隨候。

一付にくき連歌とて。當世嫌事侍は。如何様句に候哉。答曰。よき句も。前より事つまりて。更に料簡なき時も侍。又付にくき句もやうによりて。中々それにひかれて。上手の一興を付出事も侍は。必嫌べきにもあらず。宗砌などは更々前の善惡を不_レ申候しとおぼえ候。前を嫌は只不_レ叶方よりの事にや。但又取こみて理きこえず。あるひは。てにはをちがひなど候へば。付にくき事もおほく侍べし。さやうの句には。砌公も只不_レ付して。詞の字などにてやりたるもあるべし。その句に。

六田のよとちさては大和路といふ句に。

我國は神の七代をはしめにてと侍侍る。此前は一句さら／＼其理なし。六田の淀路は。大

和國の名所なれば。句はあしく共。六田の淀路さては龍田路などこそ侍らめ。大和路とはいはれぬ事也。大和路ならば河内路紀伊路などこそ對すべく候を。かやうの事たがひたるをば。宗砌も無料簡哉侍けむ。六の字に七代をよそへて。大和に我國と付侍也。更々心は寄侍らず候へども。無_レ力ては。か様のことも侍るべし。

一稽古には。いづれの抄物を見てよく侍べきや。答云。此事いづれと難_レ申候。愚意には万葉より已來代々勅撰。其外家集。みな／＼もて。稽古にあしき事侍べからず。さりながら又人によるべく候や。拙者などは。何となく世上の器にて侍ば。万葉已下八代集。その外源氏物語。大和物語。さごろも。うつぼ。竹取などやうの物ども集て。自然不審の事侍れば。引てもみ侍るなる。如_レ此申候へばとて。人のためにも我ためにもその徳ある事は候はぬ遺恨のみに候。或は政道にたづさはり。又は奉公に無_レ隙人などは。いかで事ひろく稽古候べきや。但三代集。千載集。新古今。名所の抄などは。是非共に。眼にかけられ候はでと存候。さりながら老後の人。小兒などの上には。これほどの事も可_レ爲大事一候哉。しからむ人は。古今。新古今。名所集等ばかりをもとりもちゆべく候。一同稽古に初中後侍よし承候。いかやうの心に候や。答曰。け

いこの初中後と申事。書をきたる物なども候哉。不二見及一候。乍去幼稚の人などは。何心をもいはず。古今よりはじめて。用に立べき歌をいか程もおほくおぼえ。いとけなき時。文字ぐさりなどいふことをもして。常にくちにふくれ候はむを初と可レ申哉。扱中と申候はんは。歌の心をも人に尋。其詞連歌に出来候はゞ。それをやらす。句をたしなみれば。人にもいかめしくみえ。我も心おごりするやうにて。彌數寄の思ひもまし候也。是を中と可レ申哉。此さかひを過ては。たゞ歌の詞をからんと思はず。只心風情を事として。有心なる所をもとづき。姿のうつくしく長高をこひねがふべく候や。さやうのうへは。をのづから歌の詞をからずしてしかも歌を不レ出候。自然に心ふかく入。只々何の抄物も胸の内に候て眼をつむやさず。辛勞も有まじく候。これらや稽古の後心とも可レ申侍らん。如レ此申せばとて。か様の事を思ひ得たるにあらず。兩神も照覽候はむ。何となく先達にもまみえ。耳をもうたせられしに。げにもとおぼえ候まゝ申侍計也。

一作者の心遣に初中後候はんや。答云。これはたゞ稽古の初中後を申にて其心たがふべからず。その上に猶初心のときは。句を儲候事第一大切に候間。いかにも詞つゞききれんゝにて。てにをはなどちがひ候とも。我は初心なれば。いかでか

よき事あるべきと心をつよくもちて。打出して。其座に侍らん人のをしへをもうけて。一句二句。又は五句六句も百韻にとまり候へば。をのづから口付ならひに候。餘に人を恥て是を出しても如何あるべきやと思はゞ。道に入事叶まじく候。又是を過て。何となく句數をもせられ。寄合等をも數多見おぼえて。つまり候はじなどおもふ時は。詞の是非を覺悟して。句のすがたをなだらかに思量べし。これらや作意の中と申侍らん。此後に地盤の風舂よくゝ調ては。心天にかけり。地に入候とも正路を失ふまじく候間。平人の思ふ外の事を思ひめぐらして。人の耳をもおどろかすことに心をおくべし。是を心の至らぬ人。さやうにこひねがひ候はゞ。必正路を失て邪路に可レ入候。此堺の用心肝要候をや。

一發句にも仕様侍にや。答曰。發句の事。先は其季の前後をたがへず。いかにも猥になく。しかも花鳥雪月によそへて幽玄の舂を心につかけ。人に難ぜられぬやうに詞のくさりなどはいつもの事なりとも。上中下にをきかへゝ。案じて可レ仕事也。爲相卿母阿佛といふ人。東へくだりけるに。長月晦日に或人連歌を仕とて。阿佛に發句を乞けるに。

けふはゝや秋のかきりになりにけり
としてつかはしければ。人々百韻して。翌日に又一座付け

に。阿佛に發句を所望しければ。

けふは又冬のはしめに成にけり

とかきて出して。其次に曰。歌は題を發句とし。連歌は發句

を題目とせり。然ばその時節をたがへずあるべき事也と申

されけるとかや。彼阿佛は。安嘉門院四條とて女房の歌讀な

り。いかでか初冬の發句。無下に心中にかなはで。かやうに

あるべきや。道をまもるをしへ。尤難^レ有事なるべし。但又當

世かやうにのみ侍らむは。いかゞあるべからん。此次に代々

達者の仕て侍發句の躰を。少々しるし申侍なり。

染あかて落葉にかゝる時雨かな

順 覺

しくれつゝ松をもそむる紅葉かな

救 濟

くれなゐをわすれぬ梅のもみち哉

同

ちらすなと風に物いふはなもかな

良 阿

風ゆるく花かうはしきあしたかな

滿 廣

華にそへおほる月夜のけさの雲

宗 砌

さくらさく遠山守やみやこひと

同

郭公たかねになのる山路かな

同

北野宗匠承候て其年

塵をつきかせをつたふる一葉かな

同

ちる音をしくれにかへす紅葉哉

同

此發句は。報恩の心なるとかや申され侍し也。

春はたゝ花うくひすのいろ音かな 親 當

はな一木うへぬみやこのやともなし 同

花の枝もかくなるものか夏木立 同

小松生なてしこさけるいはほ哉 同

名もしらぬ小草はな咲川邊哉 同

此五句は。心にたくみもなく。たゞありのまゝにしてしかも

やさしき心ざまなり。是等はまなびやすきさまにて。まこと

に又大事のさかひなり。其身にあらずば。いかゞとおぼえ侍

なり。

日の御影はなに匂へるあしたかな 心 敬

此發句は。伊勢太神宮にて法樂の千句沙汰ありけるとかや。

是こそ正中と覺え侍る。太神宮におゐて。むかしよりいか計

の發句か侍らん。しかあれども是等にならふは。いかゞと思

意にも覺え侍る也。

きのふみし花か鳥なくあさかすみ 心 敬

これは以前のすがたにはかはれり。たくみも入。風情もやさ

しく侍る。是等や當世のよき發句と申べからむ。

はなに見ぬゆふくれふかき青葉かな 同

是また詞づかひすぐれてさびしく。誠に作者の本意さぞと

覺侍る。

みる人をいろなる月のひかり哉

同

山や雪しらぬ鳥なく都かな

同

花さかりおもへはにたる雲もなし

專 順

さけはちることはりしらぬ花もかな

同

ゆくあらし花のこなたに宿もかな

同

二條關白の御家にて

夜もくめ月はいつみのゆふすゝみ

同

うすゝみに繪かける雪の夕かな

同

此發句ども皆こゝろもふかく。詞づかひもうつくしく。拔群

と覺侍るをしるし侍也。このうち。良阿が發句は。少たくみ過

ていかゞ侍らむ。其外いづれも無類の風情なり。たれも如

レ此仕らんと思はゞかへりてわろく侍らむ。是はたゞ上手の

ものなれば。此風情を舐にして分限をはからひて。たゞしく

案じのぼり給ふべき也。上手も毎度さやうにせむとは思ひ

かけぬことに候。たゞいつも有ことを少引かへて。下手はせ

ぬ物ぞとみゆること。當時の發句の肝要に候。發句をおほく

せん時は。自然また一興の風舐をも案ずべき也。まれに仕ら

む人は。たゞしきを本意と存べく候。

一 脇句第三にも故實侍哉。答曰。發句は三ヶ句にわたりて。い

づれとも侍らぬ有べし。折節のちがふ事は惡かるべし。脇に
もまたいついひてもよかるべきも有べく候。おほかた脇は
發句のごとく。月なき朝に月のある様に仕はよろしからず
候。發句になき山類水邊よろしからず候。たゞ水などは無三
子細一候。所に望て海邊などのことも有べきか。また千句な
どの末には。山類などもくるしかるまじく候哉。又第三たゞ
何となく。第三に似合たるとおぼゆる句侍也。さやうの句大
切候。脇にはかはりて時節など入ぬ事候。おほやうにたゞし
く有べきか。但發句脇の様によりて其こゝろ一にあるべか
らず。

一連歌に或は歌の上句。また歌の下句とて。あしきよしを申は
如何。答云。いたりてむかしは。さやうのいましめなし。侍公
周阿などの時まで。も。さやうにありし也。

秋はてぬいまはやま田のいねよとや

是は侍公の句也。少一句たちがたく候。此句に今川了俊付侍
しなり。

鹿おふ聲そさとにきこゆる

いねよとやに鹿おふこゑなどは。よく侍れども。鹿おふ聲な
どは山田などのことに候はでは。いかゞと覺侍也。か様の句。
少は歌の上句。下句と可レ申候哉。

すみなれし昔の跡をきて見れは

などいふ句のこと。かやうのをばきらひ候。

一連歌に序の歌の様に付たる句とはいかやうの事哉。答云。筑

波集には。故人の句にさやうの句みえ候。當時も仕候はゞ。長高聞えて可レ然候哉。其句様。

おもふに付てまさる戀しき

と云句に。

水ふかき春の山田をうちかへし

など付候哉叶侍らむ。是は古今集に。春の田をあらすきかへしかへしても人の心をみてこそやまめと申歌の類に候や。

此舁は上手に成候はで仕候はゞ必惡かるべく候。乍レ去如レ此の舁有とは。心得をくべきなり。

一連歌にも。未來記と申事侍とかや如何。答曰。歌の未來記のことは定家卿御作に候。同雨中吟の十七首など侍る。連歌にはかならずさやうに書をきたるものも候はず候。宗砌あまりに上手にて。詞など自在に侍しまゝ。秀句などにあしきも侍けるにや。其比。砌公のたゞしき意をまなばずして秀句などの侍を。諸人こひねがひて。邪路に入たぐひ多く侍しほどに。宗砌是をいましめて。其次に我句に侍を。秀句のあしきをも物語侍し也。未來記のうちに二種侍べし。一には心の未

來記。二にはこと葉の未來記なるべし。詞の未來記とは。大略秀句の惡きなり。心の未來記とは。

佛なき世になとむまるらむ

といふ句に。

きさらきの末のゝきゝす集にふして

此句。佛なき世になど生るらんと云心を案じてするに。たゞ人間のことなるべし。何ぞ鳥獸などのことを可レ申哉。心の未來記は。か様の修行大切事候。詞の未來記とて申されしは宗砌我句に。

はつ春のあら玉はゝき手にとりて

などのことに候や。また或人。

さゝ波路ゆく志賀のうら船

と申たりしをも。未來記とて返されしなり。次連歌士誹諧と申候狂句などのこと也。誹諧舁と申は。利口などしたる様の事也。古今にみえ候也。それも一舁のことなれども。惡をあらはす。其一也。誹諧舁にも。心の誹諧。詞の誹諧侍るとかや。能々可レ有御修行二候。

一我分限より心をたかくつかひ。またひきくつかふとは。いかやうのことぞや。答曰。わが心をたかくつかふとは。等輩の人と寄合て。句を案じ侍らん時は。いかにも分際より心たか

くをよばぬ事をも案じ候得ば。自然いたらぬ心をもまふくる侍也。心をひきくつかふとは。貴人などの前に侍てはいかにも／＼おもしろく付よき所をば。貴人にさせ申さむとすれば。斟酌がちにて句をもち侍ながら仕事なし。さて難儀なる前句。またさせる事なき前句には。是をわが可_レ申所ぞと覺え侍るに。其時よき句をいかにもかなとせば。當座の奉公も闕て。面目うしなふことも侍べければ。身をすてゝうちひらめを申也。是ぞ心をひきくつかふとや申べからむ。又何とやらん仕をくれて。おもてをもすり侍らむ時は。やすやすと付て心を取なをすべし。かやうの時よき句をせんとためらひ侍らば。いくおもてをもすり侍べし。是も心をひきくつかふ一心なればなるべし。かやうに覺悟するだに。當座の儀大事候。其外當席にのぞみての心づかひ。記すにいとまあらず候。

一連歌に本とすべき句の躰侍る哉。答云。歌は十躰を本として廿八躰など申こと侍にや。連歌も十躰ばかりは侍よし。宗砌申侍し。恩意にその數を分侍らむことゆめ／＼あるべからず。たい何となく長高くして。幽玄有心なる躰肝要候歟。連歌も歌の風情をはなまじき事(る歌聲)に候へば。其おもむきを心得たる人まれにして。やゝもすれば詞こはく。心いやしきのみ

侍れば。是に付侍るも。をのづから前にひかれて。惡道へ入よとおもひ侍れども。取かへす無力。幽玄をも忘れ侍也。是第一の歎なり。然有とも。かやうの所をのがれて。餘情などの侍句出來たらば。眞實の上手とも申侍べし。此旨を心得ざらむ人は。只連歌はいやしき物ぞと申侍らむこと。不運至極なるべし。所詮長高く。幽玄なる風情をうつす心得とならば。人丸赤人の歌に。

さを鹿の妻とふ山の岡へなるわさ田はからじ霜はをく共身に寒く秋のさよ風吹なへに古にし人の夢はみえつゝ秋かせに山とひこゆる鴈金のいや遠さかり雲かくれつゝわかぬ浦に鹽滿くれはかたをなみあし邊をさして田鶴鳴渡る田子の浦に打出てみれば白妙のふしの高ねに雪は降つゝなど様の歌。其外。なりひら。いせ。小まち。つらゆき。忠みね。俊頼。俊成。後京極殿。慈鎮和尚。寂蓮。定家。家隆のうたなどに。面白からん歌を常に心にかけてうち詠て。我連歌のたゝずまひを取合て案をめぐらされば。いつあがるともな。其心すがたを少も得事あるべし。弄_レ花香滿_レ衣といふがごとくなるべし。万葉は世あがりて。こは／＼しきなどゝ申人は。口惜ことなるべし。それはたゞ万葉の心をしらざるゆへなり。兩卿などの時の詞の様になきは。時代の風なれば申

にをよばず候。しかれども又定家。家隆。有家。雅經等のよみをかれたる歌の詞。皆人本とし侍も。万葉の詞を出ざる事おほし。たゞみる人所レ得侍べき也。さて連歌に見侍べきは。救済。宗砌。親當。心敬。專順。是等の句のうちに。心もふかく詞もうつくしからむを本とすべし。上手なればとて。毎句殊勝ならんとも不レ可レ思。本とすまじき句可レ侍。か様の所をよくよく思量て了簡あるべき也。今申所の跡を本とすれば。其外はたいところによりて。いかやうの風情もあるべし。夫は嫌べき事にあらず。

一句の作様に。中古。當世侍とは如何様の事ぞ哉。答云。中古は只前に心を付る事おろかにして。寄合計を心にかけて一句を辛勞するなるべし。但一句の作様も。當世には大にかはり侍り。中古なればとて皆惡かるべきには侍らねども。先少少其趣可レ申候。

風ふけはあすのとまりに舟のきて
やみをまついさりのあまの月にねて
しほくみの雨の日はかり袖ほして
鹽くみと云事。あるまじきことば候也。

ふし高しされとも月はうへにして
あま人の此世はつみにたすかりて

散やすき花一えたの使して
鹿の音にあすの山ちを先聞て
など様の事を随分と申けるなるべし。當世の連歌士の作の様。

山さくらけふの青葉をひとりみて 能 阿

いつ行て岩ふみなれんよしの山 同

あさかほの花のあたなる身をもちて 親 當

見ぬ花の匂ひにむかふ山こえて 同

秋さむき片山きしに水おちて 忍 誓

山本の野をゆふ暮と鹿なきて 宗 砌

あさちふに一本たてる梅さきて 專 順

月にちる花はこの世のものならて 心 敬

などやうにしてしかも前に付所。言語道斷殊勝なり。中古。

當世をよく／＼御覽じ合て。句の跡をも詞をもいたはりて

可レ作。加様に申侍れども。連歌の習は。當座にて思案遅々し

侍るは。詞のかけあはぬ事も侍べし。されども分別の心ある

人は。さのみ惡かるまじきにや。

漢の事を和朝の事になして付事如何。答曰。漢の古事。二句

つゞきて後。いつ迄同じ事を仕らむ。只歌の三句に渡。あ

しきごとくなるべし。さやうの時は。和國のかたへ取なして

付るなるべし。其證句に。

車の右にのりしかへるさ

といふ句に。

人を見る馬場の目をり時過て

と侍る前句は太公望が事也。前より二句其心侍るに。彼右近の馬場の目をりの目。むかひにたてたる女車を思ひて。見ずもあらずとなりひらのよみ侍りしを取合て。右と云詞に。右近馬場を取成。車を物見車によそへて。のりし歸るさ。大事なるを。時過てとあひしらひて心を捨て候。かやうの事大切な事に候。又昭君が故事。楊貴妃が事。つねに出る事も。是にといづれも御了簡あるべく候。

一神祇釋教の句にする様侍とは如何。答曰。釋教は御法。をしへ。ほとけ。つみ。野寺。山寺。行一聲。室の戸。曉起など云事常事也。釋教の三句めに。釋迦。藥師。彌勒。補陀落。一味兩悟の母。そみかくたなどする事口惜事候。一句もこはくしくては。行末も大事也。神祇も同事候。一隅を擧て申侍るなり。水邊の三句めに。沖の鷗。鳩のうきすなどいふ事候へば。ことの外付惡く候。此等又意得大切候。

中古に侍詞を當世嫌事侍とは如何。答云。連歌も以前如し申候。歌を不レ可レ出候處に。歌になき詞をする事惡候。少々是

に申べく候。水音。田守。小田守。花守。返文。とけ霜。捨人。野里。浦里などの詞。以外不レ宜候。必如此申候へ共。京都の好士の中にも。無沙汰の人は仕る事侍り。然ども夫にひかれ給ふまじく候。又古き歌に候へども。不レ好事もあるべく候。夕月。旅ふし。遠道などの事に候。餘に申さば。きはも候はじ。たゞ是を以工夫あるべく候。

一詞にかけあはぬ事侍とは如何。答曰。此事尤大切な事候。歌人も是をかく申事候。連歌士これを存知する人なし。但拙者もいか様なるを。かけあはぬとも。かけあふとも。いかで可レ申候哉。乍去宗砌。專順の句を見るに。詞よく。つよきはつよく。よはきはよはく取合候とおぼえ候。

しらかなるかみの宮人沓はきて
ものゝふをみれば矢をおひ大刀はきて
月ほそき草のまくらにはる暮て
岩たかきみねのさわらひもえかねて
わたりせむ川音たかし夜のあと
か様の句は上下よくかけ合て候哉。先年堀江七郎光持とて。若年にして好士といはるゝ者侍し。しかれどもいまだ詞などのは非をも分別する事侍らざりしにや。
なかるゝ月をむすふ川水

といふ句侍しに。光持付ける。

うき草にやとりはかなき秋の露

と仕しを。砌公。やどるもはかなとなをされ侍し也。げにもやどるもはかなはうつくしく。やどりはかなきはつよく侍にや。是等にて思量給べく候也。

一座のはやきを好みまた遅きを好事。何をかよしと申べからむ。答云。此道はいかにも心をしづかにして。ふかく思案を可レ入事なれば。尤久しく案じて可レ仕事にこそ。然共時宜に隨てやすくして秀逸にまさる事可レ侍。其上大かたの人は。當座にて不レ案ばと思給ふにや。宗砌申侍しは。兼ていかにも稽古工夫をして。當座のしわざをば。早々とせよと申侍りしにや。げにも稽古侍らでは。いかに案候とも。當座の妙句不レ可レ有候。如レ此申せばとて執筆の披露もせぬ前に。隨分がほにて。興ある所を人に口をもあかせじと仕は。口惜事也。所詮この道は。心中のたしなみと當座の時宜とを相量て。よきほどに入目にもなく。又さし出てもみえぬやうに可ニ心得一事也。此道にたづきはり侍らん人は。先冥加を可レ思。いかにも住吉玉津嶋を奉レ仰てなをきをあげ。まがれるををき。自他不二の思ひを專として。人の師ともなり。人の弟子とも成て。終に上手に成侍らむ事をねがふべし。猶々歌

の道は。只慈悲をこゝろにかけて。紅葉落葉イ飛花落葉をみても生死の理を觀ずれば。心中の鬼神もやはらぎて本覺眞如のことに歸べく候。皆與ニ實相ニ不相違背と侍れば。何の道にこころをよせむ人も此心に不レ可レ違候也。

一和漢連歌の時。心づかひ侍とは如何。答曰。如レ仰常の連歌の心得にては。無下に心きたなき事侍べし。其ゆへは。連歌は大略こまかなる事を先として長高所少し。連歌の上にてだにも。是のみぞ口惜侍。ましてや詩人にあひてさやうの心侍らば。何の興かあらむ。いかにも心をたかく持て。細に入候はで。大に句をしたて。風情眺望に心をかけて。一句も心きたなき事をせじと可レ案候哉。歌も詩歌合の時は。長高よめと申事侍るとかや。

一文字あまりの事。人により侍るとは。如何の事候哉。答曰。貴所などにてさやうの憚なきにあらず。但あまらであしからむはいかゞせん。あまる中にをいて。分別侍べきにや。歌は文字三など餘事も侍り。彼ほの／＼と有明の月の月かけに紅葉吹おるす山おろしのかせ。是尤名歌也。連歌に至りては。只聞よからむなどをはからひ侍べき也。當世の連歌ひとしき歌なりと申され候し也。たとへば文字餘りにも。入あひのかねに。有明の月の思ひいづるむかしおもふなど可レ然候

哉。歌にもあればとて。野べの露はなとは。すこし耳にたち候哉。如し此事其理分別大事候哉。しかはあれど。心にかけて給候は。其さかひに入給ふべき事。うたがひあるべからず候。

一可案前句。又案ずまじき前句など申事いか様のことに候哉。答曰。たとへば歌に百首の題を取て。基俊。俊成などは。そのうちに秀逸も可二出来一題を五六首など見分て。十日も廿日も案じて。其外の題をば一日半日によみけるとかや。連も歌只させる事なき前句は。やすらかに思案を不レ入してみをもすてゝすべし。また思ひ入て可案所をば辛勞すべきこと肝要候。當時の人は多く付よき所。又おもしろき所をばはやく付。少しもつけにくくて。させることなき所をば時を移候事口惜候。またむづかしき所をば稽古候はでは。やられぬ事も可レ有候。然者たゞ稽古と修行と一も關てはかなふまじき道に候哉。

一執筆の事。ういゝしく侍といへども。しゐてつかふまつれなど候にも。さやうの時も定て古實おほく候はん。承度候。答曰。執筆の事。我等事不レ勤候へば。其道の事殊に不レ弁知候。おほかた人の申候は。先文臺のもとへさしより候時は。貴人などの渡り候はぬかたよりゆきて。文臺にむかひ。硯の

ふたをあけて水を入。すみをよくすりて。其後筆を二管計取て。可レ然を見てよく／＼染て硯に置。紙を取て。残るを硯のふたのうへにをき。二まいを二に折て發句を可レ書ほどをみ計ひて。賦と云字を書て文臺にをきて發句を可レ待。其時おほかた主人の氣色を見給ふべし。さて發句出侍らば。請取て披露し侍るに。或は宿老。或は道の達者。可レ然は。發句したる人の賦物を取て侍る時また披露して。其のち賦物のくだりより發句作者まで書て。また披露して文臺に可レ置。作者の名はじめたる人ならば。執筆以前にとひ可レ聞。其席にて問事も侍べきにや。事の様にしたがふべし。扱硯のふたの紙を。自然の便宜に文臺の下に可レ入。會のうちに人來侍る時は。發句をよむ事。さるべき人には。第三までよむべく候。又させる人ならば。發句計よみ上べく候。今付所の句は。先當句をよみてのち前句をよみて。又今の句を可レ讀候哉。至て貴人の前にては。つねの人參上の時。發句讀事は侍らず。依御氣色讀事侍にや。大かたの會には。必よみ上候ならひに候。また執筆は少しも筆をはなす事あるべからず。万一立レ座時は筆を文臺の端にをきて立べし。是は筆を持たる心なり。連歌過て懷紙をとち候事など。大かたは二に折て閉候也。結構にたゝみたる紙などは折も折にくく候をば。懷紙

をそろへて見合て二度にとをすべく候。貴所の御會の時は持て立候てかげにて句をも引開てしたゝめ候。か様の事。其身に侍らねば。更に存知候はねども。承事候間。大概事申侍なり。

此條々尋承候處。何も分別而申事あるまじく候へども。初心のこゝろづかひをなど仰候へば。隨^レ命計候。努々他見不^レ可然候。

此一簡。武藏國隅田川原ちかきあたりにしばしやどる事侍しに。若き人のあまた侍りき。京にて見る人などより。心ざしふかき様なる人々に侍れば。事とひかはす事なども侍しに。やよひの下旬の頃。待すぐるほど。物がたりなど仕しに。今夜はたゞなる人だにも月待など申物を。山端ちかきうらみをもいはず。いかでかなどかたらひし次に。此みちの色々を尋侍られしを。且は其人の情もありがたく。または後世の思出にもとて。深行まゝに。かたはしづつ申侍つるを。のちにしるしてなど申されしかば。いなびがたくて書とゞむる事になりぬ。誠に短慮未練の至。後見のあざけり。穴かしこゝ！

文明第二三月廿三日

宗祇在判

右吾妻問答以古寫一本校正了

群書類從卷第三百四

連歌部二

さゝめこと上

世中のはかなきむつものがたりのおりふしには。ふみしらぬ和歌のうらはのくらき道までたがひにしのびあへず。うちいでぬることのはのすゑ。うつゝ心なき事に侍ども。これはふせやがしたのさゝめごとなれば。かべのみゝもをぼつかなからず。人は一夜のほどにも八億の事をおもふなどなれば。跡なしごとにつれなしづくり侍るもつみふかきわざなるべし。又露ばかりもかたへの人のうへにはあらず。たいふたりが此道にふみまどひぬるたづ／＼しさを。うちいで侍るばかりなり。やまと歌の道は。むかしより代々のあつめに。いせのうみのな

ぎさの玉のかず／＼をみがき。いづみの柚木のしな／＼をけづりつくし侍れば。いまさらのことにあらず。つらねる歌もおなじ道には侍れども。近き代より尋いり侍れば。つくば山のこのもかのものおくのこりて。ほのぐらきかたのみおほく侍り。まことに歌の道は。天のうきはしすゑとをく。よゝにつきてか

しこき人のふみしらせ侍れば。いかなる世にかたどり侍らむ。つらねることのはもよるづはにかきあつめしすゑ。よゝにくちせず。そのすゑ。後鳥羽院水無瀬川よりながれいで。數をつらぬる事とぞなり侍る。かの百とせあまりのすゑつかた。世にふたりみ善阿頼覺信四教濟阿たりのかしこき色ごのみいでゝ。さかりにもてはやし侍るより道のひろきことになれるとなん。又このすゑに名だかきひ二條大關じりいで給ぬ。かの御代に。ひとりのかしこき色ごのみ残り侍りて。ひめもすに夜もすがら御ゆかのすゑをあたゝめて。さまたまの道のひかりをさだめ給ひしかども。ひとよの御事なれば。ひかりものこりおほくやけべりけむ。

さてその二條の名だかきひじりの御世にかのかしこき色ごのみに仰合給て。つくば集とていみじきさま／＼のかたちをつくしてあつめ給へる。此道のひかりなるべき物に侍るやらん。かのつくば集のこの葉は。古今集にずんじて。道のひかりにこよなおぼしめしをける物なれば。此道に心ざしのともが

らは。此さま／＼のかたちを心をとめて。尋ねしるべき物と見え侍り。しかはあれど中つころよりは。名をだにしらずなり侍とかや。さればしるべなき道になりて。たがひに心のまゝのことにのみ成ゆき侍となん。

又歌の道も中つころよりしなくだり侍るよし。さもなりゆきぬる事やらん。

先人かたり侍る。水無瀬どの、御世にぞいにしへにもおさおさこえたる歌の仙。数をつくしていまそかりける。さま／＼の風をしたひ塵をつきて。道のおくをきわめ。世に時めき給ひしこと。ひとへにこの御時と見え侍り。しかはあれとほどなくときうつりことさ。こと葉の露もうつろひ。心の花も匂すくなくなりゆき侍るとなん。それよりこのかたは。ひたすらあさはかになり侍しを。源の金吾と申人。冷泉（昌泰）黄門につき給て。としひさしく此道をまなびて。いにしへのことをもしり。和歌の道をおこし給へるとなり。かのひじりに。かしこき和尙（正尊）むまれあひ給て。いときなきよりとしたかきまで。こと葉の林のおくを尋ね。心の泉の底をつくして。水よりいでたる氷のごとく。あさきよりふかきにうつり給へり。かのひかりややぶしわかざりけん。又そのかみの心こと葉をも。世にひろくしれることになり侍るとなむ。

かのかしこきころのふたりみたりがこと葉の色と中つころの心の花をとぶらひ侍るに。太山のからす。川邊の鸛のごとくに見え侍るとなん。さもかはりゆき侍るやらん。

先達かたり侍る。まことにいかなるひがめにもはるかにこそかはり侍れ。むかしの人の句をみるに。前句に心をくだきて五音相通五音連聲までこゝろを通じ侍り。中つころよりはひとへに前句の心をば忘れて。たゞわがことの葉にのみ花もみぢをこきまぜ。つたなき所にも月花雪をならべをけり。前句にころのかよはざれば。たゞむなしき人のいつくしくさうぞきてならびゐたるがごとくなり。前句のとよりにこそいかにかりにあさはかなることの葉も。らうたき物にはなり侍るとなり。むかしの人の句は。前句の詞すがたをばかたはらになして心をふかくつけ侍り。前句の取捨どもかしこくみえ侍り。近き代には。たゞこと葉どもをとり分てつけ。ひとへに前句のころをば。わすれはべるとなり。

古人の句。粗しるし侍り。

よしの山二たひ春に成にけり

年のうちよりとしをむかへて

後鳥羽院

此ごろならば。よしのつかつとや申はべらん。

さゝ竹の大宮人のかり衣

一夜はあけぬ花のしたふし

定家卿

その人の句に侍らば。大宮人かり衣なしとや申侍らん。
むすふ文にはうはかきもなし

石代のまつとはかりはをとつれて

順 覺

うはがきつかずと難じ侍るべく哉。

さほひめのかつらき山も春かけて

かすめといまたみねのしらゆき

家 隆

此ごろならば。さほひめ。かづらきよらずとや。

むすふの神にすゑも祈らむ

いく夜としらぬ旅ねの草まくら

信 照

神にいのるといへる。つけ落したると此頃可レ申哉。

船こくうらはくれなゐの桃

からくにとらまたらなる犬ほえて

周 阿

此ごろならば。舟つかぬなるべし。

うはきにきたる蓑をこそまけ

かりそめの枕たになき旅ねして

良 阿

馬おとろきて人さはくなり

はや川のきしにさはれるわたし船

救 濟

此等の句ども前句のすて所かしこきゆへに。最上の秀逸なる
と也。此たぐひ不レ可ニ勝計。しるすにいとまなし。

道のさかゝにいり侍るとは。いかばかりのほたる雪をあつめての事に侍やらむ。

先賢の申侍る。八雲御抄などにも。稽古といへばとて。あながちに。天竺。もろこしの文をつくせにもあらず。たゞ万葉集。三代集。伊勢ものがたりなどのうちなるべし。ふるまゐのえんに。こと葉のけだかきは源氏狭衣なり。これらをすこしうかゞはざらん歌人は。無下の事と古人も申侍り。万葉集をば。此ごろのかたへの人は。心ことばこわく。つや／＼心をえぬ物とて。もて出ぬさまなり。なしつぽにてよみとき。かなになし侍わば。いかなる女房などももてあそぶもの。とこそ申侍れ。さまざまのこと葉ども又えんなる歌。こよなう侍るといへり。定家卿は。寛平已往の歌に心をかけ侍らば。なでう道にいたらざらんとつねにの給ひしと也。万葉集のこと也。大むね才智覺悟はこれ等の上なるべし。又自在無窮不レ可レ説の風雅をつくし。此道のさとりを得べきは。新古今集邊の歌仙の作なるべし。

御製。後京極攝政。慈鎮和尚。俊成。定家。家隆。西行。寂蓮。

此等の心こと葉。色々さま／＼の風骨。ひとへに大悟發明。不レ可レ説のさかゝなり。これ等の心すがた。上下の繼さまなどをねんごろに見分工夫修行にいりて。連歌の取捨つけ侍らんさかゝをさとりしるべしと也。ふるき連歌。大かたの好士の句な

どをのみまなび侍ては。此みちの眞實のさかゝるには。まどひはてはべるべしと先だちかたりはべり。

かたつほとりの人の申侍る。ほん句は大むねたけたかく。大やうにする／＼と一ふしなるを。なを本意と申さるべきことにや。

古人申侍る。まことにほん句は。歌の巻頭などになぞらへたる句にて侍れば。いかにもさやうに。さしのびたるすがたなるべし。しかはあれど。撰集などの巻頭こそさやうに侍れ。百首五十首已下の巻頭は。時により事によるとみえたり。さま／＼の風舩。一かたならず哉。發句もおなじ題にて。日々夜々のことに侍れば。一のすがたをのみつくり侍らんも。おさ／＼をろかなるべし。いにしへのほん句は。さのみ風雅をつくし。沈思せしとは見えず。されども一かたをまもるにはあらず。此頃は巻頭ほん句とて。これをのみ世にもてあつかひ侍れば。はれがましくなりて。人の句にいひあはせじといろ／＼になり行侍るにや。もろこしにも文舩三たびかはるなどいへば。時代にかはれるもことはりなる哉。

巻頭歌

藤原敏行

ふる雪のみのしろ衣打きつゝ春きにけりとおとろかれぬる

小大君
定家
いかにねておくる朝にいふことを昨日をこそと今日を今年と

しらさりき山より高きよはひまで春の霞の立をみんとは
正徹

八幡山三の衣の玉てはこふたつは立ぬくもよ霞よ
發句

なけやけふ都を庭のほとゝきす
二條攝家
いまこゝを郭公とてとをれかし
同

あなたうと春日のみかく玉つしま
周阿
さほひめのかつらき山も春かけて
家隆卿

此等の巻頭ほん句ともいさゝかそゞろきてみえ侍る。かたゝ座により事によるべく哉。

脇の句の事をも。攝家あそばしをける。大かたの下の句などには。いさゝかすがたかはるべし。左やうに一ふしにほん句の心をうけてなどあそばしをけり。

雪の山草木か花の家ぬかなと侍るに。

冬さくむめにましろくれ竹
救済

此句のすがたを尤などあそばし侍り。されども所により。又そぞろきたる風舩をもていでたるほん句などには。さのみおだ

しくのどやかなるのみにては。興なき事も侍るべく哉。たゞ席により所によるべきか。ひとへに一所をまもらば。かへりてをろかなる事も侍るべし。かねて定がたき事のみ也。道をはしたに用心あるべき。肝要なるべしとなり。

連歌を申好士の中に歌をきらひ侍るあり。歌をまじへ侍れば。連歌にそんし侍るなどいへる如何。

先達かたり侍し。歌をにくみんずる作者の修行こそ心にくも侍らね。いかにも秀歌をむねにきて。その面かげ餘情を匂ごとにふくむべきことにや。あまさへ。よろしき詩どもをもつねに修行し吟じ合侍れと也。古人の句は歌の面影そひぬるゆへに。しなただけひえらうたくいはぬ心みえ侍り。もとより問答躰の歌をくさりて。百韻五十韻となし侍るものなれば。露ばかりもへだてなきみちなるべし。ちか頃ひとへに歌の心をうかがひしらぬ好士の。二の道におもひ分侍るより。連歌のまなこはうせて。たゞふつゝかなにならべをきたるものになりゆきはべるとなり。

かたへの人の中に。秀句をこのみ嫌ふ。さまざまに侍り。いがあるべく哉。

秀句をば。古人も歌の命といへり。いかにも嫌ふべきにあらず。秀句の名歌その数をしらず。此道不巧の好士は。秀句など

をも作えぬ物也。又あまりにかひりき過て。毎々秀句をのみ申侍るは。ふかいりしてひとへにこのむと見え侍るは。不三庶幾一といへり。

後鳥羽院

手に結ふいはるの水のあかてのみ春にをくるゝしかの山越

順徳院

ともしする高圓山のしかすかにをのれ鳴てや夏はしるらん

定家卿

こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくやも汐のみも焦れつゝ

同

いつくにか今夜は宿をかり衣日も夕くれの峯の嵐に

家隆

風そよくならの小川の夕暮はみそきそ夏のしるし成ける

同

天秋のひと夜の契たにかたのにしかの音をや鳴らん

此等の名歌しるすにたらず。おなじくほん句にも。

救済

下紅葉ちりにましはる宮井哉

周阿

およそ秀句なくては歌連歌作がたくや。されば命と申侍り。しか

かはあれど。秀句にかならず凡俗なることのおほしと也。分別

用心大切なるさかむとなり。

かたはらの人の申あひ侍るは、歌道はすなほにうつくしく。やはらかなる躰を無上のやうに侍り。さてはさやうの所を採用とまもり侍るべく哉。

大むねすなほにおだしく侍らん。よろしくしかるべしと也。ことに不巧のともがらのため。ことそれはぬさまなるべし。されどもこゝをのみ事とまもり侍らば。わが力のいらぬやうになりゆき侍るべく哉。あまりに正直の所のみ。まもりはて侍らん好士は。最尊の先達にはなりがたく哉。諸道に一たびはやぶれ侍るさかむあるべく哉。

諸宗の大祖龍樹菩薩も。はじめは外道の法をむねとし給へるなどいへり。

法文にも。遺情とて一たびはやり。表徳とて一たびはとり侍るとや。

天台にも別教といへり。

花嚴にも頓教といへるなり。

佛の十弟子の中にも。羅護羅尊者をこそ忍辱第一と申侍れ。其は愚鈍の御弟子にて。四大聲聞のさとりにもくれ侍ると也。

定家卿の。稽古の用心をさまざまに注給へるに。先二とせ三と

せは。うつくしくやはらかに。女房の歌をまなびて。其後一ふしの躰こまやかなる躰などをまなぶべし。又かの後たけたかき躰とて。やせひえたる躰。有心躰とてなきけふかくこもりたる躰を學び。これをよみつのりて。強力の躰鬼挫躰をまなべと也。彼卿は鬼とりひしぐ躰を歌の中道と申給へるとなん。されどもこれを無上といはゞ。よみなになう學べし。いたらぬ人のまなばゞあしかるべしとて秘し給へると也。又やさしく。無文ののびらかなる歌を秀逸の躰ととりをける好士おほし。さらにあたらしぬ事とたびゝねんごろに注給へり。此道は花と實とをならべて學べしと見えたり。古今集にも。その實はみな落てその花ひとりさかへたりといふ。又人の心花になりゆくともいへり。又大むねえんをもとゝす。歌をしらざるなるべしともいへり。いづれもまことなきかたをぞしり侍ること葉どもなり。扱は様々の形の修行にうつり行べき道なるべし。古人歌のすがたどもを物にさまざまたとへ侍り。これ等にてさるとるべく哉。

水精の物に留り。をもりたるやうにといへり。清くさむかれと也。

五尺のあやめに水をかけたるごとくなどいへり。さしのびぬれノとしたるささま也。

大内裏の大極殿の高座にてひとりさしてもうでぬやうにいへり。たくましく強力にといへるこゝろなり。

大なる時は虚空もせばく。こまやかなる時は芥子の内にも所あるやうになどいへり。淨藏淨眼の神變のごとくなどをしへ侍り。

又おもひかねの歌は。觀算供奉が日も詠吟すればさむしとこそ申。

詩にも買嶋はやせ。孟浩はさむしと云。

定家卿。父の卿に。わが歌のさまをねんごろに尋ね給ひしこと葉に。わが歌三十ちのころまでは。やはらかに口のしなもありてよろしき歌ども申侍し程に。世のほまれもありつるやうに侍し。四十ちの頃より。ほねだかにえんなる方をくれておぼえ侍り。さるにやかたへの人のみゝにもいり侍らず。しりぬわが歌のよこしまになりぬることを。いかさまに修行をもかへ侍らんとて涙にしづみとひ給しに。俊成卿こたへ給へるとなん。いかめしくも尋ずねたまへるものかな。汝の歌を。愚老もより／＼思ひ侍り。わが歌には。すがたはるかにかはりぬ。それを歎き給べからず。愚老はかなはぬ道にて。にくをのみよめり。汝天性と骨をえたり。汝の歌うらやましきこと毎々なり。されども八十ちのいまより。まなばいわるかるべきゆへに。

思ふなりとなん。物には骨をえたる第一のこと也。いかに此まゝによみつのり給はゞ。世一の人たるべしとて涙をながし給へるとなり。

かたついなかの好士などは。他人の歌連歌。いさゝかも褒貶するともがらをば。おこがましきに申あへり。さてはひとへの庭にて。人の句のよしあし。わするべきことにや。

先達に尋侍し。さやうの人は道にふけらぬともがらなるべし。いづれの道も。をのが心にそまぬわざをば。その座のみにて忘るゝならひなり。佛法にも。論談法文古則の難陳。切礎琢磨の地のいたる方便の最用なり。

淨佛國土教化衆生。大乘の大鉢也。

法を誘して地獄に落るは。恒沙の佛を供養するにもすぐれたりと。法をしれるゆへに生死の期ありと也。地によりてたふれ。地によりて起るがごとし。

良藥は。口にゝがしといへども病をいやす。

木は得レ繩材也。君從レ諫賢也。

鈍鋤もとげば利。瓦もみがけば玉也。

魏文王仁差が賢をも。翟黃がいさめにこそさとり給ひしか。

大臣は惜レ錄不レ諫。小臣は畏レ罪不レ言。

法は無生縁を待たと説けり。

もとより一念三祇。三祇一念。觀ニ彼久遠ニ猶如ニ今日一なれば。久き稽古も。只今の教奇も邪道の心をひるがへし侍らば。おなじかるべし。

若能轉レ物即同ニ如來一と説けり。

初發心時便成ニ正覺一とも云。

かたはらの好士は。他人の歌連歌。大かたに見きゝて。さまさまのこと葉をそへ侍る。かばかりのこともあたり侍るべく哉。まことに。此こと先達申侍し。いづれの道もわが程よりうへつかたをば。さとりがたき事と也。その作者をほねをくだき。沈思せし句などをも。たゞあさノ一と見給はゞ。作者の心ざしには。はるかにちがひたる事のみ侍るべし。すべて歌道の上手は。諸人のことに侍れども。分別修行あきらかに。道のあはれふかき人は。をぼろげのことなり。佛法にも歌道にもまなこをえたるは。べちのことゝ先人をしへ侍り。

下に居て上を謗することを。文にも君子の三の惡するうちにいへり。

つねにかたへの好士申侍るは。その明聖の席に。たびたびゐてきゝ侍るなどとのゝしるまゝ侍り。いかゞ。

たとひ百とせ千たびおなじ筵にありてもしるべき道にはあら

ず。その人の心を探。その句のふしんを探あきらめ。たがひにむねのうちをさらし侍らずば。他人の室の中にあさ夕ゐたるのみなるべし。さらにわが物にあらず。此道はうちさらし。故實を談ずるほかに。あながちに秘事もなし。されば定家卿の會席にて歌道のことを俊成卿に尋ね給ひしを。かへりて後ふかくの人かなとていさめ給ひしとなり。又無數奇一愚鈍のともがらは。千たび百たびならひきゝても。

牛の前にしらぶる琴とやらんなるべく哉。

稽古としを經ても。

文字法師。暗證禪師ありといへり。

又句をするノ一として。當座とゞこほらぬやうに稽古すべき事と云。いかゞ。

大やう座により。時にしたがふ事に侍れば。さもありぬべく哉。されど一ひとへに。かるくしくは。いかでか侍らん。道に心ざしふかく。しみこほりたる人は。玉のなかに光を探ね。花のほかに匂ひをもとむるまことののみなるべし。大聖文殊の化現などはしらず。やすノ一とは。いかでかいでき侍らん。心によしあしの分別もなく。えんにはづかしき道ともしらざらんともがらは。やすくもや侍らん。

貫之は一首を廿日に詠ぜしと也。

宮内卿は血をはきて毎々あんぜし。

公任卿。ほの／＼詠歌をば。みとせまであんじてもとづき侍るなどいへり。

長能はわが歌を公任卿に難ぜられ侍て。其座より病となりてみまかりぬ。

もろこしの潘岳とやらんは。詩を沈思して三十才の内に白翁となる。

佛法に最上醍醐味といへる。いかにもねれる心をいふなるべし。

大かたの一座はひるつかたに過。をそきはひつじの刻などに退散す。これよりいさゝかも時うつり侍れば。道ならぬやうにつぶめく好士侍り。如何。

古賢のかたり侍し。二條大閣さまなどのやむごとなき御一座は。毎々あしたより深更におよびしとなり。そればかりこそなくとも。朝天より日晡にいたらざらん席は。心にくゝも侍らずや。さやうにあは／＼しく満座の心をもはぢず申つけ侍る好士は。沈思してもいかばかりの事か侍らん。とさまかうざまめんし侍るもたゞおなじこと也。沈思の人の句。中々心をえずなど申と也。詞は心のつがひと侍れば。此等の人のむねの内。さはしくつたなく哉。秀逸と侍ればとてあながちに別のこと

にあらず。心をもほそくえんにのどめて。世のあはれをもふかく思ひいれたる人の。むねのうちよりいでたる句なるべし。されば一字二字などのかはりなり。しなたけやせさむくらうらしく。いはぬ心のほひのあるは。閑人のうちよりいづるものなり。

後京極攝政家御詠歌に。

人すまぬふはの關屋の板ひさしあれにし後はたゞ秋の風
此たゞの二字をば。むかしより玄妙不可説のことに侍ると
かや。彼かしこき正教和尙もまことにをきがたきこと也。かの御む
ねに此二字のありける事よ。あなおそろしなど仰給ひし。さて
は見ると見ざると。まよへるとさとれるとのさかぬのみ也。巧
能の人の句は。心とらけてむねの底よりいで侍るゆへに。時も
うつり日もくれぬるに哉。不巧の好士の句は。舌の上よりいで
ぬるゆへに片時なるらん。こうは入てみゝはなきゆへに。たゞ
達者にのみなる人おほしとなり。

大かたの好士は。句のふとみつまづきたるをもいろどりたく
みなるを事として。すがた詞づかひの幽玄の句をば。かたはら
になし侍るとなり。

此道は。ひとへに餘情幽玄の心すがたをむねとしていひのこ
し。ことはりなき所に幽玄感情は侍るべしと也。歌にも不明舛

とて面影ばかりを詠する。いみじき至極の事となり。ふつとそ
の人一人のわざなるべしなど定家卿もしるし給へり。

兼好法師が云。月花をばめにてのみみる物かは。雨の夜に思ひ
あかし。散しほれたる木陰にきて。すぎにしかたを思ふこそと
かき侍る。えんふかく哉。

尋陽江に物のねやみ。月入てのち。此時こそなき。こそある
にすぐれたると云。

春風桃李花開日 秋雨梧桐葉落時

歌連歌應の句なども此風舛あらまほしく哉。風の歌。比の歌の
かたちなり。應の歌は。よの二三首よりも沈思なりと先人もい
へり。述懷應の句などことに。むねの底よりいづべきこと歟。

不明舛歌。

ほの／＼と有明月の月影に紅葉吹おろす山嵐の風
信明朝臣 元馬作者
今加之

定家卿

秋の日のうすき衣に風立てゆく人またぬすゑの白雲

正 徹

秋の日はいとよりよはきさゝかにの雲のはたてに萩の上風

此等秀逸。まことに法身のすがた。無レ師自悟の歌なるべく哉。
詞にはことはりときがたく哉。

かたりなはその淋しさやなからましはせをに過る夜の村雨
巫山仙女のかたち。五湖の煙水の面影は。ことばにはあらは
るべからず。

若以_レ色見_レ我。以_二音聲_一求_レ我。是人行_二邪道_一。不_レ能_レ見_二如
來_一。

我覺_レ本_レ不生_二出過語_一。言道諸過。得_二解脫遠離於因緣_一。知_二空
等虛空_一。

山里などの會席には。さしあひ嫌物をのみきびしくて。句のよ
しあしは。さながらきゝわけ分別のさたなしとなん。

大むねさしあひ嫌物は。そのむしろによるべく哉。假令佛法の
戒律などのごとくなるべしと也。戒律の上はいまだ直路にあ
らずや。經にはゆるすことのみおぼく侍り。心地を正路とする
ゆへ也。無階級の上のかいきう也。さればさか井にいたり。已
達の人。は。格式のほかのことおほかるべし。

大道すたれて仁義あり。大智出て大偽あり。戒緩乗急人あ
り。乗緩戒急人あり。

利根外道邪相を正相に入。鈍根内道正相を邪法となすと云。
眞無生觀。究竟持戒なり。

戒如_二虛空_一。持者爲_二顛倒_一。

いにしへの權者にも。心地をむねとして戒律にかゝはらざる

人。その數をしらず。

南都三千衆徒法燈の玄賓僧都は船渡となり。山田守などに
ては侍り。

三井寺教侍和尚は龜をのみ食して。百六十年經て後。智證
大師に寺を附屬して。穴にいりてうせ給へると也。

増賀上人は牛に乗て。慈惠大師の供上の伴僧し給へるなど
いへり。

淨藏貴所は子をひざの上にをきながら。かたぶける塔を祈
なほし侍ると也。

しかはあれど。戒は佛法の惠命諸道定の掟。諸宗の昇進の專一
也。をろそかに守べからず。

五戒と云五常をかくしたる名也。仁義禮智信。

これしばらくもかけては。万道やぶれ侍べし。諸道に種熟已達
三のくらゐあるべし。熱人已達のともがらを種なる人まなぶ
べきにあらず。孔子なを七十にしても。のりをこえずとの給へ
りとや。しからばさしあひ嫌物をも。なをざりに思ふべからず
となり。

歌連歌にも。外穢内淨。外淨内穢の句あるべしと也。すがたを
かざらで心にえんふかきうた。

西 行

慈 鎮

かしこまるしてに涙のかゝる哉又いつかはと思ふわかれに
になひもつさうきのいれこ町あした世渡る道をみるそ悲しき

仲 實

朝露をはかなき物と見つるまにほとけの兄にみは成にけり
此等。外穢内淨の歌なるべし。たとへば金をつゞりにつゞみた
るごとし。上はつたなくてうちに寶あり。又すがたのはづかし
くて心のみだりたるうたおほし。

おしからぬ太山おろしのさむしろに何と命のいくよ獨りね
このたぐひ。外淨内穢の歌かずをしらず。にしきにてつたなき
物をつゞみたるなるべし。

いづくの座に閑侍るも。月花雪をことゝして。をぼろげにも末
座不肖のともがら。申ことあるまじき様にみえ侍るらん。
古人かたり侍し。此頃の好士のもていでたる事也。故二條大閤
さま。月卿雲客の千句にも末座若輩なりし周阿法師。花を三十
本申たりしと也。これ作者の過分にはあらず。その頃は句をも
とゝし侍りけるにや。

歌の題をくばるに。上座尊宿とて月花雪をぼいらすることな
し。

此外祝言などの句をも。上つかたには無二庶幾一を。追従をむね

とする好士どもの申なせるゆへに。道のまことはすたれうせ侍りとなん。佛法にも句をたづぬる人あり。意をもとむるあり。景物を事とする好士は。句にいたる當分なるべし。

未^レ得三人句參。至^レ得二人意參。句は教意が理也。教権理實といへり。

心外有法。輪廻生死。一心覺知。卽棄生死といへり。

一髮見一心。永超越生死。

有爲報佛。夢中權果。

しかはあれど定惠意句そなへざらん歌仙は。まことの先達たるべからざる哉。

かたはらの座などには。先達の句どもをも。をののが心にえぬ風雅をば。いりほりぞいみたるなどて。道ならぬやうに申侍り。歌連歌は。いかなるあやししのしづ。心なきゑびすのみにも。面白とてまことの道なれなど申あへり。

ちからなき事なるべし。さやうのつたなきともがらは。わがこのみんずるかたをしかとむねのうちに定をきはべり。巧能の好士は。天に陪さゝずしてのぼるばかりの心をめぐらし侍るべし。をのが心にかはるところをうらやみ。尋たく侍らばかしこかるべし。こと葉こそおなじく侍れ。句のすがた心はさまざまかはるを十舛などといへり。おなじ舛をのみつじるともが

らをば。月をさすにゆびをのみ見るなどといひ。又人の心こと葉をとるをば。先人のつばきをなむるなどいへり。

了俊云。正直のすがたのみにては。いたりがたし。しかはあれど心を二重三重にせよにはあらず。佛法にも諸宗さまゝわかれたり。

儒。釋。道。

しかはあれど。みなもとは一なるべし。

清岩和尚云。わが歌はわろかるべし。毎々人の歌の風舛に。よみあはせじと案じ侍るゆへにと侍し。はづかしき詞にや。

いづれにも心ざしあさく。稽古工夫をろそかなる。不巧無智の人の。けだから幽遠のことはりはなれたるさかぬ。をぼろげにもしるべきにあらずとなん。たとひいかばかりの聖教抄物に。螢雪をつみても。修行に冷煖自知の所なくば。勞刼かひなかるべしとなり。

定家卿の歌のすがたは。おぼろ月夜に天女の面影かりにあらはれ。きえうせたらんにほひなるべしなど申侍り。

人丸。赤人の詠歌をも。たゞその人の物とのみ見侍るばかりにや。道にいたれる人の眼には。玄妙奇特なるべし。

杜子美が詩をも。しる人なしといへると也。

佛の御法をも。五千上慢は。むしろをまきてたち侍しと也。

應身報身までは。分別もいたるべく哉。法身にいたりては。絶々のところなるべし。

西上人も。歌道はひとへに禪定修行の道とのみ申給ひしとなん。まことのさかぬにいたり侍らば。頓悟直路の修行なりといへり。

經信卿云。和歌は隱遁のみなと菩提をすゝむる直路。眞如實相の理。三十一字におさまれるといへるを。定家卿此旨をねんごろに稱揚し給へり。俊成卿老後に思ひ給へるとなん。人にはかならず一大事あり。此道にのみふけり。たゞいまの當來を立侍る妄想なるべしとて。すこし歌道になづみ給へるこゝろいでき給へるに。住吉大明神あらたに現じ給ひてうちゑみて。汝此道ををろそかにおもふことなかれ。此道により頓に菩提を證給べし。歌道即身直路の修行なりとあらたにのべ給ひしと也。されば。

篇。序。曲。流の五は。五大所成。五佛。五智圓明をあらはし。

六義は。六道。六波羅蜜。六大無量法身の外也。

古今集灌頂などといへる。密宗に一大事とて傳侍るにかはることなし。もとより歌道は吾國の陀羅尼也。綺語を論ずる時は經論をよみ。禪定を修するもみな不妄想なりといへり。

中つころよりこのかたの好士は。一句の上にことはりあらはれて。うるはしきを秀逸とのみとりをき侍り。前句のよりさまをば。ひとへにわすれ侍る哉。

歌仙にたづね侍し歌は。題をめぐらし侍れば。いかばかりの地歌も奇特になり。連歌は前句のあつかひさまにて。定句なども玄妙のことになり。侍るとなり。此覺悟玉しむなりと。たとへば。

西有彌陀佛と云句に南無觀世音

とつける。奇特の句になれるがごとし。歌も題をめぐらしてよむ。一のすがた也。これ巧能のわざなりといへり。

南殿の落花を見て

公忠弁

殿もりのものみやつこ心あらは此春はかりあき清めすな

大井川邊にて紅葉浮水といへることを

藤原資宗

いかたしよまで言とはん水上はいかはかり吹山のあらしそ

又和泉式部か小式部にをくれ侍しに三歳なれるむす

めをのこしをきてよをはやくせしをみてなく

和泉式部

残しをきていつれ哀と思ふらむ子は勝りけり子はまさる覺

げにもわが母にをくれ侍しよりは。小式部がわかれは切にかなしく侍れば。われよりは此みどり子をこそ思ひをき侍らめとなり。かやうにあはれにえんふかきことはりを。心にとゞめ侍る好士。ありがたく哉。

歌連歌に。凡俗の句と申侍る事。いかなるすがたにて侍るやらん。

すがたのぼんぞく。心の俗侍るべしと也。すがたの凡俗はきこえやすく。心の俗はすこしわきがたくや。

まつうへをかん故郷の庭と云句に

夢さそふ風を月みんたよりにて

これはすがたよろしきやうに侍るとも心ことの外にや侍らん。たれの人か小松うへをきて。風に夢さまして月みんとくみ侍らん。

春はたゞいつれの草もわかな哉

七草などは二葉三葉。雪まよりもとめたるさまこそえんに侍るに。これはいつれをもわかずむしりとりたる無下に侍り。すがたの俗の句なる哉。

歌には同類とて人の心こと葉をおかす。おそろしき事に申とかや。連歌にはいかゞ侍るべきにや。

先達かたり侍り。中にも此ことむねとさたあるべきにや。かた

つ田舎の人などは。きのふの句をば。一字二字かへて今日は申侍るとなん。たがひにわが物なし。されば心ざしふかき人の。しみこほりていひいだしたる句をも。あすはぬしかはりていでぬるほどに。句は一にてさま／＼の作者侍り。不敏のことなる哉。古人は大にいましめ侍るとなん。

有家卿。すゑの松やますと申されけるに。年をへだて、後雅經卿。あし引のやますと申されし。其頃歌仙。無下の事とて難申侍ると也。

香にめて、花にもゆるすあらし哉

ちるをみて花にわするゝあらし哉

花をいて、花よりもこきにほひ哉

梅の花藍よりもこき句ひかな

作者いづれさきにか侍けん。不敏のことなるべし。いかばかりの玄妙の句にても。已前人の申侍らん心こと葉は。たゞ人の物をいひつぎたるなるべし。

都とてつもるはまれの深雪哉

山とをき都はまれのみ雪哉

此句こそおなじころ申合侍しかどもたがひに人の心をおかすべき作者に侍らねば。中々めづらかに覺侍り。かばかりのこと。いかにも分別面白く哉。

歌には。いりほがとて。あまりにさかゝるに入過たるをば嫌侍り連歌にはいかゞ。

此句つねに見え侍り。心のいりほが。すがたのいりほが侍るべしと也。

木をきるや霜のつるきのさ山かせ

これ等たくましく。手だりの好士の句なり。されどもはじめの五文字。いまずこしり過たるなるべし。さえにけりなどにては。いさゝかのびて侍るべきか。つるぎにて木をきるも宜からず哉。

夏草や春の面影あきの花

此句はすがたの入ほが也。いさゝかいりもみて見も侍るとなり。されば文にも。過たるは及ざるにひとしといへり。

歌には未來記とて嫌ひ侍る躰あり。連歌にはくるしからざることに哉。

此句座にきこえ侍るとなん。いかにもおそるべきことなりといへり。

ふりて世に天かしたかへ花の風

ほとゝきすなすは秋の月夜哉

これ等のたぐひ。未來記の最一なるべし。いかばかりもつゝしみ侍るべしとなり。

歌には無心所着といへる躰。萬葉集よりきたし侍り。連歌には如何。

此すがたおほくきこえ侍り。およそ歌に分たる種々の躰。連歌の道にひとつとしても。かはるべきことなしと也。

月やとる水のおもたる鳥屋もなし

花やさく雨なき山にかけまくも

かやうの句ども無心所着の随一なるべしといへり。

歌には。篇。序。題。曲。流。といふことをかたちにして。上下の句のくさりをつくり侍るとなり。連歌にはあるべからず哉。

先賢かたり侍し。此事連歌の最用なるべし。此分別あきらかになくては。いかばかり玄妙の句を作侍らん好士も。代々集のおもむき。又他人の歌連歌のまことの所わきまへがたく哉。されば古今集などにも。むねと此ことをさしたし侍り。定家卿明月記などにも事をつくし給へるとなん。わが句を面白くつくるよりは。他人の句をあきらめはべるは。はるかにいたりがたしと也。作をよろしく作る好士は世におほく。修行の人はまれなり。さればをのれ人にしられざるをうれへざれ。をのれ人をしらざるをうれへよと文にもいへり。

篇序題曲流は。五所の作ざま也。

篇は人をたづぬるにいまたゝずみたるさま也。

序は申つぎなど尋侍る程の事也。

題は此事いひに來たるなどのさま也。

曲はその意趣をあらはするなるべし。

流はいとまをこひいづるさまなど也。

此五のさまを。連歌にも上下の兩句をひとつに吟合て。よろしく心こと葉の通じ。感情あらはるゝやうに。名歌の繼ぎまをねんごろに見分。連歌の上句下句をもくさるべし。此用心なき人の句は。毎々冠を足にをき。杳をいたゞく事おほく侍ると也。此覺悟なき好士に。結構の句にだに侍れば。くだけつまづき。ふとり侍るをもむねとし侍り。大やうにいひながし。いひのこしたる所をば。あざ／＼と思ひ侍る歟。上下の句のうちにかならず一句をば。いひのこしいひながして。前句にいひはてさせ侍るべしと也。前句をわが句になして句をつくる大切なり。假令下句に曲の心あらば。上句を篇序題になして。句のことはりをば前句のいひあらはし侍れば。いひかけいひながし侍べし。

つみもむくひもさもあらはあれ

月のこるかりはの雪の朝ほらけ

かへしたる田を又かへすなり

あし引の山にふすみの夜いてゝ

救濟

善阿

氷とけても雪は手にあり

散かゝる野澤の花の下わらひ

此三句は。前の句に曲の心ありてことはりをいひあらはし侍るゆへに。上の句のつけざまをば。篇序題になして。いひかけいひのこして。前句にゆづりはべり。

面影のとをくなるこそかなしけれ

花みし山のゆふくれの雲

まへうしろ戸の二つある柴のいほ

いてゝ入まで月をこそみれ

此二句は。前句の上の句に。曲の心ありてことはり侍れば。下の句をば。篇序題になして。前句にいひはせていひのこし侍り。連歌はかならず上の句にいひのこして。下句にいひはてさせ。下句にいひのこして。上句にゆづりていひはせ侍りて。兩句の上にてことはりあらはれ。感情きこゆるやうに作ると也。これを篇序題曲流といへり。各一句づゝにていひはてたるは。こゝろづかず。ならべをきたるばかりなり。此ことはりにまどひ。あきらかならずば。万道の初破急。諸經諸論の序。正流通因縁譬喩の所にまどひ侍べしと也。經にも序分正宗分流通とて。はじめ序にはさま／＼の因縁譬喩をあげ。後には正宗とて其經のまなこをとき。すゑに又流通分とて其繼の徳をさま／＼い

ひながしはべるとなり。いかなる人もしれることに侍れども。
歌道の篇序題曲流にあひかはらず。詩にも起承轉合などいへ
るもおなじ。されば古人の歌どもには。おほく序ををけり。

あし引の山。久かた月。玉ぼこのみち。

しなてるやかた。あし引の山鳥。山鳥のすゑお。あつさうい
そべの小松。

郭公鳴や五月のあやめ草あやめもしらぬ戀もする哉

歌嶋の大和にはあらぬから衣ころもへすしてあふよしも哉

みちのくの浅香の沼の花かつみかつみし人に戀渡る哉

吉野川岩なみたかく行水のはやくそ人を思ひそめてし

又中にながしく序ををけることも侍り。これをば半臂の

句といふ。かやうにやすめたることばどもをき侍らねば。歌

にたけなく。大やうにえむならず。くだけちぢみ侍ると也。

誰御秋夕つけとりそから衣たつたの山におりはへて鳴

垂乳根はかゝれとてしもうは玉の我黒髪をなてすや有けん

うかひ舟あはれとそ思ふ武士の八十うち川のゆふやみの空

いこま山嵐も秋の色にふく手そめの糸のよるそかなしき

又これに似て隔句といへること侍り。それは五音相通せざる

をいへり。大なる歌の病也。

山とりの月におのへの

秋風の松の葉しほる袖ふきて

などいへるはあしと也。此等の分別最用と也。又連歌にも前の

歌どものごとく前句にゆづりて序にてはてたる一昧侍り。

古人の句どもには見え侍り。

神のいかきにひく馬もあり

御そきせしみの日は過ぬ御しめなわ

うつゝか夢かあけてこそ見め

旅にもつ荷さきの箱根宇津の山

周 阿

心よりたゝうき事にしほしみて

いり江のほたてからき世中

救 濟

如レ此一句にことはりいひはてずして。序の句にてはてたる句

どもみえ侍り。歌には曲を二所にいへるをきらひ侍るゆへに。

いたづらなるやすめことばをおほくをき侍ると也。詩文など

もおなじ。これ等のたぐひ。しるすにいとまなし。

歌には六義とて毛詩よりいでて六のすがたを分たり。連歌に

はあるべからず哉。

此事先達に尋ね侍り。大むね六くさの心。句ごとにわたり侍り

て。覺悟あるべしと也。

風賦比興雅頌。六義也。

風の句。そへ歌の心。

名はたかく聲はうへなし郭公

救　　濟

二條攝家さまを郭公にそへて。稱揚したてまつるなるべし。物にそへて句のこゝろをあらはすを風の句といへり。

賦。かぞへ歌の心。

いつる日は四方のかすみに成にけり

救　　濟

これは物ごとに心をくぼり通したる句。こまやかに心をとる賦句なるべしと也。

比。なぞらへ歌の心。

下紅葉ちりにましはる宮居哉

救　　濟

散の字をちりにつくりなしてなぞらへたるなり。比の句のころこれか。

興。たとへ歌の心。

五月雨は峯の松風谷の水

救　　濟

是はその物にゆへつきたるを。見なし聞なしてたとへたる興の句なるべく哉。

雅。たゞことうたの心。

夏草も花の秋には成にけり

寂　　意

たゞちにこと葉心をめぐらさで。いひたる句たゞしき駄。雅の句なる駄。

頌。いはぬ歌の心。

花椿みかける玉の砌かな

成　　阿

ほめいはむたる心の句なるべし。頌の句なり。此等の句どもしるし侍とも。一句としてもあたるべからず。ひとへに初一念を申計也。古今集序などを見あきらめてしり給べきのみ也。

歌には十駄を分侍て。さまゝのすがたみえ侍り。連歌にはさたなきことにや。

連歌歌の道。いさゝかの事までもかはるべきに侍らず。先人の少々申侍るまゝ。句を少々注しはべり。

幽玄駄。

袖をかさはるのみかさにて

春日野のうへなる山の朝かすみ

順　　覺

ともにすまんといひしおく山

なき跡にひとりそ結ふ柴の庵

救　　濟

故郷となるまで人の猶すみて

萩ふく風に衣うつこゑ

頓　　阿

風のをとまでさむき夕暮

秋はたゝ人をまつにもうき物を

救　　濟

わかれおもへはなみたなりけり

松風のたかにしへを残すらん

救　　濟

事可然駄。

人にとはれん道たにもなし

花の後木のもとふかき春の草

まよひし道も里にこそなれ

しらぬ野の草かるしつに行つれて

かこはねと霧やまかきと成ぬらん

庵の音こもるゆふくれの山

くゆる心につみやきゆらん

身をすつる柴の庵のゆふけふり

春雨になればうらはに鹽やかて

船にたまれる水をこそくめ

高古躰。

雪をあつめて山とこそ見れ

ふしのねは人のかたるもゆかしくて

かみしもをさたむる君かまつりこと

たえずなかるゝ賀茂川の水

いつはりおほき筆の跡かな

繪にかけは花も紅葉もときはかて

みしか夜なれは祈あかしつ

わかたのむ社の御名の鴨のあし

なといたつらにつとめさるらん

良 阿

同

同

信 照

同

順 覺

善 阿

良 阿

家 隆 卿

寺ちかきあすかの里に住ながら

面白躰。

心たけくもよをのかれぬる

みとり子のしたふをたにもふり捨て

きぬたのをとそたかくきこゆる

秋さむき嶺の庵に人すみて

木すゑにのほる秋のしら露

山のはの松のもとより月出て

いまはとしこそ立かへりけれ

老ぬれはいとけなかりし心にて

人のかすこそあまたみえぬれ

楠木ひくまさきのつなに手をかけて

一節躰。

なみたの色は袖のくれなゐ

なにゆへにかゝるうき名の龍田川

かた枝はうすきみねのもみち葉

人心おもひ思はぬいろみえて

平野こそ北のにつく社なれ

なにはつよりは遠きつくしち

まつ日數をはへたてきにけり

十 佛

良 阿

頼 阿

信 照

救 濟

同

信 照

同

十 佛

あふまでといひし命のいきの松

救 濟

心よりたゞうきことにしほしみて

いり江のほたてからきよの中

同

有心躰。

横たつ山のさむきゆふくれ

ゆき／＼て此川上は里もなし

救 濟

これよりはまさる心に成やせん

わか後のよの秋のゆふくれ

良 阿

ぬしこそしらぬ舟のさほ川

ならちゆく木津のわたりに日はくれて

救 濟

人にしらるゝ谷のしたいほ

風かはる爪木の山のおさゆふに

同

おやにかはるやすかたなるらん

ともし火のあかきいろなる鬼をみて

同

長高躰。

かそふばかりに露むすふなり

春雨にもゆるわらひの手を折て

順 覺

あまりに遠き山はしられす

別うきわしのたかねや二千とせ

周 阿

道しれる弓と文とはきこえけり

鷹かねかへる三ヶ月の前

良 阿

目をなかくなす柴の戸の内

此山のにしは晴たるすまゐして

信 照

川のとみに花そのこれる

みよしのゝ夏みるまでの遅さくら

十 佛

麗 躰。

月こそむろのこほりなりけれ

みくま野の山の木からし吹さえて

良 阿

ふる雨もさのみはもらぬ松のかけ

苔やいほりの軒をとつらん

信 照

いつみすゝしく松風そふく

住吉のうらの南に月ふけて

救 濟

きえやらぬいのちに花を先立て

かれ野の露にのこるむしの音

良 阿

はるかにとをし入あひのかね

捨し世の花をはたれかおしむらん

同

濃 躰。

水やのほりて露となるらん

玉たれのこかめにさせる花の枝

信 照

その名をも主にとひてそしられける

しつかいほりのそのゝ太山木

去年より人の數そすくなき

このかみにとしはひとつのおとゝにて

舟のうちにて老にける哉

うき草のかけひの水に流きて

いつるよりいる山中の月

さをしかのいきか見えし霧晴て

強力の句。

ふしおかむより見ゆるみつかけ

これそ此神代久しき宮はしら

いのちおもへは末そみしかき

老の後ふり分かみの子をもちて

かねてとふへき目をしらぬ哉

時鳥鳴へき月はさたまらて

弓矢そ國のおさめとはなる

かゝしたつ秋の山田をかり上て

鳴たつもおのかねくらをいそく也

霜をきそへてくれぬこの日は

住吉北野こそ鑒照し給けれ。唯心にうかぶまゝ筆にまかせて

侍計也。誠にやみのうつゝよりもおぼつかなき事共也。

良 阿

救 濟

善 阿

救 濟

救 濟

十 佛

信 照

周 阿

救 濟

此道およそ應長の頃より。よにさかりにもていでたるとみえ

たり。其頃の先達と覺侍は。善阿法師といへるもの也。かれが

門弟。救濟。順覺。信照。良阿。十佛など也。其後貞治應安の頃より

は。偏に救濟法師此道の聖也。彼門弟。周阿。索眼などてやむ

ごとなきもの侍りし。彼等が身まかりて後。應永の比よりは梵

燈庵主此道の先達也。その年のすゑつかたは。眞下滿廣などぞ

心もほそく詞もえんに。其世にはならぶかたなかりしと也。其

後永享の頃より。世にしられぬるは。宗砌法師。智道法師などな

るべし。彼等は清岩和尚の下に。ひさしく候侍て歌の道をもし

れるにや。其頃より連歌の道漸たえたるを。おこすのみえたり。

彼等身まかりて後。此みちくらくなり侍るとなん。

いまは清き岩より。うちいでし光もきえ侍れば。又くらき道に

なり侍ると也。此後いかなるかしこき人の出侍るとも。いづ

れのひかりをつぎ。たれの人にとひてか。すゑ遠き世をも照

し侍らん。黄なる河水のすめらんを見んも。かしこき聖のい

でんにあはんも千とせに一たびなど侍れば。たれの人か殘

りて侍侍らん。たゞ過にしかたの世ひとつぞ戀しくもしのば

しくも侍る。此さまの跡なしごと。朝の露ゆふべの雲

のきえせぬほどのたはむれ也。はかなきすさみなる哉。佛の

御法をだに心にとゞめ侍れば。凡に落ぬるなど申とかや。此

道をさともしらんよりも。たゞいまの當來。一大事因縁を尋ねあきらめ。永く生死をこそ捨たく侍れ。いたづらごとに光の陰をけちてくらきにいり侍らんこそ八千たびくゐても。あまりおほく侍れ。しかはあれと猶ふかく思ひとき侍れば。いづれの法いかなるをしへにても永く凡聖のへだて見えず。さまゝの方便の門にまどひて目の前の十界を忘れ。三世にめぐれと見る人こそをろかに侍れ。それもあきらかなる眼よりは同一性。それはあやまる道なるべし。もとより大虚にひとしき胸のうちなれば。いづれの道を翫び。いかなる法をつとめても其相とまるべきにあらず。三世にぬしなき万法なり。唯まぼろしの程のよしあしの理のみぞふしぎの上の不思議なる。それも天然法に。あなむつかしの心づくしや。何事もさもあらばありなむ。

さゝめこと下

歌には親句疎句といへる事。さまゝさたし侍り。連歌にはあるべからず哉。

先人かたり侍し。まことに此躰の分別あきらかに侍らでは。もろもろの句の付ざま心をえがたく哉。歌には一首のうち。上下

の親句疎句のこと專侍り。序枕ことばをながしくをき。下の句にことはりをいひあらはし侍る歌は。上の句は疎句。下の句は親句也。又各一首づゝの上にも親疎の歌侍ると也。上下のくさりしたしく。心えやすくいひはてたるは親句の歌也。又上の句と下の句と心だに通じ侍れば。あらぬさまの事をもほしきまゝに繼たるは疎句の歌なるべしと也。定家卿云。秀歌は疎句の歌におほし。親句の歌にはまれに侍るとの給へり。連歌にも親句疎句の付ざま。かならず侍るべしと也。此覺悟修行最用也。

疎句連歌粗。

かへしたる田を又かへすなり
あし引の山をふすゐのよるいてゝ

はしめもはてもしらぬ世中

朝夕によせてかへれるおきつ浪

これやふせやにおふるは木々

いなつまのひかひり(ひかひり)に見ゆる松の色

前句のすがたこと葉をすてゝ。ひたすらに心にて繼たる此等の名句。しるすにいとまなし。

おなじく疎句躰歌。

鷺の居る池の汀の松ふりて都のほかの心ちこそすれ

霞立みねの櫻の朝ほらくれなゐくゝる天の河なみ
思ふ事なととふ人のなかるらんあふけは空に月そさやけき
まこもかるみつのみかきの夕まくれねぬにめさます郭公哉
桐のはもふみ分かつく成にけり必す人をまつとなけれと
椎のはのうら吹かへす木枯にゆふつくよみる有明のころ
大かたこれ等のすがたの歌疎句歟。

佛法にも。

親句は教。疎句は禪。

親句は有相。疎句は無相。

親句は不了義。疎句は了義經。

大悟に心をかけ侍らずば。いかでか歌道の生死をばはなれ侍らん。

法には。

空門大悟をも猶有所得と落す。されども相即空門には。十界六凡四聖一相無相といへり。

法花にも。諸法は空を座とす。

佛の五十年説教も。三十年は畢竟空をとけり。

しかはあれど初心のときは。あさきより深きにいり。いたりては。ふかきよりあさきにいでぬ。諸道の最用となり。

從因至果。從果向因。

有相親句の歌道は。無相法身疎句の歌の應用なるべし。いづれをもをろそかに思ふべからず。

泥木形像は大智より發。

紙墨經卷は法界より流。

一大事因縁は小乘より出。

されども有所得の法を説て人を化度するは。三千世界の人のまなこをぬくよりもとがなりと説なり。

むかし歌仙にある人の。此道をばいかやうに修行し侍るべきぞとたづね侍れば。

かれのゝすゝき。有明の月とこたへ侍しと也。これはいはぬ所に心をかけ。ひえさびたる方をさとりしれとなり。さかゝに入はてたる好士の風雅は。此おもかげのみなるべし。さればかれのゝすゝきといへる句にも。有明の月ばかりにて申侍ることあるべし。此修行なきかたは。たどり侍るべく哉。

又古賢の歌ををしへ侍るに。此歌をむねにをきてあんじ給へといへり。

源公忠

ほのくゝと有明の月の月影に紅葉吹おろす山おろしのかせこれもえんに。さしのびのどやかに。面影餘情に心をかけ侍れとなり。此道に入んともがらは。まづえんをむねと修行すべき

事となり。艶といふもあながち句のすがた。こと葉のやさばみ。花めきたるにはあるべからず。むねのうち清く人間の色欲う

一の躰に心をかけ侍ても。うるはしくまなび侍らば。さかひにいたるべく哉。

すく。よろづにあはれふかく物ごとに跡なき事をおもひしめ。

先達に尋侍し。大むねいづれのすがたをも。すてざらんをこそ。になうかしこき人とは申侍るべけれ。ひとつかたちにのみ

もひ侍らむ人のむねより出たる句なるべし。心のかざりたる

とゞまり給はじ。そこらのこりおほく哉。

ともがらの句はすがたことば。やさばみたりとも。まことの人の

君子周して比せず。少人は比して周せず。

のみより。いつはりのみなるべし。されば古人の名歌自讃

伯夷叔齊は聖の清也。伊尹は清の和なり。孔子をこそ時なる

にも。かたちをかざり花めきたるはすくなく哉。ことに上代の

哉といへるとなん。

歌。するどなるを事とせしに哉。くだりたるよのまなこよりは。

佛をこそ兩足尊と申侍れ。三乗の心はかけたるなるべし。

秀逸をもわきがたかるべし。定家。家隆をさへ猶うたつくりと

中にも幽玄躰を心にとめて修行し侍るべき道なる哉。

仰給しと也。慈鎮。西行をこそ歌よみとは仰られしと也。

古人語侍し。いづれの句にもわたるべきかたち也。いかにも修行肝要なるべし。されどもむかしの人の幽玄と大やうのとも

人は心ざしのふかきをと。獸はあさきかたちをとるとい

がらの句とはるかにかはり侍るとなん。古人の幽玄躰とより

へり。

をけるは。心を最用にせしに哉。よのつねの好士の心得たるは。

龐居士はさうきをくみて。市にいでぬるばかりなれども。禪

すがたこと葉のやさばみたる也。こゝろのえんなるには。入が

の印可の祖師なりと云。

たき道なり。人もすがたをかひつくるへるは諸人のこと也。心

傳説は。畑をうち道を作ばかりの山賤なりしかど。殷の夢に

入とや。

張幹は鱸をつりしかども。三たびめし侍しと也。

秋の田のかりほの庵のとまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ

しかはあれど。君かざらざれば臣うやまはずとなれば。かたち

天智天皇

ことばをかざり侍らん。歌道の肝要なるべしとなり。

幽玄躰。

張幹は鱸をつりしかども。三たびめし侍しと也。

天智天皇

しかはあれど。君かざらざれば臣うやまはずとなれば。かたち

秋の田のかりほの庵のとまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ

ことばをかざり侍らん。歌道の肝要なるべしとなり。

天智天皇

人 丸

さゝのはは太山もそよにみたるなり我は妹思ふ別きぬれは

元良親王

わひぬれは今將同じ難波なるみを盡してもあはんとそ思ふ

伊 勢

忘れなんよにも越路のかへる山いつ將人とあはんとすらん

曾禰好忠

山里を霧のまかきのへたてすはをちかた人の袖は見てまし

此等の名歌。たやすく幽玄の物とはさとりがたくや。こと葉心を

をいどらざうひ侍るゆへに。なをさりの工夫にては。心および

びがたく哉。

いにしへ勅定にて。十鉢の内にもいづれを至極の鉢たるべき

よしを。其時の歌仙たちに御たづねありしに。

有家。家隆。雅經。寂蓮。

已下は幽玄鉢を最尊と申上られしと。

叡慮。攝政家。俊成。通具。定家。

などは。有心鉢を高貴至極となり。心をとらけあはれふかく。

まことにむねの底より出たるわが歌のことなるべし。

定家卿

春雨よ木葉みたれし村時雨それもまきるゝかたはありしに

正 徹

身そあらぬ秋の日影の日にそへてよはれはつよる朝貌の花

此等の兩首の五文字。むねの底より出たるものなり。ひとへに

心ち修行より出たるなるべし。人の口ことばをかり侍らん好

士の。おもひよるべきさかゝるにあらず。さればまなこのある人

なき好士ありと也。こゝろのみなもといたれる人のみ大切の

道と也。

二乗は大疑なきゆへに大悟なしと也。

定家卿。詩歌の十鉢を分給中に。

故郷有^レ母秋風涙 旅館無^レ人暮雨魂

家 隆

思ひいてよ誰兼言の末ならんきのふの雲の跡の山風

此二を鬼挫鉢にいれ給へる。なをさりのめにては分別および

がたきことに哉。

貫之。万葉の秀歌とて二首注侍るに。

日暮たりいさ歸りなん子なくらんその子の母も我を待らん

さかゝめに我身を入れてひたきはやしほ色には骨はなる共

是又秀逸とはみえず哉。定家卿もあまりなることゝ申給へり。

されどもかならずゆへあるべく哉。

此道は先達を尋べき事に哉。又座々の人のことのはを學べき

にや。

をろかなる哉。いかにも先達をえらび學べき道なり。さればふるきをたづねてあたらしきをしれなど云り。道にあらざる人にあひ。稽古修行よこしまなるかたつのりて。いかばかりの賢聖にあへるともせんなかるべし。人のこゝろはうるし桶にたとへ。一たびあしきかたにそひては、すなほになることなしとなり。又しろきいとすぢなどにもたとへ侍て。ゑんを待てきまざまのいろにそへ侍るとなり。

善智識者是大因縁といへり。

知法常無性。佛種從縁記。

此比人のかたりし。尺八の上手なにがしとやらんにあるものならひ侍るべき望をいへるに。はやふき給へるにやと尋侍り。大かたはすこし稽古し侍ると申さずは。をしへ侍らん事かなひがたしとてさしをき侍ると也。かりそめにもよこしまなる道の。すなほにならぬことをしるなるべし。諸道にわたりたることはり也。

君子交如^レ水。小人交如^レ漆。

小人以^レ財爲^レ寶。君子以^レ友爲^レ鏡。

不^レ直友不^レ若^二早離^一。

大かた心にまかせぬ世に侍れば。なをからぬ人にまじはらん

も力なきことに侍れども。あら／＼しく偽かざりたる。おもひもいれぬともがらにまじはらんは。ほいなく哉。いかばかりしみこほり侍るべき座にも。心しほどけぬ人の一兩輩もまじはれば。其席は興つき侍ると也。ことに末たのもしくいときなきかたなどうたて侍るべきこと也。あさの中のものよぎなれば。さすがにつたなき心も。よき人になれ侍らば。すなをなるべく哉。

戴安道は雪の夜の月に。はるか浪にさほをさして王子猷を尋侍しに。山のはに月かくれ侍れば。興に乗じてきたり。興つきて歸るとて。子猷が門よりあはずして歸りし。颯ふかきことにや。

孟母は三たびとなりをかへ侍しと也。

白牙は子期さり侍しとて。絃をたちしと也。

仁者能人を好みんじ。能人を惡みんずといへり。其父を見んと思はゞ其子を見よ。其人をみんとおもはゞ其友を見よと。善友親近を第一とすと佛法にもいへり。

因縁生の教に自性なしと云。

道になさけふかき人は。花の下半日客。月の前一夜の友をも心あるをば忘れず。かうばしくこひ忍び侍るとなり。

清岩和尚つねに語たまひし。雨風の日。月雪の夜も此道の友の

事のみ思ひくらし忍びあかし侍るとありし。情ふかく哉。

又つたなきともがらは。諸道に邪路に入て。人を謗するのみおほしと也。

君子^{（譯訓）}濟人爲宗。少人損物爲德。

侵潤之^{（譯訓）}諸腐受之惣。

いかでかさかゝに入たる好士の句の。いよくみゝ遠くなり侍る哉。

先達のかたりし。修行と侍るは前の句の心。てにはの一字をもすてず。うちこし遠りんゑ。又我句の心。人のつけ侍らんまで覺悟ふかく百韻をつかねて。前後を思はん人の句をば。一句の上のみきゝ侍らんともがらは。わきまへがたかるべく哉。

小野道風が手跡をも。至極の後は。世にみしれる人なかりしとなり。

卞和が玉をも。三代めにこそ知る人侍しとなれ。

佛法の因教圓成にいたりて。万象をすてざる心は。さとりの分別のほかなるべし。

此道稽古をつみて後は。しばらくうちをき侍ても。たどるべからず哉。

古賢にたづね侍し。いかばかりの螢雪。年をつみても修行工夫しばらくもゆるく成ては。跡なくくだるべしとなり。されば一

日に三たび身をかへり見よといへり。

此頃世一の尺八ふく頓阿といふもの語侍りしと也。三日うちをき侍らばならじといへる。あまりなることに侍れども。諸道の用心にずんじ侍るべきことなり。又人のかたり侍し。梵灯庵主此道をすてゝ。あづまつくしに年ひさしくさまよひて後みやこにかへりしに。此道いかゞ跡なくなり給らんと人のたづね侍しに。なでうたどり侍らん。連歌は座になき時こそ連歌にて侍れと申されしとなん。これももろゝのみちの用心にわたるべき心なるべし。

世になべてほのめかす作者を。第一の人と申侍らんや。又よき人にはほまれあり。おろかなるにはもてはやされぬにもよるべからざる哉。

先人かたりし。大むね世人時めき。もて出たる作者。さもこそ侍らめ。されども一人も聖仁のみこそ大切に侍れ。こゝろあさくあらけなきともがらに。ほまれのあらんせんなきことにや。さやうの人のまなこには。めつきんをもちうさくをも。こがねの句をも。あきらかならざるべし。さればかしこき人のをしきたれぬる。むかしよりおほしとなむ。

定家卿は。わが心にあはぬ歌を他人のほめ侍れば。色をそんじ給ひしなどいへり。

不_レ如_二郷人善者好_レ之。不善者惡_レ之。

孔子も時にあはず。顔回も不幸也。

佛の御名をも。三億の人は聞ずと也。

澗底の松のひとりいたづらに老行ともいへり。

此道いかにも世にまじはりて。身のほまれを心にかくべき事に哉。

先賢のかたり侍し。人により侍る也。ひとへに名を思ひ身のさかへを望も侍るべし。又さかみに入れるにつけて。閑居幽栖のみ心をすます人もあるなり。

定家卿。爲家の歌をいさめて申給へるとなん。歌はさやうにとのゐものにまつはれ。ともし火ほがらかにして。樽折籠物などとりちらしては。いできぬ道なり。されば汝の歌よろしからずと也。亡父卿の詠じ給ひしさまこそまことに秀逸もいできぬべけれ。深更にとのあぶらほそくあるかなきかにむかひ。直衣のすゝけたるうちかけ。ふるきゑほしみゝまでひきいれ給ひ。けうそくにより桐火桶をいだき。詠吟の聲しのびやかにして。夜たけ人しづまるにつけてうちかたぶき。よごとなき給へるとなん。まことにおもひいれ給へるすがた。つたへ聞侍るだに。艶情にたへず。感涙おさへがたく侍り。さるにや爲家卿は家官こそめでたかりしかども。御室の五十首などにも。さまゝんの

事侍て。のぞかれ給ひしと也。

定家卿の歌を詠じ給へる時は。わざとなをしをきかへ。びんをかゝげ。いぎをかひつくりひ給へるとなん。

いかばかり巧能利根の好士も。心地の修行をろそかにては。いたりがたしと也。いかにも道をたかく思ひ。執心の人のみ此道の大切のともがらなるべしと也。いにしへより道をあさく思ひ侍るは。世にほまれあること。一人もなしといへり。道をなをざりにせし好士は。かならず兩神の御爵を蒙れるなど。定家卿ねんごろにするし給へり。

道因入道は八十ちに及まで秀歌を心にかけて。住吉宮に月ごとに参しと也。

登蓮法師はますほのすゝきの事をたづね侍らんとて。雨の夜のおくるをまたで。簀かさかりて渡邊にとて行侍るを。人あはたゞしや。雨のはれ夜のおくるをまち給へかしといへば。人の命は明るをまつものかといひて侍ると也。

源頼實は秀歌一首よませて命をめせと。數年住吉明神に祈侍しと也。

智恵第一の舍利弗も信によりて得入すと云り。

悉達太子王位をすてゝ。ひとり山ふかくいり給ひし。つゝに三界の導師となり給ひて法家を照す。

迦葉尊者。檀特山にこもり給へるも。一大事因縁をなげき給へるなるべし。

いづれの座にも。祝言をのみ事として聊の句もいでき侍れば。まゆをひそめふしめになる人おほし。いかゞ。

古賢申侍し。御法の門にいりて心の源をあきらめんにも。此道を學びて。あはれふかき事をさとらんにも。此身をあすある物とたのみ。さま／＼のいろにふけり。實ををくしほこりかにおもふ事なき人の中には。ひとりとしてありがたかるべしとなり。此道はいかばかりも。無常迷懷をこゝろこと葉のもとゝして。あはれふかくなきことをいひかはし。いかなるゑびす鬼のますら男の心をもやはらけ。はかなき此世のことほりをもすゝめ侍るべきに。たま／＼あへる此席にだに。色にふけり名にめで。千代よろづ代鶴龜などいひあへらんはうたてしくや。かくいはひ侍るとて。いづれの人か百とせ。誰人か千とせをへたる。昨日はさかへぬるにも今日はおとろへ。あしたにみしもゆふべには煙となる。たのしびかなしび。たなごゝろをかへすよりもすみやか也。さればいにしへの歌人は。無常迷懷をのみ宗とし侍り。

佛も山ふかくひとり入給て馬をかへし。六とせの苦行には。御もとゝりに鳥のすくうなどいへり。法花にも。この經をあ

きらめんと思はゞ。世間の夢を觀ぜよと釋す。

詩にも杜子美一生のうれへといへり。

秀句は閑家の人の心よりいづなどいへり。

閑居幽栖ほどこそなくとも。つねに心をすまし。夕の雲。夜の灯にむかひ。世中のまぼろしの内に。さりきたれる。たかきもみじかきも。賢きもをろかなるも。暮るをまたぬいきののかみすぢよりもはかなきを。われとのみたのみて。百とせ千とせをふべきおもひをなし。色にふけり名にめで。かた／＼さまざまにちりまどひぬるこそをろかなれ。このみは土はひとなれるに彼いきの一すぢ。いづちにかゆき侍らん。われのみならず。万象の上さりきたれる所。尋極めがたく哉。

又年始外様の會席。いさゝかも禁忌のことばの句ども心をうべきなり。かばかりの覺悟。たれの人かなからん。いまさらことはるにたらず。

かたはらなどの會席を聞侍るに。さらに工夫修行の道には見え。たがひにぬさとりあへずさまなる哉。

まことに世くだりてよりは。心たかくなさけふかきかたは。跡なく侍る哉。ひとへに舌の上のさへづりとなりて。むねのうちの修行はたえ侍ると也。さればあやしのしづ屋。民の市ぐらなどにも千句万句とて耳にみてり。たま／＼道にふけるともが

らも。ひたすら世をわたるよすがになして。日々夜々にさはがしくみだれあひ侍るありさま。此道の難法末法に。あひかなへる時なるかな。ちからなき事なり。たれくも此道の窮子なれば。佛も孔子も人丸もすなほにすくひがたき道なり。何事も一念即極の上に侍れば。尊き者をばたつとく。劣なるものをば劣にと侍れば。智門悲門のごとく。その人の堪不巧にまかすべきのみなるべし。

終日動とも動にあらず。通夜静とも静にあらずと也。

隨衆生性所受不同。

一雨所潤各有差別。

同聽異聞のみ也。

器用のともがら。晩學なれるなど。とてさしをき侍る人あり。さも侍るべく哉。

此道はひとへに閑人のもてあそびなるゆへに。とし半過ごろよりうるはしき修行分別は。いでき侍る道なるべし。いかにも老後よりの數奇。まことの心ざしの好士なるべく哉。

家隆卿は五十ちのころよりことに名譽のきこえ侍しと也。

寗説。四十にはじめてまなびて。文道にいたり侍しと也。

朝に道を聞て夕に死するは可なりといへり。

歌は歌合とて作者の名をかくして。當座にさまざまにほうへ

んにあひぬれば。いさゝかのとがまで。あきらめさとするなり。連歌には。さばかりの事あるまじく哉。

實に連歌には。さやうの用心いまだなきゆへに。いかばかりの初心不巧の人も。わが心のゆく所を。よしととりをき侍るゆへに。よこしまになり行侍る也。ちか頃はじめて連歌を歌合の儀式にすこしき事もかはらず。句を左右につがひ。當座にさまさまのほうへんありて勝負を定め侍し事。たびくゝなるとかや。賢きかたゝのまなびてもてはやし給はゞ。道のたよりにもなり侍るべき哉。いさゝかの道にも。師範を尋て學ぶならひに侍るに。連歌の道にかぎり。近代はをのれと證得するわざになり行侍るより。ひとへによこしまに。かろくしきわざになれりといへり。

歌の點はいさゝかのことまで。ことばをそへてたづねきはめ侍る。連歌の點はいかゞ侍るべき哉。

先賢に尋侍し。連歌の點。歌にかはるべきにあらず。墨を引侍らんに。句どものあきらかならざるには。いかにもこと葉をくはへ。たがひの心ざしをとどけ侍るべきに。心をえぬ句ども。ゆへなきことどもを。うち捨侍らば點をとりても合ても。なにの所詮か侍るべき哉。歌の墨にはいかばかりのことまでも。こと葉をそへたづね明め侍り。連歌にはかばかりのことの道を

だにさたし侍るかた。世にまれに侍る哉。うたて侍ること也。されば點は作者の大切に□み侍る。一人にのみとる道なり。おぼろげにも他人にとることなしと歌には見えたり。

道になさけふかき人の中に。幽栖閑居を事として常の會席にも見ええず。世にしられざる中に名をえたるよりもと見え侍る人おほしとなん。

先達語侍し。いかにもさやうの好士の中にまことの歌人もあるべしとなり。

人至て賢なるには友なし。水至て清きには魚なし。

許由は箕山の嶺のやせたる松の本にむなしき風を聞て。人間の夢をさませしと也。

顔淵は一簞一瓢のみにて草にむもれてすめりと云。

介子推はつゐに山を出ずして命を捨てれども。寒食日は天下に火をけつと也。

西上人は修行者なりしかど。賢き世にはその名を照す。

鴨長明が右床には。二たび御幸ありしと也。

維摩居士の樹下方丈には。文殊大聖きたりて禮し給へるとなり。

まことの歌仙には利も徳もなく。佛の維摩を説給へるごとくなるもあるべく哉。

百戰百勝不_レ如_二一忍_一。方言万答不_レ如_二一默_一。手不執卷常讀此經。口無言聲遍誦衆典。

君子憂_レ道。少人憂_レ貧。

此等の人は心水の月にむかひ。歌林の花にあそぶといへり。

又艶なる歌仙をも。いひくだしかるしむるともがら。世におほく侍り。道の外道なる哉。

甘露反毒藥。皆在_二人台中_一。神力業力にかたずといへり。

鷹はかしこけれども鳥にはわらはるゝと也。

佛をも五千上慢はあざむきたてまつりて。蓮を卷てたちしと也。

又ひとへに放埒をさきとして身をかるくなす好士世におほし。心をすてたる歌人のまざれ侍り。かれにはあらはに身をかざり。いつはり侍るにもおとり。心のうちきずおほかるべしとなり。

又道に心ざしあさきともがら。上にのみ數奇。たしなみのすがた見せてこゝろそまぬ諸道に見え侍るとなり。ことに佛道修行の中におほしと也。さやうのともがらは。ことば作などにて。むねのうちに。つたなき見え侍るなどいへり。

她は一寸をいだして。其大小をあらはし。人は一言をもて賢愚をしるといへり。

仁者必有勇。勇者必不仁。

放埒の人数をあつめて。ゆへなき事をつゝしりても。佛神の法樂になるべき哉。同は道になさけふかく。思ひいれたる好士をこそ納受もあるべく覺侍れ。如何。

古賢のかたりし。いかばかりの未練放埒の好士にても。其感應はひとしかるべしと也。

佛及五百羅漢を請奉より極惡の比丘一人を請ば無量の福をうる。

又破戒盲目の妻子もちたるをも。舍利弗日連のごとく敬と説けり。

佛心者大慈悲是也。

六波羅蜜にも檀波羅蜜を第一と也。

しかはあれど。不淨の比丘の供養したる塔婆をば。禮せざれとも説けり。

いかばかり道に入たる人をも。身の程なく世にしられぬをば。もてはやさず。ひとへにかなはぬともがらをも。世にあひ家をも。だにつぎぬれば。萬人尊重し侍ると見えたり。をばつかなく哉。

堯は賢なれども。其子は愚なりと。

舜はかしこけれども。其父はかたくな也。

家々にあらず。つぐをもて家とす。人々にあらず。しるをもて人とす。

人能道をひろむ。文人をひろめず。

黄帝は牧童の言をも信ぜしと也。

徳宗は農夫のいさめにもしたがふと云。

君子は下に問ふ事をはぢず。故に道をしる。

大公望渭濱に釣せしかども。文王の車の右にのす。

吉備大臣は左衛門尉國勝が子なりしかども高位たり。

阿鼻依正金極聖。いたゞきにあり。毘盧眞土凡下一念を越す。

中比頼阿。慶運とてならべる歌人侍し。慶運は身の程や不肖なりけん。毎々述懐のみせしと也。其代の撰者四首いれ侍るとて九拜して涙をながし。よろこび侍しに。頼阿が歌十餘首いりぬることを聞て。後目に我歌をきりいだし申侍ると也。道の執心ふかき事に哉。頼阿は世にあへる歌仙なりしにや。虎鼠時によるといへば。用時はねずみもとらのごとく也。用ざる世には虎も鼠のごとくなりといへば。不肖の歌人は。はるかにひかりくもり侍べし。慶運法師今はのとき。年來の抄物詠草どもを住なれし東山藤もとゝいへる草庵のしりへにみなうづみすて侍ると也。又むかし能因法師といひし歌仙。攝州古曾部といへる。

にて身まかりけるに。彼所に所持の愚詠ともうづみ侍るとや。これ等の。人。後世の歌人をくたしたるなるべし。道のなさけふかき事ども也。

人間毀譽非ニ善惡。世上用捨有ニ貧富。

有レ財訟如ニ石投_レ水。乏者訴似ニ水投_レ石。

又稽古も歌口もおなじほどにて勝劣なく見ゆる人の。修行ゆるくてつまづけるかたは。ゆきぬかるゝこと万道にわたりて見え侍ると也。ことに歌道などは。二とせ三とせにも雲泥になり行ことおほしと也。さればむかし隆信。定長とて歌口も稽古も勝劣なき名をえし人も。隆信は君につかへて朝夕いとまなく哉。定長はかしらおろして寂蓮法師と名をかへ。衣を墨になし。いとまある身になりて。ひとへに此道をも工夫し侍る程に。年半より後は同日の對論に及ずと。もろゝの歌仙申あひ侍り。隆信申侍ると也。われよをはやくせしかば。寂蓮程の名をのこすべきに。ながいきして無下の名をながし侍るとつねになげき侍しと。えんの事也。

苗にしてひでひで^{ミシラ}登ずといへば。用心修行諸道のいのちなるべく哉。

諸道に山口しるく。行末たのもしく。世に名を照すべきともがらの世をはやくするおほし。ほいなくうたて侍ることの最一

なると哉。

鰐淵鯉などさへ不幸也。

甘泉早竭。直木先折。

再葉樹枯。重荷船覆。

又させるふしもなきかたの。あまりに壽老類齡なるも。うたて侍るかたあるべく哉。よき人だにあまりにながらへ侍れば。ありのすさみある世なるとなり。兼好法師が云。人はひさしくとも四十ちまでとかきたる。はづかしくこそ。

幼而不_レ遜悌。長而無_レ述。老不_レ死爲_レ賊。以_レ杖打_ニ其脛。

諸道に思ひいれたる人は。まれに侍る哉。ことに歌道にたへたる人。いにしへもわづかにひとりふたりと侍れば。實に鱗角のごとくなるべく哉。あふげばいよくたかく。きればいよくかたき道なり。年々の修行いたりがたきさかみなる歟。

千里足下より始。高山微塵より起。

佛法にも。敗壞の無常とて此身のやぶれうせん事をば。二乗もさとりしり侍ども。念々の無常とて物ごとの上に忘れざるは。菩薩のくらひ也。されば年々歳々の修行の歌人。九牛が一毛なるべく哉。楚國にも屈原ひとりこそさめたりといひしか。

佛の正法眼藏涅槃妙心の所をも。迦葉ひとりこそ破額微咲給ひしか。

單傳密印。不立文字の道なるべしといへり。

歌道にいれるともがらのさま／＼の能藝を昆合して稽古するくるしからず哉。

先賢たづね侍る。諸道に眞實の愚の人は。他の能藝あるべからずといへり。されどもろ／＼の道に相資相反とて。ならべて學ても。くるしからざるも侍り。又ことの外あしきもあるべしとなり。歌道に佛法修行學問手跡などは。相資の道にていかによろしかるべしと也。此外はいづれの能藝も歌道には敵なるべしと也。恭將恭双六博奕。このたぐひはみなひとつの道にて相資なり。又樂器絃管舞音曲。このたぐひはひとつつれにて學び合てもくるしからず。又蹴鞠。すまう。へいはうなどおなじ道なり。諸道に心ざしの人。此相資相反の用心大切のこと也。まことに古人も。大國にも獨歩とて一道をあゆむ人。天下に名をうるといへり。

此比世中に歌道に入らぬともがらなし。このみちのさかりなるときなる哉。まことに階級みだれ。たがひにのゝしりあひ。猥雑したるありさま。このみちのすたれ跡なきときなる歟。會席どものさはがしき。早出退散を事としてあわ／＼しきさま。七歩の才八疋の駒にむちをそへたるけしき也。實に道の賢聖ほしき時なる哉。

猛獸山にある時は。毒虫これがためにおこらず。賢聖世にある時は。奸曲のものなしといへり。

たかほこの鷹のねむれず時。烏雀かまびすしと也。することのかたきにあらず。行ずることのかたき也。行ずることのかたきにあらず。よくすることのかたきと也。

佛滅後に。像法末法の時。堂塔佛像道のほとりにおほくみち侍るべし。これ法滅の時なるべしと説り。

しかはあれど世もくだりはて。人の性もむかしにはおとり行侍れば。その世にかたばかりも。此道に心ざしあらんともがらはなさけふかきたぐひなるべし。佛なき世には。羅漢をも佛のごとくし。羅漢なき世には。破戒無智の僧戒を尊とするといへり。又金銀なき國には。なまり赤金をも寶とする也。歌道も佛教のごとく。先哲のをしへあきらかなれども。心ざしあさき人はいたらぬ道也。只機根の生熟によるのみ也。代々集の智火わたくしなけれども。好士のなま木にはつくことなし。まことに天澤わたくしなき。ことはりの上のみなり。佛教をも久發心のものくみ信受すと説。

耆婆扁鵲が良藥も。をしへのごとくなき人の病をばいやさずと也。

雖眼二見二不能二心得。水にちりばめ。水に畫がごとしといへ

り。

歌道も佛のをしへのごとく。心のいたらぬ人には。たゞその物の心のまゝにしめせともいへると也。

父は賢ともその子はおろか也。

師こつをえたれども。弟子つぐことなしといへり。

齊桓公の文を學べるを車作翁難じて。先人の心をば。學てはうべからずといへるとなり。

鴨のあしはみじかけれども。つげばうれふ。鶴のあしはながけれども。きればかなしむ。

佛法にも隨機通機などゝて人の賢愚にしたがひ。さまざまに説給へり。

方便愚正無方便智邪といへり。

止々不須説我法妙難思。

冷泉黃門爲秀。歌道をしめし侍るに。にぶくねぶりめなる好士には。かけりかひりきあるかたをしへよ。又ゆき過たる心の人には。のどやかにおだしくとしめせとの給ひしと也。これも賢き庭訓なる哉。

聖仁には心なし。人の心をこゝろとす。聖仁にはことばなし。人の詞をこと葉とす。

但似假名字引導諸衆生。

無性定性皆得成佛。

歌連歌も佛の法報應の三身。空假中の三諦の當分侍るべく哉。好士の上中下の智分なるべし。うちむきてといりきこえ侍らんは應身の當分なるべし。五蘊六根をあらはし給へるほとけなるゆへに。好士のまなこおよび侍るべし。心をめぐらし。たけたかくたくみなる句は報身の智分なるべく哉。人の機をまちてある時はあらはれ。ある時はかくる。智慧分別の好士ならではしるべからず。又幽遠にことはりをはなれ。けだかく手をはなちたる無相の句は。法身の當分なるべし。智分にても稽古にてもいたりがたく哉。されども修行工夫としをつみ。まなこたけたる好士のみは。あきらかなるべし。中道實相はこゝろにあひかなへると也。

佛法を修行して。まことの佛を尋。歌道を工夫して。あきらかなる所をさとらんにも。いかなるかたちをまことの佛。いづれのすがたを至極の歌連歌と定侍らんはおぼつかなく哉。万法にさだまれるかたちあるべからず。たゞ時により事に應じて感情徳をあらはすなるべし。天地の森羅万象を現じ。法身の如來の無量無邊のかたちへんじ給へるごとくのむねの内なるべし。これを等流の身の佛ともいへり。その法身の佛。等流の如來にもまことのさだまれるかたちあるべからず。たゞ一所

にとゞこほらぬ作者のみ正現なるべく哉。さればいかなるがこれ佛ととへるに庭前の柏樹とこたふ。此旨をその弟子にたづね侍るに吾師にそのことばなし。師を謗することなかれといふ。

森羅万象即法身。是故我禮一切塵。

佛敎も智門はたかく。悲門はくだれる妙なるがごとく。歌道にも悲門の好士あるべし。念佛などの當分なるべし。ひとへに無智愚鈍の學問。修行のかたをばわすれて。ほとけの御名をのみたのみ侍るごとくたかひなるべし。智門の歌人は天台禪法など當分なるべく哉。悲門のくだれる愚鈍のをしへも。眞實の所はかはるべからずとなり。たとへば寒夜にあやにしきのきぬをきたるとも。又あさのつぐり。かみのふすまをかさねたるにもいねいりて。後はたがひにおなじ無住自性清淨涅槃のさかゐなるべし。

西方淨土無爲樂。畢竟逍遙離有無。

さま／＼の是非妄想の波浪をたて侍る心は。第八などまで也。十識の眞心にいたりて善惡の分別にうごくべからずと也。幻化の知をもて。幻忘を除て後境智ともに幻にもあらずと也。

無縁の慈悲をもて無相の境を縁とするのみ也。

夢中。是は是皆非也。覺前有無は有皆無なりと。

有爲報佛夢中權果。無作三身覺前實佛。

先人云。大むね十の徳そなへたる先達。まことの明聖なるべしと也。

堪能。稽古。修行。道心。手跡。年老。閑人。明師にあへる。利性。身の程。

此等を弁備したる先達かたかるべし。されば賢人聖人には。五百年千年に一たびあへりといへり。大國にも我國にも。諸道に聖仁賢人にむまれあへることをのみかたしといへり。文にも七徳をあぐ。

賢徳。文徳。武徳。慈徳。業徳。應徳。聖徳。

又云。

仁。義。禮。智。信。愷。諦。

佛敎にも法の寶。法の誠を七あげ侍り。さては歌道にもかならず侍べく哉。

佛法寶。

信。戒。悲。儀。多聞。智惠。捨離。

歌道寶。

數奇。修行。執心。道心。閑人。稽古。利根。

此二冊之龜言。まことに跡なし事ども也。眞實の歌道は大虛のごとく。人々固々圓成之上也。もとより證は他によらずといへ

リ。

迷前是非。是皆非也。覺前有無。有皆無也。

諸法實相之外。餘皆魔事也といへり。

諸苦所_レ因。食欲爲_レ本。則裂捨可_レ給なり。

寛正第二天經賓上旬。紀州田井庄八王子社參籠中。彼邊牧童等。連歌竹馬用心一冊。頻憤_ニ望_ニ之_一。依_レ難_レ去。卒爾所_レ浮短慮任_レ筆左道。一覽之序可_レ被_レ投_ニ爐中_一者也。努々不_レ可_レ洩_ニ一人_一者也。

釋心敬 花押

右さゝめこと上下以浪花草間伊助直方所藏心敬自筆之本書寫焉。

群書類從卷第三百五

連歌部三

老のくりこと

心敬僧都

いにしさいつとしより天が下雲風さはがしく成侍て後は。う
つりゆく月日の光をもわすれ。よの中心そらにして。よろづの
道ぐらくなりゆくをこそ歎くかた／＼侍りしに。つゐに世の
みだれと成て。一天かたぶきくれまどひ侍れば。主上芝砌玉臺
をうごかし。博陸。槐門。棘路。月卿。雲客をはじめて。かたつほ
とり遠き堺に御身をかくし給ひ侍れば。人々身をいだき。足を
そらにしちり／＼に成行さま。春の花の風にさそはれ。秋の木
葉の木がらしにあへるがごとし。拙子が孤露の草の一葉のか
くろへだにかれはて侍るに。あづまのかたにあひしれるゆか
り。此頃いたづらにこもりゐ侍らんよりも。あはれ富士のね。
鎌倉の里をも見侍れかしなどあながちの事に侍れば。太神宮
參籠などの心ざし侍るおりふしにて。あからさまの日數をさ
だめ。伊勢の海士の扁舟のたよりをたのみ。そこはかとなき蒼

海漫々の風波にたゞよひ。天水茫々の煙霞にむせびて。ならば
ぬいその藻しほの枕。思はぬ嶋の篷の庭にしほれて。うきねの
夢をかさねし程に。なく／＼むさしの品川といへる津にいた
り侍り。名どころども見侍て。やがて歸路の事など思立しに。
世のなかのみだれいよ／＼の事にて。今は筑紫のはて。あづま
のおくまでもさはがしくなりはべれば。ひたすら便をうしな
ひ。たのまぬ磯に藻鹽の草の庵をむすび。みなれぬあまに浪の
枕をかはす。かりねの夢の中に五とせまでたゞよひはべるに。
あまさへあづまのみだれしきりに成て。たがひに弓矢なぐみ
のみのかまびすし。さながら刀山劔樹のもと／＼なり。たびのう
れへもます／＼みをきるごとくなれば。いまはいかなるいは
のはさま。苔のむしろにもしばしの心をのべばやと尋入侍る
程に。さがみのおく大山の麓に星霜年久しき苔の室あり。かゝ
る所こそとかりそめにたちより侍るに心ことばもをよばず。

乾坤の外の堺地。まことに山を愛し水をたのしむ。仁者智者も心をとめて侍るべき事也。面には孤峰簇々として。やせたる松杉ならびたちて斜陽をかくし。千丈の青巖枕のもとまで欬て。をのづから苔の莖をかたしけり。緑竹きよらかに生めぐり。煙葉朦朧として暮鳥のかたらひかすかなり。子猷。樂天が園。王質。貴長が入し仙家もかくやとあやまたれ。老樂のうれへをのばへ。髯中のやまふをいやす計也。本堂苔にふり臺かたぶきひはだ破て。軒にはしのぶ小松心のまゝにおひ。扉をたゞく嶺の嵐にかざりの玉のみだれあへる聲。簾につれるおのへの鐘のかすかなるひびき身にとをり。袂をしぼらずといへることなし。南の山のかたはらには三熊野をうつし。なぎの葉ならしなど陰ふり。苔のみちほそく。誠に神さびたり。門前の方には杉。檜原。花の木ども左右にならびたちてはるかにつぎ。長河きよく漲落。飛泉。苔をあらひ。流石なめらかなり。古橋かたぶき。廊齒斜にして。もろこしの虎溪もかくこそとおぼゆ。東に望ば原野はるかに晴て青山とをし。たゞ秋の花を盡し。朝の露の色。夕は虫のうらみに賜をたつ。北には大嶺碧落をうがち。雲霧天の肌にわきのぼり。雨をもよほすよそほひ。さながら驪龍の蟠地あらたなり。はるかか麓には田中のわらや獨孤のむらなどおろそかに軒をならべ。老翁畑をうち里の子木實

をひろふ。牛を追てくだる木こり。駒をひきて歸草かりの山歌寒笛の聲のみかすかなり。夕陽に望て古橋にたゞずめは。白浪の月を待とる影。世俗の塵垢をあらひ。更たけて蘿洞に入れば。青嵐の松をたゞく聲。色相の夢を破る。感情慮絶。誠に瀟湘廬山の夜の雨と聞え。洞庭の月にうそぶく心もかくこそと。覺えず光のかげを懸るに。彼住持の和尙。學宗の法の花。座禪のむねの月になをあきたらず。和歌の海の渚の玉をひろへるこゝろざしあきからで。纖月の前。青燈のもとと法談のつゐでは。予が藻鹽の塵。松のかれ葉のあきはかなるをもさまゞくにかきあつめ。こまやかに尋給へる事あながちなり。契りのほどもかつはふしぎに。かつはいなみがたくも侍て。尋給へるまゝうち出侍り。一の塵もあたるべきには侍らず。たとへば谷ふかき苔のむしろのかたらひに侍れば。つゝ鳥さほしかのみゝのほかは。いとはしからず。たゞふたりの閑栖にたへたる心懷とひそかにうちさらし侍る計也。

此道にむかしはいさゝか心をかけ。古人明聖の席などにもありしこと侍りしかど。愁にわが法の道杯にいとまをえず。あまさへ壯年のころよりいたづらごと年久侍て後は。むねのうちさながらかたえにいるゝ水のごとく。一の露もとゞまらず。又杖とたのみしともがらもみな世をはやくせしなげきどもの後

は。ひとへに世のなかの夢幻よりもはかなく。白駒のかげ飛鳥の跡なき事を思ひしめ。世俗の大塵をうちはらひ。一大事當來をのみまぢかね侍しに。此たびの世のみだれにうかれ出。古郷万里の雲泥を隔てさまよひ。朝越遠堺の長旅におちぶれはてたる。算があまのなはたきしうれへ。蘇武が落穂をひろへる歎しも鴈の一筆のつてはありしに。ひたすら便をうしなひ侍る心ばそさのあまりに。しばしのうれへものどめ侍るやと忘れはて侍る。あさはかのことばの塵どもの筆のすさび。いたづらごとゝおもひすて侍れども。たとへば山野にひづめをころし。江河にうろくづをと。兵杖を事とし。万人をうしなへるともがらもはれば。ひとへに慚愧懺悔になぞらへ。和尚にむかひてむねのつみをけち侍るばかりなり。

やまとうたのみちは。混沌わかれしより。天にしては。下照姫こと葉をのべ。地にしては。素盞鳴尊文字の数をさだめ給しより代々に繼て。ことばの林花ひらけ心の泉わきかへり。さるにならの葉の名におふ御代にふることをあつめ。はじめてすへとをくのこし給へるに。又延喜のひじり。古今集をえらび給へるよりいよゝ道ひろく。代々のあつめ数かさなり。家々の風花をにをはし。國々のこと葉色をそへり。ことに後鳥羽院の御代にさかりにして。歌の仙かずを盡しむまれあひ。浮詞雲のご

とくおこり。麗流泉のごとくわく。此みちの再昌と見え。奥旨をつくし侍ると也。慕塵繼風て一天まことの道になれるとなり。しかはあれどその末のかたよりは。又心の花いひをくれ。こと葉の露あさはかにくだりゆきて。ちかき世にはひたすらすたれ侍るにや。興廢盛衰のことはり。あらたに覺侍り。歌の道すたれしよりは。世人みな連歌に心をうつし。一天にみてりこれ二條太閤。此道の聖におはして。彼御頃より盛にもてあそび侍り。その頃すぐれたる好士。救済。順覺。信昭。良阿などてかたをならべてきこえ侍り。彼等が中には周阿法師はなどや。攝家も救済もよろしからぬよし侍しとや。げにもいさゝかあらゝかにほしきまゝのかたのみにて。百影しなあはれをくれて見え侍る哉。しかはあれど救済法師老耄の末つかたには。まなびやすきによりて。みなかれが風躰になれるにや。さればえんなる道はうせて。偏にあらあらしく卒爾のかたになり行侍ると也。まことに殷の紂。夏の桀の堯舜にもまされるといへることはりしられ侍り。其末つかた梵灯庵主よろしき好士にて世もてはやし侍しに。四十のころより陸沈の身になりて。ひとへに此道をすてゝ。つくしのはてあづまのおくに跡をかくし侍る事。甘とせにも及侍るにや。其後六十あまりにて都にかへり侍ては。ことばの花色香しほみ。心の泉ながれ渦にや。風

舁たつゝしく。前句どもひたすら忘れ給へるとなり。年久廢て跡なくくんだり給へるも。ことはりならずや。其頃より以來五六十年の程は。ひとへに前句の心のあつかひ。幽玄くらゐのきたうせ侍るにや。たまゝ付侍るとみゆるも。前の半をつけ又一句を三四などに取分てこと葉計をつけ。玉しゐのてにをは心をばつかねては付ずと也。此道は前句のとりよりにて。いかなる定句も玄妙の物になり。いかばかりの秀逸も無下のことになるといへり。前句と我句との間に。句の奇持。作者の粉骨はあらはれ侍べしと也。大方一句の上にことはりほがらかにあらはれ侍るは。優艶感情あさく哉。いかにも前句のあつかひ。心ことばのりんゑの覺悟。大切の道なる歟。されば救濟。順覺の比の句は。前句を聞て後奇特はあらはれ侍り。ちか比歌の心をもうかどひ。さかしき好士ひとりふたり出來しより。又前句の沙汰。よにされることに成侍り。

上古中比の好士。いづれも歌の道にくらく見え侍るにや。句共の心にまどひ。結構をさきとす。さればすがたひとへに歌の外にさまになり行侍り。連歌とうた各別の道にとりける好士。世にみちて見え侍り。うたてつたなきことの最一なる歟。うるはしくえんにまなべる好士の心には。露ばかりもかはるべからず。いかさまにも歌をならべて詠じ。修行なくばいかばかり

の螢雪をつみても。たけくらゐことはりはなれたるさかひさとりがたく哉。又歌をまことにえたる人の連歌のあしき事あるべからず。おなじみちに侍ればなり。此道まげて救濟一人が跡をしたふべくや。それさへ用捨の所さまゝにあるべきか。いたらぬかたへの好士共の風舁とうらやむべき道にはあらずや。歌も万葉集は。よろづはじめにて文字などもさだまらず。するどなる事のみなれば。うちまかせてまなぶべきにあらず。されば古賢と存て。未耳目のもてあそびにあらず。いたづらに教戒の端たりといへり。たゞ懇に尋みて道の才覺におくひろき事なり。されどもよろしき名歌。えんなること葉。きはめておほく侍れども。たゞ古今集のみ此道の鏡なるが。それさへ若干の用捨侍るべく哉。定家卿言。躬恒。貫之が歌は上手にて侍れども。たけしなびえたる方をばよまずとの給へり。又公任卿の事をも。世に名を照せしよりはよめるうた見えずと申給へり。堀川院のころの歌人をも。稽古はさもこそ侍りけめ。歌はことば心つたなく見へ侍となり。彼卿の眼にはげにもと覺へ侍り。其後風舁さまゝにかはりきぬれば。あまりに遠世の歌。用心なくうちまかせてまなぶべきにあらず哉。たとへば小野道風。佐理卿などの手跡は。不レ可レ説の事に侍ども。此ごろひたすらに學べきにあらざるがごとし。たゞ水無瀬殿の御代

にてよろづおちしづまり。權者の歌仙かずをつくしいまそかりける。久遠永劫までの道の光をつくし侍るとなり。誠に此みちの佛の出世の時なるをや。

御製 後京極攝政 慈鎮和尚 俊成卿

定家 隆 西行法師 寂蓮法師

ちかくは。清嚴和尚の風骨を庶細に入學び修行。此道の至理なるべく哉。此等の心ばへは。かくの詩などの面影までそひ。たけたかくひえ氷侍ると也。歌には此風骨。連歌には救済一人が風雅の外は。さのみ尋侍人も心盡にや。初學の頃はさまゝの好士の作にも心をかけ侍るべしと也。頓河法師歌などうるはしくをだしく大切なる哉。さかひに入はてゝは。ふけさびたるかた最尊なるべしと也。詩などたけくらゐ侍れば此道に大切のよし定家卿申給へり。連歌うたの外におもひなし侍らば。我作ふとりあたゝかなるべく哉。又詩などを。むねとし侍らるもあしかるべき歟。先人の云。いかばかりの文殊の智。富樓那の辨にても。多聞利根のみにては。たやすくなるべき道にはあらずといへり。いさゝか世俗の能藝。作事に携さはらん輩は日夜さはりのみ侍て。むねのうちの工夫をろそかなるべく哉。ただ數寄と道心と閑人との三のみ大切の好士なるべく哉。西行上人をもろゝの明聖に越てふか説々の上手。例の人丸の再

誕とのみ勅定ありしも。たとへば世俗の凡情をはなれたるむねのうちを仰侍るなるべし。此道は先達知識にあひ侍らんと。おぼろげにはありがたく哉。其世に名をえたる作者大切な事なるべし。それさへ大悟得果の好士ありがたく哉。又我也。はれの座などに常にまじはり。年を重て歌なども數を盡してよみ。難題ども歌合などにいたるまで座を盡て後。人の階級はしられ侍るべし。連歌も世に名をえたる好士どもに大かたよりあひて。人の才智をも。をのが稽古の程をもみ合て後のこと成べし。むかし爲兼卿と爲世卿と歌道の訴陳侍しに。爲兼卿申給ひしとなん。我はせめて一万餘首仕侍り。爲世卿歌七百首には過べからず。それにてはいかでか歌の旨をば存知し侍らむ。淨弁法師は。卅万首だに詠じ侍るぞかしと申されしと也。げにも撰者などの身にては。うたて侍ることなるべし。此道は口の面白からんより外は。別の稽古修行あるべからず。座功をつみ。心こと葉をみがき侍らでは。柚木のでうのゝめうすべからず。稽古計にてはいたるべきにあらず。

清岩和尚云。我は爲秀卿。了俊の末葉に侍れども。歌はたゞ定家。慈鎮のむねのうちを直に尋うらやみ侍り。くだりはたたる家の。二條。冷泉をばしたひ侍らずと常にかたり給し。誠に向上直路なる哉。

後世にいかばかりの器用の人生れ侍るとも。いたらぬ先達にまみへ。よこしまなるをしへどもうけ侍らば。利性の人も下手の名を得べく哉。

いづれも諸道は。明師の下に入て。日夜庭訓を盡て。さかゝるにいたるならひなるに。連歌士は我が證得のみにてたちどころを更に尋侍らず。ほしきまゝに見へ侍ると也。されば聊に誤のみおほく侍るといへり。ちかき世には。歌の道はさながらすたれ侍れば。せめて此道をまことしくまなびあきらめて。歌の教戒の端をものこし。ますらおゑびすの心をやはらげ。末のよとをくなさけをもしらせ侍るべきに。ちかくは都ほとりも卒爾の道に成行て。いかなるあやしのしづや民の市ぐらなどにも。千句万句とて耳にみてるありさま也。一座なども一時半時にはて侍ることになれり。さながら此道の懷劫末法の時なる哉。いづれの道もくだり。世人なさけあさく。よこしまになり行侍ると也。

前にしるし給へる。前句を半付。又とりあはせのみにて心よくすといへる句ども如何。

周阿法師などの名句とてかたり侍句ども。

柴のとほそをたゞ秋風と云句に

今夜とはたのめぬ人の月にきて

周 阿

柴の句。風のたゞくにて侍らば。人はこでといひて心よるべきかのよし先人かたり侍し。

うくひすのかひ子のなかのほとゝきす

卯のはなかきにのこるあをむめ

同

鶯に青梅郭公に卯花のみにて。かひ子にまじはるなどの心。さしよらずといへり。青梅などゝいへることもえんならずと先人申。

ひとむら雨のさくる中空

富士見えて浪のとかなる沖津舟

梵 灯

中空に富士のみにて。句の心すがたひとへに前句にをくれ侍るとかたりし。

ひはらにのこる日こそかたふけ

さかぬより春も初世のおそ櫻

同

前句。日こそかたふけなどの心よらず哉。又こゝにて遅櫻も心をえずと也。此等の作者の句。いづれも此風躰をばはなれず。一句をいかばかり作りても。前句に一字も詠吟相通ぜずば。ただ木につくり。繪にて書たる類なるべしと先人かたり侍るまゝ注す。

中つ比の先達注侍に。此句は寄合の句。此句は心付の句などゝて。寄合の句ひとへに心はのき侍れども。くるしからぬ様子見

えたり。取置がたき事也。心付ならぬ句あるべからず。歌に親句。疎句などいへる。いづれも心付の上なる歟。上下のくさり繼ぎま。通ぜずといへる事あるべからず。又中古には。付合とて。大かた兼てより付るさまをさだめてきて。前句の心。てにをはの沙汰はなく。たゞ取合々々侍る計の句のみなる歟。

花とあるには梅。櫻。紅葉には鹿。時雨。鴈には古郷。田。橘に

むかし。郭公。老に昔。いにしへ。世に身を捨る。曉にねざめ。夕に入會の鐘。

かやうに大むね似たることを。前句の心の難儀を忘れて申侍る程に。満座同心なる句を自他の高名のごとく侍る歟。最初心の頃は。かやうの縁語ども大切の事なるや。さかゝに入はてゝは。前句の心のさま。てにはのさせ侍る程に。ゆへづきたる事どもゝ更にあらず哉。いかばかり堪能にも。おなじ心を案じ合侍るはほいなく哉。満座各あらぬ界と案じちがへたる作者。粉骨なる哉。

古人連歌少々。

かへしたる田を又かくすなり

あし引の山に臥猪の夜はきて

みやまのみちをひとりこそゆけ

雨の日はわか影たにも身にそはて

善 阿
救 濟

花ゆへ山のおくにきにけり
世を捨る人のあるにはともなはて
はるかに遠しいるあひのかね
同

捨し世のはなを誰かおしむらむ
良 阿
すけのをかさをかたふけにけり

良 阿
いやしきも心のあるは身をはちて
順 覺
うはきにきたる簑をこそまけ

良 阿
かりそめのまくらたになき旅ねして
良 阿
むまおとろきて人さはくなり

救 濟
はや川のよしにあたれるわたり舟
救 濟
同本歌ども此等の繼ぎま。上下のくさりにて覺悟あるべく哉。

世中をなにゝたとへん朝ほらけこき行舟のあとの白浪
秋萩の下葉うつろふ今よりや獨ある人のいねかてにする
難波えや蘆の葉しろく明る夜の霞の沖に鴈も鳴也
まこもかるみつのみまきの夕ま暮ねぬに目覺す郭公哉
春夜の夢の浮橋とたえて嶺にわかるゝ横雲の空
故郷にきゝし嵐のこゑもにす忘れぬ人をさよの中山
此類の歌あげてかぞふべからず。注すにいとまあらず。大かた疎句とて。上下あらぬさまに繼たる歌に秀逸はおほく侍ると也。親句とて上下したしくいひはてたるには。秀歌稀なるよし

定家卿くはしく注給へり。此等の古人の作者の句共は。迷かやうに心とりて感情あさからず侍る歟。かふばしき事に哉。大かたの好士は。我力を前として。たゞ舌の上に句をやすく申侍るを高名とのみ思ひ侍ると也。更に他人の幽玄秀逸の句をも。あやまちをも。ひとへに當座の翫のみにて。善惡をことはり。分別修行に及ばずと也。

當初勝定院殿。北野宮に御參籠之時。會前坊主宗明といへる者を召て。連歌の一坐の時刻いか計にては侍るよろしきと御尋ありし御返事に。たゞ一時よきほどにて侍るよし申せし程に。其御代にはひとへに。さにおぼしめしめて。ひるつかたなどまで侍る會をば。今日は何とて遅くはてぬるぞとたびたび御尋ありしこと侍しと也。かやうにあさましき好士共。よこしまに申なし侍るゆへに。おのづから卒爾あさはかの道になり行侍るにや。はれがましきえんなる席などは。臨句第三も一時には出がたく哉。半時一時にはてぬる會は。自地の心の分別の間あらばこそ晴がましきも侍らめ。かやうの好士にひかれて。閑居幽栖の釋門邊の會共も。在々所々偏に聊爾のことになりて。日中已前七八百韻申侍ると也。淺ましくつたなき事にや。たましく世俗をはなれ侍るに。學文法文などこそ懶とも。せめて此道などにも心をのどめ。艶にして無常をもすゝ

め。一粒の涙をもおこし。物の哀ことはりをもしるべきに。あははしくふためきて。もてあそびては更にせんなき事歟。歌にも紙燭一寸の中にて。一首など詠ずる事もはべれども。それは初學の時にさまじく稽古の頃。早卒の會などの用心にたびなどする遊なるべし。連歌も初心の比色々稽古の時は。早會などをも時々は興行し。點などもよろしきにや。さかゝり入ては。いかばかりものどやかに物ごとと哀ふかく。沈思を事とし。道をたかくする肝要なるべしと也。むかし牧童竹馬かやうに用心とも尋侍しに。さゞめごと二冊に。すぢごとみなき鹿言を粗しるし侍り。くはしく申はべらば。たゞくりごとゝもなるべく哉。

老のすさみ

宗 祇

予既老の波むそちにかゝりて耳したがふことはりもなく。いたづらに花の春月の秋ををくり。朝の霜夕の風をまぢわびて。すゑばにやどる露のかざりとをくともいま幾程か侍らん。空しく當來のつとめを思はずして此世の道に執をとむること。いかゞはせんとなげきあまりては。よしのゝ川のよしや世中とおもひかへし。鳴のけねがきかきつめつゝ。一冊となして昔今のことはをあらはせり。これ偏によはひの末のなぐさめなれば。なづけて老のすさみとやいふべからむ。

凡連歌は當初よりつたはりて。世々の好士いろにふけり。思ひをのぶることわざとして。其道今にたゆることなし。しかはあれど人の心をたねとすることはりなれば。おり／＼時々にしたがひて。こゝろざしのひとつはおなじけれど。思ひ入所の風情はさま／＼也。そのうつりかはるおもむき。いかにとおもひ侍るに。いたりてあがれる世の事はあつめをくもの侍らねば。其心あらはしがたくや。それより下つた。後普光園院殿良基の御世に救済といひしもの侍り。それなん上手の聞え侍りき。かの句の中に。

まことに月のかけはあるかは

猿さけふ岩ほかくれの秋の水

是は猿の月をとるといふことより思ひより侍れば。めづらしきことには侍らぬを。此前句の異風にして大事に侍るを。詞にはこまやかにとりあはずして。おほやうにいひなして心よく付侍り。たとへば深山幽谷などの。巖そばだち水すさまじきところ。秋の月すみわたたりたるころ。あはれにうちなきたる猿の聲をきゝて。月をとらんとするにやとおもふ心うかび侍れば。まことに月の影はあるやとうたがふ心侍るなり。前に付のみならず。一句更に凡慮をよびがたくや侍らん。

心のやみにさのみ迷ふな

月のなのかつらの川のうかひ舟

此句は誰も心得ることに侍り。定家卿の歌に。久方の中なる河のうかひ船いかにちぎりてやみをまつらんと云其心也。久かたの中なる河とは。桂は月中にある物なれば。桂川といはんため也。此歌伊勢が。久方の中におひたる里なればといふをとれり。中におひたるは生の字也。

我こゝろたにかくれかそなき

かり人の入野の雉子ねを鳴て

我心たにと云大事に侍り。尤作者の家すべきところは。たゞこなるべし。侍る心は。狩人の入野には鳥のかくれ所もなかる

べきを。せめてねになかずばししの隠家ともなるべきを。はかなう鳴て人にしらるゝことを。我心にだにかくれがはなかりけるといへる也。これは傍人のおもふ所也。

つみのむくひはさもあらはあれ

月のこるかりはの雪の朝ほらけ

これはとまり山などの朝の心にや。興をつくしたるおりふしのさま。つみのむくひも忘れぬべし。これは又我狩人になりて付たる句也。

うき世の夢のかよはすも哉

かくれかに今はをはりをまつ風

此松の風は只待ばかりこそ用にはべれ。風はいかゞといふあり。其心を得たる故也。世中をいとひはてゝ山深き跡をしめ。殘生のかぎりをいつかとおもふ比。松風のあはれなる曉などと心にしめたるさま。たぐひなくや。前による所は。かく思ひとぢめたる身にも。うき世の夢や猶かよはんとなげく心也。是隠者の用心也。

月さむしとふらひ來ます人も哉

野寺のかねのとをき秋の夜

是は野寺訪し僧歸帶レ月と云詩の詞をとりて付侍るなり。詩の心には相違せり。とぶらふと云詞。さし出たる字なれば。すて

がたくて此詩をとれり。心ははるかなる野寺のかねの物さびしき秋の夜。月は冷しくさよふけたらんころ。とぶらひきぬる人もがなと思ふ心哀深くや。詩歌ともに其心をとれる事もあり。又詞ばかりをとりて縁にして。心を別に付ることも侍る也。歌に本歌をとる。そのおなじ心なるべし。又頼阿の句に。

花と月とをいくほとか見む

朝顔のかきほの露の明ほのに

明ほのにとまるとる所。連歌にはよろしからずや。其身歌よみなればかくいへる也。但かやうのとまりのたぐひ。秋風に夕暮に有明に故郷に。山里になど中古の人はことの外にあしゝと申ける也。當時は其句のさまによりてかならず嫌事は侍らぬ也。さて付やうはあらはなり。たぐいく程かみんと云所をよく思入たるこゝろ肝心也。仍是をかきいだせり。

故郷となりにし後人もすみて

萩ふく風に衣うつなり

こゝろは。故郷のいたふあればてゝ。誰のこるべきさまにもみえ侍らぬを。あるかなきかに住人ありて。あはれなる萩の風に衣うちたる心。比類なくや。又中古の句に。

弓矢の外も又文のみち

桑よもきしける陰をかき分て

此付やうは。桑の弓蓬の矢といふ事をとり。文にかき分てと付侍り。寄合ばかりにて心更したしからず。是を當時付はべらば。世は人のこゝろにみだれおさまりてなど付べし。一句も子細なくや。又武士も心におもへ和歌などや侍らん。一句はよろしからずとて前にはよく付侍べきにや。

しはしこそ人にましはれかくや姫

あへの市路はふしの川かみ

此付やうは。かくや姫あべの市にたちたりとみゆ。竹姫を市女になし侍らん事いたはしくや。是を當時ならば。月のなかばにうつる秋夜などやしかるべく侍らん。一句は。秋の夜うつり來て月の中ばになるこゝろなり。前による時は。竹姫もとは月宮の天人なるが。しばし下界にくだりて探竹のおきなにやしなはれしかども。つゐには八月十五夜。月宮にかへりし事にやなり侍らん。

かしこき人そきみにつかふる

近江なる堅田の浦に釣たれて

賢人に釣を付るは大公望などの事也。此付やうは君にあふみと付たり。源氏物語に。近江の君とてあやしの姫君ありけり。この句を思ふに。大公望が堅田の浦にすみて。近江の君と云女につかへたるにて社侍れ。以外つたなくや侍らん。此前句には。お

もしろからずとも。なにか付にくゝは侍らん。但輪廻などはいかゞ侍るべからん。此比つかうまつらば。おろかにて世にいでぬ身をいかゞせんなどや侍らん。是は自然の事なるべし。かやうのことをかき付侍れば。中古をあしと思ふやうに侍れども。初心の人などの爲に書置事なれば。時代のすがたを申侍るばかり也。されば基俊悦目。八雲御抄。京極黃門抄どもにも。歌の心詞は鳥のつばさのごとく。あひかけて叶まじきよし侍る也。心詞かなはずば。先心を本とせよと侍るにや。連歌の付やうおなじかるべし。前によく付て一句のさましかるべきを至極と申べし。若一句はよろしくとも。前につかざらんはいたづらごとなるべし。是則心を本とすべきの儀なり。但二ながらたよりなからん人は先達の句のよろしきをみて其心をとびあきらめば。をのづから心づき侍りぬべし。當世の好士の句どもの中に。

うらかおもてか衣ともなし

しのゝめのあしたの山のうすかすみ

宗 砌

此前句は。そのことはり聞えずして付侍らんこと大事なるを。うす霞といへること。先こゝろときあてがひなるべし。さりながらうす霞といふばかりにては餘情付がたし。しのゝめの朝といひながして。まだほのかなる明ぼのゝ山に。それかあらぬかとおぼゆるばかり。うすき霞のうちなびきたるさま。衣

ともなしといへるに能叶侍る也。

我故郷と鳥そさえつる

誰植し木末の野へにかすむらん

心 敬

故郷はみなあれはて。うへし木末ばかり。うち霞たる野べに。其世のひとのおもかげもなく。とりのみ馴し木末にやどるをみて。我故郷と鳥ぞさえづると心を入れて付侍り。其さま面白く又あはれにや。

すたれのうちの衣の音なひ

軒ちかき花の匂ひに月更て

智 蕙

衣の音なひといへる所。尤付にくかるべし。又すてがたきところ也。此句につけんことは。たゞ音なひ肝用なり。軒ちかき月に花うちかほりたらん折ふし。みすのうちの音なひ。まことにさぞと覚え。一句もえんに面白く侍るにや。

おもはぬいろをこゝろにそみる

夕まくれ友のまれなる花にきて

專 順

おもはぬいろと云。色の字をえんにして付る句也。心はひろの程はさまんに花みる人のおほかりしが。みなかへりはてて。しづかなる夕暮の木の本にたゞひとりきてうちながむれば。いと花の色も身にしみて物あはれなる時。いそがはしく花みてかへりし人は。花をおもふ心の色はなきにやと我心に見

たるさまなり。心にみるとは心に思ふ儀なり。有心にや侍らん。

おく山すみも春そしらるゝ

鳥のなく朝戸あくれは花咲て

賢 盛

是は別にしるしあらはすべき事も侍らず。但とりのなく朝戸あくればと云詞に。おく山ずみのさまよく付侍る也。かやうなる所を見しる事。みちの本意なるべし。いかめしげなるをのみ皆人よしと思なり。口惜こそ。

とはれぬほとのおく山もかな

花を風いつくにさかはふかさらん

同

是はいづくにて風をも世をも恨まじ。よしのゝおくも花はちりけりの心也。とはれぬ程とは。風にとはれぬほどの心也。

いかにいひてかのちはかこたん

とはぬをも見れは忘れ花ちりて

專 順

これは我身山里に住て。いつとなく人もとへかしなどおもふに。花さきぬれば心なぐさむまゝに。とふべき人をもわすれきぬるに。花うちちりてものさびしき時。我心のをこたりをおもひかへて心なり。花のとき人を忘れずば。こぬ人をうらむる故も侍るべきに。我忘れれば。のちにかこたんことのはなき心也。おもふとも別し人はかへらめや

夕くれふりしきくらちる山

心 敬

別し人とは花より歸りし人也。それは又思ふとも。よも歸こじと云心也。いかんとなれば花はちりはて。山里の夕ぐれのさびしさいふばかりなければ。我心より人を察する儀なり。

なれにし人も夢の世中

山さくらけふの青葉をひとりみて

能 阿

きのふまではさしもさかりなりし花の行衛なく散はて。山深き木末の青葉計をうち詠めゐたる時。はなになれきたりし人も夢の世中ぞと觀じたる心也。心あくまで有心にしかも詞づかひ常のことにあらず。かやうの句ことに吟味すべし。

生れぬ先を誰かしるらん

またきより鶯の巢山を目にかけて

專 順

たのむこゝろそゆきてむまるゝ

はし鶯の巢山のことり又かけて

能 阿

此二句は。たゞ取合の利根なるばかりなり。かやうのこと又大切事也。心は明也。

春をかへすは日かすなりけり

くれぬへき彌生のことしくはゝりて

行 助

前の春をかへすは。春をやることなり。付心は。行春を又こなたへ返す心也。これもこゝろとくして一興の風骨也。

さくもめつらしこのみやことり

ほとゝきす今朝は音羽の山越て 心 敬

都どりを都のとりと云やうにとりなせり。心は。音羽山を今朝しも郭公のこえくるを此都鳥ぞといへるなり。これも取合珍重也。しかも古今に。をとは山けさこえくれは郭公木末はるかにいまだなくやると云心より句をまうけたるさま。面白くや。

しくれのあとの露そみにしむ

虫のなく野への遠山いろ付て

同

前の句の時雨のあとを。とを山の時雨の名残に。野べの露の身にしむ心につけなせり。仍むしのなく野べのとを山色づきてと侍る也。よりやうめづらしく。一句又大かたの作者のおもふ所にあらず。しかも又眼前のけしき也。かやうにあたらしきさまことのよきには侍るべからん。

しはし時雨の雲ぞ晴たる

露さむき末野の山に雪ふりて

專 順

此句のさまも前の遠山の句に相似て。付やう一句上手の物と見え侍る也。句の勝劣いづれにか侍らん。

宇治のわたりの山の端の月

曉の雲にはつかり聲はして

同

宇治山の月に曉の雲はつねの事也。鷹はうちにいかゞとおもふ人侍るべく哉。源氏物語に。此世をかりといひしらすらんな

どよめり。但鷹を宇治に付るにはあらず。人のおもはん所を申侍る也。前句無文にしてしかも餘情あるさまなれば。とりより大事に侍るに。寄合をは大かたにあひしらひてすがたを本として付侍る也。されば鷹がねなどをもおもひよせ侍るなり。無文なる句に付る事。連歌の一大事也。

ひとりのみおきゐる床に月をみて

よそのきぬたにさむき衣手

智 藎

付やうに別なる心侍らず。一句すこしつねのものがら。かはりて。佗人のすみ家などのさまもあらはれてあはれにや侍らん。當時少々此道に心をかくる者。あらぬさまのことをこのみて。心なをく詞えんなる所をはしらず。さやうのたぐひは。初心にはおとりぬべくぞ侍らん。

我心誰にかたらん秋の空

おきにゆふ風雲にかりかね

心 敬

是は。前句の誰にかたらんと云心は。當意の言語道斷の上を付いだす也。句のさまも珍重にして付やう又拔群也。かやうの句のたぐひは。しげくしては聞さめするもの也。作者工夫すべくこそ。

近きそのふにうつ木さく比

郭公聲も袖とふ月いてゝ

專 順

此句前による心は。さくころと云心に付侍る也。聲も袖とふと云詞。月に映ずるによつて其理面白き也。月なくばことはりたらざるべし。

うふる山田の五月雨のころ

一むらのさか井のあふち花ちりて

賢 盛

是も頃と云ことばにとりよりて。その折ふしのなりをしいでたる也。此一句まことに所がらのさま。みるやうにて。其ぬしの粉骨とみえ侍るなり。

野さとの秋のくれそさひしき

招ともすゝきか元は誰かこむ

宗 砌

此前句。常の者は大事とおもふ事なし。上手はこれ難句とせり。其故は。何事をつけても子細なく付侍るあひだ。下手はやすく思ひ上手は大事とす。たとへば。五尺二寸の的に向て。非射手は。此大なる的をいかでかはづさんと思ふ心はかりにて。矢をはなつ故にはづるゝなり。よき射手は。かならず矢所侍るべき也。そのごとく。此句は下手のあてかふ所にあらず。まねくとも誰かこんと云に。いたう野里のさびしき心侍るなり。一句も又珍くや。これにて前句の心をぞ知すべき也。

かりになれこしおもかけそうき

世中を秋の野山のおくの庵

智 藎

かりになれにしとは世中の事也。世中のはかなきをおもひとりてすてぬれば。すみこしあひだは。たゞかりになれたるものなり。おも影ぞうきとは。すてゝのちも秋の野山のおくなれば。ものさびしき比。うき世のおもかげの残ぬるをいとふ所。心あるさまにや。一句又感ふかく侍る也。くれぐすがたをよくおもふべき也。

かへりみなせの宿の古道

山本の瀧もあらはに木はかれて

能 阿

みなせは。景おもしろき所なれば。立いでし跡をかへり見るに。落葉しはてゝやどのかよひも古みちとなりて。枯木の中に瀧のすさまじくおちたるさま。さる躰にや侍らん。一句も更になまみなく。力入て聞え侍る也。

風や枯野のいろに吹らむ

冬されは蘆の花ちるとをひかた

智 蘆

此付やうは。枯野のいろにと云に。あしをかれのやうにとりなしたる也。遠干かたの水もなく。平くとしたる上に。あしの花のうちちりたらんは。誠に枯ののさまにうちみる所似たれば。かく付侍る也。當時の上手の作意。是にて見侍べし。

夕の雨の竹をうつをと

いつの間にあられちる夜の深ぬらん

賢 盛

軒ちかき吳竹に夕の雨のふりぬるが。ほどもなく夜ふけて。此雨あられになりて。竹のはにあらくくとをとするを聞て。夕の雨とおもへば。あられが竹をうちけるよとおどろきて。いつのまに夜もふけるにやなど思ふ心。取合おもしろくや。

柚木とる山はあまたに分入て

みねにすみやくしがらきの里

行 助

此里は。柚をも炭をもよみたる所也。あまたにいる山がつのこと業みるやう也。一句のさま所の眺望にて見所侍るなり。

あはれにも眞柴おり焼夕けふり

炭うる市のかへるさのやま

心 敬

あさゆふくるしみて。やきいだしたる炭をば市にのみうりて。我庵には。眞柴の煙をのみたつることわざのあはれなるさまなり。かやう心は。この作者ことにおもふ所也。

うみのうへなる遠山のかけ

朝もよひきのふ見ざりし雪降て

專 順

前海をも山をも紀の海紀の遠山にしなせり。あさもよひきとつゞくる事は。紀伊國の枕詞なり。萬葉よりいづる所也。されば朝もよひきのふ見ざりし雪降てといへば。海も遠山も付て。しかも遠望の心になり侍る也。一句の時は。只きのふの枕詞也。是又上手の粉骨也。

君かあたりはかすますもかな

月もうししのひ通ひの夜はの空

宗 砌

月もうしとはさだかなる光を。しのぶ夜にうらむる心ならば。かすむをたよりとこそおもふべきに。かすますも哉といへるに相違するやう也。但道すがらは人めをおもふ故に。霞をたよりとすれど。君があたりになりては。かすますも哉といへる。其心深きにや侍らん。あたりはと云詞をとがめて。付いだせる也。

まれなる中は新まくらかも

人をみし夢さへ花に覺やらて

智 蕙

此付やうは。尤其心得がたしと世人いへる也。わづかに愚意をやりに侍るに。まれなる中とは。花と我とのあひだ也。花は年にまれにして。たまさかにあひみるが。あかぬ心はたゞ夢の心ちするに。人をあひ見しはかなさの。その夢も忘れがたければ。只今まれなるはなにもひいでたる所を。花にさめやらずと云なり。仍此花の上を新枕かもとはいへる也。人と花とおなじやうにいへるならひなり。古今に。おもへどもかれぬる人をいかいせんあかずちりぬる花とこそみめ。此歌は人を本にして花をよせたり。いまの句は。此歌のうらなるべし。

せめてはよそのかへさにもとへ

つれなきものはいのちなりけり

此二句のうちにも。せめてはと云文字と物はいふ字。眼の付所也。これをふかくおもはずば。我句大やうにて正理にあたる事あるべからず。此兩句に。

二みちのうらみもたえて戀しきに

心 敬

おく山の松のはをすき苔をきて

宗 砌

是にてより所の切なることはみえ侍るべき也。松のはをすくとは。食する事也。苔をきるは衣のこと也。如レ此にてもありふるいのち。よくつれなき物はの字にあたり侍るなり。四季の句は。おほかたのさまよく侍れば。風情にゆづりて。こまかになきも。中々ゆうにきこゆるなり。それも事たがひ侍らんは。くちおしかるべき也。戀。述懷。懷舊などの句は。いかにも。てにをはまで。よく思ひわきまへて案すべきにや。

むかしの夢のおも影もうし

あしたには雲ある山の旅まくら

宗 砌

是は。巫山の神女。夢に見えて。朝には雲となり。夕には雨となるといひし事を。たゞいま旅ねしたるあしたの山に。雲のけしきも物かなしき時。かの神女の夢の面影さへうしと云心也。誰もしることに侍れども。朝にはのにはと云文字により。五文字よろしからず。されど彼古事をおもふ故にのする所也。たゞ

の句ならばあしかるべし。歌道は只詞をつかふ事肝心なり。仍此のよく聞え侍れど書付侍るなり。

たれにちきりをむすふともなし

里の名もしらぬ野中の草まくら

同

これは。かくれたる所なん侍らず。されども作者の心え。辛勞したる句とみえ侍る也。其謂は。まづ我故郷をかぎりなふとをさかり來たる心侍る也。たとひとをさかる所也とも。しら河の山しのぶの里などやうのわたりならば。心のある人もやあらんとたのむすがも侍べし。これは。はるかなる野山の中に名をだにしらぬ里の旅ねなれば。つくづくとおもひわびて。誰にちきりをむすぶ我身ぞとおもふ心也。これをおほかたに見なすたぐひも侍べければ。かきいで侍る也。されば同前句。おなじ付句なりとも。上手の作意と下手の作意とは。天地のちがひ侍るべき也。くれぐれ上手のやすくとしたる句に重寶おほかるべし。詠歌一舩にも。いたりてよき歌おもしろからずと侍るにや。

故郷は野にふく風のやとりにて

旅ねの夢はやすくさめけり

同

心ばかりふしの枕ながら。夢の中にはたゞ更に夢としらず。故郷とのみ思ふに。荒野のはげしき嵐に吹おどろかされたる端

的。いままで故郷とおもひしは。只野に吹風のやどり也けりとはら／＼とうちさめたる所。さらに平人の思ふ所にあらず。一句はことの外やすき句なれども。入所の妙なるにより珍重に聞ゆる也。

さめやすき夢の面影中々に

かりねくやしき夜の山風

專 順

中々にかりねくやしきとつけたる所珍重なり。一句又其理おもしろくて上手の物とみえ侍り。古歌に。あづまぢのさやの中山なか／＼にと云詞も出合て。猶面白く侍る也。

かなしやこひし夢にたにみす

旅け詠百里いかにあれぬらん

宗 砌

前句もみ過して。更おほかたの事にて付がたく侍るを。かやうに付侍る也。大かたの旅もかなしきに。しかも秋の空にとりあつめ。心づくしなるうへに故郷いかにあれぬらんとおもふに。夢にだにみざらん事。かなしくも戀しくも侍るべき也。

おもふもとをしあとの故郷

旅まくら草と浪とにへたて來て

能 阿

おもふも遠しと云詞。又付べき所也。しかるを浪をしき草を結びつゝ夜をかさねて。所々うつり行きま。あはれ深きにや。此一句のなみのまぐらは。うはさばかりなれば子細なし。海邊

の旅ねに磯とも船ともいはずして。浪枕は嫌事也。歌にはかはること侍り。

太刀さげはきて休む旅人

ふるさとの夢やつかのま一ねふり

專 順

是は。つくべき所おほくて。いづれもすてがたきをとりすくめて。しかも一句の詞づかひ及べき所にあらず。

池になくひとりのおしを身に知りて

旅ねかなしき冬の山さと

心 敬

前による心は。よく心得られ侍るべし。池と云を山里と付てあひしらふ事。ぬしの粉骨也。定家卿歌にも侍るにや。但作者は歌なくとも付侍るべし。心のいたる所によれば也。

手をあはするはうらかおもてか

左右わくることりのあらそひに

賢 盛

此前句。おかしなどしたる心にやとみれば。又の反覆の心もあり。まことの難句なり。相撲は尤なり。但うらかおもてか大事なるを左右と付侍るにや。うらは右。おもては左なるべき也。ことりつかひとは。禁中にて七月相撲の侍るなり。諸國より奉る物也。左右にわかちてとらするなり。ひさご花とて。夕顔のはなを。髪にさしてとることなり。

袖さへぬるゝみちしはの露

いにしへの宮の内野のはらをみて

宗 砌

内野には。芝生をよめり。内野は昔の大内の舊跡なり。さしもの宮禁の跡そのなごりもなく。道の芝生のみしげりたるをみん心。まことに袖もうるほふべきことはり也。予つねにこの野を通ふ時。毎度にこの句あはれに侍しかば。今ふとおもひ出て書加へ侍也。

山かけめくる賀茂の川水

かさゝきの此橋もとの木におりて

智 蓮

鶴には。木をめぐると云事あり。かもには。橋もといはもととて社二あり。岩もとは業平。橋もとは實方なり。みたらしのきはに侍る社也。付やうは。此はしもとの木に。鷹のおりゐなどして。山かけをめぐるさま。當社のなりによく似あひ侍る也。

むま屋のおさを髪しろくなる

春秋はほとなき夢の一夜にて

專 順

是は。驪長勿驚時變改。一榮一落是春秋といへる詩をとれり。かみしろくなるといへるに夢の一夜と付侍る也。この詩は。聖廟の御作なれば。一夜白髪の心もなにとなく其便侍るにや。我身に似たる老のあはれさ

色みえぬころもはてはよはりきて

心 敬

前句の老は。他人の老也。付る所の我身に似たるとは。心の事

なり。身と心との二也。すかたこそおとろふるもあらはにみゆることに侍れ。心は色みえぬ物なれども。それも老はてぬれば。身のごとくよはるよしに付なせり。

山かけも心にあさく身を捨て

おもへはうきよいかて住けん

行 助

心は。山のかげをさへ猶淺くおもふばかりに。身を捨ていとどふかうおもひ入。我心にて思へば。うき世にいかですみけん。と猶こしかたをかへりみ思ふ心也。一句も心深くて。付る所又甚深也。

みねこすかせに木葉ちるをと

柴の戸をとほ何とかこたへまし

專 順

山住などを人のとふことの葉は。このすまゐいかなる事か侍るなどいふ事なれば。それには。我なにとかこたへんと云心也。山里の哀をば。嶺こす風と木葉のをとゝがこたへぬればなり。我こたへんは重説なるべき心なり。此付様。誰かかく思ひより侍らん。此作者の句は。おもてにやすらかなるやうにて。甚深のことはりおほきなり。さて此一句は隠遁して。心をすましむたるに。人とはいいかじせんと思ふ心也。

月れは雪ふり月そのこれる

明にけりきのふの夢は跡もなし

宗 砌

雪には跡もなし。月には明ぬれば。みればには夢をとりよせ侍り。これはみなそのえんあることばなり。そうじての心は。此雪は初雪とみえ侍り。昨日まで見ぬ初雪に月残りて。いひしらぬ山のはなどに向ひてあらたにみれば。よろづ思ひのこす事なき心也。昨日の夢とは一切の事也。なに事も跡なき昨日の夢ぞといふは。たゞいまのあはれより思ひえたる心也。源氏の朝顔の巻に。冬の夜の月に雪の光あひたる。此世のほかまでもおもひやらるゝなど侍るにや。げに心あらんみるめには。其一事ばかりに。心とまるまじくや。

風もめにみぬ山のおまひこ

物ことにたゝありなしをかたちにて

心 敬

風もあまびこもあるものにはあれど。又空跡なり。さればありなし則の形也。物ごとにとは。此二にて一切の空假をさとする心也。うちこし。さだめて。よぶといふか。こたふると云かに付侍つらん。尤難儀たるべきを。如し此付いづる事。初變の事にや。

親のいさめのまことをそしる

夢ゆへやすまのうらみを忘るらん

同

心にはたえたる嶺も住つへし

おもひあかしの夜なくの月

能 阿

此二句。いづれも源氏の物語にて付侍る也。前は光源氏すまのうつろひの時。故院夢にみえ給て。此うらをとくはなれ給へとおほせられしゆへに。明石にうつり。ほどなく都へかへり給ひし事を。親のいさめの誠をしるといふにおもひよれる也。是は源氏の上をいへるなるべし。次の句は。明石の入道の世をのがれてたえたる嶺にこもりし事はり。とりより侍れど。その上さばかりにて我身の上にて付侍るなり。心は。明石の月の哀深きを夜なよな見れば。はかなき此世をおもひとる故に。いかなるたえたる嶺にも住つべしと付る也。先の句のよりやうよりは。心ことの外まさりて侍るなり。源氏の物語は。かやうにとりたきもの也。但難句などを。源氏にてやるときは。物語の上計にてもしかるべき事侍りぬべし。

けふりそのほるおくのすみかま
けたものゝかける雲ゐは遠き代に

賢 盛

是は。すみに獸の形をやく事侍り。其をたよりとして付る也。一句は。仙薬を雞犬のなめて雲にのぼりし事をいふ也。付る心は。獸のぼりし雲ゐは遠きよにて。すみのけぶりのみ登といへるなり。

そのかすく／＼のしるき歌人
玉しきのあらはれしりは明はてゝ

同

これは。踏歌心なり。踏歌は正月十四日。十六日也。十四日は男踏歌。十六日は女踏歌也。これは男踏歌の心也。踏歌のおこりは。昔春の夜月おもしろき比。京城の遊子うたをうたひ興をつくして。こゝかしこをありきあそびける也。其後禁中院宮にて殿上人歌舞を奏し侍る也。あらはしりとは踏歌を云也。歌頭といふは。うたひの聲を發する人也。其外うたふ人数多き故に。其心をととりて付侍る也。

みはしのもとにももの申人

君のめす歌をはるかに聞えあけ

同

心は。大和物語に。躬恒を御階のもとに召て。月を弓張といふはいかにとおほせ侍りし時。照月を弓はりとしもいふことは山端さしていれば也けりと云心にて付侍るなり。一句は。いづれの世にも。歌をめす事侍ればなり。聞えあげとは。詠進する事也。しかも聞えあげと云詞は。忠嶺長歌に。身はしもながら。ことのはを。天津空まで聞えあげと云詞をととりて。句を作るなり。かやうの事尤粉骨也。連歌は才覺なくては叶べからず。才智あるに付ても。付る所は只心のすぢめ肝心也。此次に此作者の句の内に。こひねがふべきすがたをかき出侍るべし。但人の所好によるべければ。他の爲には侍らず。只拙者が心に思ふ所のすがたなり。

よる船ちかき春の山もと

青柳のあさけのけふり郷(T_郷)に晴て

夜な／＼ねはや花のさくかけ

梅かゝの霞める月を袖にみて

あけゆく嶺にかすむしら雲

瀧なみの夜の春雨ふり晴て

かすかに残る春の山みち

花やしる去年もわれこそ尋つれ

いにしへのよし野の宮をきてとへは

老木のはなに山風そふく

おく猶かすむ木かくれの道

ちりくるをしるへにゆけは花もなし

こゝろにちきる行末のはる

身のあらはとはかり花の散をみて

春はいづくにかへりゆくらむ

天津かり都の花をよそに見て

むめかゝきよき雪の下水

月になく谷の鶯けさいてゝ

春のあらしの松にふく聲

ゆふくれの霞の月は夜さえて

行 助

能 阿

賢 盛

専 順

智 蓮

同

心 敬

専 順

能 阿

宗 砌

なかはすきゆく春のかなしき

あさな／＼われてかすめる空の月

庭そ草木の中にあれぬる

山科や花の古色はるもうし

手まくらわたるまとの山風

はるの夜や夢路も花に匂ふらむ

ことの葉になにはのことかのこらまし

花うくひすのはるの明ほの

いてゝ戸ほそに月をみるくれ

人かへる山路しつけき花の本

またともすれは物そかなしき

あともなき苔路の花を獨見て

うきこゝろたかにしへをのこすらん

はなちるさとは世々のまつ風

夢うつゝともわかぬ明ほの

月にちる花は此よのものならて

ふるき門さす春のくれかた

よもきふに松風吹て花もなし

花もたか春をこふとてしほるらん

彌生をあめのゆふくれの山

心 敬

宗 砌

同

行 助

心 敬

智 蓮

宗 砌

心 敬

智 蓮

宗 砌

いつをまことのいろとたのまむ
すみそめにそめはやけふの衣かへ

聞そつたふる神のそのかみ

ほとゝきすほのかたらひし山にねて

りすへふりたてかへるかり人

さをしかの入野のともし消る夜に

うへてそ竹のかけにすみぬる

水あをき小川のさなへのふしみ山

住吉はたゝこの浦のなのみにて

なかみの濱のみしか夜の月

人のいのちもしるき灯

ありとみる程も夏むし我なれや

小船さし捨かちよりそゆく

今朝かへる夜はの里人鶴をすへて

すゝしき風の秋をひく袖

夕立のなこりの雲に月晴て

のほるたうけにあせをほす人

夏衣うすゐの山路こえやらて

年をへは山さへたかくなりやせん

けぬかうへなるふしのはつ雪

専 順

心 敬

宗 砌

専 順

同

同

宗 砌

能 阿

心 敬

賢 盛

またこぬくれの秋のはつ風
したはちる柳や鴈をさそふらん

おなしをしへをあまたにそきく

秋と吹萩のうは風山おろし

野へのさくらの紅葉もそちる

山松のもとあらのか萩風吹て

芝生かくれの秋のさは水

夕間くれきりふる月に鴨なきて

こゝろほそきは老かみの秋

夜なノゝの空にかけ行月をみて

ねやの戸さむく通ふ松風

琴のねに月の色そふ夜は深て

身をすつる心世になとなかるらん

よはひの末の秋のゆふくれ

昔たにうかりし人のうつろひて

古き都のあきの夕くれ

庭を枯野のまつむしそ鳴

月さへやみし世の友を忍ふらむ

名もしらぬ小草花さく川へ哉

芝生かくれの秋の澤水

心 敬

同

宗 砌

専 順

能 阿

行 助

専 順

心 敬

宗 砌

心 敬

むかへは月に人そまたるゝ

夕露に花さく草の戸をさゝて

いかなるかたになひきはつらむ

むさしのや萱かすへ吹秋の風

老のあはれを月もとへかし

風つゝき檜原の山の秋の庵

をかのかり田は人もかけせず

山もとの月に庵なく夜は深て

こしかたを思ふも遠き山越て

あまのとわたるはつかりの聲

眞砂のうへをはらふ秋風

月さむきよるの鹽干に鴈おちて

こゝろもあれな秋の山かつ

墨染の夕もしらすうつ衣

鴈はまた別もやらず鳴聲に

山端くれは月かたふきぬ

軒のしつくや松かねの露

葛のはにむら雨かゝる庵ふりて

まさきちりくる嶺の秋風

小鹿なく外山のおくやしくるらむ

賢盛

心敬

賢盛

能阿

智菫

行助

專順

宗砌

智菫

專順

をともあられのあらし木枯

瀧津せの落はかうへに玉こえて

みやこさそなと思ふ山里

ならのはの落る霜夜にね覺して

そともの山の木葉ちるころ

しまかれの野への故郷月さえて

はけしくをくるそての追風

冬枯の山本いつるあま小ふね

あを葉もみえぬ霜の松かけ

山水の月の夜床に鴨なきて

いくへとよちの竹の下みち

にしにまた月ある雪の今朝晴て

みち絶てさまよふ山の陰深し

雪のうへなる嶺のむら雲

うしとていなかたも覺えず

木の本をたのむ雪野は道もなし

おもふほとをはたれかしらまし

さひしさは跡なき山の今朝の雪

いかてむかしをしのひかへさむ

くたる世の天津神樂の舞のそて

同

心敬

宗砌

智菫

宗砌

心敬

專順

心敬

專順

宗砌

なみたのしらぬ夕くれもなし
 忍ふるをもらす心よたれならむ
 さしていはぬそをしへなりける
 たつぬやと君か宿をやかくすらむ
 袖ほしあへすさくらちる陰
 花にこそ契し人のうつろひて
 あとなし事になれるあらまし
 かけこしは夕の雲を契りにて
 かはらしとのみあひ思ふ中
 うらみすよ神なる夜はの空たのめ
 こゝろほそくもなれる此くれ
 明るまでの身をたにしらす戀仵て
 たのめをきても何にかはせん
 いのちをも人をもしらぬきぬゝに
 なひくこゝろもうつろひやせむ
 たのまじよ世はさためなし人はうし
 あさ夕ふかき袖の海つら
 戀を山まつ夜のちりや成ぬらむ
 おもふこゝろそ空にうかるゝ
 からすなく霜夜の月にひとりねて

心 敬
 専 順
 行 助
 智 菫
 宗 砌
 同
 心 敬
 宗 砌
 能 阿
 心 敬

みるもかなしやわかれゆくかけ
 旅人のあさ河わたり袖ねれて
 くるしき物はこのよなりけり
 わたりする朝夕舟のつなてなわ
 こゝろもほすへきやとりとはゝや
 都よりさほのやまと路たとりきて
 おとす泪もやとやなからむ
 枕かるいな篠はら冬枯て
 旅立し故郷人をまつくれに
 山路は雲のかへるをそみる
 かたるも聞もおもひ出そなき
 いたつらに春秋くらすかた田舎
 きえずや浪のうへのあはしま
 まゆのことたなひく山は雲ゐにて
 せはきたもとをくたすあまの子
 大海の遠きしほひにあさりして
 あせたる池に雨おつるみゆ
 汀なる鷺のみの毛に風立て
 うきは日毎にまさる世中
 いつづきて岩ふみなれん吉野山

宗 砌
 専 順
 同
 心 敬
 宗 砌
 智 菫
 賢 盛
 智 菫
 宗 砌
 能 阿
 能 阿

こゝろのかよふ夕にそなる

たち出てみやこ忘ぬ嶺の庵

つまとふ鹿の聲そふけゆく

高砂や松に尾上の風おちて

偽の後はまことの道なれや

うき世はなるゝけふの山こえ

いかなる世にかあはん行末

うき身をも思ひなすてそまてしはし

あれはいのちとおもふ行末

おしみつる身をなき物と捨ててゝ

人もね覺はかゝるものかは

老てこそあはれをも知れいとふなよ

たゝとにかくにさはく世中

しら浪のからくも老はなからへて

向へは月になみた落けり

老さりし秋はたか世に成ぬらむ

たのめし末を月もしるらん

山のははうらみあるよの詠にて

うつゝもおなし夢の面影

身もいつか昔かたりの世々の友

心 敬

同

専 順

宗 砌

同

智 蘊

心 敬

能 阿

行 助

専 順

あれたる庭の秋の面かけ

あるもうしまして消なん身の行衛

柴戸あけて詠やる空

いつかさて我みの末の夕けふり

ちきりも夢となるそ悲しき

なきあとに行末たのむ文をみて

道ほのかなる草むらのかけ

古つかも昨日けふかの跡とひて

むかへは月そこゝろをもしる

西をのみねかふ庵の夜半の秋

なれてはなれん心ともせず

なに事かむつましからん六の道

山かけたとる嵯峨のふる道

人かへるゆふへの寺にかねなりて

はつせにますはよきの神垣

まよひてや我世をあしく祈るらむ

身をすつる心はやすくなきものを

家をおもへはいさむものゝふ

みをおしまぬもたゝ人のため

國安くなるはいくさの力にて

同

賢 盛

心 敬

専 順

宗 砌

同

同

同

心 敬

専 順

いかにいひてか人をなひけん

みたれたる國をおさむる謀

同

前に注し侍る六十餘句は。つく所の志の切なるをかき集侍れば。其内秀逸。一興。漢朝の古事。和國の由緒等あひまじれり。此百句は只これをもりて。學者の連歌そんずまじきを撰侍る也。但此内にすがたことがらこけて初心の耳に遠きもあり。又詞心つよくして末學の目にをよばぬも侍べし。大略は長高。有心。幽玄に心たゞしく詞えんにして。ことあたらしく入ほがになきをあつめ侍る也。次此作者の句に。付やう心詞珍しくは侍りながらくらゐたからぬをかきくわへ侍るべし。

うらみし文に又そむかへる

若き世に學はぬ道はか もなし

心 敬

袖にあまるや我音羽河

せき入ておとす瀬も哉老のなみ

智 藎

ねぬ時なれや曉の秋

わきてきけ今夜はかのえさるの聲

宗 砌

おもひやるにもうきは後の世

おろかなる親にたに子はまさらめや

專 順

むくひおそろしうくつらきはて

老ぬれは親をおもはぬ身を恠て

心 敬

さひしくなりぬ山かけの庵

うたて身にすてし心やよはるらん

同

ひとりなわひそ年のくれかた

ことはりにかさなる老はちからなし

同

きたむることも人にこそよれ

山かつは花を都につけもせて

同

まつとせし間に世をや盡さん

花さかぬ若木の春に身は老て

宗 砌

水かれ草の青きはもなし

瓶にさす花の盛はみしかくて

能 阿

露うちそゝく庵の草むら

をのつから虫かふ宿と荒はてゝ

行 助

たく火しめれは月そ更行

きりくす秋の神樂をうたふよに

賢 盛

しらぬこゝろを我もたのむな

月も猶たかめつるにかむかふらん

同

はるくきその里のかりふし

をはすての月を都の望にて

行 助

我たへかたきこゝろをそしる

しのはしよ涙も袖をだのむらん

心 敬

あはれもかけす人そつれなき

此世にはあらしといふをとひもせて

とはすとせめて名をなもらしそ

うらめしく待夜を誰と語るらむ

あまりうきよを人にとはゝや

別れてふことは誰身にはしむらむ

かへしておもへ思ふはかなき

我やもしこの玉章の人たかへ

名もくちはつる物にありけり

しみのすむ文を空しき形見にて

此廿句。前による所の心ざしよくいたりて。毎句心おどろかるやうには侍るを。詞しなをくれ。心あたらしさするゆへに。位ひきくみえ侍るにや。されば前による事は勿論也。只句

のしるを心にかけて侍るべき事にこそ。あまりにめづらしき句

は。わざとめきて見ざめするたぐひ侍るべし。大貳高遠が歌

に。關の岩かどふみならし。貫之の關のし水にかけみえてな

どにて心得べし。みもすそ河の歌合判に云。左こともなくてよ

ろし。勝とすべしといへる所。わづかに三十六番のうち三所あ

り。これにてもなかさとらざらむ。しかも判者。俊成卿也。尤

仰べきことにこそ。詠歌一鉢にも。晴の歌とていへるは。山櫻

仰べきことにこそ。詠歌一鉢にも。晴の歌とていへるは。山櫻

仰べきことにこそ。詠歌一鉢にも。晴の歌とていへるは。山櫻

さきそめしより。見たせば浪のしらみなどのたぐひなり。所詮學者のむねにあてゝみ侍るべきものは限りなしといへども。勅撰は歌の品おほく入故によろしからぬも侍るべし。古今集の中にだに侍るにや。紀氏新撰にみえ侍るなり。しかはあれど。勅撰にはまづ三代集なるべし。みちの爲に見侍るべき物は。正風躰。秀歌躰大略。百人一首。秀歌大躰。近來秀歌。未來記等なるべし。みちのこゝろざしに堪たらん人は。いづれをか思ひのこし侍らん。只道の正道はいづれの所ぞと尋べき也。愚意に思ひ侍る。連歌正風は。前による心誹諧になく。一句のさま

つねの事をも。詞の上下をよくくさりて。いかにもやすらかに

いひながし。物にうてぬ所を心にかけてまほしく侍る也。しかれ

ども前にひかるゝ事なれば。一座のやうにしたがふべし。地

盤に心たゞしく詞えんにあらんとこひねがはゞ。時にあたり

てあしからんは。我道のやつれにはなるまじくおぼへ侍る也。

上手もおもひたがへてひがごとする事侍る也。其以下云にを

よばずや。さやうの時はいかにも後悔の心をもつべき也。あら

たむるにはゝかることなかれといふ事侍るにや。このころの

作者の心は。竹馬に鞭をうつほどにて龍馬にのらんと思ふな

り。しかるあひだ心ことばをよばざる故に。よろづのくせ出

來て邪路にいりもて行まゝに。正道の句をば謗するたぐひ侍

來て邪路にいりもて行まゝに。正道の句をば謗するたぐひ侍

來て邪路にいりもて行まゝに。正道の句をば謗するたぐひ侍

來て邪路にいりもて行まゝに。正道の句をば謗するたぐひ侍

來て邪路にいりもて行まゝに。正道の句をば謗するたぐひ侍

來て邪路にいりもて行まゝに。正道の句をば謗するたぐひ侍

來て邪路にいりもて行まゝに。正道の句をば謗するたぐひ侍

來て邪路にいりもて行まゝに。正道の句をば謗するたぐひ侍

る也。詮とする所。このみちは。心ざしをてにかけ。あしに實地をふむできはしを登ごとく稽古すべき物なり。定家卿古今のおく書に。但如^レ此用捨可^レ隨^レ某。身の所存。不所存。自他。差別。志同者可^レ隨之云々。甚恐ありといへども。此一帖も以後奥書爲^レ心而已。

于^レ時文明第十一曆己亥春三月書^レ之。

宗
祇
所

打田太郞左衛門尉殿

群書類従卷第三百六

連歌部四

若草山

ならの京のなにがしの院に。ある童形のいとゆうなるおはしけり。やまとうたのみちにふかくこゝろをかけ給ふける中にも。連歌といふこと。あやしう心をなぐさむるわざなりとて。

常にもてあそばれぬるとなん。予。ものゝたよりにそのわたりちかき僧坊へまかりたりしころ。この道のおぼつかなきふし。尋とはれしことども。をろかなることゝろには。いかにこたへ侍るべしともおぼえねど。若草山のわかきこゝろになびき。春日野のかすかなること葉の末をあらはし侍るも。かたはらいたきことどもなれど。またたれかはみなれさほ手にとりても見るよしの侍らんとて。かたのやうにしるし付侍るなるべし。

一連歌にふるきすがたあたらしきさまと申は。いかなる趣ぞや。

ふるきあたらしきと申ことは。人の耳になれたるといまだおもひもよらぬこゝろとにて侍るならし。大かたはかくこころえ給ふれど。吉野山に花を詠じ龍田川に紅葉を付る事は。めづらしからねど又すつべきにあらず。そのうちにも一字なりとも。わが力をいれ心もすこしかはりぬれば。又あたらしき躰になるならひなり。またあたらしきことをよしとのみこゝろえて。耳遠なること葉。歌道にあらぬことなどは詮なきこと也。春の明ぼの秋の夕ぐれといふうちにも。上手はけぢめ見えてめづらしき事出来るなり。このさかひゆゆしき大事なりとこそうけたまはり侍れ。

一いづれのをもむきと申事は。かねてさだめがたし。たとへば人のよろづのことをとひ侍るをこたへぬるほどのことなり。かねてなにとこたへぬべきときだめがたきが如し。さ

れども、艶にやさしくだけ有て。こゝろのこもりたるを本として。その餘はさま／＼のすがたをこゝろにかけ給ふべし。いかによき事も一をもむきなれば。例のことゝ見えて心をとりするならひなり。

一こゝろのよくつき侍るがよきにや。又詞のよろしきがまさるべきにや。

此事。古人さま／＼故實のことしるし侍れば。あたらしく申べきにもあらず。前の句に付侍らずば。連歌にては有べからず。又いかに玄妙に付たりとも。こと葉ふしくれだちすなほならずば。いたづらごととなるべし。

一初心の人の耳にもよくきこえてよきやうにたしなむべきにや。また耳遠なるがよろしき事にや。いかに心うべきぞや。

語近人耳義慣神明と侍るなれば。打きくより面白からんこそ本意にはあらめ。耳遠なるにとりてふたつのこゝろえあるべし。堪能の極位になりて耳遠なるは無上のことなり。初心の人の作意きこえず。わきがたからんはひとへに邪路に入たるにてこそ侍らめ。飛鳥井亞相にある人の。歌よむころづかひ尋ね申せし返答に。歌は只案じてやすくよみ侍れとをしへたまひしこそ殊勝におぼえ侍れ。

一堪能の人の侍る一座を後に見るに。人数の中にてにをはな

どおぼつかなく。あるはさし合などの見えぬるはいかゞ。堪能の人ありとも。其一座物さはがしくば。毎度にせいのしるべきにあらず。あるははじめて對面し。又は心もしらぬ人などに。うちつけに非をあらけしがたく。當座も優ならねば。さしをかれ侍らん。そのときの堪能の人のあやまりにはなるべからず。又さし合の事は。よき句などすこしは。執筆の會釋も侍らん。さならぬさし合は。筆者のとがなるべし。

一つよき句をこのむあり。うつくしきこのむあり。いづれがいづれならん。

前にしるし侍るやうに。うつくしきもつきもかねさだめがたき事なるべし。大乘院一品親王入木の事。あそばしたるものに。うつくしくかゝんとて筆をつくるひ。わなゝき書たれども。よはくかはゆげにこそ候へ。一切うつくしくは見えず候。又つよからんとて筆をつくるひ。紙につよくあて。あらく筆をつかひ候へば。狼藉にあれたるものにてこそ候へ。さらにつよくは候はず候。如し此の事をみな外道邪見とは申候と侍り。まことに此御詞誦道にわたるべきにや。

一百韻の行様とかや申事のあるよし沙汰あり。いかゞ。連歌は一座のうつり行きまにて。よくもあしくも聞るなり。

先一巡はかるくときし出たることばなく。求めたることもなく。すなほにありなん。一巡に紛骨の句などして。其首尾あはぬはいかにぞやと聞え侍るなり。大事の句をば。やすきかたへ付なし。やすき連歌つゞきなば。又大事にとりなしなどうすくこく地文あるべきことゝぞ。然るをおなじやうにのみ付もて行ほどに。懷紙の面もよろしからず。とゞこほり付にくきことの多く侍る也。若能轉物則同如來と侍る經文に。連歌の叶ひぬる故に。佛神の感應もことにあるよし申めり。やすらかに行べき所をば我はやらじ。ひとに付させんとす。人又そのこゝろあれば。心くらべにていたづらに時刻うつるなり。付にくき所をも身を捨てやり侍らんは。いかなる紛骨の句よりも心あらんかし。

一付にくき句と申は。いかなる句にてあるべきやらん。

付にくき句に種々あり。一には古事本説にて難句なる。二には心のおちつかで分別のなき句。三にはあまりやすくてよりどころなき句。四には無用のものとりこみたる句。五には左右をかへり見ざる句等なるべし。又前よりつまりもてきて。其句のとがはあらねども。付にくき事もあるなり。たゞやすらかならんが。つけよかるべきとのみ大様人の心得ぬれど。第一の難句とぞ覺えぬる。何を付侍る共。大かたはつ

きてさせるふしなし。古事本説にてこはくしき中にも。一興なること付出して上手のてがらをも見せんは。やすらかなる句よりもかへりてよき事も有べし。たゞ前の句によく付たる句がつけよきよし先哲申侍り。そのゆへは。あたらしき句に付よきとなり。花を催す前句に。春の末末に心のとまるといひ。月をまねく連歌に。秋の夜の空を詠るとかまへたる無下の事也。月花の前句。付よからんとせんも益なし。付がたからんともたくむべからず。只ありのまゝに侍らば。作者了簡有べし。かゝる分別なきが人数にはきらはるゝと申なり。

一みづからは。句のよしあしをしらず。あしき事をたゞされんがよく有べきにや。

誠に離妻か別もまつ毛のちりをば見ぬと申ごとく。わがうへになりぬれば。殊にまよひ侍る也。よき師匠ありて。あしき所をたゞされん。ありがたき事なるべし。もろこしに。徳操といふ人。なにごとくも人のいふ事。よしとのみこたへけるとなり。そのやうならん友はかひなかるべし。稱揚せられんよりは。非をあらためられんこそ道のあがるはしにては侍らめ。

一心づかひと申事は。いかなる様にや。

こゝろづかひは。毎句にあるべきことなり。假令ば春の花秋の月などいひてよからんは。申にをよばず。文字のたらねば。春といふ文字をくはへ。秋といふ事をそへぬるがこゝろなきことなり。季の字大せつなる故なり。又させるふしなき下句などに。峯のあらしや寒き旅人などやうにする事なり。嶺も嵐も寒きも旅といふ文字も一座にすくなきものなり。又たびねとかりねとおなじほどならば。かりねともはべれかし。又夕だちの露の月かげ秋に似てといふやうなる句に。秋の句をつけば。残の季をば何にてつなき侍るべき。かゝることを心づかひなど申べからん。

一初心の時は。句数の多きがよきなど申人有。さもや侍らん。誠に初心の時は。おもひよる句をわき出るやうにし侍るが。山口しるくたのもしき事なり。功も入て後は。句数の多少によらず思惟分別あるべきよし先達をしへ侍りし也。但又時宜によるべきにや。

一心のもちやうたしなみなど申は。いかにあるべきことにや。この事肝要なるよし申なり。朝夕のながめにも。さよのねさめにも世の常なきことをおもひ。心に慈悲をさきとしてことと樂にはやさしきことをいひ。かりにもあら／＼しき振舞なく。風雲。草木。花鳥のなさをわきまふべしとなり。その

わきまへと申は。梅は匂ひを本として。又色をもてあそび。むかしをもよほし。淺茅か庭に朽残り。又雪のうちより一花咲出などする様なり。櫻は又峯にも尾にもさきみち。雲と見え霞とたなびき。曙の匂ひ夕ばへの色ともにしてがたく。藤山吹は。木ぶかき中より咲出て春のなごりあるをもむき。山子規。初音。忍音。あやしう心をつくすさま。花たちばなはむかしをこふる袖の香など事ふるきに似たれども。えんにあはれふかし。萩はもとあらのはぎ。露おもくやさしき花なり。萩はからびてさびしく。千種の中に風のとどりとさだむ。月はまだかなるをのみよしといふべきにあらず。夕月夜半天に見えたるも涼しく又曉かけて出る月の薄雲の中よりひやゝかに見えたるはこゝろすむものなり。枯野のけしきは。花紅葉にもやはをとり侍る。心あらん人は。猶ながめぬべし。雪の朝。雪の夕。ねぎめ事とふさよちどりなどいひならはせり。すべて一とせの様。書つくすべきにあらず。おなじ草木鳥獸のたぐひも皆風情かはるものなれば。その分別を平生心にかけてぬ人は。當座もといこほり。まことなる事なきにや。歌も連歌もさることありと見る様なることの侍るを。物ごとくに心を付。よく分別のある人の作なるべしとぞ。戀。述懷。旅などは。殊にえんにやさしく。こゝろふかきがよきなどあ

る堪能の人のをしへ侍しなり。

一連歌の一座の程は。はやきがよくあるべきにや。をそきがよくあるべきにや。

近世の好士しるしをかれたるもの有。平生たしなみのなき人。その席にのぞみて沈思し侍らんは。魚を見てあみを求めたる躰なるべし。堪能の好士の沈吟して時刻をうつすは。ここにくゝ。やうこそは侍るらめと思はれ。其かどありてあなおもしろきと聞ゆるなり。胸のうちの才智。工夫のすくなくらん人は。いかに沈思し侍るとも。何事かは出来侍らん。案ずべきことのみ心得て。ひまなく案じぬれば。精骨よはりて。後はかへりて正躰なき事の有也。うき／＼とうつり行一座は。興に乗じて心ならずよき句も出来るよし古人申侍しなり。又あまりにはやき一座は越度もあり。後日に見ざめするもの也。させるふしもはべるまじき所をば。堪能の人には。つけさせ侍らぬやうにすべし。又一廉ある前句をば。こころありて思惟すべしとこそ先達の庭訓にも侍れ。然るに當時の一座は。この教には。そむきたるやうにぞ見え侍る。一會席のやうは。いかにかまへ。いかにあるがよろしきものにや。

信は莊嚴よりおこるとなり。佛も龜幣垢膩の御衣をあらた

め給へるなれば。會席の作法により。心も清く興も有物なり。さて一座の刻限かねてさだまりなば。そのおりをすぐさず。すゝみよりて座列すべし。みやう香の匂ひ空焼物など心にくゝくゆりいでたるに。發句よきほどに讀進し。しづまりはてたる殊勝なり。古き人のかたりしは。昔は一度座を立人。ふしぎなる事に云つゝ。かくても句は出来るものかはとうたかひしことなり。いまの世にもさりぬべき御會席などさしのぞき。もしは座のすゑにもつらなりて見侍るに。げにげにしかるを。かた田舎又は都のうちにてもかたはらの席を見るに。刻限の會にかゝはらず。こゝろ／＼にをくれくるほどに其度ごとに發句よ。一順よとよみあげ／＼ぬれば。物さはがしく耳かしがまし。させる用もなき人の立居しげきも見ぐるしく。あたりの人まで心をしづむべきやうなし。ある人のいはく。一座のなかばに人のくるもわるし。はじめよりあるがいにとるもさはりとなるやうなりと。しかあれど世につかへていとまなき人。又老屈の人。いたづくともがらなどは。とがなかるべし。又一座のうちにぬねぶりし。あるは雑談などする人は。物ぐるをしき事也。いづこにさる人あるべきといふ人あれど。よからぬ輩は。そばなる人にさゝやき。あまさへ高聲にも語出し。又こゑ／＼に吟詠するかしが

まし。かゝるものは。つや／＼指合輪廻などさだかにをよばず。さやうならん中にまじはりて時日をうつさんこそ益なかるべけれ。さま／＼の思惟胸に侍らば。をのづから他言は。一こともはべらざらまし。

一連歌は一座なりとも。執してすべき事にや。練磨のために。執せずともしげくあひ侍らんが可レ然事にや。

諸道は。執の一字にとまりぬべきとわづかに愚推をやり侍り。執する心のなからん人は。いたづらごとなるべし。けふの一座には。はちがましき人なし。何にてもなど思こゝろあらんは。淺ましきことなるべし。いかなる初心不堪の輩にまじはりても。明匠の席にあるこゝろをもつべしとなり。執して宜き功だに入なば。をのづからあしき方へは。ひかれざらまし。又みだりなることは。態とたくみ侍らねど。麻面をふたげんとて我心にさへおちつかぬ事ども仕ぬれば。其功入て後は。かへりていかに執するともとの心にこそかへり侍らめ。よろしき事はあらじとぞおぼゆる。しかはあれど當座も無興ならんには。本意ならぬ句をも沙汰せよとなり。かばかりの事は。又人のをしへにもよるべからず。

此一帖者。相國載公の述作也。主は卑下の心深くて。愚老にだに一見をゆるされぬをわりなく申て見侍る。其日しも内の御

會にていそぎまいるほどに。一わたりさへこゝろよくも見ぬほどにてまいりぬ。御前にて當時の連歌のことどもさま／＼の御沙汰に及びしに。やがて今朝見侍る事うちつくなる申出しことながら。便宜より來れる事なれば。かゝるものをこそ見て侍れと申せしに。觀覽あるべきよし仰有しかば。其後の御會の時。懷中してぞまいりし。かひ／＼しく感じ仰らる。やがて料紙を給て。愚息の中將に書てまいらすべきよしの仰なり。大かたさぞと思ふことも。其道にたえたる輩の定をき書付たるぞ心によくしむものなるうへ。條々の問題。一々の返答。いづれも當時の用意。末代の才學ならずといふ事なし。此筆の跡も。馬尙書が雲をしのぐ賦のたぐひにて。雲井までたかきいきほひ侍れば。世にひろめて。つくば山のしげき詞の林にては。良材の斧となり。若草山のおひさき遠きすがたには。琢磨の鏡とすべきもの也。其由來をしれるによりて。聊翰墨に命ずるのみなり。時に明應丁巳の春の末に此事をしるす。

八座一閑人基綱 在判

連歌本式

一面十句。毎句。發句の賦物に合せてすべし。

一賦物。むかしは毎句に取様にあり。一説には脇第三までといへり。

一面に名所をなすべし。名所と名所五句去なり。

一季は五句去。但此うち他の季なくば。二十句へだてゝも。同季はならず。

一月。花。松。夢。涙。船。竹。煙。

各十句可レ去。

一景物ならべて。三句すべからず。打越にも不レ可レ爲。

雪。月。花。郭公。寤覺を景物といふ也。

一降物と降物可レ嫌打越。

一狩物 同

一草木 同。

一郭公。寤覺。

景物に用レ之。

一横。檜原。關。猿。

山類に用レ之。岩も。

一季は二句にてもすつべし。

一名殘の裏。六句なるべし。

此外應安之新式の如し。

明應元年十二月日

兼載作之云々

連歌新式追加並新式今案等

一韻字事

物名朝夕之字同。與詞字不嫌之。物名與物名可嫌打越時雨。夕暮など留る。詞字。つゝ。けり。かな。らん。して。如此類可嫌。かなの字。近代發句之外。ねがひかなとて。或は一用之。此外は不可用之。ねがひがな。懷紙を加へて可レ用之。

一輪廻事

薰といふ句に。こがると付て。又紅葉を付べからず。船にて是を付べし。こがると云字かはる故也。煙と云句に里と付て。又柴燒など薪の類を不可付レ。他准。夕立に雲を付て。打越に雷電不可然。雪に富士を付て。又氷室不可然。他准。夢と云句に面影と付て。月花を付る事。俳物といひて。近代不付之。更無其

一遠輪廻事

理。曾以不可嫌之。

一本歌事

假令花と云句に。風とも。霞共付て。又不可付レ之。雖隔數句。一座に可レ嫌之。他准。花に付る風霞の類。近來強不及沙汰歟。用此。若猶可レ守新式。歟。又竹と云句に世と付て。又夜字不付之。如此之類又遠輪廻なり。

三句にわたるべからず。本說物語。但逃歌あらば不可嫌之。凡新古今已來作者不可用之。至讀後撰集。可レ用二本歌。堀川院百首作者迄。本歌之由又無定。雖爲近代作者。證歌には可レ用之。堀川院兩度百首作者迄。縱雖入近代集。可レ爲本歌之例。但人のあまねくしらざる歌をば。付合にこのむべからず。依事可引用證歌也。

後普光園殿御筆

源氏物語は。大部の物なれば。三句すべし。但
同所は二句計すべき也。雖有此說。不三座幾也。用三本歌。用古事之條。重疊可有二斟酌云々。況於三同物語一手。

一 雜物躰用事

假令春と云句に弓と付て。又ひく。かへる。を
すなど付べからず。是用なる故也。本末とは
付べし。是躰なる故也。打越に躰あらば本末
又不可然也。長と云句に繩と付て。又短な
ど是を不付。是躰なる故也。くる。ひくなど
は可付之。是用也。

一 一座一句物 縫學。一隅。尤物。都爲一座一句物云々。自餘准之。

若菜。款冬。躑躅。杜若。牡丹。橘。女郎花。檜
原。櫨。如レ此鶯。喚子鳥。貌鳥。春也。郭公。螢。蟬。
日晚。松虫。鈴虫。蜚虫。熊。虎。龍。猪。如レ此鬼。
於三種類嫌之。虫之由有舊說云々。但鬼女。如レ此之類物。神之儀不レ可測。強不レ可及。其沙汰二歟。昔。
古。夕暮。昨日。夕立。急雨。雨。但近年爲三座。二句之物。礎嵐。近年爲三座。木枯。朝月。夕月。隱家。外面。なるこ。ひ

た。樞。閨。如レ此松虫。鈴虫。蜚虫。如三新式二者。各物。然而近年只虫一。此外松虫。鈴虫等號三名虫。又一用之。所詮如三新式二者。虫之外松虫。鈴虫等。各替三懷紙。可レ用之。此外。蜚。促織等替。春雨。小雨。村雨。雨そゞ。雨。面又可レ用之。雨。雨之外。馬。駒。同事也。意馬。隙行。駒者。此外也。但遲夜。有レ之。馬。馬之外。駒。用來之。鶴。たづの類也。日。此外に。永日。春寒。をかへても只一也。秋寒。やさむき。夜寒などいづ。砌。不レ可レ爲三床。鳥獸の床は。れにてもたゞ一也。居所。又あるべし。

一 一座二句物

曉。只一。代。神代。春風。只一。春の風一。但不レ及三秋風。松風。同。五月雨。只一。梅雨。一。夕。今日。庵。いほ一。いほり一。但。故郷。名所。只。故郷。引。岡。只一。名云かへず共有べし。故郷。合て一。旅一。所。一。池。同。湊。宿。只一。旅一。やどり此外にあり。鳥のや庭。只一。庭訓など一。庭の外に寺。皇居等。應。春。秋。一。之間にあるべし。庭訓は各別の事也。鷹。殘雁。春秋。の中有。猿。しら一。旅字。一。近代不レ及三沙汰。命。虫。一。命など。老。只一。鳥木。男。只一。かつら男。佐保姫。橋姫。之類。如レ此二句之物。懷紙。なり。にけり。思ひしに。もの。を。如レ此之詞。を。き。戀しく。戀しき。うらみ。うらむ。如レ此云かへて二句。他准。時雨。秋。冬。朝。各一。

只一。けさ。鶴。只一。た。名殘。戀一。花な。面影。只一。花月と云て一。玉緒。命と懷紙を替てあるべし。さびしき。又一。玉緒。命の命などは其外なるべし。梢。只一。花とも。松ともいひかへて。稻葉。をしねと云か。一。木末の秋。此内にあるべし。稻葉。へて又有べし。塵。一。之外塵の世な。法。法過ては法師不可然云々。嶺。雖爲名所可。海。只一。名所一。わだつみ。野邊。小野。爲二之中一。離。只一。霧。待戀。逢名所一。軒牆。かきほなど云替。離。只一。霧。待戀。逢戀。別戀等之類。准レ之。他。をち。はなし。上句下句各一。もなし。同。詞。このはと云て一。言の葉。薙。只一。法どに一。若薙。草薙な。ながめ。涼し。夏の外又。有此中に可レ用レ之。有べし。

一座三句物

一。座三句物。春月。只一。有明一。夏月。同。冬月。同。前。有明。秋之外之中只一可然也。可。神。只一。神代。花。懷紙をかゆべし。レ及二三事。如何々々。神。一。名神一。花。似物之花は。此外なるべし。近年爲三四句之物。餘花其内有べし。花。紅葉と云ても。花四之内たり。花ある面に。櫻。嫌。之。心。花。似物の花同前。又。花可レ爲三四句之由。有。其沙汰。然而可。藤。レ謂無念二乎。所詮四句三句共。以不可レ有。子細。可。藤。只一。藤原一。季をかへて一。但季をか。柳。只一。青柳一。秋へて又あるべき事無用にやと云々。冬の間。一。櫻。只一つ。遅櫻。山櫻などに一。紅葉一。遅櫻。紅葉。只一。山櫻ならで只櫻と二有ても不レ苦云々。

梅。櫻などに一。草の紅葉一。落葉。只一。松の落葉一。萩。紅葉の橋は此外なるべき歟。落葉。柳ちるなど一。只一。夏冬の間一。燒原一。濱萩懷紙をかへて。薄。只一。尾花有べし。但秋の外他季に一にて可然云々。薄。只一。すぐるほやなど。都。只一。名所。鹽。只一。燒。瀧。只一。名所一。云て一。都。只一。旅一。鹽。只一。潮一。瀧。瀧つ瀬一。花の瀧。泪の瀧等此。岸。只一。彼岸一。文。戀一。旅一。文字一。狩。鷹狩一。鶴一。鶏。庭鳥一。夜鳥一。異名一。夜鳥も。鹿。只一。獸狩一。鶴一。鶏也。異名引合て。二可然云々。鹿。鹿子一。すがる一。かせき又か。車。句の内にあるべし。水車は自然の事。草花過て。花の草庵。花の草枕各詞をかへてすべし。但草花過て。花の草枕な。燈。只一。釣の燈。獨。只一。戀一。月。松などに一。

一座四句物

雪。此外。春の雪一。似物之雪は各別之中也。近來爲三四句之物。春の雪替。面用レ之。氷室雪不レ可レ爲。春雪。雖。富士之雪。爲。他季一者又同。近年。晨明。四季各前。關。只一。如。新式。爲。春雪。爲。四句一也。注レ之。名所。戀一。春秋をとむるなど云て一。氷。只一。つら。一。月云て一。霜雪などに一。たるひ。つら。の鐘。只一。入相一。間に一たるべし。氷室は此外なるべし。鐘。釋教一。異名一。釋教異名等不分明。歟。自。空。空だのめなど云ては此然爲。各別一者不レ及。沙汰。歟。空。外也。空め。空事など同。

前。中天は替レ宮。神祇。皇居。各二。但朝風。朝霜など

の朝の字。懷紙を替レ夕風。夕霜の夕字。同。鳥。只

春の鳥一。小鳥。村鳥等之間に一。鳥獸と云て

一。狩場の鳥。浮寝の鳥。夜鳥は各別の物也。火。螢火は此

玉字。似物。褒美の葉字。草の葉。竹の葉等。寝字。如二

寝獨寝也。又ぬる。天字。屋字。戸。どの間。折を替へし。

一座五句物。世。只一。浮世。世中の間一。戀の世一。前世一。後世一。浮

世。世中。號二名世一事。難二信用。只述懷世二たるべし

云。佛の世は。前後。梅。只一。紅梅一。冬木一。青梅一。紅葉

の世の内に可レ用。梯一。名所一。うき橋一。御階は可レ爲二

し。橋。各別一。歟。浮橋。夢の浮橋など云て一あるべし。

一可レ嫌。打越一物。付可レ嫌。同懷紙之物等

岩屋。關戸。隱家。栖。すまゐ。已上居所居所に

田庵。居所に村。霧。籬。前。濱庇。有說に依レ句可皇

居の故郷に居所。里と云字には霧に降物。霞に

臈。松。竹。草。水などの煙に聳物。雲上人。雲

井之庭等。胸の煙。思ひの烟。同。前。霰はしりに降

物。同。時分と時分。夕暮と曙。月に日次の日。日

に月次の月。種まく野の色付。冬枯の野山等

にうへ物。埋木。同。前。山の色。野の色。植物に嫌二打

句之。植物に草かり。秣。草字に可。越。但可レ依二

鉢也。植物に草かり。秣。爲二二句。園。藪。秋田。

如レ此之類。秋の田事。田に鷹。鹿などくはへては。植

物に一向不レ可レ嫌之。鹿をふなどあらば可レ嫌之。竹に

草木。心の松。心の杉。植物に二。苗代。植物に不レ嫌

句可レ嫌。下萌。冬枯の蘆屋。蘆火等に水邊。浮島

原。山に打越を嫌と云々。但人倫と人倫。老に昔。礎

に衣裳之類。きぬと云ては。依二句鉢二可

放生。又水。驛。馬駒とは可。馬のはなむけ。同。

津の國のなにはの事。山城のとはぬなど。名所

越。打。忍ぶのうらみ侘など云句。水邊に可レ嫌二

有べし。浦とは有べからず。他准レ之。已上打越嫌

之。雲にくもる。溫日と長閑。涼に冷。寒に

冷。身にしむに寒。いにしへに故郷。梢に末。

松に子日。音に聲。響。聲。ひびきに。音羽山。音無川

也。顧に見。夕に春秋之暮。樵夫に木の字。面

影に影。影に陰。陰にもと同。かくれ嫌_レ之。影は不_レ嫌_レ之。但陰に下。物によりて不_レ嫌_レ之。

遠に遙。袖ぬるゝに涙。泪に袖の露。なくに

涙。鳥獸のなくは。別にかへる。戀の心は。別_レの事也。同事也。別に衣々。

爲_レ戀句_二者可_レ。おもひに火。可_レ依_二ぬとぬと。但_レ不_レの。嫌_二同面_一。

大切之間打越までは。不_レ可_レ嫌_レ之由之定之。ずとずと。過去のし文字。

夢にうつゝ。ね覺に夢。明るに曙。今日に昨日

明日。弓に矢。弓張月。年の矢等は。非_レ。簑に笠。夕立。此類。但可_レ替_レ折。

に暮の字。明暮に夕字。朝夕に暮の字。しの

のめに朝。夕時分には不_レ誰かれに夕字。朝には不_レ可_レ嫌_レ之。

遠にをち。窓に戸。ことわざに詞。いふわざ。

皆可_レ嫌_レ打越。くらきに暮。光陰によるひる。月

諺字なれば也。日。但月にても月にてても一あら野分に野字。分字。

暴風と書_レ之。木枯に木字。青に緑。家風に嵐。木

順和名。會に木字。岐嶺と書_レ之。野邊。山邊にほとり。天

に空。淡路に道。山路といふては。五句可_レ嫌_レ之。晨明に有字。明字は可_レ用

句_二嫌_二五入相に入字。逢字。萩の聲。風ともなくて用

歌_二云。風に歎を木によそへたらん。植物に可

嫌_二打越_一。齡の三十年。四十年等に年の字。

只數の七十八十に。魂に玉の字。魂をも我玉のをなどい。は不_レ可_レ嫌_レ之。

レ之。ながめに見。目には不_レ可_レ嫌_レ之。形見に見。不_レ可_レ嫌_レ之。

努々といふ詞。夢に二句たるべし。物思ひに物の。不_レ可_レ爲_二夜分_一。

字。思字。憂に懶。うきにつらき。かなしき。

名殘。名字。殘字。思ひやるに思ひ。すくなき

に無字。はかなきに無字。付句嫌_レ之。打越不_レ知に。苦之由之定之。

物のしるし。しるべ。あらましに有字。或說一。向不_レ可_レ嫌_レ之。

いづれ。共にくし云かへて。は可_レ嫌_二三句_一也。なりとなり。なれと

なれ。なるとなる。如_レ此詞。嫌_二打越_一なり。なる。なれ。付句

嫌_レ之。打越不_レ嫌_レ之。たどるに尋。但可_レ依_二句_一嫌_レ之。玉章に詞。

依_二句_一嫌_レ之。歌に言の葉。同。數鳥之道に歌。但可_レ嫌_レ之。

云々。偽に眞。生死に命。齡に老。依_二句_一嫌_レ之。翁に

老。親に子。已上付句共。可_レ嫌_レ之。文字餘事可_二相雙_一之條

如何。及_二打越_一可_レ有_二斟酌_一歟。凡無用之文

字餘不_レ可_レ然之由。見_二和歌抄_一矣。楓と紅葉。

蟬と日晚。昔と古。梅と紅梅。世と浮世。世中。

前世と後世。捨世。捨身等之捨字。東路と東

屋。以上此類可レ嫌ニ同折一。ね覺と聞ぬると詞。眠にねの字。

以上可レ替レ面。牙と寒。共爲ニ冬季者可レ嫌ニ同懷紙一。捨世に桑門の世

すて人。但可レ嫌ニ同折一。戀世と述懷。釋教

世。替レ面可レ嫌ニ同折一。一文字。然云々餘の數字は可レ替レ折レ然所

用之差別。三字假名事。可レ嫌ニ同面一。御字。おまし御階な

有其理一。比字。韻には折に一。只老と白髮。可レ嫌ニ筆跡

と鳥跡。可レ嫌ニ跡字。古跡之類は可レ替レ同折一。岩と石。

可レ嫌ニ真砂に石。岩。同面。可レ嫌ニ篠としの。竹とす

ず。三句可レ嫌ニ神字に神樂。同面。可レ嫌ニ九重と都。同折一。

都と大宮。同前。

一可レ隔ニ三句一物

月。日。星。如レ此雨。露。霜。雪。霰。如レ此霞。霧。

雲。煙。如レ此木に草。虫に鳥。鳥に獸。名所と名

所。七夕に月日。依レ爲ニ星

一可レ隔ニ五句一物

同字。日と日。風と風。雲と雲。煙と煙。但七句

野と野。山と山。浦と浦。波と浪。水と水。道

と道。夜と夜。木と木。草と草。鳥と鳥。獸と

獸。虫と虫。戀と戀。旅と旅。水邊と水邊。居

所と居所。暮と暮。述懷と述懷。稱ニ述懷詞事。昔

子。昔衣。墨染袖。隱家。捨身。憂身。命等之類也。凡雖レ爲ニ述

懷之意。不ニ露顯ニ詞者。述懷ニ用來一也。生るゝは不レ爲ニ述

懷也。墨染衣。可レ爲ニ釋教之由。近年有ニ其沙汰一云々。然

而墨染非ニ佛弟子之衣服一衣色也。又其俊抄。墨染。昔衣見ゆ。

同類。所詮如ニ新式。神祇と神祇。釋教と釋教。袖と

袖。衣裳と衣裳。山と山之名所。浦と浦之名

所。原。松原。篠原等替ニ其朝月日。夕月日。月日各嫌

同季。月と月。松と松。竹と竹。田と田。衣と

衣。夢と夢。泪と淚。船と船。舟字。天磐船。天河船

不レ可レ爲ニ水邊。船岡山。御船衣字。霞衣。織女等可レ隔ニ

山等舟字に五句可レ嫌レ之。七句。但不可レ爲ニ衣

類。衣川。衣手杜。衣。松字。松島。松浦田字。生田。田上。

竹字。竹田。竹川等。以上准ニ輕留衣浮田。森等。

一可レ隔ニ七句一物

にある關は山に嫌^レ之。浦にある關は浦に可

花の波。花の瀧。花の雲。松風の雨。木葉の

雨。河音の雨。月の雪。夏の詞入ては不
可爲二降物一月の霜。同前

櫻戸。木葉衣。如レ此之類。兩方に可レ嫌レ之。花の雪。植物に可レ嫌レ之。降物不レ可

嫌^レ之。泪の雨。降物不^レ可^レ。波の雪。冬也。兩方に嫌^レ之。
 似物之嫌様雖^レ非二一

様。當時所_レ用如_レ此。兩方に可_二混合_一之物
者嫌_レ之。不_レ可_二混合_一之者不_レ嫌_レ之歟。波の花。水邊可_レ嫌_レ之

植物に不可
袖の露。於二向一無三
心之句者
涙の露。

雨之間に一。爲ニ冬季ニ之間。降物に打
感可_レ驗_レ之。冬の時雨過てま。可_レ單

走下^レ如^レ風^レ急^レの雨^レ近^レて

原。鳥巢。夏也。鶴巢者雜也。雉子也。但狩場の雉は可

假令。波として浦と付て。又水鹽などはすべ

からず。蘆。水鳥。船。橋などはすべし。爲_二各

別物一故也。須磨。明石。可レ爲ニ水邊ニ上野岡。非ニ水邊ニ他准レ之。難波。

志賀。非水邊。他准之。杜若。菖蒲。蘆。蓮。薦。闕伽結。

懸樋。氷室。手洗水。以上水邊也。都鳥。同前。篷屋。霞網。

小田返。布瀑。硯水。泪川。爲三名所一者可嫌ニ水邊ニ也。月の氷。

袖行水。たるひ。軒玉水。苗代。早苗。以上非二山水邊一

水邊一山

嫌^レ之。岩橋。薪。爪木。猿。瀧津瀨。以上非三宇山類一

治。川島。非ニ山類。凡泊瀬寺。准ニ在山縣ニ爲ニ清見。

寺。准二在レ浦關一難波寺。非二水邊一木曾路。鈴鹿路。准二小

野^レ吉野奥可^レ遁ニ山類一
鶴林。可^レ爲ニ植物一。鷲嶺。可^レ爲ニ山類一。但鷲峯。鶴林等山類植物。元は不

嫌^レ之。用^ニ此
 儀^ニ可^レ然^{云々}。
 杣人。炭燒。雪山。不^レ可^レ爲^ニ室八島。
 山植。

山類。水邊不
可嫌之。富士。淺間。葛城。などばかりは。山類
躰用之外なるべし。松

島。山類不_レ用_レ來_レ之。然而非_レ郡之上者。田蓑島。三島。可_レ爲_レ二山類水邊_一之由近年被_レ定_{云々}。

攝州豆州等不レ戀山。依レ句不レ可レ遲櫻。松花。荻燒。

原。鳥巢。春也。水鳥之巢は夏也。鶴巢者雜也。雉子也。きじと云ても猶春也。但狩場の雉は可

氷の隙。荒玉の年。春日祭。兩度祭以。南祭。

石清水^臨祭也。あがためし。あらればしり。須磨の御

稜。爲二上巳日一可爲春也。心の花。白尾鷹。繼尾鷹。以上春也。志。

賀山越。有爲三春說。然神祭。柳取。杜若。牡丹。

杜若。牡丹。歌題雖三兩說一。
依二景物一少夏に入レ之。
毛をかふる鷹井鳥。鳥屋。

鷹以上。平野祭夏也。鶯郭公に結び入。鮎夏也。若鮎は春也。

須磨のながめ。夏也。但其儀あたらず。不可爲夏。清水。雜也。

結ぶと云ては夏也。日晚。稻妻。鳩吹。楸。桐。裏枯。
只水を結ぶは雜也。

薦。芭蕉。忍草。穗屋つくる。初鳥狩。鳥屋出同。小鷹

狩。鶉衣。非動物。萱。枯野の露。草枯に花残る。初

嵐。露霜。露時雨。つかさめし。相撲。放生。祇神

也。星月夜。月と云字可。秋立衣。七夕之具也。鵲草莖。植物也。

千鳥。鴈に結び隔二五句。扇をしく。爲三秋事。可。依レ物不レ可。

雖有二儀。秋季大切。夜さむ。身にしむ。依レ句也。以上秋也。淡雪。

涙の時雨。庭火。木葉衣。紅葉散て物を染る。

北祭。賀茂臨。時祭也。豊明節會。非三夜分。小忌衣。日蔭糸。

共神。以上冬也。椿。柏。蓬。葎。淺茅。忘草。

蜻蛉。鷗。鳩。同浮。松緑。以上雜也。縁立。鹽屋。宮

居。寺。家を出る。釋教。若緑者春也。都。御階。

百敷。雲上。九重。以上非三居所。非三居所。簾。居所用也。床御座。

以上居。草枕。柴戸。松門。杉窓。菅笠。篠庵。草庵。

浮木。流木。爪木。柴取。繪に書草木。依二其物一。其

催馬樂等之名。可レ准。衣裳之色。花木。不レ可レ爲二植

色。可レ有。木をさる。しをり。あし鴨。あしたづ。

竹宮。爲二名所一。以上非三植物。軒菖蒲。末松山。篠枕。稻筵。

苔筵。蓬宿。葎宿。夕顏宿。草筵。草を刈。以上植

水雞。水邊也。螢。蚊遣火。薙枕。床。ゆかは書也。又寢。神

樂。夕闇。いさり。以上夜分也。浮ねの鳥。心の月。釋教也。

鶉の床。心のやみ。其曉。夢の世。常灯。明は

て。明過て。朝ぼらけ。三日月の出る。有明

の入。鐘のかすむ。以上非三夜分也。燒火。影といひても猶

夕月夜。非三夜分。宵。非三時分。夕に日晚。時雨に時の

字。名所の春日に春の字。日の字。橘に花。雷

に神字。雖不レ嫌之。不レ可レ嫌之。但意不二日

に晝。稻妻に月日。以上不レ然。打越に嫌之。下紐。ひれ。衣類也。帶。

冠。沓。衣々。非三衣裳。但衣に可レ嫌之。打越云々。佐保姫の衣。非三衣類。

平秋の句に戀の秋句付て又平秋の句。可レ付之。他

朽木と云句に柚と付て又柚の名所

不レ可レ付レ之。生田と云句に森と付て又森

の名所。隱題にも不レ可レ付レ之。楨には木の

字不レ可レ憚。楨木柱。眞木戸には木の字五

句可嫌^レ之。良木故也。躑躅。卯花。木也。藤。草也。海士小

舟。泊瀬山。船字に付て水邊嫌^レ之。棹姫。春也。立田姫。秋也。山姫。

難也。以上非^二神祇^一。無常。述懷。懷舊。引合て三句可^レ用^レ之。述懷。釋教

之詞爲^二一句^一時者。可^レ付^二釋教^一方一事也。て

にをはの字。相合ていを不^レ可^レ付^レ之。東遊。

求子。神祇也。野の宮。同前。神樂名之菰。准^レ繪。但秋季に樂方を可^レ用^レ。櫻鯛。櫻貝。名に付て可^レ用^レ。櫻人。櫻田。可^レ用^レ。

爲^レ本。菜摘。爲^レ野遊。春。詞の花。同前。あたゝかな

る。口にあたゝかなる。可^レ爲^レ春云々。水のぬるむ。春也。かすむると

云詞。非^二霞字^一。但詞のつゞきやうにて。可^レ嫌^二聲物^一。若

葉。春夏有^二雨說^一。加^レ花者爲^レ春。然^レねらひがり。獸之事也。

也。而夏季大切之間可^レ爲^レ夏云々。ねらひがり。獸之事也。

紅葉の橋。爲^二天河之事^一。間不^レ可^レ爲^二初鹽^一。色鳥也。

也。秋也。思草。植物也。可^レ戀草。非^二種^一。忍摺。同前。頭雪。眉

の霜。非^二降物^一。非^二冬^一。夜の更る。露ふけて。非^二時^一。御被に

はらふ。蛙に川の字。つれなきに無字。いさ

りに船。釣に舟。海士等。不^レ可^レ嫌^レ之。夕ま暮。間の字眞の字

共に不^レ可^レ嫌^レ之。山のしづく。軒の雫。降物不^レ可^レ嫌^レ之。老に若

を嫌事。無^二其謂^一歟。若年壯年等之次第也。深きに淺

き。遠きに近き。此きも嫌^二事^一此類多之。不^レ可^レ嫌^レ之。何字。幾

の字。付句嫌^レ之。打越。さ夜。さを鹿等に小船。小

篠之小字。同前。鷹に狩。付句不^レ可^レ嫌^レ之。民のかまど。居

に不^レ嫌^レ之。夜の明るに戸をあくる。付句計^二横川^一。非^二水^一

邊。蓬が杣。非^二山^一。山がつ。非^二山類^一。山字に。山鳥。同前。

すそ野。山類なくて。龍。獸類に用たる事も有。然而別

先聖之驚。非^二水^一。同前。船。海路。渡船は旅也。依^二さか

づきの光など月によそへたらん。日に二句

可^レ嫌^レ之。然而可^レ爲^レ秋。鞠の庭。庭の心ならば一之外如何

國の名と國の名。可^レ隔^二三句^一。國之名と名所。可^レ嫌^二打越^一。國

の海。名所名神。非^二名^一。あづまに越路等。可^レ嫌^二打越^一。打

もろこし過て。から國とはあるべし。

一句數。

春秋戀。以上五句。春秋の句。不^レ至^二三句^一者不^レ用^レ夏

冬。旅。神祇。釋教。述懷。懷舊。無常。在此内。山類。水邊。

居所。以上三句連^レ之。

一 舂用事

岡。嶺。洞。尾上。麓。坂。岨。谷。島。水邊にも山。嫌之。

關。以上山。舂也。梯。瀧。杣木。炭竈。以上如舂之類。山海之用也。他准之。

浦。江。湊。堤。渚。島。沖。磯。干潟。岸。汀。沼。

川。池。泉。洲。以上水邊舂也。浪。水。氷。鹽。氷室。以上如舂也。清水がもとなど云ても水邊用也。浮木。

舟流。鹽燒。鹽屋。水鳥之類。蛙。千鳥。杜若。

菖蒲。蘆。蓮。眞薦。海松。夏也。和布。若和布は春也。和布刈は夏也。

藻。鹽草。萍。海士。閑伽結。魚網。釣垂。筏。手

洗水。懸樋。下樋。以上舂用之外也。新式之。軒。床。里。

窓。門。庵。戸。樞。薨。壁。隣。垣。以上居所。室。戸宮。之舂也。

非居所。庭。外面也。人。我身。友。父。母。誰。關守。

如此類。人倫也。主。獨。媒。同前。親子と云ても人倫也。月

をあるじ。花をあるじ。そうづ。山姫。木玉。

ふたり。以上非人倫。花をあるじ。月を友と云

てはかはるべし。依二句舂可レ爲二入倫一也。

連歌初學抄後成恩寺殿御作

一 往古以二賦物一爲レ題。或百韻。或五十韻。每句

用二其賦物一。近代發句計有二賦物之沙汰。脇句

以下一向不レ取レ之。仍雖似無二所詮。聊不

忘二舊儀一而已也。發句に取二賦物一之時。二に

渡をば不レ取レ之。假令山櫻と云發句に人字

不レ可レ取レ之。人は山にも渡故也。自餘准レ之。

又三に渡賦物同前。一字露顯賦物者。近代も

百韻連歌に每句悉用レ之。尤有二其興。二字返

音以下賦物者。千句連歌。發句計に常に取

レ之。賦物之字。上古は百韻之中不レ犯レ之。中

頃面八句計忌レ之。近代無二其沙汰。頗可レ謂二

無念。仍近年者至二第三句。賦物之字斟酌云々。

一發句。脇句之同字并物名をば。面八句之中。

雖レ隔二五句一猶可レ嫌レ之。

一 近代一之懷紙。引返之第二句迄。戀。述懷。名

所等。猶如レ面不レ付レ之。

右取要書之。

右大概准二建治式一作レ之。但當世好士所ニ用來一。多不レ及ニ取拾一。只爲レ止ニ當座之評論ニ粗所レ定如レ件。

應安五年十二月日

後書光園總政殿御判

新式今案奥書

右應安新式者。此道之龜鏡也。永不レ可ニ違背一。但未定之事近日相レ論之。題目等或以ニ愚意ニ料ニ簡之。又訪ニ宗砌法師意見一所ニ記置一也。此外漏脱之條々及ニ滿座評論一者。自他加ニ斟酌一。後日訪ニ先達一可レ決ニ是非一者也。

享德元年 壬申十一月日

後成恩寺殿關白御判

和漢篇

一大概法可レ用ニ連歌一式目事。

一和漢共以ニ五句一爲レ限。但至ニ漢對句一可レ及ニ六句一事。

一景物草木等員數。和漢可ニ通用一事。但雨。嵐。昔。古。曉。老等之類。和漢各可レ用レ之。

一同季可レ隔ニ七句一。同字并戀。述懷等可レ隔ニ五

句。同連歌式。自餘隔ニ七句一之物可レ隔ニ五句一。月と類也。隔ニ五句一之物可レ隔ニ三句一。山類と山類。水邊と也。隔ニ五句一之物可レ隔ニ三句一。水邊。木と木之類。日と日。風と風。猶隔ニ三句一之物可レ隔ニ二句一。嫌ニ打同字嫌物也。

越ニ之物同ニ連歌式目一。

一山類。水邊。居所等不レ可レ有ニ躰用之分別一事。

一萬物異名。就ニ本躰一可レ定ニ其季一。但可レ爲ニ本躰外一事。假令金鳥は日。銀竹は雨。金衣は鶯。

鳥衣は燕。霜蹄は馬。鯨は鐘。如レ此之類。可レ依ニ連歌異名之物例一。

一聯句中可レ定ニ其季等一字事。暖芳。有レ花紅。同。之意。新綠。霖。雨。イ。

淑氣。燒痕。踏青。芳草。如レ此之類。新綠。霖。雨。イ。

暑。炎熱。草木之茂字。清和。四月。如レ此之類。初涼。新涼。

同。冷爽。金氣。黃落。如レ此之類。枯。草木之心也。臘。探

梅。春信。守歲。如レ此之類。信。書信。客。非ニ賓客一之客也。一葉

身。舟。歸字。漂泊。如レ此之類。錦字。御溝葉。私語。

如レ此之類。戀也。人名。可レ爲ニ人倫一。姓は不レ可レ類戀也。人名。爲ニ人倫一。但可レ依レ事也。名利塵。世之意。

浮跡。出處。如レ此之類。一絲。釣絲之意。可レ爲ニ水邊一也。禪定。錫。

如レ此之類
釋教也。

關白御判

應安以來新式之今案。追加條々并近代用捨篇目等。依レ多_二其
端_一末學常迷_レ之。商量而今彼是勒以爲_二一冊_一。但猶未_二一決_一
之事。或暫漏_レ之。或先載_レ之。以待_二後君子_一。志同者從_レ之亦宜
乎。

文龜辛酉林鐘上澣

肖 柏

漢和法式

一端作漢和聯句ト四字ニ書也。

一第唱句出來ノ時。其内ノ平字。其韻ノ字ヲ除
テ入韻ノ字ヲ定ル也。

一面八句。漢四句。和四句也。内ニ漢ノ對句一
所アルベシ。漢唱句ナレバ。八句メ和也。和ノ
發句ナレバ。八句メ漢句也。上句又此例也。

一百句漢和五十句ヅ、也。乍_レ去和ニテモ漢ニ
テモ。二三句多キ分不_レ苦。

一花四本。和漢二句宛也。但隔番タルベシ。

一月。和漢共ニ三句。五句ツバキテモ不_レ苦。

一雪。四ツ。漢ニテモ和ニテモ。一方ニ四ツナ
ガラモスルナリ。

一二句アルモノ。兩方エ一句ヅ、取。其外異名
ニテ出ルハ。和漢出ガチニ一句有ベシ。

一トヲリ字。漢句ニ古ハ上下共ニ嫌。今ハ上ノ

トヲリ字計ヲ嫌フ。下ハ不_レ苦。

一五句去。七句去ノ物ハ。韻字タリトモ可_レ仕也。

一名殘ノウラハ。漢ノ對句ナクテモ不_レ苦。

一座一句。

若菜。春菜等同款冬。躑躅。杜若。牡丹。魏紫姚紅等異名別

可_レ有_レ之。拾。花之外實之。可_レ有_レ之。一州。遺納言意見。楸。中仙等也。拾遺納言意見。檜。螢。外

異名可_レ有_レ蟬。同。虫。鈴虫。松虫。以上三虫。各。熊。蜚。之。思。前。虫。鈴虫。松虫。以上三虫。各。熊。蜚。

虫。松虫。鈴虫。龍。虎。鬼。猪。女。急雨。小雨。片雨等同

虫等替_レ面。龍。虎。鬼。猪。女。急雨。小雨。片雨等同

之。朝月。夕月。以上替_レ妹。各二句モ可_レ有_レ之。朝月。夕月。以上替_レ妹。各二句モ可_レ有_レ之。

新式分。春雨。促織。他ノ虫ト面ヲ替_レ。玉章。窓。戸。

扉。洞。以上兼載。若草。春草。芳草等。別ニ可_レ有_レ之。

一座二句物。替_レ折。

曉。代。神代一。君代一。春風。秋風。松風。五月雨。只一。梅雨一。霖

字同。秋霖。今日。夕。菴。故郷。旅一。非。岡。只一。名。池。別也。思。所一。

命。只一。虫ノ命ナド一。妾。老。只一。鳥ナドニ一。和漢篇薄命ナド別ニ可_レ有_レ之。

男。只一。桂男。名殘。戀一。花ナドニ一。功名釣。戀。名等別ニ可_レ有_レ之。思。

字。恨字。時雨。秋冬。朝。只一。今朝一。以上新式今案。

替_レ面。雨。嵐。昔。古。以上和。漢篇。郭公。和漢。茶。絮。柳。各一。

替_レ折可_レ用也。暖。喧字在此內。昨日。拾。嶺。軒。門。一。寺ナ。麓。只一。名。坂。同。谷。同。島。同。瀧。同。涙。

只一。寺ナ。麓。只一。名。坂。同。谷。同。島。同。瀧。同。涙。別ニ有。海。同。春如。海等別。江。同。潮。同。堤。同。渚。同。

磯。同。汀。同。沼。同。泉。同。泊。同。井。同。林。同。村。同。寺。鶴。只一。異名一。他推_レ之。

一座三句物。替_レ折。

神。一。代一。只一。名所一。竹ノ精。花。似物花別可_レ有_レ之。藤。一。筆ノ精一。別可_レ有_レ之。

只一。一。原一。季ヲ替_レテ。櫻。遲一。ナドニ一。柳。只一。一。杖等在。此內。思。櫻。遲一。ナドニ一。柳。只一。

一。秋冬。紅葉。只一。梅櫻ナドニ一。草ノ一。落葉。只一。問一。楓ノ字別ニ可_レ有_レ之。拾。落葉。只一。落葉一。柳チル。只一。名所。鹽。只一。燒。文。戀一。旅一。

ナド。シテ一。都。只一。旅一。鹽。只一。潮一。文。戀一。旅一。一。鷹一。只一。獸一。夜ノ鳥一。只一。鹿。只一。異名一。

一。鷹一。只一。獸一。夜ノ鳥一。只一。鹿。只一。異名一。一。子。一。敗字類同_レ之。思。鷄。一。異名一。

鹿苑等別ニ可。車。只一。法ノ車一。水。月。只一。在明一。三
レ有レ之。恩。以上新式分。春。月。日一。但三日
月ハ四季ノ。夏。月。同。冬。月。同。以上。鶯。并異名
間ニ一也。追加。等在此内。燕。
同春。酒。替字可。馬。同意。一隙駒等別ニ。筆。同。履。同。
秋。一。用レ之。馬。有レ之。新式今案。筆。同。履。同。
蓮。同物名此外也。家。只一。一風一。宮。皇居一。神祇一。
以レ勅追加。思ノ家一。居所一。以上兼
載注
進。

一座四句物。

雪。三春一。似物ノ。在明。四季。冰。只一。ツラ。涙ノ
一別ニ可レ有レ之。各一。水ナド云テ。硯
ノ一別ニ。鐘。只一。入相一。釋教一。朝。一風。一霜ナドノ
有レ之。異名一。以上新式。類アシタ。ケサト
アラバ替。夕。一霧。一露ナドノ類ユフベ。空。ソラダノ
レ面ヲ兼載。ユフグレナドアラバ替レ面ヲ。メナド云
テ別ニ可。鳥。只一。春鳥一。小鳥。村鳥之間一。狩火。螢火
レ有レ之。場ノ鳥。浮寐ノ鳥。夜鳥ナド別也。此外
也。玉。似物褒美ノ詞。寢。以上新。鏡。似物鑑等
在此内。式今案。鏡。在此内。原。只一。名所
一。松原一。淺。葉。若葉。青一ノ類替レ折。草葉
茅ガ原一。竹葉等替レ面。以上兼載。

一座五句物。替レ折。

世。只一。浮世。世間。但勅追加。戀。述懷各。梅。只一。紅梅
別ニ可レ有レ之。戀一。前世一。後世一。青梅一。
紅葉一。冬木一。寒梅。橋。只一。御階一。梯一。名所一。浮橋
一。早梅等冬也。恩。橋。一。以上新式ニ雖レ無ニ一ノ字。天津

等可レ爲ニ名
所ノ一。恩。

無ニ定數一物。隔ニ五句一。

月。松。竹。夢。淚。船。田。衣。以上。河。浦。以上。
山。袖。恩。新式。河。浦。兼。

付句ニ可レ嫌物。

玉章ニ詞。歌ニ詞。敷島道ニ歌。僞ニ眞。袖ノ露ニ
淚。生死ニ命。生ノ字ニ命ヲ。齡ニ老。翁ニ老。泣ニ淚。
鳥獸ノ鳴ハ。歸ニ別。ツラキニ憂字。以上新。カコツ
別ノ事也。拾。如ト若ト。似ト於ト。與ト兼ト。一說此二
ニ恨字。拾。如ト若ト。似ト於ト。與ト兼ト。字不レ嫌
レ之云々。恩案猶。青ニ綠蒼ノ字。是ト斯。如レ此同。白ニ素
可レ嫌歟。青ニ綠蒼ノ字。是ト斯。如レ此同。白ニ素
幡ノ字。他准レ之。似字。

二句可レ隔物。嫌ニ打越一物也。

月ト日。月ト星。日ト星。如レ是。天象。朝ト夕。曙ト朝。如
時。雨ト露。雨ト霜。霜ト雪。雪ト雹。雪ト霧。霧ト
露。如レ此降物。他畧レ之。霧ト霞。霞ト雲。霧ト烟。如レ此降物。松ノ水。烟同。
虫ト鳥。鳥ト獸。虫ト獸。如レ此生類。木ト草。竹ト草木。
生植。巖屋。關戸。隱家。栖。スマキ。以上居所。曇ニ
如レ此生植。巖屋。關戸。隱家。栖。スマキ。以上居所。曇ニ

雲。霞ニ臙。涼ニ冷。老ニ昔。古ニ故郷。梢ニ末。

冬枯ノ野山ニ生植。砧ニ衣類。音ニ聲響。顧ニ

見。夕ニ春秋ノ暮。樵ニ木ノ字。影ニ陰。面影ニカ

グ。遠ニ遙。別ニ歸。已上新式分。人倫ト人倫。居所ト村。

ウツ、ニ夢。寢覺ニ夢。生植ニ秣園藪秋田等。明

ニ曙。今日ニ昨日明日。夕立ニ暮ノ字。弓ニ矢。

如レ此類付句打越共ニ嫌レ之。昔ニ古。寢ニ閨。以上新式今案。吹ニ風。吹レ笙別也。

蟄。卵。以上二。跳ニ見。麒麟閣。鰐魚賦。愛蓮說。

挾菊賦。如レ此類各與ニ本道ト路。文道。政道與ニ山路。苦路ニ也。支體

ト支體。國ト名所。已上勅。生植ニ山色野色。愚。

三句可レ隔物。

山類ト山類。山ト峯類。水邊ト水邊。海ト江類。夜分ト夜分。

夜ト。木ト木。松ト杉類。草ト草。蕨ト槎類。獸ト獸。馬ト牛類。鳥ト

鳥。鶯ト鶻類。虫ト虫。蝶ト螢類。魚ト魚。鯢ト鯉類。居所ト居所。

軒ト。山ト山ノ名所。浦ト浦ノ名所。衣類ト衣類。

門類。已上新式。名所ト名所。勅追加。國名ト

國名。愚拾。

五句可レ隔物。

同字。神祇ト神祇。釋教ト釋教。述懷ト述懷。戀

ト戀。旅ト旅。以上如レ連歌一用レ之。新式分。

七句可レ隔者。

同季。如レ連歌一用レ之。新式。

句數物。

春。秋。以五句ニテ爲レ限ト。以五句ニ爲レ限。一三三四三句ノ外無ニ定數。戀。五句之間無ニ定數。當時ハ不レ捨。夏。冬。旅行。神祇。釋教。述懷。懷舊。無常在此內。

水邊。山類。居所。夜分。已上三句爲レ限。一二三句之間無ニ定數。已上新式分。

生植。生類。降物。聳物。人倫。衣類。名所。國名。

人名。以上二句連レ之。此內無ニ定數。已上愚加。

山類。

山。麓。嶺。谷。島。岡。洞。坂。山ノ關。已上山ト峯類。已上新式。

梯。瀧。瀑同。炭竈。以上山用也。新式分。岩橋。薪。同。

兼。猿。以上非ニ山類。炭バカリハ非ニ山類。鷲峯。同。宗伊入道與ニ宗祇法師ニ談レ之。

水邊。

海。浦。江。湊。堤。渚。澳。磯。瀉。汀。沼。河。池。

泉。以上水邊ノ鉢也。新式分。水。浪。鹽。潮。水。冰室。賜水節是也。以上水邊之用。筆海。硯池之類水邊ニ不也。新式。流。燒鹽。鉢用之外也。新式。燒鹽。水邊也。

今案。橋。船。網。笠。篲。蛙。魚。水鳥類。浮草。杜若。菖蒲。葦。蓮。蓴。薦。海士。釣。以上芸用之愚。外水邊也。

蓬屋。硯水。以上非ニ水邊一。新式分。早苗。非ニ水邊一。新式今案。

居所。

軒。床。里。窓。門。庵。戶。樞。薨。壁。隣。牆。以上居所之鉢也。

庭。居所之用也。新式。礎。階。以上居所之用。近年鉢也。新式。拾。簾。用之外ニ用之。簾。皇居類。金闕紫宸類也。居所一也。宮。皇居神祇名所等。寺。僧舍類。居所一也。鷗社。昼樺ノ類。居所ニ愚加。不レ可レ嫌レ之。愚。

春部。

雉。新式。暖。淑氣。蹈青。芳草。以上和漢篇。管律。貢茶。

蜂。蜻蛉。鷓鴣。永日。餘寒。殘雪。雪冰消。月

隴。草之茁。以上春也。

夏部。

杜若。牡丹。以上勅式。新綠。霖。暑熱。草木之茂。以上和漢篇。

薰風。夜短。秋近。雲峯。涼。不レ加ニ初新之心。以上

夏也。

秋部。

冷。楸。桐。芭蕉。懸鶉。以上新式。初涼。爽。黃落。以上和漢篇。

荔枝。勅。殘暑。荻花。蘆花同。草花。黃柳。婕妤

棄扇。孟嘉落帽。愚。以上秋也。

冬部。

庭火。落葉。以上新式分。探梅。春信。守歲。以上和漢篇。凍柳。

涼蝶。已上勅。霜葉。依ニ句鉢。可レ爲レ秋。寒。時雨。霜。儺名。

爆竹。愚。以上冬也。

夜分。

水雞。螢。蚊遣火。燒蚊同。筵。御一。雅一。等。枕。床。ト。

畫也。又寢。以上夜分。愚。被。愚。浮寢鳥。鳥夢同。心ノ

月。夢世。以上非ニ夜分。新式。鬢星。暗香。春如夢。以上同。愚加。

胡蝶夢。拾。

聳物。

靄。勅。虹。拾。一說非ニ聳物。字脫歟。

人倫。

人。我。身。友。父。母。誰。主。已上。新式。人名。和漢。篇。姓。

官。以上。勅。使。士。公。侯。伯。子。男。汝。翁。以上。人。愚。人。倫。

帝王。祖師ノ名。仙人。以上。勅。非。人。倫。松翁。竹友ノ類。人。倫。不。可。嫌。

愚。レ之。

支體。

顏。髮。如此類人倫不。可。嫌。レ之。以上。愚。

生植。

軒。宮。蒲。篠。枕。筥。筵。蓬。宿。以上。新式。梅。曆。同。梅。

暑。梅。雨。葉。雨。杏。雨。菊。花。酒。桃。花。酒。桃。花。浪。

愚。以上。生。植。也。草。枕。柴。戶。松。門。杉。窓。菅。笠。草。庵。浮。

木。妻。木。以上。非。生。植。也。新。式。分。伐。木。同。新。式。案。鶴。林。與。宗。伊。

藜。羹。嚼。瓜。含。蘭。燒。柏。以上。非。生。植。也。愚。桃花馬。犬。桃花粥。藥。

草木分別物。

躑。躑。卯。花。以上。木。也。藤。草。也。新。式。

衣類分別物。

紐。衣。類。也。帶。冠。沓。以上。非。衣。類。也。新。式。

戀部。

錦。字。詩。御。溝。葉。私。語。以上。戀。也。和。漢。篇。閨。怨。別。字。衣。二。句。

軼。黛。曉。妝。美。人。以上。戀。也。愚。上。陽。人。楊。貴。妃。如。此。故。事。

非。戀。也。定。家。卿。文。治。百。首。入。二。雜。部。二。是。以。爲。二。先。蹤。上。拾。乍。去。當。時。多。分。戀。也。

旅部。

信。書。客。之。一。葉。身。舟。歸。字。漂。泊。以上。旅。和。漢。篇。

遠。鄉。故。山。同。愚。

述懷。

名。利。塵。意。浮。跡。以上。述。懷。也。和。漢。篇。衰。顏。白。髮。老。

釣。名。隱。逃。退。踈。業。以上。述。懷。愚。

釋教。

禪。定。錫。以上。釋。教。也。經。工。夫。觀。音。蛤。般。若。湯。僧。祖。

師ノ名。以上。釋。教。也。

雜物。

椿。蓬。茅。鷗。以上。雜。也。新。式。

體用事。和。漢。聯。句。上。占。無。レ之。近。來。勅。式。被。レ定。レ之。山。類。水。邊。居。所。之。外。無。レ之。

體用體。用體用。如。此。不。可。レ付。レ之。第二句ト第三句ト

同體ニ可_レ付_レ之。

戀之秋句事。

秋句。非戀ヲ。ヒラ秋ノ句ト云。戀之秋句。秋句。非戀。如_レ此三句連_レ之ヲ不可_レ付_レ之。

第二ト第三ト同體ニ可_レ付也。他季同前。

和漢句數事。

和。以三五句爲限ト。漢。同。但至二對句ニ。其ノ内無一定數一者及二六句一。

十句内禁制物。

面八句。裏二句。以上十句。不祥ノ字。戀。述懷。懷舊。釋教。名所。國名。人名。故鄉等ノ字不可_レ用_レ之。

有_レ僧曰。盖和漢聯句之於_ニ萬物_一之法莫_レ大_レ焉。庶幾分_ニ異同之品_一。備_ニ吾之惑_一矣。余曰。久廢_ニ于文_一。倦_ニ于學_一。不可_ニ曾利_一子也。僧嗟嘆而去矣。而後轉_ニ考先賢之式_一。甚擊_ニ末愚之蒙_一。豈卷而懷_レ之乎哉。仍以_ニ連歌新式_一。後普光園關白作。并追加。同。新式今案。後成恩寺禪閣作。和漢篇。同。和

漢追加。當今御作。等錄_レ之訖。就_レ中山川風雨之流。

猶訪_ニ兼載法橋_一記_レ之。其外鳥獸草木之類。

聊以_ニ微官新意_一載_レ之。於_レ是拾遺納言。實隆卿。

和也言_ニ其志_一。漢也加_ニ其語_一。不_ニ亦宜_一乎。雖

然略_ニ事以取_一萬之一二_ニ者也。所詮愚案之

外。既爲_ニ先達之式目_一。莫_レ所_ニ忽緒_一矣。

明應七曆三月下旬

槐下散班

右漢和法式以常州六反田村六地藏寺藏書及藤野草甫本再

按了

群書類從卷第三百七

物語部一

伊勢物語

朱雀院塗籠御本

むかしおとこありけり。うぬかぶりして。なら
の京かすがの里にしるよしして。かりにいさ
けり。其さとに。いともなまめきたる女（女にちからイ）ばらす
みけり。かのおとこかいま見てけり。おもほえ
ずふるさとに。いともはしたなくありければ。
心ちまどひにけり。男きたりけるかりぎぬの
すそをきりて。うたをかきてやる。そのおとこ
しのぶずりのかりぎぬをなんきたりける。
かすかの、若紫の摺ころもしのふのみたれかきりしられす
とな。をいつぎてやれりける。となんいひつ
ぎてやれりける。おもしろきこととや。

陸奥に忍ふもちすりたれゆへに亂れそめけん我ならなくに

といふうたのこゝろばへなり。むかし人は。か
くいちはやきみやびをなんしける。

昔男ありけり。みやこのはじまりける時。なら
の京ははなれ。此京は人の家いまださだまら
ざりける時。西京に女有けり。其女世の人には
まさりたりけり。かたちよりは心なんまされ
りける。人（ひとりのみちイ）そのみもあらざりけらし。それをか
のまめ男うち物かたらひて。かへりきていか
が思ひけん。時は彌生の朔日。雨うちそほふり
けるにやりける。

おきもせずねもせてよるを明しては春の物とて詠め暮しつ
昔男ありけり。けさうしける女のもとに。ひじ
きといふものをやるとて。

思あらは菰の宿にねもしなんひしきものには袖をしつゝも
五條（三條イ）の後の。いまだみかどにも。つかうまつら
で。たゞ人にておはしけるときのことなり。

昔東五條に。おほささいの宮のおはしましけ
る西の對にすむ人ありけり。それをほいには
あらでゆきとぶらふ人。こゝろざしふかゝり
けるを。む月の十日あまり。ほかにかくれにけ
り。ありどころはきけど。人のいきよるべきと
ころにもあらざりければ。なをうしとおもひ
つゝなんありける。又のとしのむ月に。梅花さ
かりなるに。こぞを思ひて。かのにしのだいに
いきて見れど。こぞににるべうもあらず。あば
らなるいたじきに。月のかたむくまでふせり
て。こぞをこひて讀る。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわか身一つはもとのみにして
とよみて。ほのくゝとあくるに。なくくゝかへ
りにけり。

昔男有けり。ひんがしの五條わたりに。いとし
のびいきけり。しのぶ所なればかどよりまい
らで。ついでくさむのくづれよりかよひけり。人たか
しくもあらねど。たびかさなりければ。あるじ
きゝつけて。そのかよひちに。夜ごとに人をす
へてまもらせければ。かのおとこをあはでか
へりにけり。さてつかはしける。

人しれぬわか通路の關守はよひくことにうちもねなくん
とよみけるをきゝて。いといたうえんじける。
あるじゆるしてけり。

昔男有けり。女のえあふまじかりけるを。年を
へていひわたりけるに。からうじて女のこゝ
ろあはせて。ぬすみて出にけり。あくた河とい
ふ河をゐていきければ。草のうへにをきたる
露を。かれはなにぞとなん男にとひける。ゆく
さはいととほく。夜も更ければ。おにある所
ともしらで。雨いたうふり。神さへいといみじ

うなりければ。あばらなるくらの有けるに。女をばおくに。おしいれて。男は弓やなぐひをおひて。とぐちに。はや夜もあけなむとおもひつゝ。ぬたりけるほどに。鬼はや女をばひとくちにくひてけり。あゝやといひけれど。神のなるさはぎにえきかざりけり。やう／＼夜の明行を見れば。ゐてこし女なし。あしずりしてなけどかひなし。

白玉か何そと人のとひし時露とこたへてけなましものを

これは二條の^(る時)后の。御いとこの女御のもとに。つかうまつり人のやうにて。ゐ給へりけるを。かたちのいとめでたうおはしければ。ぬすみていでたりけるを。御せうとのほり河の大將もとつねの。くにつねの大納言などの。いまだげらうにて内へまいり給ふに。いみじうなく人のあるを聞つけて。とりかへしたまひてけり。それをかくおにとはいへる也。いまだい

とわかうて。たゞにきさひのおはしけるときとや。

むかしおとこ有けり。女をぬすみてゐてゆく道にて。水のまんととふに。うなづきければ。つきなんどもぐせねば。手にむすびてのます。さてゐてのぼりにけり。女はかなくなりければ。もとの所へゆく道に。かのし水飲し所にて。

大原やせかゐの水をむすひ上てあゝやと云し人はいづらそといひてきえかゑり。あはれ／＼といへどかひなし。

昔男ありけり。京にありわびて。あづまへゆきけるに。伊勢おはりのあはひの海づらをゆくに。なみのいとしろくたちかへるを見て。おもふ事なきならねば。おとこ。

いと／＼しく過行かたの戀しきにうらやましくもかへる浪哉むかし男ありけり。そのおとこ。身はようなき

ものに思ひなして。京にはをらじ。あづまのかたにすむべき所もとめにとてゆきけり。しなののくにあさまのたけに。けぶりたつを見て。しなるなる浅間のたけに立煙をちかた人の見やとはかめぬもとよりともする人。ひとりふたりして。もろともにゆきけり。みちしれる人もなくて。まどひゆきけり。みかはのくにやつはしといふ所にいたりぬ。そこやつはしといふことは。水のくもでにながれわかれて。木八わたせるによりてなむ八橋とはいへる。その澤のほとりに。木かげにありゐて。かれいひくひけり。その澤にかきつばたいとおもしろくさきたり。それを見て。都いとこひしくおぼえけり。さりければある人。かきつばたといふいつもじを。くのかしらにすへて。たびの心よめといひければ。ひとの人よめり。

から衣きつゝなれにしつましあれは遙々きぬる旅をしそ思

と讀りければ。みな人かれいひのうへに涙落してほとびにけり。ゆきくゝて。するがの國にいたりぬ。うつ山にいたりて。わがゆくすゑのみちは。いとくらくほそきに。つたかづらはしげりて。もの心ぼそう。すぐろなるめを見ることとおもふに。す行者あひたり。かゝるみちには。いかでかおはするといふに。見れば見し人なりけり。京にその人のもとにとて。文かきてつく。

するかなるうつの山への現にも夢にも人のあはぬなりけり富士の山を見れば。さ月つごもり雪いとしろくふりたり。

時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこまたらに雪の降覽この山は。上はひろく。しもはせばくて。大笠のやうになん有ける。高さはひえの山をはたちばかり。かさねあげたらんやうになん有ける。なをゆきくゝて。むさしの國としもつふさの

國と。ふたつがなかに。いとおほきなる河あり。その河の名をば。すみだ川となんいひける。その河のほとりに。むれゐておもひやれば。かぎりなくとをくもきにけるかなとわびをれば。わたしもり。はや舟にのれ。日もくれぬといふに。のりてわたらんとするに。みな人物わびしくて。京に思ふ人なきにしもあらず。さるありにしろき鳥の。はしとあしとあかきが。しぎのおほきさなる。水のうへにあそびつゝ。いををくふ。京には見えぬとりなれば。人々みしらず。わたしもりにとへば。これなむ都鳥と申といふをきゝて。

名にしおはゝいさこととはん都鳥我思ふ人は有やなしやととよめりければ。舟人こぞりてなきにけり。その河渡り過て。都に見しあひて物がたりして。ことづてやあるといひければ。

都人いかゝとはゝ山たかみはれぬ雲ゐにわふとこたへよ

むかし男。むさしの國まどひありきけり。その國なる女をよばひけり。父はこと人にあはせんといひけるに。母なんあてなる人に心つけたりける。父はたゞ人にて。母なん藤原なりける。さてなんあてなる人にとはおもひける。此むこがねに。よみてをこせたる。すむさとは。むさしのくにいるまのこほりみよしのの里なり。

み吉野の頼むの鴈もひたふるに君か方にそよるとなくなるかへし。むこがねかへし。

我方によるとなくなるみ吉野のたのむの鴈をいつか忘れん人の國にても。かゝることは。たえずぞありける。

昔男有けり。東へゆきけるに。友だちに道よりをこせける。

忘るなよほとは雲ゐに成ぬとも空行月のめぐり逢まで

むかしおとこありけり。女をぬすみて。むさし

の國へ行ほどに。ぬす人成ければ。くにのつか
さからめければ。女をば草むらの中にをきて
にげにけり。みちゆく人。此野はぬす人ありと
て。火をつけんとするに。女わびて。

むさしのはけふはな焼そ若草の妻もこもれり我もこもれり
とよみけるを聞て。この女をばとりて。ともに
ゆきにけり。

昔。武藏なる男。京なる女のもとに。きこゆれば
はづ・し。(か脱略)きこ・ねばくるしとかきて。うはが
きにむさしあふみとのみ書て。のちをともせ
ずなりにければ。京より女。

武藏鎗流石に懸て思ふにはとはぬもつらしとふもうるさし
とあるを見てなん。たへがたきこゝちしけり。
とへはいふとはねは恨む武藏鎗かゝる折にや人はしぬらん
むかし男。みちのくにに。すゞろにいたりにけ
り。そこなる女。京の人をば。めづらやかにかあ
もひけん。せちにあもへるけしきなん見えけ

る。さてかの女。

中々に戀にしなすはくはこにそなるへかりける玉のを計り
うたさへぞひがめりける。さすがにあはれと
やおもひけん。いきてねにけり。夜ふかく出に
ければ女。

夜も明はきつにはめなてくたかけのまたきに鳴てせなをやりつる
といひけり。おとこ京へなんまかるとて。

栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいさといはまし
といへりければ。よろこびて思ひけりくゝと
ぞいひける。

昔。男。みちの國へありきけるに。なでうことな
き人のむすめにかよひけるに。あやしくさや
うにてあるべき女にはあらず見えければ。

忍ふ山しのひてかよふ道もかな人の心の奥もみるへく
女かぎりなくめでたしとおもへど。さるさが
なきえびす所にては。いかゞはせん。

昔。みちのくににおとこすみけり。みやこへい

なんとするに。女いとかなしと思ひて。むまのはなむけをだにせんとて。あきのぬみやこつしまといふ所にて。さけのませんとしてよめる。

おきのゐて身を焼よりもわひしきは都つしまの別れなり梟とよめりけるに。めでたとまりにけり。

むかし。きのありつねといふ人有けり。みよのみかどにつかへて。ときにあひたりけれど。のちには世かはり時うつりにければ。よのつね時うしなへる人になりにけり。人からは心うつくしう。あてなることをこのみて。こと人にもにず。よのわたらひ心もなくまづしくて。猶むかしよかりし時の心ながら。ありわたりけるに。よのつねのこともしらず。としごろありなれたる女も。やう／＼とこはなれて。つゐにあまになりて。あねのさきだちてあまになりけるがもとへゆく。おとこ。まことにむつま

じき事こそなかりけれ。いまはとてゆくを。いと哀とはおもひけれど。まづしければ。するわざもなかりけり。思ひわびて。ねんごろにかたひけるともだちに。かう／＼今はとてまかるを。何事もいさゝかの事もせで。つかはすこととかきて。おくに。

手を折てへにける年を数ふれは十と言つゝよつはへにけりこのともだちこれを見て。いとあはれとおもひて。女のさうぞくを一具をくるとて。

年たにもとをとてよつをへにけるを幾度君を頼みつきらんかくいひたりければ。よろこびにそゑて。

これやこのあまの羽衣むしこそ君かみけしに奉りければ。よろこびにたへかねて又。

秋やくる露やまかふと思ふまであるは涙のふるにそ有ける昔。年比音信ざりける人の。櫻見に來たりければ。あるじ。

あたなりとなに社たてれ櫻花としにまれなる人もまちけり

返し。

けふこすはあすは雪とそ降なまし消すは有と花とみましや
むかし。なま心ある女ありけり。男とかういひ
けり。女歌よむ人なりければ。こゝろみんとて
むめを折てやる。

紅にゝほふはいつら白雪の枝もたはゝにふるやとも見ゆ
おとこしらす。よみによみけり。

紅にゝほふかうへのしら雪は折ける人の袖かとそ見る

昔男。みやづかへしける女(の方に)たちなりける人
をあひしれりけり。ほどもなくかれにけり。お
なじところなりければ。さすがに女のめには
見ゆるものから。男はあるものにもおもひた
らねば。をんな。

天雲のよそにも人のなりゆくか流石にめには見ゆる物から
とよめりければ。おとこ。

行かへり空にのみしてふることは我いる山の風はやみなり
とよめるは。あまた男ある女になむありける。

昔おとこ。やまとにある女をよばひて。あひに
けり。さてほどへて。宮づかへしける人なりけ
れば。かへりけるみちに。やよひばかりに山に
かえでのみぢの。いとおもしろきをおりて。
すみし女のもとにみちより。

君かためたをれる枝は春なからかくこそ秋の紅葉しにけれ
とてやりたりければ。返事は京にいきつきて
なん。もてきたりける。

いつのまに移るふ色のつきぬらん君か里には春なかるへし
昔男女。いとかしこう思ひかはして。ことごと
ろなかりけるを。いかなることか有けむ。はか
なきことにことづけて。よの中をうしと思ひ
て。いでていなんとて。かゝる歌なん物にかき
つけり。

出ていなは心かるしといひやせん世の有様を人はしらすて
とよみて。をきて出ていにけり。この男かくか
きをきたるをみて。心うかるべきこともおぼ

えぬを。何によりてならむ。いといたううちなきて。いづ方にもとめゆかんと。かどに出てとみかうみ見けれど。いとこを^{ライ}はかともおぼえざりければ。かへり入て。

思ふかひなき世成けり年月をあたに契て我かすまひし人はいさなかもやすらん玉かつら佛にのみいてゝみえつゝといひてながめをり。この女いとひさしくありて。ねんじかねてにやあらん。かくいひをこしたり。

今はとて忘るゝ草のたねをたに人の心にまかせすもかな返し。おとこ。

忘草かるとたにきく物ならは思ひけりとはしりもしなましまたくありしよりけにいひかはして。おとこ。

忘るらんと思ふ心のうたかひに有しよりけに物そかなしきかへし。

中空に立ゐる雲のあともなく身のはかなくも成ぬへきかなとはいひけれど。をのが世々になりにければ。

うとく成にけり。

むかしはかなくてたえにける中。を^{なをやイ}かわすれざりけん女のもとより。

うきながら人をはえしも忘れはかつ恨つゝ猶そ戀しきといひければ。さればよと思ひて。

あひはみて心ひとつをかはしまの水の流れ絶しと思ふとはいひけれど。その夜いにけり。いにしへゆくさきの事どもぞおもふ。

秋のよのちよを一夜に準へてやちよしねはや飽由のあらん返し。

秋夜の千夜を一よになせりともことは残て鳥や鳴なんいにしへよりも哀にてなむかよひける。

むかし。いなかわたらひしける人の子ども。非のもとにいであそびけるを。おとなになりければ。おとこも女もはぢかはしてありければ。男はこの女をこそえめ。をんなはこの男をと思ひつゝ。おやのあはすることもしかで

なんありける。さてこのとなりのおとこのもとよりなん。

筒ゐつの井筒にかけし曆かたけ過にけらしな君あひ一本見さるまに返し。

くらへこし振分髪もかたすきぬ君ならすして誰あひ一本かなつへき
かくいひて。ほいのごとくあひにけり。さて年
ごろふるほどに。女のおやなくなりて。たより
なかりければ。かくてあらんやはとて。かうち
のくにたかやすのこほりにいきかよふ所いで
きにけり。さりけれど。このもとの女。あしとお
もへるけしきもなく。くるればいだしたてゝ
やりければ。男こと心ありて。かゝるにやあら
んとおもひうながひて。ぜんざいのなかにか
くれゐて。かの河内へいぬるかほにて見れば。
この女。いとようけさうして。うちながめて。
風吹はおきつしら浪たつた山夜半にや君か獨ゆくらん
とよめりけるをさゝて。限なくかなしと思ひ

て。河内へもおさ／＼かよはずなりにけり。さ
てまれ／＼かのたかやすのこほりにいきて見
れば。はじめこそ／＼にく／＼もつくりけれ。
いまはうちとけて。髪をかしらに巻あげて。お
もながやかなる女の。てづ／＼いひがいをとり
て。けこのうつはものに。もりてゐたりけるを
みて。心うがりていかずなりにけり。さりけれ
ば。かの女やまとのかたを見やりて。

君かあたり見つゝをくらん伊駒山雲な隠しそ雨はふるとも
といひて見いだすに。からうじて。やまと人こ
ひといへり。よろこびてまつに。たび／＼過ぬ
れば。

君こむと云しよことに過ぬれは頼めぬ物のこひつゝそをる
といへりけれど。あとこそすまずなりにけり。
昔男。かたいなかにすみけり。あとこ宮づかへ
しにとて。わかれあしみてゆきにけるまゝに。
みとせこざりければ。まちわたりけるに。いと

ねんごろにいひける人に。こよひあはんとち
ぎりたりけるに。この男きたりけり。この戸あ
けたまへと。たゞきければ。あけてなんうたを
よみていだしたりける。

あら玉の年のみとせを待わひてたゞ今宵社新枕すれ
といひいだしたりければ。おとこ。

梓弓まゆみ槻弓としをへて我せしかことうるはしみせよ
といひて。いなんとすれば。うらみて女。

あつさ弓ひけとひかねと昔より心はきみによりにしものを
といひけれど。男かへりにけり。女いとかなし
うて。しりにたちてをひけれど。えをひつか
で。し水のある所にふしにけり。そこなる岩に。
をよびのちしてかきつけゝり。

あひ思はてかれぬる人をとゞめかね我身は今ぞ消果ぬめる
とかきて。いたづらになりにけり。

昔おとこありけり。あはじともいはざりける
女の。さすがなりけるがもとにいひやりける。

秋の^{に一本}の簀分し朝の袖よりもあはてぬる夜そひち勝りける
色ごのみなりける女。返し。

みるめなき我身を浦としられはや枯なて疊の足たゆくくる
昔男。人のむすめのもとに一夜ばかりいきで。
またもいかずなりにければ。女のおやはらだ
ちて。手あらふ所に。ぬきすをとりてなげすて
ければ。たらひの水に。なくかげのみえけるを。
みづから。

我はかり物思ふ人は又あらしと思へは水のしたに有けり
とよめりけるを。このこざりけるおとこきゝ
て。

水口に我やみゆらん蛙さへ水の下にてもろこえになく
昔いろごのみなりける女。いでていにければ。
いひがひなくて。男

なとてかくあふ^{かたみとも一本}こかたみと成ぬらん水もらさしと契^{むすひ一本}し物を
二條後の春宮のみやす所と申ける時の御かた
の花の宴に。めしあげられたりけるに。肥後の

すけなりける人。

花にあかぬ数はいつもせしか共けふの今宵にしく物そなきしをりをなき一本

とよみてたてまつれり。

むかしおとこ。はつかなりける女に。

逢ことは玉のをはかり思ほえてつらき心のなかくみるらん

むかしおとこ。宮のうちにて。あるごたちのつ

ばねのまへをわたるに。なにをあだとかおも

ひけん。よしや草葉のならんさが見んと。いひ

ければ男。

つみななき人をうけへは忘草をのか上にそおふといふなる

といふを。ねたう女も思ひけり。

昔男。津のくにむばらのこほりにすみける女

にかよひける。此たびかへりなば。又はよもこ

じと思へるけしきをみて。女のうらみければ。

あしまよりみちくる汐のいやましに君に心を思ひます哉一本

女返し。

こもり江に思ふ心をいかてかは舟さす棹のさしてしるへき

いなかの人のことにてはいかゞ。

むかしおとこ。つれなかりける人のもとに。

いへはえにいねはむねのさはかれて心一つになけく比哉

おもひくいていへるなるべし。

むかし男。心にもあらでたえにける女のもと

に。

玉のをあはをによりて結へれは逢ての後もあはぬ成けりあはらと思ふ一本

昔忘ぬなめりと。とひごとしける女のもとに。

谷せはみ峯まではへる玉かつら絶んと人をわか思はなくに

女かへし。

偽と思ふ物から今さらにたかまことをか我はたのまん

むかしおとこ。いろごのみなりける人をかた

らひて。うしろめたなしとやおもひけん。

我ならで下紐とくな朝かほの夕かけまたぬ花には有とも

女かへし。

ふたりして結ひし物を獨して逢みんまではとかしと思ふ

むかし。きのありつね物にいきて。ひさしうか

へらざりけるにいひやる。

君により思ひならひぬ世中の人は是をや戀といふらん
返し。

習はねは世の人ことに何をかも戀とはいふととひわふれ共
昔わかき男。けしうあらぬ人を思ひけり。さか
しらするおやありて。おもひもつくとして。この
をんなをほかへならんといふ。(おひやちんとすい)人の子なれば。
まだ心ごゝろのいきをひなくて。えとゞめず。
女もいやしければ。すまふちからなし。さこそ
いへ。まだえやらざるあひだに。思ひはいや
まさらにまざる。おやこの女ををひいづ。男ち
のなみだをおとせども。とゞむるちからなし。
つひにいぬれ。女かへし人につけて。
(ふくいていぬい)

いつこまでおくりはしつと人とは、あかぬ別れの涙河まで
おとこなく／＼よめる。

いとひては誰か別の難からんありしにまざるけふは悲しな
とよみてたえいりにけり。おやあはてにけり。
なをざりに思ひてこそいひしか。いとかくし

もあらじとおもふに。まことにたえいりたれ
ば。まどひて願などたてけり。けふのいりあひ
ばかりにたえいりて。又の日のいぬの時げか
りになん。からうじていきいでたりける。むか
しのわか男は。かゝるすける物思ひなんしけ
る。今のおきなまさになんやは。

昔女はらからふたり有けり。ひとりはいやし
き男のまづしき。ひとりはあてなる男のとき
あるもちたりけり。そのいやしきおとこもち
たる。しはすのつごもりに。うへのきぬをあら
ひて。手づからはりけり。心ざしはいたしけれ
ども。いまださるわざもならはざりければ。う
へのきぬのかたをはりさきてけり。せんかた
もなく。なきにのみなきけり。これをかのあ
てなる男きゝて。いと心ぐるしかりければ。い
ときよげなりける四位のうへのきぬ。たゞか
た時に見いでて。

紫の色こき時はめもはるに野なる草木そわかれさりける

むさし野の心なるべし。

昔男。色ごのみとしる／＼。女をあひしれり。にくくもあらざりけれど。なをいとうたがひうしろめたなしうへに。(きん)いとたゞには。あらざりけり。ふつかばかりいかで。かくなん。

みち一本 出て行あたとにいまたかはかぬにたか通路と今はなるらん

ものうたがはしさに。よめるなりけり。

昔かやのみこと申すみこおはしましけり。其みこ女をいとかしこう。めしつかひたまひけり。いとなまめきて有けるを。わかき人はゆるさざりけり。我のみと思ひけるを。又人きゝつけて文やる。郭公のかたをつくりて。

時鳥なかなく里のあまたあれは猶うとまれぬ思ふ物から

といへりけり。この女けしきをとりにて。

名のみたつしてのおさはけさそなく庵數多に疎まれぬは

時はさ月になんありければ。男又返し。

いほり多きしてのおさは猶頼む我すむ里に聲したえすは昔あがたへゆく人に。馬のはなむけせんとて。よびたりけるに。うとき人にしあらざりければ。いへとうじして。さかづきさゝせなどして。女のさうぞくかづく。あるじの男うたをよみて。ものこしにゆひつけさす。

いてゆく君か爲にとぬきつれば我さへもなく成ぬへき哉むかし宮づかへしける男。すぐろなるけがらひにあひて。家にこもりゐたりけり。時はみな月のつごもりなり。夕暮に風すゞしく吹。螢など飛ちがふを。まぼりふせりて。

行螢雲の上までいぬへくは秋風吹とかりにつけこせ

昔すき者の心ばえあり。あでやかなりける人のむすめのかしづくを。いかで物いはんと思ふ男有けり。ころよはいひいでんことやかたかりけん。物やみになりてしぬべきとき。かくこそおもひしかといふに。おやきゝつけ

たりけり。まどひきたるほどに。しにゝければ。家にこもりて。つれくゝとながめて。

暮かたき夏の日くらしなかわれはその事となく物を悲しきむかしおとこ。ねんどろにいかでと思ふ女ありけり。されどこの男あだなりときゝて。つれなさのまさりて。

大幣のひくてあまたに聞ゆれは思へとえこそ頼まさりければ。

大幣と名に社たてれ流れてもつゐによるせはあるてふ物をむかしおとこ有けり。ものへ行人に。むまのはなむけせんとて。ひと日まちけるに。こざりければ。

今しる苦しき物と人またん里をはかれすとふへかりけり昔男。いもうとのおかしげなるを見て。

うらわかみねよげにみゆる若艸を人の結はぬことをしと思ふときこえければ。返し。

初草のなとめつらしきことのはそうらなく物を思ひける哉むかし男有けり。人をうらみて。

鳥のこをとをつゝ十はかさぬとも思はぬ人を思ふものかけ白露をけたて千とせはありぬともいかにたのまん人の心をとといへりければ。をんな。

朝露は消のこりても有ぬへし誰か此世をたのみはつへき又おとこ。

吹風にこそそのさくらはちらすともあなたのみかた人の心や又返し。女。

行水にかすかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり又おとこ。

行水とすくる齡とちる花といつれまでてふことをきくらんあだにて。たがひにしのびありきすることをいふなるべし。

むかしおとこ。人の前裁うへけるに。

古今 移し植は秋なき時やさかさらん花こそちらめねさへ枯めやむかしおとこありけり。人のもとより。かざりちまさをこせたる返事に。

菖蒲かり君は沼にそ惑ひける我は野に出てかくそをゝしきとて。きじをなんやりける。

むかしおとこ。あひ一本ありがたかりける女に。物がたりなどするほどに。とりのなきければ。

は一本いかてかく鳥のなくらん人しれすおもふ心はまた夜深きにむかしおとこ。つれなかりける女に。いひやりけり。

行やらぬ夢路をたとる袂にはあまつそらなき露やをくらん昔男。ふして思ひあきておもひあまりて。

我袖は草の庵にあらねともくるれは露のやとりとそなる昔。人しれぬ物おもひける男。つれなき女のもとに。

戀わぬひめ（きイ）蛸のかるもに宿るてふ我から身をもくたきつる哉昔。心つきなま色（きイ）このみなる男。なが岡といふ所に家つくりてをりけり。そこのとなりなりける宮ばらに。こともなき女（むイ）どもありけり。ゐなかなりければ。田からすとて此男見をりけるに。いみじのすきものの。しわざやとてあつまりいりきければ。此男あくににげいりにけり。

り。女かく。

あれにけりあはれ幾よの宿なれや住けん人のをとつれもせずといひて。あつまりきければ。男。

舊生（鬼イ）て荒たる宿のうれたきはかりにもおきのすたく也けりといひてなむ出したりける。此女どもほひろはんといひければ。

打わひて落穂拾ふときかませは我も田つらにゆかまし物を昔男有けり。宮づかへもいそがしくて。心もまめならざりければ。家とうじ（イニナシ）と新（イニナシ）まめに思はんといいける人につきて。人の國へいにけり。この男うさの使にていきけるに。ある國のしどうの官人のめになんあると聞て。女あるじに。かはらけとらせよ。さらばのまんといひければ。かはらけとらせて。いだしたりけるに。さかななりけるたち花をとりて。

さ月まつ花橋の香をかけは昔の人の袖のかそるといへりけるにぞ。思ひ出てあまになりて。山

には入にける。

昔つくしまでいきたりける男有けり。これは
いろこのむなるすきものぞと。すだれのうち
なる人のいひけるをきゝて。男。

染河を渡らん人のいかでかは色になるてふことなかるへき
のなからん一本

女返し。

あるへき一本
名にしおはゝあたにぞ思ふたはれ鵜浪の濡衣きるといふ也

昔年ごろをとろへざりける女。心かしこくや
あらざりけん。はかなき人のことにつきて。人
の國なりける人につかはれて。もとみし人の
まへにいできて。物くはせなどしありきけり。
長きかみをきぬのふくろに入て。遠山ずりの
ながきあををぞきたりける。よざりこのあり
つる人たまへと。あるじにいひければ。をこせ
たりけり。男われをばしらずやとて。

いにしへの匂ひはいづら櫻花ちれるが如一本わけるかこともなりける哉

といふを。いとはづかしとおもひて。いらへも

せでゐたるを。などいらへもせぬといへば。涙
のながるゝに。めもみえずものもいはれずと
いへば。おとこ。

是やこの我にあふみをのかれつゝ年月ふれとまさり顔なみ
といひて。きぬぬぎてとらせけれど。すててに
げにけり。いづこにいぬらんともしらず。

むかし。世ごゝろある女。いかでこのなさけあ
る男をかたらひてしがなと思へども。いひい
でんにもたよりなければ。まことならぬ夢が
たりを。むす子みたりをよびあつめてかたり
けり。ふたりの子はなさけなくいらへてやみ
ぬ。さぶらふなりけるなん。よき御おとこぞい
でこむとあはするに。この女けしきいとよし。
こと人はいとなさけなし。いかでこの在五中
將にあはせてしがなとおもふ心ありけり。か
りしありきける道にゆきあひにけり。馬のく
ちをとりて。やうくなんおもふといひけれ

は。あはれがりてひとよねにけり。さてのちを
さをさこねば。女おとこの家にいきて。かいま
見けるを。男ほのかにな見て。

百とせにいとせたらぬつくもかみ我をこふらし俤にたつ

といひて。馬にくらおかせていでたつけしき
を見て。むばらからたちともしらずはしりま
どひて。家にきてふせり。男この女のせしやう
に。しのびてたてりて見ければ。女うちなきて
ぬとて。

さむしろに衣片しきこよひもや戀しき人にあはてわかねん
とよみけるを。あはれとみてその夜はねにけ
り。世中のれいとして。思ひおもはぬ人有を。
この人はそのけぢめ見せぬこゝろなんあり
ける。

むかし男。女をみそかにかたらふわざもせざ
りければ。いづこなりけむ。あやしさによめ
る。

吹風に我身をなさは玉すたれひま求めつゝいらましものを
いるへき一本
は二本

とりとめぬ風にはあれと玉簾たかゆるさはか隙もとむへき
とてやみにけり。

昔。みかどの時めきつかはせ給ふ女。色ゆるさ
れたる有けり。おほみやす所とていまそかり
けるが御いとこなりけり。殿上につかはせ給
ひける。ありはらなりける男。女がたゆるされ
たりければ。女のある所にいきて。むかひをり
ければ。女いとかたはなり。身もほろびなん。
かくなせそといひければ。

思ふには忍ふることそ負にける逢にしかへはさもあらはあれ
といひて。さうしにありたまへば。いとさう
しには。人の見るをもしのばでのぼりぬけれ
ば。此女思ひわびてさとへゆきければ。なにの
よきこととおもひてゆきかよふに。みな人さ
きてわらひけり。つとめてとのもづかさの見
このより一本

るに。くつはとりておくになげいれてのぼり
ゐて。かくかたはにしつゝありわたるよ。身も
いたづらになりぬべければ。つゝにほろびぬ
べしとて。この男いかにせん。わか（わか）ゝる心や
め給へと。ほとけ神にも申けれど。いやまさり
つゝおぼえつゝ。なをわりなくこひしきこと
のみおぼえければ。かななぎをんやうじして。
こひせじといふみそぎのぐしてなんいきけ
る。はらへけるまゝに。いとかなしきことの
みかずまさりて。ありしよりけに戀しくのみ
おぼえければ。

戀せしとみたらし河にせしみそき神はうけすも成（けらしも古今）にける哉

といひてなんきにける。

このみかどは。御かほかたちよくおはしまし
て。曉には佛の御名を心にいれて。御聲はいと
たうとくて申給ふを聞て。此女はいたうなげ
きけり。かゝる君につかうまつらで。すぐせつ

たなうかなしきこと。此男にほだされてと思
ひてなんなきける。かゝるほどに。みかどきこ
しめしつけて。此男ながしつかはしければ。あ
の女をば。いとこの宮す所まかでさせて。との
のくらにこめてしほり給ひければ。くらにこ
もりて。なくく。

蟹のかるもにすむ虫の我からとねを社なかも世をは恨みし
となきをれば。此男は人の國より夜ごとにし
つゝ。笛いとおもしろくふきて。聲はいとおか
しくてうたをぞうたひける。此女くらにこも
りながら。そこにぞあなりとはきゝけれど。逢
見るべきにもあらで。かくなん。

さり共と思ふらん社悲しけれ有にもあらぬ身をはしらすて
とおもひをり。おとこは女しあはねば。かくし
ありきつゝうたふ。

徒に行てはかへる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつゝ
二條のきさきともこのことは一本
水のおの御時の事なるべし。おほみやす所と

は。そめどのの后なり。

むかし男。つのくににしろところありけり。あにをとゝもだちなんどひきゐて。なにはのかたにいさけり。なぎさをうち見ければ。船どものあるを。

に一本
難波津をけふこそみつの浦ことに是や此よをうみわたる舟

これをあはれがりて。人々かへりにけり。

昔男。いづみの國にいさけり。つの國住よしのこほりすみよしの里のはまゆくに。いとあもしろければ。ある人すみよしのはまとよめといふに。

鷹なきて菊の花さく秋はあれと春は海へに住吉の濱

とよめりければ。みな人よまずなりにけり。

昔男有けり。その男伊勢の國にかりのつかひにいさけるを。かの伊勢の齋宮なりける人のあや。つねの使よりは此人よくいたはれといひやりけり。あやのいふことなりければ。いと

ねんごろにいたはりけり。あしたにはかりにいだしたてゝやり。ゆふさはこゝにかへりこさせけり。かくてねんごろにいたはりけるほどに。いひつぎにけり。二日といふ夜われてあはむといふ。女はたいとあはじとも思へらず。されど人めしげればえあはず。つかひさねとある人なれば。とをくもやどさず。ねやちかくなん有ける。女人をしづめて。ねひとつばかりに男のもとにきにけり。男はたねられざりければ。とのかたを見いだしてふせるに。月のおぼろなるに人のかげするを見れば。ちいさきわらはをさきにたてゝ人たてり。おとこいとうれしくて。わがぬる所にゐていりて。ねひとつよりうしみつまで物かたらひけり。いまだなにごともかたらひあへぬほどに。女かへりにければ。男いとかなくねず成にけり。つとめてゆかしけれど我人をやるべきに

しあらねば。心もとなくてまちみれば。あけはなれてしばしあるほどに。女の許より詞はなきて。

君やこし我やゆきけんおもほえす夢か現かねてかきめてか男いたううちなきて。

かきくらす心のやみに惑ひにき夢うつゝとは今宵よひに一本さためよ

とてかりにいでぬ。野にありきけれど心はそらにて。いつしか日もくれなんとおもふほどに。國のかみの。いつきの宮のかみかけたりければ。かりの使ありときゝて。夜ひとよさけのみしければ。もはらあひごととせで。あけばおはりの國へたちぬべければ。男もをんなも。なみだをながせどもあふよしもなし。夜やうやうあけなんとするほどに。女のかたよりいだすさかづきのうらに。

かち人のわたれはぬれぬえにしあれは

とかきてすゑはなし。そのさかづきのうらに。

ついまつのすみしてかきつく。

またあふさかのせきはこえなん

あくれば。おはりへこえにけり。

むかし男。かりの使よりかへりけるに。おほよどのわたりにやどりて。いつきのみやのわら（はべい）ゑにいひかけける。

みるめかるかたはいつこそ掉さして我にをしへよ蟹の釣舟昔男。伊勢の齋宮に内の御使にてまいれりければ。かの宮にすてこと（ア、チ一本）いひける女。わたくしごとにて。

千早振神のいかきもこえぬへし大宮人の見まくほしきにおとこかへし。

戀しくはきてもみよかし千早振神のいさむる道ならなくにむかし。そこにありときゝけれど。せうそこをだにいふべくもあらぬ女のあたりをありさて。男のおもひける。

ありとみて手にはとられぬ月のうちの桂男（のこゝろ一本）の君にも有かな

むかし。女をいたううらみて。

岩根ふみかさなる山はへたてねとあはぬ日おほく戀渡る哉
むかし男。伊勢の國なりける女に。又もえあは
でうらみければ。女。

大淀の濱におふてふみるからに心はなきぬかたらはねとも
といひて。ましてつれなかりければ。

袖ぬれて蠶の刈干すわたつ海のみるめ逢迄やまんとやする
女。

岩間より生るみるめし常ならは汐干汐みちかひもあらなん
又。おとこ。
しほりくはかひもあらなん
一本ありなし一本

涙にそぬれつゝしほるあた人のつらき心は袖のしつくか
とのみいひて。世にあふことかたきことにな
ん。

むかし男。伊勢國なりける女を。またはえあは
で。となりの國へいくとて恨ければ。女。

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪哉
昔。二條の後の春宮のみやす所と申けるころ。
氏神にまうで給けるに。つかうまつれりける

このゑづかさなりける翁。人々のろく給はり
けるつゐでに。御車より給はりてよみて奉る。
大原や小鹽の松もけふこそは神世のこともおもひいつらめ
山へを
しる一本古今
昔きたのみこと申すみていまそかりけり。田
村の御門のみこにおはします。そのみこうせ
給ひて。なゝ七日のみわざ安祥寺にてしけり。
右大將藤原のつねゆきといふ人。其みわざに
まいり給ひて。かへさに山しなのぜんじのみ
この御もとにまいり給ふに。その山科の宮。瀧
おとし水はしらせなどして。おもしろく作れ
り。まうで給ふて。年比よそにはつかうまつれ
ど。まだかくはまいらず。こよひはこてにさぶ
らはんと申給ふを。みこよろこび給ひ。よるの
おまし所まうけさせ給ふ。この大將いでて。人
にたばかり給ふやう。宮づかへのはじめにた
だにやは有べき。三條にみゆき有し時。きのく
にの千里の濱にありけるいとおもしろき石奉

れりき。みゆきの後奉れりしかば。あるみさう
しのまへのみぞにすへたりしを。このみこの
み給ふものなり。かの石をたてまつらんとの
たまひて。とりにつかはす。いくばくもなくて
もてきぬ。この石きくよりは見るまさりたり。
これをたゞにたてまつらば。すぐろなるべし
とて。人々に歌よませ給ふ。むまのかみなりけ
る人よめり。

あかねとも岩にそかふる色みえぬ心をみせん由のなけれは
この石は。あをきこけをささみて。まきえをし
たらむやうにぞありける。

昔。氏の中にみこうまれ給へりけり。御うぶや
に。みな人々歌よみけり。御おぼぢのかたなり
けるおきなのよめる。

我もとに千尋あるかけをうゑつれば夏冬誰か隠れさるへき
これはさだかずのみこ。中納言ゆきひらのむ
すめのはらなる清和の親王なり。時の人中将

の子となんいひける。

むかし。おとろへたる家に藤の花うへたる人
ありけり。いとおもしろうさけりけり。やよひ
のつごもり。雨のそぼふるに。人のもとにあり
てたてまつるとて。

ぬれつゝそしめて折つる藤の花春は幾日もあらしと思へは
昔。左のおほぬまうち君いまそかりける。かも
河のほとりに。六條をいとおもしろくつくり
てすみ給ひけり。神な月のつごもりがたに。菊
の花うつろひて。木くさのいろちぐさなるこ
ろ。みこたちおはしまさせて。さけのみあそ
びて。夜あけゆくまゝに。このとののおもしろ
きよしほむるうたよむに。そかなりけるかた
いおきな。みな人によませはてし。いたじきの
したをはひありきてよめる。

鹽竈にいつかきにけん朝なきに釣する舟はこゝによらなん
とよめるは。みちのくににいきたりけるに。あ

やしうおもしろき所々おほかりけり。わがみ
かど六十餘國のうちに。しほがまといふ所に
にたる所なかりけり。さればなんかのおきな
もめでてしかはよめるなり。しほがまうさし
まのかたをつくりけるとなん。

昔。ふか草のみかどの。せり川のみゆきし給け
るに。なまおきなの。いまはさることになげなく
思ひけれど。もとつきにけることなれば。おほ
かたのたか^{たか}がひにてさぶらひ給ひけるを。す
りかりぎぬの袂に。鶴のかたをつくりてかき
つけける。

養年七十
行平彌
翁さひ人なとかめそ狩衣けふばかりとそたつもなくなる

おほやけの御きそくもあしかりけり。をのが
よはひ思けれど。わかゝらぬ人さゝとがめけ
り。

昔。これたかときこゆるみこおはしけり。山ざ
きのあなたに水無瀬といふ所に宮ありけり。

年ごとの櫻の花ざかりに。かしこへなんかよ
ひ給ひける。その時むまのかみなりける人ま
いりつかうまつりければ。御供におくらかし
給はで。つねにゐておはしましけり。なぎさの
院の櫻。ことにおもしろくさけり。木のもとに
ありゐて。枝をおりてかざしにさして。みな人
歌をよむに。うまのかみなりける人のよめり。
世中にたえて櫻のさかさらは春の心はのとけからまし
また人。

これはこそいと櫻はあはれなれ何か浮世に久しかるへき
むかし。おなじみこ交野に狩しありき給ける
に。馬かみなりける人を。かならず御供にゐて
ありき給ひけり。れいのごとありき給ふに。こ
の人かめにさけをいれて。野にもていでたり。
のまんとてきよき所もとめゆくに。あまの河
といふところにいたりぬ。むまのかみおほみ
さまいる。みこののたまひける。かた野をかり

てあまの河原にいたるを題にてうたよみて。
さかづきさせとの給ひければ。よみてたてま
つれり。

狩くらし七夕つめに宿からんあまの河原に我はきにけり

ときこえければ。此うたをみこかへすく詠
たまうて。返しえし給はず。きのありつね御と
もにつかうまつりたりけるが。かへし。

一年にひとひきます君までは宿かす人もあらしと思ふ

歸りて宮にいらせ給ぬ。夜ふくるまで酒のみ
物語して。あるじのみこゑひていり給ひなん
とす。十日あまりの月かくれなんとす。それに
かのむまのかみなりける人のよめる。

あかなくにまたきも月の隠るゝか山端逃ていれすもあら南
みこにかはりて。きのありつね。

をしなへて峯もたひらに成なゝん山端なくは月もかくれし

昔。みなせにかよひ給ふこれたかのみこ。れい
のかりしありき給ひにけり。御ともにうまの

かみなりけるおきなつかうまつれり。日比へ
て宮にかへり給ひにけり。御をぐりしてとく
いなんとおもふに。おほみき給ひろく給はせ
んとて。つかはさざりければ。こゝろもとなく
て。

枕とて草引むすふこともせし秋のよとたにたのまれなくに
とよみければ。やよひのつごもりなりけり。み
こおほとのごもらであかし給ひけり。かくし
つゝまいりつかうまつりけるを。思ひのほか
に御ぐしおろさせ給ひて。小野といふ所にす
み給ひけり。む月におがみたてまつらんとて
まうでたるに。ひえの山のふもとなれば雪い
とたかし。しゐてみむろにまうでておがみ奉
るに。つれづれといと物がなしうておはしま
しければ。やゝ久しく侍らひて。いにしへの事
など思ひ出て聞えさせけり。さてもさぶらひ
てしがなとおもへども。おほやけごともあれ

ばえさぶらはで。暮にかへるとてよめる。

ついで忘れては夢かと思ふおもひきや雪ふみ分て君をみんとは

とよみてなん。なく／＼かへりにける。

昔男有けり。身はいやしなから。は／＼みこなりけり。その母なが岡といふ所にすみ給ひけり。子は京に宮づかへしければ。まうづとしければ。／＼もえまうでず。ひとり子にさへ有ければ。いとかなしうし給けり。さるほどにしはすばかりに。とみのこととて御ふみあり。驚て見れば。こととはなくて。

老ぬれはさらぬ別も有といへはいよくみま／＼ほしき君哉となん有ける。是を見て馬にものりあへずまいるとて。道すがらおもひける。

なけく世中にさらぬ別のなくもかな千世もとたのむ人の子のため

の一本

昔おとこ有けり。わらはよりつかうまつりける君。御ぐしおろし給ふてけり。もとの心うしなはじとて。む月にはかならずまうでけり。お

ほやけの宮づかへしければ。しば／＼もえまいらざりけれど。心ざしばかりはかはらざりければまうでたるに。また昔つかうまつりし人のぞくなる。ほうしなる。まいりあつまりて。む月なれば。ことたべとておほにぶきたまひけり。雪こぼすがごとくふりて。日ぬもすにやまず。みな人ゑひて。雪にふりこめられたるを題にて。歌よまんといふに。

思へとも身をしわけねはめはかれぬ雪のつもるそ我心なるとよめりければ。みこいといたう哀がりて。御ぞぬぎて給へりけり。

むかし。いとわかきおとこ。わかき女をあひいへりけり。をの／＼おや有ければ。つゝみていひさしてけり。年ごろへて。女のかたより猶このこととげんといへりければ。男うたをよみてやれりけり。いかゞおもひけん。

今迄に忘ぬ人は世にもあらしをのかさま／＼年のへぬれは

といひてやみにけり。男女あひはなれぬみや
づかへになんいでたちける。^{リ一本}

昔男。津の國むばらのこほりあしやの里にし
るよしありて。いきてすみけり。むかしのうた
に。

蘆のやの灘の鹽焼いとまなみつけの小櫛もさゝてきにけり

とよめるは。この里をよめるなり。こゝをなん
あし屋のなだとはいひけり。此男なま宮づか
へしければ。それをたより。ゑふのすけどもあ
つまりきにけり。この男のあにもゑふのかみ
なりけり。その家の海のほとりにあそびあり
きて。いざこの山のうへにありといふぬのび
きのたき見にのぼらんといひて。のぼりてみ
るに。そのたき物よりことなり。たかさ廿丈ば
かり。ひろさ五丈餘^{尺二本}ばかりある石のおもて
に。しろききぬにいしをつゝみたらんやうに
なん有ける。さる瀧のかみに。わらふだばかり

にてさし出たるいしあり。その石のうへには
しりかゝる水。せうかうじばかりのおほきさ
にてこぼれおつ。そこなる人にうたよます。こ
のゑふのかみまづよむ。

我世をはけふかあすかとまつかひの涙の瀧といつれ勝れり
つぎにあるじよむ。

ぬき亂る人こそ有らめ白玉のまなくもちるか袖のせはきに
とよめりければ。かたへの人わらふにや有け
む。この歌をよみてやみけり。かへりくるみち
とをくて。うせにし宮内卿もとよしが家のま
へすぐるに日くれぬ。やどりのかたを見やれ
ば。あまのいさりする火おほくみるに。このあ
るじのおとこよむ。

はるゝ夜の星か河邊の螢かも我すむかたの螢の焼火か

とよみて。みなかへりきぬ。そのよみなみの風
ふきて。なごりのなみいとたかし。つとめてそ
の家のめのこどもいでて。うきみるの浪によ

せられたるを以ろひて。いゑにもとてきぬ。女がたより。そのみるをたかつきにもりて。かしはおほひて出したり。そのかしはにかくかけり。

わたつ海のかさしにさすと祝ふも、君か爲には惜まさり鬼ゐなかの人の歌にては。あまれりやたらずや。むかし。いやしからぬ男。我よりはまさりたる人を思ひかけて年へにけり。

人しれず我戀しなはあちきなくいづれの神になき名おほせん昔。つれなき人をいかでと思ひ。戀わたりければ。哀とや思ひけん。さらばあす物ごしにてものばかりをいはんといへりけるを。かぎりなくうれしながら。またうたがはしかりければ。面白かりける櫻につけて。

櫻花けふこそかくも匂ふともあな頼みかたあすのよのことといふ心ばへあるらし。

昔。月日のゆくさへなげく男。やよひの晦日に。

おしめとも春のかきりのけふの日の夕暮にさへ成にける哉むかし。戀しさにきつゝかへれど。女にせうそもせて本もたせてよめる。

あしゑこくたなゝしを舟幾そたひ漕歸るらんしる人なしに

昔あそこ。身はいやしなから。ふたつなき人を思ひかけたりけり。すこしたのみぬべきさまにやありけん。ふしておもひおきて思ひ思ひてよめる。

いける一本あふなく思ひはすへしなのめなく高き賤き苦しかりけり

むかしもかゝることありけり。世のことはりにや有けん。

昔。二條の后宫につかうまつる男有けり。女のつかうまつれりけるを見かはしてよばひわたりけり。いかで物ごしにたいめして。おもひつめたることすこしはるけんといひければ。女いとしのびて物ごしに逢にけり。ものがたりなどして。おとこ。

彦星に戀はまされり天のかはへたつる關を今はとめてよ
これををかしとやおもひけん。あひにけり。

昔おとこ有けり。女をとかういふこと月日へ
にけり。女岩木ならねば。いとほしうやおもひ
けん。やう／＼思つきにけり。その比みな月の
つごもりばかりなりければ。女かさもひとつ
ふたつ身にいでたりければ。いひをこせたる。
いまはなにのこゝちもなし。身にかさもひと
つふたついできにけり。時もいとあつし。すこ
し秋風たてゝあはんといへりけり。さて秋ま
つほどに女のちゝ。その人のもとにくべか
なりときゝて。いひのゝしりてくせてきにけり。
(くせらいでイ)
り。さりければ此女のせうと。にはかにむかへ
にきたりければ。女かえでのほつともみぢをひ
ろひてかきをく。

秋かけていひし中にはあらなくに木葉降しくえに社有けれ
とみせて。かしこより人をこせたらば。これを

やれといひをきていぬ。さて後つゐによく
やあるらん。あしくてやあるらむ。いく所もし
らでやみぬ。此おとこ。いみじうあまのさかて
をうちてなんのろひをるなる。むくつけきこ
と。人のおもひは。をふ物にやあらん。今こそ見
めとぞいひける。

昔。ほり川のおほいまうちぎみと申しまそか
りけり。四十の賀九でうの家にてせられける
屏風に。中將なりけるおきな。

櫻花散かひまかへ老らくのこんといふなるみちまといふまて
（おほきイ）
むかし。をきをとゞときこゆるおはしけり。つ
かうまつるおとこ。なが月ばかりに。さくら
のつくりたるえだに。きじをつけて奉るとて。

我たのむ君かためにとおる花は。時しもわかぬ物にそ有ける
とよみてたてまつりたりければ。いとかしこ
がり給て。使にろくたまへり。

昔。右近のむまばのひをりの目。むかひにたて

たりける車に。女のかほの。したすだれよりほのかに見ゆれば。中將なる人のよみてやる。

見すも非すみもせぬ人の戀しきは綾なくけふや詠め暮さんかへし。をんな。

しるしらぬ何か綾なくわきて言む思ひのみ社しるへ成か一本けれ

むかし男。弘徽殿のはざまをわたりたりければ。あるやむごとなき人の御つぼねより。わすれ草をしのぶぐさとやいふとて。さしいださせ給へりければ。たまはりて。

忘艸おふるのへとは見るらめとこは忍ふなり後もたのまんむかしおとこ。みこたちのせうえうし給ふ所にまうでて。たつた河のほとりにて。

千早振神代もしらぬたつた川からくれなゐに水くゝるとは昔なまあてなる男のもとにごたち有けり。それを内記なる藤原のとしゆきといふ人よばひけり。此女かほかたちはよけれど。いまだわからなければにや。ふみもおさおさしからず。こ

とばもいひしらず。いはむやうたはよまざりければ。このあるじなりける人。ふみのあむをかきて女にかきうつさす。さてかへりごとはしけり。ことはいかゞ有けむ。めでまどひて男のよめりける。

つれくのなかにまきさる涙河袖ぬれ古今のみひちて逢よしもなし返し。れいのおとこ。女にかはりて。

浅みこそ袖はひつらめ涙河身さへなかるときかはたのまんといへりければ。男いたうめでて。ふみばこにいれてもてありくとぞいふなる。おなじ男。あひてのちふみをこせたり。まうでこんとするに。雨のふるになん見わづらひぬ。身さいはひあらば。この雨ふらじといへりければ。れいの男。女にかはりて。

数々に思ひおもはぬとひかたみ身をしる雨は降そまされるとてやりたりければ。みのかさもととりあへで。しとどにぬれてまどひきけり。

むかし女。ひとの心をうらみて。

風吹はとはに波こすいそなれや我衣手のかはく時なき

とつねのことぐさにいひけるを。聞をやびける男。

宵ことに蛙のいたくなくなるは水こそまされ雨はふらねと

むかし男有けり。歌はたよまざりけれど。世中をおもひしりたりけるあてなる女の。あまになりて。世中を思ひくわむじて。京にもあらず。

一本

はるかなる山ざとにすみけり。もととしたしかりければ。よみてやりける。

しんぞくたり一本

背くとて雲にはのらぬ物なれと世の憂事そよそになるてふ

昔男ありけり。深草のみかどにつかうまつりけり。そのあとこあだなる心なかりけり。ころあやまりやしたりけん。みこたちのめしつかひ給ける人をあひしりにけり。さて朝にいひやる。

ねぬるよの夢をはかなみまるとめはいやはかなくも成勝る哉

昔。ことなる事なくてあまになれる人有けり。

かたちをやつしたれども。物ゆかしかりけん。

かものまつり見に出たるを男よみてやる。

歌を一本

よを海の蜚とし人を見るからにめくはせよとも思ほゆる哉

昔男。かくてはしぬべしといひやりたりければ。女。

白露はけなほ消なんきえずとも玉にぬくへき人もあらしを
といへりければ。ねたしと思ひけれど。ころざしはいやまざりけり。

むかし男。友だちの人をうしなへるが許にいひやりけり。

花よりも人こそあたに成にける執れをさきに戀んとかみし

昔男。しのびてかよふ女有けり。それがもとより。こよひなん夢に見えつるといへりければ。あとこ。

思ひあまり一本
戀わひて出にしたまの有ならん夜深くみえはたま結ひせよ

むかし男。やんごとなき女に。なくなれりける

人をとぶらふやうにていひやれる。

古はありもやしけむ今そしるまたみぬ人をこふる物とはをんな返し。

下紐のしるしとするもとけなくに語るかことは戀すそ有へき昔男。ねんごろにいひちぎれる女のことざまに成にけるを。

すまのあまの鹽焼けふり風をいたみ思はぬ方に棚引にけりむかしおとこ。やもめにてゐて。

長からぬ命のほとに忘るゝはいかにみしかき心なるらむ昔男。久しくをともせで。わするゝ心もなし。まいらんといへりければ。女。

玉かつらはふ木あまたに成ぬれば絶ぬ心のうれしけもなし昔女。あだなる男の。かたみとてをきたる物どもをみて。

形見こそ今はあたなれこれなくは忘るゝ時もあらまし物をむかしいとわかき人にはあらぬこれかれともだちどもの月を見ける。それが中にひとり。

あらまなく一本
大かたは月をもめてし是そ此つもれは人の老となるもの

昔男。女のいまだ世にへずとおぼえたるが。人のもとにしのかて。ものきこえてのち。ほどへて。

近江なるつくまの祭とくせなんつれなき人のなへの敷みんね縁昔男。梅つぼより雨につれて人のまかづるをてけ一本見て。殿上なりける一本

鶯の花をぬふてふ笠もかなぬるめる人にきせてかへさん昔おとこ。ちぎれることあやまれる人に。

山城の井手の玉水てにくみてたのみしかひもなき世成けりかういへど。いらへず。

むかし男ありけり。ふかくさにすみける女を。やう／＼あきがたにや思ひけん。ものへいでたちて。

年をへて佳こし宿を出ていなはいと、深草野とや成なん女かへし。

いきてとしはへん古今一本
野とならは鶴となりて鳴をらん狩にたにやは君はこさらんとよめりけるに。いでてゆかんとおもふ心う

せにけり。

昔男。いかなる事を思ひけるおりにや^{か一本}ありけん。

思ふこといはてそたゝにやみぬへき我と等しき人しなければ
昔男。みやこをいかゞ思ひけん。ひんがし山に
すまんとおもひ。いきて。

住わひぬ今はかきりの山里に身をかくすへき宿もとめてん
なんどよみをりけるに。物いたうやみてしに
入たりければ。おもてに水そゝぎ^{ければ一本}などし。いさ
いでて。

我うへに露そをくなる天の河とわたる舟のかひのし^{よみ人しらす古今}つく
といひてぞいき出たりける。まことにかぎり
になりける時。

つゐに行道とかねはて聞しかと昨日けふとは思はさりしを
とてなむたえいりにけり。

此本者高二位本。朱雀院のぬりごめにを
さまれりとぞ。

伊勢物語 可秘々々

這伊勢物語者。京極黃門定家卿息女。民部
卿局之眞翰無^レ疑者也。

寛文四^甲辰初冬

冷泉

左中將爲清

右朱雀院塗籠御本伊勢物語一卷以森山孝盛所藏民部卿
局眞跡本書寫一校而雖假名遣不一樣誤字脫文亦不少不
輒改之一依原本但衍文處々加爪印畢

群書類從卷第三百八

物語部二

大和物語 上

亭子のみかど。いまはありぬ給ひなんとする
ころ。弘徽殿のかべに伊勢のごのかきつけ
る。

別るれとおひもおしまぬ百敷をみさらん事のなにか悲しき
とありければ。みかど御らんじて。そのかたは
らにかきつけさせたまふける。

身一つにあらぬ計ををしなへて行めくりても何か見さらん
となむありける。

みかどありぬ給ひて。又のとしの秋御ぐしお
ろしたまひてところく山ぶみしたまひてを
こなひ給けり。備前のぜうにてたちばなのよ

しとしといひける人。内におはしましける時。
殿上にさぶらひて御ぐしおろし給ければ。や
がて御ともにかしらおろしてけり。人にもし
られ給はでありきたまひける。御ともこれ
なんをくれ奉らでさぶらひける。かゝる御あ
りきし給ふいとあしき事なりとて。内より少
將中將これかれさぶらへとてたてまつらせ給
けれど。たがひつゝありき給。いづみの國にい
たり給て。ひねといふところにおはします夜
あり。いとこゝろぼそう。かすかにておはしま
すことを思ひて。いとかなしかりけり。さてひ
ねといふことを歌によめと仰ごとありけれ

ば。このよしとし大とく。

聖古賢家
故郷の旅ねの夢にみえつるは恨やすらん又といはねは

とありけるに。みな人なきてえよまずなりに
けり。その名をなん寛蓮大とくといひて。のち
までさぶらひける。

酒座
故源大納言宰相におはしける時。京極のみや
皇子
すどころ。亭子院の御賀つかうまつり給とて。

かゝる事をなんせむと思ふ。さゝげもの一え
だ二えだせさせて給へと聞え給ひければ。ひ
げ長髯をあまたせさせ給ふて。としこにいろい

ろにそめさせ給ひけり。しきもののをりもの
どもいろ／＼にそめ。よりくみなにかとみな
あづけてせさせ給ひけり。そのものどもを。九
月つごもりにみないそぎはてしけり。さてそ
の十月ついたちの日。此ものいそぎたまひけ
る人のもとに。をこせたりける。

新勅冬
千々の色にいそきし秋は過にけり今は時雨に何を染まし
うつり六帖

そのものいそぎ給けるときは。まもなく。これ

よりもかれよりもいひかはし給けるを。それ
よりのちは。その事とやなかりけむ。せうそこ
もいはで。しはすのつごもりになりければ。

かたかけの舟にやのれる白浪のさはく時のみ思出るきみ

となんいへりけるを。その返しをもせで。とし
こえにけり。さてきさらぎばかりに。やなぎの
しなひ。ものよりもけにながきなん。此家に有
けるを折て。

青柳の糸うちかはてのとかなる春日しも社思出けれ

とてなんやりたまへりければ。いとになくめ
でて。のちまでなんかたりける。

好吉

野大貳。すみともがさはぎの時。うての使にさ
されて。少將にてくだりける。おほやけにもつ
かうまつり。四位にもなるべきとしにあたり
ければ。むつきのかゝいたまはりのこと。いと
ゆかしうおぼえけれど。京よりくだる人もお

さおさ聞えず。ある人にとへば四位になりたりともいふ。ある人はさもあらずといふ。さだかなることいかできかんとおもふほどに。京のたよりあるに。近江守公忠のきみの文をなむもてきたる。いとゆかしうれしうてあけてみれば。よろづのことどもかきもていきて。月日などかきて。おくのかたにかくなむ。

玉匣二とせあはぬ君かみをあけなからやはあらんと思ひしこれを見て。かぎりなくかなしくてなんなきける。四位にならぬよし。ふみのことばにはなくて。たゞかくなむありける。

前坊保明の君うせたまひにければ。大輔かぎりなくかなしくのみおぼゆるに。きさいの。宮后皇子にたち給ふ日になりければ。ゆゝしとてかくしけり。さりければよみていだしける。

佐ぬれは今はと物を思へとも心にぬは涙なりけり

あさたゞの中將。人のめにてありける人に。し

のびてあひわたりけるを女も思ひかはしてすみけるほどに。かのおとこ人の國のかみになりてくだりたりければ。これもかれもいとあはれとおもひけり。さてよみてつかはしける。たくへやる我玉しゐをいかにしてはかなき空にもて離る覽となんくだりける日いひやりける。

男女あひしりてとしへにけるを。いさゝかなることによりてはなれにけれど。あくとしもなくてやみにしかばにや有けん。男も哀とおもひけり。かくなんいひたりける。

逢ことは今はかきりとおもへとも涙はたえぬ物にそ有ける女いとあはれとおもひけり。

監の命婦のもとに中務宮おはしましかよひけるを。方のふたがれば。こよひはえなむまうでぬとのたまへりければ。その御かへしごとに。逢ことの方はさのみそふたからん一夜めぐりの君となれはとありければ。方ふたがりたりけれど。おはし

ましてなんおほとのごもりにける。かくて又ひさしくをともし給はざりけるに。さがのぬんにかりすとてなん。久しくせうそこなどもものせざりける。いかにおぼつかなく思つらんなどのたまへりける御返に。

大澤の池の水くき絶ぬとも何かうらみむさかのつらさは、

御返しはこれにやをとりにけん。人わすれにけり。

教國

もゝどのの兵部卿の宮うせ給て。御はて九月つごもりにし給ひけるに。としこ。かの宮のきたのかたにたてまつりける。

晴後御難下

大かたの秋のはてたに悲しきにけふはいかてか君慕すらん

かぎりなくかなしとおもひてなきわたまへりけるに。かくいへりければ。

あらはこそ初も果も思ほえめけふにもあはてきえにし物をとなん返し給ひける。

監の命婦つゝみにありけるいへを人にうりて

後。あはたといふところにいきけるに。その家のまへをわたりければ。よみたりける。

古郷をかはとみつゝも渡るかな淵瀬有とはむへもいひけり

故源大納言のきみたゞふさのぬしのみむすめ

東のかたを。年比思てすみわたり給けるを。亭

紹子

子院の若宮につき奉り給ふてほどへにけり。

子どもなどありければ。こともたえずおなじところになんすみ給ける。さてよみてやり給ひける。

拾遺二

住の江の松ならなくに久しくも君とねぬよの成にけるかな

とありければ。返し。

同久しくも思ほえねとも住のえの松やふたゝひ生かはるらん

となむありける。

清藤

おなじおとどかのみやをえ奉り給ふて。みか

どのあはせたてまつり給へりけれど。はじめごろしのびて。よるゝかよひ給ひけるころ。

かへりて。

新古今三
あくと

いへはしつ心なき春夜の夢とや君をよるのみはみんな

むまのぜう藤原のちかぬといふ人のめには。

としこといふ人なん有ける。子どもあまたい

できて。おもひて住けるほどに。なくなりにつ

れば。かぎりなくかなしくのみ思ひありくほ

どに。内の藏人にて有ける一條のきみといひ

ける人は。としこをいとよくしれりける人な

りけり。かく成にけるほどにしもとはざりけ

れば。あやしと思ひありくほどに。とはぬ人の

ずさの女なむあひたりけるを見て。かくなむ。

思ひきや過にし人の悲しきに君さへつらくならん物とは

と聞えよといひければ。返し。

なき人を君かきかくにかけしとてなく忍ぶ程な恨そ

本院の北方の御をとどの。わらは名をおほつ

ぶねといふいますかりけり。陽成院のみかど

に奉りたりけるに。おはしなざりければ。よ

みてたてまつりける。

あら玉の年はへねとも猿澤の池のたまもはみつへかりけり

又つり殿の宮に。鏡子内親王わかさのごといひける人を

めしたりけるが。又もめしなかりければ讀て

奉りける。

後醍醐二
數ならぬ身にをくよひの白玉は光みえさす物にそ有ける

とよみて奉りければ見給ふて。あなおもしろ

のたまのうたよみやとなん。のたまひける。

陽成院のすけのご。まゝちゝの少將のもとに。

春のゝははるけなからも忘艸おふるはみゆる物にそ有ける

少將かへし。

春野におひしと思ふわすれ草つらき心のたねしなけれは

故式部卿宮のいではのこに。出羽卿まゝちゝの少將

すみけるを。はなれてのち女すゝきにふみを

つけてやりたりければ。少將。

秋風になひくおはなは昔見し袂にゝてそ戀しかりける

いではのご。かへし。

袂ともしのはさらまし秋風をなひく尾花のおとろかさすは

故式部卿宮二條の^{我妻 位}のみやすところにてたえ給ふて。又のとしのむ月のなぬかの日わかれ奉り給ひけるに。

故郷と荒にし宿の草のはもきみかためとそまつはつみけるとありけり。

おなじ人。おなじみこの御もとに。久しくおはしまさざりければ。秋のことなりけり。

世にふれと戀もせぬ身の夕されはすゝろに物の悲しきやなととありければ。御かへし。

夕暮に物思ふ時は神な月我もしくれにをとらさりけり

となん有ける。心にいらで。あしくなんよみ給ける。

故式部卿宮を。かつらの^{皇子}みこせちによばひ給

ひけれど。おはしまさざりける時。月のいとあ

もしろかりける夜。御ふみ奉り給へりけるに。久堅の空なる月のみなりせはゆくとも見えて君はみてましとなんありける。

良少將兵衛佐なりける比。監の命婦になむすみける女のもとより。

^{續古戀二}かしは木の杜のした草老ぬとも身を徒になさすもあらなん返し。

^同柏木の杜の下艸老のよにかゝる思ひはあらしとそおもふとなんいひける。

良少將たちの緒にすべきかはをもとめければ。監命婦なんわがもとにありといひて。久しくいださざりければ。

^{續後拾遺中}あた人のたのめわたりし染かはの色の深さをみてやゝみ南

といへりければ。監命婦めでくつがへりてもとめてやりけり。

陽成院の二の^{元平}みこ。俊蔭の中將のむすめに年

比すみ給けるを。女五の^{伏子}みこをえ奉り給て後。

さらにとひ給はざりければ。いまはおはしますまじきなめりと思ひたえて。いとあはれにてゐたまへりけるに。いと久しくありて。思か

けぬほどに。おはしましたりければ。えものも聞えて。にげてとのうちにいりにけり。かへり給て。みこ。あしたに。などか年ごろの事も申さむとてまうで來りしに。かくれ給ひにしと有ければ。ことばはなくて。かくなん。

後發 五
せかなくにたえと絶にし山水の誰しのへとか聲をきかせん

先帝の御時に。右大臣殿の女御。能子うへの御つぼ

ねにまうのぼり給てさぶらひ給けり。おはしましやするとしたまち給ひけるに。おはしまさざりければ。

鳥代 五
日くらしに君まつ山の時鳥とはぬ時にそ聲もおしまぬ

となん聞えけり。

ひえの山に。念がくといふほうしの山ごもりにて有けるに。しとくにてまし／＼ける大とくのはやうしにけるが。むろに松の木のかれたるをみて。

主もなき宿のかれたる松みれは千世過にける心地こそすれ

とよみたりければ。かのむろにとまりける弟子どもあはれがりけり。此念覺はとしこがせうとなりけり。

桂のみこ。いとみそかにあふまじき人にあひ給ひたりけり。おとこのもとに讀てをこせ給へりける。

古今 五
それをたに思ふ事とて我宿をみきとないひそ人のきかくに

となん有ける。

かいせうといふ人。法師になりて山にすむあいだに。あらは洗 濯ひなどする人のなかりければ。おやのもとに。きぬをなんあらひにをこせたりけるを。いかなるおりにか有けんむづかりて。おやはらからのいふこともきかで。法師になりぬる人は。かくうるさきこといふものかといひければ。よみてやりける。

今は我いつちゆかまし山にても世の憂ことはなをも絶ぬかおなじ人。かのちゝの兵衛佐うせにける年の

秋。家にこれかれあつまりて。よひよりさけのみなどす。いますからぬことのあはれなる事を。まらうどもあるじもこひけり。朝ぼらけに霧たちわたれりけり。まらうど。

朝霧の中にきみます物ならはるゝまに／＼嬉しからましといひけり。かいせう。返し。

ことならは晴すもあらなん秋霧の紛れにみえぬ君と思はんまらうどは貫之友則などになん有ける。

故式部卿宮に。三條の右のおとど。定方こと上達部

などるいして参り給て。暮うち御あそびなどし給ひて夜ふけぬれば。これかれゑひてものがたりし。かづけものなどせらる。女郎花をかざし給ふて。右のおとど。

をみなへし折手にかゝる白露は昔のけふにあらぬ涙かとなん有ける。こと人々のおほかれど。よからぬはわすれにけり。

故右京のかみ宗于の君。なりいづべきほどに。

我身のえなりいでぬ事と思ひ給ひける比ほひ。亭子の御かどに紀伊國より石つきたるみ^松るをなん奉りたりけるを題にて。人々歌よみけるに。右京のかみ。

新千戀四沖つ風ふけぬの浦にたつ波のなこりにさへや我はしつまん

おなじ右京のかみ。監の命婦に。

後撰夏よみ人しらすよそを思ひしよりも夏のよの見はてぬ夢そはかなかりける

亭子のみかどに。うきやうのかみの讀て奉りたりける。

續後撰戀三監命婦やあると集^{なる集}京てふ人も有へく武藏のゝ草とたにこそおふへかりけれ

又。

時雨のみふる山里の木の下はをる人からやもり過ぬらんとありければ。かへり見給はぬ心ばへなりけり。みかど御らんじて。なに事ぞ。これを心えぬとて。そうづの君になん見せ給けるときゝしかば。かひなくなむありしとかたり給ひける。

躬恒が。院によみてたてまつりける。

立よらん木下もなきつたのみは常盤なからに秋そかなしき
右京のかみのもとに。女。

色そとおもほえずともこの花は時につけつゝ思ひ出なん
堤の中納言内の御使にて。大内山に院のみか

食種

宇多

どおはしますに參り給へり。物ごころぼそげ
にておはしますいと哀なり。高き所なれば。雲
はしもよりいとおほくたちのぼるやうにみえ
ければ。かくなん。

新勅撰
白雲

九重にたつ峰なれば大内山といふにそ有ける

伊勢の國に前齋宮のおはしますしける時に。つ

柔子

つみの申納言勅使にてくだり給ふて。

新勅撰
吳竹

の世々の都と聞からにきみは千歳のうたかひもなし

御返しはさかず。彼齋宮のおはします所は。た
けのみやことなんいひける。

いづもがはらから。ひとり殿上して。我はえ
せざりけるときによみたりける。

かくさける花もこそあれ我爲に同じ春とやいふへかりける
先帝の五のみこの御むすめは。一條の君とい
ひて。京極の御息所の御もとにさぶらひ給ひ
けり。よくもあらぬことありてまかで給て。ゆ
きのかみのめにていますかりて。

たまさかに問人あらは和田の原敷きほに擧ていぬと答へよ

正明

伊勢のかみもろみちのむすめを。たゞあきら
の中將のきみにあはせたりける時に。そこな
りけるうなむを。垂髪右京のかみよびいでてかた
らひて。あしたによみてをこせたりける。

新勅撰
置露のほとをそまたぬ朝かほはみすそ中々有へかりける

桂のみこに式部卿の宮すみ給ける時。その宮
にさぶらひけるうなむなん。このおとこ宮を。
いとめでたしと思ひかけ奉りけるをも。えし
り給はざりけり。ほたるのとびありきけるを。
かれとらへてと。此わらはにのたまはせけれ
ば。かざみの袖にほたるをとらへてつゝみて。

汗衫

御覽ぜさすとして聞えさせける。

後撰

つゝめとも隠れぬものは夏虫のみよりあまれる思ひ成けり

源大納言の君の御もとに。としこはつねにま

いりけり。ぞうししてすむときもありけり。あ

かしき人にて。よろづのことを常にいひかは

し給ひにけり。つれ／＼なる日。このおとど。と

しこ。又このむすめ。あねにあたるあやつこ

といひて有けり。母にて心もおかしかりけ

り。又このおとこのもとによぶこといふ人有

けり。それも物の哀しりていと心おかしき人

なりけり。これ四人つどひてよろづの物がた

りし。世中のはかなきこと。せけんのおはれな

ることいひ／＼て。かのおとどのよみ給ける。

新巻第三
言つゝも世ははかなきを形見には哀といかて君にみえまし

とよみ給ければ。たれ／＼も返しはせで。あつ

まりてよゝとなんなきける。あやしかりける

ものどもにこそはありけれ。

ゑしうといふほうしの。ある人の御驗者つか
うまつりけるほどに。とかく世中に云事有け
ればよみたりける。

里はいふ山にはさはく白雲の空にはかなきみや成なん

となん有ける。又此人の御もとによみたりけ
る。

朝ほらけ我身は庭の霜なから何をたねにて心おひけん

この大とく房にしける所の前にきりかけをな
むせさせける。そのけづりくづにかきつけ
る。

萬代
離するひたの工のたつき音のあなかしこまじなそやよの中

などいひてをこなひしに。ふかき山にいりな

んとすといひていにけり。ほどへて。いづくに

かあらんといひて。深き山にこもり給ひぬと

ありしは。いづくぞといひやりたまひたりけ

れば。

何計り深くもあらずよの常のひえをと山と見るはかりなり

となんいひたりける。よかはといふところに
有なりけり。

おなじ人に。ある人。山へのぼり給ふべき日は
まだとをくやある。いつぞといへりければ。

のほりゆく山の雲の遠ければ日もちかく成物にそ有ける
とぞいひをこせたりける。かくのみよからぬ
ことの有がうへにいできければ。

のかるとも誰かきさらんぬれ衣あめの下にしすまん限りは
といひけり。

つゝみの中納言のきみ。十三の音明みこの御母御
息所を。内に奉りけるはじめに。御かどはいか

がおぼしめすらんなど。いとかしこく思なげ
き給けり。さてみかどに延喜よみて奉り給ける。

後醍醐人の親の心はやみにあらねとも子を思ふ道にまといぬる哉

先帝いと哀に思しめしたりけり。御返しあり
けれど。人えしらず。

平中。かんぬんのごにたえてのち。ほどへてあ

ひたりけり。さてのちにいひをこせたる。

打とけて君はねつらん我はしも露のおきぬて戀にあかしつ
女。かへし。

白露のおきふし誰を戀つらん我は聞おはすいそのかみにて
陽成院の一條のきみ。

奥山に心をいれて尋すは深き紅葉の色をみましや

先帝の御時。刑部のきみとてさぶらひ給ける
更衣の。さとにまかり出給ひて。ひさしうまい

り給はざりけるにつかはしける。

新古今大空を渡る春日の影なれやよそにのみしてのとけかるらん
おなじみかど。齋院のみこの御もとに。菊につ
けて。

後醍醐行てみぬ人の爲にと思はすは誰かおらまし我宿の菊

さい院の御かへし。

我宿に色折とむる君なくはよそにも菊の花をみましや
かいせん。山にのぼりて。

新古今雲ならてこ高き峰にゐるものは憂世をそむく我身也けり

齋院より内に。

おなしえをわきて霜をく秋なれは光もつらくおもほゆる哉
御かへし。

花の色をみてもしりなん初霜の心わきてはをかしと思ふ
これも内の御。

六騎五
わたつみのふかき心をきながら恨られぬる物にそ有ける

陽成院に有ける坂上のとをみちといふおと
こ。おなじぬんに有ける女。さはる事ありとて
あはざりければ。

秋のゝをわくらん鹿も我ことや繁きさはりに音をは鳴らん

右京のかみむねゆきのきみ。三らうにあたり
ける人。博奕ばくえうをして。おやにもはらからに
もにくまれければ。あしのむかにかたへゆか
んとて。人の國へいきける。さておもひけると
もだちのもとへよみてをこせたりけり。

しをりして行旅なれとかりそめの命しらねは歸りしもせし
男。かぎりなく思ひける女ををきて。人のくに

へいにけり。いつしかとまちけるに。しにきと
いひてきたりければ。

今こんといひて別れし人なれは限りときけと猶そまたるゝ
となんいひける。

越前權守かねもり。兵衛のきみといふ人にす
みけるを。としごろはなれて又いきけり。さて
よみける。

夕されは道もみえねと故里はもとこし駒にまかせてそゆく
女。返し。

後醍醐五
駒にこそまかせたりければあや集はかなくも心のくると思ひける哉

近江介平中興がむすめを。いといたうかしづ
きけるを。おやなく成て後とかくはふれて。人
の國にはかなき所に住けるをあはれがりて。
かねもりがよみてをこせたりける。

後醍醐二
遠近の人めまれなる山里に家おせんとはおもひきや君

とよみてなんをこせたりければ。見て返事も
せでよゝとぞなきける。女もいとらうある人

成けり。

同じかねもり。みちのくににて。かん院の三のみこの女に有ける人。くろづかといふ處にすみけり。そのむすめどもにをこせたりける。

陸奥のあたちか原のくる塚に鬼こもれりといふはまことか

といひたりけり。かくてそのむすめをえんと

いひければ。おや。まだいとわかなんある。

いまさるべからんおりにをといひければ。京にいくとて。やまぶきにつけて。

花盛過もやすると蛙なくゐての山吹うしろめたしも

といひけり。かくてなとりのみゆといふ事を。

恒忠のきみのめ。よみたりけるといふなん。此塚のあるじ成ける。

拾物名はつかな
大空の雲の通路見てしかなとりのみゆけはあとはかもなし

となんよみたりけるを。かねもりの大ききおなじ所を。

鹽竈の浦にはあまや絶にけんたとすなとりのみゆる時なき

となんよみける。さて此心がけしむすめ。こと

おとこして京にのぼりたりければ。聞てかね

もりの。のぼりものし給なるをつげたまはでと

いひたりければ。井手の山吹うしろめたしと

いへりけるふみを。これなんみちのくにのつ

ととて。をこせたりければ。男。

年をへてぬれわたりつる衣手をけふの涙に朽やしぬらん

といへりけり。

よの中をうんじて。つくしへくだりける人。女

のもとにをこせたりける。

忘るやと出てこしかと何くにもうきは離れぬ物にさりける

五條のごといふ人ありけり。男のもとに我か

たを忍にかきて。女のもえたるかたをかきて。

けぶりをいとおほくくゆらせて。かくなんか

きたりける。

君を思ひなましくし身をやく時は煙多かる物にさりける

亭子院に。みやずむどころたちあまた。みぞう

司
ししてすみ給ふ事とし比ありて。河原院のい
とおもしろくつくられたりけるに。京極のみ
やずむどころ。ひと所のみざうしをのみして
わたらせ給にけり。春のこと成けり。とまり給
へるみざうしども。いとおもひのほかになさ
ざうしき事をおもほしけり。殿上人などかよ
ひまいりて。藤の花のいとおもしろきを。これ
かれさかりをだに御らんぜで。などいひて見
ありくに。ふみをなんむすびつけたりける。あ
けてみれば。

世中の浅き瀬にのみ成ゆけは昨日のふちの花とこそみれ
とありければ。人々見て。限なくめであはれが
りけれど。たがみざうしのしたまへるとも。え
しらざりけり。おとこどものいひける。

藤花色のあさくも見ゆる哉うつろひにけるなこり成へし
のうさんのきみといひける人。淨藏とは。いと
になうおもひかはす中なりけり。限なくちぎ

りて。おもふことかたイをもいひかはしけり。のうさ
んのきみ。

思ふてふ心はことに有けるをむかしの人になにをいひけん
といひをこせたりければ。淨藏大とくの返し。
行末のすくせをしらぬ心には君にかきりの身とそいひける
故右京のかみの。人のむすめをしのびてえた
りけるを。おやのきゝつけて。のゝしりてあは
せざりければ。わびてかへりにけり。さてあし
たによみてやりける。

さもこそは峰の風のあらからめなひきし枝を恨てそこし
平中にくからずおもふわかき女を。めのもと
にゐてきてをきたりけり。にくげなる事ども
をいひて。めつゐにおひ出しけり。此めにした
がふにやありけむ。らうたしとおもひながら
えとゞめず。いちはやくいひければ。ちかくだ
にえよらで。四尺の屏風によりかゝりて。たて
りていひける。よの中の思ひのほかにあるこ

と。せかいにものし給ふとも。わすれでせうそ
こしたまへ。をのれもさなんちもふといひけ
り。此女つゝみに物などつゝみて。くるまとり
にやりてまつほどなり。いとあはれと思ひけ
り。さて女いにけり。とばかりありてをこせた
りける。

わすらるな忘れやしぬる春霞けさ立なからちきりつること
南院の五郎。みかはのかみにて有ける。承香殿
にありけるいよのごをけさうしけり。こんと
いひければ。御息所の御もとに。内へなんまい
るといひをこせたりければ。

玉簾うちとかくるはいとしくかけをみせしと思ふ也けり
といへりけり。又。

なけきのみしけきみ山の時鳥木隠れぬてもねをのみそなく
などいひけり。かくてきたりけるを。いまはか
へりねとやらひければ。

しねとてや取も敢すはやらはるゝいといき難き心ち社すれ

返しあかしかりけれど。えきかず。又雪のふる
夜きたりけるを。ものはいひて。よふけぬ。か
へり給ねといひければ。かへりけるほどに。戸
をさしてあけざりければ。

我はさは雪降空に消ねとや立かへれともあけぬ板戸は

となんいひてゐたりける。かく歌もよみ。あは
れにいひゐたれば。いかにせましと思ひての
ぞきて見れば。かほこそなをいとにくげなり
しかとなんかたりしとか。

としこ。ちかぬをまちけるよ。こざりければ。

小夜更ていなおほせ鳥の啼けるを君かたゝくと思ける哉

又としこ。雨のふりける夜。ちかぬをまちけり。
雨にやさはりけん。こざりけり。こぼれたるい
へにて。いといたくもりけり。雨のいたくふり
しかば。えまいらずなりにき。さる所にていか
にものし給へるといへりければ。としこ。

君を思ひゝまなき宿と思へとも今宵の雨はもらぬまそなき

枇杷殿より。としこが家にかしは木の有ける

を折にたまへりけり。おらせてかきつけて奉りける。

我宿をいつかは君かならしはのならし顔には折にをこせる御返し。

柏木に葉守の神のましけるをしらてそ折したよりなさるな忠文がみちのくにの將軍になりてくだりけるとき。それがむすこなりける人を。監命婦忍びてあひかたらひけり。むまのはなむけに。めとりぐりの狩衣。うちぎ。ぬさなどやりたりける。かのえたるおとこ。

よひくに戀しさまさるかり衣つくしの物にそ有けるとよみたりければ。女めでてなきけり。おなじ人に監命婦やまもゝをやりたりければ。

陸奥の安達（安達）の山ももろともにこえはわかれの悲しからしをとなんいひける。さてつゝみなるいへにすみける。さてあゆをなんととりてやりける。

鴨川のせにふす鮎のいをとりにてねて社あかせ夢にみえつやかくてこの男。みちの國へくだりける。たよりにつけてあはれなる文どもをかきをこせけるを。道にてやまひしてなんしにけるときゝて。女いとあはれとなむ思ひける。かくきゝてのち。しのづかのむまやといふところより。たよりにつけてあはれなることどもをかきたるふみをなんもてきたりける。いとかなしくて。これをいつのぞととひければ。つかひの久しくなりてもてきたるになんありける。をんな。

しのつかのむまやと待わひし君は空しく成そしにけるとよみてなんなきける。わらはにて殿上して大七といひけるを。かうぶりしてくら人どころにおりて。かねのつかひかけて。やがておやのともにいくになんありける。

故式部卿宮（式部）うせ給ける時は。きさらぎのつごもり。花のさかりになん有ける。つゝみの中納

言のよみ給ける。

新島路三
咲匂ひ風まつほととの山櫻人の世よりは久しかりけり

三條の右のおとゞの御返し。

定方
はるくの花はちるとも咲ぬへし又逢かたき人のよそうき

おなじ宮おはしましける時。亭子院にすみ給ひけり。この宮の御もとに兼盛まいりけり。めし出てものらのたまひなどしけり。うせ給ひてのち。かの院を見るに。いとあはれなり。池のいとおもしろきにあはれなりければ。よみける。

池は猶昔なからの鏡にて影みし君かなきそかなしき

ひとのくにのかみのくだりける。むまのはなむけをつゝみの中納言してまち給ひけるに。くるゝまでござりければ。いひやりたまひける。

別るへきことも有物をひねもすに待とてさへも歎きつる哉とありければ。まどひきにけり。同じ中納言か

の殿のしんでむのまへに。すこしとをくたてりける櫻を。ちかくほりうへ給けるが。かれざまにみえければ。

後撰春上
宿ちかく移して植しかひもなく待とをにのみ見ゆる花かな

とよみ給ける。同じ中納言藏人にて有ける人の加賀のかみにてくだりけるに。わかれおしみける夜。ちうなごん。

古今集
さみかく越のしら山しらね共ゆきのまにノ跡は尋ん

となんよみ給ひける。

宇内親王
桂のみこの御もとに。よしたねがきたりける

を母御息所きゝつけ給て。かどをさゝせ給ければ。よひと夜立わづらひて歸るとて。かく聞え給へとて。かどのはざまよりいひいれける。

今宵こそ涙の河にゐる千鳥なきてかへると君はしらしな

これもおなじみこに。おなじおとこ。

續後撰二
永夜をあかしの浦に焼汐の煙は空にたちやのほらぬ

かくて忍びてあひ給けるほどに。院に八月十

五夜せられけるに。參り給へと有ければ。まいり給ふに。ゐんにてはあふまじければ。せめてこよひはなまいり給そととめけり。されどもしなりければえとどまらで。いそぎまいり給ければ。よしたね。

たかとりかよゝに泣つゝ留めけん君は君にと今宵しもゆく監命婦。朝拜の威儀のみやうぶにて出たりけるを。彈正のみこみたまひて。にはかにまどひけさうしたまひけり。御ふみありける御かへしごとに。

新千鶴一
打つけにまとふ心と聞からなくなきめやすくおもほゆる哉
みこの御うたはいかゞ有けん。わすれにけり。
又おなじみこに。おなじ女。

こりすまの浦にかつかん浮みるは浪さはかしく有社はせめ
宇多院の花おもしろかりける比。南院の君だ
ちと。これかれあつまりて歌よみなどしけり。
右京のかみ宗子。

きてみれと心もゆかず故郷は昔なからの花はちれ共
こと人のも有けらし。

季繩の少將のむすめ右近。故きさいのみやに
さぶらひける比。故權中納言敦忠のきみおはしけ
る。たのめ給ふことなど有けるを。宮に參るこ
とたえて里に有けるに。さらにとひ給はざり
けり。内わたりの人來りけるに。いかにぞ參り
給ふやととひければ。常にさぶらひ給ふとい
ひければ。御ふみ奉りける。

後撰戀三思はぐと集
忘れしと頼めし人は有ときくいひし言のはいつちにけん
となん有ける。

おなじ女のもとに。さらにをともせで。きじを
なんをこせたまへりける。返事に。

栗駒の山に朝たつ雉よりもかりにはあはしと思ひしものを
となんいひやりける。

おなじ女。内のさうしにすみける時。忍びてか
よひ給人有けり。頭なりければ。殿上につねに

有けり。雨のふる夜。さうしのしとみのつらに
立より給へりけるもしらで。雨のもりければ。
むしろをひきかへすとて。

思ふ人雨と降くる物ならはわかるとこはかへさゝらまし
となんうちいひければ。あはれときゝ給て。ふ
とはい入給にけり。

おなじ女。おとこの忘れじとよろづの事をか
けてちかひけれど。わすれにける後に。いひや
りける。

拾遺
忘らるゝ身をは思はす誓てし人の命のおしくも有かな
かへしはえきかず。

おなじ右近。もゝどのの宰相師氏のきみなんすみ
給ふなどいひのゝしりけれど。そらごとなり
ければ。かのきみによみてたてまつりける。

よし思へ登のひるはぬうつせ貝空しき名をはたつへしや君
となん有ける。

む月のついたち比。顯忠大納言殿にかねもり參り

たりけるに。物などのたまはせで。すゑろにう
たよめとのたまひければ。ふとよみたりける。
後撰春上
けふよりは萩の焼原かきわけて若なつみにと誰をさそはん
とよみたりければ。になくめでたまふて。御か
へし。

かたをかに蔵もえすは尋つゝ心やりにやわかなつまゝし
となんよみ給ひける。

たじまのくにかよひけるひやうやうイごのかみな
りけるおとこの。かのくになりけるをんなを
をきて京へのぼりければ。雪のふりけるにい
ひをこせたりける。

山里に我をとめて別れちの雪のまにゝふかくなるらん
といひたりければ。

やま里にかよふ心も絶ぬへし行もとまるもこゝろほそさに
となんかへしたりける。

おなじ男。紀伊國にくだるに。さむしとてきぬ
をとりにをこせたりければ。女。

きの國のむろのこほりに行人は風の寒さもおもひしられし返し。おとこ。

紀伊國のむろの郡に行なから君とふすまのなきそかなしき
動物六内匠光福具行女

修理のさみにむまのかみすみける時。方のふたがりければ。かたがへにまかるとてなん。えまいりこぬといへりければ。

これならぬ方をも多く違ふれば恨みむ方もなきそわひしきかくて右馬のかみいかずなりにけるころ。よみてをこせたりける。

秋
いかで猶網代のひをに言とはん何によりてか我をとほぬといへりければ。かへし。

網代より外にはひをのよる物かしらすはちの人にとへかし又おなじ女にかよひける時。つとめてよみたりける。

あけぬとていそきもそする逢坂の霧立ぬとも人にきかすなおとこ。はじめごろよみたりける。

いかにして我は消なん白露のかへりて後の物はおもはし

かへし。

垣ほなる君か朝かほ見てし哉歸て後はものや思ふと

おなじ女に。けぢかく物などいひて。かへりて後によみてやりける。

心をし君にとよめてきにしかは物思ふことはからにや有賢修理が返し。

たましひはおかしき事もなかりけり萬の物はかにそ有けんおなじ女に。故兵部卿宮御せうそこなどしたまひけり。おはしまさんとのたまひければ。さこえける。

新巻二
高くともなにゝかはせん吳竹の一よ二よのあたのふしをは

定方三條の右のおとこ中將にいますかりける時。

祭の使にさゝれていでたち給けり。かよひ給ける女のたえて久しくなりにけるに。かゝる

事なんいでたつ。あふぎもたるべかりけるを。

さはがしうてなむわすれにける。ひとつ給へといひやり給へりけり。よしある女なりけれ

ば。よくてをこせてんと思ひ給ひけるに。いろなどもいときよらなるあふぎの香などもいとかうばしうてをこせたり。引かへしたるうらのはしのかたにかきたりける。

心難

ゆゑし連いむ共今はかひもあらしうきをは是に思よせてんとあるを見て。いとあはれとおぼして。かへし。

ゆゑし連いける物を我爲になしといはぬはたかつらきなる

故權中納言。敦實左のおほいどののきみをよばひ

給ふけるとしのしはすのつごもりに。

後集

物思ふと月日の行もしらぬまに今年もイはけふに果ぬとかきくとなん有ける。又かくなむ。

同題

いかにしてかく思ふてふことをたに人傳ならて君に語らん拾遺しちせ集かくいひくつゝぬにあひにけるあしたに。

同題

けふそへに暮さらめやとは思へともたへぬは人の心也けり雅子是もおなじ中納言。齋宮のみこを年比よばひ

たてまつり給て。けふあすあひなんとしける

ほどに。伊勢の齋宮の御うらにあひ給ひにけり。いふがひなく口おしく。おとこ思ひ給ひけり。さてよみて奉りたまひける。

後集

伊勢の海ちひろの濱に拾ふとも今はかひなくおもほゆる哉

となんありける。

代明親王

故中務宮の北方うせ給ひて後ちいさきさんだちをひきぐして。三條右大臣殿にすみ給ひけり。御いみなとすぐしては。つゝぬにひとりはず

ぐし給ふまじかりければ。かの北のかたの御をとうと九君をやがてえたまはんとおぼしけるを。なにかはさもやとおやはらからもおぼ

したりけるに。いかゞありけん。左兵衛督藤原のき

み侍従にものし給けるころ。その御ふみもて

くとなんきゝ給ふける。さて心づきなしとや

おぼしけむ。もとの宮になんわたり給にける。その時に御息所善子の御もとより。

なき人のすもりにたにもなるへきに今はと歸るけふの悲さ

宮の御返し。

すもりにと思ふ心は留むれとかひあるへくもなしと社きけ
となんありける。

おなじ右のおほいどののみやすどころ。みか
どおはしまさずなりて後。敦賀式部卿宮なんすみ
たてまつり給ひけるを。いかゞ有けむ。おはし
まさゞりけるころ。齋宮の御もとより御ふみ
たてまつりたまへりけるに。みやすんどころ。
宮のおはしまさぬ事などきこえ給ふて。おく
に。

後撰冬 雪ふりぬれは
しら山に降にし雪の跡たえて今はこしちの人もかよはず

となん有ける。御返あれど本になしとあり。か
くて九のきみの侍従の師尹きみにあはせ奉り給て
けり。

おなじころ。御息所を。宮おはしまさずなりに
ければ。左のおとゞの實頼右衛門督におはしまし
ける比。御文奉れ給ひけり。かのきみ。むこと

られ給ひぬときゝ給ふて。おとゞ。御息所に。

波のうつ方もしらねとわたつ海の浦山しくもおもほゆる哉
忠平 源經子守多島女 延長三十四(應院此出清盛)

おほきおとゞのきたのかたうせ給て。御はて
の月になりて。御わざの事などいそがせたま
ふころ。月のおもしろかりけるに。はしにいで
ゐたまふて。もののいとあはれにおぼされけ
れば。

續後撰 隠れにし月はめぐりて出くれと影にも人はみえずそ有ける
きにかイ

おなじおほきおとゞ。左のおとゞの御はゝの
すがはらのきみかくれ給にける御ぶくはて給
にける比。亭子のみかどなん。内に御せうそ
こきこえ給て。いろゆるされ給ける。さりけれ
ば。おとゞいとさよらにすはうがさねなどき
給ふて。きさいの宮にまいたりたまふて。院の
御せうそこのいとうれしく侍りて。かく色ゆ
るされ侍る事などきこえ給。さてよみ給ひけ
る。

ぬくをのみ悲しと思ひしなき人のかたみの色は又も有けり
 とてなむなき給ふける。そのほど中弁になん
 物し給ける。

亭子の帝の御供におほきおとど大井につかう

忠平

まつり給へるに。紅葉小倉山に色々のいとお
 もしろかりけるを。かぎりなくめでたまふて。
 行幸もあらんに。いとけうある所になん有け
 る。かならずそうしてせさせ奉らんなど申給
 ふて。ついでに。

拾遺歌

小倉山峰の紅葉は心あらは今一たいのみゆきまたなん

となん有ける。かくてかへり給ふてそうし給
 ひければ。いとけうあることなりとてなん。大
 ゐの行幸といふ事はじめ給ひける。

大井に季繩の少將すみける比。みかどののた
 まひける。花おもしろく成なば。かならず御ら
 んぜむとありけるを。おほしわすれておはし
 まさざりけり。されば少將。

新給巻下

散ぬれはくやしき物を大井川岸の山ふきけふ盛なり

とありければ。いたう哀がりたまふて。いそぎ
 おはしましてなむ御らんじける。

おなじ少將。やまひにいといたうわづらひて。
 すこしをこたりて。内にまいりたりけり。近江
 守公忠のきみ。掃部助にて藏人なりけるころ
 なりけり。そのかもりのすけにあひていひけ
 るやう。みだり心ちはまだをこたりはてねど。
 いとむつかしう心もとなく侍ればなんまいり
 つる。のちはしらねど。かくまで侍こと。まか
 りいでて。あさてばかりまいりこん。よきにそ
 うしたまへなどいひをきてまかでぬ。三日ば
 かりありて。少將のもとよりふみをなむをこ
 せたりけるを見れば。

新古哀傳

悔しくそ後にあはんと契けるけふをかきりといはまし物を

とのみかきたり。いとあさましくて。涙をこぼ
 してつかひにとふ。いかゞものし給ととへば。

つかひも。いとよはくなり給ひにたりといひ
てなくをきくに。さらにもきこえず。みづから
たゞいままいりてといひて。さとにくるま
りにやりて。まつほどいと心もとなし。この
のみかどにいでたちて。まちつけてのりては
せゆく。五條にぞ少將のいへあるに。いきつ
てみれば。いといみじうさはぎのしりてか
どさしつ。しぬる成けり。せうそこいひいる
どなにのかひなし。いみじうかなしくて。な
くかへりにけり。かくてありけることを。か
んのくだりそうしければ。みかどもかぎりな
くなん衰がり給ひける。

土佐守にありけるさかのひと酒井ざねといひけ
る人。やまひしてよはくなりて。と鳥羽はなりける
家にゆくとしてよみける。

行人は貞文そのかみこんといふものを心ほそしなやイけふの別れは
平中が貞文いろうごのみなりけるさかりに。市にい

きけり。なかごろはよき人々いちにいきてな
ん色このむわざはしける。それに故きさいの
宮のごたち。いちに出たる日になん有ける。平
中いろこのみかゝりて。になうけ源朝さうしけり。
のちにふみをなんをこせたりける。をんなど
もくるまなりし人はおほかりしをたれにある
ふみにかとなんいひやりける。さりければ。お
とこのもとより。

續後醍醐
百戰の袂の数はみしかともわきて思ひの色を戀しき

といへりけるは。むさしのかみのむすめにな
ん有ける。それなんいとこきかいねりきたり
ける。それをとおもふなりけり。さればそのむ
さしなん。のちは返事はしていひつぎにける。
かたちきよげにかみなぐなどして。よきわ
かうどになんありける。いといたう人びとけ
さうしけれど。思ひあがりて。おとこなどもせ
でなん有ける。されどせちによばひければ。あ

ひにけり。そのあしたにふみもをこせず。よるまでをともせず。心うしと思あかして。又の日までどふみもをこせず。そのよしたまちけれど。あしたにつかう人など。いとあだにものし給ときし人を。あり／＼てかくあひ奉り給て。みづからこそいとまもさはり給ことありとも。御文をだに奉りたまはぬ心うきことなど。これかれいふ。心ちにもおもひゐたることを人もいひければ。心うくくやしとおもひてなきけり。その夜もしやと思ひてまで又こず。又のひも文もをこせず。すべて音もせで五六日になりぬ。この女ねをのみなきて物もくはず。つかふ人など大かたは。なおほしそ。かくてのみやみ給べき御身にもあらず。人にはしらせでやみ給て。ことわざをもしたまひてんといひけり。物もいはでこもりゐて。つかふ人にも見えで。いとながかりけるかみをかいき

りて。手づからあまになりにけり。つかふ人あつまりてなきけれど。いふかひもなし。いと心うき身なれば。しなんとおもふにもしなれず。かくだに成て。おこなひをだにせん。かしがましくかくな人びといひさはぎそとなんいひける。かゝりけるやうは。平中そのあひけるつとめて。人をこせんとおもひけるに。つかさのかみにはかにものへいますとてよりいましてよりふしたりけるを。道達おひおこして。いままでねたりけるとて。せうえうしにとをき所へゐていまして。さけのみのしりて。さらにかへし給はず。からうじてかへるまゝに。亭子のみかどの御ともに大井にいておはしましぬ。そこにまたふた夜さぶらふに。いみじう急ひにけり。夜更てかへり給ふに此女のがりいかんとするに。かたふたがりければ。おほかたみなたがふかたへ。ぬんの人々るいしていにけり。此女いか

におぼつかなくあやしと思ふらんと戀しき
に。けふだに日もと暮なん。いきてありさま
もみづからいはん。かつふみをやらんと。ふひ
ざめて思ひけるに。人なんきてうちたゝく。た
そとへばなを副どうのきみにものきこえんと
いふ。さしのぞきてみればこの家の女なり。む
ねつぶれて。ちここといひて。ふみをとりに見
れば。いとかうばしきかみに。きれたるかみを
すこしかいわが緒ねてつゝみたり。いとあやし
うおぼえて。かいたることをみれば。

あまの川空なる物と聞しかとわかめの前の涙成けり

とかきたり。あまになりたるなるべしとみる
に目もくれぬ。心きもをまどはして。このつか
ひにとへば。はやう御ぐしおろし給てき。かゝ
ればごたちも昨日けふいみじうなきまどひ給
ふ。げすの心ちにもいとむねいたくなん。さば
かりに侍りし御ぐしをといひてなく時に。お

とこのこゝちいといみじ。なでうかゝるすき
ありきをして。かくわびしきめを見るらんと
おもへどかひなし。なく／＼返事かく。

よをわふる涙なかれて早くとも天の川にはさやはなるへき
いとあさましきに。えものもきこえず。みづか
らたゞいままいりてとなんいひたりける。か
くてすなはちきにけり。そのかみ女はぬり巻ご
めに入にけり。事のありやう。さはりをつかふ
人々にいひて。なくことかぎりなし。物をだに
きこえん。御聲をだにしたまへといひければ。
さらにいらへをだにせず。かゝるさはりをば
しらで。なをたゞいとをしさにいふと思ひ
けんとしてなん。おとこはよにいみじきこと
にしける。
逆餘
しげもとの少將に。女。
新占驗四
戀しさにしぬる命を思ひ出てとふ人あらはなしとこたへよ
少將かへし。

からにたに我きたりてへ露の身の消は共にと契をきてき

中興の近江のすけがむすめ。もののけにわづら

ひて。じやうざう大とくをけん^者じやにしける

ほどに。人とかくいひけり。なをしもはたあら

ざりけり。忍びてありへてのち。人のものいひ

などもうたてあり。猶よにへじとおもひいひ

てうせにけり。くらまといふところにもり

て。いみじうおこなひをり。さすがにいとこひ

しうおぼえけり。京をおもひやりつゝ。よろづ

の事いと哀におぼえて行ひけり。なく／＼う

ちふしてかたはらを見れば。ふみなんみえけ

る。なぞのふみぞとおもひてとりてみれば。此

わがおもふ人のふみなり。かけることば。

後醍醐天皇
御染のくらまの山にいる人はたとくもかへりきなふん

とかけり。いとあやしく。たれしてをこせつら

むと思ひをり。もてくべきたよりもおぼえず。

いとあやしかりければ。又ひとりまどひきに

けり。かくて又山にいりにけり。さてをこせた
りける。

からくして思ひ忘るゝ戀しさをうたて啼つる鶯の聲

かへし。

さても君忘れりかし鶯の啼おりのみや思ひ出へき

となんいへりける。又じやうざう^譯だいたく。

我爲につらき人をはをきながら何の罪なきよをや恨ん

ともいひけり。此女はになくかしづきて。みこ

たちかんだちめよばひ給へど。みかどに奉ら

んとてあはせざりけれど。このこといできに

ければ。おやもみずなりにけり。故兵部卿宮。

この女のかゝることまだしかりける時よばひ

給ひけり。みこ。

萩のはのそよくことにそ恨つる風にうつりてつらき心を

これもおなじ宮。

新勅意四
と鳥集浅くこそ人はみるらめせき川の絶る心はあらしとおもふ

かへし。

聞 せき川の岩まをくゝる水淺み絶ぬへくのみみゆる心を

かくて。この女いでても聞えなどすれど。あはでのみありければ。みこおはしましたりけるに。月のいとあかかりければ。よみ給ひける。

よな／＼にいつとみしかとはか無て入にし月と云てやみ南とのたまひけり。かくてあふぎをおとし給へりけるを。とりて見れば。しらぬ女の手にてかくかけり。

忘らるゝ身は我からのあやまちになしてたに社君を恨みめとかけりけるをみて。そのかたはらにかきつけて奉ける。

ゆゝしくも思ほゆる哉人ことに疎まれにけるよに社有けれとなん。又この女。

忘らるゝときは山のねをそなく秋のゝ虫の聲に亂て返し。

なくなれと覺束なくそおもほゆる聲きくことの今は無れは

又おなじ宮。

雲ゐにてよをふる比は五月雨の天の下にそいけるかひなきかへし。

ふれはこそ聲も雲ゐに聞えけめいと遙けき心ちのみしておなじみやに。こと女。

逢事の願ふはかりになりぬれはたゝにかへしゝ時そ戀しき南院のいまぎみといふは。右京のかみむねゆきのきみのむすめなり。それおほきおと^{忠平}の内侍のかんのきみの御かたにさぶらひけり。それを兵衛督^{備尹}のきみあや君と聞えける時。ざうしにしばゝおはしけり。おはしたえにければとこなつのかれたるにつけて。かくなん。かりそめに君かふしみし常夏のねも枯にしをいかて咲けんとなんありける。

おなじ女。おほきがうしをかりて。又のちにかりたりければ。奉りたりしうしはしにきといひたりけるかへりごとに。

後醍醐二

我乗しことをうしとや消にけん草にかゝれる露のいのちは

あなじ女。人に。

大空はくもらすなから神無月としのふるにも袖はぬれけり

大膳のかみさん公平ひらのむすめども。あがたの

井といふ所にすみけり。おほいこはきさいの

宮に少將のごといひてさぶらひけり。三にあ

たりける備後守さねあ信明きら。まだわかおとこ

なりける時になん。はじめのおとこにしたり

ける。すまざりければよみてやりける。

此世にはかくてもやみぬ別路の淵せを誰にとひて渡らん

となんありける。

あなじ女。後に兵衛督もろたどにあひて。よみ

てをこせたりける。風ふき雨ふりける日の事

になん。

こち風はけふ日暮しに吹めれと雨もよにはたよにも非しな

とよみけり。

ひやうゑのかみはなれての後。臨時の祭のま

ひ人にさゝれていきけり。この女ども物見に

いでたりける。さてかへりてよみてやりける。

昔きてなれしをすれる衣手をあなめつらしたよそにみし哉

かくて。兵衛督山吹につけてをこせたりける。

諸共にゐてのさこそ戀しけれひとりおりうき山吹のはな

となん。かへしはしらず。かくて。これは女か

よひける時に。

大空もたゝならぬかな神はいな月我のみ下にしくると思へは

これもあなじ人。

新古今五逢事の浪のした艸みかくれてしつ心なくねこそなかるれ

かつらのみこ七夕のころ。人にしのびてあひ

たまへりけり。さてやりたまへりける。

袖をしもかさゝりしかと七夕のあかぬ別にひちにける哉

右のおとこの頭におはしける時に。少貳天聲佛乳母のめ

のとのもとによみて給ひける。

橋後推三秋のよをまてと頼めし言のはに今もかゝれる露のはかなさ

となん。

秋もこす露もをかねとことのはの我爲にこそ色かはりけれ
さんひらがむすめ。しぬとて。

なかけくもたのみける哉世中を袖に涙のかゝる身をもて
桂のみこよしたねに。

露しけみ草の袂を枕にて君まつむしのねをのみそなく

閑院のおほいぎみ。

昔より思ふ心はありそ海の濱のまさこはかすもしられす

おなじ女に。みちのくにかみにてしにし藤

原のさねき・がよみてをこせたりける。やまひ

いとおもくしてをこたりける比なり。いかで

たいめん・給はらんとて。

からくして惜みとめたる命もて逢事をさへやまんとやする

といへりければ。おほいぎみ。かへし。

諸共にいさとはいはてしての山なとかは獨こえんとはせし

といひたりけり。さてきたりける夜も。えあふ

まじき事やありけむ。えあはざりければ。かへ

りにけり。さてあしたに男のもとよりいひを

こせたりける。

曉はゆふつけ鳥のわひ聲にをとらぬ音をそなきてかへりし

おほい君。かへし。

曉のねさめのみに聞しかと鳥よりほかの聲はせさりき

おほきおとどは大臣になり給て年比おはする

に。枇杷のおとどはえなり給はでありわたり

けるを。つゐに大臣になり給にける御よろこ

びに。おほきおとど梅をおりてかざし給ふて。

をそくとくつゐに咲ける梅花たか植をきし種にかあるらん

とありけり。その日の事どもを歌などにかき

てさいぐうにたてまつり給とて。三條の右の

大殿の女御。やがてこれにかきつけ給ひける。

いかてかく年きりもせぬ種もかな荒ゆく庭の陰とたのまむ

とありけり。其御返し齋宮よりありけり。わす

れにけり。かくてねがひ給けるかひありて。左

のおとどの中納言わたり住給ひければ。たね

みなひろごり給て。かげおほく成にけり。さり

ける時に齋宮より。

花盛春はみにこん年きりもせずといふ種はおひぬとかきく
さねたうの小貳といひける人のむすめのおと
こ。

笛竹の一よも君とねぬ時は千種の聲にねこそなかるれ

といへりければ。女。

ちゝのねは言はのふきか笛竹のこちくの聲も聞えこなくに
としこが志賀にまうでたりけるに。ぞうき^{増喜}ぎ
みといふ法師ありけり。それはひえにすむ院^{宇多}
の殿上もする法しになん有ける。それこのと
しこのまうでたる日。志賀にまうであひにけ
り。はしどのにつぼねをしてゐて。よろづの事
をいひかはしけり。いまはとしこ歸りなんと
しけり。それにぞうきのもとより。

逢みては別るゝ事のなかりせはかつゝ物は思はさらまし
かへし。

いかなれはかつゝ物を思ふらん名残もなくそ我は悲しき

となん有ける。ことばもいとおほくなん有け
る。

おなじぞうき君。やれる人のもとほしらず。か
うよめりけり。

草のはにかゝれる露の身なれはや心うこくに涙おつらん
本院^{時平}の北方のまだ帥の大納言^{國盛}のめにています
かりけるおりに。平中がよみて聞えける。

春のゝに縁にはへるさねかつら我きみさねと頼むいかにそ
といへりける。かくいひゝゝてあひちぎるこ
とありけり。そののち左のおとゝの北のかた
にてのゝしり給ひけるととき。よみてをこせた
りける。

行末のすぐせもしらすわかむかし契しことはおもほゆや君
となんいへりける。そのかへし。それよりまへ
まへも。歌はいとおほかりけれど。えきかず。

泉の大將^{定國}。故左のおほいどの^{時平}にまうでたまへ
りけり。ほかにて酒などまいり。ゑひて。夜いた

くふけて。ゆくりもなくものし給へり。おとゝ
おどろき給て。いづくにものし給へるたより
にかあらんなど聞え給て。みかうしあけさは
ぐに。みぶのたゞみね御ともにあり。みはしの
もとにまづともししながら。ひざまづきて御せ
うそこ申す。

鵲の渡せる橋の霜の上をよはにふみわけことさらにこそ

となんのたまふと申す。あるじのおとゝいと
哀におかしとおぼして。そのよ一夜おほみき
まいらあそび給て。大將も物かづき。たゞみね
もろくたまはりなどしけり。このたゞみねが
むすめありときゝて。ある人なんえんといひ
けるを。いとよき事なりといひけり。おとこの
もとより。かのたのめ給ひしこと。この比のほ
どになん思ふといへりけるかへりごとに。

我宿の一村すゝきうらわかみむすひ時にはまたしかりけり
となんよみたりける。まことにまだいとちい

さきむすめになむありける。

つくしに有けるひがきのごといひけるは。い
とらうあり。おかしくて。よをへけるものにな
んありける。年月かくてありわたりけるを。す
みともがさはぎにあひて。家もやけほろび。も
のぐもみなとられはてゝ。いとみじうな
りにけり。かゝりともしらで。野大貳^{好言}うてのつ
かひにくだり給て。それが家のありしわたり
をたづねて。ひがきのごといひけん人に。いか
であはん。いづくにかすむらんとのたまへば。
このわたりになんすみはべりしなど。ともな
る人もいひけり。あはれかゝるさはぎに。いか
に成にけん。たづねてしがなとのたまひける
ほどに。かしらしろきをうなの水くめるなん。
まへよりあやしきやうなるいへに入ける。あ
る人ありて。これなんひがきのごといひけり。
いみじうあはれがり給て。よばすれど。はぢて

こで。かくなんいへりける。

後醍醐三
むは玉の我黒髪はしら川のみつわくむまで成にける哉

とよみたりければ。あはれがりて。きたりける
あこめひとかさねぬぎてなんやりける。

又おなじ人。大貳のたちにて。秋のもみぢをよ
ませければ。

鹿の音はいくらはかりの紅そふり出るからに山のそむらん

このひがきのご。歌なんよむといひて。すきも
のどもあつまりて。よみがたかるべきすゑを
つけさせんとて。かくいひげり。

わたつみの中にそたてるさをしかは

とて末をつけさするに。

秋の山へやそこにみゆらん

とぞつけたりける。

つくしなりける女。京におとこをやりてよみ
ける。

人をまつ宿はくらくそ成にける契し月のうちにみえねは

となんいへりける。

これもつくしなりける女。

秋風の心やつらき花すゝき吹くるかたを先そむくらん

先帝の御とき。卯月のついたちの日。うぐひす
のなかぬをよませ給ひける。公忠。

春はたと昨日はかりを鶯のかきれることもなかぬけふかな

となむよみたりける。

おなじみかどの御時。躬恒をめして。月のいと
おもしろき夜。御あそびなどありて。月をゆみ
はりといふはなにの心ぞ。そのよしつかうま
つれと仰給ひければ。みはしのもとにさぶら
ひてつかうまつりける。

照月を弓はりとしもいふことは山へをさしていれば成けり

ろくにおほうちぎかづきて。又。

白雲のこのかたにしもおりゐるは天津風こそ吹てきつらし

おなじみかど。月のおもしろき夜。みそかにみ
やすどころたちの御さうしどもを見ありかせ

給けり。御ともに公忠さぶらひけり。それにあ
る御ざうしより。こきうちぎひとかさねきた
る女の。いときよげなるいできて。いみじうな
きけり。公忠をちかくめして見せたまひけれ
ば。かみをふりおほひていみじうなく。などて
かくなくぞといへどいらへもせず。みかども
いみじうあやしがり給ひけり。公忠。
思ふらん心のうちはしらね共なくをみるこそ悲しかりけれ
とよめりければ。いとになくめで給ひけり。

大和物語下

延喜先帝の御時に。あるみざうしに。きたなげなき
はらはあるけり。みかど御らむじてみそかに
めしてけり。これを人にもしらせたまはで。と
きどきめしけり。さてのたまはせける。

新勅發三

あかてのみふれはなるへしあはぬよも逢夜も人を哀とぞ思

とのたまはせけるを。はらは(のい)ごこちにもかぎ

りなくあはれにおぼえてければ。しのびあへ
でともだちに。さんのたまひしとかたりけ
れば。この主なる御息所きゝて。をひいで給け
るものかいみじう(以下脱文歟)

定方

常神

三條右大臣のむすめ。つゝみの中納言にあひ
はじめ給けるあひだは。くらのすけにて内の
殿上をなんし給ける。女はあはんの心やなか
りけむ。こゝろもゆかずなんいまずかりける。
あとも宮づかひし給ければ。えつねにもい
まさざりけるころ。女。

新が戀四
たきもの

返しは。上手なればよかりけめど。えきかねば
かず。

又あとこ。日ごろさはがしくてなんえまいら
ぬ。かくいそぎまかりありく内にも。えまいり
こぬ事をなん。いかにとかざりなく思給ふる
とありければ。

さくなるうちにも物は思ふ也我つれくを何にたとへん
となんありける。

しがの山ごえのみに。いはえといふ所に。故
兵部卿宮。（元寇）家をおかしうつくり給て。時々
おはしましけり。いとしのびておはしまして。
しがにまうづる女どもを見給ふ時もありけ
り。おほかたもいとおもしろう。家もいとわか
しうなむ有ける。としこ。しがにまうでけるつ
いでに。このいへにきてめぐりつゝ見て。あは
れがりめでなどして。かきつけたりける。

かりにのみくる君待とふり（いいてはい）いてつゝ鳴しか山は秋を悲しき
となんかきつけていにける。

こやくしくそといひける人。あるひとをよば
ひてをこせたりける。

新が戀一
かくれぬの底の下艸みかくれてしられぬ戀は苦しかりけり
かへし。女。

同みかくれにかくる計りの下草は長からしともおもほゆる哉
このこやくしといひける人は。たけなんいと
みじかかりける。

先帝の御ときに。承香殿の御息所の御ざうし
に。中納言のきみといふ人さぶらひけり。それ
を。故兵部卿の宮。わか男にて一宮と聞えて。
いろこのみ給ひけるころ。承香殿はいとちか
きほどになんありける。らうあり。あかしき人
人有とき給て。物などのたまひかはしけり。
さりけるころほひ。この中納言の君にしのび
てね給ひそめてけり。ときふ。おはしまして

のち。この宮おさ／＼とひ給はざりけり。さる
ころ。女のもとよりよみてたてまつりける。

吟道標
人をとく

あくた川てふつの國のなには違はぬ君にそ有ける

かくてものもくはで。なく／＼やまひになり
てとひ奉りける。かの承香殿のまへの松に雪
のふりかゝりたりけるを折て。かくなん聞え
奉りける。

後醍醐
天皇

こぬ人を松にかゝれる

のほにふい

(くゆる集)

あはぬ思ひに

とてなん。ゆめこの雪おとすなと。つかひにい
ひてなむたてまつりける。

故兵部卿宮。のぼるの大納言のむすめにすみ

給けるを。れいのおはしまし所にはあらで。ひ

さしにおまし敷て。おほとのごもりなどして

かへり給て。ほどひさしうおはしまさざりけ

り。かくてのたまへりける。かのひさしにしか

れたりし物は。さながらありや。とりたてやし

給てじとのたまへりければ。御返事。

敷かへすありしなからに草枕ちりのみそゐる拂ふ人なみ
とありければ。御返に。

草枕ちりはらひにはからころも袂ゆたかにたつをまてかし
とありければ。又。

唐衣たつを待まのほとこそは我敷たへの塵もつもらめ

とありければ。おはしまして。又宇治へかりし
になんいくとのたまひける御返に。

御狩するくりこま山の鹿よりも獨ぬる身そわひしかりける

よしいへといひける宰相のはらから。やまと
のぞうといひて有けり。それ(がい)もとのめのもと

に。つくしより女をゐてきてすへたりけり。本

のめも心いとよくかたらひゐたりけり。かく

て此おとこは。こゝかしこひとのくにがちにの

みありきイ・ければ。ふたりのみなんゐたりける。

此つくしのめ。しのびておとこしたりけり。そ

れを人のとかくいひければ。よみたりける。

夜半に出て月たにみすは逢ことをしらす顔にも云まし物を

となん。かゝるわざをすれど。もとのめいと心
よき人なれば。おとこにもいはでのみなんあ
りわたりけれども。ほかのたより(セヨリヨリイ)。かく
(イナシ)。かくおとこすなりときして。このおとこ思ひ
たりけれど。心にもいれで。たえざるものにて
をきたりけり。さてこのおとこ。女こと人に物
いふときして。その人とわれといづれをお
もふとひければ。女
花すゝき君かたにそなひくめる思はぬ山の風はふけとも
となんいひける。よばふおとこもありけり。世
中こゝろうし。なをおとこせじなどいひける
物なん。この男をやうくおもひやつきけん。
このおとこの返事などしてやりて。このもと
のめのもとに。ふみをなんひきむすびてをこ
せたりける。見ればかくかけり。

身をうしと思ふ心のこりねはや人をあはれと思そむらん
となん。こりずまによみたりける。かくて心の

へだてもなくあはれなれば。いとあはれと思
ふほどに。おとこは心かはりにければ。ありし
ごとくあらねば。かのつくしにおやはらから
など有ければいきけるを。おとこも心かはり
にければ。とゞめでなむやりける。もとの女な
むもろともにありならひにければ。かくてい
くことをいとかなしと思ひけり。山ざきにも
ろともにいきてなん。ふねにのせなどしける。
おとこもきたりけり。このうはなりこなみ。後妻
とひひとよ。よろづの事をいひかたらひて。つ
とめて舟にのりぬ。いまはおとこ。もとのめは
かへりなむとてくるまにのりぬ。これもかれ
もいとかなしとおもふほどに。ふねにのり給
ぬる人のふみをなんもてきたる。かくのみな
ん有ける。

ふたりこし道ともみえぬ浪の上を思ひかけても歸すめる哉
といへりければ。おとこももとのめも。いとい

たうあはれがりなきけり。こぎいでていぬれどえ返事をもせず。くるまはふねのゆくを見てえいかず。舟にのりたる人は車を見ると。おもてをさし出てこぎゆけば。とをくなるまに。かほはいとちいさく成までみをこせければ。いとかなしかりけり。

故御息所の御あね。おほいこにあたり給けるなん。いとらうくしくうたよみ給ことも。をととたち御やす所よりもまさりてなむいすかりける。わかきときにめをやはうせ給にけり。まゝはゝの手にいますかりければ。心にもものかなはぬときもありけり。さてよみ給ひける。

古今雅下

有はてぬ命まつまの程はかりうきことしけくおもはすも哉

梅イ

となんよみ給ける。さくらの花を折て。また。

かゝるかの秋もかはらす句せは春戀してふなかめせましやとよみ給へりける。いとよしづきておかしく

いすすかりければ。よばふ人もいとおほかりけれど。返事もせざりけり。女といふもの。つゐにかくてはて給ふべきにもあらず。ときどきはかへりごとしたまへと。おやもまゝ母もいひければ。せめられてかくなんいひやりける。

思へ共かひなかるへみ忍ふれはつれなきともや人の見る覽とばかりいひやりて。物もいはざりけり。かくいひける心ばへは。おやなど男あはせんといひけれど。一生におとこせでやみなんといいふことを。よとともにいひける。さいひけるものしく。おとこもせで廿九にてなむうせ給ひける。

兼中

設作

むかし在中將のみむすこ在次君といふがめなる人なん有ける。女は山蔭の中納言のみひめにて。五條のごとなんいひける。かのざいじぎみのいもうとの。伊勢のかみのめにています

かりけるがもとにいきて。かみのめしうどに
てありけるを。このめのせうとのざいじ君は。
しのびてすむになん有けるを。我のみとおも
ふに。このおとこのはらからなん。又あひたる
けしきなりける。さりければ。女のもとに。

新勅録四

定なんと思ふ心のかなしきはうきもうからぬ物にそ有ける

となんよみたりける。いまはみなふるごと
なりにたることなり。

この在次君。ざい中將のあづまにいきたりけ
るけにやあらん。このこどもも人のくにがよ
ひをなん時々しける。心あるものにて。ひとの
國のあはれにこゝろばそき所々にては。うた
よみてかきつけなどなんしける。をふさのむ
まやといふ所は。海邊になむ有ける。それによ
みてかきつけたりける。

渡つ海と人やみるらんあふ事の涙をふさになきつめつれば

又みのわの里といふむまやにて。

いつとは分ねと絶て秋のよそ身の佗しきはしり勝りける
とよみてかきつけたりける。かくて人のくに
にありきく。て。かひのくににいたりてすみ
けるほどに。やまひしてしぬとて。よみたりけ
る。

かりそめの行かひちと思ひしを今は限りのかとて也けり
となんよみてしにけり。

このざいじぎみのひと所にぐして。しりたりけ
る人。三河の國よりのぼるとて。このむまやど
もにやどりて。此歌どもを見て。手はみしりた
りければ。みつけて。いとあはれとおもひけり。
亭子のみかど川尻におはしましにけり。うか
れめにしろといふものありけり。めしにつか
はしたりければ。参りてさぶらふ。かんだちめ
殿上人みこたち。あまたさぶらひ給ひければ。
しもにとをくさぶらふ。かうはるかにさぶら
ふよし。歌つかうまつれと仰られければ。すな

はちよみて奉りける。

濱千鳥とひ行かきり有ければ雲立山をあはとこそみれ

とよみたりければ。いとかしこくめで給ひて。
かづけものたまふ。

古別
命たに心にかなふ物ならはなにか別のかなしからまし

といふうたも。このしろがよみたる歌なりけり。

亭子のみかどとり鳥飼かひのゐんにおはしましに

けり。れいのごと御あそびあり。此わたり(のイ)にう

かれめどもあまたまいりてさぶらふ中に。聲

もあもしろくよしあるものは侍りやととはせ

給に。うかれめばらの申やう。大江のたまぶち

がむすめといふものなん。めづらしうまいり

て侍と申ければ。見させ給ふに。さまかたちも

さよげなりければ。あはれがり給て。うへにめ

しあげ給。そもくまことかなとはせ給ふ

に。とりかひといふだいを人々によませ給ひ

にけり。仰給ふやう。玉淵はいとらうありて歌
などよくよみき。このとりかひといふだいを
よくつかうまつりたらんにしたがりて。まこ
との子とはおもほさんとおほせ給ひけり。う
け給はりてすなはち。

浅みとりかひある春にあひぬれは霞ならねとち昇りけり

とよむときに。みかどのしりあはれがり給

て。御しほたれ給ふ。人々もよくゑひたるほど

にて。ゑひなきいになくす。みかど御うちぎ

ひとかさねはかま給ふ。ありとある上達部み

こたち四位五位。これにものぬぎてとらせざ

らんものは。座よりたちねとのたまひければ。

かたはしより上下みなかづけたれば。かづき

あまりて。ふたまばかりつみてぞをきたりけ

る。かくてかへり給とて。南院の七郎君といふ

人有けり。それなむこのうかれめのすむあた

りに。家作りてすむと聞しめして。それになん

のたまひあづけらる。かれが申さんことゐんにそうせよ。ゐんよりたまはせむものも。かの七郎君がりつかはさん。すべてかれにわびしきめな見せそと仰られければ。つねになんとぶらひかへりみるに。

むかし津の國にすむ女有けり。それをよばふ男

二人なん有ける。ひとりはそのくににすむ男。

姓はむばらになんありける。いまひとりは和泉國の人になん有ける。姓はちぬとなんいひける。かくてそのおとこども。としよはひかほ

かたち人のほど。たゞおなじばかりなん有ける。心ざしのまさらんにこそはあはめとおもふに。心ざしのほどたゞおなじやうなり。くる

ればもろともにきあひぬ。ものをこすればただおなじやうにをこす。いづれまされりといふべくもあらず。女おもひわづらひぬ。此人のこゝろざしのをろかならば。いづれにもあふ

まじけれど。これもかれも。月日をへて家のかにたちて。よろづに心ざしをみえければしわびぬ。これよりもかれよりもおなじやうにをこするものども。とりもいれぬといろくにもちてたてり。あやありてかく見ぐるしく年月をへて。人のなげきをいたづらにおふもいとをし。ひとりくにあひなば。いまひとり

がおもひはたえなんといふに。女。こゝにもさ。おもふに。人の心ざしのおなじやうなるになん。おもひわづらひぬる。さらばいかゞすべきといふに。そのかみいくたの川のつらに。ひらばりをうちてゐにけり。かゝれば。そのよばひ人どもをよびにやりて。おやのいふやう。たれもみこゝろざしのおなじやうなれば。このおさなきものなんおもひわづらひにて侍る。けふいかにまれ。このことをさだめてん。あるはとをき所よりいします人有。あるはこゝな

がらそのいたづきかぎりなし。これもかれも
いとをしきわざなりといふときに。いとかし
こくよろこびあへり。申さんとおもふ給ふる
やうは。この川にうきてさぶらふ水鳥をいた
まへ。それをいあて給へらむ人に奉らんと
いふ時に。いとよき事なりといひてゐるほどに。
ひとりのかしらのかたをいつ。今ひとりは
おのかたをいつ。そのかみいづれといふべくも
あらぬに。女おもひわづらひて。

住わひぬわかみなけてんつの國の生田の川はなのみ也けり
とよみて。此ひらはりはかはにのぞきてした
りければ。づぶりとおちいりぬ。(みづ)おやあはてさ
はぎのゝしるほどに。このよばふ男ふたり。や
がておなじ所におちいりぬ。ひとりはあしを
とらへ。いまひとりは手をとらへてしにけり。
そのかみおやいみじくさはぎでとりあげて。
なきのゝしりてはふりす。男どものおやもき

にけり。この女の塚のかたはらに。又つかども
作りてほりうづむ。ときに津のくにのおとこ
のおやのいふやう。おなじくにおとこをこ
そおなじところにはせめ。こゝくにの人の。い
かでこの國のつちをばをかすべきといひてさ
またぐるときに。いづみのかたのおや。和泉國
のつちをふねにはこびて。こゝにもてきてな
ん終にうづみてける。されば女のはかをば中
にて。左右になんおとこのつかどもいまでもあ
なる。かゝる事どものむかし有けるを。繪にみ
なかさて。故きさいの宮に人の奉りたりけれ
ば。これがうへをみな人々。この人にかはりて
よみける。伊勢の御息所。男のこゝろにて。

影とのみ水の下にて逢みれと玉なきからはかひなかりけり
女にかはり給て。女一のみや。ゆきこ

限りなくふかく沈める我玉はうきたる人にみえんものかは
又宮。

いつこにか玉を求めん渡つみのこゝ彼所とも思ほえなくに
兵衛の命婦。

つかのまも諸共にこそ契けれあふとは人にみえぬ物から

いと所の別當。^{治子}

かちまけもなくてやはてん君により思くらふの山はこゆ共
いきたりしありの女になりて。

逢ことのかたみにうふるなよ竹の立わつらふと聞そ悲しき
又ひと。

身をなけてあはんと人に契らねと愛身は水に影をならへつ
又いまひとりのおとこになりて。

同しえにすむは嬉しき申なれとなと我とのみ契らさりけん
かへし。女。

うかりける我みな底を大かたはかゝる契のなからましかは
又ひとりのおとこになりて。

我とのみ契らすなからおなしえにすむは嬉しき汀とそ思ふ
さて此男は。くれ竹のよふかさをきりて。かり
ぎぬはかまえぼしおびなどをいれて。ゆみや

なぐひたちなどいれてぞうづみける。今ひと
りは。をろかなるおやにやありけん。さもせず
ぞ有ける。かのつかのなをばをとめづかとぞ
いひける。あるたび人。このつかのもとにやど
りたりけるに。人のいさかひするをとのしけ
れば。あやしと思て見せけれど。さることな
しといひければ。あやしとおもふ。ねぶり
たるに。ちにまみれたるおとこまへにきてひざ
まづきて。我かたきにせめられてわびにて侍
り。御はかししばしかし給へらん。ねたきもの
のむくひし侍らんといふに。おそろしとおも
へど。かしてけり。さめて夢にやあらんとおも
へど。たちはまことにとらせてやりてけり。と
ばかりきけば。いみじうさきのごといさかふ
なり。しばしありて。はじめの男きて。いみじう
よろこびて。御とくにとしごろねたきものう
ちころし侍りぬ。いまよりはながき御まもり

となり侍るべきとてこのことのはじめよりか
たる。いとむくつけしとおもへど。めづらしき
ことなればとひきくほどに。夜もあけにけれ
ば人もなし。あしたにみれば。つかのもとにち
などなんながれたりける。たちにもちつきて
なん有ける。いとうとましくおぼゆる事なれ
ど。人のいひけるまゝなり。

つの國のなにはのわたりに家して住人ありけ
り。あひしりて年比有けり。女もおともいと
下すにはあらざりけれど。年比わたらひなど
もいとわろくなりて。いへもこぼれ。つかふ人
などもとく有^てところにいきつゝ。たゞふたり
すみわたるほどに。さすがにげすにもあらね
ば。人にやとはれつかはれもせず。いとわびし
かりけるまゝに。思ひわびて。ふたりいひける
やう。猶いとかうわびしうてはえあらじ。男は
かくはかなくてのみいますかめるを見すてゝ

は。いづちも／＼いくまじ。女も男をすてゝ
はいづちかいかんとのみいひわたりけるを。
おとこ。をのれはとてまかくてもへなむ。女の
かくわかきほどに。かくてあるなんいといと
をしき。京にのぼりてみやづかひをもせよ。よ
ろしきやうにもならば。われをもとふらへ。を
のれも人のごともならば。かならずたづねと
ふらはんなどなく／＼いひ契て。たよりの人
にいひつきて。女は京にきにけり。さしはへい
づこともなくてきたれば。このつきてこし人
のもとにゐて。いとあはれと思やりけり。まへ
におぎすゝきいとおほかる所になむ有ける。
風などふきけるに。かのつのくにをおもひや
りて。いかであらんなどかなしくてよみける。
獨していかにせましとわひつればそよも前の萩を答ふる
となんひとりがちける。さてとかう女さすら
へて。ある人のやんごとなき所に宮たてたり。

さてみやづかひしありくほどに。さうぞくき^駿よげにし。むつかしき事などもなくてありければ。いときよげにかほかたちもなりにけり。かゝれどかのつの國をかた時もわすれず。いと哀と思ひやりけり。たよりの人に文つけてやりたりければ。さいふ人も聞えずなどいはかなくいひつゞきけり。わがむつまじうしれる人もなかりければ。心ともえやらず。いとおぼつかなく。いかゞあらんとのみ思ひやりけり。かゝるほどに。此宮づかへする所の北の方うせ給て。これかれある人をめしつかひたまひなどする中に。この人を思ひ給けり。おもひつきてめになりにけり。おもふこともなくめでたげにてゐたるに。たゞ人しれずおもふ事ひとつなむ有ける。いかにしてあはん^{オハイン}。あしうてやあらん。よくてやあらむ。我あり所もえしらざらん。人をやりてたづねさせんとすれ

ど。うたてわがおとこきゝて。うたてあるさまにもこそあれと。ねんじつゝありわたるに。なをいとあはれにおぼゆれば。男にいひけるやう。つの國といふところのいとおかしかなる^{ゲイ}に。いかでなにはにはらへしがてらまからんといひければ。いとよきこと。我ももろともにといひければ。そこにはなものしたまひそ。をのれひとりまからんといひて。いでたちていにけり。なにはにはらへして。かへりなんとする時に。このわたりに見るべきことなむあるとて。いますこしとやれかくやれといひつゝ。このくるまをやらせつゝ家のありしわたりを見るに。屋もなし。人もなし。いづかたへいにけんとかなしうおもひけり。かゝる心ばへにてふりはへきたれどわがむつまじきずさもなし。かゝればたづねさすべきかたもなし。いとあはれなれば。くるまをたてゝながむるに。

ともの人は。ひくれぬべしとて。御くるまうながしてんといふに。しばしといふほどに。あしになひたるおとこの。かたゐのやうなるすがたなる。このくるまのまへよりいきけり。これがかほをみるに。その人といふべくもあらず。いみじきさまなれどわがあとこにいたり。これを見てよく見まほしさに。このあしもちたるをのこよばせよ。あしかはんといはせける。さりければ。ようなきものかひ給とは思ひけれど。しうのたまふ事なればよびてかはす。車のもとちかくなひよせさせよ。見んなどいひて。この男のかほをよくみるにそれなりけり。いとあはれに。かゝるものあきなひてよにふる人いかならんといひてなきければ。ともの人は。なをおほかたのよを哀がるとなん思ける。かくてこのあしの男にもものなどくはせよ。物いとおほくあしのあたひにとらせよ

といひければ。すぐなるものになにかものおほく給はんなど。ある人々いひければ。しゐてもえいひにくいて。いかで物をとらせんとおもふ間に。したすだれのはざまのあきたるより。この男まもれば。わがめにいたり。あやしさに心をさめて見るに。かほもこゑもそれなりけりと思ふに。おもひあはせて。わがさまのいといらなく成たるをおもひはかるに。いとはしたなくて。あしもうちすてゝはしりにげにけり。しばしといはせけれど。人の家になげ入て。かまのしりへにかゝまりありけり。この車より。なをこのおとこたづねてゐてこといひければともの人手をあかちてもとめさはぎけり。人そこなる家になん侍けるといへば。此おとこに。かくおほせ事ありてめすなり。なにのうちひかせ給べきにもあらず。ものをこそは給はせんとすれ。おさなきものなりとい

ふとときに。硯をこひてふみかく。それに。

今置下
君なくてあしかりけりと思にもいと難波の浦をすみうき

とかきてふむ^封じて。これを御車に奉れといひければ。あやしと思ひてもてきて奉る。あけて見るにかなしき事ものににず。よゝとぞなきける。さてかへしはいかゞしたりけん。しらず。くるまにきたりける衣ぬぎてつゝみて。ふみなどかきぐしてやりける。さてなむかへりける。のちにはいかゞなりにけん。しらず。

沙羅下
あしからしとてこそ人のわかれけり

けん集

何か難波の浦は住うき

昔やまとのくにかづらきのこほりにすむ男女有けり。この女かほかたちいときよらなり。とし比おもひかはしてすむに。この女いとわろくなりければ。おもひわづらひて。かぎりなく思ひながら。めをまうけてけり。此今のめは。とみたる女になむありける。ことには思はねど。いけばいみじういたはり。身のさうぞくも

いときよらにせさせけり。かくにぎはしきところにならひてきたれば。この女いとわろげにてゐて。かくほかにありけど。さらにねたげにも見えなどあれば。いとあはれと思けり。心ちにもかぎりなくねたく。心うくおもふを忍ぶるになん有ける。とゞまりなんとおもふよも。なをいねといひければ。わがかくありきするをねたまで。ことわざするにやあらん。さるわざせずば。うらむる事も有なんなど心のうちにおもひけり。さていでいくとみえてぜんざいの中にかくれて。男やくると見れば。はしにいでゐて。月のいといみじうおもしろきに。かしらかいけづりなどしてをり。夜ふくるまでねず。いといたううちなげきてなめければ。人まつなめりと見るに。つかふ人のまへなりけるにいひける。

古今雜下
風ふけは沖つしら浪たつた山よはにや君かひよりこゆらん

風ふけは沖つしら浪たつた山よはにや君かひよりこゆらん

とよみければ。わがうへを思ふなりけりとおもふに。いとかなしう成ぬ。このいまのめの家は。たつた山こえていく道になんありける。かくてなをみせりければ。この女うちなきてふして。かなまりに水をいれてむねになんすへたりける。あやし。いかにするにかあらんとてなをみる。さればこの水あつゆになりてたぎりぬれば。ゆふてつ。又みづをいる。みるにいとかなしくて。はしりいでて。いかなる心ちしたまへばかくはし給ふぞといひて。かきいだきてなんねにける。かくてほかへもさらにいかで。つとぬにけり。かくて月日おほくへて思ひやるやう。つれなきかほなれど。女のおもふことといひみじきことなりけるを。かくいかぬをいかに思ふらむとおもひいでて。ありし女のがりいきたりけり。久しくいかざりければ。つつましくてたてりけり。さてかいまめば。われ

にはよくてみえしかど。いとあやしきさまなるきぬをきて。おほぐしをつらぐしにさしかけてをり。手づからいひもりをりけり。いといみじと思ひて。きにけるまゝにいかず成にけり。此男はおほきみなりけり。

昔ならのみかどにつかうまつるうねべありけり。かほかたちいみじうきよらにて。人々よばひ殿上人などもよばひけれど。あはざりけり。そのあはぬ心は。みかどをかぎりなくめでたきものになん思ひ奉りける。御門めしてけり。さて後又もめさざりければ。かぎりなく心うしとおもひけり。よるひる心にかゝりておぼえ給つ。こひしくわびしくおぼえ給けり。御門はめしゝかど事ともおぼさず。さすがにつねには見え奉る。なを世にふまじき心ちしければ。よるみそかにいでて。さるさはの池に身をなげてけり。かくなげつとも御門はえし

ろしめさゞりけるを。事のついでありて人の
 そうしければきこしめしてけり。いといたう
 あはれがり給て。池のほとりにおほみゆきし
 給て。人々に歌よませたまふ。かきのもとの人
 丸。

（八段）

わきも子かねくたれ髪を猿澤の池の玉藻とみるそかなしき
 とよめるときに。御門。

猿澤の池もつらしなわきも子か玉藻かつかは水そひなまし
 とよみ給ひけり。さてこのいけのほとりに。は
 かせさせたまひてなん。かへらせおはしまし
 けるとなん。

おなじみかど。たつた川のもみぢいとおしも
 ろきを御らむじける日。人まろ。

（古歌下）

（拾多）

龍田川紅葉はなかる神なひのみむろの山にしくれ降らし

（拾多）

御門。

（古歌下）

たつた川もみちみたれてなかるめりわたらは錦中や絶なん

（八段）

とぞあそばしたりけり。

おなじみかど。かりいとかしこくこのみ給け
 り。みちのくにいはでのこほりより奉れる御
 鷹。よになくかしこかりければ。になうおぼし
 て御手だかにし給けり。名をばいはでとなむつ
 け給へりける。それをかのみちに心ありて。あ
 づかりつかうまつり給ける大納言に。あづけ
 給へりける。よるひるこれをあづかりてとり
 かひ給ほどに。いかゞし給けん。そらし給てけ
 り。心きもをまどはしてもとむるに。さらにえ
 見いでず。山々に人をやりつゝもとめさすれ
 どさらになし。みづからもふかき山に入てま
 どひありき給へどかひもなし。此事をそうせ
 でしばしもあるべけれど。二三日にあげず御
 らんぜぬ目なし。いかゞせんとて。内にまゐり
 て御鷹のうせたるよしをそうし給時。みかど
 物ものたまはせず。きこしめしつけぬにやあ
 らんとて。またそうし給ふに。おもてをのみま

ち給たりけるを。御門に奉らんとてかしづき
給けるを。殿にちかうつかうまつりけるうど
ねりにて有ける人。いかでか見けむ。このむ
すめを見てけり。かほかたちのいとうつくし
げなるをみて。よろづのことおぼえず心にか
かりて。よるひるいとわびしくやまひになり
ておぼえければ。せちにきこえさすべき事な
むあるといひわたりければ。あやし。なにこ

とぞといひて出たりけるを。さる心まうけし
て。ゆくりもなくかきいだきて馬にのせて。
みちのくにへよるともいはずひるともいは
ずにげていにけり。あさかのこほりあさかの
山といふ所にいほりをつくりて。この女をす
へて。里に出つゝ物などもめてきつゝくは
せて年月をへて有へけり。此男いぬれば。たゞ
ひとりものもくはで山中にゐたれば。かぎり
なくわびしかりけり。かゝるほどにはらみに

けり。この男ものもとめにに出にけるまゝに。三
四日こざりければ待わびて立出て。山の井に
いきてかげをみれば。わが有しかたちにもあ
らず。あやしきやうになりけり。かゞみもな
ければ。かほのなりたらんやうもしらで有け
るに。にはかにみれば。いとおそろしげなりけ
るを。いとはづかしとおもひけり。さてよみた
りける。

あさか山かけさへみゆる山のゐの淺くは人を思ふものかは
とよみて木にかきつけて。いほにきてしにけ
り。おとこ物などもめてもてきて。しにてふ
せりければ。いとあさましと思ひけり。山の井
なりける歌をみて。かへりきて。これをおもひ
じにに。かたはらにふせりてしにけり。世のふ
るごとになむ有ける。

信濃國さらしなといふ所に男すみけり。わか
きときにおやはしにければ。をばなんおやの

ごとくに。わかくよりあひそひてあるに。この
めの心いと心うきことおほくて。このしうと
めのおいかゞまりてゐたるを。つねにくみ
つゝ。男にもこのをばのみ。心のさがなくあし
きことをいひきかせければ。むかしのごとく
にもあらず。をろかなることおほく。このをば
のためになりゆきけり。このをばいといたう
おいて。ふたへにてゐたり。これを猶このよめ
ところせがりて。いままでしなぬこととおもひ
て。よからぬことをいひつゝ。もていましてふ

かき山にすてたふびよとのみせめければ。せ
められわびて。さしてんとおもふなり。月のい
とあかき夜。をうなどもしざたまへ。寺にたう
ときわさすなる。みせ奉らんといいければ。か
ぎりなくよろこびておはれにけり。たかき山
のふもとにすみければ。その山にはるゝと
いりて。たかき山の峯のありく。べくもあらぬ

にをきてにげてきぬ。やゝといへどいらへも
せで。にげて家にきておもひをるに。いひはら
だてけるありに。はらだちてかくしつれど。年
比おやのごとやしなひつゝあひそひにけれ
ば。いとかなしくおぼえけり。この山のかひよ
り。月もいとかがりなくあかくていでたるを
ながめて。夜ひとよいもねられず。かなしくお
ぼえければ。かくよみたりける。

古羅上

我心なくさめかねつさらしなやはすて山にてる月をみて
とよみてなん。又いきてむかへもてきにける。
それより後なんをばすて山といひける。なく
さめがたしとは。これがよしになんありけ
る。

下野國に男女すみわたりけり。とし比すみけ
るほどに。あとこめまうけて心かはりはてゝ。
此家に有けるものどもを。今のめのがりかき
はらひもてはこびいく。心うしとおもへど。猶

まかせて見けり。ちりば^たかり^{じイ}のものものこさず。みなもていぬ。たゞのこりたる物は。馬ぶねのみなんありける。それをこのおとこの^從ずさまかぢといひけるわらはをつかひけるして。此舟をさへとりをこせたり。このわらはに女のいひける。きむぢもいまはこゝに見えじかしなどいひければ。などてかさぶらはざらん。ぬしおはせずともさぶらひなんなどいひたてり。女。ぬしにせうそこきこえは申てんや。ふみはよに見給はじ。たゞことばにて申せよといひければ。いとよく申てんといひければ。かくいひける。

舟もいぬまかちもみえしけふよりは浮世の中をいかて渡覽と申せといひければ。男にいひければ。ものかきふるひいにしおとこなん。しかながらはこびかへして。もとのごとくあからめもせでそひるにける。

大和國に男女有けり。年月かぎりなく思ひてすみわたりけるを。いかゞしけん女をえてけり。猶もあらず。この家にいできて。かべをへだてゝすみて。わがかたにはさらによりこず。いとうしとおもへど。さらにいひもねたまず。秋のよのながきにめをさましてきけば。しかなんなきける。ものもいはできゝけり。かべをへだてたるおとこ。きゝ給や。にしこそといひければ。何事といらへければ。このしかのなくはきゝ給ふやといひければ。さきゝ侍りといひければ。おとこさてそれをばいかゞ聞給ふといひければ。をんなふといひけり^{ハヘイ}。

^{新古今五}我もしか啼てそ人に戀られし今こそよそに聲をのみきけとよみたりければ。かぎりなくめでて。このいまの女をばをくりて。もとのごとくなんすみわたりける。

そめどのの内侍といふいますかりけり。それ

をよし有のおとどと申けるなん。ときくす
み給ける。物をかくし給ければ。御ぞどもをな
んあづけさせ給けるに。あやどもをおほくつ
かはしたりければ。雲鳥のもんのおやをやそ
むべきと聞えたりしを。ともかくものたまは
せねば。えなんつかうまつらぬ。さだめうけ給
はらんと申奉りければ。おとど御返事に。

續後拾遺
雲とりの綾の色をもおもほえず人をあひみて年のへぬれば

となむのたまへりける。

おなじ内侍に在中將すみける時。中將のもと
によりてやりける。

後醍醐
秋はきを色とる風の吹ぬれば人の心もうたかはれけり

とありければ。返し。

同在原業平
秋のゝをいうとる風は吹ぬとも心はかれし草葉ならねは

となんいへりける。かくてすまずなりて後。中
將のもとより。きぬをなんしにをこせたりけ
る。それにあらはひなどする人なくて。いとわ

びしくなんある。なをかならずしてたまへと
なん有ければ。内侍御心もてあることにこそ
はあなれ。

大幣となりぬる人の悲しきはよるせともなく鹿そなくなる
となんいひやりたりける。中將。

流る共何とかみえん手にとりてひきけん人そぬきとしる寛
となむいひける。

在中將。二條のきさいの宮まだみかどにもつ
かうまつり給はで。たゞ人におはしましける
よによばひ奉りける時。ひじきといふ物をこ
せて。かくなん。

伊勢物語
思ひあらは葎の宿にねもしなんひしき物には袖をしつゝも

となんのたまへりける。返しを人なんわすれ
にける。さてきさいのみや。春宮の女御と聞え
て。大原野にまうで給けり。御ともにかんだち
め殿上人いとおほくつかうまつり給へり。在
中將もつかうまつれり。御車のあたりにイなまく

らきおりにたてりけり。みやしろにて。大かたの人々ろく給はりてのちなりけり。御車のしりより。奉れる御ひとへの御ぞをかつけさせ給へりけり。在中將たまはるまゝに。

古義上

大原やをしほの山もけふこそは神代のことも思いつらめ

としのびやかにいひけり。むかしをおぼしいでて。おかしとおぼしけり。

又在中將内にさぶらふに。みやす所の御かたより。わすれ草をなん。是は何とかいふとて給へりければ。中將。

續古義四

忘艸おふるのへとはみるらめとこは忍ふなりのちも頼まむ

となんありける。おなじ草をしのぶぐさ。わすれ草といへば。それによりてなんよみたりける。

在中將に。きさいのみやよりきくめしければ。たてまつりけるついでに。

古義下

うへし桶は秋なき時や咲さらん花社ちらめねさへかれめや

とかいつけてたてまつりける。

在中將のもとに。人のかざりちまきをこせたりけるかへしに。かくいひやりける。

菖蒲かり君は沼にそ惑ひける我は野にいてゝかるそ侘しきとて。きじをなんやりける。

請和

水尾のみかどの御時。左大弁のむすめ。べんのみやす所とていますかりけるを。みかど御ぐしおろし給て後に。ひとりいますかりけるを。在中將しのびてかよひけり。中將やまひいとおもくしてわづらひけるを。もとのめどももあり。これはいとしのびてあることなれば。えいきもとぶらひ給はず。しのびくになんとぶらひける事日々にあるけり。さるにとはぬ日なん有ける。やまひもいとおもりて。その日に成にけり。中將のもとより。

徒然といとゝ心の侘しきにけふとはすてくらしてんやとてをこせたり。よはく成にたりとて。いとい

たくなきさはぎて。返事などもせんとするほ
どに。しにけりとさして。いといみじがりけり。
しなんとすることいま／＼となりてよみたり
ける。

古賀 つゝに行道とはかねて聞しかと昨日今日とは思はさりしを

とよみてなんとえはてにける。

在中將物見にいでて。女のよしあるくるまの
もとにたちぬ。したすだれのはざまより。此女
のかほいとよく見てけり。物などいひかはし
けり。これもかれもかへりて。あしたによみて
やりける。

古賀一 みすも非すみもせぬ人の戀しくは綾なくけふや詠め暮さむ
とあれば。女かへし。

見もみすも誰としりてか戀らるゝ覺束なみのけふの詠めや
とぞいへりける。これらはものがたりにて。よ
にあることどもなり。

おとこ。女のきぬをかりきて。いまのめのがり

いきてさらに見えず。このきぬをみなきやり
て。返しをこすとして。それにきじ。かり。かもを
くはへてをこす。人の國にいたづらに見えけ
る物どもなりけり。さりける時に。女かくいひ
やりける。

いなやきし人にならせる狩衣我身にふれはうきかもそつく

ふかくさのみかどと申ける御時。良少將宗貞とい

ふ人いみじきときにて有けり。いといろごの

みになむありける。しのびて時々あひける女。

おなじ内に有けり。こよひかならずあはんと

ちぎりたるよありけり。女いたうけさうして

待に。をともせず。めをさまして夜やふけぬら

んと思ふほどに。とき申をとのしければ。さく

にうしみつと申けるをさして。おとこのもと

にふといひやりける。

拾十九
人
元祿渡轡中

といひやりたりけるに。おどろきて。

同夢に見ゆやとねそすきにける

とぞつけてやりける。しばしとおもひてうちやすみけるほどに。ねすぎにたるになん有ける。かくて世にもらうあるものにおぼえつかうまつる。みかどかぎりなくおぼされてあるほどに。このみかどうせ給ぬ。御はうぶりのよ。御ともにみな人つかうまつりける中に。そのよより此良少將うせにけり。ともだちもめも。いかならんとて。しばしはこゝかしこもとむれども。をとみにもきこえず。ほうしにやなりにけん。身をやなげてけん。ほうしになりたらば。さてなんあるともきこえなん。なを身をなげたるなるべしとおもふに。よの中にもいみじうあはれがり。めこどもはさらにもいはず。よるひるさうじいもゐをして。世間のかみほとけにぐわんをたてまどへどをとにもきこえず。めは三人なむ有けるを。よろしく思ひけ

るには。なを世にへじとなん思ふとふたりにはいひけり。かぎりもなくおもひて。子などあるめには。ちりばかりもさるけしきも見せざりけり。此ことをかけてもいはゞ。女もいみじと思ふべし。我もえかくなるまじき心ちのしければ。よりだにこではかになんうせにける。ともかくもなれ。かくなんおもふとも。いはざりけることのいみじきことをおもひつつ。なきいられて。はつせの御てらにこのめまうでにけり。此少將は法師になりて。みのひとつをうちきて。せけんせかいを行ひありきて。はつせの御寺に行ふほどになん有ける。ある局ちかうゐて行へば。此女導師にいふやう。此人かくなくなりたるを。いきて世に有ものならば。今一たび逢みせ給へ。身をなげしにたる物ならば。其みちなし給へ。さてなんしにたるとも。この人のあらんやうを。夢にてもうつ

つにても。きゝみせたまへといひて。わがさう
ぞくかみしもおびたちまでみなずきやうにし
けり。みづからも申もやらすなきけり。はじめ
は何人のまうでたるならんと聞もぬたるに。
わがうへをかく申つゝ。わがさうぞくなどを
かくずきやうにするをみるに。心もきももな
く。かなしき事物ににず。はしりやいでなまし
と千たび思ひけれど。思ひかへしおもひかへ
しゐて。夜ひとよなきあかして。あしたにみれ
ば。みのもなにも。涙のかゝりたる所は。ちの
涙にてなん有ける。いみじうなけば。ちのなみ
だといふ物は有ものになんありけるとぞいひ
ける。そのおりなんはしりもいでぬべき心ち
せしとぞ後にいひける。かゝれどなをえきか
ず。御はてになりて。御ぶくぬぎに。よろづの
殿上人かはらに出たるに。わらはのことやう
なるなん。かしはにかきたる文をもてきたる。

とりてみれば。

古哀 昔人は花の衣に成ぬなり昔の袂よかはきたにせよ

とあり。みればこの良少將の手にみなしつ。い
づらといひて。もてこし人をせかいにもとむ
れどなし。法師になん成たるべしとは。これに
てなんみな人しりにける。されどいづこにか
あらむといふこと。さらにえしらず。かくて世
中にありけるといふことをきこしめして。五
條のきさいのみやより。うどねりを御つかひ
にて。山々たづねさせ給ける。こゝにありとき
きていけばうせぬ。かしこにありときゝてたづ
ぬれば又うせぬ。えあはず。からうじてかくれ
たる所にゆくりもなくいにけり。えかくれあ
へであひにけり。宮より御使になん参りきつる
とて。おほせごとにはかうみかどもおはしまさ
ず。むつまじくおぼしめしゝ人をかたみと思
べきに。かく世にうせかくれ給ひにたれば。い

となんかなしき。などか山はやしにをこなひ
給とも。こゝにだにせうそこのたまはぬ。お
ほんさとと有し所にも。をともし給はざなれ
ば。いと哀になんなきわふなる。いかなる御心
にてかうはものし給らむときこえよとてなん
仰られつる。こゝかしこ尋ね奉りてなんまい
りきつるといふ。少將大徳うちなきて。仰ごと
かしこまりてうけ給はりぬ。みかどかくれ給
て。かしこき御かげにならびておはしまさぬ
世に。しばしもありふべきこゝちもし侍らざ
りしかば。かゝる山のすゑにこもり侍りて。し
なんを^精ごにてとおもふ給ふるを。またなんか
くあやしき事はいきめぐらひ侍る。いともか
しくくとはせ給へる^{ことイ}わらはべの侍ることは。
さらに忘れ侍る時も侍らずとて。

^{古辭別}
限なき雲井のよそにわかるとも人^{にイ}を心にをくらさむやは
となん申つるとけいし給へといひける。此大

とくのかほかたちすがたをみるに。かなしき
こと物ににず。その人にもあらず。かげのごと
くに成て。たゞみのをのみなんきたりける。少
將にて有し時のさまのいときよげなりしを思
ひ出て。涙もとまらざりけり。かなしとても。
かた時人のゐるべくもあらぬ山のおく也けれ
ば。なく／＼さらばといひてかへりきて。此大
とくたづねいでて。ありつるよしを。^上かんのく
たりけいせさせけり。きさいの宮もいといた
うなき給ふ。さぶらふ人々もいらなくなんな
き哀がりける。宮の御返も人々のせうそこも。
いひつけて又やれりければ。ありし所にも又
なくなりけり。

をののこまちといふ人。正月にきよみづにま
うでにけり。をこなひなどしてきくに。あやし
うたうときほうしのこゑにてどきやうしだら
によむ。このをののこまちあやしがりて。つれ

なきやうにて。人をやりてみせければ。みのひ
とつをきたるほうしの。こしにひうちけなど
ゆひつけたるなん。すみにゐたるといひけり。
かくて猶きくに。こゑいとたうとくめでたう
きこゆれば。たゞなる人にはよもあらじ。もし
少將大とくにやあらんと思ひにけり。いかゞ
いふとて。このみてらになん侍る。いとさむき
に御ぞひとつしばしかしたまへとて。

後附三
いはの上の旅ねをすれはいと寒し昔の衣をわれにかさなん
といひやりたりける返事に。

同上
よを背く昔の衣はたゞひとへかさねはうとしき二人ねん
といひたるに。さらに少將なりけりとおもひ
て。たゞにもかたらひし中なりければ。あひて
物もいはんと思ていきければ。かいけつやう
にうせにけり。ひとてらをもとめさすれど。さ
らににげてうせにけり。かくてうせにける大
とくなむ。僧正まで成て。花山といふ御寺に住

給ひける。俗ぞくにいますかりける時の子ども
ありけり。太郎は左近將監にて殿上して有け
る。かくよにいますかりときく時だにとて。母
もやりければ。いきたりければ。ほうしの子は
法師なるぞよきとて。これもほうしになしてけ
り。かくてなん。

後附卷下
折つればたふきにけるたてなからみよのほとけに花奉る

といふも。そうじやうの御うたになんありけ
る。此子をゝしなしたうびける大とくは。心に
もあらでなりたりければ。おやにもにず京に
もかよひてなんしありきける。この大とくの
親族しぞく成ける人のむすめの。うちに奉らんと
てかしづきけるを。みそかにかたらひてけり。
おや聞つけて。男をも女をもすげなくいみじ
ういひて。この大とくをよせずなりにければ。
山にばう房してゐて。このかよひもえせざり
けり。いと久しうありて。此さはがれし女のせ

うとどもなどなん。人のわざしに山にのぼりたりける。この大とくのすむところにきて。ものがたりなどしてうちやすみたりけるに。きぬのくびにかきつけける。

白雲のやとる峰にそをくれぬる思ひの外にある世成けり

とかきたりけるを。此せうとの兵衛のぜうは。えしらで京へいぬ。いもうと見つけてあはれと思ひけん。これは僧都に成て京極のそうづといひてなんいますかりける。

大 三 編

むかしうどねりなりける人。おほうわのみてぐら使に。やまとの國にくだりけり。井手といふわたりに。きよげなる人の家より。女共わらはべ出きて。此いく人を見る。きたなげなき女。いとおかしげなる子をいだきてかどのもとにたてり。此ちごのかほのいとおかしげなりければ。めをとめて。そのこちゐてこといひければ。この女よりきたり。ちかく見るにいと

おかしげなりければ。ゆめことおとし給ふな。我にあひ給へ。おほきになり給はんほどにまいりこんといひて。これをかたみにし給へとて。おびをときてとらせけり。さてこの子のしたりけるおびをときとりて。もたりけるふみにひきゆひてもたせていぬ。この子とし六七ばかりに有けり。この男いろごのみなりける人なればいふになん有ける。これを此子は忘れずおもひもたりけり。男はやう忘れにけり。かくて七八年ばかり有て。又おなじつかひにさゝれてやまとへいくとて。井手のわたりにやどりてゐてみれば。まへに井なむ有ける。それに水くむ女どもあるがいふやう「以下脱文誤い」これひらのさいしやう。中將にものし給ける時。故兵部卿宮の別當したまひければ。つねにまいりなれて。御達ごたちもかたらひ給けり。その君内よりまかで給けるまゝに。風になむあひ

給てわづらひ給ける。とぶらひにくすりの酒
さかななどてうじて。兵衛の命婦命婦なんやり給
ひける。そのかへりごとに。いとうれしうとひ
給へること。あさましうかゝる病もつくもの
になんありけるとて。

青柳のいとなねとも春風のふけはかたよる我身成けり
とあれば。ひやうゑの命婦かへし。

いさゝめに吹風にやけ靡くへき野分過し君にやはあらぬ
清樹公
いまの左のおとと少將にものし給ふける時。

故式部卿宮につねにまいり給けり。かの宮に
敦盛
やまとといふ人さぶらひけるを。ものなどの
たまひければ。いとわりなくいろこのむ人に
て。女いとおかしうめでたしと思ひけり。され
どつねにあふ事かたかりけり。やまと。

隨後座敷三
人しれぬ心のうちにもゆる火は煙もたゝてくゆりこそすれ
といひやりければ。かへし。

同
ふしのねの絶ぬおもひも有ものをくゆるはつらき心成けり

とありけり。かくて久しう参り給はざりける
ころ。女いといたうまちわびにけり。いかなる
心ちしければか。さるわざはしけむ。人にもし
らせで。くるまにのりて内に参りにけり。左衛
門のぢんにくるまをたてゝ。わたる人をよび
よせて。いかで少將の君にものきこえんとい
ひければ。あやしきことかな。たれと聞ゆる人
のかゝる事はし給ふぞなどいひすさびていり
ぬ。又わたれば。おなじこといへば。いざ殿上
などにやおはしますらむ。いかでかきこえんな
どいひていりぬる人もあり。うへのきぬきた
るもののいりけるを。しゐてよびければ。あや
しとおもひてきたりける。少將のきみやおは
しますととひけり。おはしますといひければ。
いとせちにきこえさすべきこと有て。殿より
人なんまいりたるときこえ給へと有ければ。
いとやすきことなり。そもくかくきこえつ

ぎたらん人をば忘れ給ふまじや。いとあはれに夜ふけて。人づくなにてものし給かなといひて。入ていと久しかりければ。むごに待たてりける。からうじてこれもいひつがでやいでぬらん。いかさまにせんとおもふほどになんいできたりける。さていふやう。御まへに御あそびなどしたまへるを。からうじてなんきこえつれば。たがものしたまふならん。いとあやしきこと。たしかにとひ奉りてことなむの給ひつるといへば。しんじち信賢にはしもつかたよりなり。みづから聞えんとをきこえたまへといひければ。さなん申すときこえければ。さにやあらんとおもふに。いとあやしうもおかしうもおぼえ給けり。しばしといはせでたち出て。ひろはたの中納言座明の侍従にものし給ひける時。かゝる事なんあるを。いかゞすべきとたばかり給けり。さてさるものぢんに。とのゐ

所なりけるびやう屏風ぶ。たゞみなどもていきて。そこになんおろいたまひける。いかでかくはのたまひければ。なにかはいとあさましうもののおぼゆれば。(以下脱文歟)亭子のみかどいし山につねにまうで給けり。國のつかさ。たみつかれくにほろびぬべしとなんわぶるときこしめして。こと國々のみさうなどに仰てとの給へりければ。もてはこびて。御まうけをつかうまつりてまうで給けり。近江のかみ。いかにきこしめしたるにかあらんとなげきおそれて。又むげにさてすぐして率リイんやとてかへらせ給。うちいでの濱によつねならずめでたきかりやどもをつくりて。菊のはなのいとおもしろきをうへて。御まうけつかうまつれりけり。國のかみはおぢおそれて。外にかくれをりて。たゞくろぬしをなんすへをきたりける。おはしましすぐるほどに。殿

上人。くろぬしはなどでさてはさぶらふぞと
とひけり。院も御車をさへさせ給て。なにしに
こゝにはあるぞとはせたまひければ。人々
とひけるに申ける。

悟り難し。ひま
さいら浪まもなく岸をあらふめり渚清くは君とまれとか

とよめりければ。これにめで給てなん。とまり
て人々にもの給て。かへらせ給ひける。

よしみねのむねさだの少將。ものへゆく道に。
五條わたりにて雨いたうふりければ。あれた
るかどに立かくれて見ゆるれば。五間ばかり
なるひはだやのしもに土やぐらなどあれど。
ことにひとなど見えず。あゆみ入てみれば。は
しのまに梅いとおかしう咲たり。鶯もなく。人
ありともみえぬみすの内より。うすいろのさ
ぬ。こきさぬのうへにきて。たけだちいとよき
ほどなる人の。かみたけばかりならんとみゆ
なるが。

蓬おひて荒たる宿を鶯の人くとなくや誰とかまたむ
とひとりごつ。少將。

きたれ共いひしなれねは鶯のきみに告よとをしへてそなく
とこゑおかしうていへば。女おどろきて。人も
なしと思ひつるに物しきさまをみえぬ事と
おもひて。ものもいはずなりぬ。男えんにのぼ
りてぬぬ。などか物ものたまはぬ。雨のわりな
く侍つれば。やむまではかくてなんといへば。
おほぢよりはもりまさりてなん。こゝは中々
といらへけり。時は正月十日のほどなりけり。
すのうちよりしとねさしいでたり。引よせて
ぬぬ。すだれもへりはかはほり端にくはれて所
所なし。内のしつらひ見ゆるれば。むかしおぼ
えて。たゝみなどよかりけれどくちおしく成
にけり。日もやう／＼暮ぬれば。やをらすべり
入て。この人をおくにもいれず。女くやしとお
もへど。せいすべきやうもなくていいひがひな

し。雨は夜ひとよふりあかして。又のつとめて
 ぞすこしそらはれたる。男は女のいらむとす
 るを。たゞかくてとていれず。日もたかうなれ
 ば。此女のおや。少將にあるじすべきかたのな
 かりければ。こどねりわらはばかりとどめた
 りけるに。かた^空いしほざかなにしてさけをの
 ませて。少將にはひろき庭に生たるなをつみ
 て。むし物といふものにして。ちや^茶うわ^菰んにも
 りて。はしには梅のはなのさかりなるをおり
 て。その花びらにいとおかしげなる女のとに
 て。かくかけり。

續後拾春上
 君か爲衣のすそをぬらしつゝ

のきは集
 春のゝに出てつめるわかなそ

男これをみるにいとあはれにおぼえて。引よ
 せてくふ。女わりなうはづかしと思てふした
 り。少將あきて。こどねりわらはをはしらせて。
 すなはち車にて。まめなる物さまゝにもて
 きたり。むかへに人のあれば。いま又も參こん

とていでぬ。それより後たまはずみづからもさ
 とぶらひけり。萬のものくへども。猶五條にて
 ありしもの。めづらしうめでたかりきと思出
 ける。年月をへてつかうまつりし君に。少將を
 くれ奉りて。かはらん世を見じとおもひて法
 師に成にけり。もとの人のもとにけさあらひ
 にやるとて。

霜雪のふるやかしたに一人ねのうつふしそめの麻のけさ也
 中イ
 となんありける。

右大和物語上下二卷以屋代弘賢藏本書寫以村井敬義藏
 本及慶安元年印本校合畢

群書類從卷第三百九

物語部三

竹とりの翁物語

今はむかし。竹とりの翁といふものありけり。
野山にまじりて竹をとりつゝ萬の事につかひ
けり。名をばさぬヌイきの宮つことなむいひける。
其竹の中に本光る竹なむ一すぢ有けり。あや
しがりて寄て見るに。つゝの中ひかりたり。そ
れを見れば三寸ばかりなる人いとうつくしう
てゐたり。翁云やう。我朝毎夕毎にみる竹の中
におはするにてしりぬ。子になりたまふべき
人なめりとて。手に打入て家にもちて來ぬ。め
の女にあづけてやしなはず。うつくしき事限
なし。いとおさなければこハコイに入てやしなふ。竹

とりの翁イ竹をとるに。此子を見つけて後に竹と
るに。ふしを隔て。よごとヨゴトにこがねある竹を見
つくる事かさなりぬ。かくておきなやうやう
ゆかたになり行。この兒やしなふほどにすく
すくとおほきになり増る。三月計の内によき
ほどなる人になりぬれば。かみあげなどさう
じて。かみあげさせサセもきす。ちやうのうちより
もいださず。いつきかしづきやしなふ。此兒の
かたちのけけうさうなる事よになく。屋のうちうちは
開き所なく光満たり。翁心あしく候へし時も。
此子を見ればくるしき事もやみぬ。腹だたし
くあることもなぐさみけり。翁竹をとる事久

敷成ぬ。いきほひ猛まうの物に成にけり。此子いと大きに成ぬれば。なをみむろどいむべのあきたを喚てつけさす。あきたなよ竹のかぐや姫とつけつれ。此ほど三日打あげあそぶ。萬のあそびをぞしける。男はうけさらはずよびつどへてかしこくあそぶ。世かいのをのこ。あてなるもいやしきもいかで此かぐや姫をえてしかな。見てしがなと音に聞愛てまどふ。其あたりの垣にも家の戸にもをる人だに。たはやすくみるまじき物を。夜はやすきいもねず。闇の夜にもこゝかしこよりのぞきかいまみまどひあへり。さる時よりなん夜ばひとは云ける。人も物ともせぬ所にまどひありけども。何のしるしあるべくも見えず。家の人どもに物をだにいはんとていひかくれども。ことともせず。あたりをはなれぬきんだち。夜をあかし日をくらす人おほかり。をろかなる人は。ようなき

ありきはよしなかりけりとてこず成にけり。その中になを云けるは。色好みといはるゝ限五人。思ひやむ時なく夜ひる來けり。其名ども。石作りの御子。くらもちの御子。左大臣安倍のみむらじ。大納言大作イとものみゆき。中納言いそのかみのもろたり。此人カ々なりけり。世中におほかる人をだに。すこしも形よしと聞ては。見まほしくする人たども也チイければ。かのかぐや姫をみまほしくて。物もくはず思ひつゝ。かの家に行てたゝずみありきけれどもイかひあるべくもあらず。文を書てやれども返事もせず。佗歌など書てをこすれども。かひなしと思へど。霜月しはすの降水。水無月のてりはたゝくにもさはらずきたり。此人々ある時は。竹取を喚てむすめを我にたべとふし拜み手をすりのたまへど。をのがなさぬ子なれば。心にも随はずなむあると云て月日を過す。かゝれば此人々家

に歸りて。物を思ひ祈りをし願をたつ。思ひやむべくもあらず。さりとて終に男あはせざらんやとおもひて頼をかけた。あながちに心ざしをみえありく。是を見つけて。翁かぐや姫に云様。我子のほとけへんげの人と申なから。こゝらおほきさまでやしなひたてまつる志をろかならず。翁の申さん事を聞給ひてんやといへば。かぐや姫。何事をかのたまはむ事を承はらざらむ。變化の物にてはんべりけん身ともしらず。親とこそおもひ奉れといへば。翁。うれしくもの給ふ物かなと云。翁年七十にあまりぬ。今日ともあすともしらず。此世の人は。おとこは女に逢。女は男にあふ事をす。其後なむ門もひろくもなり侍る。いかでかさる事なくてはおはしまさむ。かぐや姫のいはく。なむでうさる事かし侍らんと云ば。變化の人といふとも。女の身持給へり。翁のあらんかぎり

は。かうてもいますかりなんかし。此人々の年月を経て。かうのみいましつゝのたまふ事をおもひ定て。獨々にあひ奉り給ひねといへば。かぐや姫いはく。よくもあらぬ形を。ふかき心もしらであだ心つきなば後くやしき事も有べきをと思ふばかり也。世の賢き人成とも。ふかき志をしらではあひがたしとなむ思ふと云。翁いはく。思ひのごとくもの給ふかな。そもそもしいかやうなる志あらん人にはあはんとおぼす。かばかりの心ざしをろかならぬ人々にこそあめれ。かぐや姫のいはく。なにばかりのふかきをかみんといはむ。いさゝかの事也。人の心ざしひとしかんなり。いかでか中にをとりまさはしらむ。五人のひとの中にゆかしき物みせ給へらんに御志まされたりとてつかふまつらんと。そのおはすらん人々に申給へといふ。よき事なりとうけつ。日くるゝ程に例の

あつまりぬ。あるひは笛を吹。或はうたをうたひ。或は琵琶しやうかをし。あるひはうそふきあふぎをならしなどするに。翁出ていはく。忝もきたなげなる所に年月を経てものし給ふ事。きはまりたるかしこまりと申す。翁の命今日明日ともしらぬを。かくの給ふ君達にも。よく思ひ定てつかふまつれと申も理なり。いづれもと増りおはしまさねば。御志の程はみゆべし。つかふまつらん事は。それになむ定むべきといへば。是よき事なり。人の御恨も有まじと云。五人の人々もよき事也といへば。翁入て云。かぐや姫。石作の御子には。佛の御いしのはちと云物あり。それととりて給へと云。倉もちの御子には。東の海に蓬萊と云山あり。それにしろがねを根として金をくきとし白き玉をみとしたてゐる木あり。それを一えだおりて給はらんと云。今獨には。もろこしにある火鼠

の革ぎぬをたまへ。大ともの大納言には。龍のくびに五色に光る玉あり。それととりて給へ。磯の上の中納言には。つばくらめのもたるこやすのかひ一つとりて給へといふ。翁。かたき事どもにこそあなれ。此國に有物にはあらず。かく難事をばいかに申さんといふ。かぐや姫。なにかかたからんといへば。翁。とまれかくまれ申さんとして出て。かくなむきこゆるやうに見たまへといへば。御子たち上だちめ聞て。おいらかにあたりよりだになありきそとやはのたまはぬといひて。うむじてみな歸ぬ。なを此女みでは。世にあるまじき心ちしければ。天竺にある物ももてこぬものかと思ひめぐらして。いしづくりの御子は心のしたくある人にて。天竺に二つとなきはちを。百千萬里のほどいきたりともいかでとるべきと思ひて。かぐや姫のもとには。今日なん天竺へ石のはちと

りにまかると聞せて。三年計大和國とをちの郡に有山寺に。びむづるの前なるはちのひたぐろに墨付たるを取て。錦の袋に入て。つくり花の枝につけて。かぐや姫の家にもて來て見せければ。かぐや姫あやしがりてみれば。はちの中にふみ有。ひろげて見れば。

渥山の道にこゝろをつくしはてないし（みイ）の針のなみた流れきかぐや姫光や有とみるに。螢ばかりのひかりだになし。

置露の光をたにもやとさましをくら山にてなにもとめけむとて返し出すを。はちを門にすてゝ。此歌の返しをす。

しら山にあへは光のうするかと針をすてゝも頼まるゝかなとよみて入たり。かぐや姫返しもせずなりぬ。みゝにも聞入ざりければ。いひわづらひて歸りぬ。かのはちをすてゝ又云けるにぞより。おもなき事をばはちをすつとはいひける。倉もちの

御子は。心たばかりある人にて。おほやけには。つくしの國にゆあみにまからんとていとま申して。かぐや姫の家には。玉のえだとりになむまかるといはせてくだり給ふに。つかふまつるべき人々皆難波まで御送りしける。御子いと忍びてのたまはせて人もあまたゐておはしまさず。ちかうつかうまつる限りしていで給ひ。御送りの人々見たてまつり送りて歸りぬ。おはしましぬと人にみえ給ひて三日ばかりありて漕かへり給ひぬ。かねてことみなおほせたりければ其時ひとつ（内イ）實なりけるかちだくみ六人をめしとりて。たはやすく人よりくまじ（家をつくりてイ）き家つくり。かまどをみへにしこめて。たくみらを入給ひつゝ御子も同じ所にこもり給ひて。しらせ給ひたるかぎり。十六そをかみにくどをわけて玉のえだを作り給ふ。かぐや姫のたまふやうにたがはず作り出づ。いとかしこくた

ばかりて。難波にみそかにもて出ぬ。船に乗て
かへり來にけりととのにつげやりていといた
くくるしがりたるさましてゐたまへり。むか
へに人多く參りたり。玉のえだをばながびつ
に入て物おほひて持てまいる。いつか聞けむ。
くらもちの御子は。うどんぐゑの花もちての
ぼりたまへりとのゝしりけり。是をかぐや姫
聞て我は此御子にまけぬべしと胸つぶれて思
ひけり。かゝるほどに門をたゝきて。倉持の御
子おはしたりとつぐ。旅の御姿ながらおはし
ましたりといへば。あひたてまつる。御子のた
まはく。命をすてゝかの玉のえだもちて來り
とて。かぐや姫に見せ奉り給へといへば。翁持
て入たり。此玉のえだにふみぞつかけたりける。
徒に身はなしつとも玉のえだをイをたをらて更にかへらさらまし
是をも哀とも見てをるに竹とりの翁走入てい
はく。此御子に申給ひし蓬萊の玉のえだを。ひ

とつの所あやしき所なく。あやまたずもてお
はしませり。何をもちてとかく申べきにあら
ず。旅御姿ながら。我家へもよりたまはずして
おはしましたり。はや此御子にあひつかうま
つり給へといふに。物もいはでつらづをイ付て。
いみじくなげかしげに思ひたり。御子今何か
と云べからずと云まゝに。縁にはひのぼり給
ぬ。翁理と思ひ。此國にみえぬ玉の枝也。此度は
いかでかいなび申さん。人様もよき人におは
すなど云ゐたり。かぐや姫の云やうは。イ元親のた
まふ事をひたぶるにいなび申さん事のいとを
しさに。取がたき物をかくあさましくもてき
たる事をねたくおもひ。（翁持といへど、なほイ）翁は閨の内しつらひ
などす。翁御子に申やう。いかなる所にか此木
は候けん。あやしきうるはしくめでたきもの
にもと申。御子こなへての給く。さをとゝしの
ささらぎの十日頃に難波より船に乗て海の中

に出て。ゆかんかたもしらず覺しかど。思ふ事
ならで世中にいきて何かせんと思ひしかば。
たゞむなしき風にまかせてありく。命しなば
いかゞはせん。いきてあらん限かくありきて。
蓬萊といふらむ山にあふやと海に漕たゞよひ
ありきて。我國のうちを離てありき廻りしに。
ある時はなみ荒つゝ海の底に入ぬべく或時は
風につけてしらぬ國に吹よせられて。鬼のや
うなるもの出来て殺さんとす。ある時はこし
かた行末もしらず海にまぎれむとしき。或時
にはかてつきて草の根をくひものとす。ある
時はいはんかたなくむくつけなるものきてく
ひかゝらんとしき。ある時は海の貝をとりて
命をつぐ。旅の空にたすけ給ふべき人もなき
所に色々のやまひをして。行方空もあぼえず。
船の行にまかせて海にたゞよひて五百日とい
ふ辰の時ばかりに。海の中に纔に山みゆ。舟の

うちをなんせめてみる。海の上にたゞよへる
山いとおほきに有。其山のさま高くうるは
し。これや我救る山ならんと思ひて。さすがに
おそろしくあぼえて。山のめぐりをさしめぐら
して二三日ばかりありくに天人の粧ひした
る女山の中より出来て銀のかなざるをもちて
水をくみありく。是を見て船よりありて。此山
の名を何とか申ととふ。女こたへていはく。是
は蓬萊の山なりと答。是を聞に嬉しき事限な
し。此女かくの給ふは誰そととふ。我なほうか
んるりと云て。ふと山の中に入ぬ。其山を見る
に更にのぼるべきやうなし。其山の岨ひらを
めぐりければ。世中になき花の木どもたてり。
金銀瑠璃色の水山よりながれ出たり。それに
は色々の玉の橋わたせり。そのあたりに照輝
く木どもたてり。其内にこのとりてもちてま
うできたりしは。いとわろかりしかども。の給

ひしにたがはましかばと。此花を折てまうで来る也。山は限なく面白し。世にたとふべきにあらざりしかど。此枝を折てしかば。更に心もとなくて。舟に乗て追手の風吹て。四百よ日になん詣きにし。大願・力にや。難波より昨日なん都に詣きつる。更に鹽に霽たる衣をだに脱かへなでなん詣來つるとのたまへば。翁聞て打歎てよめる。

吳竹のよの竹とり野山にもさは侘しきふしをのみ見し是を御子聞て。こゝらの日頃思ひ侘侍りつる心。今日ならむおちぬる。との給ひて返し。わか袂けふかはければ侘しさの千種のかすも忘れぬへしとの給ひ。かゝる程に男・六人つらねて庭に出來たり。一人・おとこ。ふばさみに文を挿て申。つくもどころつかさのたくみあやべのうちまろ申さく。玉の木を作りつかふまつりし事。五穀を斷て。千餘日に力をつくしたる事すくな

からず。然るに録いまだ給はらず。是給はりてわろきげにたまはせんと云てさへげたり。竹とり此工等が申事を。何事ぞとかたぶきあり。御子は我にもあらぬけしきにて。肝消ぬべき心ちしてゐ給へり。是をかがや姫聞て。此奉る文をとれと云てみれば。ふみに申けるやう。御子のきみ。千日いやしき匠等ともろともに同じ所に隠れたまひて。かしこき玉の枝をつくらせ給ひて。司もたまはんと仰給ひき。是を・頃・あんずるに。御つかひとおはしますべきかぐや姫のえうし給ふべき成けりと承て。此宮よりたまはらんと申て。給るべきなりと云を聞て。かがや姫のくるまゝに思ひ侘つる心ちわらひさかへて。翁をよびとりて云やう。誠蓬萊の木とこそ思ひつれ。かくあさましき空事にてありけれ。はや返し給へといへば。翁こたふ。さすがにつくらせたる物と聞つれば。

返さん事いとやすしとうなづきあり。かぐや姫の心行果て。ありつる歌のかへし。

まことかと聞てみつれば言の葉を飾れる玉の枝にそ有ける
と云て玉のえだも返しつ。竹取の翁。さばかり
かたらひつるが。さすがに覺てねぶりをり。御
子は立もはした。ゐるもはしたにてゐ給へり。
日の暮ぬればすべり出給ひぬ。かのうれへせ
したくみをば。かぐや姫よびすへて。うれしき
人どもなりといひて。録ども多くとらせ給ふ。
たくみらいみじく喜て思ひつるやうにも有哉
と云て歸る。道にてくらしの御子。ちのなが
るゝまでちやうぜさせ給ふ。ろくえしかひも
なく。みな取すてさせ給ひてければ。逃うせに
けり。かくて此御子は。一しやうのはぢ是にす
ぐるはあらじ。女を得ず成ぬるのみにあらず。
天下の人の見思はん事のはづかしき事との給
ひて。たゞ一所ふかき山へ入給ひぬ。宮司さぶ
らひし人々みなてを分ちてもとめたてまつれ

ども。御しにもやし給ひけん。えみつけ奉らず
成にけり。^{ふい}「みこの御供にかくし給はんとて。
年比見え給はざりけるなり。」是をなんたまか
ざるとはいひはじめける。左大臣安倍のみむ
らじは。寶ゆたかに家廣き人にぞおはしける。
其年きたりけるもろこし船のわうけいといふ
人のもとに文を書いて。火ねづみの皮といふな
る物買ておこせよとて。つかふまつる人の中
に心たしかなるを撰て。小野房盛と云人をつ
けてつかはす。もていたりてかのうらにをる
わうけいに金をとらす。わうけい文をひろげ
て見て返事かく。火鼠の皮衣。此國になき物也。
音にはきけども。いまだ見ずさぶらふ物也。世
にある物ならば。此國にももて詣來なまし。い
とかたき商也。然ども若天ぢくに近にもて渡
りなば。若ちやうじやのあたりにとぶらひも
とめんに。なき物ならば。使に添てかねをば返
し奉らんといへり。彼唐ふねさけり。小野房盛

詣きて。まうのぼると云事を聞て。あゆみとくするむまをもちて。はしらせむかへさせ給ふ。時に馬に乗て。筑紫より唯七日にのぼりまふで來り。文をみるに。いはく。火ねずみの革衣。からうじて人を出して取て奉る。今のよにも昔の世にも。此皮はたはやすくなき物也けり。昔賢き天竺の聖。此國にもてわたりて侍りける。西の山寺にありと聞及ておほやけに申て。からうじてかい取て奉る。あたひの金すくなしと。こくし使に申しかば。わうけいが物くはへてかひたり。今金五十兩たまはらん。舟のかへらんにつけてたび送れ。若金たまはぬ物ならば。皮衣のしち返したべ。といへる事をみて。なにおぼす。いま金少の事にこそあめれ。〔かならず送るべき物にこそあなれ。〕うれしくしてをこせたる哉とて。唐のかたにむかひてふし拜み給ふ。此革衣入たる箱をみれば。草々の

うるはしきるりを色へてつくれり。皮衣を見ればこんじやうの色也。毛のすゑにはこがねの光しさゝりたり。寶とみえうるはしき事并ぶべきものなし。火に焼ぬ事よりも。けうらなる事双なし。うべかぐや姫このもしがり給ふにこそありけれとの給ひて。あなかしことて。箱に入たまひてものの枝に付て。御身のけさういといたくして。やがてとまりなむ物ぞとおぼして。歌讀くはへてもちていましたり。其歌は。

かきりなき思ひにやけぬかは衣袂かはきて今日こそはきめと云り。家の門にもていたりてたてり。竹取出きて。取入てかぐや姫に見す。かぐや姫の皮衣をみて云く。うるはしき皮なめり。わきて誠の皮ならんともしらず。竹とりこたへていはく。とまれかくまれ。先しやうじ入奉らん。世中にみえぬ皮衣のさまなれば。これをとと思ひ給ね。人ないたく佗させたまひそと云て。よびす

へ奉れり。かくよびすへて。此たび必あはんと
女の心にも思ひをり。翁はかぐや姫のやもめ

なるをなげかしければ。よき人にあはせむと
思ひはかれど。せちにいなといふ事なれば。え

しむぬはことほりなり。かぐや姫翁にいはく。

此皮ぎぬは火にやかんに。焼ずばこそまこと
ならめと思ひて。人の云事にもまけめ。世にな

き物なれば。それをまこととうたがひなく思

はんと給ひて。猶是をやきてこゝろみむと

いふ。あさなそれさもいはれたりといひて。大

臣にかくなん申と云。大臣こたへていはく。此

革は唐にもなかりしと。からうじて取尋えな

る也。何の疑あらん。左は申とも。はや焼て見

給へといへば。火のうちに打くべてやかせ給

ふに。めらくとやけぬ。さればこそこともの

の皮也けりといふ。大臣是を見給ひて。かほは

草の葉の色してゐたまへり。かぐや姫はあな

うれしとよろこびていたり。かのよみ給ひけ
るうたの返し。箱に入てかへす。

餘波なくもゆとしりせは皮衣おもひのほかに置て長ましを

とぞ有ける。されば歸りいましにけり。よの人

人。あべの大臣火鼠の皮ぎぬもていまして。か

ぐや姫にすみ給ふとな。こゝにやいますなど

とふ。ある人のいはく。皮は火にくべてやきた

りしかば。めらくとやけにしかば。かぐや姫

逢給ずと云ければ。是を聞てぞ。とげなき物を

ばあへなしと云ける。大友の御ゆきの大納言

は。我家に有とある人めしあつめての給はく。

龍の首に五色の光ある玉あなり。それとりてた

てまつりたらん人には。ねがはん事をかなへん

とのたまふ。男ども仰の事を承て申さく。仰の

事はいともたうとし。但此玉たはやすくえとら

じを。いはんや龍の首の玉はいかじとらむと申

あへり。大納言のたまふ。てんの使といはんも

のは。命をすてゝもをのが君の仰ごとをば。かなへんところおもは^(ふい)べけれ。此國になき天竺唐の物にもあらず。此國の海山より龍はありのぼるもの也。いかに思ひてか。なんぢらかたき物と申べき。をのことも申やう。さらばいか^{もイ}がはせむ。かたき事成とも。仰ごと^{もイ}に随てもとめにまからむと申に。大納言見わらひて。なんぢらが君の使と名をながしつ。君のおほせごとをば如何は背くべきとの給ひて。龍の首の玉取にとて出し立給ふ。此人々の。みちのかてくひ物に。とのうちのきぬ。わた。ぜに^錢など。ある限取出てそへてつかはす。此人どもの歸るまでもゐをして我はをらん。此玉取えでは家にかへりくなとのたまはせけり。各仰承て罷ぬ。たつのかしらの玉とりえずばかへりくなとのたまへば。いづちもく足^{いなり}のむきたらんかたへゆかんとす。かゝるすき事をし給ふ

事と誹りあへり。たまは^(イモ)らせたる物各分つゝとる。或はをのが家に籠り居。或はをのがゆかまほしき所へいぬ。親君と申ともかくつきなき事を^{仰イ}の給ふ事と。ことゆかぬ^(もイ)ゆへ。大納言をそしりあひたり。かぐや姫すへんには。れいやうには見にくしとの給ひて。うるはしき屋を作り給ひて。うるしをぬり。蒔繪し給ひて。屋のうへにはいとをそめていろくふかせて。内々のしつらひには。いふべくもあらぬ綾織物に繪を書てま^{間毎}ごとにはりたり。もとのめどもは。かぐや姫を必あはんまふけして。獨明しくらし給ふ。つかひし人は夜晝待給ふに。年越るまで音もせず。心もと^{かりイ}なくて。いと忍て。ただ舍人二人召付として。やつれ給ひ^{こイ}。難波の邊におはしまして問給ふ事は。大友の^{作イ}大納言どのの人や。ふねに乗て龍ころして。其首の玉とれるとや聞と。とはするに。舟人こたへていは

く。あやしき事哉とわらひて。さるわざするふねもなしと答るに。おちなき事する船人にもある哉。得しらでかく云とおぼして。我ゆみの力は。龍あらばふといころして首の玉はとりてん。をそくくるやつばらをまたじとの給ひて。船にのりて海ごととありき給ふに。いと遠くて。筑紫のかたの海に漕出給ひぬ。いかゞしけむ。はやき風吹て。世界くらがりて。船を吹もてありく。いづれのかたともしらず。舟を海中にまかり入ぬべく吹まはして。波は船に打ちかけつゝまき入。神はおちかゝるやうにひらめきかゝるに。大納言はまどひて。まだかゝる侘しきめ^{（ハイ）}みず。いかならんとするぞとのたまふ。梶とりこたへて申。こゝら舟にのりてまかりありくに。まだかく侘しきめを見ず。御船海のそこにいらば神おちかゝりぬべし。もし幸に神のたまふけあらば南海にふかれおはしぬべ

し。うたてある主のみもとにつかふまつりて。すゞろなるしにをすべかめるかなとかちとりなく。大納言是を聞ての給く。船に乗ては梶とりの申ことをこそ高き山ともたのめ。などかくたのもしげなき事を申ぞとあをへどをつきての給ふ。かち取答て申。神ならねば何わざをかつかふまつらむ。風吹波はげしけれども。神さへいたゞきにおちかゝるやうなるは。辰を殺さんと救給ふ故にある也。はやても龍のふかするなり。はや神にいのり給へといふ。よき事也とて。梶とりの御神きこしめせ。をとなく心おさなく。龍をころさむと思ひけり。今より後は。けのすぢ^{（ネイ）}一すぢをだにうごかしたてまつらじと。よごとをはなちて。たちゐなくなくよばひ給ふこと。千度ばかり申給ふけにやあらん。漸々神なりやみ。すこし光て。風は猶はやく吹。梶取のいはく。是はたつのしわざ

にこそありけれ。此吹風はよき方の風也。惡敷かたのかぜにはあらず。よき方へおもむきて吹なりといへども。大納言は是を聞入給はず。三四日ふきて吹かへしよせたり。濱をみれば播磨のあかしの濱なり。大納言南海の濱に吹よせられたるにやあらむとおもひて。いきつきふし給へり。舟にある男ども國につきたれども國の司まうでとぶらふにも。えおきあがり給はで。ふなどこに臥たまへり。松原に御むしろ敷ておろし奉る。其時にぞ南海にあらざりけりとおもひて。からうじておきあがりたまへるを見れば。風いとおもき人にて。はらいとふくれ。こなたかなたの目には。すもゝを二つつけたる様也。是をみたてまつりてぞ國の司もほゝえみたる。國におほせ給ひてたごしつくらせ給ひて。漸々（じょうじやう）になはれたまひて。家に入たまひぬるを。いかでか聞けん。つかはし

し男どもまいりて申やう。龍のくびの玉をえとらざりしかば。南海へもまいらざりし。玉の取がたかりし事をしり給へればなん。かむだうあらじとて參つると申。大納言起出のたまはく。なむぢらよくもてこずなりぬ。たつはなる神のるいにこそ有けれ。それが玉をとらむとて。そこらの人々のがいせられむとしけり。ましてたつをとらへたらましかば。又（ことゝ）こもなく我はがいせられなまし。よくとらへずやみにける。かぐや姫てふおほ盗人のやつが。人をころさむとする也けり。家のあたりだに今はとをらじ。男どももなありきそとて。家に少残りたりける物どもは。龍の玉をとらぬものどもにたびつ。是を聞て。はなれ給ひしものの上は。はら（はら）をきりてわらひ給ふ。いとをふかせつくりし屋は。とびからすの巢にみななくひもていにけり。世界の人いひけるは。大（だい）ともの大

納言は。龍の首の玉や取ておはしたる。いなさ
もあらず。みまなこ二つにすもゝのやうなる
玉をそへていましたるといひければ。あなた
へがたといひけるよりぞ。世にあはぬ事をば
堪がたとはいひはじめける。中納言磯のかみ
のまろたりは。家につかはるゝをのこども
もとに。つばくらめのすくひたらばつげよと
の給ふを承て。何の用にかあらむと申。こたへ
ての給ふやう。つばくらめのもたるこやすの
かひをとらんれうなりとの給ふ。をのこども
こたへて申。つばくらめをあまたころしてみ
るにだにも腹になき物也。たゞし子うむ時な
んいかでかいだすらん。はうくかと申。人だ
にみればうせぬと申。又人申やう。おほいづか
さのいひかしぐ屋のむねに。つくのあなごと
につばくらめは巢をくひ侍る。それにまめな
らんをのこどもをゐてまかりて。あぐらをゆ

ひあげてうかゞはせん。そこらのつばくら
めをうまざらむやは。扱こそとらしめ給は
めと申。中納言よろこびたまひて。おかしき事
にも有哉。尤えしらざりけり。けうある事申た
りとの給ひて。まめなるをのこども廿人ばか
りつかはして。あなゝひにあげすへられたり。
とのより使隙なくたまはせて。こやすのかひ
とりたるかとはせ給ふ。つばくらめも人あ
またのぼりゐたるにおちて。すにものぼりこ
ず。かゝるよしの御返事を申たれば。聞給ひて。
如何すべきとおぼしめし煩ふに。彼つかさの
くわん人くらつまろと申翁申やう。こやすの
かひとらむとおぼしめさば。たばかり申さむ
とて。御前に参たれば。中納言額を合てむかひ
ゐたまへり。くらつまろが申やう。此燕めこや
すのかひは。あしくたばかりてとらせ給ふ也。
扱はえとらさせたまはじ。あなゝひにおどろ

おどろしく廿人のひとりののぼりて侍るなれば。あれてよりまうでこず。せさせ給ふべきやうは。此あなゝひをこぼちて人みなしりぞきて。まめならむ人をあらこにのせすへて。つなをかまへて鳥のこうまん間につなをつりあげさせて。ふとこやすのかひをとらせ給なん。よき事なるべきと申。中納言の給ふやう。いとよき事なりとて。あなゝひをこぼし。人みなかへりまうできぬ。中納言くらつまろにの給はく。つばくらめはいかなる時にか子うむとして人をばあぐべきとのたまふ。くらつまろ申やう。つばくらめ子うまむとする時は。おをさげて七度めぐりてなんうみおとすめる。扱七度めぐらんありひきあげてそのありこやすの具はとらせたまへと申。中納言喜て。よろづの人にもしらせ給はでみそかにつかさにいまして。をのこどもの中にまじりて。夜をひるに

なしてとらしめ給ふ。くらつまろかく申をいといたく喜ての給ふ。こゝにつかはるゝ人にもなきにねがひをかなふことのうれしさと給ひて。御ぞぬぎてかげ給つ。さらによさり此司にまうでことの給ひてつかはしつ。日暮ぬればかのつかさにおはして見給ふに誠につばくらめ巢つくれり。くらつまろ申やう。おうけてめぐるに。あらこに人をのぼせてつりあげさせてつばくらめの巢に手をさし入させてさぐるに。物もなしと申に。中納言あしくさぐればなきなりと腹立てたればかりおぼふらんにとて。われのぼりてさぐらむとの給ひて。籠に入てつられのぼりてうかゞひ給へるに。つばくらめ尾をさげていたくめぐりけるにあはせて。手をさゝげてさぐり給ふに。ひらめる物さはりけるとき。我物にぎりたり。今はおろしてよ。おきなしえたりとの給ひて。あつま

りてとくおろさんとして綱を引すぐしてつなた
ゆるとき（すなはちはい）に。やしまのかなへのうへにのけざ

まにおちたまへり。人々あさましがりて。寄て
かへたてまつれり。御目はしらめにてふし
給へり。人々水をすくひ入たてまつれり。から
うじていき出給るに。又かなへの上より。てと
りあしとりしてさげおろし奉る。からうじて
御心ちはいかゞおぼさるゝととへば。息の下
にて。物はすこしおぼゆれど。こしなむうごか
れぬ。されどこやすのかひをふとにぎりもた
れば嬉敷おぼゆれ（あるなり）。まづしそくさしてこ。この
かひが（面）ほ見むと御ぐしもたげ御手をひろげ給
へるに。つばくらめのまりおけるふるくそを
にぎり給へるなりけり。それを見給ひて。あな
かひなのわざやとの給ひけるよりぞ。思ふに
たがふ事をばかひなしといひける。かひにも
あらずと見給ひけるに。御心ちもたがひて。か

らびつのふたに入られ給ふべくもあらず。御
こしはおれにけり。中納言は（いはなり）はらはげたるわ
ざしてやむことを。人にきかせじとしたまひ
けれど。それをやまひにていとよはく成たま
ひけり。かひをもとらずなりにける（より）も。人
の聞き笑はん事を。目に添て思ひ給ひければ。
たゞにやみしぬるよりも人聞婉敷おぼえ給ふ
成けり。是をかがや姫聞て。とふらひにやる歌。
年をへて浪立よらぬすみのえのまつかひなしときくは誠か
とあるをよみてきかす。いとよはき心にかし
らもたげて。人にかみをもたせて。くるしき心
ちにからうじて書給ふ。

かひはなく有ける物をわひはてしぬる命を救ひやはせぬ
と書はてゝたえ入給ひぬ。是を聞て。かがや
姫少哀とおぼしけり。それよりなん少嬉しき
ことをばかひあるとはいひけり。扱かぐや姫
かたちの世ににずめでたき事を。御門聞しめ

して。ないしなかとみのふさこにの給。多くの人の身を徒になしてあはざなるかぐや姫は。いかばかりの女ぞと見てまいれとの給ふ。ふさこ承てまかれり。竹取の家に。畏てしやうじ入てあへり。女にないしの給。仰ごとに。かぐや姫のかたちいうにおはすなり。よくみてまいるべきよしの給はせつるになむまいりつるといへば。さらばかくと申侍らんといいひて入ぬ。かぐや姫に。はやかの御使に對面し給へといへば。かぐや姫。よきかたちにもあらず。いかでか見ゆべきといへば。うたてもの給ふ物哉。帝の御使をばいかでかをろかにせむといへば。かぐや姫こたふるやう。御門のめしての給はん事。かしこしともおもはずといひて。更にみゆべくもあらず。うめるこの様にあれど。いと心はづかしげに疎かなるやうにいひければ。心の儘にもえせめず。女ないしのもとにか

へり出て。口惜き此おさなきものはこはく侍る物にて。たいめんすまじきと申。ないし。必見たてまつりてまいれとおほせごとありつるものを。見たてまつらではいかでかかへりまいらん。國王の仰ごとを。まさに世にすみたまはむ人の承り給はでありなんや。いはれぬ事なし給ひそと。言葉はづかしくいひければ。是を聞て。ましてかぐや姫聞べくもあらず。國王の仰事を背かば。はやころし給ひてよかしといふ。此内侍歸りまいりて此由をそうす。御門聞食て。多くの人をころしてける心ぞかしとの給てやみにける。されど猶思しおはして。此女のたばかりにやまけむとおもほして仰給ふ。なんぢがもちてはんべるかぐや姫奉れ。かほかたちよしと聞食て御使をたびしかど。かひなく見えず成にけり。かくたいくしくやはならはすべきと仰らる。翁かしこまりて御

かへり事申様。此めのわらはは。たえて宮づかへ仕べくもあらず侍るを。もてわづらひ侍る。さりとともまかりて仰給はんと奏す。是を聞召て仰給ふやう。などか翁の手におぼしたてたらん物を心にまかせざらむ。此女もし奉りたる物ならば。翁にかふむり^{（そイ）}などかたばせざらん。翁喜て家に歸りて。かぐや姫にかたらふやう。かくなむ帝の仰給へる。なをやはつかふまつり給はぬといへば。かぐや姫答ていはく。もはらさやうの宮づかへつかふまつらじと思ふを。しぬてつかふまつらせたまはゞ消うせなむず。みつかさかふぶりつかふまつりてしぬばかり也。翁いらふるやう。なし給そ。つかさかふぶりも我こを見たてまつらでは何にかせむ。さはありとも。などか宮づかへをしたまはざらん。しに給ふべきやうやあるべきと云。なをそらごとかとかまつらせて。しなずやあ

るとみたまへ。あまたの人の志をろかならざりしを。むなしくなしてしこそあれ。きのふ今日帝の宣はん事につかむ。人聞やさしといへば。翁こたへていはく。天下の事はとありともかゝりとも。身命^{（御イ）}のあやうさこそ大きなるさはりなれば。なをかうつかふまつるまじき事をまいりて申さむとて。まいりて申様。仰ごとかしこさに。かのわらはをまいらせむとてつかふまつれば。宮仕に出奉り候はゞしぬべしと申。宮つこまろがてにうませたるこにてあらず。昔山にて見つけたる。かゝれば心操もよの人ににずぞ侍ると奏せさす。御門仰給はく。宮つこまろが家は山本ちかくなり。御狩行幸し給はんやうにて見てむやとのたまはず。宮つこまろが申様。いとよき事也。何か心もなくて侍らむに。ふと御幸して御覽ぜられなんと奏すれば。御門俄に日を定て御狩に出給ひ

て。かぐや姫の家に入給ふて見給ふに光みちてけうらにてゐたる人あり。是ならんと思して。にげて入袖をとりてをさへ給へば。面をふたぎて候へど。始よく御覽じつれば。たぐひなくめでたくおぼえさせ給ひて。ゆるさじとすて。ゐておはしまさむとするに。かぐや姫こたへてそうす。をのが身は。此國に生れて侍らばこそつかひ給はめ。いとゐておはしましがたくや侍らんとそうす。御門。などかさあらん。なをゐておはしまさむとて。御こしをよせ給ふに。此かぐや姫きとかげになりぬ。はかなく口惜とおぼして。げにたゞ人にあらざりけりとおぼして。さらば御ともにはゐていかじ。もとの御かたちとなり給ひぬ。それをみてだにかへりなんと仰らるれば。かぐや姫もとのかたちに成ぬ。御門猶めでたくおぼしめさるゝ事せきとめがたし。かくみせつる宮つこまろ

を悦給ふ。扱つかふまつる百官人にあるじいかめしうつかふまつる。御門かぐや姫をとめて歸りたまはむ事をあかずちおしくおぼしけれど。魂をとどめたる心ちしてなむかへらせ給ひける。御こしにたてまつりて後に。かぐや姫に。

かへるさの御幸物うくおもほえて背てとまるかくや姫ゆへ御返り事。

むくらはふ下にもとしはへぬる身の何かは玉の臺もいを見むこれを御門御覽じて。いとかゝ歸り給はむ空もなくおぼさる。御心は更に立かへるべくもおぼされざりけれど。去とて夜をあかし給ふべきにもあらねば。かへらせ給ひぬ。常につかふまつる人を見給ふに。かぐや姫の傍によるべくだにあらざりけり。こと人よりもけうらなりとおぼしける人の。かれにおぼしあはすれば。人にもあらず。かぐや姫のみ御心にかゝり

て。唯獨す^{ハイ}ごし給ふ。よしなくて御かた^{ハイ}くに
もわたり給はず。かぐや姫の御もとにぞ御文を
書てかよはさせ給ふ。御かへりさすがににく
からずきこえかはし給ひて。おもしろき本草
につけても。御歌を讀てつかはす。かやうにて。
御心を互に慰め給ふほどに。三年計有て。春の
初より。かぐや姫月の面白う出たるをみて。常
よりも物おもひたるさまなり。ある人の。月の
かほみるはいむ事とせいしけれども。ともす
れば。人まには月をみていみじく啼給ふ。七月
十五日の月にいでゐて。せちに物おもへるけ
しきなり。近くつかはるゝ人。竹取の翁につげ
ていはく。かぐや姫例も月を哀がり給けれど
も。頃^{このイ}と成ては。たゞ事に侍らざめり。いみ
じくおぼしなげく事あるべし。よく／＼見た
てまつれ給へ^{ちセイ}といふを聞て。かぐや姫にいふ
様。なんでう心ちすれば。かく物をおもひたる

様にて月を見給ふぞ。うましき世にと云。かぐ
や姫。見れば世間心細く哀に侍る。なでう物を
か歎き侍るべきと云。かぐや姫の有所に到て
みれば猶物おもへるけしきなり。是を見て。あ
がほとけなに事思ひ^{をイ}給ぞ。おぼすらむ事何事
ぞといへば。思ふ事もなし。物なん心ぼそくお
ぼゆるといへば。翁。月なみ給を。是を見給へば
物おぼすけしきはあるぞといへば。いかで月
を見ではあらむとて。猶月出れば出居つゝ歎
きおもへり。夕闇には物おもはぬけしき也。月
の程に成ぬれば。猶時々は打歎きなきなどす。
是をつかふものども猶物おぼす事あるべしと
さゝやけど。おやを始て何事ともしらず。八月
十五日計の月に出居てかぐや姫いといたくな
き給ふ。人めも今はつゝみ給はず。これをみて。
おやども何事ぞととひさはぐ。かぐや姫なく
なく云。さき／＼も申さむと思ひしかども。必

心まどはしたまはん物ぞと思ひて今迄すごし侍りつる也。さのみやはとて打出侍ぬるぞ。をのが身は此國の人にもあらず。月の宮古の人也。それをなんむかしのちぎりなりけるによるなむ。此世界にはまうできたりける。今は歸るべきに成にければ此月の十五日にかの國よりむかへに人々まうでこんず。さらばまかりぬべければ。おぼしなげかむが悲しき事を。此春より思ひなげき侍るなりと云ていみ敷なくを。翁こはなでうことの給ふぞ。竹の中よりみつけきこえたりしかど。なたねの大きさにおはせしを。わがたけ立ならぶまでやしなひ奉りたるわが子を何人かむかへきこえむ。まさ

はあまたの年を経ぬるになむありける。かの國のちゝはゝのこともおぼえず。こゝにはかく久敷あそび聞えてならひ奉れり。いみじからむ心ちもせず。かなしくのみある。されどをのが心ならずまかりなるとするといひてもろともにいみじうなく。つかはるゝ人々も。年頃ならひて。たち別なむ事を。こゝろばへなどあてやかに美しかりける事をみならひて。こゝしからん事の堪がたく。ゆ水のまれず。おなじ心になげかしがりけり。此事を御門聞食て。竹とりが家に御使つかはさせ給ふ。御使にたけとり出合てなく事限なし。此事をなげくに。髪も白くこしもかゞまり目もたゞれにけり。おきな今年は五十ハヤばかりなりしかども。物思にはかた時になむ老になりけるとみゆ。御使仰ごととて翁にいはく。いと心ぐるしく物思ふなるはまことにかと仰給ふ。竹取なくく

申。此十五日になむ。月の宮古よりかぐや姫のむかひにまうでくなり。たうとくとはせ給。此十五日は人々給りて。月の宮古の人々まうでこば。とらへさせむと申。御使かへりまいりて。翁のあり様申て。奏しつる事ども申を聞召ての給ふ。一目見給ひし御心にだにわすれ給はぬに。明暮みなれたるかぐや姫をやりていかがおもふべき。此十五日司々に仰て。勅使せうしやう葛野のおほくにといふ人をさして。六ふのつかさ合て二千人の人を竹とりが家につかはす。家にまかりて。ついぢの上に千人。屋の上に千人。家の人々いとおほくありけるにあはせて。あける隙もなくまもらす。此守る人々も弓矢をたいして。おもやの内には女ども番にをりて守す。女ぬりごめの内にかぐや姫をいだかへてをり。翁もぬりごめの戸をさして戸口にをり。翁いは。かばかり守る所に。天の

人にもまけむやといひて。屋の上にをる人々にいはく。露も物空にかけらば。ふといころし給へ。守る人々のいはく。かばかりして守る所にかはかり一だにあらば。先いころしてほかにさらさむとおもひ侍ると云。翁これを聞て。たのもしかりをり。是を聞てかぐや姫は。さしこめてまもりたゝかふべきしたくみをしたりと。あゝの國の人えたゝかはぬ也。弓やしていられじ。かくさしこめてありとも。かの國の人こば皆あきなんとす。相たゝかはんとするとも。かの國の人きなば。たけき心つかふ人もよもあらじ。翁のいふやう。御むかへにこむ人をば。ながきつめしてまなこをつかみつぶさん。とさかがみをとりにかなぐりおとさむ。さかしりをかきいでて。こゝらのおほやけ人に見せて。はぢをみせむと腹立ある。かぐや姫云。こは高になの給ひそ。屋のうへにをる人共の聞

にいとまざなし。いますかりつる志をおもひ
もしらで。まかりなむずることの口惜う侍り
けり。ながき契のなかりければ。程なくまかり
ぬべきなめりとおもひかなしく侍る也。親達の
かへりみを聊だにつかまつらで。まからむ道
もやすくもあるまじきに。ひごろもいでゐて
今年計の暇を申つれど。更にゆるされぬによ
りてなむかく思ひなげき侍る。御心をのみま
どはしてさりなん事の。かなしく堪がたく侍
る也。かの都の人は。いとけうらにおいもせず
なむ思ふこともなく侍也。さる所へまからむ
ずるもいみじくも侍らず。老おとろへたまへる
様を見たてまつらざらんこそ戀しからめとい
ひて。翁胸にいたきことなし給ひそ。うるはし
き姿したる使にもさからじとねたみをり。か
かる程に宵打過て。ねの時ばかりに。家のあた
りひるのあかさにも過て光たり。もち月のあ

かさ十合たる計にて有人の毛のあなさへ見ゆ
るほどなり。大空より人雲に乗ており來て。つ
ちより五尺計あがりたるほどにたちつらねた
り。是をみて内外なる人の心ども。物におそは
るゝやうにして。あひたゝかはむ心もなかり
けり。からうじて。思ひおこして。弓矢を取た
てむとすれども。手に力もなく成てなへかど。
りたる中に。心ざしさかしきものねんじてい
むとすれども。ほかざまへいきければ。あれも
たゝかはで。こゝちたゞしれにしれて守あへ
り。たてる人共はさうぞくのきよらなること
物にもにず。とぶ車ひとつぐしたり。らがいさ
したり。その中にわうとおぼしき人。いへに宮
つこまろまふでこといふに。たけく思ひつる
宮つこまろも。物におそひたる心ちしてうつ
ぶしにふせり。いはく。汝あさなき人。いさゝ
かなるくどくを翁つくりけるによりて。汝が

たすけにとて。片時の程とてくだしゝを。そこの年比そこらのこがねたまひて。みをかへたるがごと^{へい}なりにつけり。かぐや姫はつみをつくり給へりければ。かくいやしきをの^{かみ}かもとにし。ばしおはしつる也。つみの限はてぬればかくむかふるを翁はなきなげく。あたはぬ事也。はやい^かだし奉れと云。翁こたへて申。かぐや姫を養奉る事廿餘年に成ぬ。かた時との給ふにあやしくなり侍りぬ。又こと所にかぐや姫と申人ぞおはしますらんと云。爰におはするかぐや姫はおもき病をしたまへばえいでおはすまじと申せば。その返事はなくて。屋のうへにとぶ車をよせて。いざかぐや姫。きたなき所にいかでか久しくおはせむと云。たてこめたる所の戸則たゞあきにあきぬ。かうしどもも人はなくしてあきぬ。女いだきてゐたるかぐや姫とに出ぬ。えとゞむまじければ。たゞさしあふ

ぎてなきをり。竹取心まどひてなきふせる所によりて。かぐや姫云。こゝにも心にもあらでかくまかりのぼらんをだに見をくり給へといへども。なにしに悲しきにみ送りたてまつらむ。我をばいかにせよとて捨てはのぼり給ふぞ。ぐしてゐておはせねと啼てふせれば。御心まどひぬ。ふみをかき置いてまからむ。戀しからん折々とり出てみ給へとて打なきてかく。ことばは。この國にむまれぬるとならば。なげかせ奉らぬほどまで侍らですぎ別^{わい}侍ることかへすがへすほいなくこそおぼえ侍れ。ぬぎをくきぬをかたみとみ給へ。月の出たらむ夜は見をこそ給へ。見すて奉りてまかる。そらよりもあちぬべき心ちするとかきをく。天人のなかにもたせたるはこあり。天の羽衣いれり。また有はふしの薬入り。ひとりの天人いふ。つばなる御薬たてまつれ。きたなき所の物きこしめした

れば御心ちあしからむ物ぞとてもてよりたれば。聊なめ給て。すこしかたみとてぬぎ置給ふきぬにつゝまんとすれば。有天人つゝませず。みぞをとり出てきせんとす。そのときにかぐや姫。しばしまてと云。きぬきせつる人は心ことなるなりと云。物一こといひをくべきことと有けりといひてふみかく。天人をそしと心もとながり給ふ。かぐや姫。ものしらぬことなの給そとていみじくしづかに。おほやけに御文たてまつり給ふ。あはてぬさま也。かくあまたの人を給てとゞめさせ給へど。ゆるさぬむかひまふで來てとり出まかりぬれば。くちおしくかなしき事。宮づかへつかふまつらずなりぬるも。かくわづらはしきみにて侍れば。心えずおぼしめされつらめども心づよく承はらずなりにしこと。なめげなるものにおぼしめし留られぬるなむ。心にとまり侍りぬとて。

今はとて天の羽衣きるおりを君をあはれとおもひいてけるとてつぼのくすりそへて。とうのちうじやうをよびよせてたてまつらす。中將に天人とりてつたふ。中將とりつれば。ふと天の羽衣打させ奉りつれば。翁をいとをしかなしとおぼしつることもうせぬ。此きぬきつる人は物おもひなくなりにつれば車に乗て。百人ばかり天人ぐしてのぼりぬ。そののち。翁女ちのなみだをながしてまどひけれどかひなし。あの書をさし文をよみてきかせけれど。何せむにか命もおしからむ。たがためにかなに事もようもなしとて薬もくはず。やがておきもあがらずやみふせり。中將人々引ぐして歸りまいりて。かぐや姫をえたゝかひとゞめずなりぬること。こまぐとそうす。薬のつぼに御ふみそへてまいらす。ひろげて御覽して。いといたくあはれがらせたまひて。ものもきこしめさず。御

あそびなどもなかりけり。大じむかんだちめをめして。いづれの山かてんにちかきとはせ給ふに。ある人そうす。するがの國にあるなるやまなん。此みやこもちかく。天もちかくはひべるとそうす。これをきかせ給ひて。

違事もなみたに浮ふわか身にはしなぬ薬もなにゝかけせむかのたてまつるふしの薬に(のつぽに御文イ)またつぽぐして。御つかひにたまはす。ちよくしには。月のいはがさといふ人をめして。するがの國にあなる山のいたゞきにもてつくべきよしおほせ給ふ。岑にてすべきやうをしへさせ給ふ。御ふみ。ふしのくすりのつぽ。ならべて火をつけてもやすべきよしおほせ給ふ。そのよしうけたまはりて。つはものどもあまたぐして山へのぼりけるよりなむ。そのやまをふじのやまとなづけける。そのけぶりいまだ雲の中へたちのぼるとぞいひつたへける。たイ

右竹取翁物語以織部正乗尹主藏本書寫以古寫三本及活板本并流布印本校合畢

群書類從卷第三百十

物語部四

住吉物語

むかし。中納言にて左衛門督かけたる人侍けり。うへ二人をかけてぞかよひ給ける。一人は時めく諸大夫のむすめ。そのはらに女君二人いでき給へり。いまひとりふるきみやばらの御むすめにておはしけるが。いかなるすくせにて。この中納言よなく／＼かよひ給ける程に。やがて人めもつゝまず成て。すみわたり給けるが。ひかる程の女君いでき給ける。おもひのまゝなればおぼしかしづき給ことかぎりなし。姫君日かずふるまゝにおひ出給へり。とし月かさなりて。八ばかりになり給ひけるとし。

はゝ宮れいならずなやみ給けるが。日をへておもくのみなりまさり給ければ中納言に聞え給けるやうは。われはかなくなりなば。このおさなきもののためうしろめたうなん侍べき。われなからんあとなりとも。なみ／＼ならんふるまひせさせ給ふな。いかにも／＼みかどにたてまつらせ給へ。ことむすめたちにおぼしおとすなとなく／＼聞え給へば。中納言もうちなき給て。我もおなじおやなれば。おとりてやなどかたらひつゝ。あかしくらす程に。世の哀にはかなくつねなき所なれば。なさけなくむかしがたりになりはてにけり。中納言お

なじ道にとかなしみ給ひながら。のち／＼の
わざもさるべきやうにして四十九日もほどな
うはてぬれば。もとの北のかたへわたり給に
けり。ひめ君おさなき御心ちに。ことのはにつ
けてこ宮の御事をあぼしつゝかなしみ給ひて
けるに。中納言さへわたり給ひぬれば。いとど
つれ／＼かぎりなく。ふたばのこはぎ露おも
げなりければ御めのととかくなくさめてぞ過
し侍ける。中納言ともすれば。みきこえにわた
りてかへり給へば。なをしの袖をひかへて。ゆ
くゑもしらぬ程なれば。涙をながしつゝした
ひまほしきけしきを御覽するにつけても。は
かなくなりにし人の倂。ふと思ひ出るにもむ
ねうちさはぎ。をそふる袖もあやしくて。いと
ど心ぐるしくこそ侍らんなどかたらはせ給ひ
てこしらへをき。我にもあらぬ心ちにてかへ
らせ給にけり。歸り給ひても。姫君のおぼしな

げきつる倂のみ心にかゝりて。ことむすめた
ち一所に住せまほしくおぼしながら。今もむ
かしも。まことならぬおやこの中なればとて。
めのとのもとにすませ聞え給へり。日かずふ
るまゝに。ひかりさしそふ心ちしてみえ給ひ
ければ。めのと。哀此御けしきをこ宮に御覽ぜ
ば。いがばかりおぼしかしづき給はんなどい
ひて。御ぐしをかきなで。なくより外の事なか
りけり。十あまりにも成給ひければ。めのと中
納言に申けるは。おさなくおはしますほどこ
そとてもかくても侍れ。この一とせ二とせに
なりていかにならせ給ふる。年月心もとなく
なんかなしく。こ宮のおほせ候し御宮づかへ
いかにと聞えければ。中納言。うれしくも心に
かけぬる事よ。われもわするゝ時なけれども。
おもふにかなはぬことのみにてこそは過行侍
れ。さりながらむかへて見聞えんとて。正月の

十日とさだめてかへり給ぬ。漸その日にも成ぬれば。むかへ奉り給たれば。今二人の御むすめたちと。うちかたらひておはしますをみて。いとうれしきことにぞめやすくおぼしける。中の君。三の君は。とりくいにいとほひやかに。なべてのにはあらぬ御けしきなれど。ひめぎみは今一しほ匂ひくはゝりて。ひかるなどはこれを申にやとぞ見え給ける。このひめぎみの御めの子に。侍従と聞ゆる侍けり。年はひめ君に今二ばかりのまさりにて。すがたありさまありつかはしく。ものなどいひ出したるさまも。いとあらまほしくぞ見え侍ける。これぞ姫ぎみにつきそひて。たがひにかた時もたちはなれんも。物うくおもひてぞあかしくらし給ける。中納言。にしのたいしつらひてすませ侍らんとて。そのいとなみにてぞ侍ける。まゝ母。心のうちにはいかゞおもひけん。人聞

には聞ゆるやう。まことには、宮にをくれ給てのち。むかへ奉らまほしう侍つれども。けふけふとのみおもひてすぐしつるに。わかき人あまたおはする。たがひにつれぐなぐさめていとうれしき事にこそ。いかにをさなき心ちに。そのむかしこひしくおぼし出らん。あなあはれやと聞ゆれば。めのと。まこととし比あやしきところにうづもれておはせしに。はていかゞなどかきくもりかなしく侍しにこれを奉れば。よろづはれぬる心ちして。よみぢやすくこそなどいひつゞけて。うちなき侍けり。むかひばらなれば。中の君にはひやうゑのすけなる人あはせてけり。西のたいにすみ給へば。中のきみ。三のきみ。むつれあそび。たがひにむつまじく思ひて明しくらし給けり。こ宮のおほせられし御宮づかへのこといかに。御めのとわするゝ時なくおどろかし侍け

れば。中納言。われもおこたる時なけれども。きたのかたに聞えあはせんに。わが子ならねば。心にいそがんこともかたければ。いひもいずとて。思ひわづらひ給けり。かくて月日かさなりゆくほどに。右大臣なる人の御子に四位の少將とて。世にすぐれたる人侍ける。いかにもおもふさまなる人もがなと。あさゆふは御心もそらにあくがれて物がなしきに。右大臣のはした物に。そらさへといふ物のおとこにてありける。下づかへになりてちくぜんと聞ゆるなん。中納言の宮の世までは。このもの大夫といふものを^(のイ)おとこにて侍ければ。あさゆふにこのひめ君をば見聞けり。ちくぜん右大臣の家のきたのかたにて。人のよしわろき事かたるつゐでに。中納言の宮ばらの姫君こそをさなひめでたく。ふたばのこはぎをみる心ちせしか。いかにひ出給たらん。こは、

宮のうせ給てのちは。四五年は見侍らずといふを。少將たち聞給て。いとうれしきことを聞つる物かなとおぼして。わがざうしにちくぜんをよびて見るらんやうに。さもとある人あまたあれども。物うくのみしてすぐす。中納言の宮ばらの姫君はみしかとたづね給ひければ。ちくぜん。おとこにて侍しもの。こは、宮に侍しかば。よくみ奉りて侍し。世にうつくしく^(四字イナシ)さぶらふ。中納言どのは宮づかへをとの給へども。^(はイ)うちかなはでおぼしなげくとぞうけたまはるといへば。その人の事。いひよりてふみなどつたへてんやとの給へば。かなはんことはしらず。御ふみをもて参りてこそは見侍らめと聞ゆれば。よろこびて十月ばかりに。もみちがさねのうすやうに。

初時雨けふふりそむる紅葉葉の色の深きを思ひしれとそ
かきてひきむすびてやり給へば。その日のく

この事かなへたらば此世ならずおもひ侍なんとの給へば。すきくしきやうに侍れども。君のかくまでおぼしたらんことをば。いかでをろかにはと聞ゆれば。いとうれしくて。又文かきて給ければ。とりて侍従にとらすれば。ならばせ給はねば。いみじくわびしげにおぼしたることのいとあしきになどいへば。ちくぜん。あのれもいやしきことならば。なにしに申さんずるに。おぼえすくなき御宮づかへよりは。このきんだちにおはしまさば。中々めやすき事にてこそ。うけたまはるやうにては。その御宮づかへの御事もかくこそ。この少將どのは今の後の御せうとなれば。たゞ今世に出給はんずる人なり。御かたちよりはじめてなにはのことにつけても。ひとしき人やはあはする。御ためうしろめたき事をばいかでかといへば。いさや。中納言どのもうち参りの事より

外にの給はず。なみくならんさまにおぼしよらむことはよもといへば。ひめ君うれしと聞る給へり。ちくぜん。一くだりの御返にても給はらんとてせめければ。かやうの事もならはねばとて。おもひはなちたるさまをみて歸りつゝ。こまゝと^(いまたなくイ)かたり聞ゆれば。少將。さこそあらめ。たゞ^(いまたなくイ)猶々も聞えさせよ。いかなるべきにか。此事かなはずば世にあるべき心ちもせねばとて。うちながめがちにてをはするをみるにもいとをしく。^(そののちイ)日ごとにゆきてほのめかせども。行水にかずかく心ちしていひわづらひありくほどに。まゝは、此ことほの聞て。ちくぜんをよびて。この程たいのきみに文つかはすなるはいかなる人やらんととへば。しばしはとかく^(侍り)あらがひ侍りけれども。あながちにとはれければ。ありのまゝにしかくと聞ゆれば。まゝは、これを聞ての給やう。さや

うのきんだちは人にいたはられんところおぼすべけれ。はしもなき人よりは三の君のねび

まさり給たるに。さるべきさまとおもふに。み

みよりにこそたばかり給へかし。さらばそこ

をこそこのよならずおもひ侍らめと心ふかく

いひければ。さすがにいなみがたさに。まこと

にたび／＼聞え侍れ共御返も給はねば。少將

殿。ちくぜんをのみせめさせ給ふもわりなく

侍る。さりとてものちまで申えんこともかた

げにみゆるも心ぐるし。さらばさもこそはと

いへば。よろこびてしろきこうちぎ一かさね。

これは三の君のとて出し給ひければ。よろこ

びて。さらば少將殿にはもとの御心ざしの人

なりとしらせ奉らんと申ければ。よくの給ひ

たり。そのよしにてこそはとてよろこび給け

り。其のちくぜん。少將どのに参りて。申えん

ことはありがたく侍れど。今一度御文を給て

聞えてみんないへば。いとうれしくて。かくぞありける。

よとともにつけふり絶せぬふしのねのしたの思ひや我み成覽

とかきてちくぜんとりて。少將どのの御文と

てまゝはしにたてまつれば。ふみまけて。うつ

くしくもかき給へる物かな。この御返と聞ゆ

れば。三の君。たばかられることをばしり給ず。

はぢしらひたるすがたいとめやすく。いとを

しきさまなり。すぐりかみとりいだして。それ

それとせめられて。かほうちあかめて。

ふしのねの煙ときけは頼まれすうはの空にや立のほるらん

とかきて引むすびたるをちくぜんとりて。少

將殿のもとにゆきて御返とて聞ゆれば。少將。

たばかられるもしらず。いそぎあけて見給へ

ば。手なんどをさなびれてみえけれども。よろ

こび給ふ事かぎりなし。又々もかよはしけり。

たいの御方(三字イナシ)の人々このよしほの聞て。いとあ

かしくおもひあひ給へり。かくしつゝ。日かずもへずしてかよひ給ける。少將何心もなくてぞずぐし給ける。をさなきさまもことはりとおもひつゝ。ひるもとどまりてみ給へば。きし程にはあらねども。なべての人には侍らざりければ。かよひ給けり。中納言もたばかられるもしらず。少將にあひて。よろづ聞え合てぞ侍りける。まゝはしづき給ふ事かぎりなし。しんでんのひんがしおもてにすませければ。少將すぎざまにしのたいをみれば。よしあるさまなれば。いかなる人のすむにやとゆかしくおぼしてあかしくらす程に。少將。秋のよのつれとながきねざめに。かなしく物あはれなるさよ中に。ねやちかきおぎのはにそよめきわたる風の音も。夜ごとにかよふ心ちして。いとはだ寒きまくらのしたに。よもすがらおとなふきりすのこゑも。そのこと

となく鳴に。^(きこ)涙おさへがたきつまとなるおりふしも。やさしきしやうのことのねそらに聞えければ。あなゆゝしこはいかにとおもひて。まくらをそばだてゝ聞給ければ。しのたいに聞なし給ひけり。日比よしありてみるに。いよいよいかなる人にかと心をしづめておもひ給中に。わがかたらひそめし人こそことをば引と聞しかとおもひて。これを聞給ふにやとへば。はじめより哀に聞つるとの給へば。心ありとおもひて。これはいかなる人のことの音ととひ給へば。わがあねにて侍る人のひき給なりとの給ひければ。兵衛のすけどのかととひ給へば。さにはあらず宮ばらにておはするなり。常に心をすましてことをひき給なりと。なに心もなくかたるもいとをしながら。心のうちにはあさましくたばかられにける物かなとおもひつゝ。たいのまに。^(ま)いかばかりお

こがましくおもふらん。ちくぜんがくちをし
さよとおもひて。明もはてねど。出てちくぜん
をよびよせてうらみ給けるに。いひやるかた
なくかたはらいたくおもひてぞ有ける。今は
いふにかひなし。猶しらぬかほにて過さん。あ
のあたりにだも。あなかしこ／＼聞えさすな
との給ければ。ちくぜんかほうちあかめて。な
にしにかとてぞたちける。少將は三のきみ
をも哀とおもひながら思ひそめてしことのす
ゑなからんのみにあらず。さしも聞えざりし
人だにもかほどこそ侍れ。ましていかならん
とゆかしくぞおもひ侍ける。いかでか見奉ら
んなど思ひわたる程に。冬にもなりにけり。侍
従にいかでか物いはんとおもひて。おもふほ
どの事どもかき給ひて。なをしのこしにさし
はさみて。雪のいみじうふりたる日たゝずみ
ありきて。しとみのもとに立よりて聞ば。はし

ぢかくいざり出給て。おかしき四方の梢かな。
いづれを梅と分がたくこそといひてうちほら
ふ中に。今すこししのびたるこそにてことか
きならして。かひのしらぬをおもひこそやれ
といひてけり。これなん姫君よとむねうちさ
はぎて。しのびかねつゝしとみをうちたゝけ
ば。あやし。たれならんとみれば少將たち給へ
り。侍従あましくおもひて。かへりなんとす
るものすそをひかえて。むすびたるふみをや
り給て。よろづ人のつゝましさにとてかへり
給にけり。あやしくいかなる文かとみれば。

白雪のよにふるかひはなけれども思きえなんこと悲しき
とて。さま／＼の事かき給へり。ひめ君にこれ
を聞ゆれば。さすがにあはれにおもひながら。
よそなりしそのかみだにもおもひよらざり
し。今はいよく人聞きぐるし。ゆめ／＼とぞ
聞えける。かくしつゝあらたまのとしもかへ

りにけり。正月十日あまりの頃。中の君。今やさが野の春の氣色おかしかるらん。忍びつゝみんなどいざなひければ。をの／＼まことになどいひて出たち給ひけり。さぶらひもうちゆりたりけるをぞ御ともに參りける。あじろ車三りやう。一りやうにはひめ君。今一兩には中の君三のきみ。一兩にはきぬのつまきよげにいだして。わかき女房下づかへなどのりたりけり。少將ほの聞て。さが野へさきに行て。松ばらにかくれゐてみれば。此車どもちかくやうよせて立ならべたり。さうしき牛かひなどをばとをくのけて。さぶらひ二三人ばかりちかくよせて。女房はした物などくるまよりありて松ひきあそびけり。姫ぎみたち車のすだれあげたれば。たしかならねどほのかに見ゆ。少將よくかくれてみるをもしらず。女房どもいとあかしき物のけしき御覽ぜよかし。みぐる

しくも侍らず。さま／＼の草どももえ出たり。なつかしくなど聞ゆれば。中の君あり給へり。紅梅のうへにこきあやのうちぎ着給へり。さしあゆみ給えるさまいとあてやかに。かみはうちぎのすそにひとしかりけり。つぎに三の君あり給へり。花山吹のうへにもえぎのうちぎなり。ありつかはしきさまは今すこしまさりてぞみえ給へる。姫君はとみにもあり給はぬをいかにとせめければ。侍従さしよりて。いかに人をばあろし參らせてと申ければ。あり給へり。櫻がさねの御ぞに紅のひとへばかまふみしだき。さしあゆみ給へる御すがたいとらうたく。うつくしなどいふもをろかなり。かみはうちぎのすそにゆたかにあまり。たけの程。まみ。口つき。いとあてやかに。こと人々よりも今一しほ匂ひくはゝりて見え給へば。これを人にみせばやとおどろかれ給ふ。をの

をの人ありともしらであそびあへるを。よくよく見給ひて。少將あくがれて。大なる松の下にゐ給へるをこの姫君しもみつ^つけ給て。かほうちあかめて。いそぎ車にのり給へるにつけても心あるさまなり。をのくさはぎてかくれあへるさまもあらまほしき程也。少將の給ふやう。さが野のゆかしさにあそびつるほどに。くるまの音のし侍つれば。あやしやたれにかとて立忍びたるほどに。かくれたりしんあれば。あらはれてのりしやうとかや。参りあひたるうれしさよとて。

春霞立へたつれと野へに出てまつのみとりをけふみつる哉とて。うちずんじ給へば。中の君はひめぎみにそれと聞ゆれば。そなたにこそとの給へば。たがひにいひかはし給て。中の君。

片岡のまつともしらて春ののに立出つらんことそくやしきとあれば。せうしやうどの。

君とわれ野へのこ松をよそにみて引てやけふは立歸るへきとて。此たびはひめ君にと聞え給へども。よしなきありきをして見えつることをかなしくおぼえて。うちそばみておはするを。いかでなどせめさせたまへば。御返事なくとも。むげにしらぬやうにおぼえて。姫君。

手もふれてけふはよそにて歸なんみの岡の松のつらきよといひけち給ければ。少將いよく忍びがたさに車のきはにたちより給ひて。なにかくれさせ給らん。かひも侍らじと聞ゆれば。中の君。車よりは少將殿の一所こそありさせ給つれ。よの人はいつかはしりたりがほにもの給物かなといへば。少將うちわらひ。ゆかしき御物あらそひかな。いかなるよめにもこそはしるく侍なれ。御くちきよさよ。いかにひやう急のすけどのに御物あらがひのあるらん。うしろめたさこそなどたはぶれ給ひけるも。たゞひめ

ぎみにこそとけしきはみえ給ひにけれ。少將
どのたびく歌などよみ給へけり。(給ひなどイナシ)

年をへて思ひそめてしかたをかの松のみとりは色深くみゆ
とあれば。中の君。

程もなき松の縁のいかなれは思ひそめつゝ年をへぬらん
三の君もおなじく。かくなん。

千よまてと思ひそめける松なれはみとりの色も深き也けり
ひめ君も。つゝましなから。

子日して春の霞に立ましり小松か原に日をくらすかな

車よりおりたまへてあそび給ふ御有様をみ參
らせ給ふにつけても。少將此世にいかになが
らへてあるべしとおぼえ給はず。心うくて
人目もしらぬほどにぞかなしみける。さて日
もくれがたになりけるに鶯の鳴ければ。初音
(ぬれはイナシイナシ)
めづらしくきゝて。三の君。

わか宿にまたおとつれぬ鶯のさゑするのへに長居しつへし
中の君。

初聲はめつらしけれと鶯のなく野へなれはいき歸りなん
と聞ゆれば。少將かくなん。

初聲はけふそ聞つる鶯の谷の戸出て幾世經ぬらん
とのたまひて。あそびくらしつゝ。かたゝ歸
り給へば。少將殿(イモ)人の俤身にそひたる心ちし
て。おもひはなれがたく。心のうちもくるしき
まゝには。侍従にあひて。あさましき人にはか
られて。かゝる物おもふことのわりなさよ。い
かにおかしとおぼしけん。きえもうせまほしけ
れども。さすがにすてやらぬ物は人の身にな
どとて。うちなみだぐみ給ひて。今はいかゞた
だ一こと聞えさすべきことの侍り。これ御覽
ぜさせよなどたびくゝの給ければ。侍従。むか
しだにも聞えわづらひし事なる。今はいよい
よかたきおほせにこそといへば。わが君一た
びの返事を給たらば。この世のおもひでにこ
そとおもふなりと聞ゆれば。それもいかゞと

おもへどもいなみがたくて。度々ほのめかし
けれどもかなはざりけり。さるまゝに少將お
もひかねて神佛にいのり給ける。三の君のも
とへもゆかまほしけれどもおもひあまりては
侍従にあひてこそ心をなぐさむれ。にしのた
いのけ色をたゞ見ずなりなんことの心うく
てつねはかよひければ。よひあかつきにたい
をすぎ給とは。ふるき歌のいと哀なるをお
かしきこゑにてうたひつゝ。袖のしぼるばか
りにてすぎありき給ける。かくしつゝあかし
くらすほどに。ひめ君のめのとれいならず心
ちおぼえければ。姫君のゆかしうおはします
にたちよらせ給ふべきよし侍従がもとへい
ひやりければ。忍びつゝおはしたりければ。め
のとあき出。なく／＼聞ゆるやう。さだめなき
世と申ながら。おもひぬるものはたのみすく
なくなん。つねよりもこのたびはきみも御ゆ

かしくて。かゝる心のつきぬれば。見奉らん事
もこのたびばかりにやなどおぼゆるに。哀は
は、宮のおはしまさざりしをこそかなしとお
もひつるに。このおいうばさへなくなりなん
跡のゆゝしさよ。ともかくもさだまり給はん
を見奉りてのちこそとおもひしに。これをみ
おき奉りて。しでの山をまよはんことのかな
しさよ。はかなくなりなんのちは。侍従をこそ
はゆかりとて御覽せさせ侍らんずらめなどい
ひて。御ぐしをかきなでてさめ／＼となきけ
れば。姫君も侍従も袖をかほにおしあてゝ。わ
れもともにぐし給へとこそゑもしのばすなき給
ければ。よそのたもとまでも所せく聞えけり。
さて侍従をばおきて歸らせ給べきよし聞ゆ
れば。かへり給にけり。かくしつゝなやみまさ
りて五月のつごもりごろにはかなく成にけ
り。ひめ君侍従がおもひさこそあるらめと。め

のとのなげきのうへに侍従が心ぐるしさおもひやり給。侍従ははゝのかなしみの中に。ひめ君の御つれづれをなげきつゝ。さてのちづのわざもこまゝといとなみけり。はての日。ひめ君のつねにき給ひけるうちぎひとかさね侍従がもとへつかはすとて。

から衣しての山ちを尋つゝわかはくゝみし袖をとひなん

とつまにかきつけてやり給ければ。侍従是をみて。かほにおしあてゝ人めもつゝまざりけり。とかくいとなみ侍ほどに。七月七日あまりに。姫君のもとへ参りけるに。はつ秋の月いとあはれるよ。はしづかく出て。世中のはかなく哀なることを聞えあはせてなきゐたるを。少將たち聞て。あはれさかぎりなかりければ。とぶらひ侍らんとてしとみをたゝけば。侍従は少將なりとて出あひて聞ゆるやう。ものおもふはかなしき事とはこの程こそおもひし

られ侍れといへば。さこそは侍けめ。あなあはれなどいひかよはす程に。さよもなかなばにすぎて。かねの音聞えければ。侍従なに心もなく物がたりの中に。あかつきのかねのをとこそ聞ゆなれといへば。これを入あひとおもはましかばとうちながめ給けり。姫君もあはれとぞ聞とがめ給ける。さて夜もあけにけり。かくしつゝすぎゆく程に。少將いよゝゝふかくおもひなりて。たゞ一もじの御返事のゆかしきなり。やすきほどのことを人のねがひかなへ給へかしなどいひて。

秋のよの草葉より猶あさましく露けかりける我袂かな

などあさからぬやうに聞えければ。あまりに人のつれなきもあはれもしらぬに侍るとて。歌の返しすゝめければ。あはれとおもへども。人めのつゝましさにこそとて。

朝夕に風おとつゝ草はより露のこほるゝ程を見せはや

とかきてうちをき給ふを侍従とりて。

ゆかりまで袖こそぬるれ武藏のの露けき中に入そめしよりとかきそへてやりければ。少將うちみて。うれしさにむねさはぎて。一ことばの御かへりごとに。よの中のそむきがたく。侍従の心のあらがたさよとて。

むさしののゆかりの草の露はかりわか紫の心ありせば

などいひかへしける。かくしつゝおほくの月日かさなるまゝに。いよゝゝおもひまざりて。世中をもすさみ宮づかへをもわすれて心のままなる事ならば。さえもうせまほしきほどなりければ。〔三の君何心なくイ〕

あまの原のとかに照す月影を君もろとみにみるよしも哉

となん。されども此度は御かへり事もなし。何となくながめ給て三の君の御かたへおはしてみ給へば。何心なくおはするをいとほしくて御物語などして。かように世中のはかなきこ

とを仰つゞけられ。我いかにも成たらん時おぼしめし出しなんやと少將の給へば。三の君。時々聞へ給ふさへ心うくおぼゆるに。ましてさもあらば我身いかにせんとの給ふも。さすがに是も哀なり。明ぬれば立かへらんとし給へば。いかになど聞ゆれば。少將。

たえなんと思ふ物から玉葛さすかにかけてくるし（るい）としら南

とのたまへば。三の君いとあはれにもひて。絶はてん事そかなしき玉かつらくる山ひとのたより思へば。とのたまへば。少將さすがにみ捨がたく仰けれども。明ぬれば歸り給ていつしか御文あり。

白露と共におきあては。かなくも秋のよすからあかしつる哉

かく申給へ共又人目もつゝましさにや。御返事もなし。暮ればたいの御方におはしまして見給へば。おろしこめて人もなし。三の君のかたへおはしましたれども物うくて。立かへりなんとしたまへば心うくおぼえて。

たまさかにみちくるしほの程もなく立歸り南事をしと思ふ
としたにほのめかし給ふもすてがたくて少將
の給ふやう。なにとなく世中の心うくのみ侍
れば。ふかき山にとおもひたつに。その時おぼ
し出なんやとの給へば。三のきみ。いかになに
ゆへにさることは侍るべき。たまさかにまぢ
つけ侍るだにも心うくこそ。ましていかに哀
にかとてうちなき給へば。あはれにてまこと
やあらまし事ぞとて。とかくあかしていでざ
まにたいにやすらひて。

君かあたり今そすき行出てみよこひする人のなれる姿を
とおかしきこゑしてうたひければ。侍従さゝ
とがめて。まどをおしあけていかにといへば。
少將。世中のうさまさりゆけば。ふかき山にも
などおもひとりてなどいひ給へば。侍従。いで
や一ねんずいきとこそ承れ。ましてむさし野
の草のゆかりなれば。おなじはちすにこそと

いへば。うれしき善智識〔知略〕とかやにこそとたはぶ
るゝも忘がたくて。かくこそわらひ給ふとも
哀とおぼしあはする事もありなん物をといひ
つゝあかしくらす程に九月にもなりぬれば。
中納言北の方にの給やう。ゆくすゑはしらず。
二人のきみはありつきぬ。このたいの方をこ
としのごせちにまいらせばやとおもふに。う
ちあはぬことの心うさよとてなげき給へば。
わが子どもにもおもひまし給へるを。ねたしと
おもひながらいふやう。中々おぼえすくなき
宮づかへよりも。ときめかんかむだちめなど
にあはせ給へかしなどいへば。なみ／＼の人
にはみせんこともあたらしさになどの給へ
ば。まゝはゝ。ともかくもはからひにてこそと
いひながら。いかにしてかあやしき名をたて
て。おもひうとませんとあんどけり。中納言。
霜月の事なれば。いでたちをのみいとなまれ

ければ。まゝはゝともにいとなむけしきにて。したには人わらはれになすよしもがなとおもひ。人しづかなるときに中納言に聞ゆるやう。聞ながら申さざらんはうしろめたき事なれば申なり。此たいの御方をばわがむすめたちにもすぐれておはせよかしとこそおもひ侍るに。この八月よりの事を露しらざりけるよとて空なきをしければ。中納言あきれて。こはなにごとどととひ給へば。六かくだうの別當法師とかやいふあさましき法師の姫君のもとへかよひけるが。このあかつきもねすぐしたりけるにや。たいのかうしをはなちて。人のみともなく出にけることの心うさよとて。これいつはりならば佛神などげにくといひければ。中納言。よもさる事はあらじ。女房などの中になぞさる事はあるらんと給ひければ。中のかうしをはなちて出ける。うはの空な

る事をばいかでか。よく／＼きゝてこそなどいひ給へども。猶げにとおもひ給はざりけり。まゝはゝ三の君のめのとに。きはめて心むくつけかりける女房に聞えあはするやう。このたいのきみを。わがむすめたちにおもひまし給へるがねたさに。とかくいへどもかなはぬ。いかゞすべきといへば。むくつけ女。われもやすからずは侍れども。思ひながらうちすぐしさぶらひつるにうれしくとてさゝめきあはせて。そののち三日ありて。あやしき法師をかたらひ中納言に聞ゆるやうは。いつはりとぞおぼしたりしに。たゞいまかの法師出るなりと聞ゆれば。み給ひける時に出にける。あなゆゆしのことや。おさなくては母にをくれて。又めのとさへにはなれて。哀れくわほうわろき物とはおもへどもあさましとて入給ひぬ。さて宮づかへの事はおぼしとまりぬ。中納言た

いにおはしければ。姫君なに心なくぬ給ふに
むかひて。いみじきことのみ出くることのあ
さましさよとの給へば。ひめ君も何事にやと
思ひ給へり。中納言たちざまに侍従をよびて
の給。あさましきことを聞ば内まいりはとま
りぬとばかりの給ひてかへり給へば。心えぬ
事なればいひやるかたなくてやみにけり。さ
るにてもいかなるにかとて。しきぶといふ女
のたいの方に心よせなるにあひて。中納言ど
ののしかくとおほせられしはなにごととにや
きゝ給かといへば。しきぶしかくたばかり
よしをいひけり。侍従さわぎてひめぎみに聞
えあはせて。はゝなからん物は世にながらふ
まじき事にこそとて。ふたりながらひきかづ
きてうつぶしながら。この事たれにも聞えさ
すなとていはんほどに。あなたこなたの名の
たゝんこともみぐるしとぞの給ふ。まゝはゝ

はしえたる心ちして。むくつけ女もふたりし
たゝみにゑみあへり。中納言内まいりこそと
どまり侍らめ。さもあらん人にみせばやとお
ぼすほどに。内大臣の御子に宰相にて侍ける
人。左兵衛のかみにて廿五六ばかりなるが。よ
ろづ人にすぐれたるに。此よしほのめかしけ
れば。中納言いとよき事よとて霜月とさだめ
てけり。おそろしき心ともしり給はず。まゝは
はにいひあはせ給へばよき事にこそいひて。
下にはいとむねいたき事におもへり。中納言
たいにたちよりて侍従にむかひて。内参りの
とどまりしは。くちをしながら。さてのみやは
とて。たゝん月に左兵衛のかみにとあもふな
り。そのよし心えてあはすべしとて。はゝ宮の
三條ほり川なる所をしつらひて。そこにすま
せ奉らんといとなまれけり。ひめ君をやなが
らおぼすらんことのはづかしさよ。たゞ尼に

なりて聞えざらん所にと思ふとの給へば。中納言どのかくまでおぼしたらん。そむき給はんはいとほいなきことにて侍べし。北方にこそほいなくおはしますとも。ありへんまゝにきゝひらき給てんなどぞ侍従いひなぐさめける。まゝはいなをこの事をそねみて。むくつけ女にさゝめきあはせて。此ひめ君をさしもなからんずるげすにぬすませばやといへば。むくつけ女うちゑみて。うばがあにのかずゑのすけとて。七十ばかりなるおきなめうちたゞれたるが。このほどとし頃のめにはなれて。人をかたらはんとするに聞入るものもなきにおもひわづらい侍るに。此よしを申さばやときこゆれば。いひあはするかひありていとうれしくこそ。とく／＼といそぎてとの給へば。かしこにゆきてしか／＼と聞ゆれば。かずゑのすけしはぐみにくさげなるかほしてほ

ほゑみて。あなうれし。よき事かな。中納言どのや心えずおぼしめさんずらんといへば。それは北の方のよく／＼はからひてなどいへば。それはよき事。あなめでたし。とく／＼いそがばやといふ。よく／＼かためてかへりにけり。まゝはいにし／＼と聞ゆればゑみたばふて。たゞ神無月廿日頃など聞ゆれば。十日よりさきとさゞめくを。心よせのしきぶ聞てうちさはぎて。侍従にしか／＼とたばかり給ふなり。おそれは侍れども。ゆゝしくつみふかき事に侍ばあはれだになど聞ゆれば。今までながらへておはします心うさよとて。さきの度あまに成なましかば。そこにとゞめをきてかゝる事をもきかするとあれば。侍従。かくまでの事とこそおもひ侍らね。此たびはことばりにて有けるとねをのみなき給ひけり。さてかくてのみおはしますべきにあらず。中納言

どのに申^へせ給へかしと聞ゆれば。北の方にな
きことをいひつけ奉るにや。是をはれたりと
も。又も／＼まさりざまの事を有べし。又いか
なる事もか。なをたばかり給はんずらん。たゞ
聞えざらん野山の中にてあまに成て。この世
をおもひはなれんと聞ゆれ。このたびはこと
はりにて侍。さらば侍従もあまになりて。は
の後世をもとぶらひ侍らん。いかに其時あは
れに侍らんとて。ふたりながら袖もしぼるば
かりにて。かくはいひながら。わかき人々なれ
ば。いづくにていかにすべしとおぼえざり
ければ。ひめぎみ。めのとだにあらばともかく
もはからひてまし。今はそこをこそなにと
頼たれ。此月も過なんとす。いかにもはからふ
べしとの給へば。侍従も。いかにともおぼえず
などいひつゝ。とかくあんずるほどに。こは
宮のめとなる女の宮にをくれまいらせての

ちに。あまに成て住吉になん侍けるをおもひ
出て。おぼえさせおはしますにやしかくと
聞ゆれば。さるもの有とおぼえ侍なり。いかで
かつげやるべきとあれば。侍従がはゝのもと
にありける女の。よくしりたるをよびて。やり
けるふみに。さても久しきなどはをろかなる
にこそ。姫君のおひ出させ給し時。はゝ宮もは
かなくならせ給ひながら。いとおとなしく
ならせ給ひて。其後又侍従がはゝなりし人も
かくれにしかば。たれも／＼する人もなくて。
そのかたの戀しさに。あなゆかし。さこそよを
そむき給はめ。うらめしくもかきたえ給ふ物
かな。わすれ草のしるべとかや。さても／＼人
づてならで申あはすべき事なん侍る。よろづ
をすて。夜をひるに參り給へ。あなかしこあ
なかしこ。なべてなるらん事には。などかきて
やりける。すみよしに行てしか／＼ときこゆ。

あま君。いそぎあけてなく／＼見て。御返事に。
まことに世をそむきて。住吉のわたり侍な
がらも。あさゆふそのむかしの人の御事の
心にかゝりてあかしくらす中に。二葉にみえ
させ給ひしをふりすて奉りしかば。いかに
かにおひ出させ給ふらんとゆかしく。おこな
ひのさまたげとならせおはしませば忘草も
のみして。かた時もわすれ奉る事はなけれ
ども。はかなき世中のくせにてよな。いま／＼と
おもひてすぐしつる程に。わかき御心ちども
におぼし出て。かやうにおほせられたる事
の御うれしさよ。さても／＼おほせのまゝに。急
に御身（きみ）づから。あなかしこ／＼。とかきてまい
らせたりければ。ひめ君侍従すこしはるゝ心
ちして人しれず出たゝん事を侍従にいひあは
せ給ふうちに。中納言どののゆゝしき事を聞
給ひながら。思ひすてずあはれにおぼしたる

を。はなれ奉りなば。いかにおぼしなげかんと
思ひつゞけて。ふたりながらうつぶしがちに
て侍に。中納言のみ給へば。さりげなくつくる
ひおはしけれども。すがたもことのほかに
とろへたるに。涙のもり出ければ。三條へわ
たり給はんこともちかく成たるに。いかにう
つぶしがちに。おとろへ給ふとて。まゝはゝに
聞へ。あはせ給へば。なに事をおぼすにか。い
かなる人をこひ給ふにやとつぶやくを。心を
はで。さま／＼のもてあそびなど奉り。侍従が
もとへつかはしければ。かばかりおぼしたる
おやをふり捨ていなば。おぼしなげかん事
のつみふかさにとて。またなき給へり。中の君三
のきみわたりて。いかにつねにうつぶしが
ちにはなど聞ゆれば。此ほどはいかなるべき
か。世中もあぢきなくて。きえもうせまほし
き程になん。もしさもあらんには。おぼしいでな

んやと袖も所せくの給へば。あなまがくしき。なにしにかさる事はあるべき。侍従のきみいかにこひしくおもはせんといへば。侍従。いかならん世までもたれか忍びさぶらはん。思ひ侍るに。御たはぶれながらも哀にわすれがたくとて。思へることのなみだをとどめて。侍従。

命あらはめくりやあふと津の國の哀いくたの杜にすまはやとくちずさみて。人めあやしき程にぞありける。中の君物のあはれをしり給へば。その事となく涙をのごひ給ひけり。ひめ君。露の身のはかなきは。かやうなるほどにいかゞなど聞ゆれば。中の君。

契りてそ同じ草葉に宿るらんとともにそきえんよはのしら露といひ給へば。ひめ君も侍従もいと涙もよほされて。わかれん事をかなしとおもひけり。中の君三のきみ。なにとなく世のはかなさを

あはれとおもひ。つねは心をすましておはする人なればと大方の事を思ひて。をのくかへり給ひけり。心よせのしきぶ。ひまもあればたちより。たばかり給ことちかくこそ。いかにせさせ給ふべきにか。いと哀にこそと聞ゆれば。かやうにおぼしたる事のしのばしさに。いかならん世までもとこそおもひ侍れど。あはれはまことにかくてさぶらへども御かたをこそ頼奉りつるに。いかにならせ給なんずるにかとてうちなきけり。さるほどに住吉のあま君のぼりて。かくとつげられば。くるゝほどにしのびたるくるま奉りければ。いひ返して。そのほどにみぐるしき物どもとりしたゝめてけり。心の中いかばかり哀なりけん。その時しも中納言わたりければ。さりげなくておはしけれども。此たびばかりこそ見奉り侍らんずらんと思ひければ。忍びがたき色もあらはれて。

かほにふりかけたるかみのひまよりなみだも
り出るをみ給ひて。いかには、宮の事をおぼ
すにや。めのとも事をゆかしとおぼし出るに
や。またひやうふのことを心づきなくおぼす
にや。ともかくもなに事にてもおぼさんやう
にきこへ給ふべきこそ。おやのおもふばかり
子は思はぬことの心うさよ。いかばかりにか
哀とおもひ侍る。かしらのかみをすぢごと(ウイ)に
とあちとも。いなふべき身かはとのべ給へば。(イモ)
は、宮のことも又めのとの事もおもひ侍ら
ず。殿をも見奉らで程ふることかやとかなし
くなど。こと葉の聞えぬほどになく、聞え
給へば。中納言うちなき給ひて。三條におはし
ますとも。まろがいきたらんほどははなれ聞
ゆべきにあらず。なにかはそのことをおぼすと
てたち給ふを今一度とかほふりあげてみ給ふ
に。めもくれ心もきゆるほどにぞ有ける。侍従

とともにぞなきぬ給へる。さよふくる程に車
のいできたれば。くしのはこと御ことばかり
ぞもち給へる。御車のしりには侍従のりたり。
比は長月廿日あまりのことなれば。有明の月。(ウイ)
かげも哀なるに。出てゆき給ひけん心のうち。
いかばかりかなしかりけん。あらしはげしき
そらに。かすたえぬねを鳴わたる鴈も。おりし
りがほに聞ゆ。雲まを出る月の。つねよりもわ
れをとぶらふ心ちぞしける。さてあま君のも
とへ行て。かきくどきこそくとかたりけれ
ば。まことにおぼしたつも御ことはりにこそ。
今も昔もまことならぬおや子のありさまのゆ
ゆしさよ。まゝは、ながらも。いづくをにくし
とか見給ふらん。あさまし。かゝるうきよなれ
ば思ひすて侍る物をとて。すみぞめの袖をし
ぼるばかりにぞ有ける。夜のうちによどにつ
きてけり。少將その夜たいにゆきて。兵衛のす

けといふ女して侍従をたづねさすれば。をと
もせず。ひめ君の御あとにふしたるか木丁
をみるに。姫ぎみもおはせざりけり。うちさは
ぎて人々にたづねさせけれども見えさせ給は
ざりければ。あやしとおもひけり。さても中の
君三のきみのもとにおはするにやといへば。

心かろくたち出給ふべき人にもあらず。いか
なるべきとて尋あへり。夜も明ぬれば。つねに
おはせしところをみれば。かたはらなる夜ぶ
すまもなく。とりしたゝめたるけしきなれ
ば。まことにかなしくて。をのゝしのびねに
なきけり。中なごんにしかく^くと聞ゆれば。あ
されさはぎて。こゑをさうげてなきかなしみ
給ふ事たとへんかたなし。中の君三のきみ。あ
やしくこのほど心うきものにおもひ給へりし
かば。かくまでとおもはざりしものと。あの
おのかなしみ給ひけり。まゝはゝあされたる

やうして。侍従がさにか。たづね奉れとて。
中納言どののかたはらに。なくよしにてにが
みゐたり。少將は。かゝりければなさけある御
返しをばし給ひてけるとおもひつゞけて。た
いのすのこにさめく^くとなきゐ給へり。三の
君こゝかしこ見ありき給ほどに。もやのみす
にむすびたるうすやう有けり。なにとなくと
りてみれば。姫君の手にて。

なき名のみたつたの山のうす紅葉散なん後を誰か忍はん
とばかりかき給ひたりけり。これのみ給ひて。
いよくあはれさまさうて中なごんにみせ聞
ゆれば。いかなることのありければにや。われ
にはいひ給ふべきにこそ。おやのおもふばか
り子はおもはぬことの心うきとて。これをか
ほにをしあてゝうつぶし給ひけり。まゝはゝ。
おとこなどのもとにおはしたること。よもか
くれはて給はじ。いたくななげき給ふそ。われ

もおとらずこそなどいひければ。中納言。おほくのことことどもよりも。この君ばかりたれかはある。わが身にもかへまほしけれども。心にはぬよなればとうちくどき給へば。まゝ母。侍従にくるはかされて。よものふるまひどもし給ふもしらでとつぶやきゐたれば。あなむづかし。こはなに事ぞ（と脱書）なげき給ひける。さるほどなれば。あま君などつれて河じりをすぐれば。おかしうもゆきちがふふねにのりたるものども。あやしきことゑくして。つまもさだめぬきしのひめ松とうたひてこぎ行も。ならはぬ心ちしてあはれなり。京のかたは霧ふたがりて。そこはかともみえず。ひえのやまばかりほのかにみえたるけしき。物おもはざらんそらだにあはれなるべし。いはんやありがたきおやにひきわかれ。なさけ有しはらからをふりすてゝ。いづちと行らんと思ひつゞけん心の

うち。いかばかりなりけん。是をみてあま君。住吉のあまとなりては過しかとかはかり袖を濡しやはせしなどいひつゝ。住よしにゆきたれば。すみの江とて所（と）すみあらしたるに。うみさし入たるにつくりかけたれば。すのこのしたにうをなどあそぶも見えて。みなみは一むらのさとほのかに見えて。とまやどもにみるめかりほし。あしのやに心ほ（と）くけむりたちのぼるけしき。うすゝみにかけるあしでにいたり。ひがしにはまがきにつたふあさがほなどかゝりて。きしには色々の花もみぢうへならべたり。にしにはうみはるゝと見えわたりて。浪たてる松の木のみより。ほかけたるふねども淡路嶋をゆきかふさまも。なみにたゞよふかゞりぶねはかなくみえて。日の入はうみの中に入かとあやしまれける。わざとならでは人などくべくもなし。しづかに哀れなるすみかにてぞ侍

りける。ちいさやがにつくりて。あみだの三ぞんうつしならべて。月日のいつかばかりは。あま君にしにむかひてなん。西方ごくらく教主あみだ如來後生たすけ給へと申たるをみるにつけても。あらぬよにむまれたる心ちして。ひめ君も侍従も。とくあまになりておなじさまにとの給へば。あま君。御ぐしはとともかくても侍りなん。御心にぞよるべき。今はこの老うばが申さんまゝにおはしますずば。うちすて奉りてかくれ侍べしといへば。これもそむきがたくて。明くれはほとけの御まへにて經をよみ。花を奉りなどぞし給ける。中納言はおもひあまりて。今一たびこの世にてあひみせ給へとぞいのり給ひける。中の君三のきみなども。ひめ君のことにふれてあはれに。侍従がよろづをかしかりし物を。哀いかなる所にすみて都の事をおぼし出らむとわするゝ時なく忍

びつゝなき給ふ。まゝはし。なにごとぞ。いととなくいましとなき給ふは。わがいかにも成たらんにはよもかくはおぼさじ物をとはらだちければ。おやながらもなまけなくうたてにぞおぼしける。さて住吉には。やう／＼冬ごもれるまゝに。いとさびしさまさりてあらし風ふけば。わが身のうへになみたちかゝる心ちしてける。おきよりこぎくる舟には。あやしきこゑにて。にくさびかけるなどうたふも。さすがにおかしかりけり。すみの江には霜がれの蘆こほりにむすぼほれたる中に。水鳥のつがひ。うはげの霜うちはらふにつけても。思ひのこす事なかりけり。中納言どのより初て。かたえの人々いかにおぼしなげくらん。おやに物を思はせ奉るはつまふかき事にこそ。いきてありとばかりしらせ奉らんとて。あま君のもとにこわらはの京よりぐしたりしに。し

かじかの所にもちて參りて。いづくよりといはで此ふみ奉りて。さてにげかへれねと。よくよくをしへてけり。さて文をとらすれば。いづくよりとて。はした物出てとりぬ。名をとへば申さず。出てみればつかひなし。いかなる事にかとて文をみれば。ひめ君の御てにて。

あなゆゝし。よの忍びがたさよ。ゆくゑもしらぬ程になりしことを。おぼしなげく人もおぼしめしやらせ給へ。なぐさむかたとては。そなたの風のむつまじくて。あかしくらすになん。たれもくおはしますにや。哀れむかしのいかにおぼしなげかせ給ふらん。ことにつみふかくこそ。はかなき命ながらへたりとばかり聞え奉るになんとかきすさびて。あくに。

あさかほの

花のうへなる

つゆよりも

はかなき物はこゝちしてむれゐるたつをありそうみのあまのはころも日をへつゝ

くる人もなきあさましく

かへらんとたにいにしへの

身はなりはつるたちわかれ

よるの衣をゆめならて

あふくま河をさゝかにの

鳥のこゑたにたにふかみ

くちははつとも

濱ちとり跡はかりたにしらせねは猶尋ねみん鹽のひるまを

かけろふの

世をあきかせの

わかれつゝ

かひなきうらに

わかことく

歎きますこの

あしひきの

なかれ出にし

おもほえず

わか身なりそも

つるの子の

行衛もしらす

かへしつゝ

こひしき人を

わたるへき

くもてに物を

おともせぬ

人にしられぬ

なりはてぬへき

あるかなきかの

うちなひき

たゝひとりのみ

しほたるゝ

ほしやわつらふ

ねぬなはの

山したみつの

ふるさとに

いかに契りし

むもれ木と

雲ゐはるかに

しらなみの

ぬるよの夢の

みちのくの

わかみならねは

おもふかな

とをちの山の

としをへて

となん有ける。これをみてたゞ哀さをしはかるべし。中納言にみせ聞ゆれば。こゑもをしま
ずなきかなしみ給ふことかぎりなし。このつかひをうしなひつらん事の口をしさよとて。
これをかほにをしあてゝ。うちふして。なかなかひたすらにおもひつるよりはかなしくて。
いかなる所に。ならはぬこゝろにたびだちて。
あかしくらすらんとかなし^(のい)さまざりて。やがてさまかへんとし給ひけるを。したがへる人。
今一たびもとの御すがたにて。ひめ君にあひ奉らん事こそ。たがためにもほいなるべき御こととぞとゞめ申ける。少將此ことのおぼつかなさ。うへのもとにおはしたれば。三の君しかぐと袖もしぼるばかりにかたり給へば。物のあはれをしりてかくの給よとおぼしけり。かくて正月のつかさめしに。右大臣は關白に成給ふ。少將は中將になりて三位し給へ

り。中將はそれとも思はで。ひとへに神佛の御前に參りても。ひめ君のありどころしらせ給へとぞいのり給けれども。させるしるしもなかりけり。「春秋」もすぎて。九月ばかりにはつせにこもりて。七日といふ夜もすがらおこなひて。あかつきがたにすこしまどろみたる夢に。やんごとなき女そばむきてゐたり。ひきむけてみれば。わがおもふ人なり。うれしさせんかたなくて。いづくにをはしますにか。かくいみじきめをばみせ給ふぞ。いかばかりかおもひなげくとしり給へるといへば。うちなきてかくまでとはおもはざりしを。いと哀れにぞといひて。いまはかへりなんといへば。袖をひかへて。

わたつ海の底ともしらす侘ぬれは佳吉と社あまはいひけれといひてたつをひかへてかへさずとみて。うちあどろきて。夢としりせばとかなしがりけ

り。さて佛の御しるしぞとて。夜のうちに出て。住よしといふ所たづねみんとて。御ともなるものには。精進のつゐでに。天皇寺住よしな

そかりつるやまの中に。たゞひとり草枕しておきふし給ふ所にゆきつれば。われをみつけて袖をひかへて。

どに參らんとおもふなり。をの／＼かへりて此よしを申せとおほせられければ。いかに御ともの人なくては侍べき。すてまいらせて參りたらんに。よき事さふらひなんや。したひあひけれども。じげんをかうふりたればそのままになん。ことさらにおもふやうあり。いはんまゝにてあるべし。いかにもぐすまじきぞとて。みずいじん一人ばかりをぐして。じやうえのなべ^{なべ}らかなるに。うす色の衣に白きひとへきて。わらぐつはぎして。たつた山行かくれ給ひにければ。聞えわづらひて御とものものはかへりにけり。住よしには。そのあかつきひめ君の御あとにふしたる侍従に聞ゆるやう。まどろみたりつる夢に。少將の給ふやう。心ほ

尋ねかね深き山ちに迷ふかな君かすみかをそこしらせよ

となん有つるとあはれにかたり給へば。侍従。げにいかばかりなげき給ふらん。まことの御夢にこそ侍れ。哀れとおほさずやと聞ゆれば。岩木ならねばいかでかなどいひつゝ。哀げにおぼしたりけり。中將はならはぬさまなれば。わらぐつにあたりてあしよりちあへり。行やらぬけしきなれば。みちゆき人あやしき物とも。めをつけてぞ見あひける。さてもなく／＼とりのときばかりに。はる／＼となみたてる松の一むらに。あし屋所々にあり。海みえたる所にゆき給ひぬれども。いづくともしらず。思ひわづらひて松の下にやすみ給ひけるに。十あまりなるわらは松の落ばひろひけるをよび

給て。をのれはいづくにすむぞ。此わたりをば
いづくといふぞととへば。住よしとなん申。や
がてこれに侍なりといへば。いとくうれし
き事ときいて。此わたりにさるべき人やすむ
とおほせられければ。かんぬしのたいふどの
こそといへば。さても京などの人のすむ所や
あるとおほせらるれば。すみの江どのと申所
こそ。京のあまうへとておはするといひけれ
ば。こまかにたづねとひて行給ひたれば。江に
つくりかけたる家の。物さびしき夕月よ。木の
まよりほのかにさし入て。おさくしき人も
見えず。いと物あはれなる。日もくれければ松
のもとにて。人ならばとふべきものをなど。う
ちながめてたゞみわづらひ給ける。さらぬ
だにもたびの空はかなしきに。夕なみちどり
哀れになきわたり。きしの松かぜものさびし
き空にたぐひて。ことのねほのかに聞へけり。

此こゑりつにしらべて。ばんしきてうにすみ
渡り。これを聞給ひけん心。いへばをろかなり。
あなゆゑし。人のしわざにはよもなどおもひ
ながら。その音にさそはれて。なにとなくたち
よりて聞給へば。つりどののにしおもてに。わ
かきひとりふたりがほど聞えてけり。ことか
きならず人あり。冬はおさくしくも侍りき。
此ごろは松風なみの音もなつかしく。都にて
かゝる所もみざりし物を。あはれく心有し
人々にみせまほしきよとうちかたらひて。秋
の夕はつねよりも旅の空こそあはれなれなど
うちながむるを。侍従に聞なして。あなあさま
しとむね打さはぎて。聞なしにやとて。心をと
どめき給へば。

たつねへき人もなききの住の江に誰まつ風の絶すふくらん
とうちながむるをきけば姫君なり。あなゆゑ
し。佛の御しるしはあらたに申ぞとうれしく

て。すのこにたちよりてうちたゝけば。いかなる人にやとて。侍從屋がきよりのぞけば。すのこによりかゝりたるすがた。夜めにもしるく見えければ。あなあさまし。少將どののおはします。いかゞ申べきといへば。ひめ君。哀にもおぼしたるにこそ。さりながら人聞きぐるしかりなん。われはなしと聞えよとあれば。侍從出あひて。いかにあやしき所までおはしたるぞ。あなゆゝし。其後ひめ君をうしなひ奉りてなぐさめがたさに。かくまでまどひありき侍になん。見奉るに。いよ／＼いにしへのこひしなどいひすさびて。哀なるまゝに。なみだのかさくれて物もおぼえぬに。中將もいとゞもよほすこゝちぞし給。侍從の君の事をば忍びこし物を。うらめしくもの給ふ物かなと。御こゑまで聞えつるものとて。じゃうえの御袖を顔にをしあて給ひて。うれしさもつらさもな

かばにこそとの給へば。侍從ことばりにおぼえて。さるにて。（も御やうな候へ。都へ事もあかしにて）あま君にいひあはすれば。有がたき事にこそ。たれも／＼物の哀をしり給へかし。まづこれへいらせ給ふべきよし聞え奉れといへば。侍從。なれ／＼しくなめげに侍れども。そのゆかりなるこそ。たびはさのみこそさぶらへ。たちいらせ給へとて。袖をひかへて入けり。かみびやうぶにやまとゑかきたる一よろひたてゝ。もやのみすにくちきがたのきやうかたびらかけて。いとあるべかしくしつらひたり。いとうつくしきあしにつちつきて。所々ちうちあへて。かほさきあかみてくるしげなる御すがたをみて。あま君いそぎ出て聞ゆるやう。ひめぎみもこれにおはしますになん。侍從あはれとは見奉りながら。わかき物にて。うちはなちに申けるにこそ。あまはうれしきにもつらきにも。ならひてすぎたる身に

て侍れば。忝くあはれにみ奉る。あなゆゝし。いかでかをろかにはとて。ひめ君に此よしを聞ゆれば。われもをろかならずながら。都の聞えつゝましさにこそとの給へば。それもことばりながら。よろづことのやうにこそよれ。人よしあし知ぬものの。心なき岩木なれども。これほどの事にはゆるぎ侍ものを。いまはこのあまをおもくおぼしめさば。申さんまゝにおはしませ。さなくばうみ河にも入なんといひこしらへて。侍従に。たゞひめ君のおはします所へぐし參らせよといへば。侍従。中將にこのよし聞ゆれば。ともかくもとて。うれしげにぞおぼしける。夜ふくるほどに侍従さきにたちてしるべしつ。さてもうちふすこともおはしまさずして。はじめよりの事どもかきくどきつつ。なくくの給けり。夜もあけ日も出るほどに。ひめ君をみ奉り給ひければ。さが野にてみ

しよりもさかりとみえて。ねくたれがみのおぼめきて。なつかしさいふもをろかなり。かくしつゝ二日三日にもなりしかば。そのわたりにもつかうまつりし人あまた有ければ。をのづから聞つけてぞをのゝ參りあへり。さびしき所ともなく。松のもとにて酒のみのゝしりあひければ。そのあたりの物どもおどろくほどなりけり。かゝる程に。京には中將どののたゞひとり住よしえ參り給ひぬと聞て。關白どの歸りたるものをば。ずいじん所へくだされにけり。さてゆかりある人々。さゑもん（さゑもん）のすけ。くら人の少將。兵衛のすけどのよりはじめて四位五位など。そのかずすみのえに尋ね行給て。いみじくおぼつかながらせ給ふに。いかになどいへば。じげんによりてこれに侍つるほどに。お（お）はすに此あたりにあるものにみつてなどの給へば。神佛へ參てはおこなひをこそすれ。ゆ

ゆしき御つとめかなとて。たはぶれてうちわ
らひ給て。うれしくこれまで尋給へり。なには
わたりもかゝるつゐでなくばいかでか御覽ず
べきとの給つゝ。夜ふくるほどに。住のえに月
さやかに沈みわたりてまつ風浪のおとにたぐ
ひつゝ。あはぢ嶋までかよひて聞ゆるさま。此
よならずおもしろかりければ。人々すみのえ
にてあそびたはぶれ給へり。三位の中將こと。
藏人の少將ふえ。兵衛のすけしやうのふえ。さ
へもんのすけ歌うたひ給けり。姫君侍従。あま
君などこれを聞て。はるゝ心ちぞし給ひける。
さて夜明ければ。あまどもめして。かづきせさ
せて見給へり。さてその日京へのぼらせ給ふ
とて。いとことゝしかりけり。ひめぎみをば。
ゐ中人のむすめとてあひぐし奉り給ふ。ひめ
君をば。あま君心やすくみたてまつりながら。
此程の名ごり申ばかりなし。あま君にはいづ

みなる所あづけられれど。（はい）ゆくすゑの事は
おもはず。たゞあのひめ君の御事のみぞおも
ひ侍つるほどに。今はよみぢやすくとてをく
りて。うれしき物からはなれ行もさすがに哀
れなり。とにもかくにもおつる涙かな。佛にな
りなんのちぢやとどまるべきとてくどきけ
る。ひめ君も。なにとなく二とせまで住し所。
はなれゆくこそあはれなれ。あま君もいかに
ならひて。こひしくかたはらさびしくおもは
んなど。侍従に聞えあはせて見返給ひければ。
やう／＼遠くなり行ほどに。一むらのたえま
より。松の梢はるかにみえければ。

佳吉の松の梢のいかならんとをさかるまで袖の露けき

とおもひつゞけられける。かくしつゝ河じり
をすぐれば。あそびものどもあまた舟につき
て。心からうきたる舟にのりそめてひとひも
なみにぬれぬ日ぞなきなどうたひて。よどま

でぞつきにける。さても京へのぼりつきて。とのに參給へば。あやしきありきむづかりながら。北の方をしつらひてすませ給ひける。まゝはゝこれを聞て。中將どのはあやしきゐ中人のむすめをこそすみ給ひけれ。あたらしきゐ人などむくつけ女にいひあはせてそねみゐたりける。中納言月日のかさなるまゝにおもひのみまさりて。今一たびもとのすがたにてあひみんとおもふ心のつれなさよ。かくてのみあかしくらすになどおぼす程に。としのほどよりもことの外におひをとろへて見え給ひけり。まゝはゝこれを見て。ひめ君はたちぬる月とかや。あやしの法師にぐしてこそおはしけれ。たしかに人のつけ侍しなりと聞ゆれば。いみじき人のことも。此姫君ばかりはおぼえず。いかにしてもたいらかにてだにもあらば。うれしきことにこそ。たれ人のいひけるにか。尋ね

あひていきたるをり。今ひとたびみて。しでの山ぢをもやすくこえん。うれしくの給ひたりとの給ひければ。いとなんうげにて。まことや。たそおもひ忘れてなどいへば。むくつけ女。あの物さぶらふぞかしなどいひける。中納言こゝろづきなしと思ひてなん。あみだ佛くとぞ申ける。さて姫君は。かくて侍とだに中納言どのに申さばや。（このたまへば。中將まゝはゝむくつけ女にたれば。）心あはせたりとて。神佛にものろひ給はんには。たがためもいとおそろしき事なり。住よしにおはせば。さてことぞやみなましか。これはつゐに聞え給はんずれば。心やすくおぼしめせとの給へば。姫君。おぼしなげくらんことのかなくして。よにすむかひなくてとの給へば。まことにことはりながらも。たゞ申さんまゝにておはしませとて。二條京極なる所にわたり給ひけり。あかしくらし給ふほどに。ひめ君過にしとしの十月より御

け色ありて。又のとしの七月にいとうつくしきわか君いでき給へり。中將おぼしかしづき給事かぎりなし。かうしつゝ過行程に。中將はねがはざるに中納言になり給ひて。やがて右大將に成給ひけり。中納言は大納言になりて。あちかけ給へり。ともにうちへ参りあひて物語のつゐでに。老おとろへてこそみえさせ給へとあれば。大納言まづうちなきで。まことにこれにてしらせ給へ。心になはぬ物のいのちにて侍かな。かくてもいきてさぶらふとて。人めもつゝみ給はざりけり。大將このつゐでにやいはましとおもひながら。猶おもひ返してそゝろに涙ぞもれ出ける。さて歸りたまふまゝに。かくなどかたり給へば姫君も侍従も。おやばかり子はおもはぬ物ぞとつねはおほせられしことのはかな。かやうにおほくのとし月をすぐしなから。かくともきこえ奉らで。お

ぼしなげかせ給ひつる。いかばかり神佛もにくしとおぼすらん。あはれ女の身ばかりうらめしき物とはとて。よにつらげにの給へば。大將。まことにことはりなり。をさなき物も出きたれば。われもいかばかりかはみせ奉らまほしけれども。此をさなき人までもおそろしさにこそ。さりながらしらせ侍るべきこともちかく成たり。しばしまたせ給へなどこしらへ給けり。かくしつゝ過行ほどに。ひかるほどの女君いでき給ひけり。おもひのまゝなれば。おぼしかしづき給ふ事かぎりなし。かやうになきみわらひみあかしくらすほどに。わか君七。ひめぎみ五までになり給ひけり。八月はかまぎといふことせんつゐでに大納言どのはしらせ奉らんとおほせられけるほどに。大將殿も大納言どのも内にまいりあひて。又まづ物ごたりのつゐでに。八月十六日におさなき物ど

もに。はかまぎ仕らんとおもひ侍るに。ことさ
ら申さんとの給へば。大納言かしこまつて。承
はりぬ。さりながらも。さやうのことにまがま
がしき身にてなごきこゆれば。いかにおも
ひはからいて申なり。かならずとの給へば。と
もかくもおほせにこそとて。その目にも成て。
ゆかりあるかんだちめ殿上人など参りあへり。
大納言もすこしひくるゝ程に参り給へり。よ
ろづにあるべかし^{へい}くて。くら人づかさのもの
など参りあひて。いとことぐしきさまなり。
ときにも成ぬれば。大將。大納言のなをしの袖
ひかへてうちへ引入給ぬ。もやのみすのまへ
にしとねしきてすへ聞えたり。ひめ君侍従ち
かくよりて。木丁のほころびよりのぞけば。い
かばかりかなしかりけん。わかくさかりにお
はせしすがたの。あらぬさまにおとろへて。か
みは雪をいたゞき。ひたひにしかいのなみを

たゝみ。まなこは涙にあらはれてひかりすく
なく見え給へり。あなあさましゝとふしま
ろび給ひけり。さてわか君ひめ君いだして。は
かまのこしゆはんとてうちみつゝ袖をかほに
をしあてゝうつぶし給へり。やゝ久しく有て。
をきあがりての給ふやう。いはひの所にはま
がまがしとは。さればこそ申かし^{てい}物を。姫ぎみ
の御ありさまの。わがうしなひておもひなげ
くむすめのおさなかりしにたがはせ給ふ所な
く。そのむかしさへおもひ出てとて。忍びかぬ
つるになん。ゆるさせ給へとてむせび給へり。
これをきゝて。ひめ君。侍従。こゑもたてぬべ
き心ちぞし給ける。涙の色はうちぎのたもと
に。くれなゐぞめの心ちするまでぞなりにけ
る。大將これを見給ひて。涙もせきあへず。み
とみ聞と聞人。心あるも心なきも。涙ながさぬ
はなかりけり。さて事どもはてぬれば。人々に

引出物さるべきやうにし給ひける。其内に大納言どのは。こうちぎのなめら^{つゝ}かなるを奉りたれば。あやしなからかたにかけてかへり給ひぬ。大納言かへるまゝに。まゝはゝにむかひて。大將のわれをむつまじき物におぼしてもてなし給ふ。うつくしかりつるわか君ひめ君かな。あれをわがまごどもとおもはゞ。いかにうれしからん。^(マリー)お中人のむすめなれども。さはいはいある人かな。さてもそのひめ君の。わがうしなひておもひなげくひめ君のおさなかりしに。さも似給へるよ。あはれつねに見奉らばやとの給へば。まゝはゝ。三のきみのもとへをせし人なれば。そのゆかりとてむつび給ふこそ。哀れその子たちを三の君の中にまうけ給たらば。こゝかしこのためにめやすかりなむ物を。あたらし人などいへば。むくつけ女。關白殿は。げすばらの子なればとて。もてなし給

はぬとぞいひける。大納言どのはこうちぎのふりたりつるをあやしとおもひて。とりよせてみ給へば。たいの君にさせはじめし時のうちぎに似たり。おいのひがめやらんとて。うち返しうち返しよく見給へば。たゞそれにて有ける。そのときにむねさはぎて。いかにしにかもち給へば。我にしもえさせ給へるもあやしとて。たゞざうしき二三人ばかりぐして。大將のもとへをはして。しんでんのすのこに給へり。大將いそぎ出給ひて。あしくにこれへとあれば。大納言申されけるは。申しづるにつけて。よにおこがましくなめげに侍れども。よろづになつかしくをはしませば。参りつるなり。ゆるさせ給へとて。きのふ給はりたりしこうちぎの。我うしなひて候し物。おさなくてさせせめしうちぎにて侍るを。老のひがめにや侍らん。わが心にかゝるまゝに。人めもしらず

はしり参りつるなりと申されければ。此よし
ひめ君聞給ひて。いま／＼と待る給ひければ。
大將の給ぬさきに。ひめ君。侍従。いそぎいそ
ぎ出て。なみだにくれてものをだにいひ給は
ねば。大納言これを見て。心もきえかへる程な
り。いかに／＼とあきれ給へり。やゝ久し
くありて心しづまりて。大納言。ひめ君をばそ
むきて。侍従にむかひてくどき給ふやう。ひめ
君こそあやしのをやとて。とてもかくてもと
おぼして音づれ給はざらめ。そこをばいかば
かりかはおもひ聞えし。今まで命つれなくて
めぐりあひ侍ればこそ。けふはげざんに入。お
もひ消なましかば。後の世までも思ひにて。よ
みぢのさはりともなりなましか。わがなれる
さま岩木ならずば見給へかし。あなゆゑしの
人の心や。たゞ命のみこそうれしけれ。あかし
くらしがたくてつもりし月日。いくら程まで

なりぬとかおもひ給ふ。哀れ／＼人のおもひ
はなる物とてうちなき給へり。大將。ひめ君。侍
従。をの／＼はじめよりおはりまでの事ども
かきくどきつゝかたり給ひて。をろかならぬ
よしの給ひける。時によの有さま。むかしも
今もかゝるためしありがたくぞおぼえける。
さて日くれぬれば。大納言かへり給ひて。まゝ
はゝにの給やう。いでやたいの君にたづねあ
ひて侍りつる。まことにあやしの法師にぐし
て。ひんがし山におはしけるとて。たゞうきは
ながらふべくもなしとて。まゝはゝ。あなうれ
しやな。いかやうにてをはしつるぞ。こまかに
の給へ。おぼつかなきにといへば。いかなる人
のうとまじきことをたばかりにけるにか。お
もひあまりて住吉までまよひゆきたりける
を。大將殿の物まいりのつゐでにもとめあひて。
とし比ぐしてをはしましけれども。世中のむ

くつけさにはゞかりて。かくともの給はざりけるぞや。あやしの法師にゞしてありしにや。よく／＼聞給へとありければ。さて／＼とて。くちうちあきて。めしばたゝきて。かほあかくなして。いひやるかたもなくてそゞろきぬたり。中の君。たいらかにておはしましける事のうれしさよとてよろこび。あはれ／＼とく見奉らばやとて。おやながらもうとましくぞおぼされける。大納言よろづくどきたてゝ。身にそふべき物のくはゝりぐして。心うきよにはまじろひも物うしとて。ひめ君のはゝ宮の三條堀河なる所へぞわたり給ひける。大將此よしをきゝ給ひて。いかに。さぶらふまじき事なり。たゞもとのやうにてをはしますべきよしの給へば。大納言殿申されけるは。あさましくまどひありきけん物を。とりをき給ひてみせ給へば。このよならず。くびめすともいなみと

もおもふべきにあらず。これはいかにの給ふ共かなふまじきよし申給。ひめ君もまめやかにとゞめ申給へども。聞入給はでわたり給ひければ。三條へさま／＼の物ども奉り給ひて。人々も参りあへり。さてもひとりおはすべきにあらず。いたはしきとて。大將のをばに。たいの御かたと申人にぞすませ給ひける。そのむかしたいに住ける人々。さながら大將のもとに参りて。よろづ過にしかたの事どもかたり出て。なきみわらひみあかしくらしける。其中にも心よせのしきぶはまたなき物にぞおぼしける。關白殿よりはじめて。よろづの人々。お中の人のむすめとしり給へる程に。はやあぜちの大なごんどの宮ばらの御むすめとて。さもありがたきなからひとて。人々もいひあひけるとかや。此ことを聞て。兵衛のすけ中の君ともかれ／＼にけり。さるまゝに中の君も

(ななり)

おやながらうとましとぞ思ひける。されば人の遠ざかるもことはりなりとて。ふたりながらねをのみぞなき給ひける。ひめ君此よしを聞給ひて。むつまじかりし人なればとて。むかへ奉りて。過にしかたのよのふしぎなる事どもかたらひ。あかしくらし給ひける。大將もよき事とて。大事のことにぞ思ひ給ける。とし月ゆく程に。大將どのにはち、關白ゆづり給ひぬ。いよく、すゑの世たのもしくぞ侍りける。

わか君はげんぶくせさせ給て。三位中將とぞ申ける。ひめ宮は十八にて女御に參り給ひける。侍従はおとな女にて。よろづに大事の人にぞ思はれて内侍になりぬ。見聞人うらやみあへり。大將。ひめ君すゑまではんじやうして。めでたくぞおはしける。さてまゝは、見きく人々にうとまれ。あさゆふはねをのみなき給ひて。世中おとろへて。つゐにはかなくなり給

ふ。むくつけ女は。あさましきありさまにて。まどひありきけるとかや。むかしも今も。人にはらぐろなる人はかゝる事なり。これをみさかむ人々は。かまひて人々よかりぬべきなりとぞ。

右住吉物語以活板井屋代弘賢本按合

群書類從卷第三百十一

物語部五

秋の夜の長物語

それ春の花のじゆとうにのぼるはじやうぐ菩提のきをすゝめ。秋の月のすいていくだるはげけ衆じやうのさうをあらはす。天いふことなくしてはぶつとみなこれをしめす。人ころありては何つとめざらんや。もし人ありて。にんげむの八くをみて。さいどをいとふ時は。ぼんなふ即ぼだいとなる。天上の五すいを聞てじやうどをもとむる時はしやうじすなはちねはんとなる。かるがゆへにしよぶつ菩薩。しゆつぎやくのけだうをたるゝ。つみあるをばじやよりしやうにいれ。えんなきをばあく

よりぜんにおもひかしめ玉ふ。なにをもつていふとなれば。きやうろんのしよせつしよてんにのするところしげければ。申にこと葉たらず。ちか比みにふれ。ことのあまりに哀にもたつとかりしかば。めんくに枕をそばだてたまへ。老のねざめに秋の夜の長物語ひとつ申侍らん。後堀河の院の御宇に。西山のせんさい上人とてだうがくけんびしたりし人。もとはほくれいとうたうのしゆとに。くはんがくゐんのさいしやうのりつし。けいかいといふ人にてぞおはしける。うちにはぎよくせんのがれをくんで四けふ三くはんの月をすま

し。外にはくはうせきがみちをふみてなうさ
はいすいの風をかゝげたり。ある時はにん
くの衣の袖にせつしゆのじひをつゝみ。ある
ときはざいぶくのつるぎのやきばのうへにふ
んぬのゆゑいをふるふ。誠にしんぞくのいる
ひ。ぶんぶのたつじんなり。けいねんのころ。
花のちる春のくれをみてねぬ夜の夢やさめた
りけむ。こはそも何ごとぞや。われたまゝくぞ
くぢんのきやうがいをはなれて。しやくしの
門室に入ながら。あけくれはたゞみやうもむ
りやうにのみして。しゆつりしやうじのつと
めにをこたりぬる。あさましかりけることか
なとおもふ心いできにければ。やがて山より
やまのおくをもたづね。柴のいほりのしばし
ばかりのかくれがをもむすばやとおもひけ
るが。さすがにふるきゑんのつなぐ所は。人ご
とにはなれがたきならひなれば。いわうさん

わうのけちゑんもすてがたく。堂坊どよりよ
のわかれもさすがになごりをしかりければ。
こゝろばかりにあらまして。いたづらに月日
ををくりける。その心のうちになごき。ことば
のほかにあらはれけるにや。てうくほみふう
ぢんのそこしつきやくしては。あやまつて三
十年生ず。いづれの日かにんげむゑいじよく
のまなこ。ゆうぜんとしてはせんしゆかんう
んにねぶるらん。これほどにおもひたちぬる
ことのかなはぬは。いかさまじやまげだうの
われをさまたぐるにや。さらばぶつぽさつの
おうごをたのみて。此願をじやうじゆせんと
おもひて。石山にまふでつゝ。一七日があいだ
は五たいを地になげて。一心にまことをいた
して。だうしむけんごそくせうむじやうぼだ
いとぞ祈りける。七日まむじける夜。らいばん
をまくらとしてすこしまどろみたる夢に。に

しきのとちやうのうちより。ようがんびれいなるちごの。いはんかたなくみえたるがたち出て。ちりまがへる花の木陰にやすらひたれば。あを葉がちにぬひものしたるすいかんの。ゑむざんに花ふたゝびさきて雪のごとくにふりかゝりたりけるを。袖につゝみながら。いづちへ行ともおぼえぬに。くれゆくいろにきえてみえずなりぬとみて夢はさめぬ。これすなはちしよぐはんじやうじゆのむさうなりと嬉しくおぼえて。まだしのゝめもあけぬまにたちかへりぬ。よそよりきたるべきものをまつやうに。今やだうしんおこるとまちいたれば。なを山深くすまばやとおもひしこゝろはわすれて。夢にみえたるちごのおもかけ。時のほども身をはなれず。りつしもまことのうつゝならねば。せんかたなきおもひにたへかねて。さてもやもしなぐさむと。一つの香をたきて

は佛前にむかへば。漢の李夫人返魂香のけぶりにむせびて。みをこがしたまひし武帝の御おもひもみにしられ。くら山の花ほころびてうんていによれば。巫山の神女が雲となり雨となりし夢のちのおもかけに。たづきもしらずなげきたまひけんやうだいの御涙もよそならず。山王のしんたくに。我一人のしゆとをうしなふは。三尺のつるぎをさかさまにのむにことならずとかなしみたまひしかば。われらがりんをいかさまさんわうのおしみおぼしめして。だうしんをさまたげさせたまふにや。たとひさやうのしゆりよなりとも。いのちいきてこそほつとうのたいふうにむかふところをもさまたげんずれ。くれまつほどの露のみもあらじ。いまはとおもひわびけるが。石山の観音をこそかこち申さめとおもひて。又いし山へこそまふでけれ。三井寺の前を過けるに。

ふるともしらぬ春雨の。かほにほろ／＼とかりければ。しばらく立よりはれまをまたむとおもひて。こんだうのかたへ行程に。しやうごゐんの御房の庭に。老木の花のいろことなる梢。かきにあまりてみえし。はるかに人家をみれば。花あれば則入といふ詩のこゝろにひき入られて。門のかたはらに立よりたれば。よはひ二八ばかりなるちごの。すいぎよかんにうすくれなゐのあこめかさねて。こしのまはりほけやかに。けまはしふかくたをやかなるが。人ありともしらざるにや。みすのうちより庭に立出て。ゆきおもげに咲たる下枝の花を手折て。

ふるあめにぬるともおらん山櫻雲のかへしの風もこそふけとうちながめて。はなの雫にたちぬれたるてい。これも花かとあやまたれて。さそふ風もやあらんとしづこゝろなければ。おほふ計の袖

もがなと雲にも霞にもかすべきこゝちなどしけるに。心なき風の門のとびらをきり／＼とふきならしたるに。あくる人あるやとあやしみて見やりて。花を手にもちながら。かゝりのもとをめぐりてはるかにあゆみけるに。みるぶさのごとくにてゆら／＼とかゝりたるかみのすぢ。柳のいとにうちまとはれてひきとゞめたるを。ほれ／＼と見かへりたるめつき。かほのにほひはかりなきやう。ゆくゑなくわれをまよはしつるゆめのたゞちにすこしもたがはねば。いまのうつゝにみし夜の夢はうちわすれて。日くれけれどもゆくべきかたをもあぼえず。その夜はこんだうのゑんにひれふして。よもすがらながめわびぬ。

これや夢ありしや現わきかねていつれに迷ふ心なるらん夜あくれば。又きのふの所に行て。御坊のかたはらにたゞずみたるに。わらはのいときよげ

なるが。ぬきすのしたの水すてんとて。門の外まで出たり。これやきのふのちごのわらはなるらんとおもひて。立よりつゝ。ちと物申候はんといへば。なにごとにて候やらんとて。ことのほかなるけしきもなし。りつしうれしく思ひて。きのふ此ゐんにすいぎよしやのすいかんめされて。御としの程十六七ばかりにみえさせ玉ふおさあひ人の御ことやしりまいらせ給ふととへば。わらはうち多みて。我こそその御かたにめしつかはるゝものにて候へ。御なをば梅若君と申候。御さとは花ぞのの大臣どのにて御渡り候。御心わくかたなく。いつはりのあるよとだにもおぼしめされぬ程の御ころ。あてにて候へば。一寺のらうそうじやくはい。春にをくれたる一本の花をみてはよそにちるころもなくなり。秋の月のくまなきにはみな我家のひかりをあらそふふぜいにて候

を。この御所の御ありさま。あまりにゆるすかたなく御座候ほどに。くはんげむすか（しぜ）のむしろならでは御出も候はず。たゞいつとなくふかき窓にむかひては。詩をつくり歌をよみて。日をくらし夜をあかさせたまひ候ぞやとぞ語りける。聞につけてもいとどころもうかれぬれば。やがてこのわらはをたよりにて。つばの石ぶみつてにても心のおくをしらせばやとおもへども。あまりにひたゝけたらんもさがなれば石山へまいりつゝ。又わが山へぞかへりける。りつしは夢かうつゝかのおもかげに。おきもせずねもせでなげきくらしおもひあかしけるが。しやうごゐんの御ばうのへんに。むかししりたりし人のあるをたづねいだして。ある時は詩歌の會にことよせ又ある時はしゆえんにけうじたるていにて。一夜二夜をあかすことたび／＼に成にけり。そののちさき

わらはをかたらひよせて。茶をのみ酒をたゝ
へてあそびけるついでに。こがねのうち枝の
たちばなにたきものをいれて。ねりぬき。から
あや。ふせんれう。いろ／＼の小袖十重ねをく
りたり。わらはもはやこゝろざしのふかきい
ろをみて。よろづこゝろをへだてぬさまなり
けり。さて梅わかぎみにおもひまよへるこゝ
ろのやみ。いつはるべしとおぼえぬよしを
かたりければ。先御ふみをあそばしてたまは
り候へ。やがて申て見候はんとぞ申ける。おも
ふこゝろをつくす程のことの葉は。いかにく
ろみすぐるともありがたければ。うた計にて。
しらせはやほのみし花の俤に立そふ雲のまよふ心を

とかきてをくりける。わらは文をふところよ
り取出して。これ御らん候へ。いつぞや雨のた
へまの花の陰にたちぬれて御わたり候ひける
を。ある人ほのかに見まいらせて。人しれずあ

もひそめたる袖の色も。はやくれなるにふか
くなりて。なくばかりにつゝみかねて候やう
にみえ候ぞやとかたれば。梅若ぎみかほうち
あかめて。文のひぼをとかむとしたまひける
ところに。しゆつせなるなにがしの僧都とや
らんいふ人の。みすをかゝげてうちへ入に。見
せじとて袖のうちにをしかくせば。わらはび
んぎあしと。ひまをまちて日くるゝまでしこ
うしたるに。しよゐんの窓より御返事かきて
たびたり。わらは手もかるくうれしくて。いそ
ぎもちて行たるに。りつしめもあやによりこ
びて。まことに身もあられぬさまのていなり。
ひらきてみれば。ことばはなくて。

頼ますよ人のこゝろの花の所あたなる雲のかゝるまよひは
りつしこのへんじを見て。こゝろいとどうか
れしかば。さらにたちかへるべき心もせず。あ
ひ見ぬさきのわかれだにもせんかたなくおぼ

えしかば。しばしあたりのやどになをもとどまり。よそながらそなたの梢をもみつゝくらさばやとはおもへども。あまりにそれもひ(た)いたれたれば。又こそ参り候はめ。うれしくもかよふこゝろのしるべとならせたまひぬるものかなと。わらはにいとまこひつゝ。りつしやまへかへりけるが。一あしあゆみてはみかへり。二あしあゆみてはたちとどまりしける程に。春の日ながしといへども。程ちかき坂本のさとはうまで行つかで日くれにければ。とつへんにありけるはにふのこやにぞとどまりける。夜もすがらおもひあかして。あしたになれば。山へのぼらんとて庭まで出たれども。ちびきのなはをこしにつけたるがごとく。われならぬこゝろにひきとどめられければ又引かへして大津のかたへぞあこがれ行。雨しめやかにふりければ。みのかさうちきて。旅人のすが

たに身をやつしつゝ行ところに。からかささしかけたる馬のりのみちにてゆきあひたり。たれなるらんとみやりたりければ。梅わか君のなかだちせしわらはにてぞありける。りつしをみて。あなふしぎや。申べきことありて。しらぬ山までもたづねまいらんとしつるに。うれしく参りあひたるものかなとて。馬より飛おりて。りつしが手をとりにて。かたはらなるつじだうへぞたちよりける。さて何ごとにかととへば。わらはは。ふところより色にこがれたるもみぢがさねのうすやうに。てさへくゆるばかりなる文をとりいだして。いかなる山にみちまよふとも。きゝしばかりをしるべにて。たづねてまいれとおほせさぶらひつる。けしからずの御心まよひぞや。まして一夜のうちの御袖のうへ。さこそはつゆのたはぶれとうちわらへば。りつしも。せめてわかれをなげく

身とならでとたはぶれかよはして。ふみを見れば。

いつはりのあるよとしらて契けむわか心さへ恨めしのみや御所のかたはらにしりたるしゆとの坊の候へば。それにしばらく御座候て。御すだれのひまをも御こゝろにかけられ候へかしと。わらはしきりにいざなへば。おもふかたにこゝろひかれて。りつし又三井寺にゆきぬ。わらはしはしの程やかかりて。あるばうのがくもむじよにをさければ。そのばうずもねんごろなるさまにて。いろ／＼のいとなみなどありて。つねにはちごどもをあまたいだして。くはんげむをし。ほうへんのうたあはせなどして日ををくりける。りつしはしよぐはんのことありて。しんら大明神に七日さんろうするよしをいひて。よるになれば。ぬんけのかたはらに立まぎれて。つきやまの松の木かげ。前栽の草のそこ

にかくれてゐたるに。ちごもはやこゝろへたるけしきにて。人めもがなとながめたるやうなれども。かなはで出かねたるこゝろづくし。見るも中々くるしければ。よしやたゞよそながらみるばかりを。わが身にある契にて。人のなさけをこそいのちにせめとおもへば。あしはやく行てはかへり。かへりては行。よなく日かず十日あまりにも成にけり。いつまでもと人はいへども。ながめせんこともさすがなれば。あくるひはわが山へかへりなむとおもひけるところに。わらはきたりて。こよひこそあの御所へ。さやうよりさやく人御入候て。御酒宴にて候つるに。もんしゆもいたく御忍ひ候へば。ふけすぐるまでかへられてしこうせられよ。これへしのびやかに御いり候べしと仰せられ候つるぞ。門さゝで必御待候べしと。いそがしげにいひすてゝ歸りけり。りつしこ

れを聞て。こゝろつかれみだれて。いづくにあ
るわがみともおぼえず。更行かねのつくく
と。月のにしにめぐるまで侍かねたる所に。か
らかきの戸を人のあくるをとするに。書院の
杉障子よりはるかに見いだしたるに。れいの
わらはさきにたちて。ぎよなふのちやうちん
に螢をいれてともしたり。その光かすかなる
に。このちごさんしやのすいかんなよやかに
うちしほれたるていにて。みる人もやとかゝ
りのもとにやすらひたれば。みだれてかゝる
あをやぎの。いとゞいふばかりなきさまにみ
えたるに。りつしいつしかこゝろたよ／＼し
くて。ある身ともおぼえず。童ちやうちんをさ
そうの軒にかけて。書院の戸をほと／＼とた
たきて。是に御わたり候やらんとあんないす
れば。律師いふべきかたをもしらで。ちとかた
はらにみをそばむるけしきにて。あるよしを

ぞしらせける。わらは又庭にたちかへり。はや
御いり候へと申せば。ちごは先だつてつまど
をならす。その袖のうつりかも身にふるゝば
かりよりそひて。うちかたぶきたれば。せんけ
んたる秋のせみのはつもとゑひ。(ゆき)ゑんてんた
るかいのまゆずみのにほひ。花にもねたまれ
月にもそねまれぬべきものかほばせち
のこゑ。ゑにかくとも筆もをよびがたく。かた
るに言葉なかるべし。なみだとともに枕をか
はしまの水のながれもたへず。猶ちぎるべき
むつごともまだつきなくも。聞さむくしてら
んふうのゆめさめ。れんりの花わかれてとゞ
めがたければ。しののをささの一ふしに。あけ
ぬとつぐる鳥の音もうらめしく。をのがさぬ
ぎぬひやゝかに成てたちわかれなどするに。
あけがたの月のまどのにしよりくまなくもさ
し入たれば。ねみだれがみのはら／＼とかゝ

りたるはずれより。眉のにほひほけやかに。ほ
のかなるかほのおもかけ。色ふかくみゆるさ
ま。わかれてのちおもかけに。又あふまでを待
ほどのいのちあるべしとおぼえず。律師は
ちごをおくりて。あか月出たりつるまゝにて。
いまだうちへも入もせず。門のからいしきの
うへに立かねてゐたるところに。わらはきた
りて。御文とてさしいだしたり。あけてみれば。
さしもおほからず。

我袖にやとしやはてむ衣々の涙にわけし有明の月
りつし書院にかへりて。返歌。

ともにみし月を名残の袖の露はらはて幾夜歎きあかさ
りつしは夢うつゝかとだにもおもひもわかざ
りつる儚を。身にふれそへつる袖のうつりか
を。わがものからかたみにて山へかへりたれ
ども。こゝろしほれ玉しゐうかれて。よろづの
人の物云こともへんじもせず。おぼえぬ涙人

めにあまりて。おさうべき袖もくちはてぬべ
ければ。ちといたはること有と披露して。人に
たいめんもせず。ふししづみてぞ日をおくり
ける。わらは此よしをつたへきゝて。梅若ぎみ
にかくとかたり申ければ。わか君も。まことに
なくこゝろぐるしきことにおもひくづほれ
て。御けしきつねよりもうちしほれ玉ひぬ。い
まもやをとづれあると。しばしはこゝろにこ
めてまちたまひけるが。あまりに日のひかずふり
ければ。わらはをよびよせて。さてもありし夜
のゆめのたぐちもうつゝすくなきに。おどろ
かすたよりもなくてほどへぬれば。たがた
のつらさにならでは。そのまゝにやがて遠ざ
かるべき。風のこゝちとやらんきこえしかば。
露のいのちもいかゞなりぬらん。もしけかな
く成なば。なからん跡をとひてもそのかひな
し。いかならむ山のおく成とも。たづねゆかば

やとおもへども。申をくことなくてまかりなば。もんしゆの御こゝろもさこそとおもはれて。それもかなはず。行衛もしらぬあだ人の。ただいひすてしことのはをまことがほにて。われにこゝろをつけしもたがせしわざぞや。いまのほどにもわれをしるべして。いかなるとらふすのべなりとも。たづねてゆけとかこちたまへば。さすがにまだいとけなきあだしごころにて。又なく人におもひつきぬるは。わするゝわざもなきならひなれば。げにことはりやとわらはおもひしりて。その人のありどころをば。くわしくうけたまはりて候へば。御とも申候はむ。御所のぎよいあしく候はむ。のちに何とも申させ給ひ候へとて。ちごとわらはとたゞ二人。行べきかたをもしらずたち出にけり。きみはもとよりも三たいきうきよくの家にもまれて。かうしやしつばの中ならでは。

かりにもいまだでいどをあゆみ玉ふことなれば。こゝにやすみかしこにたちとどまり。さらにあゆみかねさせ給ひけり。童あまりのいたはしさに。哀天ぐばけもの成とも。われらをとりにひえの山へのぼせよかしといひて。唐崎の松の木陰にてやすみゐたるところに。年のいとたけたる山伏の。四はうごしにのりたりけるが。こしをまへにかきすすませて。これはいづくよりいづちへ御わたり候やらんといひければ。わらは。ありのまゝにこたへける。山伏こしよりおりて。我こそ御たづね候房のとなりへまかりのぼるものにて候へ。あまりに御いたはしく見まいらせ候へば。われはかちにてあゆみ候はんと。此こしにめし候へとて。ちごとわらはをかきのせて。りきしや十人鳥のとぶがごとくに行けるが。ばうくたるこそすいのうへ。まんくたる雲かすみの

中をわけて。片時のあいだに大嶺のしやかの嶽と云ところへぞかきもてゆきにけり。こゝにばんじやくをたゝへたる石のろうの中をしこめてをきたれば。月日のひかりもみえず。夜ひるのさかひもなし。だうぞくなんによのかずありとおぼえて。たゞなくこゑのみぞきこゑにける。その夜よりわかぎみうせさせたまひたることたゞごとならずと。もんしゅおほきに御歎ありて。いたらぬくまもなく御たづねありけれども。その行衛いづちへともしりたる人さらになかりけるところに。東坂本より大津へとをるたび人のありけるが行あひて。さやうのおさあひ人。わらは一人めしぐして。きのふの夜のいぬのくばかりに。からさきのかたへこそ御わたり候しかとぞかたりける。さては此あいだれんくしのびていひかよはすりつしの有ときこえしが。いかさまと

りてけるとて。ゐんけのうちは申にをよばず。一時のしゆとうつたつことなのめならず。山もんへよせんずることはかなふべからず。ちちのおとゞもしりたまはぬことはよもあらじ。まづ花ぞののさふのていへをしよせてうらみ申せとて。御もんとの大しゆ五百よ人は。はくちうにさふのてい三でうきやうごくへをしよせて。一つものこさずやきはらふ。をんじやうじのしゆと。これにてなをいきどをりをさんぜず。一山一同せんぎしけるは。じもんのちじよくこれにすぐべからず。しよせん此ついでをもつて。當寺にじやうくはくをかまへ。三まやかいだんをたてば。さんもむの大しゆさだめてをしよせんずらん。これすなはち地の利につきてかたきをほろぼすはかりごと。又はじやしうをしりぞけて。かいほうをひろむる道たるべし。天こゝにときをあたへたり。

しばらくもとどこほるべからず。一み同心のしゆと三千よ人。によいごえを所々ほりきり。ふもとにさかもぎをひき。しゝがきしげくゆひまはして。三まやかいだんをぞたてられける。山門にはこれをきゝて。なじかはほうきせざるべき。かいだんのことにをんじやうじへはつかふすること。いぜんすでに六ケ度也。くげにそふし。ふけにふれ。うつたうるまでもあるべからず。時をうつさずをしよせてやきはらへとて。まつじまつしや三千七百三ヶ所へふれをくる。先きんごくのせいはせあつまりて。そのせいつがう廿萬七千餘人とぞしるしける。十月十四日中のさるの日にあたれり。これにすぎたるよき日あるべからずとてゐんゐんだうたうのせいを七手にわけて。またうのこくにをしよする。あるひはまん／＼たる志賀からさきのはまぢに。こまにむちうつしゆ

ともあり。あるひはべう／＼たるゑんばこすいのあさなぎに。舟に棹さすだいしゆもあり。おもひ／＼によせけるその中に。けいかいりつしはこのらんしやう。しかしながらわが身よりことをおこすわざはひなれば人よりさきに一合戦して。かばねをせんぢやうにとゞめんとおもひ。すぐりたるどうしゆくわかたう五百よ人。まだしのゝめもあけぬまに。によいがだによりぞよせたりける。さるほどに。あくれば十四日のたつのこくに大手からめて城中そうじて廿萬七千餘人。同時に時をあげてをめきさけぶ。たいざんもくづれ。こすいもかたぶきて。たちまちにこんりんざいまでおつるかとうたがはる。しするをもかへりみずせめいりにける。よせてには。しゆせん前司くはつさうゐん。すきしやうさいせうこんりんゐん。させむせうさやうめうくはん院。すぎもと山

もとさいれん房。さいたうには。しやうきせう
しつせんみやうばう。なんかいいみやうき
たみつ。いきやうちうしやうりむ房。よかはに
は。せんほうせんちうやゐん。三たうほうきし
てきをあはす。これをふせぐ大しゆ。ゑんまん
院のおにづる。かたう院のてんぐう。千人ざり
のあらさぬき。かなまたの惡太夫。八方やぶりの
むさし房。三町つぶてのきやう一房。さげざ
りごのみのそふちやう房。たがいにいのちを
惜まず。入かへ／＼あひた／＼かふ。よせてはお
ほ勢なれば。うたる／＼をもかへりみず。ふせぎ
てはあんないしやなりければ。こゝかしこの
つまり／＼によせあはせ。をひたち／＼あいた
／＼かふ。三ときばかりの合戦に。よせて三千
餘人手をひて。半し半生成ければ。城のうち
いよ／＼かつにのつて手さをまはしうちい
づる。かくては此じやう。じんみらいさいをふ

るとも。おとしつべしともみえざるあいだ。け
いかい大きにいかりて申けるは。さんもむよ
り此寺へ寄てせめしことすでに六度かとなり。
毎度のた／＼かひこれにをとらずといへども。
これほどにせめかねたることいまだなし。い
くほどもなきほり一つ。死人にてうめたらん
に。などかこの城せめやぶらざらんとくはう
げんじやけん。ほりのそこせばなる中へがば
ととびあり二町あまりにみえたるきりぎしの
うへ。へだてのさんを踏ではねあがり。ぬりま
はしたるへいばしらに手うちかけ。ゆらりと
はねこえて。かたき三百餘人が中へみだれ入
て。ひばなをちらしてぞきつたりける。さげざ
り。けさがけ。車切。そむきてもてる一かたな。
しさりてすゝむ追かけぎり。しやうぎだをし
のはらひぎり。いそうつ波のまくりぎり。らん
もむひしがた。くもでかくなは。四角八方をき

りてまはりけるに。によいごえをふせぎける
つはもの三百よ人。あしをもためず追たてら
れ。おもひおもひにおちて行。けいかいがどう
しゆくわかたう五百よ人。はしりちりてゐん
ゐんたにくに火をかくる。風たちまちにふ
いて四方におほひければ。こん堂。かうだう。
しゆろう。きやうざう。じやうげう三まいのあ
みだ堂。ふげんどう。きやうくはんにはほうと
う。けいだい。しやうの御ほんぼう。ちせう大師
の御ゑいだう。三もんぜきの御ぼうにいたる
まで。そふじて三千六百よ。一時にけふりと成
はて。しんら大明神のしやだんより外は。の
こる所一つもなかりけり。さるほどにわかぎ
み三井寺のかやうに成ぬるをもしりたまは
ず。石のろうのなかにをしこめられて。あけく
れなげさしづみておはしける處に。てんぐど
もあつまりて。よも山の物語してわらひける

が。われらがあもしろきと思ふことは。せうま
ふ。つじ風。こいさかひろんのすまふ。しらかは
ほこのそらいんじ。さんもむなんとのみこし
ふり。五山の僧のもんだうだて。これらにこそ
はけふあるけんぶつもいできて。一ふぜいあ
りとおもひつるに。きのふ三井寺のかつせん
は。きたいの見ごとかなと申せば。そばなるて
んぐ。かしこく社。此梅わかぎみをとりにけ
るぞや。さらずはこれほどのいくさはいでき
じ。しやうごゐんのもえしゆたち。かなたこな
たへにげさせ玉ふおかしさに。われこそけう
がるうたをよみてさぶらふといへば。そばな
るてんぐ。何とよみたるぞととへば。
（うかるけるはち三井寺の有様やかい作りてはねをのみそ泣）
とよみて候つるとかたれば。座中のでんぐど
も。みなえつぽに入てぞわらひける。わか君は
これをき玉ふて。あなあさましや。さてはみ

ゐでられゆへにほろびにけるにやとおもひ玉へども。くはしくとふべき人もなし。たゞわらはともにもうちわびて。なくよりほかのこともなし。わか君かくばかり。

しやくまくのこけの雫に袖ぬれて涙の雨のかはくまそなきかゝりけるところに。あはぢのくにのしんもつとて八十ばかりなるらうおうの。びんはついとしろくやせたりけるを。たかてこてにいましめて。これも石のろうのうちへ入たり。一兩日ありて。このおきな。ちごとわらはのなきかなしむを見て。もしその御袖やぬれて候とへば。ちごも童も。ともにすみなれし所を。かりそめながらたちいでて。此いしのろうにをしこめられて候へば。ちゝは、師しやうのなげきおもひやらるゝたびごとに。なみだおちずといふことなれば。さこそは袖もぬれ候らめとぞこたへける。らうおうおほきによる

こびて。さ候はゞわれにとりつかせたまへ。たやすくふるさとへつけまいらせんとて。翁このちごのそでをしぼる（ツツミ）て見るに。しら玉か何ぞと人のとふばかりに。なみだのつゆしたゝりたり。おきなこのつゆをひだりの手に入て。くすりをぐわんするごとくにするに。露の玉ほどなく。まりの大きさに成ぬ。これをまた二つにわけて。さうのたなごころに入て。しばらくゆるがしむたるに。ふたつのつゆしだいに大きに成て。いしのろうのうち。みなたうゝたる大水になりにけり。このときにらうおう俄に大蛇になりて。らいでんのつゞみ地をうごかし。いなびかりの光り天にひらめく。さしもきせい（きせい）の天ぐ共おぢわなゝきて。四方ににげうせければ。りうわう石のらうをけやぶりて。ちごとわらはとのみならず。あらゆる所のだうぞくなん女雲にのせて。だいのきうせ

き。しんぜむえんのほとりにておろしたりけり。だうぞく男女みなこれよりわかれて。をのがさまゝにかへりぬ。わか君とわらはとは。我ふるさとをたづねてはなぞのへゆきたまひたれば。かはらをならべてつくりたりしくうでんろうかく。みなやけののはらとなりて。こととふべき人もなし。あたりなるそうばうにて。ことのやうをたづねとへば。左大臣どのはさんだちわか君をひえの山へうばはれさせたまひ候を。御里にしろしめされぬことはあらじとて。三井寺よりをしよせて。やきはらひて候なりとぞかたりける。おとゝの御行衛とはん程。たちよるべきやどもなければ。さらば三井寺にゆきて。もんしゆの御ことをもたづね申さんとて。たどるゝわらはに手をひかれて。みるでらに行て見給へば。佛閣僧房一つものこらずやきはらはれて。閑庭の艸の露にな

き。かうさんの松風の吟ずる。これぞわがすみしむかしのあとよとてみれば。石ずへのいしもやけくだけで。こけのみどりもくれなゐにへんじ。軒端の梅も枝かれて袖なつかしき風もなし。ものごとにかはりはてぬる世のあはれ。たゞわれゆへ成しわざはひなれば。しんりよにもたがひ。人くちにもさこそかゝるらめとあさましくおぼえて。見るにめもあてられぬなごりをあしみて。その夜はしんら大明神の御はいでんに。湖水の月をながめてなきあかしつゝ。しやうごゐんはもし石山にや御座あるらんと。たづね行たれども。これにも御座なしと申せば。わらは。さ候はゞ。こよひはさんけいの人のていにて。ほんだうに御座候へ。それがし山へまかりのぼり候て。ゐつしの御ばうをたづね申候はむと申ければ。わかぎみ今はたゞうき世にあらじとも。ふかくおもひ

身とならでとたはぶれかよはして。ふみを見れば。

いっはりのあるよしらて契けむわか心さへ恨めしのみや御所のかたはらにしりたるしゆとの坊の候へば。それにしばらく御座候て。御すだれのひまをも御こゝろにかけられ候へかしと。わらはしきりにいざなへば。おもふかたにこゝろひかれて。りつし又三井寺にゆきぬ。わらはしよしの程やどかりて。あるばうのがくもむじよにをきければ。そのばうずもねんごろなるさまにて。いろ／＼のいとなみなどありて。つねにはちごどもをあまたいだして。くはんげむをし。ほうへんのうたあはせなどして日ををくりける。りつしはしよ／＼はんのことありて。しんら大明神に七日さんろうするよしをいひて。よるになれば。ゐんけのかたはらに立まぎれて。つきやまの松の木かけ。前栽の草のそこ

にかくれてゐたるに。ちごもはやこゝろへたるけしきにて。人めもがなとながめたるやうなれども。かなはで出かねたるこゝろづくし。見るも中々くるしければ。よしやたゞよそながらみるばかりを。わが身にある契にて。人のなさけをこそいのちにせめとおもへば。あしはやく行てはかへり。かへりては行。よなく日かず十日あまりにも成にけり。いつまでもと人はいへども。ながゐせんこともさすがなれば。あくるひはわが山へかへりなむとおもひけるところに。わらはきたりて。こよひこそあの御所へ。きやうよりきやく人御入候て。御酒宴にて候つるに。もんしゆもいたく御忍ひ候へば。ふけすぐるまでかへられてしこうせられよ。これへしのびやかに御いり候べしと仰せられ候つるぞ。門さゝで必御待候べしと。いそがしげにいひすてゝ歸りけり。りつしこ

れを聞て。こゝろうかれみだれて。いづくにあるわがみともおぼえず。更行かねのつくくと。月のにしにめぐるまで侍かねたる所に。からかきの戸を人のあくるをとするに。書院の杉障子よりはるかに見いだしたるに。れいのわらはさきにたちて。ぎよなふのちやうちに螢をいれてともしたり。その光かすかなるに。このちごきんしやのすいかんなよやかにうちしほれたるていにて。みる人もやかゝりのもとにやすらひたれば。みだれてかゝるあをやぎの。いとどいふばかりなきさまにみえたるに。りつしいつしかこゝろたよくしめて。ある身ともおぼえず。童ちやうちんをさそうの軒にかけて。書院の戸をほととたき。是に御わたり候やらんとあんないすれば。律師いふべきかたをもしらで。ちとかたはらにみをそばむるけしきにて。あるよしを

ぞしらせける。わらは又庭にたちかへり。はや御いり候へと申せば。ちごは先だつてつもとをならす。その袖のうつりかも身にふるゝばかりよりそひて。うちかたぶきたれば。せんけんたる秋のせみのはつもとゑひ。(ゆめ)ゑんてんたるかいのまゆずみのにほひ。花にもねたまれ月にもそねまれぬべきものかほばせちのこゑ。ゑにかくとも筆もをよびがたく。かたるに言葉なかるべし。なみだとともに枕をかはしまの水のながれもたへず。猶ちぎるべきむつごとくもまだつきなくも。聞さむくしてらんふうのゆめさめ。れんりの花わかれてとゞめがたければ。しののをささの一ふしに。あけぬとつぐる鳥の音もうらめしく。をのがきぬぎぬひやゝかに成てたちわかれなどするに。あけがたの月のまどのにしよりくまなくもさし入たれば。ねみだれがみのはらゝとかゝ

わらはをかたらひよせて。茶をのみ酒をたゝへてあそびけるついでに。こがねのうち枝のたちばなにたきものをいれて。ねりぬき。からあや。ふせんれう。いろ／＼の小袖十重ねをくりたり。わらはもはやこゝろざしのふかきいろをみて。よろづこゝろをへだてぬさまなりけり。さて梅わかぎみにもひまよへるこゝろのやみ。いつはるべしともおぼえぬよしをかたりければ。先御ふみをあそばしてたまはり候へ。やがて申て見候はんとぞ申ける。おもふこゝろをつくす程のことの葉は。いかにくろみすぐるともありがたければ。うた計にて。しらせはやほのみし花の俤に立そふ雲のまよふ心をとかきてをくりける。わらは文をふところより取出して。これ御らん候へ。いつぞや雨のたへまの花の陰にたちぬれて御わたり候ひけるを。ある人ほのかに見まいらせて。人しれずあ

もひそめたる袖の色も。はやくれなるにふかくなりて。なくばかりにつゝみかねて候やうにみえ候ぞやとかたれば。梅若ぎみかほうちあかめて。文のひぼをとかむとしたまひけるところに。しゆつせなるなにがしの僧都とやらんいふ人の。みすをかゝげてうちへ入に見せじとて袖のうちにをしかくせば。わらはびんぎあしと。ひまをまちて日くるゝまでしこうしたるに。しよゐんの窓より御返事かきてたびたり。わらは手もかろくうれしくて。いそぎもちて行たるに。りつしめもあやによりこびて。まことに身もあられぬさまのていなり。ひらきてみれば。ことばはなくて。

頼ますよ人のこゝろの花の色あたる雲のかゝるまよひはりつしこのへんじを見て。こゝろいとゞうかれしかば。さらにたちかへるべき心もせず。あひ見ぬさきのわかれだにもせんかたなくおぼ

えしかば。しばしあたりのやどになをもとどまり。よそながらそなたの梢をもみつゝらさばやとはおもへども。あまりにそれもひいたけたれば。又こそ参り候はめ。うれしくもかよふこゝろのしるべとならせたまひぬるものかなと。わらはにいとまこひつゝ。りつしやまへかへりけるが。一あしあゆみてはみかへり。二あしあゆみてはたちとどまりしける程に。春の日ながしといへども。程ちかき坂本のさとはうまで行つかで日くれにければ。とつへんにありけるはにふのこやにぞとどまりける。夜もすがらおもひあかして。あしたになれば。山へのぼらんとて庭まで出たれども。ちびきのなはをこしにつけたるがごとく。われならぬこゝろにひきとどめられければ又引かへして大津のかたへぞあこがれ行。雨しめやかにふりければ。みのかさうちきて。旅人のすが

たに身をやつしつゝ行ところに。からかささしかけたる馬のりのみちにてゆきあひたり。たれなるらんとみやりたりければ。梅わか君のなかだちせしわらはにてぞありける。りつしをみて。あなふしぎや。申べきことありて。しらぬ山までもたづねまいらんとしつるに。うれしく参りあひたるものかなとて。馬より飛おりて。りつしが手をとりて。かたはらなるつじだうへぞたちよりける。さて何ごとにかととへば。わらは。ふところより色にこがれたるもみぢがさねのうすやうに。てさへくゆるばかりなる文をとりいだして。いかなる山にみちまよふとも。きゝしばかりをしるべにて。たづねてまいれとおほせさぶらひつる。けしからずの御心まよひぞや。まして一夜ののちの御袖のうへ。さこそはつゆのたはぶれとうちわらへば。りつしも。せめてわかれをなげく

ふるともしらぬ春雨の。かほにほろ／＼と
かりければ。しばらく立よりはれまをまたむ
とおもひて。こんだうのかたへ行程に。しやう
ごゐんの御房の庭に。老木の花のいろことな
る梢。かきにあまりてみえし。はるかに人家を
みれば。花あれば則入といふ詩のこゝろにひ
き入られて。門のかたはらに立よりたれば。よ
はひ二八ばかりなるちごの。すいぎよかんに
うすくれなるのあこめかさねて。こしのまは
りほけやかに。けまはしふかくたをやかなる
が。人ありともしらざるにや。みすのうちより
庭に立出て。ゆきおもげに咲たる下枝の花を
手折て。

ふるあめにぬるともおらん山櫻雲のかへしの風もこそふけ
とうちながめて。はなの雫にたちぬれたるて
い。これも花かとあやまたれて。さそふ風もや
あらんとしづこゝろなければ。おほふ計の袖

もがなと雲にも霞にもかすべきこゝちなどし
けるに。心なき風の門のとびらをきり／＼と
ふきならしたるに。あくる人あるやとあやし
みて見やりて。花を手にもちながら。かゝりの
もとをめぐりてはるかにあゆみけるに。みる
ぶさのごとくにてゆら／＼とかゝりたるかみ
のすぢ。柳のいとにうちまとはれてひきとど
めたるを。ほれ／＼と見かへりたるめつき。か
ほのにほひはかりなきやう。ゆくゑなくわれ
をまよはしつるゆめのたじちにすこしもたが
はねば。いまのうつゝにみし夜の夢はうちわ
すれて。日くれけれどもゆくべきかたをもち
ぼえず。その夜はこんだうのゑんにひれふし
て。よもすがらながめわびぬ。

これや夢ありしや現わきかねていつれに迷ふ心なるらん
夜あくれば。又きのふの所に行て。御坊のかた
はらにたゝずみたるに。わらはのいとさよげ

なるが。ぬきすのしたの水すてんとて。門の外
まで出たり。これやきのふのちごのわらはな
るらんとおもひて。立よりつゝ。ちと物申候は
んといへば。なにごとにて候やらんとて。こと
のほかなるけしきもなし。りつしうれしく思
ひて。きのふ此ゐんにすいぎよしやのすいか
んめされて。御としの程十六七ばかりにみえ
させ玉ふおさあひ人の御ことやしりまいらせ
給ふとへば。わらはうち多みて。我こそその
御かたにめしつかはるゝものにて候へ。御な
をば梅若君と申候。御さとは花ぞのの大臣ど
のにて御渡り候。御心わくかたなく。いつはり
のあるよとだにもおぼしめされぬ程の御こゝ
ろ。あてにて候へば。一寺のらうそうじやくは
い。春にをくれたる一本の花をみてはよそに
ちるこゝろもなくなり。秋の月のくまなきに
はみな我家のひかりをあらそふふぜいにて候

を。この御所の御ありさま。あまりにゆるすか
たなく御座候ほどに。くはんげむすか（いづれ）のむし
ろならでは御出も候はず。たゞいつとなくふ
かき窓にむかひては。詩をつくり歌をよみて。
日をくらし夜をあかさせたまひ候ぞやとど語
りける。聞につけてもいとゞこゝろもうかれ
ぬれば。やがてこのわらはをたよりにて。つぼ
の石ぶみつてにても心のおくをしらせばやと
おもへども。あまりにひたゝけたらんもさす
がなれば石山へまいりつゝ。又わが山へぞかへ
りける。りつしは夢かうつゝかのおもかげに。
おきもせずねもせでなげきくらしおもひあか
しけるが。しやうごゐんの御ばうのへんに。む
かししりたりし人のあるをたづねいだして。
ある時は詩歌の會にことよせ又ある時はしゆ
えんにけうじたるていにて。一夜二夜をあか
すことたび／＼に成にけり。そののちさきい

し。外にはくはうせきがみちをふみてなうさ
はいすいの風をかくげたり。ある時はんに
くの衣の袖にせつしゆのじひをつゝみ。ある
ときはさいぶくのつるぎのやきばのうへにふ
んぬのゆゑいをふるふ。誠にしんぞくのいる
ひ。ぶんぶのたつじんなり。けいねんのころ。
花のちる春のくれをみてねぬ夜の夢やさめた
りけむ。こはそも何ごとぞや。われたまゝくぞ
くぢんのきやうがいをはなれて。しやくしの
門室に入ながら。あけくれはたゞみやうもむ
りやうにのみして。しゆつりしやうじのつと
めにをこたりぬる。あさましかりけることか
なとおもふ心いできにければ。やがて山より
やまのおくをもたづね。柴のいほりのしばし
ばかりのかくれがをもむすばやとおもひけ
るが。さすがにふるさゑんのつなぐ所は。人ご
とにはなれがたきならひなれば。いわうさん

わうのけちゑんもすてがたく。堂坊どうりよ
のわかれもさすがになごりをしかりければ。
こゝろばかりにあらまして。いたづらに月日
ををくりける。その心のうちにうごき。ことば
のほかにあらはれけるにや。てうくほみふう
ぢんのそこしつきやくしては。あやまつて三
十年生ず。いづれの日かにんげむゑいじよく
のまなこ。ゆうぜんとしてはせんしゆかんう
んにねぶるらん。これほどにおもひたちぬる
ことのかなはぬは。いかさまじやまげだうの
われをさまたぐるにや。さらばぶつぽさつの
おうごをたのみて。此願をじやうじゆせんと
おもひて。石山にまふでつゝ。一七日があいだ
は五たいを地になげて。一心にまことをいた
して。だうしむけんごそくせうむじやうぼだ
いとぞ祈りける。七日まむじける夜。らいばん
をまくらとしてすこしまどろみたる夢に。に

しきのとちやうのうちより。ようがんびれいなるちごの。いはんかたなくみえたるがたち出て。ちりまがへる花の木陰にやすらひたれば。あを葉がちにぬひものしたるすいかんの。ゑむざんに花ふたゝびさきて雪のごとくにふりかゝりたりけるを。袖につゝみながら。いづちへ行ともおぼえぬに。くれゆくいろにきえてみえずなりぬとみて夢はさめぬ。これすなはちしよぐはんじやうじゆのむさうなりと嬉しくおぼえて。まだしのゝめもあけぬまにたちかへりぬ。よそよりきたるべきものをまつやうに。今やだうしんおこるとまちいたれば。なを山深くすまばやとおもひしころはわすれて。夢にみえたるちごのおもかけ。時のほども身をはなれず。りつしもまことのうつゝならねば。せんかたなきおもひにたへかねて。さてもやもしなぐさむと。一つの香をたきて

は佛前にむかへば。漢の李夫人返魂香のけぶりにむせびて。みをこがしたまひし武帝の御おもひもみにしられ。くら山の花ほころびてうんていによれば。巫山の神女が雲となり雨となりし夢のちのおもかけに。たづきもしらずなげきたまひけんやうだいの御涙もよそならず。山王のしんたくに。我一人のしゆとをうしなふは。三尺のつるぎをさかさまにのむにことならずとかなしみたまひしかば。われらがりんをいかさまさんわうのおしみおぼしめして。だうしんをさまたげさせたまふにや。たとひさやうのしゆりよなりとも。いのちいきてこそほつとうのたいふうにむかふところをもさまたげんずれ。くれまつほどの露のみもあらじ。いまはとおもひわびけるが。石山の観音をこそかち申さめとおもひて。又いし山へこそまふでけれ。三井寺の前を過けるに。

ゐでられゆへにほろびにけるにやとおもひ玉へども。くはしくとふべき人もなし。たゞわらはともにもうちわびて。なくよりほかのこともなし。わか君かくばかり。

しやくまくのこけの雪に袖ぬれて涙の雨のかはくまそなき
かゝりけるところに。あはぢのくにのしんもつとて八十ばかりなるらうおうの。びんはついとしろくやせたりけるを。たかてこてにいましめて。これも石のろうのうちへ入たり。一兩日ありて。このおきな。ちごとわらはのなきかなしむを見て。もしその御袖やぬれて候とへば。ちごも童も。ともにすみなれし所を。かりそめながらたちいでて。此いしのろうにをしこめられて候へば。ちいはし師しやうのなげきおもひやらるゝたびごとに。なみだおちずといふことなければ。さこそは袖もぬれ候らめとぞこたへける。らうおうおほきによる

こびて。さ候はゞわれにとりつかせたまへ。たやすくふるさとへつけまいらせんとて。翁のちごのそでをしぼる(おこ)て見るに。しら玉か何ぞと人のとふばかりに。なみだのつゆしたゞりたり。おきなこのつゆをひだりの手に入て。くすりをぐわんするごとくにするに。露の玉ほどなく。まりの大きさに成ぬ。これをまた二つにわけて。さうのたなごころに入て。しばらくゆるがしゐたるに。ふたつのつゆしだいに大きに成て。いしのろうのうち。みなたうゝたる大水になりにけり。このときならうおう俄に大蛇になりて。らいでんのつゞみ地をうごかし。いなびかりの光り天にひらめく。さしもきせいのの天ぐ共おぢわなゝきて。四方ににげうせければ。りうわう石のらうをけやぶりて。ちごとわらはとのみならず。あらゆる所のだうぞくなん女雲にのせて。だいのきうせ

き。しんぜむえんのほとりにておろしたりけり。だうぞく男女みなこれよりわかれて。をのがさまゝにかへりぬ。わか君とわらはとは。我ふるさとをたづねてはなぞのへゆきたまひたれば。かはらをならべてつくりたりしくうでんろうかく。みなやけののはらとなりて。こととふべき人もなし。あたりなるそうばうにて。ことのやうをたづねとへば。左大臣どのはきんだちわか君をひえの山へうばはれさせたまひ候を。御里にしろしめされぬことはあらじとて。三井寺よりをしよせて。やきはらひて候なりとぞかたりける。おとゝの御行衛とはん程。たちよるべきやどもなければ。さらば三井寺にゆきて。もんしゆの御ことをもたづね申さんとて。たどるゝわらはに手をひかれて。みゐでらに行て見給へば。佛閣僧房一つものこらずやきはらはれて。閑庭の艸の露にな

き。かうさんの松風の吟ずる。これぞわがすみしむかしのあとよとてみれば。石ずへのいしもやけくだけて。こけのみどりもくれなゐにへんじ。軒端の梅も枝かれて袖なつかしき風もなし。ものごとにかはりはてぬる世のあはれ。たゞわれゆへ成しわざはひなれば。しんりよにもたがひ。人くちにもさこそかゝるらめとあさましくおぼえて。見るにめもあてられぬなごりをおしみて。その夜はしんら大明神の御はいでんに。湖水の月をながめてなきあかしつゝ。しやうごゐんはもし石山にや御座あるらんと。たづね行たれども。これにも御座なしと申せば。わらは。さ候はゞ。こよひはさんけいの人のていにて。ほんだうに御座候へ。それがし山へまかりのぼり候て。りつしの御ばうをたづね申候はむと申ければ。わかぎみ今はたゞうき世にあらじとも。ふかくおもひ

もとさいれん房。さいたうには。しやうきせう
しつせんみやうばう。なんかいさいみやうき
たみつ。いきやうちうしやうりむ房。よかはに
は。せんほうせんちうやゐん。三たうほうきし
てきをあはす。これをふせぐ大しゆ。ゑんまん
院のおにづる。かたう院のてんぐう。千人ぎり
のあらさぬき。かなまたの惡太夫。八方やぶり
のむさし房。三町つぶてのきやう一房。さげぎ
りごのみのそふちやう房。たがいにいのちを
惜まず。入かへくあひたゝかふ。よせてはお
ほ勢なれば。うたるゝをもちへりみず。ふせぎ
てはあんないしやなりければ。こゝかしこの
つまりくによせあはせ。をひたちくあいたゝ
かふ。三ときばかりの合戦に。よせて三千
餘人手をひて。半し半生成ければ。城のうち
いよゝかつにのつて手さをまはしうちい
づる。かくては此じやう。じんみらいさいをふ

るとも。おとしつべしともみえざるあいだ。け
いかい大きにいかりて申けるは。さんもむよ
り此寺へ寄てせめしことすでに六度かとなり。
毎度のたゝかひこれにをとらずといへども。
これほどにせめかねたることいまだなし。い
くほどもなきほり一つ。死人にてうめたらん
に。などかこの城せめやぶらざらんとくはう
げんじやけん。ほりのそこせばなる中へがば
ととびおり二町あまりにみえたるきりぎしの
うへ。へだてのさんを踏ではねあがり。ぬりま
はしたるへいばしらに手うちかけ。ゆらりと
はねこえて。かたき三百餘人が中へみだれ入
て。ひばなをちらしてぞきつたりける。さげぎ
り。けさがけ。車切。そむきてもてる一かたな。
しさりてすゝむ追かけぎり。しやうぎだをし
のはらひぎり。いそうつ波のまくりぎり。らん
もむひしがた。くもでかくなは。四角八方をさ

りてまはりけるに。によいごえをふせぎける
つはもの三百よ人。あしをもためず追たてら
れ。おもひおもひにおちて行。けいかいがどう
しゆくわかたう五百よ人。はしりちりてゐん
ゐんたにくに火をかくる。風たちまちにふ
いて四方におほひければ。こん堂。かうだう。
しゆろう。きやうざう。じやうげう三まいのあ
みだ堂。ふげんどう。きやうくはんにはほうと
う。けいだい。しやうの御ほんぼう。ちせう大師
(上座)
(くわん)
の御ゑいだう。三もんぜきの御ぼうにいたる
まで。そふじて三千六百よ。一時にけふりと成
はて。しんら大明神のしやだんより外は。の
こる所一つもなかりけり。さるほどにわかぎ
み三井寺のかやうに成ぬるをもしりたまは
ず。石のろうのなかにをしこめられて。あけく
れなげきしづみておはしける處に。てんぐど
もあつまりて。よも山の物語してわらひける

が。われらがおもしろきと思ふことは。せうま
ふ。つじ風。こいさかひろんのすまふ。しらかは
ほこのそらいんじ。さんもむなんとのみこし
ふり。五山の僧のもんだうだて。これらにこそ
はけふあるけんぶつもいできて。一ふぜいあ
りとおもひつるに。きのふ三井寺のかつせん
は。きたいの見ごとかなと申せば。そばなるて
んぐ。かしく社。此梅わかぎみをとったりけ
るぞや。さらずはこれほどのいくさはいでき
じ。しやうごゐんのもんしゆたち。かなたこな
たへにげさせ玉ふおかしさに。われこそけう
がるうたをよみてさぶらふといへば。そばな
るてんぐ。何とよみたるぞととへば。

(可畏)
うかるけるはち三井寺の有様やかい作りてはねをのみそ泣
とよみて候つるとかたれば。座中のでんぐど
も。みなえつぽに入てぞわらひける。わか君は
これをきゝ玉ふて。あなあさましや。さてはみ

中をわけて。片時のあいだに大嶺のしやかの
嶽と云ところへぞかきもてゆきにけり。こゝ
にばんじやくをたゝへたる石のろうの中にを
しこめてをきたれば。月日のひかりもみえず。
夜ひるのさかひもなし。だうぞくなんによの
かずありとおぼえて。たゞなくこゑのみぞき
こゑにける。その夜よりわかざみうせさせた
まひたることたゞごとならずと。もんしゆお
ほきに御歎ありて。いたらぬくまもなく御た
づねありけれども。その行衛いづちへともし
りたる人さらになかりけるところに。東坂本
より大津へとをるたび人のありけるが行あひ
て。さやうのおさあひ人。わらは一人めしぐし
て。きのふの夜のいぬのこくばかりに。からさ
きのかたへこそ御わたり候しかとぞかたりけ
る。さては此あいだれんくしのびていひか
よはすりつしの有ときこえしが。いかさまと

りてけるとて。ぬんけのうちは申にをよばず。
一時のしゆとうつたつことなのめならず。山
もんへよせんずることはかなふべからず。ち
ちのおとゞもしりたまはぬことはよもあら
じ。まづ花ぞののさふのていへをしよせてう
らみ申せとて。御もんとの大しゆ五百よ人は。
はくちうにさふのてい三でうきやうごくへを
しよせて。一つものこさずやきはらふ。をんじ
やうじのしゆと。これにてなをいきどをりを
さんぜず。一山一同せんぎしけるは。じもんの
ちじよくこれにすぐべからず。しよせん此つ
いでをもつて。當寺にじやうくはくをかまへ。
三まやかいだんをたてば。さんもむの大しゆ
さだめてをしよせんずらん。これすなはち地
の利につきてかたきをほろぼすはかりごと。
又はじやしうをしりぞけて。かいほうをひろ
むる道たるべし。天こゝにときをあたへたり。

しばらくもとゞこぼるべからず。一み同心のしゆと三千よ人。によいごえを所々ほりきり。ふもとにさかもぎをひき。しゝがきしげくゆひまはして。三まやかいだんをぞたてられける。山門にはこれをさゝて。なじかはほうきせざるべき。かいだんのことをんじやうじへはつかふすること。いぜんすでに六ヶ度也。くげにそふし。ぶけにふれ。うつたるまでもあるべからず。時をうつさずをしよせてやきはらへとて。まつじまつしや三千七百三ヶ所へふれをくる。先きんごくのせいはせあつまりて。そのせいつがう廿萬七千餘人とぞしるしける。十月十四日中のさるの日にあたれり。これにすぎたるよき日あるべからずとてゐんゐんだうたうのせいを七手にわけて。またうのこくにをしよする。あるひはまん／＼たる志賀からさきのはまぢに。こまにむちうつしゆ

ともあり。あるひはべう／＼たるゑんばこすいのあさなぎに。舟に棹さすだいしゆもあり。おもひ／＼によせけるその中に。けいかいりつしはこのらんじやう。しかしながらわが身よりことをおこすわざはひなれば人よりさきに一合戦して。かばねをせんぢやうにとゞめんとおもひ。すぐりたるどうしゆくわかたう五百よ人。まだしのゝめもあけぬまに。によいがだによりぞよせたりける。さるほどに。あくれば十四日のこくに大手からめて城中そうじて廿萬七千餘人。同時に時をあげてをめきさけぶ。たいざんもくづれ。こすいもかたぶきて。たちまちにこんりんざいまでおつるかとうたがはる。しするをもかへりみずせめいりにける。よせてには。しゆせん前司くはつさうゐん。すきしやうさいせうこんりんゐん。させむせうきやうめうくはん院。すぎもと山

りたるはずれより。眉のにほひほけやかに。ほ
のかなるかほのおもかげ。色ふかくみゆるさ
ま。わかれてのちおもかげに。又あふまでを待
ほどのいのちあるべしとおぼえず。律師は
ちごをおくりて。あか月出たりつるまゝにて。
いまだうちへも入もせず。門のからいしきの
うへに立かねてゐたるところに。わらはきた
りて。御文とてさしいだしたり。あけてみれば。
さしもおほからず。

我袖にやとしやはてむ衣々の涙にわけし有明の月
りつし書院にかへりて。返歌。

ともにみし月を名残の袖の露はらはて幾夜歎きあかさ
りつしは夢うつゝかどだにもおもひもわかざ
りつる涕を。身にふれそへつる袖のうつりか
を。わがものからかたみにて山へかへりたれ
ども。こゝろしほれ玉しゐうかれて。よろづの
人の物云こともへんじもせず。おぼえぬ涙人

めにあまりて。おさうべき袖もくちはてぬべ
ければ。ちといたはること有と披露して。人に
たいめんもせず。ふししづみてぞ日をおくり
ける。わらは此よしをつたへきゝて。梅若ぎみ
にかくとかたり申ければ。わか君も。まことに
なくこゝろぐるしきことにおもひくづほれ
て。御けしきつねよりもうちしほれ玉ひぬ。い
まもやとづれあると。しばしはこゝろにこ
めてまちたまひけるが。あまりに目か（のこ）ずふり
ければ。わらはをよびよせて。さてもありし夜
のゆめのたゞちもうつゝすくなきに。おどろ
かすたよりもなくてほどへぬれば。たがた
のつらさにならでは。そのまゝにやがて遠ざ
かるべき。風のこゝちとやらんきこえしかば。
露のいのちもいかゞなりぬらん。もしけかな
く成なば。なからん跡をとひてもそのかひな
し。いかならむ山のおく成とも。たづねゆかば

やとおもへども。申をくことなくてまかりなば。もんしゆの御ころもさこそとおもはれて。それもかなはず。行衛もしらぬあだ人の。ただいひすてしことのはをまことがほにて。われにころをつけしもたがせしわざぞや。いまのほどにもわれをしるべして。いかなるとらふすのべなりとも。たづねてゆけとかちちたまへば。さすがにまだいとけなきあだしごころにて。又なく人におもひつきぬるは。わするゝわざもなきならひなれば。げにことはりやとわらはおもひしりて。その人のありどころをば。くわしくうけたまはりて候へば。御とも申候はむ。御所のぎよいあしく候はむ。のちに何とも申させ給ひ候へとて。ちごとわらはとたゞ二人。行べきかたをもしらずたち出にけり。きみはもとよりも三たいきうきよくの家にむまれて。かうしやしつばの中ならでは。

かりにもいまだでいどをあゆみ玉ふことなれば。こゝにやすみかしこにたちとゞまり。さうらにあゆみかねさせ給ひけり。童あまりのいたはしさに。哀天ぐげけもの成とも。われらをとてひえの山へのぼせよかしといひて。唐崎の松の木陰にてやすみゐたるところに。年のいとたけたる山伏の。四はうごしにのりたりけるが。こしをまへにかきすすませて。これはいづくよりいづちへ御わたり候やらんといひければ。わらは。ありのまゝにこたへける。山伏こしよりありて。我こそ御たづね候房のとなりへまかりのぼるものにて候へ。あまりに御いたはしく見まいらせ候へば。われはかちにてあゆみ候はんと。此こしにめし候へとて。ちごとわらはをかきのせて。りきしや十二人鳥のとぶがごとくに行けるが。ばうくたるこすいのうへ。まんくたる雲かすみの

てまつりつれ。此世のなかになきならひかは。さまでつゝみ給ふべき事にもあらざめれど。御心よはさにこそかくやみくづをれ給ふなれと。いそぎ父母につげきこえければ。こよなうけいめいの給ふやう。さてもいかなる物はぢにか。さまで心にくめけるやらん。おろかの事よ。その事ならば。こゝにむかへむになどかはかたからんとて。人してはたがふ事こそあれ。そこにはいそぎあづまへくだりて。ぐしたてまつれとおほせければ。めのともいとうれしきことに思ひ。又御枕にたちより。父母の仰事なんかうむりて。その戀したひ給ふ御ゆくゑたづねに只今あづまへくだり侍るぞ。いそぎぐしたてまつり侍らん。しばしとおぼし給ひて。御心をもなぐさめ給ひてなどいさめをきて。夜を日にくだりつゝ。かの住所たづねもとめてあないをこひ。民部にたいめして。かう

かうの事侍るをば。いかにあはれとはおぼえたまはずやといふより。先なみだにむせびければ。きく心ち物もおぼえず。しばらくありてきこゆるやう。さればよ。さる事侍しを。よろづ世中のつゝましさに。しるくいひ出ることのかなはでうちすぐし。そこにさへしらせ侍らざりしを。今かうたづね來り給ふ事のおもてぶせさよ。我も都を出しより。片時わすれまいらする事は侍らねど。誰も心にまかせぬわたらひにて。いたづらにけふまでは過しつれ。せちなる思ひのよし。きくもいとたへがたく侍り。いかにして逢見侍らんとて。やがて立出。むかしなやめる比。いとまめやかになぐさめける同朋のもとに行てたばかりやう。年ごろ心づくしにおもひをきつるゆかりのもの。此ほど都ちかき所まで上り侍るが。はからざるにやまひにおかされて世中もたのみずくなに

なりゆくまゝに。そと聞えあはすべき事のあれば。いのちのあらんほど今一たびとみにつけこし侍り。あはれそこのはからひにて。三十日あまりのいとま給はりて。たゞ一め見もしみえばやとなげくを。いかでかたるべきとて。やがて和尚へきこえ上げれば。ことはりなればとて。御いとまたまはりぬ。ふたりのものいとうれしき事におもひて。時しも秋風のみだもよほす音づれに。虫も數々なきそへて。草のたもとも露ふかく。月をしわくるむさしのを。まだしのゝめに思ひたちぬ。やう／＼ゆけば。ふじの高ねにふる雪も。つもる思ひによそへられつゝ。

きえ難きふしのみ雪にたくへても猶長かれと思ふいのちそなどむねよりあまることどもくちずさみつゝもて行ほどに。清見が關のいそ枕。なみだかたしく袖のうへは。とけてもさすがねられぬ

を。海士のいそやに旅ねして。なみのよるひるといへるも。わが身のうへにおもひしられて。おほかたならぬかなし。また何にかはにるべき。

中々に心つくしに先たちて我きへ波のあはてきえなむ

わりなさのあまりなるべし。日もやう／＼かさなるまゝに。つち山といふむまやにつきぬ。あくる空は都へとこゝろざしよろこびあへる中にも。いと心やましきに。京よりとて文もてきたり。あはやいかにとむねうちさはぎて。とくひらき見れば。なやめる人日にそひよはり行て。きのふの暮かゝるほどになむたえ入侍りぬとあるを。みるにめくれ心まどひて。これやいかにと。夢のわたりのうき橋をたどる心ちなむしける。民部なみだのひまなきにも。今一たびのたのみにこそはる／＼たどりこしに。ひと日二日をまたできえにし露のはかな

さよ。かゝらんとてのあらましにや。おなじか
ぎりのとはなげき給ひにけむ。されば我ゆへ
むなしくなりし人を。いまはのきはにさへひ
とめ見給はぬ。そこの心のうちをしはかるも
うたておぼゆ。むつきの中より見そなはした
まふ人なれば。いかばかりあへなしとおもひ
給はむ。我もこれまでたちこえしうへは。いそ
ぎ都へのぼりてたよりなくなげき給はん父
母の御心をもなぐさめ。又なき人の後のわざ
をもいとなみ侍らばやときこえければ。あり
がたき御心にこそ。かくまでものし給ふうへ
は。なにしうらみか侍らん。たゞなき人の命の
もろさこそにもかくにもせんかたなけれ
とて。またなきしづみけるけしき。いとわりな
しともわりなし。民部もたへくはなうちか
みて。をくれさきだつはかなさは大かたの世
のさがなれど。かゝるためしこそきゝもなら

はねとうちなげきつゝ。あくるひの暮かゝる
ほどに都になむつきぬ。父はまいて母はおぼ
ろげの人には見え給はぬを。きちやうのとま
ではしり出。民部が袖にすがり給へば。めの
となどはかたはらにたれふし。つらし心うし
となげく聲。ことはりにしのびがたし。やゝ有
て。父の卿めとなるをのこにむかひてのた
まふやう。ひとひとを出しより。すこしは心
もなぐさむげにて。なやみもいさゝかかろら
かに見えしが。また日にそひておもり行。はや
薬など物すべきたのみもなくなりて絶入ける
を。よびいけなどしけれども。なさけなくむか
しがたりになしゝなり。今はのきはの心のや
み。母がなげきのやるかたなさ。たゞをしはか
れば。なげきてかへらぬみちなれば。鳥部やま
のかたはらにたゞひとりのみおくりすてゝ。
むなしきけぶりとのぼせしはとて。又むせか

へり給ふを見て。人々聲をさへげてさとなき
にけり。民部の君ひとまなる所に入みれば。む
なしくぬぎすてし衣。朝夕手なれしてうどな
どもさながらのこりて。いと涙のつまとな
りぬ。またかたはらをみれば。なれたる扇にこ
ひむなみだの色にゆかしきなどいへるふるこ
とども数々にかきて。

日影まつ露の命はおしからてあはてきえなんことの悲しき
とかける筆のあと。いたうよりは給へるお
りぞとおぼえて。もじもさだかならずみゆ。民
部むねふたがり。有しすがたのつとそひて。い
つの世にわするべくもあらず。今はたゞあし
からぬいのちなき人のためにすてむ事をひた
すらにおもひこめけり。さればうきにたえぬ
なみだ川。ながれてはやき日數もけふは七日
になりぬとて。父の卿めのとなど。有し所にた
どり給ふれば。民部もおなじくまうでけるに。

鳥部山のけふりそれとはかね(おれ)といとむつまじ
く。あだし野の露あはれと見るにつけても。君
があたりの草の葉におもひ消なむいのちのほ
ども。中々今はうれしくて。

さきたちし鳥部の山の夕けふり哀いつまできえのこれとか
父の卿とりあへず。

さきたちて消し淺茅か末の露本の雪の身をいかにせん
さて民部はなくくさんまいのかたに行て。
むなしきしるしをみるにも。先なみだにくれ
てしばしものもおぼえず。やゝ有て花などた
むけつゝ。心しづかにねんずし終り。いきたる
人に物きこゆるやうに。さてもしばしをまた
で世をはやうし給ひしことのうたてさよ。い
かばかりか我をつらしとおぼすらめ。たれも
心のまゝならねば。此世のえにしうすくとも。
こむ世はかならずおなじはちすのうてなにと
おもふあまり。つみふかきまよひなれど。世々

とながめて。しばしはこゝにおこなひしが。ゆふべのかねのうちきそひて。またいづちへかたどり行けん。おぼつかなき事にこそ。

右鳥部山物語以太田覃本校合

を経て思ひなれにし事の。今さらあらためがたければなどうちなげきて。ふところにあるしまもりがたなをひそかにぬきそばめ。いまはかうと見えしを。そばなる人はやくみつくて。こはいかにといだきとむれば。中納言をはじめ人々とりつき。まづ刀をばからうじてうばひととりぬ。中納言なくく民部にの給ふやう。なきが事は今はかひなし。そこにもなくなり給ひなば。なきがなげきにとりかさね。またもうきめ見せ給ふか。御こゝろざし侍らば。あとのわざいとなみ給はむこそ消にしもののみもかるからめと。さまゝにいとめ給へば。ほいもとげず。それより武藏野へもかへらず。北山のかたはらに柴の庵を引むすびて。黒の衣も色ふかく。ねぬ夜の夢もさめけるにや。

あらぬ道に迷ふも嬉し迷はずいかてさやけき月をみましや

松帆浦物語

遠からぬ世の事にや侍けん。四條わたりに。中納言にて右衛門のかみかけたる人なむおはしましける。中將殿とて御子ひとりありて。さうさうしくおぼしけるに。あり／＼てちご出さ給ひにける。おひさき見えてかたちいとうつくしく物し給ひければ。かぎりなくかしづき給ふほどに。父の卿はかなくなり給ひぬ。たづさなきやうにておはしけるに。中將の君らうたき物にして。十ばかりまでぞ有ける。そのうち横河に禪師の房とて。此おちになんおはしける。中將に申給ふ。このわか君。いたづらにおひ出給はむよりは。山にのぼせて物ならはし給へかしなど。より／＼すゝめ申されしかば。横川へぞのぼせられける。大かたの學文にも和歌の道にも心をいれて。筆とる事も

たど／＼しからず。はかなきすさみごともつきづきしく。心ざま人にすぐれたりしかば。一山のもてあそび。ちご童子もむつまじきことにおもひしほどに。三年ばかり此山に送りけるになむ。かゝれば此母君久しくみぬはかなしとて。折々里へよばせけるに。あるとき禪師申されけるは。がくもんのかたもさとかしこき人なり。法師になして父の御跡をもとせ給へかしなど。念ごろにかたらひ申給へば。あたらかたちを墨の袖にやつさんも情なく。八重たつ雲にまじりなんも心ぐるしなどの給ひて。うちとけたる答へもし給はねばちからなし。かくて後はあやうくや思はれけん。京にすません事を中將にも申給ふに。つれ／＼のなぐさめにもとや思はれけん。おなじ心にな給へば。禪師もいかゞはせんとして。なく／＼京へぞをくりける。此ちごもよ河にすみつき給

ひければ。さびしかりし山水にも名残多く。あそび伴ひしちごわらはにも。はなるゝことなんかなしかりける。みな京ちかきわたりまで送りきてぞ餘浪おしみける。さて禪師立歸りて。とし月手習などしてすみ給ひし所を引あけて見給へば。いとうつくしき手して障子に書付らる。

こゝのへにたち歸るとも年をへてなれし深山の月は忘れし是をみて禪師の君よりはじめて。みななきにけり。かくて後は元服して藤侍従とぞ申ける。あげおとりもせず。いよく目おどろくばかりのかたちにて物し給ひける。十四になり給ひし春の頃かとよ。もと立なれし横川の法師。父京にも優なるおのこあまた來あひて。北山のさくらいまなんさかりなるよし人申なり。侍従のきみ見給へかし。伴ひ奉らむとくちぐちいへば。深山がくれの色香もことにゆかし

き心ちして。俄に思ひたちぬ。道のほども人めつゝましかれば。わざとやつしてぞおはしける。わかきどち駒なめて。みちすがらながめわたせば。遠き山のはそこはかとなく霞つゝ。野邊のけしき青みわたり。芝生の中に名もしらぬ花ども。すみれにまじり色々さきて。雲の雲雀姿も見えずさえづりあひたるさまども。いはんかたなし。心ざす山はやゝ深くいる所にて。水のながれ岩のたゝずまひも。うつし繪をみるやうになんおぼへける。うち吹風にそことなくにほひくるに。人々心あくがれていそぎのぼりつゝみれば。數しらぬ花ども枝もたはむまで開つゝ。今日こずばと見えたり。山がくれともいはず。都のかたの人と見えあまたつどひきて。木の本岩がくれの莓にむれぬつゝ。歌よみ酒のみし。あそびなどさまざまにぞ見えし。侍従の君は花にながめい

りてゐ給へるに。花よりもこの君にめとどめたる人あまたありて。したがひありくも物むつかしくおぼえければ。花にはうとからで引入たる所もがなと。ねがひもとめつゝゆくに。本堂のかたはらに。院家にやあらん。ひわだの軒くち忍草所えがほにて。やれたるみすかけたるあり。此つれたる人のなかにしるたよりありて。こゝにしばしのやどりをかまへたり。たむざくとり出し。うち吟じなどしけり。京よりもたせたるひはりぞ。(お供)さへやうのもの。旅のまかなひはかなくしつゝあそぶに。花の本にてはじめより侍従の君に心をとどめて見えたる法師。さまかたちよろしき三十ばかりなるありて。此みすのもとまでしたひきて。花には心をとどめずして。このきみのおも影にながめ入たる成けり。猶みすの内へもかけりこまほしきさまの。ものむつかしければ。つれ

たるおのこをいだしはいはせけるは。人にし
のぶゆへありて。かく隠家求めたり。らうさき(せ賊)
なりなど。あらくしくさへせいしければ。ち
からなきさまにていでぬ。しばしありて十二
三計のわらはのうつくしくさうぞくなどした
るが。ちひさき花の枝にむすび付たる物を。あ
なひもいはず。みすのうちへさし入ぬ。取てみ
れば。

夕かすみ立へたつとも花の陰さらぬ心をいとひやはする

と清げなる手して書たり。返しし給へと此君
にすゝむれど。はづかしなどいひて。かたはら
の人にゆづるを。情なしなどいひすゝむれば。
花に移るなかめをきてたか方にさらぬ心の程をわぐらん
とほのかに書いていだし給へり。これを見てか
ぎりなくうれしく。涙もこぼれ出にけり。さて
この法師の向後を使にとひければ。ふかくか
くしけるをさまゝいはれて。わらはなれば

岩倉のなにがしの坊に。宰相の君といふ人にておはしますといふ。さてこの宰相。おもひのみをしるべにて。尋よらむとぞ思ひける。さて人々その夜はとどまりぬ。この院の花ことにおもしろし。紅白枝をまじへたり。半酔半醒すれば。げにあそぶ事三日も事たるまじうおぼえぬれど。京よりむかへの人あまた來ぬれば。かへり見がちにていでぬ。さてかの宰相は。花の本にてみし面影身にそひて。命もたふまじきほどになん成にける。ある時たよりを求めてせうそこしける。すぎにしありの花の本にて。みずもあらぬながめより。まだ身にかへりこぬ玉しぬは。いつまで袖の中にとどめさせ給はん。有し計のついでも又いつかはなど。こまやかにかきて。

花のひもとくるけしきは見えすとも一夜は許せ本の本の山かへし。

本の本を尋ねとふとも數ならぬかきねの花に心とめしな
かゝることをたよりにて夜な／＼かどにたゝ
ずみ愁苦辛吟しけるを。やう／＼哀とや思ひ
けん。心とけゆくけしきなれば。しば／＼罷か
よひつゝ。後にぞ岩倉なる坊へもともなひな
どして。なきゆくまゝに心へだてず。この宰相
さはる事などありて。一二日見えぬありは。あ
やしう心ぼそきまでなむつれける。さてこの
わか君をおもひかけたる人。こなたかなたよ
り。花につけ紅葉にむすびたるたまづさ。むつ
かしきまでぞつどひきにける。されど返しよ
きほどにうちしつゝ。この宰相にわくる心も
なくて。三年ばかり馴にけり。さてその頃世
を御こゝろのまゝにおさめ給ひしおほきおと
どの御子左大將殿の御まへにて。夏の雨しづ
かにふりて日ながき頃。世にあることうちと
けつゝ人々申けるついでに。此侍従のかたち

心ざま。たぐひ稀なるよし申出しかば。心うごかせ給ひて。御せうそこ度々あり。さい相出あひて申けるは。仰ごとなんかたじけなく侍り。まいらまほしきを。此ごろみだりごここにわづらひてふしくらし侍。いさゝかもよろしきひまあらばまいりなむ。よき様に申させ給へと有しかば。しかゝのよし申す。五六日ありて又御つかひあり。此度は御文あり。吹風のめにみぬとかやのふることも。思ひしられぬる心はわき給ふにや。ねぬなはのくるしきよしもおぼつかなく。五月雨のはれまは。心ちもすゝしくなり給ならん。おもひ立給へかしなどありて。

ほとゝきす恨やすらん待ことをきみにうつせる五月雨の頃などあり。御返し。

五月雨の晴まもあらはきみかあたりなとはさらん山時鳥と聞て。猶心ちわづらはしきさま。幾度も宰相

申て。こもりぬさせたり。さてつれゝとこもりをらむもいかゞとて。ある時忍びて此侍従をとまなひつゝ。岩くらへ行しを。かのとのの人よくみて。御まへにてしかゝのよしありのまゝに申ければ。ひごろのみだりごここはあらざりし事なりとて。いからせ給に。宰相。法師が所行なり。にくしなど。異口同音に申侍しかば。やがて御使あり。わづらひ給ふとありしはみないつはりなりけり。忍びありきし給ふなるは。かろしめらるゝなるべしなどうらみ給ひて。兄の中將にしかゝのよしねん頃に給ひしかば。宰相にもいはず。さうぞく引つくろひ。おなじ車にてぞまいりける。御門さし入より玉からやき。^{へい懸}まばゆきまでぞおぼえける。人見えぬかたにてたいめんし給。ともしびほのかに。空だきものくゆりいでていとえんなり。此人のまだかたなりなりし頃。殿上など

にてほのみ給しこゝちせしは。ことの數にも
あらず。まほにも見まほしくおぼへ給へど。は
ぢらひたるさまなれば。心もとなくおぼすほ
どに。やがて御心とまりて。心につくべきあそ
びをし給ひつゝ。かたときさらずあひかたら
ひ給ひける。御心ざしのちかまさはそふべ

けれども。たゞかの宰相のことなん心にはな
るゝ折なく。めでたき御けしきもうれしから
ず。こゝろのかよひけるにや。つねには夢にぞ
見えぬる。さて大將殿此法師をふかくにくし
とおもほせば。ちかき世界に徘徊させじとい
かり給ふをもしらで。おもひのもよほしける
にや。猶此殿のあたりうかゞひありきけるを。
口さがなきものの御まへにて。さま／＼申け
れば。あはぢの國へぞをひやらせ給ける。これ
を聞にも侍従はたへがたく。われゆへとがな
き人のうきめをみるらんもかなしく。かの嶋

の浪風をもともにきかばやとぞなげかれけ
る。たがひにいくだりのせうそこもたぶべき
やうなければおぼつかなし。かの宰相宮こそ
わかるゝとて。いかなるたよりをかもとめけ
ん。文書ておこせたり。忍びて見ればかきつけ
たることの葉おほし。

なかれ木と身はなりぬとも涙川君によるせの有世なりせば
そこはかとなく書たり。かゝりければこの大
將殿の御心もうらめしく。情をくれておもへ
ば。うちとけ奉る事もなし。はて／＼はなやま
しくて玉樓展簾の清風も心につかずさまじ
く。ひたぶるにながめがちにてをとろへゆけ
ば。かの人を思ふゆへとはしらせ給はで。物の
けにやとて。祈りなどせさせ給へどしるしあ
るべきならねば。おなじさまにわづらひて。よ
はるやうにものせられしかば。母ぎみかなし
みて。さま／＼申てまかでさせ侍ぬ。さてかの

岩倉にとゞまりゐたる伊與といふ法師を。忍びによびとりつゝ。とちかくさぶらはせて。かの宰相のわが身ゆへとをき嶋へと聞給ふれば。かなしくてかく心ちもわづらふなり。そこにいかにまろをうらめしくおもひ給ふらんと。なみだにむせびつゝのたまへば。きく心ちいはんしてなくかなしくて。かくおもはせ給ふこそ世にたぐひなく侍れ。なにかはうらみ奉るべきなどいひつゝ。夜も更行に。猶枕のもとに引よせ。さゝやき給ふやうは。いかにもして宰相のゐたまへるしまへ。忍びて我をいざなひ給へ。聞えありてつみにあたり侍らば。もろともにその嶋にて送らんこそねがひかなふ心ちはせめとの給へば。あはれにかたじけなくはおもひ侍れど。まことにいとけなくおはします御心にてこそかくはの給へ。かの淡路へわたらせ給ひたらば。かくれも侍らじ。やがて

大將どの聞せ給はゞ猶にくしとて是よりまさるつみにもあたり侍べし。御心ざしあらば文かきて給へ。いかにも忍びてもちてまからんといふに。猶おなじさまにうち歎きつゝの給へば。あはれにもふしぎにもおぼえて。つくぐと案じゐたるが。おもふやう。この宰相に我もをくれて心ならぬ世にながらふるもほいなし。またこの人のかくの給ふもいなみがたし。もとよりおしからぬ身なれば。世に聞えありともいかゞせん。さらばともなひて。今一たびたいめむせさせ奉らんとおもふこゝろあり。さてこの法師申侍やう。わか君をたばかり申ベきやうあり。大將殿へも御母うへにも。文書おかせ給へ。罪なき人を我ゆへ遠き國へつかはされたるうらめしさ。とにもかくにも世に心もとまり給はねば。身をなげ給ひたるよし申させ給へ。ゆゑしき事なれども。さも侍らばたゞ

されも侍らじなど。やうだいつきくしく申せば。うれしくおぼせど。又うち返し母の歎き給て。心ちもわづらひ給はゞいかゞせんなど。これのみぞかなしきとのたまへば。それは後に忍びて御心ひとつにしらせ給はゞ。なぐさめ給ふべしなどいへば。げにもとおもひつゝ。うれしがりけり。大將殿よりは。たえずおぼつかながらせ給へど。おなじさまなるこゝちのよし聞えて。すぎゆくほどに長月にもなりぬ。いと々物心ぼそく。ともすれば露にあらそふ涙ふりあつ。ある時中將殿も物まうでし給ひ。人ずくななる折。忍びて岩倉の伊與法師をめしにつかはしたれば。心をえて。夜にまぎれて來たり。かねて契さだめ給ひしやうに。文書をき物とりしたゝめなどしつゝ。ねたるやうにぞ忍び出給ひける。此法師かひく敷ものにて。事とゝのへ乗物などかまへて。あけぬほどに

山ざきまでぞ來たりける。こゝにしばしやすめて。常の旅人の行かふ道は人見とがめぬべしとて。あらぬかたの山路にかゝれば。白雲跡をうづみ。青嵐道をすゝめつゝ行ほどに。此わか君ならはぬ旅にいける心ちもせで。すまの浦につきぬ。名ある所なれば。海上の月もながめまほしけれど。人も社見とがむれなど。伊與法師せいしければ。心ならず衣かたしきてねたまひたれど。聞ならはぬ浪のをと。おどろおどろしく枕にちかし。源氏の大將の。心づくしの秋風にとの給ひしもおもひしられて。

秋風に心つくしの我袖やむかしにこゆる須磨のうら浪と獨ごちてすこし打まどろみたる夢に。此宰相淺ましげにおとろへて。かく尋ちはしましたるうれしさは。この世ならでもなどかなど。さめくとなきて。

磯枕心つくしのかなしさに波路わけつゝ我も來にけり

といふともなきに。たゞ今あはぢへわたる舟なんあるといふこゑにおどろきぬ。あはれとおもへど。ものさはがしければ。立出つゝ舟にのらむとて。しばし汀にやすらふほどに。曉近き月浪の上にすみわたりて心ぼそし。東船西船つなぎ置たるにも唯見江心秋月白と樂天の詠ぜしも。かゝるにやとおぼえたり。こぎ行ほどに。岩屋といふ浦につきぬ。まことや都には。侍従の身をなげたる聞えあれば。大將殿あはてさはぎ給つゝ。ようなきすすみわざして。人の難さをもをひ。又あたらさましたる人をもうしなひけるよと。かなしみ給ひける。世人もこの殿をよろしとも申さず。母うへは此書をき給ひたる文を貞に引あてゝ。そのまゝあきもあがり給はず。中將もたゞ御子のやうにかしづき給ひしかひもなく見なし給へば。おしうかなしうぞおぼしける。さていはやにと

まり給ひて。かの人の有どころはやくとはまほしけれども。つゝましく。あないもしらではいかゞなどためらふ。松ほの浦とやらんにわたらせ給ふよし京にて聞しかば。まづそのうらを尋ぬるに。繪嶋が磯のむかひなるよし申を。わか君聞給ひて。京極中納言の。やくやもしほのとながめ給ひしも此浦の事にや。身のこがれぬるもことはりぞかしとおもふ。さてその日はこの浦を尋て。こゝかしこにやすみつゝ。くるゝほどに。しぐれあらゝしくふりて浪の音たかし。海士の家ゐのみにて。いづくをばかりともおぼえぬに。灯のひかりほのかにみゆ。それをするべにてゆけば。板ぶきの堂あり。海人の篷屋にやどらんよりは。こゝにこそなどいひて尋よるに。かたはらに小庵あり。立よりて見れば松の葉ふすべて。老僧ひとりむかひゐたる成べし。あない申さんといへ

ば。からびたる聲にてたそといふ。是は津の國のかたのもの也。四國へわたらむとするに。たよりの舟にをくれてまどひ侍るなり。この御堂のかたはらに雨やどりせまほしく侍なりなどいへば。あやしくやおぼえけん。たち出て灯明の光に見るに。やつしたれども此わか君をたゞならずや見けん。あないとおしなどいひて。庵の内へよびいれぬ。あはれげにすみなしたり。達摩大師の畫像一幅かけて。助老。蒲團。麻の衾ばかりうちをきたり。しばし物語などしつゝ。かの人の向後とはまほしけれどもつけなれば打いせず。このわか君をつくぐとみて。あやし都がたの人にてぞおはすらん。我むかし都のものなり。はたちばかりの年。人をあやまつ事ありて。京にも住かね侍しかば。やがてもとどり切て。江湖山林にうかれありきつゝ年經侍りけるに。いかなるえにしにか。

かゝる漁屋のとなりをしめ。紫鴛白鷗を友としつゝ。三十餘年送侍ぬるなどかたるもあはれなれば。それをたよりにて。此ながされ人のことをとひければ。あの松帆の浦にさる人侍し。この夏ごろより此嶋へうつり給ひしなりといふ。くはしくかたり給へ。聞まほしきゆへありといへば。まつほの浦より。この庵まで。常にわたり給つゝ。宮のかたの戀しきなどかたり給ひけるが。殿上人の御事とて。明暮戀なき給ふて。心におもふことをば。へだて残さず語給ひし也。そのおもひにや侍けん。心ちわづらひ給ひしが。日々にをもり給ひて。この庵へもわたり給はず。つきそひ侍人も見へねば。あはれに見侍りて。日をへだてずまかりあつかひしほどに。つゝになくなり給ひぬ。今日七日に南成^{なん}給ふ。煙になし侍る事も。此僧し侍しとかたるに。さくこゝちものもおぼへず。うつ

ぶし臥てなきこがれぬ。この僧。いかにくさははゆかりにてこそおはすらめなどいひて。われもうちなきけり。やゝありて伊與法師申ける。今まではつゝみ侍れども。かの人はやうせ給ぬる上は。世にはぐかりもなし。是こそ戀なき給ひしとの給ふ殿上人よ。かくあやしき山賤になし奉るも。みちのほどの人めをおもふゆへなり。さるにてもしかあつかひ給て後のことなどまでしたゝめ給ける御心ざし。ことの葉たるまじなどいふ。老僧いひけるは。かの入いまはのとぢめに。心ざしのほど有がたしとの給ひて。ちいさき法花經念珠などたまはせけるとて。取いでてみす。平性手なれ給ひしものどもなれば。いよくめもくるゝばかりなり。又巻かためてこまかにしたゝめたる文の上に。四條殿へとて。青侍の名かきたるあり。是も今はのきはに。よきたよりあらば。し

かじか尋ね奉れとの給ひしといふ。此文こそ此御かたへなれといへば。あなうれし。さらばたしかに奉り侍るといふ。とき開てみるに。岩倉の人々侍従の君のかたへなるべし。都を出しより此嶋にすみし有さま。今はのきは近きさまなど書あつめたる。鳥のあとのやうに見ゆ。

くやしきはやかてきゆへきうき身ともしらぬ別の道芝の露などやうにぞ侍ける。ありし夜かのすまにての夢も。今はおもひあはせられて。いと哀なり。つとめて此僧をしるべにて。松ほのうらへゆきて。まづ此ほど住給ひし庵のさまをみれば。浅ましげによろほひかたぶきて。松のはしら竹の垣もみなくち行さまなり。いかでこゝに月日をすぐし給けんと思ふもかなし。さてすこしへだたりて。松の一むらある所にをろそかなる塚あり。しるしの松一もとうへたる

を。これにぞ侍と申せば。たちよりまろびふしてぞ伊與法師もなきける。かの王褒が柏樹ならねども。これも涙にかれやしなましとぞおぼえける。やゝためらひて。此しるしの木に。若君かきつけ給ひける。

をくれしの心もしらて程とをく昔の下にや我をまつらむ

とて。やがてこの海に身をなげ給はんとするを。伊與法師とりとめ奉りて申けるは。宰相の事今はいふかひなし。御心ざし侍らば跡をとほせ給へ。御身をうしなはせ給はゞ罪をこそおほせ給はめ。又御母上の御歎き淺かるべしやはなど。さまゝ申ければ。ちからなくてほいもとげ給はず。さらばさまをだにかへんとの給ふ。それもあたら御身なりとせいしけれども。しゐて身もなげつべきさまのし給へば。今年十六に成給ふかたちはつぼめる花。山のは出る月のさまし給へる御ぐしを。なくゝ

そりおとして。墨の衣にやつしぬるもゆめのやうなり。うらめしきものは此世成けりとぞおぼゆる。伊與法師も墨の袖いとゞ色ふかくなしつゝ。ともなひ奉りて。高野山のかたへや行けむ。後はしらずかし。

兼栽在判

右松帆浦物語以屋代弘賢本校合

兒教訓

宗祇法師

つら／＼惟んみるに

世のなかの

わるき若衆の

ふるまひを

けふの雨中の

徒然さに

大かた爰に

書つくる

筆のすさひも

おこかまし

先第一に

かのみちの

そのたしなみは

きらひにて

人にはすねて

いふりにて

人せゝりして

口きゝて

おとなのことく

茶はのみて

人によりそひ

よりかり

さもむつかしき

よういふて

こかたなかりて

ちりはして

こせ事いひて

利口して

朝起はせて

晝寐して

手ならふ事は

いやかりて

戸かへ障子に

ものかきて

里すきはして

手はすかて

たゝみ柱に

墨つけて

しら笑して

ほかけにて

人ももちぬぬ

腹たてゝ

友の若衆と

からかひて

日にいく度も

つかみあひ

親や坊主の

上いひて

物しか／＼と

をしへねは

手のあからぬも

道理やと

我とわかみに

理をつけて

親に逢たる

時はかり

おとなしけなる

ふりをして

かけにてかはる

心こそ

さもつらくゝ

おもはるれ

かくてはせめて

四五年も

寺のすまひを
少ししるしも
三年さへも
ほとなく里へ
父母こめて
やうしつかはす
手足あらはす
むさ／＼として
子ともあつめて
足にものはく
ゑのこ庭とり
小鷹見えつゝ
しゝめ すゝめ
さすも似合ぬ
つかをは長く
火打ふくろの
山とりの尾の

するならば
付へきに
くらしかね
引こみて
すいかいに
髪ゆはす
爪きらす
あらし子の
くみあひて
事もなく
追まはし
四十から
さいとりを
大かたな
こしらへて
緒を見れば
したり尾の

なか／＼しくも
さけ緒なかより
くりかたもとに
はかまのおひを
前へたらりと
紙こ道服
こひんうしろに
さらはさい／＼
さかやきみれば
蘆のことくに
色よき小袖
人のえもんの
世に聞なれぬ
我とさい／＼
人のけんくはの
人こといひて
遊山しける

ふりさけて
折かへし
巻こめて
ゆるくしめ
さしこほし
うちはをり
とりまはし
そりもせて
夏の野の
しけらせて
重ねきて
なんいひて
ゑほし名を
付かへて
さやもちて
身はしらて
道にては

小歌曲舞

とめはつあはぬ
しとろもとろに
きけんよけなる
よそのみるめも
さて又よそへ
よき折ふしは
時分うつして
使をえても
たま／＼爰へ
あれへこれへと
疊のへりに
手をとる人の
そはの柱に
立あからぬも
やう／＼座敷に
はしをとるより

あとさきの
うたひをは
うたひなし
たかわらひ
思はるれ
呼ふ時は
出もせて
たひ／＼に
ひねくりて
きてたにも
しやうすれと
はひ付て
引時は
しかみつぎ
けしからぬ
なをりつゝ
程もなく

大くつろきに
あたりの人の
きくしんなしに
心のまゝに
骨かみならし
齒音たかく
老若ともに
かくて中酒に
すんののひたる
二つも三つも
中酒すきての
汁にてうめて
茶のこいつれの
昆布一切を
口へおしこみ
とはす語りを
物いふ聲は

くつろひて
汀菜を
こひとりて
魚鳥の
くふときは
見くるしゝ
なりぬれば
盃に
酒うけて
いひの湯を
こふめかし
用捨なく
そのまゝに
かみなから
しいたして
聞にくし

茶のこみなく
川にもたゝぬ
くるみのかはを
むかひの人に
かなたこなたへ
おとなしきひと
さしきもいまた
人の小座敷
案内なしに
刀わきさし
こはんおし板
わけなき口を
人のかたなを
きれんきれしの
をのか刀の
けいつをいふて
はたさぬ聲は

とりくひて
柿のさね
とりあつめ
なけつけて
なけまはし
有ぬれば
過さるに
小へやへも
おし入て
ぬきすてゝ
枕とし
たゝきつゝ
つはとぬき
めきゝして
物きるゝ
利口して
おこかまし

それのみならず
女おとこの
皆くちゝに
思ひ入たる
我身の上を
さいゝしけき
人にきかせん
此色々の
すてに遊ひも
はくちの事は
沙汰のかきりの
筆にかくへき
さすか碁將碁
しんしやうわさの
あるひは手をみ
あるひはいしの
おそろしけなる

あまつさへ
物かたり
難談に
わすれはて
たか笑
用もなし
なかはより
はしまりぬ
中々に
事なれば
やうもなし
すく六は
事なれば
手をみせし
あらそひに
こゑをして

ふしや白山

八まんと

事もかけぬに

誓文し

石つきちらし

雑言し

たかひに腹を

たてへくは

あそひをしても

むやくなり

しやうきのはんに

むかひては

時のきやうしやと

いひなから

やかて詞を

つめあひて

きんのでをはり

服をたて

はやしゝめかし

からかひて

はんませ人に

つめられて

ことは

もんたうす

まけめになりて

何事も

わうてといひて

立さりぬ

これらはせめて

十二三

十四五ほと

わか衆達

あさなこゝろの

有ければ

ゆるす所も

有ぬへし

是にましたる

おとなとも

よきいけんをは

いひもせて

けつく色ふく

そやしたて

二人の若衆

すゝめつゝ

いさかひさせて

笑こそ

かへすゝも

りよくはひなれ

かゝるおとこの

したてには

すころくはんに

取むかひ

刀きつはに

おしまはし

石たてさいを

とるよりも

はやにくていに

利口して

石のさしひき

あらけなく

すいにまかせて

石はしり

たかひに心

一六に

ちかふさいのめ

あらそひて

てつくともせぬ

くひのほね

てうろくすんに
はやいさかひを
是かやくにん
火に入よりも
しらけといはぬ
かくてはん數
勝たる時は
まけたる時は
とかなきさいを
弓矢八まん
腰のかたなを
かねはた／＼と
物くるはしく
此遊びとも
日も夕陽に
盃すへて
酒宴の坐にも

ぬきあけて
しさうなる
夏のむし
あやうきに
人そなき
うちかさね
きけんよく
はらをたて
なけめくり
うつましと
ぬきかけて
うつ時は
すさましや
末になり
なりゆけは
坐をつくり
なりぬれは

當世はやる
心をかけて
つゝみたいこそ
夢にもしらて
しほから聲に
へうしはつれに
しとろもとろに
さらはないしよに
人よりことに
きやくしんなしに

亂舞にも
ならねは
うつゝにも
うたひをは
たてふしを
とくをそく
うたひなし
有もせて
さし出て
人々に
うちとけて
たふるとて
さしうけて
むさほりて
かけはてゝ
こめられて
とんにして

ふこなるかたへ
りひをみしらて
ふるき小袖の
みゝをさゝへて
としににあはぬ
まゆの上まで
人によりあふ
□うちとけて
詞のうちに
さゝしれ□をも
人はこゝろの
身なりしあはせ
こゝろ言葉の
さすか男の
はつきとしたる
おくゆかしくも
心の中は

りこんにて
ねはくちに
あつわたを
うつみきて
わたほうし
引かけて
座敷にて
かたるとき
ほねませて
さゝわけす
まんまるに
しとやかに
かともなく
たましゐは
人をこそ
思はるれ
夏の日に

てらせて庭に
水よりも猶
うへのおもては
まなこのかとも
かくて月日も
あけぬくれぬと
さすかに能の
弓まり連歌
心を少し
むすふ連歌の
人數になりて
會の座敷に
十七十四
袖の下にて
長く短く
心にそまぬ
次第／＼に

たまりける
ぬるくして
すさましや
見くるしゝ
杉の門
するほとに
つきたさに
兵法に
かけ帶の
月なみの
折々の
つらなりて
あるもしを
かそへかね
句をつくり
けいこして
くたひれて

連歌はさらに

弓の稽古を

師匠をよひて

あしてかつての

むねはらこしの

五日三日

是もほとなく

師匠をやかて

後にはくれと

又ある時は

春のゆふへの

まりの稽古を

ふつとこゝろに

夜晝わかす

柳さくらに

四本かゝりを

花やかならぬ

なりかたし

はしめんと

ならふとき

たうつくり

つめやうを

ならへとも

くたひれて

あしかへし

出あはす

のとかなる

くれかたに

はしめんと

思ひ出し

そのにはに

松楓

こしらへて

しりつまけ

身なりあしふみ

しふんたふんを

はひそく多く

あひてに人の

まりもあからぬ

又うちすてゝ

にはには草を

まりはかしこに

わらへ子共に

むなしくなりて

さてひやう法に

小太刀鎌ほこ

やりなきなたに

その色々に

夜晝わかす

あるひは手數

あるひは五つ

つめひらき

わきまへす

するほとに

きらひけり

ものそとて

しけらせて

なけすてゝ

ふまれつゝ

はてにけり

取かゝり

十文字

木かたなを

こしらへて

かためきて

二つ三つ

六つ七つ

ところまたらに

これもなかはに

はての一つも

萬の能の

心のとけぬ

かくて月日を

あまたの子共

たゝいたつらに

身をも家をも

賤山かつに

あなあさましや

人となりての

春は霞に

そのの鶯

尾上のさくら

糸にこゝろを

ほとなく暮て

つかひなし

打すてゝ

覺えすし

ならさるは

ゆへそかし

つもりつゝ

そたてても

そたつれば

もちさけて

ことならず

同じくは

思ひてに

たなひかれ

軒の梅

あをやきの

うちはへて

ゆく春の

夏はかきねの

雪めつらしく

布をさらすか

はしのもとの

夏に入てそ

日かけを待や

露のめくみも

たそかれ時に

名はゆふかほの

庭のたち花

むかしの人を

戀しき人の

山ほとゝきす

もの思へとや

つゝし色々

はなさく澤の

にこりにしまぬ

卯の花の

あらねとも

ことくなり

せうひは

ひらきける

朝かほの

あはれなり

あらねとも

はなしろく

うちかほり

思ひ出

うつり香に

一聲は

すたくらん

岩間より

かきつはた

蓮葉の

花のいろく

光をかさし

荻の上葉を

かたへすゝしき

秋も近しと

色つく山の

花におとらぬ

露のしつくは

をくれ先たつ

うすむらさきの

きつゝなれにし

うちみたれたる

はたをる虫の

夏をしのふや

聲ふりたつる

なかしよ寒を

いたくわふるは

さきみちて

とふ螢

そよくくと

風の音

しられけり

見えわたり

もみち葉の

世中の

ためしかや

藤はかま

むしのねも

いとすゝき

音をたてゝ

まつ虫の

すゝむしの

我ひとり

きりくす

物あはれなる

なととふ人の

初鴈かねの

そらたのめなる

さためなき世の

うつろひやすき

霜をいたゝく

盛なる身も

おとろへはつる

草木の上にも

月によるく

つまこふ鹿の

袖にやとして

霜雪あられの

閨のこからし

鳴や千鳥も

なみに浮ねの

ゆふくれを

なかるらん

ひとつらは

ふみとりや

ならひとや

しらさくの

おきなくさ

行末の

ありさまは

しられたり

うそふきて

なみたをも

ふゆはまた

さゆる夜の

聞あかし

こほり江に

をしかもめ

あはれをかけて	わかきとき
心すなほに	しんしやうに
あひくとして	にくけなく
人のいひよる	折ふしは
たとひ心に	あはすとも
もらさぬやうに	あひしらひ
たゝ何となく	かともなく
かきとゝめたる	水くきの
うちをきかたく	あらんこそ
見るにかたちも	ますへけれ
此ことはりは	みな人の
とりくにある	事なれと
心のみつの	あさくと
かきあつめたる	もしほくさ
よそのみるめも	はつかしきかな

群書類從卷第三百十二

物語部六

無名草子

やそぢあまり三とせの春秋。いたづらにて過ぬ
ることをおもへばいとかなしく。たま／＼ひ
ととむまれたるおもひ出に。うき世のかたみ
にすばかりのことなくてやみなむかなしさに
髪をそりこゝろをそめて。(おもひ)わづかにすがたば
かりはみちにいりぬれど。心はたゞそのかみ
にかはることなし。とし月のつもりにそへて。
いよ／＼むかしはわすれがたく。ふりにし人
はこひしきまゝに人しれぬしのびねのみなか
れて。こけのたもともかはくよなきなぐさめに
は。花簪はなこをひぢにかけて。朝毎に露をはらひ

つゝ。野への草むらにまじりて花をつみつゝ。
ほとけにたてまつるわざをのみして。あまた
年へぬれば。いよ／＼かしらの雪つもり。おも
ての浪もたゝみて。いとゞ見まうくなりゆく
かゞみのかげも。われながらうとましなければ。
人に見えむこともいとゞつゝましなければ。み
ちのまゝにはなをつみつゝ。ひむがし山わた
りをとかくかゝづらひありくほどに。やうや
う日も暮がたになり。たちかへるべきすみか
もはるけければ。いづくにても行とまらむ所に
よりなんとおもひて。三界無安猶如火宅とくち
ずさみてあゆみ行ほどに。最勝光院の大門あ

きたり。うれしくてあゆみいるまゝに。みだうのかざりほとけの御さまなどいとおめでたくて。淨土もかくこそと。いよくそなたにすゝむころもよほさるゝ心ちして。むかしよりふるき御願もおほくおがみ奉つれど。かばかり御心にいたりたりけるほど見えて。かねのはしらたまのはたをはじめ。障子の繪まで見どころあるを見侍るにつけても。まづ此世の御さはひもきはめ。後の世もめでたくおはしましけるよとうらやましく。ふしおがみたち出て。にしざまにおもむきて。京のかたへあゆみ行に。みやこのうちなれど。こなたざまはむげに山ざとめきていとあかし。五月十日よひのほど。ひごろ降つるさみだれのはれ間まちいで。ゆふ日はやかにさしいで給ふもめづらしきに。ほとゝぎすさへ友なひがほにかたらふも。しでの山路の友と思へば耳とまりて。

おち歸りかたらふならは時鳥死出の山ちのしるへともなれとうちおもひつゞけられて。こなたさまには人里もなきにやと。はるゝ見わたせば。いなばそよがむあきかぜおもひやらるゝさなへ青やかにおひ。わたりなどむげに都とをき心地するに。いとふるらかなるひはだのむねとをきより見ゆ。いかなる人のすみ給ふにかと。あはれにめとまりて。やうゝあゆみよりて見れば。ついぢも所々くづれ。かどのうへなどもあばれて人すむらんとも見えず。たゞしんでむ。たい。わたどのなどやうのやども。しようゝいとことすみたるさまなり。庭の草もいとふかくて。光源氏の露わけたまひけむよもぎも所えがほなる中をわけつゝ。中門よりあゆみいりて見れば。南おもての庭いとひろくて。くれ竹うへわたし。卯の花がさねなど。まことにほとゝぎすかげにかくれぬべし。やま里めき

てみゆ。ぜんざいむら／＼いとおほく見ゆれど。まださかぬ夏草のしげみ。いとむつかしげなる中に。なでしこ。ちやう春ぐゑばかりぞ。いと心よげにさかりとみゆる。軒近きわかきの櫻なども花盛おもひやらるゝ木だちおかし。南おもてのなか二間ばかりは持佛堂などにやと見えて。かみしやうじしろかにたてわたしたり。ふだんかうのけぶりけだかきまでくゆりみちて。みやうかうのかなどかうばし。まづ佛のおはしましけるとおもふもいとうれしくて。はなこをひぢにかけ。ひがさをくびにつらされながら。えむにあゆみよりたれば。しんでんの南東とすみふたまばかりあがりたるみすのうちに。しやうのこのをとほの／＼きこゆ。いとすゞろにく／＼ゆかしきに。わかやかなる女ごゑにて。いとあはれなる人のさまかな。さほどのとしにいかばかりの心にて。いと見ぐ

るしげなるわざをし給ふぞ。をののこまちがひぢにかけけむかたみよりはめでたくなどいふ人あり。阿祿仙につかへけむ太子の御こゝろよりも有がたくこそおぼゆれ。などいふよりうちはじめ。おなじほどなるわかき人三四人ばかり色々のすゞしのきぬねりぬきなどなへばみたるきて。えむにいでたり。ところのさまかみさびふるめかしかりつるほどよりは。めやすきさまなめるかなと見る。むかしの身のありさま。いかなりし人のはてぞなど。なつかしくとひたづねあへれば。いとうとましげなるありさまをおちにてみなどもしたまはで。むげにわかきほどに。慈悲ぶかくものしたまひけるも。かゝる佛の御あたりにものせさせ給ふ御ゆへにや侍らむなど。いひはじめて。わかくての身のありさま。人々しくぞものなどかたりきこえむ。きゝどころありとおぼしめさ

るべきものにも侍らず。たゞとしのつもりには。あはれにもおかしくもめづらしくもさまざまおぼしめされぬべきことをさゝつめて侍りしかども。そもひさしくなりて。はか／＼しくもおぼえねば。いとかひなしやときこゆれば。それこそはさかまほしけれ。さて／＼むかしより身に有けむことも。さゝつめけむのことも。露のこらずこの佛の御まへにてさむぐゑしたまへといへば。むかしがたりはげにせまほしくて。花こ。ひがさなどえんにうちをきて。かうらんによりかゝりぬ。人なみ／＼のことには侍らざりしかども。恥ながら十六七に侍りしより。皇嘉門院と申侍りし聖子が御母の北の政所にさぶらひて。讃岐院近衛院などくらゐの御時崇徳も。しきのうちもとき／＼見侍りき。さてうせさせ給ひしかば。女院にこそさぶらひぬべく侍りしかども。猶九重のかすみのまよひ

にはなをもてあそび。雲のうへにて月をもながめまほしきころあながちにはべり。後白川院七十七くらゐにおはしまし。二條院七十八春宮と申侍りしころ。その人かずにはべらざりしかど。をのづからたちなれ侍りしほどに。さるかたに人にもゆるされたるなれ。ものになりて六條院七十九高倉院などの御よまで。とき／＼つかふまつりしかども。つくもがみくるしきほどになりはべりしかば。かしらおろして山ざとにこもりぬはべりて。一部よみたてまつることをこたり侍らず。今朝とく出はべりて。とかくまどひはべりつるほどに。いままでけたいし侍りにけりとて。くびにかけたる經ぶくろより。さうし經とりいでてよみぬたれば。くらうてはいかになどあれば。今はくちなれてよるもたどる／＼はよまれはべりとて。一のまきのすゑつたか方便品比丘偈などよりやう／＼し

のびてうちあげなどすれば。いとおもはずにあさましがりて。いま少しかくてこそきかめとて。えむへよびのぼすれば。いと見ぐるしくかたはらいたく侍れど。法花經にところをおき奉りたまはんを。しゐていなびきこえむもつみえ侍りぬべしとて。えんにのぼりたれば。おなじくはこれにと。中門のらうによびのぼせて。たゝみなどしかせてすへられたり。十羅せちの御とくに殿上ゆるされ侍りになり。まして後の世もいとゑたのもしやなどきこえて。ところぐうちあげつゝよみたてまつる。いとおもはずに。僧などだにかばかりそひて。七八人とゐなみて。こよひは御とぎして。やがてゐあかさん。月もめづらしなどいひて。つどひあはれたり。一部よみはてゝ。滅罪生善などずゝをしすりて。いまはやすみ侍りなむとてよりふしぬれど。このひとゝはそゝろごと

どもいひ。經のよきあしきなどほめそしり。花もみぢ月雪につけても。こゝろぐとりぐにいひあへるもいとおかしければ。つくぐときゝ臥たるに。三四人はなをゐつゝ。物がたりをしめぐとうちしつゝ。さてもぐなにごとかこのよにとりて第一にすてがたきふしある。をのゝ心におぼされむことのたまへといふ人あるに。はなもみぢをもてあそび。月雪にたはるゝにつけても。この世はすてがたきものなり。なさけなきもあるをもきはす。心なきをもかずならぬをもわかぬは。かやうの道ばかりにこそはべらめ。それにとりて。ゆふづくよほのかなるより。ありあけの心ぼそきありもきはらず。ところもわかぬものは。月のひかりばかりこそ侍らめ。夏もまして。秋冬など月あかき夜は。そゝろなる心もすみ。なさけなきすがたもわすられて。しらぬむかし

いまゆくさきも。まだ見ぬこまもろこしも。残るところなくはるかにおもひやらるゝことは。たゞこの月にむかひてのみあれ。さればわ^{王子}うしゆうはたいあむ^{安道}だうを尋ね。せうしがめ^{蕭史}の月に心をすまして雲にいりけむも。ことはりとぞおぼえ侍る。この世にも月に心をふかくしめたるためし。むかしも今もおほく侍るめり。勢至菩薩にてさへあはしますなれば。くらきよりくらきにまよはんしるべまでもとこそ。たのみをかけたてまつるべき身にて侍れといふひとあり。またかばかり濁りおほかるすゑの世まで。いかでかゝる光のとどまりけむと。むかしの契りもかたじけなくおもひしらるゝことは。此月の光ばかりこそ侍るを。おなじ心なるともなくてたゞひとりながむるは。いみじき月のひかりもいとすさまじく。見るにつけてもこひしきことおほかるこそいとわ

びしけれ。また此世にいかでかゝることありけむと。めでたくおぼゆることは。ふみにこそはべるなれ。まくらさうしにかへすゝ申て侍めれば。ことあたらしく申にをよばねど。なをいとめでたきものなり。遙なるせいかにかきはなれて。いくとせ逢見ぬ人なれど。ふみといふものだに見つれば。たゞ今さしむかひたる心ちして。なか／＼うちむかひては。思ふほどもつづけやらぬこゝろの色もあらはし。いはまほしきことをもこま／＼とかきつくしたるを見るこゝろはめづらしくうれしく。あひむかひたるにおとりてやはある。つれ／＼なるあり。むかしの人のふみ見いでたるは。たゞそのありの心地して。いみじくうれしくこそおぼゆれ。ましてなき人などのかきたる物など見るは。いみじくあはれに。年月のおほくつもりたるも。只今筆うちぬらしてかきたるやうなる

こそ返々めでたけれ。たゞさしむかひたるほ
どのなさけばかりにてこそはべれ。これはむ
かしながら露かはることなきもめでたきこと
なり。いみじかりける延禧天曆村上の御ときのふ
ることも唐土天竺のしらぬよの事も。此文字
と云ものなからましかば。今の世の我らがか
たはしもいかでかかきつたへましなどおもふ
にも。猶かばかりめでたきことはよも侍らじ
といへば。また何のすぢとさだめていみじと
いふべきにもあらず。あだにはかなきことに
いひならはしてあれど。夢こそあはれにいみ
じくおぼゆれ。はるかにあとたえにしかな
れど。夢にはせきもりもつよからで。もとこし
道もたちかへることおほかり。むかしのひと
もありしながらのおもかげをさだかに見るこ
とは唯此道ばかり侍。能字上東門院の。今はなきね
の夢ならでとよませ給へるも。いとこそあは

れに侍などいふ人あり。またあまたよにとり
ていみじきことなど申べきにはあらねど。涙
こそいとあはれるなる物にて侍れ。なさけなき
ものゝふのやはらぐことも侍。いろならぬ心
のうちあらはすもの涙にはべり。いみじくま
めだちあはれるなるよしをすれば。少しもおも
はぬことには。かりにもこぼれず。ことにはか
なきことなれど。うち涙ぐみなどするは。心に
しみておもふらむ程をしはかられて。哀にこ
ころぶかくこそおもひしられ侍れ。亭子のみに
かどの御使にて。公忠きんたゞの弁の。なくを見る
こそあはれなりけれとよみけむ。ことはりに
ぞ侍るやといふ人あれば。またことあたらし
く申べきにはあらねど。此世にとりて第一に
めでたくおぼゆることは。あみだ佛こそおは
しませ。念佛の功德のやうなど。はじめて申べ
きならず。南無あみだ佛と申すは。返々めでた

くおぼえ侍るなり。人のうらめしきにも。世の業の侘しきにも。ものの美敷にもめでたきにも。たゞいかなる方につけても。強て心にしみても。もののおぼゆるなぐさめにも。なむあみだ佛とだに申つれば。いかなることもこそ。とくきえうせて。なぐさむ心ちする事にてはべれ。人はいかゞおぼさるらむ。身にとりてはかくおぼえ侍れば。人のうへにも。たゞ南無阿彌陀佛と申人はおもふならんと。心にくゝおくゆかしく。哀にいみじくこそ侍れ。左衛門督公光ときこえし人。本見なれたる宮づかへびとの。こと心などつかひけるときゝてのち。たまたまゆきあひて。いまはそのすぢのことなどつゆかけず。おほかたよのものがたり。うちわたりのことばかり。ことずくなにて。南無あみだ佛南無あみだ佛といはれて侍りけるこそ。しかた行先のこといはんよりもはづかし。

あせもながれていみじかりしかとかたる人侍りしか。ましてのちの世のため。いかばかり功德のなかに。何事をおろかなると申なかに。おもへどくゝめでたくおぼえさせ給ふは法花經こそおはしませ。いかにおもしろくめでたきもののがたりといへど二三べんも見つれば。うるさきものなるを。これは千部を千部ながらさくたびにめづらしく。文字ごとにはじめてきゝつけたらんことのやうにおぼゆるこそ。あさましくめでたけれ。無二無三とおほせられたるのみならず。法花最第一とあめれば。ことあたらしくかやうに申べきにはあらねど。さこそはむかしよりいひつたへたることも。かならずさしもおぼえぬことも侍るを。是はたまゝむまれあひたるおもひいでにたゞあひたてまつりたるばかりとこそおもふに。なと源氏とてさばかりめでたきものに此經のも

じの一偈一句おはせざるらむ。なにごとかつくりのこしかきもらしたることひとことも侍。これのみなむ第一のなむとおぼゆるといふなれば。あるがなかに若きこゑにて。むらさき式部が法花經をよみ奉らざりけるにやといふなれば。いさや。それにつけてもいとくちおしくこそあれ。あやしの我うたに。後のよのためはさるものにて。人のうちきかむもなさけをくれておぼえぬべきわざなれば。あながちにしても見たてまつらまほしくこそあるに。さばかりなりけんひと。いかでかさることあらんなどいへば。又さるはいみじく道心あり。後世のをそれをおもひて。朝夕おこなひをのみしつつ。なべて世には心もとまらぬさま也ける人にやとこそ見たためれなどいひはじめ。さても此源氏つくりいでたることこそ。おもへどこのよ一ならずめづらかにおも

ほゆれ。誠に佛に申こひたりけるしるしにやとこそおぼゆれ。それより後のものがたりは。おもへばいとやすかりぬべき物なり。かれをさいかくにてつくらんに源氏に増りたらんことを作り出す人ありなむ。わづかにうつぽ。たけとり。すみよしなどばかりをものがたりとて見けむ心ち。さばかりに作りいでけむ凡夫のしわざともおぼえぬことなりなどいへば。またありつる若きこゑにて。いまだ見はべらぬこそくちおしけれ。それをかたらせ給へかし。きゝはべらむといへば。さばかりおほかるものを。そらにはいかゝかたりきこえん。本を見てこそいひきかせたてまつらめといへば。たゞまづこよひおほせられよと。ゆかしげにおもひたれば。げにかやうのよひ。つれづれなぐさめぬべきわざなどくちゝいひて。まきまきのなかにいづれかすぐれて心にしみてめ

でたくおぼゆるといへば。きりつばにすぎたる
まきやは侍るべき。いづれの御時にかとうちは
じめたるより。源氏はつもとゆひのほどまで。
ことばつゞき有さまをはじめ。あはれにかな
しきこと此まきにこもりて侍ぞかし。はゝき
ぎのあまよの品さだめ。いと見どころおほくは
べるめる。夕がほ。ひとすぢにあはれに心ぐる
しき巻にて侍るめり。紅葉の賀。花のえん。とり
どりえんにおもしろし。えもいはぬまきく
にはべるべし。あふひ。いとあはれにおもしろ
き巻なり。榊。伊勢の御出立のほどもえんにい
みじ。院かくれさせ給ひて後。ふぢつばの宮さ
まかへ給ふほどなどあはれなり。須磨。あはれ
にいみじき巻なり。京を出給ふほどのことども
たびのすまゐのほどなどいとあはれにこそは
べれ。あかしは浦より浦にうらづたひ給ふほ
ど。又うらははなれて京へおもむき給ふほど。

都出し春のなけきにおとらめや年ふる浦をわかれぬる秋
などあるほどにみやこを出給ひしは。いかに
もかくてやむべきことならねば。またたちか
へるべき物とおぼされけむに。おぼしなぐさ
み給ひけむ。此浦はまたはなにしにかはと。か
ぎりにおぼしとぢめけむほど。ものごとにめ
とまり給ひけん。ことはりなりかし。よもぎふ。
いとえんある巻にてはべる。あさがほ。むらさ
きのうへのものおもへるがいとをしきなり。
十七の竝のなかに。はつね。小蝶などは。おも
しろくめでたし。野わきのあしたこそ。さまざ
ま見どころありて。えんにおかしきことおほ
かれ。ふぢのうら葉。いとこゝろゆきうれしさ
巻なり。わかなの上下ともにうるさきことど
もあれど。いとおほくて見どころある巻なり。
柏木の右衛門督のうせ。いとあはれなり。御法。
幻。いとあはれなる事ばかり也。宇治のゆかり

は。こじまにやうかはりて。ことづかひもなに
ごともあるど、あねみやのうせをはじめ中の
きみなどいとくなどくちくにいへば。此
若きひと。めでたき女はたれくか侍るとい
へば。きりつぼのかうい。□の宮。あふひ
のうへのわれから心をもちぬ。むらさきのう
へさらなり。あかしも心にくくいみじといふ
なり。またいみじき女は。おぼろ月夜の内侍の
かみ。源氏ながされ給ふもこのひとのゆへと
おもへばいみじきなり。いかなるかたにおつ
るなみだにかなど。みかどのおほせられたる
ほどなどいといみじ。あさがほの宮。さばか
り心づよき人なめり。世にさしもおもひとめ
られながら。心づよくてやみたまへるほど。い
みじくこそおぼゆれ。うつせみもそのかたは
むげに人わろき。後にあますがたにてまじら
ひぬたる。また心づきなしなどいへば。空蟬は

源氏には誠にうちとけず。うちとけたりと。と
りどりに人の申すはいかなることにかといふ
ひとあれば。はくきとにいふ。なにとてうちと
けざりけりとは見えて侍るものを。あしくこ
ころえてさ申すひとくもときく侍なめり
といふ。うぢのあねみやこそ。かへすくいみ
じけれ。六條の宮す所の中將こそ。みやづかへ
びとのなかにいみじけれ。このもしき人はは
なちる里。なにはかりまほならぬかたちあり
さまながら。めでたき人々にたちまじりて。お
さおさをとらぬよのおぼえにて。まめ人の大
將子にしなどせられたるが。このもしういみ
じきなりといへば。またまめ人をばやしなひ
ぎみにして侍らん。さばかりめでたかりしあ
ふひのうへの御はらのきみも。など人わろき
のちのおやをばまうけ給ふべきとて。いとは
らだたしげなめれば。たれもうちわらひぬ。ま

たすゑつむはなこのもしといふとてにくみあはせたまへど。大貳のさそふにも心づよくなびかでしにかへり。むかしながらのすまゐあらためず。終にまちつけてふかきよもぎのものと心をとて。わけいり給ふを見る程は。誰よりもめでたくぞおぼゆる。みめよりはじめて。何事もなのめならむ人のためには。さばかりの事のいみじかるべきにも侍らず。其人がらには佛にならむよりもありがたきくせには侍らずや。六條の宮す所は。あまりにもものけに出らるゝこそおそろしけれど。ひとごまいみじく心にくゝこのもしく侍なり。御子の中宮も我から心もちゐなど。いみじくこゝろにくき人のなかにも。ませきこえつべきかなどやらんとねましきは。源氏のおとどの。あまりにもてなし給ふが心づきなかるべし。玉かづらのひめきみこそこのもしき人ともきこえつ

べけれ。みめかたちをはじめ。人ごま心ばへなど。いとおもふやうによきひとにておはするうへに。よにとりてとりくにおはする。おとどたちふたりながら左右におやにて。いづれもをろかならずかずまへられたるほど。いとあらまほしきを。その身にてはたゞ内侍のかみにて。冷泉院などにおぼしときめかされ。さらずば。としごろ心ふかくおぼしわたる兵部卿宮のきたのかたなどにて。もあらばよかりぬべきを。いとこゝろづきなきひげぐろの大將の北のかたになりて。すぎまもなくまもりいさめられて。さばかりめでたかりしのちのおやも。見たてまつることは絶て過すほどに。いといぶせく心やましき。またものはかなかりしゆふがほの。ゆかりともなくあまりにほこりにさがくしくて。このよにかゝるをやのこゝろは。などいへるぞあの人の御さまに

はふさはしからずおぼゆる。またつくしくだりもあまりしなくだりておぼゆる。されどおほかたの人ざまはこのもしき人なり。いとをしき人。むらさきのうへかぎりなくかたひしくいとをしく。あたりのひとの心ばへもいにくき。ちゝ宮をはじめ。おほぢのそうにいたるまで。おもはしからぬ人々なり。まゝはゝなどのこゝろばへさるべきなかなれど。さばかりになりぬる人のために。いとさしもやはあるべき。ゆふがほこそいとくをしけれ。はゝにもにずいみじげなるむすめもちたるぞ。その身のありさまにはさらでもありぬべき。かやうならむ人は。たゞあとかたもなくやみなむこそ。いますこししのびどころもあらめ。まめ人の大將の北のかた。ふぢのうら葉のきみ。むげにえん有さまなむとぞ見えざめれど。何となくおさなくよりいとをしき人におもひそ

めてし人なり。うぢの中の宮こそいとくをしけれ。はじめはいとさしもおぼえざりしかど。兵部卿の宮まめ人のむこになりてものおもはしげなるがいとをしきなり。ましてかばかりにてやかけはなれなむなどいへるは。見るたびに涙とゞまらずこそおぼゆれ。女三宮こそいとをしき人ともいひつべけれど。袖ぬらせとやひぐらしのとよみて。月まちてもといふなるものをなどあるほどは。いと心ぐるしきを。あまりにいふかひなきものから。さすがにいろめかしきところのおはするが。心づきなき也。かやうの人は。ひとすぢにこめかしとおほどきたればこそらうたけれ。あさましきふみおとゞに見ゆることも。その御心のしわざぞかし。さることありとおぼすらんには。とどまらんをだに。しゐてそゝのかしいだしてんとぞおぼさるべきを。さかしらに心ぐるし

げなることどもいひとめて。さる大事をば
ひきいだし給へるぞかし。てならひのきみこ
そ。にくきものともいひつべき人。さま／＼身
をひとかたならずおもひみだれて。

鐘の音の絶るひ／＼きにねをそへて我世盡ぬと君に傳へよ

とよみて身をすてたるこそいとをしけれ。兵
部卿の宮の御ことき／＼つけて。かほる大將。

浪越る比ともしらす糸の松まつらむとのみおもひける哉

とのたまへるを。ところたがへならんとて。む
すびながら返したるほどこそ心まさりすれ。
またれいのひと。おとこの中にはたれ／＼か
侍るといへば。源氏のおとこの御事は。よしあ
しなどさだめんも。いとことあたらしくかた
はらいたきことなれば。申すにをよばねども。
さらでもとおぼゆるふしく。おほくぞ侍る。
おほうちやまのおとこ。わかくよりかたみに
へだてなくて。なれむつびかはして。あまよの

御ものがたりをはじめ。

もろともに大内山はいてつれと行方見せぬいさよひの月

といへる。また源内侍のすけのもとにて。たち
ぬきてをどしきこえしやうのことはいひつく
すべくもなし。なに事よりも。さばかりわづら
はしかりしよのさはぎにもさはらず。須磨の
御たびずみのほどたづねまいりたまへりし心
ふかさは。よ／＼をふともわするべくやはある
と。それおもひしらすよしなきとりむすめし
て。かのおとこの女御といどみきしろはせ給
ふ。いと心うき御心なり。ゑあはせのおり。須磨
の繪ふたまきとりいでて。かの女御まけにな
し給へるなど。返々くちおしき御心なり。また
すまへおはするほど。さばかり心ぐるしげに
おもひいり給へるむらさきのうへもぐしきこ
えず。せめて心すましてひとすぢにをこなひ
つとめ給ふべきかとおもふほどに。あかしの

入道がむこになりて。ひぐらしびわの法師と
むかひゐて。琴ひきすましておはするほど。む
げにおもひ所なし。またさま／＼なりし御こ
としづまりて。いまはさるかたにさだまりは
て給ふかとおもふよのすゑにたちかへりて。女
三の宮まうけて。わかやぎ給ふだにつきなさ
に。衛門督のこと見あらはして。さばかりをぢ
はゝかりまうでぬものを。しゐてめしいでて。
とかくいひまさぐり。はてにはにらみころし
給へるほど。むげにけしからぬ御心なりかし。
すべてかやうのかたにづしやかなる御心のを
くれ給へりけるとぞおぼゆる。兵部卿の宮。さ
して其ことのよしあしなどはおぼへぬ人の。源
氏のおとゞの御はらからいとおほかる中に。と
りわき御中よくて。なに事もまづきこえあはせ
給ふ。いとこゝろにくきなり。玉かづらの御事
えしえたまはぬ。むげに心をくれたり。おほう

ちやまのおとゞいとよきひとなり。まして須磨
へたづねおはしたるほどなど。かへす／＼めで
たし。まめ人をいたくわびさせたるこそうら
めしけれど。そもことはりなりや。なごりなく
おもひよはりてゆるすほどなどは。いとよく
こそせられためれ。まめ人の大將。わかき人と
もなくあまりにうるはしだちたるは。さうざ
うしけれども。づしやかなるかたはおとゞに
もまさり給へり。さま／＼きこゆることども
にもなびかで。ふぢのうら葉のうらとけ給ふ
をこゝろながくまちつけたまへるほどありが
たし。女だにさることはいかでかはとぞおぼ
ゆる。さていとおもふやうにすみはてたまひ
にたるよのすゑになりてよしなきおちばのみ
やまうけて。まめ人のなをあらためさまかは
り給ふぞおもはずなるや。かしはぎのゑもん
のかみ。はじめよりいとよき人なり。いはもる

中將などいはれしほどよりふぢのうら葉のう
らとけしほどなども。いとをかしかりし人の。
女三のみやの御事。さしも命にかふばかりおも
ひいりけむぞもどかしき。もろともに見たてま
つりたまへりしかど。まめ人はいでやと心を
とりしてこそおもへりしに。さしもこゝろに
しめけんぞいと心をとりする。むらさきのう
へはつかに見て。のわきのあしたながめいり
けむまめびとこそいといみじけれ。かぜのほ
どいとあはれにいとをしけれど。そもあまり
身のほどおもひくんじ。人わろげなるぞ。さし
もあるべきかとおぼゆる。そのおとこのこう
ばいの大納言といふ人。おんふたぎのあり。た
かさごうたひしよりはじめ。弁少將などいひ
て。ふぢのうらばにてあしがさうたひしほど
なども。いといたかりし人の。源氏などうせ給
ひて。すゑの世にとりなきしまのかうほりと

かやして。かほる大將の。みかどの御むこにな
る。そねみてつぶやきなどしありくほどこそ
心づきなけれ。にほふ兵部卿宮。わかき人のた
はれたるはさのみこそといふなるに。けしか
らぬほどにいろめさき給ふさまこそふさは
しからね。むらさきのうへのとりわき給へり
しゆへ。二條院にすみ給ふこそいとあはれな
れ。かほる大將。はじめよりをはりまで。さら
でもとおもふふしひとつ見えず。かへすく
めでたき人なむめり。誠に光源氏の御子にて
あらんだに。はゝ宮のものはかなきをおもふ
にはあるべくもあらず。むらさきの御はらな
どならばさもありなん。すべてものがたりの
中にも。ましてうつゝの中にも。むかしも今も
かばかりの人はありがたくこそなどいへば。
又ひと。さはあれど。けぢかくまめくしげな
るかたはおくれたる人にや。うきふねのきみ。

すもりの中の君などの。兵部卿宮にはおもひ

をとし侍るこそくちおしけれといふなれば。

又。そは大將のとがにはあらず。女のせめていろなる心のさまよからぬゆへにぞ侍る。すもりのきみは心にくき人のさまなれば。にほふさくらにかほる梅と。こよなくたちまさりてこそ侍るめれなどいへば。またれいのひと。人人のありさまはあろくさして侍りぬ。あはれにもめでたくも。心にしみておぼえさせ給ふらむふしく仰られよといへば。いとうるさきよくぶかさかななむどわらふく。あはれなることはきりつぼのかういのうせのほど。みかどのなげかせ給ふほどのこと。長恨歌の女もおもひしかぎりあればふでおよばざりけむ。おばなの風になびきたるよりもなよびかに。なでしこの露にぬれたるよりもらうたくなつかしかりし御さまは。花鳥の色にも音に

もよそふべきかたぞなき。

尋行まほろしもかな傳にても玉の有かをそことしるへく

とて。ともしびをかうげつくして。ねぶることなくながめおはしますなどあるに。なに事も残りの六十卷はみなをしはかられ侍りぬ。また夕がほのうせのほどのことも。空にうちくもりて風ひやうかなるに。いたくながめて。

見し人のけふりを雲と詠れは夕の空もむつまじき哉

とよみて。まさにながき夜などうちずし給ふところ。あふひのうへのうせのほどのこともあはれなり。御わざの夜ちちとどのやみにまよひたまへるなど。ことはりにあはれなり。にばめる御ぞをたてまつりかふとて。われさきだたましかばふかくそめ給はましなどおぼして。

眼あれは薄すみ衣浅けれと涙を袖をふちとなしける

とよみたまふところ。又風あらゝかに吹。しぐ

れうちしける程に。涙もあらそふこゝちして。雨となり雲とやなりにけむ。いまはしらずとひとりごち給ふに。頭中將參て。

みし人の雨となりにし雲ゐさへいとゝ時雨にかきくらす哉とあるところ。またらうたくし給ふわらはの。かざみのしやうぞくなべてよりもこくて。いみじくくんじしめりてさぶらふを。いと哀におぼして。とりわきらうたくし給ひしかば。われをさなんおもふべきと慰め給へば。いみじく泣て御前にさぶらふ所など。いとあはれなり。また御いみはてゝさみもいで給ひ。ひごろさぶらひつる女ばらども。をのゝあからさまになどとて。をのがじしわかれおしむところ。いたくあはれなり。またかきたまへる御手ならひども。おとゝ見てなき給ひなどするも。すべてあはれなるなり。須磨のわかれのほどのことも。あふひのうへのふるさとにまかり

申しにおはして。

鳥へ山もえし煙にまかふやと蜚のしほ焼うらみにそゆく
とある所。またけうだいに御びむかき給ふとて見たまへば。いとおもやせたるかげの。われながらきよらなるもあはれにおぼえて。此かげのやうにややせ侍とて。

身はかくてさすらへぬ共君かあたりさらぬ鏡の影は離れし
ときこえ給へば。むらさきのうへなみだをひとめうけて見をこせて。

別るとも影たにとまる物ならは鏡をみてもなくさみなまし
とある所。また賀茂のしもの御やしろのほどにて。神にまかり申給ふとて。

うき世をは今そ別るゝとゝまらむ名をは組の神にまかせて
とある所。またいでたまふあか月。むらさきのうへ。

惜からぬ命にかへてめのまへの別をしはしとゝめてしか
とのたまへるこそいとひとわろけれ。なにの

ひとかすなるまじきはなちるさとだに。

月影のやとれる袖はせはくとも留ても見はやあかぬ光を
とこそきこえ給ふめれ。またうらにおはしつ
きて。なぎさによるなみのかへるを見たまひ
て。うらやましとうちずむじて。ながむるそら
はおなじ雲ゐになどある所。また心づくしの
秋風にうみは少しとをけれど。ゆきひらのそ
ちのせきこゆると。うらなみいとちかくきこ
えて。

戀作てなくねにまかふ浦浪はおもふかたより風や吹らむ
とよみ給ふ。八月十五夜の殿上のあそびこひ
しくて。ところ／＼ながめ給ひしむかしをお
もひやりたまふにも。月のかほのみまぼられ
て。二千里の外古人の心とずむじたまへると
ころ。また南殿のさくらはさかりになりぬら
んかし。ひととせの花のえむに院のうへの御
けしき。うちのうへなどおもひいで給て。

いっとなく大宮人の戀しきに櫻かさししけふはきにけり

とよみ給ふところ。またおほうちやまのおは
して。かたみになごりおしみ。うたよみふみつ
くりかはし給ふほどのことどもなど。あかし
にて二條院へつねよりも御ふみこまやかに
て。

しほ／＼とまつそ流るゝ假初にみるめは蜚のすさみなれ共
とある御返事に。

うらなくもたのみける哉契しを松より浪はこえし物そと
とあるこそいとあはれなれ。またかしは木の
右衛門督のうせのほどの事どもこそあはれに
侍。女三の宮にふみたてまつるとて。手もわな
なけば。おもふ事もみなかさして。

今はとてもえむ煙もむすほ／＼れ絶ぬおもひのなをや残らむ
とよみて。あはれとだにのたまはせよ。心のど
めて人やりならぬやみにまどはむ道の。ひか
りにもし侍らむとある御かへりに。

立そひて消やしなましうき事をおもひみたるゝ煙くらへにとて。をくるべくやはとある。女宮ぞにくき。又ちゝおとゝのさまゝのことどもなたまひつゞけて。そらをあふぎてながめ給ふに。ゆふべのくものけしきにび色にかすみて。はなちりたる木ずゑども。けふぞめとまりたまふ。

木の下に雪にぬれてさかさまに霞の衣きたる春かな

とある所。いとあはれなり。むらさきのうへのうせのほどのことども。申もをろかなり。なくなりてゝふしたまへるを。まめ人のほのかに見て。

古の秋のゆふへの戀しきにいまはと見えし明くれの夢

野分のまぎれに見たてまつりたまへりしことを。おぼし出たるなるべし。まぼろしに女房のこゑにて。いみじくつもりたる雪かなといふをきいたまふにも。かの心ぐるしかりしゆきのよのこと。たゞ今の心ちして。くやしうかな

しきにも。

うき世には雪消なむと思へとも思ひの外にわれそほとふるとよみたまふところ。又御しつらひなども。をのづからさびしくことそぎてみえわたさるゝも心ぼそくて。

いまはとてあらしやはてむなき人の心とゝめし春の垣ねをとある所。また御ふみどもやりたまひて。經にすかすとして。

かきつめて見るも悲しきもしほ草おなし雲の煙ともなれとある所も。すべてまぼろしはさながらあはれに侍。また宇治のあねみやのうせこそ。あはれにかなしけれな。かほる大將。かぎりあれば我御どのいろはかはらぬに。かの御かたの心よせわきたりし人々。いとくろうきかへたるを見て。

紅に落るなみたのかひなきはかたみの色を染ぬなりけり

むかひのてらのかねのこゑ。まくらをそばだ

てい。けふもくれぬとあはれにおぼしつゞけて。いきいでてものしたまはましかばなどある所。またやり水のほとりのいはにしりかけて。とみにもたちたまはで。

絶はてぬ清水になとかなき人の涕をたにとゝめさりけむとのたまふこそ。いみじくあはれにうらやましけれ。かゝる人もちてこそ。しなむいのちもいみじからめとおぼゆ。またいみじきこと。六條わたりの御しのびありきの。あかつきいでたまふみをくりきこえに。中將のきみまいるを。すみの間のかうらむのもとに。しばしひきすへ給ひて。

咲花に移るてふ名はつゝめともおらて過うきけさの朝かほいかゞはすべきとて。手をとらへたまへるに。朝霧の晴間もまたぬけしきにて花に心をとめぬとそ見るおほやけごとにきこえなしたるほどいみじくおぼゆ。又しのびてかよひたまふところのか

どのまへをわたるとて。こゑある隨身して。朝ほらけ霧たつ空のまよひにも過うかりける妹かかと哉と。ふたこゑばかりうたはせたまへるに。よしあるしもづかへをいだして。

立とまり霧の籬の過うくは草の戸さしにさはりしもせしまたはなのえんこそいみじけれ。おぼろ月夜にしくものぞなきなどいふよりうちはじめて。そのほどのことどもいといみじきに。また院のみかど山にこもらせたまひてのち。なをたちかへりいとめづらしきに。心あはたゞしくて。

沈みしも忘れぬ物をこりすまに身もなけつへき宿の藤なみなどあるもいといみじくおぼゆ。又齋宮の御くだりのほどこそ。なにとなく神さびいみじけれ。

曉の別はいつも露けきをこは世にしらぬあきの空かな松むしのなきかはしたる。おりしりがほなり

などあるほども。又伊勢までたれかななどある
もいみじ。またながされ給ふほどのことども。
かへすゝいみじけれども。さきにおろ／＼
申侍りぬれば。またひたちの宮の御もとをと
をり給ふとて。見しこゝちするごたちかなと
おぼしいでて。御くるまよりあり給ふに。これ
みつ。さきにわけさせたまひぬよもぎの露け
く侍るときこゆるに。おぼしわびて。

尋てもわれこそとはめ道もなくふかきよもきのもとを心を

とて。なをいりたまへば。これみつさきにたち
て。よもぎの露うちらはらひていれたてまつる
ほど。申ても／＼いみじともおろかなり。源
氏のわきのあした。まめ人の大將御かた／＼
のありさま見ありきたるこそいみじけれ。な
かにも中宮の御かたいとおかし。ひめぎみの
御かたにて。御すゞりかみなどこひいでて。ふ
みかき給ふほどもいといみじ。御すゞりとり

おろしてかきたまふほどこそ人わろけれど。
さまであるべきことかはとおぼす。御こゝろ
たけかりけん。

風さはきむら雲まよふ夕にも忘るゝまなく忘れぬ君

とて。かるかやにつけて。うちさゞめきてやり
たまふなどいみじ。うちのゆかりにも。いみ
じきところ／＼おほく侍れど。さのみはうる
さし。いとをしきこと。すまの御いでたちのほ
どのむらさきのうへ。をとめのまきに六位す
くせをはしたなめられて。雲ゐのかりもわが
ごとやとひとりごち給ふを。まめ人たちさゝ
て。侍従の君や候。これあけたまへとあるほど
こそいとをしけれ。わかなにて。むらさきのう
へかたしく袖もしみこほり。ふしわづらひ給
へる。あかつきおはしてたゞき給ふに。そらね
して人あけぬありのこと。うぢの中の宮かほ
る大將をはじめて。

徒にわけつる道の露しけみむかしおほゆる秋の空哉

といひやるあしたに。兵部卿宮わたり給ひて。御にほひのしめるをとがめたまひて。ともかくもいらへぬさへ心やましくて。

また人もなれる袖の移りかを我身にしめて恨つるかな

とのたまへば。女君。

見なれぬ中の衣とたのめしをかはかりにてやかけ離なん
とて。うちなきたるほどこそ。かへすくいと
をしけれ。心やましきこと。むらさきのうへに
まへぐせられぬことだにあるに。あかしのき
みまうけて。とはずがたりしおこすること。う
らよりをちにこぐふねのいとはれて。文のう
はづつみばかりみせたること。須磨の繪ふた
巻日ごろかくして。ゑあはせのおりとりいだ
したる事。

獨りて詠めしよりは蟹のすむ方をかくてそみるへかりける
とて。おぼつかなさはなくさみなましものを

などある所よ。これはいとをしきことにもい
れつべし。女三のみやまうけて。むらさきのう
へにものおもはせたること。正月一日のひ御
かたへまいりありきて。いつしか御さは
がれもやとはぐかりながら。あかしの御かた
にとまりたること。おほうちやまのおととも。
源氏院との御中心よからずなりたること。玉
かづらのきみのひげぐろの大將のきたのかた
になりたること。ゆふぎりみやす所うせたま
はむとてのあり。

女郎花しほるゝのへをいつこと一夜計りの宿をかりけむ
とかきたるふみ。六位すくせのうへとりかく
して。いつしかかへりごといはせぬこと。まめ
人の大將おちばの宮むかへて。もとのうへな
らべもちたることあさましきこと。ゆふがほ
のこだまにとられたること。おぼろ月夜のな
いしのもとに。源氏のゆふだちのよふかして。

ちゝおとゞにみつけれたること。女三の宮のふもんのかみのふみ源氏に見えたること。てならひのきみのうせたること。ひたぶるに身をなげたらば。よしやものにとられて。はつせまうでのひとに見つけられたるほどこそ。いとむくつけけれなどいひて。ほむにむかひてこそいみじきこともあはれることもおぼゆれ。そらにはいときこえにくくこそ侍れ。いまのどかによみてきかせてまつらん。これはたゞかたはしばかりなれば。いとなか／＼におぼされぬべしなどいふなれば。又ものがたりのなかに。いみじともにくしともおぼさるむことおほせられよといへば。そもそらにはなどはゞかりながら。さごろもこそ源氏につぎてはようおぼえ侍れ。少年の春はとうちはじめたるより。ことばづかひなにとなくえんに。いみじく上ずめかしくなどあれど。さして

そのふしととりたてゝ。心にしむばかりのところなどはいと見えず。またさらでもありなむとおぼゆることもいとおほかり。一品の宮御心もちゐ有さま。あひぎやうなくぞあれど。いとあてやかによき人なり。ものがたりにかやうなる人の有は。いふがひなくほれざらねば。をこなひなどこそしためるに。これはいとよし。女二宮のあまになりこそ。又いとうれしけれ。一品宮の御こといできてのち。

思ひきやむくらの門を行過て草のまくらにたひねせむとはときこえたるに。

故郷は淺茅かはらになりはてゝ虫音しけき秋にそあらまじ今こそうれしくと院のおほせられたるもいみじ。大宮のうせ。いとあはれなり。たれかはさやうのこと心うくおもはぬ人はあるべきといふなかに。たちまちに哀にかうばかりおぼしiriけむ。いとあはれることなり。

雲をまておひのほらなむ種まきし人も尋ぬ峰のわか松

とよみたまへるこそいとかなしけれ。女二宮
しばしもおぼしのどめず。おぼしすて給ひけ
んこともことはりなり。源氏の宮こそ。いとい
みじげなるひとの。いとかたひかしくなども
なけれ。すこしものなどおもへるこそ。人は心
ぐるしきふしにてあれ。みちしばいとあはれ
なり。あすはふちせにといふより。

天の戸をやすらひにこそ出しかと夕つけ鳥よとは答へよ
などいふほども。

早き瀬の底のみくつとなりనికిと扇の風の吹も傳へよ
などあるも。またときはにての手ならひども
などいみじくあはれに。さばかりの人にさ
ほどにおもひとめられけむほど。めでたきを
見いでられたるはじめ。のりのしとのりぐし
たるほど。いと心うくうとましきを。またのち
のふるまひさへこそ。心よりほかのことといひ

ながら。人しもこそあれ。此君の御もとなる人
にしもとりもちていかれたる程は。あはれも
さめてくちおしきひとのすくせなり。さりと
ならば又しばしのいのちだにありて。心ざし
のほどをも見はてよかし。かたぐいとくち
おしきちぎりなりかし。さらでもありぬべき
ことども。大將のふえの音めでて。天人のあま
くだりたること。こがはにて普賢のあらはれ
たまへる。源氏の宮の御もと賀茂大明神の御
けさうぶみつかはしたること。悲はさのみこ
そといふなるに。あまりにけんてうなり。齋院
の御かうとの成たる事。なにごとよりも。大
將のみかどになられたることかへす。見
ぐるしくあさましきことなり。めでたきざえ
かくすぐれたるひと世にあれど。大地六反震
動することやは有べき。いとをそろしくまこ
としからぬことども也。源氏の院になりたる

だに。さらでもありぬべきことぞかし。されどもそれはたゞしきみにておはするうへに。冷泉院のくらゐの御時。我御身の有さまをききあらはして。ところをきたてまつりたまふにてあれば。さまでのとがにはあるべきにもあらず。太上天皇になずらふ御くらゐは。たゞ人もたまはるれいもあるを。これは今すこしくろしてまねびなされたるほどに。いとみぐるしきなり。さりとてみかどの御子にてもなし。そむわうにて。ちゝおとどの世よりしやう

たまはりたる人の。いとあさましきことなり。なにのいたりなき女のしわざといひながら。むげに心をとりにそし侍れ。おとどさへ院になりて。堀川院と申すかとよな。ものがたりといふものいづれもまことしからずといふなかに。これはことの外なることどもにこそあめれ。ねざめこそとりたてゝいみじきふしも

なし。またさしてめでたじといふべきころなけれども。はじめよりたゞ人ひとりごとにて。ちる心もなく。しめくゝとあはれに心いりてつくりいでけむほどおもひやられて。あはれにありがたきものにて侍れば。いづくかすこしむねのひま有。心づくしなるといふなかに。身にしみておぼゆるふしゝはたちまちにあらずと見なしたる。心さはぎたるあさましきに。

こき歸りおなし漣に寄舟のなきさを夫としらすや有けむといひいでたるをきゝつけたまへる心のうち。またことどもあらはれて。中のうへひろさはへおはするほど。

立もぬもはねをならへしむら鳥のかゝる別を思ひかけきやなどあるあり。雪の夜ひろさはにおはして。むなしくたちかへり給ふを。心ぐるしく見わびて。少將。

めくり逢むおりをもまたす限とや思ひはるへき冬のよの月
となぐさめきこゆれば。

今宵たにかけはなれたる月を見て又やは逢むめくり逢よを
宮中將も心ふかくたづねきにけるを。おもふ
こゝろあらんかしとあやめ給ふ所。またあい
關白のもとへわたらせたまふほどちかくなり
て。わりなくたいめんしたまふほどのことども。
ひめぎみの御ことどもきこえたまへるに。
いとどつゝましげなるかほひき入て。おなつ
きたるほどなるこそいとをしけれ。さてのみ
あるべきならで。出給ふあかつきのことども
など。又關白殿へわたらせ給ひてのち。あやに
くなる御きそくにてなぐさめわび。おとどひ
ろさはおはしてうれへたまへる。入道もい
とものしとおぼして。宰相中將御つかひにて
さひなみおこせたまへるを。かしらもたげて
つくぐときいても。いふべきかたもなさま

まに。いとほかなげにつゞきもなくまぎらは
して。袖にかほをしあてゝいたまへるこそ
いとをしけれ。大將。女一の宮へまいりたまふ
あり。あねうへ。

絶ぬへき契にかへておしからぬ命をけふにかきりてしかな
とて。とどめもあへぬなみだのけしきなどこ
そいとをしけれ。右衛門督たづねおはして。
覺かたき常につねなき世なれとも又いとかゝる夢を社みね
とのたまふ。かへし。まさこ。

かけてたに思はさりきや程もなくかゝる夢ちに迷ふへしとは
などあるほど。また右衛門督法師になるとき
きて。まさこ。

これはうき夢を覺すといひながら猶もうつゝの心ち社せね
とあるこそいとあはれなれ。なにごとよりも
いみじきことは。まさこと女三の宮との御あ
はひとこそ。院のかむだうにていとはしたな
きあり。中納言のきみにあひて。

吹はらふ嵐にわひて淺ちふに露殘らしときみにつたへよ
とのたまへば。中納言の君。

嵐吹淺ちかすゑにをく露の消かへりてもいつかわすれむ
などいふほどのことまで。ことどもなをりて
かへりあひたてまつりて。

なからふる命をなとていとひけむかゝる夕もあれは有けり
ときこゆれば。

消殘る身もつきもせすうらめしきあらは又うき折も社あれ
とのたまふほどなど。かへすくもめでたく
いとをし。女一の宮の御心もちゐありさまこ
そめでたけれ。なからひもみだりがはしき身
のちぎりこそいみじくちおしけれ。心もち
ゐいとよし。さばかりちぎりふかく。かたみに
おもひかはしながら。あねうへにはどかりて。
心よりほかなることこそあらめ。ひとくだり
のかへりごとも。われとはせじとおもひかた
めるほどに。關白殿にわたりたまひてのち。た

としへなき人の御さまを見るにつけてもしの
びがたくて。おりくのかへりごともしわりな
くまぎらはしてしたるほど。日ごろいみじく
あさからずかきかはさむを。このちしもあ
とたえましかば。いかにくちおしからましと。
かぎりなくおもひしられたるもことはりなり
かし。さてやうくおとぐにもおもひなび。あ
ねうへともなかくなりなどしてのちは。ま
たきこえにくくおぼしたるもさることなり。
おとぐに入ものゆるしとらせたまひしほど。
大將のちの言葉をつくして。ゐてかくして
んといられもまれたまひしに。身をばぢに
くだき。命もたゆばかりおもひしづみながら。
心づよくなびかて。我も人もひとぎさあだし
きさまにもてしづめて。やみたまひしほどは。
いみじきこゝろじやうずとこそおぼゆれ。弁
のめのと左衛門督などのものいひ給ふにて。

さには本ながらへてのをとぎき。あねうへの御ためうしろめたき心はづかはしなど。さまでおもひのどむべくやはあるなどいへば。又すべて中のうへはいみじき心上ずとこそものすめれ。わけなくひとのまどふおりは。いみじくあやにくたち心づよく。またおもひたえむとすれば。あはれを見せむとしためるを。

限りとおもひ絶ゆく世の中になと涙しもつきせさるらむといはれても。

君はさは限りとおもひ絶ぬなりひとりや物をおもひ過ぎむと。いづれもいとあはれをそへむとなるべしなどいへば。またさしもは侍らじ。たゞわが關白をうらみ。かくふかくおもひしめたるなめり。うき世をしりそめしはじめおもふには。かた／＼ちぎりあさからぬ中なれば。こせはりとはいひながら。この人のみにはあるが中にうらめしきふしある人にてこそ侍るめるを。

つゆおもひしらずといふも。まだ宰相中將といふ人のあるこそいみじくめでたけれ。あにのゑもんのかみ。大將殿のふみもてきて。けふをすござず御返事たまはらんはいかに／＼ぞ。品のかずをうちはこび。かならずけふの御返事侍らずともなどいひたるこそかへす／＼うれしけれ。すべてそれならず。あはれにありがたきことおほかるひとなり。にくきこと。ゑもんのかみ弁のめのとなどのいひ。大宮の御心がまへさもすぎてうとまし。又きさいのみや春宮などいちどにたち給ふあり。中のうへむざりいでて。

ねさめせし昔のこと忘れられてけふのまとゐにゆく心かといはれたるほどいとにくし。また關白。われとも見ましなかのちぎりとのたまふ。大將のうへむざりいでて。

武藏野のゆへのみならず枝深きこれも契のあるところみれ

とよみたるもいとにくし。また中のうへいとにくし。ゑもんのかみのうへぞかくもいふべきと。殿のおぼしたる事もはづかしき。また中のうへうせ。右衛門督法師になりなどしてのち。ゑもむのかみのうへ。とののおもひ人にて。たいのきみなどいふなつきてきみたちうしろ見してあるだに心づきなきに。うけばりてものえむじなどしたるこそにくけれ。ちゝおとゝのあるが中にかしづき。人がらもいとよかりしに。あさましくおもはずにくちおしきひとのちぎりなり。また關白こそにくきものうちにいれつべけれ。中のうへ人よりさきに見そめて。さばかりあさからぬちぎりのほどをさしもおもはず。たまゝゆきあひても。それをかぎりなくうれしくめでたしとおもひもあらで。はかなきひとことにつけて。いひなやましわびしめなどする。いと心づきなし。朱雀院の

御いみにこもりてあからさまにわたり給へるおり。院の御ふみの御へんじしゐてたづねいて。とかくいひまざるに。なごりなくむかしおもひいでられたるなどいふに。また人。かへすがへすもすてがたくおもへるも。いと人わろしなどいふに。またひと。かへすゝこのものがたりおほきなるなむは。しにかへるべきほらのあらむは。さきのよのことなればいかはせん。そののちとのにきゝつけられたるを。いとあさましなどもおもひたらで。こともなのためになべてしくうちおもひて。子どもむかへてみなどするをいみじきことにして。さばかりなりにし身のはて。さちさいはひもなげにてかくれゐたるいみじくまがゝしきことなり。そののちまさこのことにおもひあまりて。院に御ふみたてまつりたるほどこそ。さすがあはれにはべれ。

たくひなく浮身をいとひ捨しまに君をも世をも背きにし哉
ときこえたるこそいみじけれ。せめてはおと
どにかくれしのびてだにはてたらば。ひとす
ぢに身をもなきになしてもやみなむ。とのも
きゝつけて。あさましくめづらかになどもい
とおもひたらず。なべてのよにためしあらん
ことのやうに。なきみわらひみものがたりな
どしたまふほど。めづらかにあさましきかた
なりと。くらゝにいふ。またみつのはま松こ
そ。ねざめさごろもばかりのよのおぼえはな
かめれど。ことばづかひありさまをはじめ。な
にごともめづらしくあはれにもいみじくも。
すべてものがたりをつくるとならば。かくこ
そおもひよるべけれとおぼゆるものにて侍れ。
すべてこのおもむきめづらしくうたなども
よく。中納言のこゝろもちゐありさまなどあ
らまほしく。このかほる大將のたぐひになり

ぬべくめでたくこそあれ。ちゝ宮のもろこし
の親王にむまれたるゆめみたるあかつき。宰
相中將たづねきて。

ひとりしも明さしと思ふ床の上におもひもかけぬ浪の音哉
といふよりはじめ。もろこしにいであつこと
どもいといみじ。もろこしにて八月十五日の
えんに。河陽縣后のきむの音きかせんと。みか
どの仰らるゝ。御いらへは申さであざやかに
ゐなをりて。しやくとあふぎとをうちあはせ
て。あなたうとうたひたるほど。后に御覽じあ
はせて。きさは我世の第一のかたちびとな
り。中納言は日本にとりてすぐれたる人なむ
めりとごらむずるに。月日の光をならべて見
る心地してめでたくいみじと。おほせられた
るほどなどこそまことにめでたくいみじけれ。
一の大臣の五のきみこそいとあはたゞしけれ。
玉のかむざしあざやかに。うちわをてまさぐ

りにしつゝ。おきいで見いだしたるほどいとなつかしからぬを。中納言かへりなむとてわかれおしむあり。

かたみそと暮る夜毎に詠てもなくさまめやは半なる月

とよめる。いとあはれなり。中納言つくしより。

衰いかに何れによにかめくり逢て有し有明の月をみるへきといへりけむ。まぢみけん心をしはからるゝもいとあはれなるを。まことに。

此世にもあらぬ人こそ戀しけれ玉のかむさし何にかはせむとて。かみをそりころもをそめて。やまふかくたえこもりにけむほど。心ふかくめでたし。大將のひめぎみ。づしやかにおくふかくなどはなければども。

いかにしていかにかすへき歎ゝわひ背けは悲しすゝに恨めしかゝれともなてさりけむをむは玉の我黒髪のうち末そうきとて。さばかりおしげなるかみをそぎやつし

けむほど。いとあはれにかなしくこそあれ。大貳のむすめこそなにとなくいとをしくあはれなれ。くずのしたばのかぜのなどいふよりはじめて。

契りしを心ひとつに忘れねはいかゝはすへき賤のをたまきなどよみてゐて。かくしてむよなどいはれて。うちうなづきたるなども。わかき女の。さまでふゝきところなからむなどは。かやうならむぞらうたき。またよしのやまのひめぎみもいとをしき人なり。式部卿宮にぬすまれおもひあまるにや。中納言につげさせたまへといへるこそ。あさましくいとをしけれ。さて。

しての山戀わひつゝそかへりこし尋ねむ人を待とせしまになどよめるも。またいとをしなどいへば。げになにごともおもふやうにて。めでたきものかたりにて侍るを。それにつけても。その事ながらましかばとおぼゆるふしくこそ侍れ。式

部卿宮もろこしの親王にむまれたまへるをつたへきゝゆめにも見て。中納言たうへわたるまではめでたし。そのはゝ河陽縣后さへこの世の人のはいにて。よし野のきみのあねなどにて。あまりにもろこしと日本とひとつにみだれあひたるほど。まことしからず。また中納言まめやかにもておさめたるほど。いみじといひながら。まことのちぎりむすびたるひとのなくて。いづこにもたゞ夜ととものもろねにてはてたるほどむげにすさまじく。河陽縣后切利天にむまれたると。そらにつけたるほどだに。いとまことしからぬに。又かの后よしのきみのはらにやどりぬと。ゆめに見たるほどなどみだりがはしく。切利天の命はいとひさしくあなるを。いつのほどにかまたさることはあらむなどおぼゆるこそくちおしけれ。はじめよからぬものはいかなることもみ

みにもたゝず。いみじぎにつけてはかなきこともかくこそおぼえけれなどいへば。またたまもはいかにといふなれば。さしてあはれることもいみじきこともなければ。おやはありくとさいなめとうちはじめたるほど。何となくいみじぎにて。おくのたかきものがたりにとりては。よもぎのみやこそいとあはれる人。のちに内侍のかみになりて。もとのおとどにいだしたてられたるひろあきいでたるほどこそいとにくけれ。またむねとめでたきものにしたるひとの。はじめの身のありさまもとたちこそ。ねぢけばみうたてけれ。なにのかずなるまじきみこしは。のりのしなどだにいとくちおしき。ものがたりにとりてあるじとしたる身のありさまは。いとうたてありかし。またいはほにおふるまつ人もあらじといえる女こそ。さるかたにてかゝらぬなどいへ

ば。またとりかへばやこそはつゞきもわろく。ものをそろしくおびたゞしきけしたるものさま。なか／＼いとめづらしくこそ思ひよいためれ。おもはずにあはれることどもぞあむめる。うたこそよけれ。四の君こそいみじけれ。あらまほしくよきひとにて侍。また内侍のかみの。おとこになりてのちの人がらこそよけれ。またおくになりて。このひと／＼の子どもなどおほく。わか上達部殿上人内の御ものいみにこもりて。殿上にあまたひとつどひて。物語のさたなどしたるこそ。あまよのしなさだめなどおもひ出られいとめづらしくおかしといひつべきに。まねびそむじていとかたはらいたしともいひつべし。女中納言こそいといみじげにて。もとゞりゆるして子うみたるなど。また月ごとのやまひいときたなし。四のさみのはし中將の法師になりたる。いとあは

れなり。雪のあしたにみのきたるなどよ。女中納言のしにいりよみがへるほどこそ。おびたゞしくおそろしけれ。かゞみもてきて。よろづのことくらからず見たるほど。まことしからぬことどもの。いとおそろしきまでこそ侍れといへば。またかくれみのこそめづらしき。ことにとりて見どころありぬべきものの。あまりにさらでありぬべきことおほく。ことばづかひいたくふるめかし。歌などのわるければにや。ひとてにいはるゝとりかへばやにはことのほかにをされて。いまはいと見る人すくなきものにて侍る。あはれにもめづらしくも。さま／＼見どころありぬべきことにおもひよりにて。むげにさせることもなきこそくちをしけれ。いまとりかへばやとて。いといなきものいまのよにいできたるやうに。今かくれみのといふものをしいだす人の侍れかし。いまの

世には。見どころありてしいづる人もありなむかし。むげにこのごろとなりていできたりとて。せう／＼見侍りしは。ふるきものどもよりは。なか／＼心ありてこそ見え侍りしかなどいへば。源氏よりはさきのものがたりども。うつほをはじめてあまた見てはべるこそ。みないと見どころすくなく侍。こだいにしふるめかしきはことほり。ことばづかひ歌などはさせることなく侍るは。万葉集などのふぜいに見えおよびはべらぬなるべしなど。たゞいまきこえつる今とりかへばやなどの本にまさり侍るさまよ。なにごとものまねびは。かならずもとにはをとるわざなるを。これはいとにくからずおかしくこそあめれ。ことばづかひうたなどもあしくもなし。おびたゞしくおそろしきところなどもななめり。本には女中納言のありさまいとにくきに。これは何事もいと

よくこそあれ。かゝるさまになる。うたてけしからぬすぢにはおぼえず。まことにさるべきもののむくひなどにてぞあらむとをしはかられて。かゝる身のありさまをいみじくうちおしく。内侍のかみもいとよし。中納言の女になり。子うむほどのありさまも。内侍のかみのおとこになるほども。これはいとよくこそあれ。本のはもとのひと／＼みなうせてきたるほど。いとまことしからず。これはかたみにもとの人になりかはりていできたるなど。かゝることもおもひよるすゑならば。かくこそすべかりけれとこそみゆれ。四の君ぞこれはにくき。うへはいとおほどかにらうたげにて。

春のよも見るわれからの月なれは心つくしの影となりけりとよむも。何事のいかなるべしとおもひて。さばかりまめにわくる心もなき人をもちながら。心づくしにもおもふらむとおもふだに。おいら

かならぬこゝろのほどふさはしからぬを。

上にきるさよの衣の袖よりも人しれぬをはたゝにやはきて
とよみたるこそいとうたてけれ。また宮の宰相こそいと心をくれたれ。さしもふかくものをおぼえずば。なでういらぬくまなきいろごのめかしさをこのまゝ。女中納言とりこめて。いまはいかなりともと。心やすくおもひあなづるほど。まづいとわろし。さばかりになりたる身を。さしももてやつして。さるめざましきめを見てあるべしと。何事をおもふべきぞ。またそののちまさしきおとこになりて。ゐてまじろはむを。女なる四のきみだにありし。それとおもはぬはとこそよみたるに。けざやうにさしもむかひ見る／＼あらぬひとども。いとおもひもわかぬほど。むげにいふかひなし。まづこのひとのみのありさまをおもはむにも。かのれいけいでんの内侍のかみのしづ

まり。つき／＼しくひきくゝみてかくべくもあらざりしきそくを。おもひあはせよかしといへば。またそれもさまことにて。よしののこのきみむことられて。さばかりのうらみのこりたりしあたりとおもひしられて。ほけありくなどこそ。いみじく心を取りすれなどいふ。また心たかきこそ。春宮のせんじなど。いまの世にとりてはふるきもの侍れ。まことにことばづかひなどはふるめかしく。うたなどわろく侍れど。いとなだかき物にぞはべる。そのひととなきものの。身のあまるばかりのさいはいをかきあらはさむとしたるものこそ。されどさばかりおぼしめされたりし春宮には候給はず。うちのおとどのわくる心おほかるに。ちざりをむすびたるほどこそこゝろやましけれ。さて春宮の御位のすゑにむすめまいらせ。そのたよりに。たゞゆめばかりたちながら

ゆきあひて。かたみにせきかねて。たちわかれ
させたまへるほどこそ。いとあはれにかなし
けれ。あさくら。かはぎりなども。かやうのすぢ
の物ぞかし。あさくら。はじめはいとあはれに。
すゑ心にくくおぼえて。見もてゆくほどに。く
もでが子をほりかはどののうみたるぞかしと
いふほど。むげにさだまりてにくくこそおぼ
ゆれ。かのくるまにてゆきちがふいしやまに
こもりたるほど。いとあはれなり。またいはう
つなみなど。むげにたゞありに。ことばづかひ
もふるめかしけれど。大將にすかされたるつ
とめて。しそくさしの少將。女房のしやうぞく
さくの色々なるを見て。

色々の花を折ては見ゆれ共ひとりにきくにはかひなかりけり
といへるをおもひつめて女御にまゐり。后に
たちたまひ。めでたきおりおなじいろ／＼を
きて。左衛門督といふひと。ありし少將に。

菊の花かひある折も有けるをさしもなとかは言きたしけむ
といひたるこそうれしけれ。またわか宮のむ
まれたまへる御はかしの使にてこの少將まゐ
りたるに。大將あるじのかたにて御はかしと
りつぐに。見あはせてほくゑむもおかし。させ
ることなきものがたりながら。かたきうちた
るがそゞろにうれしきなり。いまやうのもの
がたりにとりては。あまのかるもこそしめや
かに。えんある所などはなけれども。ことばづ
かひなども。よつぎをいみじくまねびて。した
たかなるさまなれ。物語のほどよりはあはれ
にもあり。一條院のにしのたいに。權中納言三
位中將すみ給ふに。藏人少將うちの御使にま
うでて見るに。おの／＼すみたまへるさまど
もこそ。とり／＼にいみじけれ。なかにも權中
納言びわしのびやかにしらべつゝ。從_レ冥入_ニ
於_レ冥_ニ永不_レ聞_ニ佛名_ニをくちずさみたまへるほ

どこそいみじけれ。按察大納言うへのうせの
ほどこそあはれなれ。又かう侍従内侍こそいと
心ふかくこのもしけれ。大納言山へのぼりざ
まに。そのたまといふわらはにあひたるほど
こそ。いみじくあはれなれ。さて出家したまひ
てのち。大宮雪のふるをみて。わがこのもとは
うづもれぬらむとながめたまひしをりしも。
大將かつふるゆきをうちばらひてまいりたま
へるほど。齋宮の御かたにてわがきみの。大將
をはてし齋宮をばはしとおぼしたるを。關白殿
みだりがはしのことやとうちわらひたまふも
のから。なみだのこぼれたるなど。いとあはれ
なり。大將そでにかほををしあてゝゐたまへ
る。ことはりなりやなどいふひとあれば。また
この大納言のきたのかたのなきこそ。いとくち
をしけれ。さまではおぼえずぞ。またにくいは
なきほどなる人がらやむごとなくなどもちて。

法師になりたらんありなげかせみむこそ。い
ますこしあはれもまさり。また中宮のむげに
なにごともおぼしたらぬこそ。大納言も心
とりしてくちをしけれ。おなじ心にうちなび
き。心をかはし。ふみのかへりごとなどこそせ
ざらめ。御心のうちにはいとあはれとおぼさ
るべきなり。また關白殿大將殿などの。おの
のきよききたのかたもちたりといひながら。を
のづからちる心なく。うへの御はらからたち
のさばかりうつくしきを。ちりばかりもおも
ひかけぬこそ。むげにさうくしけれ。中宮の
御さむの御いのりの佛のおほさこそまことし
からね。また何事よりも。權大納言の即身成佛
こそかへすくちをしけれ。法師になりた
るあはれみなさめて。ねざめのなかのきみの
そらじににも。おとらぬほどのくちをしさなど
いふ。ひと。すゑばのつゆあまのかるもとひと

てに申すめれど。ことばづかひなどもむげにたゞありにぞあむめる。皇太后宮の御ふるまひ心ざまこそ。かへすゝめでたけれ。すべてそのあたりはいと心にくゝいみじくおぼゆ。又源氏中將よりそなたさまの人々といひつべくて。心にくけれ。宰相中將のやまひよくなりてまいりたるにゆきあひて。うち見て。たゞこしうやばかりうちしてゆきすぎたるなどこそ。いみじくねたけれ。もののけのしわざなれども。宰相中將の心。たゞかはりにかはるこそ。いとあさましくあはれなれ。また大將のうせのほど。正月に隨身がふくいといくろくて。まゐりたるところなどこそ。あさましくあはれなれ。またあかしきこともあむめり。うちの得業がえひくるひなどもおかし。さてもおもひいでもなき宰相中將たちかへりてばかりめでたき。前關白大將何事もおぼやうにうち見て。

わづかに東宮女御藏人少將などいだしいて。女のくわほうこそいとくちをしけれ。また露のやどり。こものがたりの中には。ことばづかひうたなどいとおしくもなし。あまりに人のうせたるぞまめ／＼しき。大貳がむすめこそいとをしけれ。あふぎの風を身にしめてなどあるほどはいみじ。八條のひともわれからはいとよし。一條のうへといふひとこそ。などやらむにくけれ。大原野行幸。關白のうへさじきにて見るに。二條のうへくるまにて。中宮の女房くるまあまたやりつゞけて見たるところこそいみじけれ。兵部卿宮ち／＼おとどのいみに。ひとりとおこなひをするほどに。
おもひやる袖たに露もかはかぬにくちやしぬらん君か袂はとてさしをきたるほどいとおかし。みかはにさけるこそうたはよけれ。東宮宣旨といふ人。

うきに又つらさを添て歎けとやさのみはいかゝ物は思はむ
とよめるも。またそれならずもいとおほかり。
みくしげどのこそいみじくいとをしけれ。う
ぢの河なみこそ。あまのかるもをあまりまね
びたれども。あしくもなし。大將帥の中の君に
あひて。雪のあした弁にあひて。この雪とともに
にきへはべりぬるぞといひかけてぬること。
いと心やましけれ。大將のうへのあまになら
むとするを。大將のきゝつけたることうれし
けれ。大將のうせこそいとあはれなれ。また前
齋宮の。むげにしいだしたることなくは
てたるにはさうくしき。またあねぎみ式部
卿宮のきたのかたになりて。いみじきことし
えたりとおもひて。おとゝひめぎみにして。女
御にまいらせて。さいはひひきいだしたるこ
そ。いとにくけれ。また齋宮のひめぎみとて。
何事もめでたげなる人こそいと心づきなけ

れ。後に北政所などいはるゝよ。中のきみこそ
いとくをしけれ。よき子もちたるほど。この
もじきかたもありなどいふ。またこふむかへ。
ことばづかひえんにいみじげなるほどより
は。むげにすぎがれにぞある。大將の心もちぬ
こそいみじけれ。人はくちにまかせてさこそ
はものはいへども。かならずそのすぢをとを
すことは。いまもむかしもありがたきわざな
るを。はじめのおもむきにてすぎまでとをり
たるいみじきなり。雪の夜ゆめみておどろき
わたりながら。いと心ぐるしげなるありさま
を見きて。たちかへる心などこそあまりに
なさけなめる。又のひめぎみの身をかへて。
按察大納言のとりむすめになりてくらすほど
こそ。いとあらまほしくもおぼえね。あたえの
ぬまあまりにいまめかしくこそおぼゆれど
も。人の心さまくにおほく見えて心あるも

のなり。宮の大將こそいとよき人にてあれ。やがてそのきたのかたも。にくからぬさまにてよし。式部卿の中むすめのものがたり宮大將たちぎさして。との大將にかたりたるほど。いとおかしくうれしからずとわらふもおかし。新宰相のきみがつぼねに。三宮おはしまし。てけるまへ。中納言中將わたるとて。こひしなどはおろかなどくちずさむこそいとおかしけれ。またおなじひとうちよりてともにゆきあひて。このよのほかのおもひいでもとうちながめたるも。いとあはれなりなどくちくいにいひ。これよりしもひとくしからぬものがりも。すこしわれはとおもひたるも。かすもしらずおほくはべれど。さのみ申さばよも明。日もくれぬべし。はつ雪といふものがたり御らんぜよ。それにぞものがたりのことは見え侍る。またむげにこのごろいできたるもの

あまた見えしこそなか／＼ふるきものよりは。ことばづかひありさまなど。いみじげなるも侍るめれど。なをねざめ。さごろも。はままつばかりなるこそえ見侍らね。またたかのぶのつくりたるとて。うきなみとかやこそ。ことのほかに心にいれてつくりけるほど見えて。あはれに侍れど。そもなどかことばづかひなど。てつゞけにて。いと心ゆきておぼへはんべらず。又定家少將のつくりたるとて。あまたはんべるめるは。ましてたゞけしきばかりにて。むげにまことなきものどもに侍るなるべし。まぐらの宮とかやこそ。ひとへに万葉集のふぜいにて。うつぼなど見る心ちして。おろかなる心もをよばぬさまに侍るめれ。すべていまのよのものがたりは。ふるき御かどにて。さごろものあまのおとめ。ねざめのうちしきなどもありますすこしことくしく。いちはやささまに

しなしたるほどに。いとまことしからず。おびたゞしきふし／＼ぞ侍る。ありあけのわかれ。ゆめがたり。なみぢのひめぎみ。あさぢがはらの内侍のかみなどは。ことばづかひなだらかにみゝたゞしからず。いとよしとおもひて見もてまかるほどに。いとをそろしきことどもさしまじりて。なにごとくもさむる心地するこそいとくちをしけれなどいへば。れいのわかきこゑにて。おもへばみなこれは。さればいはりそら事なりな。まことにありけることをのたまへかし。伊勢物語大和ものがたりなどは。げに有ことときゝ侍ば。かへす／＼いみじくこそ侍れ。それもすこしのたまへかしといへば。いせものがたりなど申は。たゞなりひらがすき心のほど見せんらうにしたる物にこそ侍れ。たれかはよにあるばかりのひとのたかきくだれるも。すこしものおぼゆるほどの人。

いせやまとなど見おぼえぬやははべる。さればこまかに申すにおよばず。すみだ川のほとりにてみやこ鳥にこととひ。やつはしのわたりにてなれにしつゝをこひたるなど。みやこのほかまであくがるらむも。たゞかのいたらぬくまなきしわざにこそ侍めれ。やまとものがたりと申すも。たゞかやうのおなじすぢのことなればとゞめ侍りなむ。たれも御らんじおぼえたることなれば。そのうちの歌のよしあしなどは古今集などを御らむぜよ。これによきとおぼしきうたは。いりはべるべしといへば。れいのひとまた。さらばふるきあたらしきともなく。せん集のなかに。いづれかすぐれてめでたく侍らむといへば。撰集など申な(か説書)にて。おろかなるも侍らじときこえ侍き。万葉集などのことは心もことばもおよびはべらず。くにもとと申す歌よみこそ。わがうたは万葉

集をもちてかゝりとくにするとは申けれ。古今こそふるごといづれもと申ながらかへすがへすもめでたく侍れ。歌のよしあしなど申さんことはいとをそろし。えらべる人々とひおもひあやまちて。よろしきうたをいるとも。みかど御らんじとがめさせたまはざらむやは。後撰はあまりにかみさびすさまじきさまして凡夫の心およびがたく侍。またしふる集。しふるせうとて侍めれ。定家少將にめすとはいづれくを申すぞと。人のとひて侍しかへり事に。さまくこまかにしるされて侍しことどものなかに。ふるき人のしわざなれど。集にはしうははるかにをとりて見ゆとこそ申て侍りしか。万葉集よりせんざい集にいたるまでは。八代集とやいふらむとて。それまでがことをぞ。こまかに申されてはべりし。後拾遺。よき歌ども侍めり。ふるき集どもよりはよ

しなど申ひとく侍れど古今のまねはいかにか侍らむ。公葉集とて。三だい集の歌をせんじて。四條大納言公任のせられたるものを御らむぜよ。さてそれなるうたどもやうならむ。心もことばもすがたもかきあひてめでたきうたとはしらせたまへ。また公葉集よしとおもへるひと侍り。されどそのころうた。すべてめのおよび侍らぬやらむ。さしもおぼえはべらず。またいますこし見どころすくなくぞおぼえ侍る。世にもさおもひて侍るなるべし。いたくおほくも侍らず。そののちも家々にえらべる集どもあまたきこえ侍る。からむすこせんすなどは。人よしとおもひて侍るめり。されどちよくせん集ならぬは心にくきにや。いとあなづらはしくおぼへはべる。かつはかやうの事などは。えらべるひとがらによるべきなり。けんそむ月けすなどはめでたかるらめども心

にくゝもいとおぼえ侍らず。まして申さんや
ならずと申すものの侍るとかや。いまだえは
べらねど。さしも心せばさものに侍らむ。心
をだにこそ見侍らね。きよくわすとて建久七
年にえらべるよし見えたるものはんべり。そ
れがしなどいふほどのものしわざにもはえ
らぬにやなどいへば。また人。されどそれはた
びのうたばかりにて。きとものえうにたち
ぬべきとかやといへば。題の歌はせんすなら
ずとも。堀川院百首。堀川院百首。新院百首。ちかくは九條
どのの左大將と申侍りしおりの百首など侍る
は。それを見ても題の歌はいとよく心えぬべ
し。なか／＼いとうつくしきとも侍るめるは。
あはれおりにつけて三位入道のやうなる身に
て。集をえらび侍らばや。千載集こそはそのひ
とのしわざなればいと心にくゝ侍るをあま
りにひとにところををかるゝにや。さしも覺え

ぬ歌どもあまた入てはべめれ。べめれ。何事もあいな
くなりゆく世のすゑに。この道ばかりこそや
まびこのあと絶ず。かきのもとのちりつきず
とかやうけたまはり侍れ。まことにきゝしら
ぬみゝにもありがたきうたども侍る。ぬし
のところにはじかり人のほどにかたざる歌ど
もには。かきまぜずえりいでたらば。いかにい
みじく侍らむ。いでやいみじけれども。女ばか
りくちおしきものなし。むかしよりいろをこ
のみ。みちをならふともがらおほかれども。女
のいまだしうなどえらぶことなきこそいとく
ちをしけれといへば。かならず集をえらぶこ
とのいみじかるべきにもあらず。むらさき式
部が源氏をつくり。せい少納言がまくらさう
しをかきあつめたるより。さきに申つるもの
がたりども。おほくは女のしわざに侍らずや。
さればなをすてがたきものにて。われながら

侍りといへば。さらばなどか世のすゑにとま
るばかりのひとふしかきとどむるほどの身に
て侍らざりけん。人のひめぎみ北の方などに
てかくろへば。みたらむ人はさる事にて。宮づ
かへびととてひたおもてにいでたち。なべて
人にするばかりの身をもちて。このごろはそ
れこそなどひとにもいはれず。世のすゑまで
もかきとどめられぬ身にてやみなむは。いみ
じくくちをしかるべきわざなりかし。むかし
よりいかばかりのことかはおほかめれど。あ
やしのこしおれひとつよみて。しふにいる事

などだに。女はいとかたかめり。まして世のす
ゑまでなをとどむばかりの事はいひいでし。
出たるたぐひはすくなくこそきこえ侍れ。い
とありがたきわざなんめりなどいへば。れい
のわかき人。さるにてもたれくか侍らむ。む
かしいまともなし。おのづから心にくしきこ

えむほどの人々おもひいでて。そのなかにす
こしもよからんひとのまねをし侍らばやとい
へば。ものまねびは人のすまじかなるわざを。
ふちにいたりたまひなむずといひてわらふ。
女御ささきは。心にくしいみじきためしにか
きつたへられさせたまふばかりのはいとあり
がたし。ましてすゑくはことはり成かし。い
ろをこのみうたをよむもの。むかしよりおほ
からめど。をののこまちこそみめかたちも。も
てなし心づかひよりはじめ。なにごともしみ
じかりけんとおぼゆれ。

色見えて移ふものは世の中の人の心のはなにそ有ける

わいぬれは身を萍の根を絶て誘ふ水あらはいなむと思ふ
思ひつゝぬれはや人の見えつ覽夢としりせは覺さらしを
よみたるも。女のうたはかやうにこそとおぼ
へて。心になみだぐましくこそといへば。また
おいのはてこそいとうたてけれ。さしもなき

人も。いとさまであることや侍るといふひとあれば。それにつけても浮世のさだめなさおもひしられて。あはれにこそはべれ。かばねになりてのちまで。

秋風の吹たひことにあなめ／＼をのとはいはし薄生けり

などよみて侍るぞかし。ひろき野のなかに。すすきのおひて侍りける。かくきこえたるなりけり。いとあはれにて。そのすすきをひきすてはべりけるよのゆめに。かのかしらをば小野のこまちと申もののかしらなり。すすきのかぜにふかるゝたびごとに。めのいたく侍るに。ひきすてたまひたるなむいとうれしき。このかはりにはうたをいみじくよませたてまつらむと。見えて侍りけるとかや。かの夢に見たる人はみちのぶの中將と人の申侍るはまことにや。たれかはさることあるな。色をもかをも心にしむとならば。かやうにこそあらまほしけ

れといへば。また人。すべてあまりになりぬる人の。そのまゝにて侍ためし。ありがたきわざにこそあめれ。ひがきのご。せい少納言は。一條院六十六のくらゐの御とき。宇治の關白よをしらせたまひけるはじめ。皇太后宮のときめかせたまふさかりにさぶらひたまひて。ひとよりいふなるものとおぼしめされたりけるほどのことどもは。まくらさうしといふものにみづからかきあらはして侍れば。こまかに申にをよばず。うたよみのかたこそ。もとすけが女にて。さばかりなりけるほどよりはすぐれざりけるとかやとおぼゆる。ごしふゐなどにもむげにすくなくいりて侍めり。みづからもおもひしりて。申こひて。さやうのことにはまじり侍らざりけるにや。さらではいといみじかりけるものにこそあめれ。そのまくらさうしてそ心のほど見えていとあかしう侍。さばかりあ

かしうもあはれにも。いみじくもめでたくも
あることども。のこらずかきしるしたるなか
に。宮定子のめでたくさかりにときめかせたまひ
しことばかりを。身のけもたつばかりかきい
でて。關白殿うせたまひ。うちのおとど伊周ながさ
れたまひなどせしほどのおとろへをば。かけ
てもいひいでぬほどのいみじき心ばせなりけ
ん人の。はかばかしきやすがなどもなかりけ
るにや。めのとの子なりけるものにぐして。は
るかなるゐなかにまかりてすみけるに。あを
なといふものほしに。とにいづとて。むかしの
なをしすがたこそわすれねと。ひとりごちけ
るを見侍ければ。あやしのきぬきて。つゞり
といふものぼうしにして侍りけるこそいとあ
はれなれ。まことにいかにむかし戀しかりけ
むなどいへば。また小式部内侍こそ。たれより
もいとめでたけれ。かゝるためしをきくにつ

けても。いのちみじかゝりけるさへいみじく
こそおぼゆれ。さばかりのきみに。とりわきお
ぼしときめかされたてまつりて。なきあとま
でも御ぞなどたまはせけむほど。宮づかへの
ほいこれにはいかゞすぎむとおもふかほうさ
へ。いとおもふやうに侍かし。よろづのひとの
心をつくしけん。ねたげにもてなして。大二條教通
殿にいみじくおもはれたてまつりて。やむご
となき僧子どもうみをきてかくれにけむこ
そ。いみじくめでたけれ。うたよみのおぼえは
泉式部にはおとりためれど。やまひかざりに
なりてしぬべくおぼえけるおりに。
いかにせむいくへき方もおもほえす親に先立道をしらねは
とよみたりけるに。そのたびのやまひたちま
ちにやみたりけるとかや。それにてこのみち
のすぐれたるほどはみしりぬ。またさだより
の中納言に。

おほえ山いくのゝ道の遠けれはまたふみもみすあまの橋立
とよみかけたりけるなども。おりにつけては
いとめでたかりけりとこそおしはからるれ。
いづみ式部。歌かずなどよみたることは。まこ
とに女のかばかりなるうたどもよみいづべし
とも覺え侍らぬに。しかるべきさきのよのこ
とにこそあめれ。この世ひとつのこととはお
ぼえず。そのなかにも。やすまさにわすられて。
きぶねにもよまゐりて。

物思へは澤のほたるも我身よりあくかれ出る玉かとそ見る
とよみたるなど。まことにあはれにおぼえけ
り。

おく山にたきりて落る瀧つ瀬に玉ちるはかり物な思ひそ
と御返ありけむこそ。いとたとけれ。また小式
部内侍うせてのち。女院上東よりたまはせける御
ぞに。小式部内侍とふだつけたるを見て。

もろともに苔の下にはくちすして埋れぬなをみるそ悲しき

とよみてまいらせけむ。

とめおきて誰を哀と思ふらむこは増るらんこは増りけり。
とよめるもいとあはれなり。またむまごのな
にがし僧都のもとへ。

親の親と思はましかはとひてまし我子のこにはあらぬ成鬼
とよみてたてまつりたるもあはれなり。しよ
しやのひじりのもとへ。

くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかに照せ山のはの月
とよみてやりたりければ。かへしをばせで。け
さをなむつかはしける。さてそれを見てこそ
うせ侍にけれ。そのけにやいづみ式部つみふ
かゝりぬべき人。のちのよたすかりたるなど
さき侍ぞ。なにごとよりもうらやましく侍と
いへば。また宮のせむじこそいみじくおぼえ
侍。おとも女も人にもかたりつたへ。よにい
ひふらすばかりのものおもはざらむは。いと
なさけなく。ほひなかるべきわざなり。さだよ

りの中納言かれ／＼になりて侍りけるに。

はる／＼と野中にみゆるわすれ水絶ま／＼を歎くころかな
とよみけるほどに。たえはてたまひてのち。賀
茂にまゐりたまふときして。よそながらもい
まひとたび見まほしさに。まうでて見きこえ
ても。

よそにても見るに心はなくさまでたち社まされかもの河浪
さてもいとどなみだのもよほしなりけり。

戀しさを忍ひもあへず空蟬のうつし心もなくなりけり

とよめる返々もいみじきなり。たれ／＼かほ
どほどにつけてものおもはぬ。されどもうつ
し心もなきほどにおもひけむ。いとありがた
くあはれにおぼえ侍なり。されどもさやうの
たぐひは。むかしよりいとおほく侍めり。あか
ぞめがまつとはとまる人やいひけむとよめ
る。伊勢たいふが近江のうみにかたからめと
よめるも。ほど／＼につきていみじからぬや

はある。まことに名をえていみじく心に／＼
あらまほしきためしは。いせの宮すどころば
かりの人は。いかでかむかしもいまも侍らむ。
寛平法皇世をそむかせおはしまして。つれづ
れにてこもりゐたりけむありさま。きゝ侍な
どこそたぐひなくいみじくおぼゆれ。にはは
いとしろきものから。こけむら／＼おひて。も
かうのすところ／＼やぶれて。かみさび心ぼ
そげなりけるに。延喜の御とき。わか宮の御は
かまぎ御屏風の歌たゞいまよみてたてまつる
べく。これひらの中將の御つかひにておほせ
られたりけるに。

ちりちらすきかまほしきに故郷の花みて歸る人もあらなむ
とよみてたてまつりたるほどの事どもなどこ
そ。返々心もことばもめでたくおぼえ侍とい
ふなれば。またかならずうたをよみものがた
りをえらびいろをこのむのみやは。いみじく

めでたかるべき。なにごとにも歌のみちにたりぬるばかりは。いみじくめでたかるべきことやは侍る。そのなかにもしやうのことは。女のしわざとおぼえて。なつかしくあはれるもの。のねなれど。あやしのなま女房わらはべさぶらひなどまで。おほかたよからぬつまならして。なべてみえならしたるがいとくちおしきなり。びわはなべてひく人すくなく。まして女などはたま／＼まねぶをきくも。いとめでたく心にく／＼おくゆかしくこそ侍れ。はくがの三位あふさかの關へも／＼よまでゆきて。せびまるがてよりならひつたへたまへりけむほど。おもふもいとありがたくめでたきを。兵衛内侍といひけるびわひき。六十二むらかみの御ときすまうのせちに。ぐゑんじやうたまはりてつかまつりたりけるが。陽明門まできこえけるなどこそいとめでたけれ。はくがの三位

だにかばかりの音はひきたてたまはずと。とさの人ほめ侍けるほどこそ。女の身にはありがたきことに侍れ。うたなどをよみ。すぐれて人にほめらるゝためしはむかしもいまもいとおほかり。これはいとありがたくうらやましきことに侍りなどいふなり。さま／＼心のほど見えて。いとおかしくきゝ所あるに。いみじくさしいらへもせまほしきことおほかれど。よしなれば身じろぎをだにせてそらねをして侍るに。また。されどさやうの事はわがよにあるかぎりにて。なきあとまでとゞまりて。すゑのよのひと見きゝつたふることなきこそくちをしけれ。おとも女も。くわむげむのかたなどは。そのおりにとりてすぐれたるためしおほかれど。いづらはすゑのよにそのねののこりてやは侍る。歌をもよみしをもつくりて。なをもかきをきたるこそ。百年千とせをへて

見れども。たゞいまそのぬしにさしむかひたる心ちして。いみじくあはれなるものはあれ。さればたゞひとことばにても。すゑのよにとどまるばかりのふしをかきとゞむべきとはおぼゆる。くりごとのやうには侍れど。つきもせずらやましくめでたく侍は。大齋院選子より。上東門院影字つれ／＼なぐさみぬべきものがたりやさぶらふとたづねまいらせたまへりけるに。むらさき式部をめして。なにをかまいらすべきとおほせられければ。めづらしきものはなにか侍るべき。あたらしくつくりてまいらせたまへかしと申ければ。つくれとおほせられるをうけたまはりて。源氏をつくりたりけるをこそ。いみじくめでたく侍れといふ人侍れば。又いまだ宮づかへもせでさとに侍りけるあり。かゝる物つくりいでたりけるによりて。めしいでられて。それゆへむらさき式部と

いふ名はつけたりとも申すは。いづれかまことにて侍らむ。その人の日記といふもの侍りしにも。まいりけるはじめばかりはづかしうも心にく／＼もまたそひぐるしうもあらむずらむと。あの／＼おもへりけるほどに。いとおもはずにほけづきかたほにて一もむじをだにかぬさまなりければ。かくおもはずともだちともおもはるなどこそみえて侍れ。さみの御ありさまなどをば。いみじくめでたく思きこえながら。つゆばかりもかけ／＼しくならしがほにきこえいでぬほどはいみじく。また皇太后宮の御ことをかぎりなくめでたくさこゆるにつけても。あひ行きやうづきなつかしく候けるほどのことも。君の御ありさまもなつかしいみじくおはしまししなど聞えあらはしたるも心にくぬていにてあめる。かつはまた御心ごこころがらなるべしなどいへば。また皇后宮上東

門院いづれかいますこしめでたくおはしましけるといへば。皇后宮御みめもうつくしうおはしましけるにこそ。院もいと御心ざしふかくおはしましける。うせさせたまふとて。

しる人もなき別ちにいまはとて心ほそくもおもひたつかな夜もすから契りしことを忘れすはこひむ涙の色そゆかしきなどよませたまふらむこそあはれに侍る。のちに御らんじけんみかどの御心ち。まことにいかばかりかはあはれにおぼしめされけん。さて御わざの夜雪のふりければ。

野へ迄に心一つは通へとも我みゆきとはしらすやあるらんとよませたまへりけむも。いとこそめでたけれ。おはしまさぬあとまで。さばかりの御身に。御めもあはずおぼしめしあかしけんほどなども。かへすがへすもめでたし。また中^通白殿かくれさせ給。またうちのおとどながされなどして御世の中おとろへさせたまひてのち。か

すかに心ほそくておはしましけるに。頭中將それがしまいりて。すのそばかぜにふきあけたるより見たまひければ。いたくわかき女房のきよげなる七八人ばかり色々のひとへがさねもからきぬなども。あざやかにて候けるもいとおもはずに。いまはなにばかりおかしきこともあらじとおもひあなづりけるも。あさましくおぼえけるに。庭の草はあをくしけりわたりて侍りければ。などかくはこれをこそはらはせでおはしまさめときこえたまひても。宰相のきみとなむきこえけるひと。露をかせて御らんぜんとてといらへけむこそは。なをふりがたくいみじくおぼえさせたまへ。上東門院の御ことはよしあしなときこゆべきにもあらず。なにごとめめでたきためしには。まづひかれさせたまふときなれば。とかく申にをよばず。なにごとも御さいはひきはめさせ

たまふあまりに。御いのちさへこちたくて。あまたのみかどにおくれさせたまふこそくちをしく侍れ。そのたびにいとあはれなる御歌どもよませたまひたるは。やさしくこそ侍れ。一條院かくれさせたまひて。

逢ことも今はなきねの夢ならていつかは君を又はみるへきなどよませたまへるも。いとめでたくこそ侍れ。又あきもとの中納言御返事に。よはふたゝびはそむかざらましなど侍もいとあはれなり。なにごとよりもうなるひとおほくさぶらひけんこそいとゞ心にくゝめでたくおぼえ侍れといへば。其御あとうとのびわどのの皇太后宮ときこえさするにこそ。いとかなやかにものごのみしたるひとゝおほくさぶらひけれ。やまと祈せんもその宮の女房なるべし。ありゝの女房のしやうぞくうちいでなどもためしなきほどにせいをやぶり。女房の一品

經供養などしけることもいとおびたゞしく侍けれ。女院にはさばかりなをのこしたる人々さぶらひけれど。さやうのことなどもひとのめおどろくばかりはあらじとつゝませ給ひけんほども。さまゝ心の色々見えてめでたくこそといへば。またむかしのやうの宮ばらの御ありさま。あまたうけたまはる中に。大齋院こそめでたくおはしましけむとおぼえさせたまへ。たゞいまのとき。きさきにしておはしまさむ御かたゝは。はなやかに今めかしくも。また心にくゝもおはしまさむ。ことはりなり。これはいつともめづらしからぬときはのかげにて。ありすがはのをとよりほかは。ひとめまれなる御すまゐにて。いつもたゆみなくおはしましけむほどこそ。かぎりなくめでたくおぼえさせたまへ。さりながら御年などもわかくおはしまさむほどはことはりなりや。むげに

おいをとろへ御よもすゑになりて。そのかみ
まいりなれて侍けむひともおさ／＼なく。い
まの世の人ものはか／＼しくまいることもなき
すゑのよになりてしも。九月十日よひの月あ
か／＼りけるに雲林院のふだむの念佛のはてに
まいりたりける殿上人四五人ばかり。かへさ
に本院のみかどのほそめにあきたるよりやを
らいりて。むかしより心にくゝいはれさせた
まふ院のうちしのびて見むとおもひけるに。
ひとのをともせずしめ／＼とありけるに。御
前のぜんざい心にまかせてたかくおひしげる
を。露は月のひかりにてらされてきらめきわ
たり。虫のこゑ／＼かしがましきまできこえ。
やり水のおとのどやかにて。ふなをかのおろ
しかぜひやゝかにふきわたりけるに御まへの
すすこしはたらきて。たきものの香いとかう
ばしくにほひいでたりけるだに。いままでみ

かうしもまいらで。月など御らんじけるにや
と。あさましくめでたくおぼえけるに。おくふ
かくしやうのことをひやうでうにしらべられ
たるこゑ。ほのかにきこえたりける。さはかゝ
ることこそとめづらかにおぼえけることはり
なり。さてかゝる御ありさまを見けるとしら
せたてまつらざらむくちをしさとて。ひとな
どのまいるかたへたちまはりたまへりける。
そこにも女房二三人ばかりものがたりしても
とより侍けるに。いとおかしくてことなどひ
きあそびて。あけがたになりてこそうちにか
へりまいりて。めでたかりつることどもかた
りたまひけれ。とぎの所などはあけくれひと
おほく。とのばら宮々もつねにたちまじりた
まへれば。たゆみなからむもことはりなりや。
皇太后宮尊号ときこえけるは。大二條どのの女。公
任の大納言の御まご。世をのがれこもりぬさ

せたまひてのち。雪のあした白川院の御幸にはかになりて侍けるに。いさゝかあともなく。法花堂のかたに三昧經しのびやかによみて。南面にうちいで十くばかり有けるなかよりきりてそで共いだして。ひがくしのまに院は御車ながらたゝせたまへりければ。かざみきたるわらは二人。銀のてうしに御みきいれて。しろがねのをしきに金のさかづきすへて。大かうじ御さかなにてまいりたまへりしほどこそいとめでたけれ。かねてよういしたらむには。それにまざること何事かなからむ。俄にはいとありがたき御よういなりかし。いまのよにはなにごとといふなかに。かやうのことこそむげにありがたかむめれなどいふなり。またいかなることいはんずらむときゝふしたるに。れいのひと。さのみ女のさたにてのみ。よをあかさせ給ふことの。むげにおとこのまじ

らざらむこそ人わろけれといへば。げにむかしも今もそれはいときゝどころあり。いみじきこといかにおほからむ。おなじくはさらばみかどの御うへよりこそいひたちなり。よつぎ大かゞみなどを御らんぜよかし。それにすぎたることは何事かは申すべきといひながら。

右無名草子以水野爲長本按合了

群書類従卷第三百十三

物語部七

拾遺百番歌合

左

源氏

右

夜寐覺

常陸介孝標女作

御津濱松

同作

參河仁佐介留

朝倉

孝標女作

袖努良須

心高幾

取替波也

露宿

末葉露

廿首

十五首

十五首

十三首

十首

十首

六首

五首

三首

海人荻藻

三首

一番

左源氏

右寐覺

左

須磨のうらにしつみ給ひしころ。八月十五夜くまなき
月にむかひて。都にとまり給ひし人々の御うへ。すきに
しかたのこと。かきつくしおほしいて。

六條院

みるほとに^(そい)はしなくさむめくりあはん月の都は遙なれ共

右

八月十五夜。夢のうちに。二とせの秋天つ乙女おりくら
り。琵琶を教けるを。みとせといふ年の十五夜。雨ふり
そらくもりて夢もみえず。なかめあかして。

寐覺上

天の原くものかよひちとちてけり月のみやこの人もとひこす
二番

左

玉かつらの内侍のかみ。たま／＼まいりて。やかて出侍
りけるに。

冷泉院御製

九重に霞へたては梅の花たゞ香はかりもにほひこしとや

右

中宮の御裳きのとき。御こしゆはせ給ふとて。出させ給
ひて。うへに御たいめん有しに。うちの御けしきおほし
いて。

女院

君により雲々の人の雲々にて心もそらになすをみるかな
三番

左

あねの女君かくれてのち。二條院にうつり給はんこと
あすとて。右大將宇治にもし給へるに。軒近き紅梅の
色も香もいとなつかしきを。うくひすたにすきかたく
うちなきてわたるに。春やむかしのといとゞ心にあま
りて。

兵部卿の宮の上

みる人もあらしにまよふ山里にむかしおほゆる花の香そする

右

廣澤にひとり詠て。あねうへもろともにおきふし。なれ
にしかたをおもひ出給ふにも。はるやむかしのとのみ
しのはれて。

寐覺上

四番

左

兵部卿の宮はつせにまふてたまふ。宇治の御中やとり
にあそひし給ふものゝねとも。追風に吹くるひゞきを
聞て。右大將のもとにつかはしける。第八親王
山かせに霞吹とく聲はあれとへたてゞみゆる遠のしらなみ

右

春の明ほの。右衛門督のうへもろともに詠あかして。

寐覺上

朝ほらけうき身霞にまかへつゝいくたひ春の花をみつらむ
五番

左

弘徽殿のおほる月夜の後。右のおとゞの藤の宴におは
して。内侍のかみのよりみ給へる戸くちに。たつねより
給ひて。

あつさ弓いるさの山にまどふ哉ほのみし月のかげやみゆると

右

九條の旅ねの後。后の宮にめし出されたるを。ねん比にかたらひつゝ。かの御行衛たつね給ふ事たひかさなれは。おもひわひて。

女院新少將

漕かへりおなしみなとによる舟の渚をたれとしらすや有覽六番

左

故院かくれさせ給ひて後。麗景殿の女御の御もとにまふて給へるに。軒ちかき橋にほとゝきすのなきければ。たちはなの香をなつかしみ郭公花ちる里をたつねてそとふ

右

曉。しのひまかる所よりかへるとて。冷泉院の左のおとの女御の御もとにまふて給へるに。朝またきゆきゝの道のたよりにもすきぬ山はうれしかりけり。と侍りければ。

左大將をさこきみ

玉ほこの道行すりのたよりにもとふへき宿はさしてこそくれ七番

左

夕立の名残すゝしきよひのまきれに。溫明殿のわたりを。たゝすみありきたまふに。琵琶をいとおもしろくひ

けは。あつまやをしのひやかにうたひて。立よりたまへるに。源内侍のすけ

たちぬるゝ人しもあらし東やのうたてもかゝるあまそゝき哉

嵯峨にて宰相のきみの局にて女君の比巴を聞て。

入道右衛門督

つけよ猶まやの餘りのあまそゝき我たちぬれて歸りわひぬと八番

左

むらさきのうへかくれ給ひて次のとしの秋。

七夕のあふせを空のよそにみてわかれの庭に露そをきそふ

右

右大將三位中將ときこえし時。北山にこもり給ひぬときゝて。寐覺上

しらすりし山邊の月をひとりみてよになき身と思ひ出らん九番

左

芹川の大將のとをきみの秋の夕におもひわひたる處かきたるをみて。右大將

萩のはにつゆふきむすふ秋かせも夕はわきて身にそしみる

右

白河の院にて。身のありさまおほしつゝくる夕暮に。

寢覺上

しほれわひ我ふるさとの萩のはにみたとつけよあきの夕風
十番

左

兵部卿の宮。右のおとゝにかよひ給て後。かのうへにたいめんして。靜なる世のけしき。昔にかよへる御けはひをみ。しのひあへす。みすのそはより袖をひきよせて。くやしくと思ひわふる心のうちを。もらし出てもかひなきものから。人めのあひなきを思ひかへして立いてあしたに。

右大將

いたつらに分つる道の露しけみむかしおほゆる秋のそらかな

右

年久しく絶て後。めくりあひたまへる秋。月のひかりむしのこゑも。たゞ昔なからの心地して。いしやまにてすみはつましき契なりけんと聞えしほと。わかれ給ひしよの心ちおほし出られて中々こゝろつくしもやゝたちまさりて。人やりならず涙にくれて。

關白

かきりとて命をすてし山さとの夜はのわかれに似たる空哉
十一番

左

柏木權大納言。おきて行空もしられぬしのゝめにいつくのつゆのかゝる袖なり。とうれへきこえける返し。

二品内親王女三宮

あけくれの空にうき身は消なゝん夢成けりとみてもやむへく

右

ねさめのなさけのはしめ曉のわかれ。よにしらぬつゆけきなりや。わかれとまたいとかゝるあかつきはなと侍ける返し。

兵部卿のうへ

しら露のかゝる契をみる人もきゝてわひしきあかつきのそら

十二番

左

なれける袖のうつり香をと侍りける返し。

兵部卿の宮のうへ

右

關白一品宮にまいりそめ給ひける目。おもひなけき給へるをなくきめて。よしや君なかき契はたえせしをいのちのみこそさためかたけれ。と侍ければ。

あねうへ

たえぬへき契にそへておしからぬ命をけふにかきりてしかな
十三番

左

内侍のかみ。やかてきえなはたつねてもと侍ければ。

いつれそと露のやとりをわかむまにをさゝか原に風も社ふけ

右

院の御けしきよろしからて。女宮くし奉りて。冷泉院に
わたらせ給ける後。右大將白河院にまいりて。むなしく
たちかへるとて。私にたにし給ふなよと侍りければ。

女三宮の中納言

あらし吹あさちか末の白露のきえかへりてもいつかわすれん
十四番

左

みやす所かくれて後。内より。みやきの露ふきむすふ
風のをとに。とおほせことありければ。

桐壺更衣母

あらし風ふせきしかけのかれしより小萩かうへそしつ心なき

右

中納言君きえかへりていつかわすれんときこえける返
し。

右大將

吹はらふあらしにわひて淺ちふの露のこらしと君につたへよ
十五番

左

あふひのうへかくれ給にし後の九月九日。きくにつけ
てさしをかせ給ひける。

前坊御息所

人のよをあられときくも露けきにをくるゝ袖を思ひこそやれ

右

白河院よりあなかちにのかれいて給へるを。はしめて
きかせ給ひて。つかはしける御ふみに。

中宮

みしまゝの夢のうちにそ惑はるゝたちをくれにし身を恨つゝ
十六番

左

桐壺の御息所かくれて後。
尋ねゆく幻もかなつてにてもたまのありかをそことしるへく

右

中宮に立おくれにしをうらみつゝと侍ける御かへし。

寐覺上

雲の限りへたつる空にたゝよへと君に傳ふるまほろしもかな
十七番

左

須磨のうらへおほしたちし頃。院の御墓にまいらせ給

ひて

なき影もいかにみるらんよそへつゝなかむる月も雲隠れぬる

右

母上かくれ給ひぬときこえし時より。北山にこもりゐて。次の年の春。さくらにつけて中宮へまいらせける。

右 大將

しらすりし深山かくれの花の色をあはれ昔となく／＼そみる

十八番

左

齋宮群行日。亦百敷のうちをみ給ひて。前坊御時父おと

との事をなとおもひ出で。

御息所

そのかみをけふはかけしと思へとも心のうちにものそ悲しき

右

内侍のかみの入内の時。そひてまいり給へるに。うちのうへ。君ももし昔わすれぬものならはおなしこゝろにかたみとおもへ。とのたまはせける御返し。

ねさめのうへ

百敷をむかしなからにみましかはと思ふも悲ししつのをた巻

十九番

左

八宮宇治にこもりゐて年経て後。大將宰相中將と聞えしを御つかひにて。御せうそこありしに。

冷泉院御製

世をいとふ心は山にかよへとも八重たつ雲をきみや隔つる

右

女君廣澤にかきこもりぬときかせ給て。内より護人少將を御つかひにて。

院御製

なにことをいかにうらみて白雲の八重たつ峯に思ひ入らむ

二十番

左

宇治にて身をすてけるころ。

浮舟のきみ

なけきわひ身をは捨てともなきかけに浮名流さむことを社思へ

右

世を背て後。山のみかとの御文に。此世にはうくて別しなかなるをいかに入にしひとつみちなり。とのたまはせたる御かへし。

ねさめのうへ

限りなくうき身をいとひすてしまに君をも世をも背きにし哉

二十一番

左源氏

右御津濱松

左

都に歸り給て後。明石の上につかはしける。

(付イ)

なけきつゝ明石のうらに朝きりのたつやと人を思ひやるかな

右

渡唐の後。旅ねの夢に。日本の大將の姫きみ。たれによ

りなみたの海に身をしつめしほたるゝあまとなりぬと

かする。と見え侍りければ。

中納言瀧松中納言

日のもとのみつの濱松今宵こそ夢にみえつれ我をこふらし

二十二番

左

やかてまきるゝ我身ともかなと侍ける御返し。

入道きさいの宮

世語りに人や傳へむたくひなくうき身をさめぬ夢になしても

右

山かけにものいみし給へる夜。心より外ゆめちにまよ

ひ給ひける曉。

河陽縣の後

うしとおもふあはれと思ふしらさりし雲ゐの外の人の契に

二十三番

左

明石にてはしめてつかはしける。

遠近もしらぬ雲(にイ)をななめわひかすめし宿の木末をそとふ

右

雲井の外のと侍りける後。こゝろのみあくかれて。

あらかりしおほくの波にそほちつゝ戀の山路にまとひぬる哉

二十四番

左

故院かくれさせ給ひて。御法事すき。いろあらたまりに

しはるのはしめ。世の中はなやかに行かふ車の音なひ

まなくきこゆれと。宮のうちにはあらたまれるしるし

もみえず。人目まれに。大將いつしかまいり給へるを。

見たてまつるよりなみたきたる。いと哀に見めぐらし

て。ななめかる海士のすみかとみるからにまつしほた

るゝまつからしまと聞え給ふ。おくふかくもあらす。

佛にゆつり聞え給へるおまし所なれば。すこしけちか

きこゝちして。

入道後の宮

ありし世の名残たになきうらしまに立よる波のめつらしき哉

右

父の大臣もろともに。蜀山にこもりぬ給へるころ。日本

の中納言。唐の天子の使として。たつね入たるに。

河陽縣の君

世のうさにしおらて入しおく山になにとて人の尋ねきつらん
二十五番

左

をのゝ山さとにて。

うきふね

心には秋のゆふへをわかねともなかわる袖に露そみたるゝ

右

もとの國にかへりなんとての秋の夕。女王の君か山陰
の家に立よりて。せうそこすれと。つれなけれは。

中納言

あはれしる人こそさらになかりけれ今はと思ふ秋のゆふへを

二十六番

左

世のわつらはしさに。久しく音信給はぬに。冬立月初時
雨けしきたちけるに。

二條の内侍のかみ

木からしのふくにつけつゝ待しまに覺束なさの比もへにけり

右

中納言もとの國にかへりなんとする比。八韵の詩にそ
へてつかはしける。

一の大匠の五の君

今やとふ今日やみゆるとまちつゝもおなし世に社慰めてふれ
二十七番

左

都に歸り給ひなんとての比。明石上につきせぬことを
ちきり給ふに。かはらぬ波のこゑも。秋かせには猶ひゝ
きことなる夕くれ。鹽やくけふりかすかにたな引て。取
あつめたる所のさまなれは。

右

このたひは立別るとももしほやく烟はおなしかたになひかん

いまやとふ今日やみゆるといへる返し。

中納言

わかるへき後のなけきを思はすはまたれましやは朝な夕なに

二十八番

左

大井にすむころおはしまして月・入^{出イ}ほとに歸り給ふ。あ

りしよの事おほし出る折なり。すくさす琴の御ことを
をし出たれは。えしのひあへす。かきならし給ふに。し

らへもかはらす。ちきりしにかはらぬ琴のしらへにて
たえぬこゝろのほとをしりきや。とのたまひける御返
し。

明石のうへ

右

かはらしと契しことをたのみにて松のひゝきにねをそへし哉

歸朝近くなりてのころ。まかれりけるに。浮雲もまかは

ぬ秋の月影に。池の中しま。もみちのかけなる樓のうへ

に。琴琵琶引合せてわかれおしむに。中納言。日のもと

や山より出む月見てもまつそ今宵はこひしかるへきと

申たる返事に。琵琶を持たから。大臣の五君

かたみそとくるゝ夜ことに眺めてもなくさまめやは半なる月

二十九番

左

みやこにかへり給ひて。もとの御位あらたまりつゝ。は

しめて内にまいり給ひりけるに。

わたつみにしすみうらふれ蛭のこの足たゝさりし年はへに鬼

右

渡唐の舟に乗とて都人。

中納言

かきくらす泪は袖にさはきつゝもろこし舟に今日そのりぬる

三十番

左

すまのわかれに。なみたの河にしつみしやなかるゝみ

をのはしめなりけむと侍けるかへし。

二條の内侍のかみ

泪河うかふみなはもきえぬへし流れてのちの瀬もまたすして

右

中納言唐にわたりて後。さまゝ思ひくたけて。

大將姫君

うしとたにおもひ出しと忍へとも猶あまの戸をあけかたの空

三十一番

左

須磨より明石のうらにうつり給ひて。紫のうへの御も

とに。

はるかにも思ひやるかなしらさりし浦より遠に浦つたひして

右

歸朝後。つくしまてをくりにまうてきたる唐人のかへ

るにつけて。河陽縣后の女王の君に。

なにしかはたとへていはん海のはて雲のよそにて思ふ思ひは

三十二番

左

前太政大臣宰相中將と聞えし時。すまのうらにまうて

て。かへり給ふあさほらけの空に。かりかねのつれてわ

たるを御らんして。

ふるさとをいつれの春か行てみんうらやましきはかへる鴈金

右

唐人のかへるにつけて。大臣の五君のもとに。

中納言

哀いかに何れの世にかめぐりあひて有し有明の月はみるへき
三十三番

左

源氏の中將と聞えし時。わらはやみわつらひて。北山にて
祈らせ給し。をこたりてかへり給ふ日。御かはらけた
まはりて。

北山上人

右

おく山の松のとほそをまれにあけてまた見ぬ花の顔をみる哉
日本中納言の別をしたひて。此國までをくり來て。かへ
りわたるひ。

大唐國宰相

あふこなみ雲の極めを隔てにていつともあらし君をこふらく
三十四番

左

藤壺后にたちていらせ給ふ夜。御ともにつかうまつり
給ひて。

つきもせぬ心のやみにくるゝ哉雲ゐに人をみるにつけても

右

中納言歸朝の後御まへの宴に侍り筈のことつかうまつ

り。御そぬきてたまはすとて。

わかれては雲ゐの月も曇つゝかはかりすめる影もみさりき
三十五番

左

宇治にてなかめはれぬ比。大將。みつまさるをちの里人
いかならむと侍りければ。

うきふね

右

母の尼きみ身まかりにけるのち。

よしのゝ姫君

みよしのゝ雪の中にも住わひぬいつれの山をいまはたつねむ
三十六番

左

左源氏 右三河仁左介留

なかめのころ。うきふねのきみに。

なかもやるそなたの空もみえぬまで空さへくるゝ比の佳しき

右

承香殿女御。桃園にわたりて物忌し給ふ所に。おもはぬ

ほかに。その人ともしらす。夢のこゝちしてたち出て。

あしたに。

權中納言イナシ三河仁左介留
室中將

今日も暮あすもすきなはいかゝせん時のまをたに嘆ぬ心を
三十七番

左

夕顔の露きえてのち。御心地のまきれ。かきたえをとつれ給ぬにしわひて。

空蟬の尼公

とはぬをもなとかとはてほとふるにいか計かは思ひ亂るゝ

右

頭中將たのめわたりつゝ。までとこさりければ。

承香殿女御中納言

頼めすは扱やねなましなそやこのくるゝよなゝ待せ顔なる三十八番

左

父みこかくれて後。右大將宇治におはして。法事のことなど聞えあはせ給ふに。名香のいとひきみたされて。ほのほのみゆるに。あけまきになかき契をむすひこめおなし心によりもあはなん。とかきつけたまへれば。

姫きみ

ぬきもあへすもろき涙の玉のをになかき契をいかてむすはん

右

三河にさける所たかへに。權中納言あなちにしやうそこしよりあらぬ人と見あらはしたるけしきみえければ。

太皇太后宮御匣殿

なけきこり道まとひける山人のゆくてにかゝるものを思ふに上イ三十九番

左

明石にてよなゝによひそめ給しころ。紫のうへに。しほくゝとまつそ流るゝ假初のみるめはあまのすさひなれ共

右

御匣殿にかよひそめて。かへりてあしたに。まつかきみたるゝこゝろのうちに。かきいつへきことのはもおほえさりければ。

權中納言

もしほ草いかにかゝましむねにたくこひより外にくゆる烟を

四十番

左

内侍のかみにかよひそめての比。こゝろならすよかれして。あしたに。

玉簪右大將

心さへ空にみたれし雪もよにひとりさえたるかたしきの袖

右

曉いつる頭中將に入かはりて。ありつる人とおもはせて。承香殿の中納言の君に。

權中納言

えそゆかぬまた霜ふかき朗暮のわかれの道は立かへりつゝ四十一番

左

藤内侍のすけ。五節の舞姫にて。六條院にまいりたるに。
屏風のつまよりさしのそきて。

右大臣

あめにますとよをかひめの宮人もわか心さすしめをわするな

右

三位中將弁少將ときこえし時。ひものとけたるをひき
むすふとて。わするなとわかむすひをくあかひをもめ
くりあふまで人にとかすな。といひたるに。

左衛門督舞姫

をみ衣たゝゆきすりの手すさひに結ひしひもと誰かたのまん

四十二番

左

たいのうへ宇治におはせしに。かよひそめさせ給ひし
あしたに。

兵部卿のみこ

よのつねと思ひやすらん露しけき道の篠原分てきつるを

右

はしめてかへりてあしたに。御匣殿のもとに。中納言に
かはりて。

三位中將

朝露のをくれはくるゝ冬の日もけふこそななき物としりぬれ
四十三番

左

女三の宮の御事を思ひみたれて。なかめくらすとて。

もろかつら落葉を何に拾ひけん名はむつまじきかさしなれ共

右

承香殿女御中納言の君。三位中將につたえて。たれとか
や音にきゝしにけふたにもあふひてふなをかけてみせ
なん。といひたるかへし。

權中納言

諸人のなへてあふひの名を惜みかけしやけふのかさしなり共

四十四番

左

うつせみのやとりの御かたたかへのあかつき。

つれなきをうらみもはてぬ東雲にとりあへぬまで驚かすらん

右

しのひていつる曉。春宮の宣旨に。權中納言

なきぬへしあかぬわかれの曉をしらするとりの聲のつらさに

四十五番

左

ふちのうら葉のうらとけてあしたに。

右大臣

とかむなよ忍ひにしほる手をたゆみけふあらはるゝ袖の雪を

右

かへりてあしたに春宮の宣旨に。

權中納言

とはやないかなる夢をみつる夜の名残の袖のかくはぬるゝと
四十六番 ともイ

左

長生殿のふるきためしはゆゝしくて。彌勒の世をかね
て。うはそくかをこなふ道をしるへにてこむよもふか
きちきりたかふな。とのたまひし御返し。

右

さきの世の契しらるゝ身のうさにゆく末かけてたのみ難さよ
ゆふかほの君

權中納言。心みにつらきこゝろをならははやさてうら
みすや有けると見ん。と侍りける返し。

春宮宣旨

うきに又つらきをそへて歎けとやさのみはいかゝ物を思はん
四十七番

左

齋院御禊みたまひける車に。はしたなきこといにてき
にける目。御前わたりをほのみ給ひて。

前坊御息所

影をのみ御手洗河のつれなきに身のうき程そいとゝしらるゝ

右

御匣殿にかよふよし聞えて。后の宮所あらはしせんと。
わさところゝしくおほしいそきしに。のかれて後か
の君のもとに。

三位中将

すゝみせし桂のさとの河かせに見ぬ夜の戀をさましやはせし
四十八番

左

冷泉院いはけなくおはしましし時。なてしこの花を御
覽して。

入道后宮

袖ぬるゝ露のゆかりとおもふにも猶うとまれぬ大和なてしこ
右

三位中将のめのとのもとに。むまれたる姫きみをく
りをかすとて。

右大臣上

袖ぬれし野原のつゆとみるからにをき所なくものそかなしき
四十九番

左

右大将。いたつらにわけつる道の露しけみと聞え給け
れと。をのつからしみにけるうつり香をとかめさせ給
ひて。

兵部卿のみこ

また人になれける袖のうつり香を我身にしめてうらみつる哉

右

御匣殿はかなくなりて後。正日に經佛なと供養せさす
とて。ひとりなかつて。

三位中將

かへさはや人をも身をもうらみつゝへたてはてつる中の衣を

五十番

左

宇治にて身をすてむことを思ひて。うきふね

雲をたにうき世中にとゝめすはいつくをはかと君もうらみむ

右

御匣殿法事に誦經せさすとて。

權中納言

大空にひゝかむ鐘の音ことにしつまんそこもうかふばかりそ

五十一番

左源氏

右朝倉

左

内の御使にて。桐壺のみやす所にまうてゝ。まちおはし
ますらんといそき歸に。月入かたちかき空きよく。風す
すしくふきて。くさむらのむしのころゝ。もよほしか
ほなるに。

靱負命婦

すゝむしの聲のかきりをつくしてもななき夜あかすふる涙哉

右

三河守世をそむきける後。ふる里の月をみて。

朝倉の女君

今こんといひてわかれし君により有明の月をいく夜見つらむ

五十二番

左

すまのうらより入道后の宮に。

松しまのあまの苦屋もいかならんすまの浦ひとしほたるゝ頃

右

入道ゆくゑなくいてにけるのち。朝倉の女君

ゆきわかれいつれの山に跡たえて落るなみたの色かはるらん

五十三番

左

すまのわかれに花散さとに聞え給ひける。

ゆきめくりつゐにすむへき月影のしはし曇覽空ななかもそ

右

權中納言と聞えし時。白河にてふしまちの月まつとて。

中納言の君もるともになかめ給ふに。見るまゝに月も

うき世にすみわひて山より山にいりやしにけむと聞え

ければ。

關白内大臣

なにかうきよし心みよ長月の有明の月のありやはてぬと

五十四番

左

はゝ木々の心をしらてその原のみにあやなくまといぬるかな。と侍りける御かへし。 空蟬の尼公

數ならぬ伏屋にをふる名のうきに有にもあらず消るはゝきゝ

右

見そめ奉りしころ。我心なからうつし心もなきほとに。人のそしらんこともたとるましようおほゆるを。おほつかなきなん心うきを。なのりせよとのたまひければ。

朝倉姫きみ

なのるとも木の丸とのゝ雲ゐなるあさくらまでは誰か尋ねん
五十五番

左

夕顔のきみいさなひ出て。なにかしの院にもろともになかめくらし給とて。しのひ給ひし御さまあらはれてのち。

夕露にひもとく花は玉ほこのたよりにみえし江にこそ有けれ

右

おもひわひて。白河よりしのひ給ひて出るに。かはらのほとりにて。おとゝの車のあひたまへる。すたれをおし

あけて。さしのそき給へるをみて。

玉ほこの道ゆきすりのかはかりも哀いつれの世にかみるへき

五十六番

左

ひもとく花は玉ほこのと侍りける御かへし。

夕かほのうへ

光ありとみし夕顔の上つゆはたそかれ時のそらめなりけむ

右

身のありさまおもひみたれて。白河よりいてなんことを思ひたつ日。うちとけてみつる名残につねよりも戀しさまさる朝かほのはな。と侍りける御かへし。

朝倉女君

をく露も光そひつる朝かほの花はいつれのあかつきか見む

五十七番

左

もえむけふりもむすほれと侍し御かへし。

二品親王女三宮

たちそひて消やしましうきことを思ひみたるゝ烟くらへに

右

權中納言と聞えし時。朝倉の君あふみのうみに身をな

けてけりと人つてに聞給ひけるころ。石山にまうて給て。

關白内大臣

戀わひぬ我もなきさに身を捨ておなしもくすと成やしなまし
五十八番

左

あかしにおはしまして後。年頃はるけぬ心のやみも。御物かたりのつゐてにもらしいて。うれへきこゆるに。心ほそきひとりのなくさめにも。さらはみちひきたまへかしとのたまはすれは。

明石入道

ひとりねは君もしりきやつれ〜と思ひあかしの浦淋しきを

右

こゝろならすさすらへける比。石山にこもりておもひあかすに。權中納言と聞えし。こもりあひたまへるを。よそにきこえて。

朝倉女君

なみのよる曉ことの風の音はむかしの秋にかはらさ。りけり
五十九番

左

なにのあやめもいかてわくらんと侍りし御返し。

あかしのうへ

數ならぬみ嶋離れになくたつのけふもいかにととふ人そなき

右

式部卿の宮のひめきみ。都へむかへられ給ふをいたしたて。

朝倉女君

ひきわかれいつかこたかき高砂の松の木すゑを誰とたにみむ
六十番

左

紫のうへかくれ給て後。むかしの野分のゆふへ。ほのかなりし御おもかけ。いまはのほとのかなしきなと思ひつゝけて。

右大臣

いにしへの秋の夕のこひしきに今はとみえしあけくれのゆめ

右

あさくらのゆくゑなきを。つきせすおほしなけきしころ。

關白内大臣

あけぬ夜のなかにもやかまどふ哉はかなき夢をみるとせしまに
六十一番

左

空さへくるゝ比のわひしさと侍ける御返し。

うきふね

あさ曇りはれせぬ峯の雨雲にうきて世をふる身ともなさはや

右

朝くらのきみに。

式部卿のみこ

吹風のつきそまとひし道の露きえやしにけんとたにとへかし
六十二番

左

一條の宮す所のとふらひに。小野におはして。

右大臣

山さとのあはれをそふる夕霧にたちいてん空もなき心地して

右

きえやしにけんとたにとへかしと侍りし御かへし。

朝倉女君

消にけりあらましかはる山さとの秋はいかにと問ましものを

六十三番

左

六條院都にかへり給ひて後。住吉にまうて給つるに。う
らつたひのころのさはきを思ひ出て。立出させ給へる
に聞えさせける。

參議惟光朝臣

すみよしのまつこそものは悲しけれ神代の事をかけて思へは

右

むかしのちきりたかへてめぐりあひて。

朝倉女君

あはれともうしともえこそ岩城の野中の松のむすほゝれつゝ

六十四番 左源氏 右袖奴良須

左

右大臣かよひそめ給てのち。六條院。おりたちてくみは
みねともわたり河人のせとはたちきらさりしを。と聞
えさせ給けるに。

玉露の内侍のかみ

みつせ川わたらぬさきにかて猶涙のみをのあはときえなん

右

承香殿女御。いはしとていむにはあらすうきしつみお
ひたるあしのねにさはる身を。とのたまひしに。

關白左も右も袖ぬ
らす宰相中殿

ことはりにうき沈まるゝ水のあはのやて消ぬる我身ともかな

六十五番

左

小野に住ころ。尼君はつせにまうつとてさそひければ。

うきふね

はかなくて世にふる河のうきせには尋ねもゆかしふた本の杉

右

母宣旨身まかりにける後。關白とふらひ給へりける返
し。

承香殿小宰相

誰も皆なからふましき露の世になと言の葉をとゝめをきけん
六十六番

左

宇治におはしかよふころ。山ちの露を分入たまふとて。

右大將

山おろしにたへぬこのはの露よりもあやなくもろき我涙かな

右

山里に住ける比。おとゝわたりて。こからしの風をもと
にそきゝわたるかはせる袖のひましなければ。と侍り
けるかへし。

中納言の君

いつ迄かよそにもきかむともすれは身にしみぬへき山の嵐を
六十七番

左

あねの女君姫かくれて後。宇治律師わらひを奉るとて。君

にてあまたの春をつみしかはつねをわすれぬ初わら
ひなり。と聞えたる御かへし。

兵部卿宮の上

この春はたれにかみせんなき人のかたみにつめるみねのさ蔵

右

産の事なくくなりて。山さとにこもり居たるころ。てな
らひに。

中納言の君

咲てちるものとみしかとこの春は花やをくれてわれを忍はむ
六十八番

左

柏木權大納言かくれて後。右のおとゝしはくゝとふら
ひものし給ひける。御をくりものにとゝめをかれたる
笛をたてまつりて。すこし吹ならしたまへるを聞て。

一條御息所

つゆしけきむくらの宿にいにしへの秋にかはらぬ虫のこゑ哉

右

秋のころむしのねを聞て。

中納言のきみ

虫の音も哀そまさる淺茅原なかは過ゆく秋とおもへは
六十九番

左

女君かくれてのち宇治にて。

右大將

我も又うき古郷をあらはてはたれやとり木のかけをしのはむ

右

中納言君こゝろならずかきこもりたる秋。

關白

きくの露きゆはかりにもおちし哉あふ事たゆる秋のなみたに
七十番

左

宇治のみこ。姫君に箒のことゝのかして。我なくてく
きの庵はあれぬともこのひとはかれしとおも
ふ。と侍りけるに。

右 大將

右

いかならん世にかかれせむなきよのちきり結へる草の庵は
中納言の君かきこもりて後。后の宮にまいりて。つねに
かたらひたまひしとくちのたてたるを見て。

關 白

ありし世の草の原とはみるからにやかて露ともきえぬへき哉
七十一番

左

むらさきの上かくれ給ひて後。ほたるの飛かふを御覽
して。

右

よるをしる螢をみても悲しきときはともなき思ひなりけり
(そい)

もとのうへさまかへたまへるとふらひにわたり給へる
夜。虫のこゑあはれなれは。

關 白

よもすから思ふ心をしりかほにとふらふむしの聲そかなしき
七十二番

左

あねきみかくれて後。兵部卿の宮の上に。御ふくぬき給
ふへき事なときこえたまふとて。

右 大將

右

はかなしや霞の衣たちしまに花のひもとくおりもきにけり
としあらたまりて。大將。春日さす汀の氷いつとてや猶
とけかたきこゝろなるらん。と聞え給けるに。

院内親王

春あさみとくる汀もあらしかしむすひし水のなこりのみして
七十三番

左

女三宮六條院にわたり給し比。御手ならひに。

紫の上

身にちかく秋や來ぬらんみるまゝに青葉の山もうつろひに梟
右

大將の御けしきいかにそやみえけるころにか。

院内親王

大かたの萩の下葉をみしほとにわか身の秋になりけるかな
七十四番

左源氏 右山高幾

左

三條宮にもろともにおひいてたまひしに。人しれぬもの思ひつきそめて。夜すからなけきあかし給ひしに。女君。雲々のかりも我ことやひとりこち給ふを聞て。

右大臣

小夜中にともしよわたるかりかねにうたて吹そふ萩の上かせ

右

人しれぬ御けしきを。みしらぬさまにのみもてなしけれは。春宮におはしましし時。

御製

花の色を思ひもわかぬ鶯にかすみわひぬるはにもあるかな
七十五番

左

兵部卿の宮。世にしらすまとふへきかなさきにたつな
みたもみちをかきくらしつゝ。とのたませけるに。

うきふね

涙をもほとなき袖にせきかねていかに別れをとむへき身そ

右

里に出たる朝。宮の御文に。いかにくおもひあかして
今朝みれは袖のうへにもにたる空かな。と侍けれは。

春宮宣旨心書春宮宣旨

身の上にうたてたゝよふうたかたの今も浮たる心地のみして

七十六番

左

あふひのうへかくれ給にし秋のくれに槿の宮に。

分てこのくれこそ袖は露けゝれもの思ふ秋はあまたへぬれと

右

權中納言と聞えし時。春宮宣旨に。 内大臣

わかなかす涙の色ににたる哉もの思ふ宿に落るもみちは
七十七番

左

むらさきの上かくれ給ひて。又の年のくれに。

物おもふと過る月日もしらぬまに年も我代もけふやつきぬる

右

春宮におはしましし時。九月廿日あまり。宣旨まかてんとするに。夜もすからおほとのことらす。行末かねてち

きらせ給て。

御製

戀わひてまとふ我玉ことならはむなしきからの行衛尋ねむ

七十八番脱

七十九番

左

六條院にわたり給ひて後。院の御文に。なかみちをへた

つるほとはなけれとも心みたるゝ今朝の淡雪。と侍ける御返し。

二品内親王

はかなくてうはの空にも消ぬ^(そい)へき風にたゝよふはるのあは雪

右

内のおとゝ中納言と聞えし時。みるほとはゆめはかりなる心ちしてゆきまとはるゝ明くれのそら。と侍りける御返し。

春宮宣旨

明くれの空とも空に消なみやつきせぬ夢の中にまとはて八十番

左

あふひの上かくれ給ひて後。

君なくて塵つもりぬる床夏のつゆ打はらひいく夜ねぬらん

右

ゆくゑなきことをおほしなけきける比。

御製

燈火のつくるをきはに眺めつゝまところまぬ夜を幾よ經ぬらん八十一番

左

つゆのやとり君を置てと侍りける御かへし。

紫のうへ

風吹はまつそ亂るゝ色かはる淺茅かつゆにかゝるさゝかに

右

いつとなきものおもはしさにひとり詠て。

東宮宣旨

秋ふかき嵐の山のこきませにさまゝものをおもふころがな八十二番

左

おまへの前裁の霜かれを。女もろともに詠給ひて。

兵部卿のみこ

穗に出ぬもの思ふらししのすゝきまねく袂の露しけくして

右

一條前齋院にて。つれなきをうらみ聞えて。

内大臣

いとゝしく萩の上かせふきみたり心まとはす秋のゆふくれ

八十三番

左

一條の御息所かくれて後。右のおとゝ物おほしみたる

さまにみえければ。

右大臣上

哀をもいかにしりてかなくさめんあるや戀しきなきや悲しき

右

冷泉院かくれさせ給ひてのころ。一品宮の御とふらひに。

春宮宣旨

中々におとろかさしとしのふれとみしやゆめとそ忘わひぬる
八十四番 左源氏 右取替波也

左

なかめの比。浮舟の君に。

右大將

水まさる遠のさと人いかならんはれぬなかめにかきくらす比

右

權中納言。たれやさはいてはしき道ならん山口しるく
まといぬるかな。と侍ける返し。

右大臣四君

ふもとよりいかなる道にまとふらむゆくゑもしらぬ遠近の山
八十五番

左

北山にて。初草のわか葉のうへをみつるよりたひねの
袖もつゆそかはかぬ。と侍ける御かへし。

故右衛門督北方著上
頼母

枕ゆふ今宵はかりの露けさをみやまの苔にくらへさるなむ

右

こゝちれいならてこもりぬ給へるころ月をみて。

權中納言後内大臣上

雲となり煙とならんゆふへにも今宵の月のかけをわするな
八十六番

左

すまのわかれの比。かゝみを見給ふとて紫上に。

身はかくてさすらひぬとも君かあたりさらぬ鏡の影は離れし

右

あらぬさまにおもひなりて。かきこもりなんとての夜。

四の君のもとにあからさまにたち入て。やかていつる
に。

權中納言

しのふへきふしもあらしな笛竹の此世をかきる音をつくす哉
八十七番

左

うきふねの君宇治にわたりて後。 右大將

右

式部卿のみこ御いみにこもりゐて女君に

内大臣宣亮

戀侘てなかきやすからねさむれはならはぬ秋の月をみる哉
八十八番

左

すまの浦におほし立しころ。致仕のおとゝにわたり給て。大宮に聞えさせ申給ける。

鳥部山もえし烟もまかふやとあまの鹽やくらみにそゆく

右

四の君今おとゝに渡りて後。内のおとゝ思しなけきて。

かきこもり給へるころ。おほきおとゝに渡りてひころ

歸給はぬに。内のおとゝ。きみこふときえみきえすみゆ

きかへりこえそわつらふ四手の山道。と侍返し。

内大臣上元權中納言

とりへ山もえし煙はそれかとも我をは誰か今はたつねむ
八十九番

左

弘徽殿のほそとのにて。とのみ申の聲きこえけるに。

二條内侍のかみ

心からかた／＼袖をぬらす哉あくとしゆるこゑにつけても

右

世をうらみて。近江のうき橋といふ所にこもりなんと

て。

右大臣四君

あさほらけゆふつけとりももろ共になく／＼こゆる逢坂の關

九十番

左源氏

右露宿

左

六君に兵部卿の宮かよひそめさせ給ける夜。更行迄をはしまさゝりければ。

右大臣

大空の月たにやとる我宿に待宵すきて見えぬ君かな

右

世をそむきて後。權中納言のもとに。入道兵部卿親王

前垣のましはの扉さゝすしてあけぬくれぬと君をこそまで

九十一番

左

すまのうらにまうてゝ歸り給しあした。雲ちかく飛か

ふ田鶴も空にみよ我は春日のくもりなき身そ。と侍け

る御かへし。

前太政大臣

たつかなき雲ゐにひとりねをそ鳴つはさならへし友を戀つゝ

右

曉ほみとけんとおほし立ける夜。今はと百敷の内を出

るに。内のうへの。つねはいとみておしませ給ふ御琵琶

を。残るてなくひきすませたまひつるに。みかきのと

のゑまで。はるかに聞えけるに。

入道兵部卿の御子

雲のうへを思ひはなれて出る哉こゝろそとまるなかはなる月

九十二番

左

すまの別ちかくて後。わたりたまへりしに。

花散里の上

右

月影のやとれる袖はせはく共とめてもみはやあかぬ光を

古郷の内侍のかみを。心より外に御らんしそめて。たち
わかれさせ給ふとて。

御製

なからへてよに有明の月すまはまためぐりあふ契りともかな

九十三番

左

皇太后宮入内の時。御くしの箱なと奉らせ給ふとて。齋
宮群行の日。大極殿の儀式おほしめし出て。

朱雀院御製

別れちにそへしをくしをかことにて遙けき中を神やいさめし

右

伊勢におはしませし。内侍のかみに。

前齋宮

から衣みもすそ河に袖ぬれぬしめの外なる人をこふらし

九十四番

左

齋宮群行日。御息所に。

右

ふりすてふけふはゆく共す。か河八十瀬の河に袖はぬれしや

齋宮くたり給はんことちかくなりての比。前齋宮。その

かみの心ちこそすれ思ふことなるす。かかはこゆと聞

さへ。と侍りければ。

前齋宮女別當元宰相史衣

おもふ事なるとなけれと鈴鹿河八十瀬の波にぬれつ。そゆく

九十五番

左源氏

右末葉露

左

兵部卿宮宇治におはしましそめたる夜。姫きみにも
こしに對面して。つきせぬつれなさをうらみあかし給
ふとて。

右大將

しるへせし我やかへりてまとふへき心もゆかぬあけくれの道

右

みやつかへに出立とて。車よせたるに。あねの姫君に。

中納言典侍

わするなよ心にもあらで別ぬるこのゆふ暮そかたみなるへき

九十六番

左

あねの姫君かきりにおはせし時。右大將。なくねかなし

き朝ほらけかなと侍けるかへし。

兵部卿の宮の上

曉の霜うちはらひ鳴ちとりもの思ふ人のこゝろをやしる

右

宰相中將と聞えし時。久しくれいならさりしまきれに。

女君の行衛たつねうしなひて。

右大臣將イ

戀わたる冬の夜すからね覺して時雨かうへのあられをそきく

九十七番

左

紫の上かくれ給ひて又の年の夏。おまへの池のはちす

盛なるを。いかてなみたのと詠くらさせ給ふゆづつか

た。日くらしのはなやかになきいてたるに。

つれくゝとわかなきくらす夏の日をかことかましき虫の聲哉

右

やまひかきりになりて。

右大將

いつの日か鴈の羽風にさそはれてすゑ葉の露の消はつへき

九十八番

左源氏

右海人荊藻

左

六條院の春のおとゝにて。人々まりもてあそひけるに。

心より外のみすのひまより。女三宮を見たてまつりて。

いとゝしきおもひそひにけるのち。かのみやの小侍従

かもとへ。

柏木權大納言

よそにみておらぬなけきはしけれとも名残こひしき花の下陰タリ

右

藤壺にて。物のひまより后の宮をほのかに見奉りける

あけほのに。

權大納言

九重の霞のまより花をみてあはれこゝろのみたれそめぬる

九十九番

左

宇治のみこかくれ給て後。つねに住給ひける所をみて。

右大將

たちよらむかけとたのみししぬかもと空しき床に成にける哉

右

藤つほの中將の君に。

權大納言

袖の浦になみよせかへるうつせ貝空しきからといつか成へき

百番

左

かきりに思ひなりけるころ。京より母の夢にみゆとて。

おほつかなきことをいひつかはしたりける返し。

うきふね

後にまたあひみんことを思はなんこの世のやみに心まとはて

右

世をそむくとかきをき給ひける。權大納言

めのまへにさらぬ別れをみせしとてよもの嵐にまとひぬる哉

以定家卿自筆本書之

以忠兼朝臣權大納言公卿卿事自筆本書寫之

右拾遺百番歌合以百花庵宗固本書寫

百番歌合

左 源氏

右 狭衣

一番 繼部

左

中將ときこえしとき。かきりなくしのひたる所にて。あやにくなるみしかよさへ。程なかりければ。

六條院

右

譲位の事さたまりて後。しのひて齋院にまゐりて。いてさせ給とて。御製

二番

左

弘徽殿の三のくちにて。おほろ月夜の内侍のかみに。

右

深きよのあはれをしるも入月のおほろけならぬ契りとぞ思ふ大將におはせしとき。弘徽殿にて女二宮に。

しにかへりまつに命そたえぬへきなか／＼何に頼みそめけむ
三番

左

三のくちにて。

内侍のかみ

うきみよにやかてきえなは尋ねても草の原をはとほしと思
右

一品の宮。人しれぬさまにおはしましけるを。行衛おほ
つかなかくおほしめしなやみけるころ。おはなかもとの
おもひ草の。しも深くなりゆくを御覽して。

尋ねへき草のはらさへ霜かれて誰にとほましみちしはの露
四番

左

おほろ月夜に。内侍のかみのとりかへたまへりしあふ
きにかきつけ給。

世にしらぬ心こそすれ有明の月のゆくゑを空にまかへて

右

後の宮はしめてみたてまつらせ給ける曉。

なけきわひねぬよの空にゝたるかな心盡しの有明の月
五番

左

朱雀院行幸試樂のあくるひ藤壺に。

物思ふに立まふへくもあらぬ身の袖〔打〕ふりし心しりきや

右

嵯峨院の御時。みのしろも我ぬきゝせむとのたまはせ
ける後。御こゝろのうちに。

色々にかさねてはきし人しれす思ひそめてしよはのき衣
六番

左

そてうちふりしと侍りける御返し。入道後の宮

唐人の袖ふることは遠けれと立むにつけてあはれとはみき
右

内より。なみたにくるゝ月かけはと侍りける御返し。

齋院

あはれそふ秋の月影そてならておほ方にのみなかめやはする
七番

左

源氏大將と申しとき。

前坊の御息所

袖ぬるゝ戀ちとかつはしりなからおり立たこのみつからそ憂
右

兵部卿宮元服のゝち。女二宮に御消息きこえさせ給を

いかゞ御覽しけむ。御てならひに。 中 宮

立かへりしたさはけともいにしへの野中の水はみ草みにけり
八番

左

冷泉院の後の宮。あやしときゝしゆふへこそはかなく
きえし露のよすかも。と聞え給ふに。

右

齋院源氏宮と聞えし時。在中將の琴をしへたる所かき
たる繪をたてまつらせ給とて。

よしさらは昔の跡をたつねみよ我のみまどふ戀のやまかと
九番

左

頭中將ときこえし時。玉かつらの内侍のかみに。

柏木權大納言

思ふとも君はしらしなわきかへり岩もる水にいろしみえねは
右

大將におはしましゝとき。源氏。宮の御方にて。

忍ふるをねにたてよとや今宵さは秋のしらへの聲のかきりに
十番

左

源氏中將ときこえし時。たてたまへる御車に。あふきに
かきつけて。 ゆふかほの女君

右

二位中將ときこえし時。すきさせ給御車に。のきのあや
めをひきおとして。

しらぬまのあやめはそれとみえす共蓬の門は過すもあらなむ
十一番

左

ゆふかほのきみいさなひいてゝ。なにかしの院へおは
せしあかつき。

右

あすかゐのやとりに御車ひきいたたまへるに。かやり
火のけふりところせければ。

我こゝろかねて空にやみちぬらん行かたしらぬ術のかやりひ
十二番

左

かくやは人のとのたまひし御返し。 ゆふかほの女君

山端のこゝろもしらて行月はうはの空にて影やたえなん
右

道のしるへを思ひしらはとまれとはいひてまじとら
みさせ給ければ。

とまれ共えこそいはれね飛鳥井に宿りとるへき影しみえねは
(「ヒツイ」) あすかぬの女君 (「たけれい」)

十三番

左

諒闇の年。雲林院に法文なとならひ給て。ひころおはせ
しにむらさきのうへに。

淺茅生の露のやとりに君をゝきてよもの嵐そしつ心なき

右

中宮に。しのひておはしましそめての朝に。

面影は身をそはなれぬ打とけてねぬよの夢はみるとなけれと

十四番

左

すまのうらにたてまつり給ける。紫のうへ

浦人のしほくむ袖にくらへみよ波ちへたつる夜のころもを

右

中納言と申しゝとき。大殿の御物忌かたくて。えおはし
まさゝりければ。あすかゝはあすわたらんとおもふに

もけふのひるまはなをそこひしき。と侍ける御返し。

わたらなむ水まさりなは飛鳥河あすはふちせに成もこそすれ
(「こゝろ」) (「ふせみ」)

十五番

左

こゝろならす御覽しそめたりける人につかはしける。

ほのかにも軒端のおきを結はすは露のかことを何にかけまし

右

すゑこそすかせをと侍けるに。

嵯峨院第二内親王

した萩に露きえ佐しよなゝもとふへき物とまたれやはせし
(「のこ」)

十六番

左

つゆのかことをと侍りける御返し。伊豫介朝臣女

ほのめかす風につけても下萩のなかはゝ霜にむすほをれつゝ

右

源氏。宮の御方にて秋冬の花を御覽して。

いかにせむいはぬ色なる花なれば心のうちをしる人もなし
(「そなきい」)

十七番

左

弘徽殿の細殿にしのひてあかし給夜。とのみ申のこゑ

きこえけるに。

なけきつゝ我世はかくてすくせとや胸のあくへき時そ共なく

右

人の問まてなりにつかはしける。

我こゝろしとろもとろになりにつけり袖より外になみたもる迄

十八番

左

のわきのあした女のもとにつかはしける。

右大臣

風さはきむら雲まよふゆふへにも忘るゝまなくわすられぬ君

右

めつらしき御契りのゝち女二宮に。

なかむらん夕への雲にたなひかて思ひの外にけふり立ちろ

十九番

左

うつせみの身をかへてけるこのもとに猶人からのなつ

かしきかな。とかきつけ給へるをみて。

うつせみのはにをく露のこかくれて忍び／＼にぬるゝ袖かな

右

なつころ源氏。宮の御まへにて。こすゑのせみのなきい

てたるを聞せ給ひて。

聲たてゝなかね計そ物おもふ身はうつ蟬にをとりやはする

廿番

左

五月五日たまかつらの内侍のかみに。

前兵部卿親王

けふさへやしる人もなきみ隠れに生る菖蒲のねのみなかれん

右

二位の中將ときこえし時。一品宮に。

思へともいはかき沼の菖蒲草みこもりなからくちやはてなむ

廿一番

左

三條のみこの御服のころ。玉かつらの内侍のかみに。

右大臣

おなし野の露にやつるゝふちはかま袂はかけよかこと計りも

右

齋院にて祭の日葵を御覽して。

みることに心さはかすかさし哉なをたに今はかけしと思ふに

廿二番

左

右のおとゝ。むけによをおほしえさんやうにいけなくとらみ聞え給に。

朱雀院第二内親王

我のみやうき世をしれる例にてぬれそふ袖のなをくたすへき

右

こひわたる袂はいつもかはかねとけふはあやめのねさへなかれて。と侍りける御返し。一條院宣耀殿の女御

憂にのみ沈む水屑となりはてゝ今日は菖蒲のねたになかれす

廿三番

左

右のおとゝ。女二の宮にかよひはしめ給けるころ。うへにきこえける。

藤内侍のすけ

かすならば身にしられまし世のうさを人の爲にもぬらす袖哉

右

大將におはしましゝとき。一品宮にまいらせ給ひし比。

御こゝろならぬさまにきこえさせたまへりけるに。て

ならひに。

嵯峨院第二内親王

夢かとよみしにもにたるつらき哉うきは例もあらしと思ふに

廿四番

左

藤内侍のすけ。身にしられましときこえたる返事。

人のよのうきを哀とみしかとも身にかへむとは思はさりしを

右大臣上

右

女二の宮に。

後の世のあふせを待むわたりかは別るゝ程はかきりなりとも

廿五番

左

宇治にかよひそめたまひしころ。女きみもろともになかめたまひしかつぎ。

兵部卿親王

中絶むものならなくにはし姫のかたしく袖やよはにぬる覧

右

あすかゐのやとりにて。

あひみては袖ぬれ増る小夜衣一よはかりはへたてすも哉

廿六番

左

すまのうらより。こりすまのうらのみるめのゆかしきをしほやくあまやいかゝおもはむ。と侍りけるに。

二條の内侍のかみ

浦にたくあまたにつゝむ戀なれはくゆる煙よ行方そなき

右

ときはにて。

明日香井

忘れすははやまのけふり分こえてみつのにや思ひいる覽

廿七番

左

玉鬘の内侍のかみ内にまいりたまはん事。ちかくきこえしころしも。ふかきしたをれにつけて。

前兵部卿親王

朝日さす光をみても玉さゝのはわけの霜をけたすもあらなん

右

一條院東宮におはしましゝ時。源氏の宮に。雪ふりたるくれ竹につけて。たのみつゝいくよへぬらむたけのはに。と侍りけるを御覽して。

そよさらに頼むにもあらぬこ笹さへ末葉の雪の消もはてぬに

廿八番

左

葉わけのしもをと侍りける御返し。

玉鬘の内侍のかみ

こゝろもて光にむかふあふひたに朝をく霜をゝのれやはけつ

右

雪のあした。いくよへぬらむ竹のはにと侍し御返し。

齋院

末のよも契りやはするくれたけのうはゝの雪をなに頼むらん

廿九番

左

兵部卿宮のうへ二條院にわたり給ぬときにて。

右大將

しなてるや鳩のみつ海にこく舟のまほならね共あひみし物を

右

賀茂行幸日。

思ふことなるともなしにいくかへり恨みわたりぬかもの河波

卅番

左

兵部卿宮うへにたいめむし給へるに。あさかほのはな

をさしいれて。

右大將

よそへてそみるへかりける白露の契りかをきしあさかほの花

右

齋院に。

神山のしるしはかくれ忍へはそゆふをもかくる賀茂のみつ垣

卅一番

左

のわきのあした。六條院わたり給て。おほかたの御とふらひはかりにてかへらせ給を。みをくりて。

あかしのうへ

大かたに^(のイ)萩のはわたる風の音もうきみひとつにしむ心ちして

右

すゑこそかせをと侍けれは。

嵯峨院第二内親王

うき身には秋そしられし^(るイ)おき原や末こそかせのをとならね共

卅二番

左

雪ふるひ。宇治におはしましくらして。うきふねのきみ

に。

兵部卿のみこ

峯の雪みきはの氷ふみ分て君にそまとふ道はまとはす

右

源氏。宮の御方に雪山つくるを御覽して。

もえ渡るわかみそふしの山よた^(つもとるイ)雪にもきえず煙たちつゝ

卅三番

左

兵部卿宮宇治におはしましかよふときゝて。うきふね

のきみに。

右大將

浪こゆるころともしらす末の松まつらんとのみおもひける哉

右

高野へまいらせ給とて。

たに深^(ミイ)くたつをたまきは我なれや・おもふ心のくちてやみぬる

卅四番

左

こゝろならすなからへて。をのといふ所にすむころ。月

をみて。

浮舟

我かくてうき世のなかにめくる共誰かはしらむ月のみやこに

右

こゝろよりほかのふねの中にて。身をかきりにおもひ

なりけるに。わたるふな人かちをたえとかゝせ給たる

御あふきに。かきそへける。

飛鳥井

かちをたえ命もたゆとしらせはや涙のうみにしつむふな人

卅五番

左

女三宮に。

柏木權大納言

行衛なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ははなれし

右

いかなりけるおりにか。

あくかるゝ我たましゐも返りなん思ふあたりに結びとゝめは^(ミイ)

卅六番

左

夢ともなき御おもかけに。いとゞもよをされて。寺々に御誦經せさせ給とて。

とけてぬぬれ覺淋しき冬のよにむすほをれつる夢のみしかさ

右

おほしあかしけるほとしるき御なみたはかりを。むなしきとこにさくりつけさせ給て。

かたしきにいくよな／＼を明すらんぬ覺の床の枕うくまで

卅七番

左

都にかへりたまふとて。琴の御ことゝとゞめ給に。

あかしのうへ

なをさりにたのめをくめる一言を盡せぬねにやかけて忍はむ

右

ときはのいへのはしらにかきつけゐる。

あすかる

言の葉をなや頼まむはしたかのとかへる山は紅葉しぬとも

卅八番

左

おはしましそめたる夜。むつことをかたりあはせむ人もかなうきよの夢もなかはさむやと。侍りければ。

あかしのうへ

明ぬぬにやかてまとへる心にはいつれを夢とわきてかたらん

右

女二宮に。

うたゝねをなか／＼夢と思はゞやさめてあはする人も有やと

卅九番

左

大將におはせし時。齋宮の御くたりちかくなりてのころ。野宮にまいりて。御息所にたいめんしたまへるあか

つき。

曉のわかれはいつも露けきをこはよにしらぬ秋の空かな

右

后の宮にはしめてきこえさせ給ける曉に。

くすのはふ籬のきりも立こめて心もゆかぬ道のそらかな

卅番

左

うき舟の君に。

兵部卿親王

ななき夜をたのめても猶かなしきはたゝあすしらぬ命也けり

右

入道一品宮におはしましそめたりしあしたに。たてまつらせ給ける。

またしらぬ曉露におきぬれて八重たつ霧にまとひぬるかな

冊一番

左

ふりすてゝけふは行ともすゝかゝはやそせの波に袖はぬれしや。と侍りける御返し。

前坊御息所

鈴鹿河やそせのなみにぬれゝすいせまで誰か思ひをこせむ

右

大將におはしゝとき。高野にまいらせ給て。

戀しきもつらさもおなしほたしにてなくゝも猶かへる由哉

冊二番

左

宇治におはしまして。むなしくかへり給とて。

兵部卿親王

いつくにか身をは捨むとしら雲のかゝらぬ山もなくゝそ行

右

齋院源氏宮ときこえし時。

我はかり思ひこかれて年ふやとむろのやしまの煙にもとへ

冊三番

左

なくゝうらみてもかひなき御心のうちなれば。

あふことの難きをけふに限らすは今いく世をか救きつゝへむ

右

齋院卜定の日。御車よせて。

けふやさはかけ離れぬる夕たすきなとそのかみに別さりけん

冊四番別駕

左

病をもくなりてまかりいて給とて。桐壺御息所

かきりとて別るゝみちの悲しきにかまほしきは命なりけり

右

女二の宮に。

いのちたに盡せすものを思ふかな別れし程にたえもはてなて

冊五番

左

すまのわかれに。

うき世をは今そわかるゝとゝまらんなをは糸の神にまかせて

右

よをおほしすてける夜。齋院よりいてさせ給とて。

涙のみよとまぬ河となかれつゝわかるゝ道は行もやられす(こゝろ)
冊六番

左

須磨の別れに。

紫 上

おしからぬ命にかへてめの前の別れをしはしとゝめてしかな

右

空行月のはてをしらねはと侍ける御返し。

齋 院

月たにもよそのうき雲へたてすはよなく袖に宿してもみむ(わらい)

冊七番

左

いまはとてみやこにかへり給ひしとき。

あかしのうへ

年へつるとやまもあれてうき浪の歸る方にや身をたくへまし(とこやイ)

右

とをき所におもひたちぬへきころ。 あすかゝ

花かつみかつみるたにも有ものをあさかの沼にみつや絶なん

冊八番

左

すまのうらにて。ちかくけふりのたつを御覽して。

山かつのいほりにたけるしはゝも言とひこなむこふる里人
右

めのとにいさなはれていてたつあかつき。

明日香井

あまのとをやすらひにこそ出しかと夕つけ鳥のとはゝ答へよ

冊九番

左

宰相中將ときこえし時。すまのうらにまうてゝいそき

かへるとて。

前太政大臣。

あかなくにかりのとこよを立わかれ花の都にみちやまとはむ

右

一品宮に。はしめてまいらせ給へりけるあかつき。一條

宮にひとゝころなかもおはしまして。

しらせはやとこよ離れし鴈かねの思ひの外にこひてなくねを(きかい)

五十番

左

すまのうらにて。

戀わひてなくねにまかふ浦なみは思ふかたより風やふくらん

右

高野にまいらせ給とて。

うき舟のたよりに行むわたつみのそこをしへよ跡のしら浪
五十一番

左

伊勢にて。

前坊御息所

いせしまや汐ひのかたにあさりてもいふかひなきは我身也
右

ふねのうちにて。

明日香井

流れてもあふせ有やとみをなけてむしあけのせとにまち試ん
五十二番

左

すまのうらにて巳日の秋し給。海のおもて行衛もしら
すなきわたりてみゆるに。こと／＼しき人形つくりて。
舟にのせてなかずをみたまひて。

しらさりしおほ海の原に流れきてひとかたにやは物は悲しき

右

あすかゐのことおほしいて。

からとまりそこのみくつはなかれしをせゝの岩波尋ねてし哉
五十三番

左

すまのうらの雨風のさはき。なへてのよあとたえてた

つねまいる人なかりしに。二條院の御使はかり。いみし
きさまにてそほちまいれりしおほんふみに。

紫のうへ

浦風やいかにふくらむ思ひやる袖うちぬらし浪まなきころ

右

御こゝろならさらん事を。おほしめしなやみけるころ。

ほかさまにしほ焼けふりなひかめや浦風あらく波はよるとも
五十四番衰傷部

左

きりつほの御息所かくれての秋の月のよ。

故院御製

雲の上もなみたにくるゝ秋の月いかてすむらんあさちふの宿

右

飛鳥ゐのきみうせにしあき。

せく袖にもりて涙やそめつらん梢いろ。ます秋のゆふくれ

五十五番

左

みやすところおはせて後。内よりゆけいの命婦をつか
はして。御とふらひありけるに。

桐壺更衣母

いとゝしくむしのねしけき淺茅生に露をきそふる雲の上人

右

まゝとろますあかさせ給よ。郭公をきかせ給て。

夜もすかなけき明してほとゝきす鳴ねをたにも聞人（かない）もなし

五十六番

左

きりつほのみやす所かくれてのち。はゝのもとにつか

はしける。

故院御製

宮城のゝ露ふき結ふ風の音にこはきかもと思ひこそやれ

右

あすかゐの御おもひに。

夕暮の露ふきむすふこからしやみにしむ秋のこひのつまなる

五十七番

左

ゆふかほのつゆきえて後。法事に誦經せさせ給とて。は

かまのこしに。

なくゝもけふは我ゆふ下紐を何れのよにかとけてみるへき

右

飛鳥井のきみ。雲のけしきはそれとしらしなとかきた
るを御覽（み）して。

かすめよな思ひきえけん煙にも立をくれてはくゆら（るな）さまし

五十八番

左

あふひのうへかくれ給て後。

なきたまそいとゝ悲しきねしとこのあくかれ難き心ならひに

右

一條の宮にて。

塵（りい）つもるふるき枕をかたみにてみるも悲しき床のうへかな

五十九番

左

をのにてさまかへて。

うきふね

亡物にみをも人をもなし（あもつゝい）はてゝすてゝしよをそ更にすてつる

右

ときはにてかきりになりにければ。さまかふとて。

あすかゐ

をくれしと契らさりせは今はとて背くも何かかなしからまし

六十番

左

頭中將と聞えし時。あふひのうへかくれ給て後。大將の
御方にまいりたまへるに。あめとなり雲とやなりにつ
むいまはしらすとくちすきひ給を聞て。

前太政大臣

雨となりしくるゝ空のうき雲をいつれのかたとわきて眺めん

右

あめわかみこのむかへるとき。

こゝのへの雲の上にて登りなは天つ空をやかたみとはみむ

六十一番

左

夢のなこりに。いとゝむかしの御事おほしいてゝ。

なき人をしたふ心にまかせてもかけみぬ水のせにやまとはん

右

あすかゐのきみ御ゆめにみえければ。

をくれしと契りしものをしての山みつせ河にや待わたるらむ

六十二番

左

御なやみ月ころへて。中宮いてさせ給へるに。おきゐた

まへるを。院みたてまつらせ給て。今日はいとよかめり。

この御まへにては。こよなきやと聞えさせ給ければ。

紫のうへ

をくとみる程そはかなきともすれは風にみたるゝ萩のうは露

右

中宮にいまたおはしましそめさりし時。

いつ迄としらぬ眺めにはたつみうたかたあはて我々けぬへき

六十三番

左

むらさきのうへかくれたまひてのち。六條院の御まへ

のはなさかりに。

いまはとてあらしやはてむなき人の心とゝめし春のかきねを

右

あすかゐゆくゑなくなりて後。

しきたへの枕そうきてなかけけるいもなき床の秋のね覺に

六十四番

左

むらさきの上かくれ給て後。九月九日。

諸共におきゐし菊の朝露もひとり袂にかゝるあきかな

右

あすかゐ行衛なくなりてのち。

思ひやる心（そいといまよひぬるイ）いつくにあひぬらん海山とたにしらぬわかれに

六十五番

左

うへかくれ給てのち。

大空をかよふまほろし夢にたにみえこぬたまの行衛たつねよ
右

高野にてひしりたつねえさせ給て。

ありなしのたまの行衛をまとはさて夢にも告よ有しまほろし
六十六番

左

むらさきのうへかくれ給て後。六條院に。

前太政大臣

いにしへの秋さへ今の心地してぬれにし袖に露そをきそふ
右

右

飛鳥井なくなりてのち。ときはにおはして。

秋の色はさもこそみえめたのめしをまたぬ命のつらくも有哉
六十七番

左

病かきりになりてのち女三宮に。

柏木権大納言

いまはともえむ煙もむすほれ絶ぬ思ひの猶やのこらん
右

右

かきりになりにけるころ。

飛鳥井

きえはてゝ烟は空にかすむとも雲のけしきはそれとしらしな
六十八番

左

こゝろつからこのよをかきりに思ひすてける夜。

うきふね

かねのをとのたゆる響にねをそへて我世つきぬと君に傳へよ
右

右

ときはの山さにて。かきりにおほえければ。

あすかゐ

なからへてあらはあふよを待へきに命はつきぬ人はとひこす
六十九番

難節

左

故院かくれさせ給てつきのとし。八月十五夜に。

入道後の宮

九重に霧やへたつる雲の上の月をはるかに思ひやる哉
右

右

うまれたまへるみこを見給て。

嵯峨院皇后宮

雲ゐまておいのほらなん種まきし人もたつねぬみねのわか松
七十番

七十番

左

中將におはせしとき。北山に旅ねし給て。

吹まよふみ山おろしに夢さめて涙もよほす瀧のをとかな

右

女二宮なやませ給ころ。后の宮にまいらせ給へるに。空
かきくもりしくれて。よもの木の葉きおひおつるに。

人しれすをそふる袖もしほるまで時雨とゞもにふる涙かな
七十一番

左

宇治にこもりゐてとしひさしくなりてのち。冷泉院御
消息に。世をいとふこゝろは山にかよへともやへたつ

雲をきみやへたつる。と侍し御返し。 第八親王

跡たえて心すむらんとはなけれ共世をうち山に宿をこそかれ
(イナシ)

右

はしめて本院にいらせ給て。

齋院

をのれのみ流れやはせんありす河いはもるあるし今は絶せし

七十二番

左

みこ右大臣の六のきみにかよひ給ひてのち。

兵部卿宮のうへ

おく山の松のかけにもかくはかりみにしむ秋の風はなかりき
(やまのこ)

右

おほしめしつゝくることや有けむ。

此ころはこけのさむしろかたしきて巖の枕ふしよからまし
七十三番

左

みやこにかへりて。おほみのいへの松かせを聞て。

あかしのあまきみ
(山梨イ)

みをかへてひとりかへれる故郷に聞しにゝたる松かせそく

右

大將におはせしとき女二宮に。

おれかへりおきふしわふる下萩のすゑこそ風を人のとへかし

七十四番

左

右大將。秋ころ宇治にて。はしひめのこゝろをくみてた

かせさすきほのしづくに袖そぬれぬる。と侍りければ。

宇治のみこの姫君

さしかへるうちの川おき朝夕の雫や袖をくたしはつらむ

右

一條院御時。弘徽殿女御御方にて。嵯峨院の御よの事お

ほしめしいてゝ。

あかさしし跡やかよふといその神ふるのゝ道を尋ねてそとふ
(みくるイ)

七十五番

左

あきころ宇治にまうてたまへるに。みこ。むかへの山寺
にをこなひし給ほとにて。たいめんせてかへるとで。

右大將

朝ほらけ家ちもみえす尋ねこしまきのを山は霧こめてけり

右

嵯峨院にて。入道宮の御方にて。

(しほし)

ましてしはし山端めくる月たにもうき世に我をとゝめさらなん
七十六番

左

ふゆの夜宇治にこもりゐてのころ。あけかたに千とり
なきければ。

右大將

霜さゆるみきはの千鳥うちわひて鳴ねかなしき朝ほらけ哉

右

三條の宮にしひてまいりて。いけにたちゐるをしの
こゑをきかせ給て。

我はかり思ひしもせし冬によつかはぬをしのうきね也とも
七十七番

左

をのにて雪ふるひ。

うきふね

右

ときはにて。

あすかゝ

名をたのむ常盤の杜のまき柱わすれなはてそ朽はしぬとも
七十八番

左

右大將宇治にて。兵部卿の宮の御返はいつかたにかき

こえ給らむとゝひたまひければ。宇治親王姫君

雪ふかき山のかけはし君ならてまたなみかよふ跡をみぬかな
(よ)

右

高野へまいらせ給とて。

わきかへり氷のしたはむせひつゝさもわひさするよしの河哉
七十九番

左

よもきふのすみかおほしいてゝ。なをわけいり給とて。

尋ねても我こそとはめ道もなく深きよもきのもとを

右

入道一品宮にて。一品宮をみたてまつらせ給て。

しのふ草みるに心はなくさまで忘れかたみにもるなみた哉
八十番

左

故院の御はてに。后の宮よをそむかせたまひし夜。

月のすむ雲ゐをかけてしたふ共此世のやみに猶やまとけん

右

秋の月の夜。齋院にたてまつらせ給ける。

こひてなく涙にくもる月影はやとる袖もやぬるゝかほなる

八十一番

左

后の宮。あかしにてうまれさせ給へりしに。五月五日五

十日にあたる覽とおほしやりて。

うみまつや時そともなき影にゐて何の菖蒲もいかにわぐらん

右

故院の宮にて。若宮の御こゑを聞せ給て。

しらさりしあしのまよひのたつのねを半雲の上にや聞渡るへき

八十二番

左

女三宮の御うふやの事よそにきゝて。

柏木權大納言

命あらはそれともみまし人しれす岩ねにとめし松のおいすゑ

右

一品宮の御うふきぬにかきつけゝる。あすかゐ

人しれぬ入江のさはにしろる人もなくゝきする鶴の毛衣

八十三番

左

后の宮いはけなくて。むらさきのうへの御もとにわた

り給けるに。

あかしのうへ

すゑ遠き二葉の松にひき別れいつかこたかかけをみるへき

右

入道一品宮に。女宮をわたしたてまつるとて。

あすかゐ

行すゑを頼むともなき命にてまたいはねなる松にわかるゝ

八十四番

左

故權大納言かくれてのち。右のおとゝの大將におはし

ける時。かのかたみの笛をふきすさひたまひけるよの

御ゆめに。このふえはおもふかたことに侍りきとて。

笛竹にふきよる風のことならは末のよなかきねにつたへなん

右

あすかゐのきみ行ゑなくなりにしころ。おはしまさゝ

りしよの御夢に。

行衛なく身こそなりなめ此よをは跡なきみつを尋ねてもみよ
八十五番

左

ふかき山にうつろふとて。とし比しるしをきたりける
ふみなと。御方にたてまつるとて。明石の入道

光いてむ曉ちかく成にけりいまそみしよの夢かたりする

右

今上大将と申しとき。よをおほしすてける夜。堀川院の
御ゆめに。

ひかりうする心こそせめてる月の雲かくれ行ほとをしらすは
(こいぢイ)

八十六番

左

紫上かくれたまひてつきのとし祭の日。かたはらにを
きたるあふひを。院御覽して。このかさしよなさへわす
れにけりとなたまはせければ。六條院中將

さも社はよるへの水にみ草めめけふのかさしよなさへ忘るゝ

右

をさふるそてもしほるまてと侍りけるを。きゝやとか
めけむ。嵯峨院皇后宮中納言典侍

心からいづれのもる山にぬるゝは人のさかところそみれ
(こい)

八十七番

左

六條院すまにうつろひたまひけるころ。右近將監とけ
て。みふたけつられにければ。御ともに出たつに。院の
御山にまうてさせ給ける夜。たゝすの御まへみやらる
るほとにおりて。御馬のくちをとりて。

ひきつれて葵かさしゝそのかみの思へはつらし鴨のみつかき
(をい)

右

一條宮にて雨ふりけるひ。
(か)

かしはきの葉守の神になとてわれ雨もらさしと契らさりけん
(か)

八十八番

左

すまのうらにはらへし給とて。

やをよろつ神も哀とおもふらんをかせる罪のそれとなければ

右

齋院御禊日。

御殺するやを萬代の神もきけもとより誰か思ひそめてし
(しかい)

八十九番

左

ちゝみこのふくにて。

宇治親王の姫君

色かはる袖をは露のやとりにて我身そさらに置處なき

右

こゝちれいならてのころ。

嵯峨院第二内親王

ふきはらふ四方のこからし心あらは憂身(たゞ)を隠す雲(かき)まあらせよ

九十番

左

こゝろならすなからへて。

うきふね

みをなけし涙のかはの早きせをしからみかけて誰かとゝめし

右

あすかゐのかたみのあふきを御覽して。

なみた河流るゝ跡はそれなからしからみとむるおもかけそなき

九十一番

左

さまかふとて。

浮舟

限りそと思ひなりにし世中をかへすゝもそむきぬる哉

右

舟のうちにて。

明日香井

早きせの底のみくつとなりనికిと扇の風にふきもつたへよ

九十二番

左

をのにてよをそむきてのはる、

うきふね

袖ふれし人こそみえね花のかのそれかと匂ふ春の明ほの

右

ときはのかたへとて。めのとのいさなひけるに。

あすかゐ

かはらしといひしゝゐしは待みはや常盤の杜に秋やみゆると

九十三番

左

すまにて八月十五夜。内のうへの御ことなとおもひい

てきこえ給て。

うしとのみひとへに物はおもほえてひたり右にもぬるゝ袖哉

右

あふさかやまのさねかつら。さまゝくるしき御心の

うちに。

人しらはけちもしつへき思ひさへあと枕ともせむる比哉

九十四番

左

頭中將ときこえしとき。六條院中將にものし給ひし時。

内より常陸宮にかくろひいりて。のきちかき紅梅のか

けにたちよりたまふに。もとより立かくれてふりすて
させ給へるつらさに。御をくりしつるはとて。

前太政大臣

もろともに大内山は出つれと入かたみせぬいさよひ

右

弘徽殿のとをゝしたてさせ給ふに。人の御ためもいと
をしかるへき事なとおほしめしつゝけて。

くやしくも明てける哉愼のとをやすむひに社あるへかりけれ
九十五番

左

すまのうらにて。花宴の日おほしいて。

いつとなく大宮人の戀しきに櫻かさしゝ今日もきにけり

右

后の宮わたり給てのち。

尋ねみるしるしの杉もまかひつゝなを神山にみやまとひなん
九十六番

左

前太政大臣。むらさきにかことはかけんふちのはなま
つよりすきてうれたけれとも。と侍けるに。

右大臣

幾かへり露けき春を過しきて花のひもとくおりにあふ露

右

中宮にきこえそめさせ給へりしころ。

かたしきにかさねし衣うちかへし思へは何をこふるこゝろぞ
九十七番

左

浮ふねのきみ。はしめてたつね玉ふとて。三條わたりな
るたひのやとりに。とかく案内つたへたまふほと。やゝ
ひさしきにあめうちそゝきければ。 右大臣

右

齋院源氏宮と申し時。雪ふりたるくれ竹につけて。

一條院御製

たのみつゝ幾よへぬらん竹のはにふる白雪のきえかへりつゝ
九十八番

左

六條院に行幸の日。御前の菊をおらせ給てむかし青海

波のおりおほしいて。おほきおほいまうちきみに。
色まさる籬のきくもおりゝに袖うちかけし秋をこふらし

右

賀茂祭の近衛使を御覽して。

ひきつれて今日^{〔さへ〕}はかきしゝあふひ草思ひもかけぬしめのほか哉
九十九番

左

大原野行幸日。おほきおほいまうちきみにつかはしける。
冷泉院御製

右

雪ふかきをしほの山に立きしの古き跡をもけふは尋ねよ
嵯峨御時。おまへにて笛つかうまつらせ給に。そらのけ
しきかはりて。いなつましきりにすれは。

いなつまの光にゆかむ天のはらはるかにわたせ雲のかけはし
百番

左

六條院あかしより都にかへり給て。はしめて内にま
りたまへりけるに。
朱雀院御製

宮柱めぐりあひける時しあれは別れし春の恨み残すな
右

あめわかみこのむかへむなしくかへさせ給て。

嵯峨院御製

みのしろもわれぬきゝせむかへしつと思ひなわひそ天のは衣

右源氏狹衣歌合以古寫一本校合了

源氏物語願文

桐壺春煙。速翔。法性之虛。帚木夜辭。終開。覺樹之花。厭。空蟬虛世。觀。夕顏露命。得。若紫雲迎。令。末摘花臺坐。紅葉賀秋暮。見。落葉。厭。有爲。花宴春朝者。觀。飛花。悟。無常。悲。無逢。日之誠。別。驚。生死無常。怨。神葉差而行途。知。愛別離苦。花散里春天。除。火宅之熱惱。身小盡秋水。期。露地之清涼。分。蓬生深藂。尋。菩提之眞道。越。關屋堅扃。到。涅槃之彼岸。摸。彌陀聖容。爲。繪會合。備。眞法供養。以。珠玉鬘。出。瞿麥之家。消。燃螢胸思。隨。法師之教。挑。智惠篝火。越。生死流浪之陬磨關。至。四智圓明之明石浦。依。之遁。名於東屋賤栖。厭。幻世。卜。居於奧山椎下。祈。蠅身。然間如。仙洞千年之給仕。摘。野若菜。供。養世尊。爲。靈山萬歲之妙法。汲。竹河古水。備。闕伽。爰捨。家背。世之

砌。鈴虫聲難。振棄。入。道零。莊之樞。松風音猶殘。昔。然而早歲手習。爲。事。臨終正念往生極樂之文。紅梅勾宮。想。像聖衆來迎。栴檀沈水之香。伏乞花下忘。歸之櫻。人早學。化生蓮臺先蹤。莫。惜。來居梅枝餘波。仰願樽前勸。醉之雲客。速。還三界流轉之妄執。結。留七寶莊嚴楨柱下。抑適。人天善趣宿木。再歸。三途之故鄉。希。如來長者日影。如。何一旦之雲隱。唯所。望者。五障三從。薄雲急晴。僅露消時。紫女之垢穢身。捨。觀夫雖。十惡。猶引接。甚。於野分風拂。夕霧。雖。一念。必感應。喻。之奧津浪送。浮船。情惟釋迦出。此方。令。水鳥之憂栖。彌陀在。彼國。更驚。胡蝶之思夢。柏木森陰涼。晚想。像七寶樹林木下風。早晚渡。夢浮橋。始。翫。八功德池藤裡葉。終而伴。如來法皇之御幸。着。忍辱之藤袴。聞。上品蓮臺之橫笛。看。解脫之總角。方今始。自。比丘比丘尼優婆塞優婆夷。至于歎。待

宵深行空之宇治橋姫^上施^ニ難^レ值淨土御法^一頓
渡^ニ二十五有苦海^一。令^レ聞^ニ鳥雁鴛鴦之初音^一而
已。

右源氏物語願文以甲府廣澤寺本書寫按合畢

群書類從卷第三百十四

物語部八

伊勢源氏十二番女合

近き御代のおほむことにや。二月十日あまり
南殿の花ざかりに。吹かぜもありをしりたる
長閑なるべし。君もうつりきこえたまへば。
大きな宮をはじめ奉て。女御更衣おはし
ますかぎりはさぶらひ給はぬも侍らず。樂人
などめしいでて。みち／＼にたるは。皆えりす
ぐらせ給へば。糸竹の聲は雲をひゞかし。ま
ひ人などもきよらをつくさせ給。袖さしかざ
せるすがたどもは。紅葉のかげには侍らねど。
けふはあはれとも。たれかはみ侍ざらんとの
給て君うちゑませ給へば。女房のかぎりはこ

たへまうき御けはひなるにこそ。御かはらけ
まいりて。花有喜色などいへる題。ひたぶる
につかうまつる。からやまとの打ませて。日ね
もすながめくらし給。あすもと契りけんはぎ
が花ならでも。月はげにやどるかほなりけり。
大宮より大納言といへる女房めし出て。あす
もかく御らんぜんなるべければ。めづらかな
る御あそびのこひねがはるゝあまりに。ふる
きものがたりにあらはれ侍る女をつがひさだ
めて。つかさ位をいはゞなにのあらそひかは
侍らん。たゞしな心の時によれらんふし。
につけて雌雄を奏し給へとて。左伊勢物語。右

は光源氏に侍る人々を。十二つがひに御こゝろにうかぶにまかせて。みづからあそばしてたぶ。大納言君給て。物をあはするためしはおほかるめることながら。あるは歌。あるは繪。にほひ。あふぎなど折にふれことによそへて。かちまけはあへなむかし。とをきむかしの人をいかさまに引しらべをしはかられ侍なんと。をろかなる心のやみは。かゝる道にも入かりけり。かしこきおほせごとの歸るためしあらまほしうとて。かたはし／＼いひ定め侍らば。ふりにし玉のみがかぬかたの恨は。いと空おそろしからずといふことなし。

一番

左 五條太后宮 勝

右 桐壺更衣

左は。文德天皇の太后宮にて。君のかしこうち

はしますにしたがひて。世をなで民をめぐみ給ふこともあさからず。君をしもいさめ奉り給のみ也。周の文王のきさいは。そのみ世をたもちたまはんことをねがひて。よをやすんずることは人をうるにあり。人をうることは□にしかじとて。ゆへある臣下のむすめごとこにこひとりて御門に奉られけるとなり。かゝるためしまでひきおぼさるゝにや。御心だて御すがたのやむごとなききはにつけても。いひなずらへがたし。世繼のもの語などにも。この君をば花にたとへ奉るにこそ。ちゝの君の心をさへのばへ給ばかりに。あらぬ名をしもとりそへ給。この御腹に王子生れさせ給て。ひとそうくらゐにつかせ給。いともめでたし。右は。きりつぼの更衣。ちゝは大納言などにてうせしにや。たづきなうなり行まゝに。御宮仕にうちへまいられ侍しを。みかどときめかせ給て。

とし月はこなたにて明しくらし給。かたへの
人みなそねみおもひ給へらぬも侍らず。人の
國にも。かゝることのおこりにこそよもみだ
れあしかりけれと。やう／＼あめがしたのも
てなやみぐさとなり給。程なう王子うみ奉り
給。この御子ひるこの御よはひのほどにや。御

はゝの更衣なやみ給ことありき。をこたりも
やり給はで。夏比はいとしもあもうわづらは
せ給へば。御さとにまかでなんとし給。御門こ
との外になげきしづませ給て。かね／＼は后
の位をだにもおぼしめしながら。よのそしり
もかとうちすぐいこしをなどの給て。手ぐる
まのせんじかうぶらせ給ふ。更衣。

かきりとて別るゝ道のかなしきにいかまほしきは命成けり
かくてつゐにかくれ給。うちには。ひたすらの
御なげき。玉の行衛のしらまほしう。まぼろし
ゆかしきみてゝろ成けりとて。若宮御ぶくの

間は。御うばのあま君ぐし奉りて。野分にあれ
たる草の庵は。ならひにこえて露けき秋なる
べし。内には此宮の御うへさへおぼしくはへ
奉り給て。命婦の君して。あま君のもとにたま
はせける。

みやきのゝ露ふき結ふ風の音にこ萩かもを思ひこそやれ
御かへし。

荒き風ふせきしかけのかれしよりこ萩かうへそしつ心なき
御ぶくはてぬるまゝに。まいり給て。弘徽殿の
宮の御やしなひのやうにておひ立給。七さい
の春。ふみの道に入そめ給。こまよりさう人ま
ゐりしに。鴻臚館にてあはせ奉り給て。行末か
けての御さかへまでうらなひさだめ。御かた
ちのひかるさまにおはすめればとて光君とな
づけ奉り。かのせいわうのためしをうけ給て。
十二にてうるかうぶりして。みなもとの姓を
たまはり給。冷泉院の御宇に太上天皇の位給

て六條院と申けるにや。かくやむごとなうざえとくに付ても。天下をおどろかし給ふ君の母にて。所せうおもひ給へ侍れども。そのみ世にも。こゝらねたみおぼされし更衣なれば。けふの御あそびにえらばれ侍る判者にて。かしこき宮のみかげを。いかでかあふぎたてまつり侍らざるべき。

二番

左 二條后宮 持

右 薄雲女院

右。此女院は。きりつぼの更衣かくれ給て後は。朝夕の空をだにわきまへがたう。ひたすらにおぼしほれ給て。御枕をとらせ給て。たれとともにかと打なげかせ給て。あさまつりごとはたゆみ行のみなれば。みよもあきらかなならじなど歎きさはぎ侍て。いかにしてもがなと。この君をもとめ奉りければ。折ふしはなぐさ

め□□を給がちに成にけり。十に四五あまり給ほどの御よはひにて。をのづからかゝやくやうにおはしましければにや。かゝやくひの宮と申けるとぞ。藤つぼにすませ奉り給て。やうやう昔にかよふ御さまなりけり。ひたる君もまことの御ちやめきて。朝ゆふなれつかうまつり給。かたみにいはけなき御心に。あそびがたきにも。のし給て。おほけなうおもひかはし給。としへても君はえしらせ給はで。御子などうみ奉り給をば。とりわきてかなしうし給けり。おとなび給にしたがひて。源氏の君にいとようかよひおはしませば。よ人もこゝろしれるどちは。かたはらいたきことにおもひ奉らぬも侍らず。母君もかくうたて侍るすぢなれば。それかあらぬかにいひたどらるゝしもこそ。すこしはつみあさかるべきなめるを。かうまでひたみちにうつし給へるあさましさな

どうちなげきて。源氏の君。

よそへつゝみるに心は慰まてつゆけさそふるなてしこの花
此君ほどなふ位におはしましては。源氏の君
ぞよの中の道はとりはからひ給し。げに母が
たからこそ。みかどの御子もきははおはすめ
れなどおもひしりぬ。左の宮は。いとおさなう
おはしましけるより。春宮へまいり給べきに
ていつき奉るに。中將成けるおとこ。わりなう
おもひかけ奉りて。とかくいひわたりければ。
御あやはらからなどもふかうせいしければ。
世中を思ひうんじて。人のくにかくれぬ。
さりてもよるはさすがにかよひながら。いた
づらなりけるにや。

徒に行てはきぬる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつゝ
などどうたひける。かくてもせんかたなけれ
ばにや。忘るゝことをだにとうちねがひて。佛
神にも祈つゝ。はらへさまゝし侍しかど。あ

りしよりげに戀しければ。

戀せしとみたらし河にせし御秋神はうけすもなりにける哉
うちにおはしましては。君の御おぼえあさか
らぬ御なからひにて。御いとこの宮なども。ひ
たみちにかしづき奉り給へば。猶よの光はみ
えそひ給にや。貞觀の末に皇子うみ給て。又の
としのほどにや后宮にたち給。此つがひはい
づれもやむごとなきすぢながら。いさゝかの
くまもまじらひ給うへ。そのしなゝもおな
じ風情に侍めれば。よき持にておはしましな
んかし。

三番

左 有常女君

右 紫上 勝

左。中將の父の親王紀有常が家など。遠からぬ
程なれば。おとも女もいはけなきまゝに。う
ちいざなひなどしてあそびけるが。春秋の花

もみぢにつけても。いろふかきさまに。ゆくすゑかけてちぎりかはしけるに。もろともにおとなしうなりてのよは。女のおやいにしさまにもゆるう心とも侍らぬを。はゝなん心あるさまに。けしきばむおりくもありけるにや。さてよめる。

み吉野のたのもの鷹もひたふるに君か方にそよると鳴なるおとこよろこびてかへし。

我爲によるとなくなるみ吉野のたのもの鷹をいつか忘れむいかなりける折にか。女。

あま雲のよそにも人のなり行か流石にめにはみゆる物からおとこかへし。

あま雲のよそにのみしてふる事はわかぬ山の風はやみ也と侍るは。又おとこある人とかけり。かゝればにや人のくにに人もとめてまかりかよひけるに。女もはたおなじこゝろに。いでたゞしやりなどすめれば。おとこいぶかしうおもひける

が。又いぬるかほして。もののくまにたゞずみ見ければ。いとようけさうして。夜ふくるまでことかきならし。うらみくひてぬとて。

風吹はおきつしらなみたつた山よはにやきみか獨こゆらん此君ぞおとこのいまはの時にまささだちてこそやみぢのひかりにもと打たのまれ侍るに。すてはて給てんやと歎ければ。おとこ。

しるやさは我に契れる世の人の暗きにゆかぬたより有とはさもゆへありがほなりや。右。此上は御母にはいとはやうをくれ給て。うばのあま君ぞおふしたて給ふ。源氏の君さるゆへありて。北山そらづの坊にわたり給ことありけり。此うば君も僧都にゆかりある人にてつねはゐんすのために。此山にかよひすみ侍りけり。さることには。ひめ君をもあひぐし奉り給ふ。げんじはつれづれのあまりに。みなれたまはぬ山ざとずみのさま。いぶせくもめづらかにもおはしける

が。かのもこのもたちより／＼して。のこるく

まなくやすらひて。御ともの人々に。かしこは
こゝはとたづねしらせ給に。おなじ柴垣の庵
ながら。木だちよしありておかしくみゆるあ
り。これみつをめしてとはせ給へば。むかしこ
あぜち大納言とかいひし人の北の方は。此そ
うづのいもうとなめるが。京にもかつはすみ
ながら。後のよのたのもし所なればあり／＼
はこゝにきかよひ給。又おさなういとうつく
しき女君のましますは。兵部卿宮の御むすめ。
あま君のまご也とかたり奉る。君。さらば猶よ
く見てむとて。さしのぞき給へば。げになべて
の人とはみえ給はで。おひいでたまはむ山ぐ
ちはしるかりけりと。まづ御こゝろの空めか
しきぞ御くせなりとみゆ。そうづにもあま君
にも。ほの／＼うちいで給ふ。

初草の若葉の上をみつるより旅ねのそてもつゆそかはかぬ

あまぎみ返事。

枕ゆふこよひはかりの露けきを見山の下にくらへさらなん
君はひめぎみの御事。いとも／＼の給をきて。
たち歸りなむとし給も。なごりすくなからぬ
山ざとなりなんかし。

夕まくれほのかに花のいろを見てけきは霞の立そわつらふ
御むかへとて。頭中將。左中弁。さらぬ君達な
どみちき給て。うちよりのおほせごとなどさ
まざまにて。いざなはれかへらせ給ふ。又のあ
したより御つかひひまなう。山ふかき御うし
ろめたさいひもやり給はず。かくて月ごろふ
るまゝにうば君もかくれ給へば。京のとのに。
御めのとの少納言などひとりふたりしておは
しけるを。ちゝ宮の御かたみにうつろはし奉
らんとすなるを。いひつぐ人侍りければ。とみ
の御ことに。二條院へむかへとり奉りてかし
づき給。御ことてならひなどをしへ聞え給へ

ば。ほとくらう御むすめのさましてそひ給ふ。

てにつみていつしかもみん紫のねにかよひけるのへの若艸

と侍る頃ほひよりぞ。なまごころづき給ふ御

こゝちはせし。後はあまたの御中にひとり御

おぼえはしるかりけり。すまの御たがひめな

ども。此上の御ことのみぞ。朝夕の御歎ぐさ

にはおぼしけるとなり。御子などもおはしま

さねば。いとわかうものし給しより。ほとけの

みちにすゝませ給て。みづから千部の法花經

かきたて給て。いかめしうくやうし給。此つが

ひ。左もすがたこゝろのえんなるかたは。よに

なきさまに聞え侍るを。我ゐる山のと侍る。こ

とにいさゝかのふしをこめ侍る也。ものをあ

はするならひ。吹毛のなんをもとむるなるべ

し。たとへまふとちのたはぶれごとにも侍れ

かし。つみにはのがれがたきがうへ。右はいも

せのなかにとりて。よとともに何のゆへかは

侍らんなれば。かちにとおもひ給へらるゝは

いかゞ。

四番

左 戀死君

・右 葵上 勝

右の上。大きおとゞの御むすめ宮ばらにたゞ
一所おはしまして。かしづかせ給へば。ひかる
君源氏の姓を給ての日より。みかどの御はか
らひにてむこにならせ給。うち□あひすみ
給ていとよき御なからひなり。あにの頭中將。
おなじさまにおひ出給て。紅葉の賀の舞など
にも。左みぎりにておはせしを。みる人はうら
やみ奉て。おなじ人と生るゝとも。みめこゝろ
の世にすぐれてよしといはるゝためしは昔の
つみかろきにて。行するの佛のこゝろにもち
かゝるめるなど。この御ふたかたぞ。よの中の
かゞみにはいひもてはやしける。うへはいと

御こゝろおもりにかはしまして。なれゆき
給にしたがひても。人をばあそろしう。はづか
しきことにおもひかまへて。ものなどうちい
ひ給にも。ふとさしたにもいらへず。おもてう
ちむかひては。御かほのいとあかみ給までみ
え侍るも。いとあかしき御こゝろなりかし。源
氏わらはやみにつけて北山へおはしまして歸
給にも。れいのはいかくれて。とみにもえいで
たまはぬを。あととせちにきこえ給へば。やゝ
してわたり給へり。ゑにかきたるもののひめ
ぎみのやうにしすへられて。打みじろぎ給こ
ともかたく。うるはしうて物し給へば。おもふ
こともうちかすめ山里の物がたりをもきこえ
んに。いふがひありてあかしううちいらへた
まはゞこそ哀ならめ。よにはこゝろもとけず。
うとくはづかしきものにおぼして。年のかさ
なるにそへて御こゝろへだてのまさるもくる

しきに。時々はよのつねなる御けしきをも見
ばや。たへがたうわづらひ侍しをも。いかゞと
だにとぶらひたまはぬこそめづらしからぬこ
となれど。猶うらめしうときこえ給へば。やを
ら打そむきて。とはぬはつらきものにやあら
んと。しりめに見をこせ給へるまみいとけだ
かううつくしげなり。さるに御子うみ給て。い
くほどなう打なやみ給ひがちなり。よのさは
ぎとなりて祈さまゝ侍れども。おもき御物
氣にてつゐにかくれ給ふ。かの宮す所より。
人のよをあはれときくも露けきにをくるゝ袖を思ひ社々れ
御かへし。源氏。

とまる身も消しもおなし露のよに心をくらん程そはかなき
わかぎみを御かたみには見奉り給ひて。

霜かれの籬にのこるなてしこを別れし秋のかたみとそみる
御歎にしづませ給ひて。又。

なき玉そいとゝ悲しきねしとこのあくかれ難き心ならひに

左。父おとどなども此君をば。あまたの中にわきてかなしきものにおもひかしづきけるに。ふとれいならずおはしましそめて。おもりそひ給へば。まどひてぐわんだてなどせしかどそのかひなし。いまはの時となりて。かゝる人をおもひそめて。ほどふるまゝにくづおれ侍るなどかたりければ。おやなんつたへ侍ければ。おとこまどひてきたりけれど。うせはてぬえにしのほどかなしみて。日數をこもりけり。みな月のころなれば。夜ふけていとすゞしきに。ほたるのたかうとびかふをみて。

とふ螢雲のうへまでいぬへくは秋風ふくとかりにつけこせこの段ことに勝負わきがたし。むかしの歌合などをみるに。あふ戀とあはざる戀は。さしならべてあふかたをかちとすなるためしも侍にや。左。戀しに給へらん心ざしのほど。あはれにも忝もおもふ給へ侍りながら。ふるきれい

なきにしも侍らねば。右を勝とさだめ侍なり。左のまうしう猶はるけがたからんかしやと。なみだをさへかたきにこそ。

五番

左 夢語君

右 朧月夜内侍督 膝

右の内侍督は春宮の御母。弘徽殿の御いもうと。けふの花のえん見給はんとてまうのぼり給。二月廿日ばかりのことなれば。よひはほのぐらうおかしきに。こうきでんの三の戸わたりをたゝずみ給に。うちよりわかやかなる御聲のいとなべてならぬして。おぼる月よにしく物はなしと打ずんじけるを。源氏さしよりてかいいだき。やをらかくれ給。女君はづかしと打さゝやき給へどかひなし。明行まゝに夢の心ちして。

うき身よに頼てきえなは尋ても草の原をはとけしと思ふ

かくてしのび／＼にかよひたまふ。この君は春宮へまいり給べきなるを。かゝる疵さへいでき給へば。母の后宮もいきどほり涙ぐみて。院かくれさせ給て後は。春宮にもことのよし申させ給て。源氏をすまへうつろはしたてまつり給ふ。かのうらへも。

涙河みなはもうきて消ぬへしなかれて後のよをもまたすて又御めのとの中將のかたへとて。すまより。

こりすまの浦のみるめも床しきに鹽焼海人よいかと思はん左。夢語のきみ。はじめはたゞ人のつまにて侍しやらん。後はやむごとなきかたにちもはれ給て。子なども侍しにや。これもはかなきことばかりにまかせてたえはてぬ。此中將の君を。いかでと思しゝかど。さなんといはんもすべなきにや。まことならぬ夢がたりす。源氏紫の上の御ことを。僧都にうち出給しにも。このことばはみゆ。中將はおもひおもはぬこゝろなけ

れば。きてぬにけり。又いかなるおりにか。

百年に一とせたらぬつくもかみ我やこふらし面かけにみゆ右は。花のえんにあひ初し内侍の。かうにめぐらひ侍るは。いとめづらかなる興なるべし。左は。いさゝかさたすぎたるかたに見なれ侍れば。すいわうのかうべの霜に似たるをにくむとかや侍れば。ふるきこと葉になずらへて。かたぶき侍にこそ。右をかちとす。

六番

左 小野小町 勝

右 女三宮

右は。朱雀院御心なやみ。日にそへておもり給へば。御世を春宮にゆづり給。女宮ふた所おはしましけるを。御いとをしみなのめならず。いかさまにかなりはて給はんとすらんなど。うち歎かせ給て。二宮をば柏木右衛門督。三宮をば六條院御うしろみうけ給り給ふ。三宮はこ

とに御かたちも。よになうをむなるかたにおはします。御佛の御さうなど。さま／＼きこえあるさまなるべくとも。この御すがたにてやをしはかられ侍らん。げに青柳の朝露にうちなびく影は。いかなる花にかはけをされ侍るべき。めのまへにさとうちおほふ心ちせらるる。院もいとかしこう思かはし給けるに。かし

は木の右衛門督ものたよりにふと見初奉て。しづこゝろなう思わたりければ。御めのとのじゞうにかたらひて。あり／＼の御ふみなどかよひけるにや。此頃は紫の上なやみ給て。

院もひたすらこなたにおはしまして。すこし御こゝろきよげなれば。宮の御かたにわたらせ給。おもひかけず入さ給めれば。とりみだるものどもこしらへあへず。督のふみなど。しとねのしたに。かいくるみてをけるを。院みつけれに。さた／＼とことあらはれて。ける文な

りけり。とりてかへらせ給のちは。まことの御心ざしもえおしまさず。御子をさへうみ給へば。御身にもくやしきことの御歎のみなるにぞ。御うぶやなどには。我御子のごとくたびたびおはしまして。いかの御ほがひに。若君をいだき奉りて。宮の御みゝにあてゝ。

たかよにか種をまきしと人とは。いかゝ岩ねの松は答へん宮はかいふしてきえいり給。督にもうゝるこつけしきばみ給へば。物やみになりて。つゐにうせ給ぬ。いまはの時に。じゞうにつかはしける。

今はとてもえん烟もむすほゝれたえぬ思ひのなをや殘さん宮御らんじて。

たちをひて君やしなましく事を思ひこかるゝ烟くゝらへに宮はちゝの御門にも御いとま申させ給はで。御ぐしおろして入道の宮と申き。左は色好の家なるべし。さるべくはなからひのかたにと

りては。右に申くらふべきかたも侍らず。すがた心のよにすぐれ。やまとうたの道にさへ。なべての聞えにも侍らず。ちはやぶる神代にはじまるわざなるを。ふるきものことばに。いにしへのことをも歌のこゝろをもしれる人。

わづかに獨ふたりといひてすなはち小町をくわへたり。人のくににも女はみめこゝろにつけてかしきかたの聞えは侍めるは。はまのまさごのごとくなれど。道にとりてはあるは繪。あるはふしなどには見え侍れど。からの歌などにも。その名にたかきはまれなるやらん。むかしはいざなみのみことあなにとながめ。下てる姫のあもなるやをとたなばたのとよみ。近きよには。そとをり姫のくものふるまひといひ。うねめがあさか山と侍しは。あさからぬこゝろにもぞ侍るらん。又こゝらのせんしうなどにみえ侍る女の名は。あげてかぞふべか

らず。かの古今集は貫之御ゆるされにあづからずば。はたあるべからず。ひとり古今のあいだにあゆむなどぬしなき詞にしも侍らねど。女のうへにひきとりては。こまちにやゆづり聞えたまひつらんかし。

七番

左 前齋宮女御

右 權齋院 勝

右。あさがほは加茂のいつきにぬ給しより。源氏神のいがきのうちまでの給わたり侍しかども。つれなくすぐし給。父宮かくれさせ給に。とぶらひなど申たまひて。

人しれす神のゆるしを待しまにこゝら常なきよをすくす哉御かへし。

なへてよの哀計をとふからにちかひしことは神やいさめむ又源氏。

みしおりの露忘れぬ朝顔の花のさかりはすきやしぬらむ

かくはの給つくし給へども。つれなきかぎりには。此君を申侍るやらん。ちゝの御あと。桃ぞののみやゆづりえさせ給て。をこなひすみ給とぞ。左は。かの中將うちの御つかひにて。伊勢にくだり給。后宮の御かたより。つねのつかひよりはよくいたはれなど侍しかば。ねや遠くさしもえはなたざめれば。ねひとつばかりに女きたりて。うしみつまでかたらふ。さて明はてゝ女のもとより。

君やこし我や行けんおもほえすゆめか現かねてかさめてかかへし。中將。

かきくらす心のやみにまとひにき夢うつゝとはよ人定めよ神のいさむる道ならずとか侍るなれば。さしも思給へらぬを。かのたかはし氏に玉て。いまにみ前をゆるさることなきなど申侍れと申侍なれば。右は。おりぬ給てだに神やいさめんと猶あがめきこえ給ふるに。左は。まさしきゐ

がきの内なれば。そのおそれなきにしも侍らじと。わづかにをしはかられ侍るはいかじ。おぼつかなしや。

八番

左 伊勢持

右 明石上

左は。七條の大后宮につねは侍しにや。寛平の御門ありく御らんじけるが。王子一所うみ奉りけり。やまと歌の道に。おさく聞え侍るとなり。この道は秋津しまのみのりなるがゆへに。その人のめいぼくならずといふことなし。伊勢物がたりといへる事は。かの女のかきえらびて。宇多の御門に奉けるよし。題號につけてつたふる人も侍るとかや。猶はなはだしきほまれなるべし。右は。ちゝはりまのかみ任はてゝも。猶いかなる心がまへにや。此うらみをさりやらず。後のよのみちふかうつとめす

みけるに。むすめ一所も給へり。いといたうか
しづきければ。京にも聞つたふる人は。いかに
してか此人をえめと。戀しのぶかたこゝら侍
るめれど。我こそかゝる海づらにしづみもは
てめ。なべてのむこをばとらじ。さるべくは

なか／＼うみに入てよなど。こしらへをきけ
るに。源氏の君すまにうつろはせ給を聞傳て。
いかなるたよりにつけてか。此うらにひきわ
たし奉らんと思ふに。此ほどのたかしほに。御
たび所のさまをしはかれ侍れば。ちいさや
かなるふねして。御むかへにまいる。源氏も
さる夢のさとしもおはせしにや。うつゝにあ
はせ給て。うらづたひし給。入道は所につけた
る御すみかのさま。こゝろのかぎりきようを
つくして入奉る。あぢきなき御つれ／＼に。御
ことの音にたてそへ給て。いと物がなしかり
ける。ある時入道まいりて。びはのてひとつふ

たつ。いとおかしうひきて。御ことなどすゝめ
奉りて。かゝる物の音は。女のひきたるこそ心
はすみ侍れなど。やう／＼むすめのことほの
めかしきこえけるぞ。いとかたはらいたき。や
がてむすめのもとに御文あり。

遠近をしらぬ雲井をなかもわび霞むる宿の木すへをそとふ
うちつけなればにや。御返事申さざめれば。入
道かはりて。

なかもらんおなし雲を詠るはおもひも同じ思ひなるらん
又源氏。

いふせくも心に物をなやむ哉やよいかにととふ人もなみ
このたびはと。むすめの御返事。

思ふらん心の程よやよいかにまた見ぬ人をきゝかなやまむ
むすめをばたかしほのおそれにさはなち
て。をかべの宿にすませしにや。源氏おはしま
して。ことなどひきあそび給にも。物ごとに都
の御かた／＼にも。けをさるべうも侍らず。も

てはやされ給。又のとしの八月には。めしかへされ給。女君たゞならずおはしけるを。御らんじをき給けるぞ御心ぐるしき。かたみにひき給へとて。御ことなどのこし給へば。

なをさらに頼めをきける一ことを盡すぬ音にやかけて忍はん

あかしには。女君うみ奉り給へば。御めのとなどくだし給て。はごくませ給。後は都にうつし奉て。御むすめの君は紫上やしなひにて。春宮へまゐり。國の御母とならせ給。めでたき御すくせ成けり。此番いづくをしゅうともおもひわかれ侍らず。右はおぼろげならぬかたにいひとられ。御子のすへまでさかへのぼり給。御としにまかせたるぞえのいとあさからず。よになのたかきかたにひかれ侍れば。なずらへて持などにや侍るべき。

九番

左 有常娘姉君 勝

右 空蟬君

左の君は。物語のうへにも。いづれやらんとおもひたどられ侍りぬ。初の段にほのく見え侍て。末に女はらからふたり有けり。獨はいやしきおとこのまづしき。ひとりはおてなるおともたりなど侍り。いやしきおともたる。しはすのつごもりに。うへのきぬをあらひてと侍るめるは。ふるきことばにこゝにわがわたくしをあらひ。こゝにわが衣をあらふといへる古語の心などにもや。此段の心ざしあさはかにやは見侍らん。女はわがせをおもふをかしこきにはすなれば。時にしたがへるこゝろ。むかしのことばにもかよひ侍るにこそ。ろうさうのきぬは六位のなどにや。さればいやしきとはいふなるにこそ。

紫のいろこき時はめもはるに野なる草木そわかれさりける。右。うつ蟬は中河のわたりにすみけるが。たび

たびの御かたがへも。下のこゝろなきにし
も侍らず。やり水などのすゞしきなことよせ
給ふにや。かのこ君ぞみち引はし奉る時おは
しけるに。女のねやもいとちかうやどし奉け
れば。さしのぞき給に。まゝむすめとごうちけ
るに。はてぬれば。とをみそなどいひて手をお
りければ。あるじの女。いよのゆげたもよみつ
くしてんやとてわらひしなり。いつとても女
は。いとおほどかに空おそろしきことをおも
ひ。とをにひとつぞこたへまほしう思給へら
れ侍る。此物がたりやらん。あふみの君とかい
ひし人のすぐろくうち給へしにまけめなどに
もや侍けん。さいとりあげて。かろらかにをし
もみて。おもてうちさゝげ。せうさいくとし
たどにことはやうこひけるを。ちゝのおとど
物ごしに見給て。こゝちはづかしう。あなうた
てあなうたてと。つまはじきしてにげ給ひし

と侍るもことほりならずや。さて其夜は。うつ
せみのもぬけとかやなり侍しを。むすめのみ
ねのこりけるに。心ならずあひみ給。源氏。

ほのかにも軒はの萩の結はすは露のかことを何にかけまし
むすめ。

ほのめかす風につけても下萩のなかはゝ霜に結ほゝれつゝ
ぬぎすへしけるきぬをとりかへらせ給て。朝
にかへすとて。

空蟬の身をかへてける木のもとに猶人からのなつかしき哉
御返事。

空せみのはにをく露のこかくれてしのひくゝにぬるゝ納哉
伊與のすけうせて後。めし入給て。あまたのか
ずにさぶらはせ給とかや。右も。心あだくし
きかたにはきこえ侍なるものから。人がらも
伊與のすけなど。に。むすぼほるべきならぬを。
おやなどもなう。たよりをうしなひて。かゝる
かたにむもれぬるなるべし。なみくゝの人

にしもおはさゞめれば。おもはずにたちより
ぬ給はゞ。あなとも聲たてがたかるべし。左は。
たとじへなう。かしこきかたに聞なされて侍
れば。かちの字をくはへ侍るにこそ。

十番

左 中納言娘君

右 夕貞上 勝

右。頭中將雨夜のものがたり。さる女にあさ
からずかよひて。子をさへうみ侍れば。になう
おもひかはし侍しを。家のめなむむくつけき
ことをいふと聞て。こゝろとはひかくれて。い
づちぬらんともしらず侍るなり。その子のな
をば。なでしこといひしなどかたる。その人に
やまかりいでなんとて。かゝる歌をかきてを
さけるとかや。

山かつのかきほあるとも折々は哀をかけよなてしこの露
うせ給しぜんぼうのみやずん所。六條わたり

におはしましけるに。源氏しのび／＼にかよ
ひ給。大ニの御めのと。れいならず侍て。五でう
なる所に侍しを。とぶらひ給はんとておはし
けるも。下の心なきにしもおはしまさず。かへ
らせ給道のほどに。きりかけたつこ家に。しろ
き花のさきかゝりけるを。御ともの人めして。
折て奉れとの給ひしかば。これみつ。なにぞの
花ぞと申侍れば。うちより。これなん夕がほと
いへり。えだもいとなさけなめるに。これに
すへて奉れとて。あふぎをさし出侍けるを。と
りてみ給へば。

心あてにそれかとそみる白露のひかりそへたる夕顔の花
御かへし。

よりて社それか共みめたそかれにほの／＼みえし花の夕顔
御車とゞめて。あるじのなをとほせたまへば。
これみつ。揚名介が家に侍る也。あがたにまか
りてなど申ければ。こよひはとゞまり給。八月

十五夜のことなるべし。となりの家からうすなどいへるものの聲。みたけしやうじんのをとして。なも當來導師とおがむなり。御みゝいとかしがまし。こゝは物むづかしきとて。ひとつ車にて。なにがしの院へいざなひ給に。わがまだしらぬなどのたまひし御返事に。

山のはの心もしらてゆく月はうはの空にて影やきえなん

此所はあれはてゝ。げに松桂にふくろうなき。らんぎくにきつねすむさまなり。夜ふけはて。こだまとかいふもののきたりて。女君をとる奉る。源氏はあきれまどひて。たちをひきぬさもとめ給へどもめにもみえず。火もくらうなりて。物のあしをとのみせしなり。これみつとめしければ。又そらにていふなりけり。又ひかゝげてみ給へば。からのみなりけるぞ。いとせんかたもなき。此所はむかし宇多のみかど。みやす所などひきゐたまひて。あそび給ける

にも。さる物の有けるなど。後にぞくひかなしみ給ふ。ひがし山六道のまへにぞ。ひとつ車にてをくり奉り給。けぶりとなし侍て。ゆめの心ちし給。とのかへりおはしまして。

みし人の煙を雲となかむれはゆふへのそらもなつかしき哉かのめのとに右近といひしを。御かたみにめしをかせ給ふ。左の君。むかし氏のなかに御子むまれ給ふ。御おほぢがたにて。中將。

我門にちひろあるかけをうへつれば夏冬誰か隠れさるへきありはらは。わうしをいでいくばくの世をもへざるに。かくまでおとろへはて給ことをなげきくらし給。あにをとゝひきゐて布引のたき見にまかりて。衛ふのかみ。

我よをはけふかあすかと待かひの涙のたきといつれ高けむ又あるじ。

ぬき亂る人こそあるらし白玉のまなくも散か袖のせはきにかうまでうちなげかるゝよのおもはせも。御

子むまれ給へれば。げにたのもしき御おいさ
きなるべし。此左右又いかにぞや。右の上は心
いと花やかにえんなるかたのまたなうきこ
え。左はなだかう時にあへるさまのみえ給ふ
るを。これはさだかずのみこなり。時の人中將
のことなんいひけると。おもてにあらはれ侍
れば。ふるき人のふでのあと。けちがたきわざ
に侍めれば。をのづから右を勝にと申侍るな
らし。

十一番

左 染殿内侍 持

右 蓬生君

右は。父宮の御ゆづりをたがへず。此宮にすま
せ給。源氏なつかしきことにおぼして。いひよ
らせ給。御こゝろいとうごきなう。しちような
るかたにおはしまして。御かたちなども。なみ
なみの人にはいはれ侍らぬものから。いさゝ

かをくれ給かたも。くはゝりおはせしやらん。
須磨の御旅ゐなどにも。人々の御かずにも。と
りわきたるかたには。思ひもよそへられ侍ら
ざめれば。御こゝろと身をおとしめ給て。とぶ
らひ給ことおさくまれなるにや。かへりて
もかたみに。ふともえ音づれかはし給はず。宮
はよもぎむぐらのあらそへるまゝにろうなど
も雨露にもりくちて。のこれるかたにしたが
ひて。かたぐよりすみたまふさまなり。ちや
の御たからなどは。山ことならずつみかさね
侍しもみなくちうせて。そのものとさへ見わ
かれ侍らぬほどにや。つかうまつりし人も。か
つがつこぼれちりて。したしきひとりとふたり
ぞとどまりける。じやうの君とて。御めのとや
うにて侍しも。つくしの大二になりてくだり
し人にいざなはれければ。さきみ。

たゆましきすちと頼みし玉かつら思ひの外にかけ離れぬる

侍從御かへし。

玉かつらたえてはやまし行道のたむけの神もかけて誓はん
又のとし。源氏物のよすがにおぼしいでてお
はしければ。よもぎがそまのいふせきに。道さ
へたどられ侍ければ。源氏。

尋ても我こそとはめみちもなくふかきよもきかもとの心を
かくてすみ給御さま。見たてまつり給て。此ほ
どのと絶さへうらめしうおぼして。みさうよ
り人めして有べきかざりとりつくろひて。め
のまへのむかしとなし給。あまたの人などよ
びとりて。かみなかしもさぶらはせ給。のちに
は六條院へうつし奉りて。とりわきてあつか
ひきこえ給とぞ。左はやんごとなきかたにき
こえ侍しに。中將あさからずまかりかよひけ
るが。子ある中なりけれど。よのならひかれが
れざまになり侍て。又人のかよふと聞えけれ
ば。

秋の夜は春日むするゝ物なれや霞にきりやちへまさるらん
女かへし。

千々の秋一つの春にむかはめやもみちも花も共にこそあれ
此つがひ。いづれをそれと申定侍らん。右よも
ぎふのやどりに。たへずみ給へらんこゝろざ
し。哀にもかしこうもおもふ給へ侍るを。左も
きはくしうえんなるかたは。をくれてもみ
え侍らぬうへ。こゝをとなむずべきふしも侍
らねば。持などにてもや侍るべき。

十二番

左 初艸君 持

右 王鬘内侍

左は。いもうとのおかしげなるを見て。

うらわかみねよけにみゆる若草を人の結はん事をしと思ふ
女かへし。

初艸のなとめつらしき言のはそうらなくものを思ひける哉
此言にとりて。女をけさうしたるかたに。いひ

なずらふるかたも侍るやらん。はらからのなからひもそのれいすくなからず侍るめれば。さにや侍らんなれど。ふかういもうとをあはれぶさまにも見え侍らずや。又末の段にふぢ原のとしゆきといふ人よばひけり。まだわかれば。ふみもおさくしからず。ことばもいひしらず。いはんや歌はよまざりければ。あるじの人。あんをかきと侍り。

つれ／＼の詠めにまさる涙河船のみひちてあふよしもなしかへし。おとこ女にかはりて。

思ふとも君はしらしなわきかへり岩もる水の色しみえねはなどよみ侍けるに。のちにぞかたり給て。わらはせ給ける。さて源氏もあり／＼はけしきばみ給ふことも侍れども。しらずがほにもてないすぐし給へば。

思ひかね昔のあとを尋ぬれとおやに背けるこそたくひなき女かへし。

古きあと尋ぬれとけになかりけり此よにかゝるおやの心はかく侍れど。つれなくてははて給はじと。さすがにをしはかり侍りぬ。しらずかし。ひげぐろの大將の北のかたになりて。あまたの御子うみ給て。いとかぎりなき御さかへなり。此番又左はたとへけさうのかたにいひとらるとも。まさしきこのかみにつけては。なびくけはひの侍らざるも。そのことほりなきにしも侍らず。右は又まことの御むすめにもあらざめれば。うけひきさぶらひ給はんも。つみなるまではあらじかしなれば。なずらへてよき持こそ侍らめ。

左方

五條大后宮忠仁公良房女

二條大皇大后宮贈大政大臣良卿女母總繼女

有常女君母良門女

戀死君三條右大臣良相公女

夢語君右兵衛督紀名虎女

小野小野出羽郡司小野常澄女

齋宮女御文德天皇御女

伊勢伊勢守繼蔭女

有常女姉君

中納言女君母名虎女

染殿內侍良相女

初草君阿保親王女平城天皇御孫

右方

桐壺更衣大納言女

薄雲女院先帝御女

紫上兵部卿宮女

葵上引人大臣女

朧月夜內侍督弘徽殿御妹

女三宮朱雀院御女

權齋院式部卿宮女

明石上前播磨守女

空蟬君中納言女

夕良上三位中將女

蓬生君常陸宮女

玉鬘內侍致仕大政大臣女

右以_二柳原殿資定卿自筆之正本_一寫之者也。

源氏人々の心くらへ

「きりつぼのかうい。かぎりとしてまかで給ひける御門の御こゝろのうちと。紫の上いまはとて五かいさづけ給ひけん源氏の御こゝろの中と。いづれ猶心ぐるしかりけむ。

みやす所。かぎりとしてまかでたまひけん。おぼつかなさかぎりなけれども。もしながらへたまふやと。御たのみも有けん。紫のうへ。ふりわけがみより御らんじなれたるを。いまはとてやつしはてけん源氏の御心。いかばかりなりけむ。

「内侍のかみ。おぼの月夜詠めけん。夕顔の上。ひかりそへたるといひけん。いづれなをはしぢかなる。

ふかき夜の月を見すてがたく。まだ人もきかずと思ひつゝなんながめけると。おぼえなき

所をさへかいまみけん人こそおそろしけれ。光そへたるとさし出けんはじとみのすきかげ。いとほしぢかなり。

「源氏を丁の内にこめて。ちゝおとゞに見えけん内侍のかみの心と。右衛門のかみのふみを源氏にとられけん女三宮の御心と。はづかしさおそろしさ。いづれにてありけん。

丁のうちの事。はづかしさおそろしさ。をしはからるれど。父大臣の御心ざまも。中々はづかしきはをくれたりけん。歎をば人にことはらせでありなん。源氏にふみをみつけられて。おそろしうはづかしげならん御けしきを。心ひとつにおもひむすびけん。猶やわづしかりけん。

「すまのわかれに京にとゞまりて。いのちにかへておぼしけんむらさきのうへの御こゝろと。源氏めしかへされ給ひしに。あかしにとゞ

まりけん明石上の思ひと。いづれにてありなん。

いのちにかへて歎けるかれは。あさからぬ御心ざしを見しり。なをゆくすゑたのみけん。明石の上。身も數ならで。山がつのいほりに心ぼそき事さへまじはり。おやどもの思ひみだれて。いかにおもひもまさりけむ。

一源氏。女三宮の御ましのしたよりもとめ出したりしふみを御らんじて。ゑもんのかみと心得給ひけむと。源氏。いのこのもちゐあすのくれにまいらせよとのたまひしを。こゝろえたりけんこれみつと。いづれなを心としや。

しとねのしたの文を御らんじて。しらせ給ひけるは。かゝるかたのうたがひは。なべての人さへわりなし。岩もる水のおりもしり給ひなん。惟光がねのこは心とくこそ。

一六條の御息所の。よろづのもののけにいでた

まひけんと。ひげぐろの北のかた。ひとりのはいをなげたりけんと。いづれなをうとましかりけん。

宮す所の。うきかげをあらはれ給ふうらみばかりにはあらで。源氏と紫の上と人きかざりし御むつごとをとがめいでたまひけんこそ。たまかけりけんほど思ひやり。なをうとましかれ。ひとりのはいうちかけけんおりのあはたゞしさはあさましけれど。ひげぐろの大將の北のかたは。ひたすらうつし心ならぬかたに。おもひゆるしてむ。

一うき船のうせむことちかくなりて。宮おはしましたるに。みづからは人めしげくて。つきせずあはれなる御けしきをきけん。ゑもんのかみ。女三の宮ゆへ。かぎりなりけれどえあふまじかりければ。侍従ばかりを。そのゆかりとかたらひけん心のうち。いづれあはれふか

かりけん。

世をかぎりとおもひけるころ。兵部卿の宮おはしたるに。えあはずもてはなれ。あはれなる御けしきをつたへきけん。かなしかりけめど。いづかたもわきがたくおもひつゝ。身もうきものと思ひ。大將に此事をしられてこそ。うせんなんともおもひたちけるは。なをかくてこそあらめ。右衛門のかみ。女三のみや故。かぎりなりけれど。えあはで侍従ばかりをかたらひたまへる御けしきをきくばかりにて。いはねの松のゆくすゑをだに。おぼつかなくてやみけん心のやみいかばかりかは。

一夕がほの上はかなくなりしを。めのまへに御らんじけん源氏の御心と。兵部卿の宮。うき船のあとなきゆくすゑにまよひけん。いづれ今すこしかなしかりけん。

夕顔のうへはかなくなりしは。なをさるべき

命のかぎりにやとも。おもひのどめたまひけん。うきふねのあとなきなみは。たぐひをしはからるれども。宮は御ころならひにもさそふもやと。御心わくかたもありけん。夕がほの露の命は。むなしきからのかなしさに。人のいひつたへん事さへ。なげきそへ給ひけん御心は。まさりもやしけん。

一源氏明石より歸り給ふを。はじめて見たてまつりしむらさきの上の御心と。玉かづらの内侍のかみを。はつせにて見付たりけん右近が心と。いづれなをうれしかりけん。

明石のわかれは。なみぢへだて給ひけんいふせさばかりをぞおもひ給はん。ほど遠からぬへだて。あふ事のたのみもありぬべし。なきかげをしのびて。としごろ佛神をさへうれへわたりけん右近が。かたみに行あひたりけん。むかしの人にはまさりて見なしけんうれしさ

は。いかばかりならむ。

一ひたちの宮。源氏に衣ばこたてまつりしと。近江の君ちゝおとゝにあひ給ひて。さしすぎたりけんことどもきこえけん。いづれ猶かたはらいまし。

あふみのきみのさしすぎたる御返しは。かたはらいたけれど。をのづからおやのけうも御らんじゆるしてん。ひたちの宮の。こだいの衣ばこをとりいだし見せ奉りけん。人心さへくちおし。

一藤つぼの源氏の御事と。女三宮の忍もんのかみの事と。いづれすこしつみゆるさるゝかた有けん。

ふぢつぼつゐに御ゆるびなくて。御門の御ゆへに世をそむかせ給つれど。たちゐにつけての御返。あまりねぢけたる心ちす。女三宮の御心のかよふ事なくて。忍もんのかみもえんけ

ぶりと。いまはのきはに御返事なくてやみなましにて。くちおしかりなんとおぼゆ。

一玉かづらのないしのかみ。れんぜいゐん兵部卿の宮などきこえさせ給ひけるをき奉りて。わが心ならずといひながら。ひげぐろの大將の北の方になり給へると。うつせみの世をそむきてのちは。山ざとなどにかきこもりたらば。むかしの心にて。さも思ひあはせられ。いとおしなりはてゝ。小松をさへひきつれて。もとの岩ねをとのたまひけん。しりたりがほこそ思はずなれ。

一別はいつもとなげきたまひけん野宮のわかれと。みぎはの氷ふみわけ給ひけん宇治のわたりの冬の夜と。いづれ今すこし心づくしなりけん。

野の宮の秋のわかれは。おりからめのまへのあはればかりこそ。おとこの心にもありけめ。

女は又おもひしづめて。おぼしこりぬべきを。またかずまへられたてまつりて。かたぐの數にいりてすみけん。いづれなをおもはずなる。うつせみの身をかへてのち。あまたの御なかにまじろひたりしは。につかはしからねど。ひたぶるにそむきなん世には。佛の御いさめならぬ事は。おもひいれずありなん。玉かづらの。れんぜる院兵部卿の宮などには心づよくて。ひげぐろの大將の入たちたまひけむ。うちおしきに。つるにふつくかなるかたにさだめける事にて。あなたこなた。御心をきぬべきならひなれば。をのづからおもひのどめたまひぬべし。君にはまどふと雪ふみわけてうれへ給ひけん御けしきに。心よりぬべし。

あさがほのさいゐんと宇治のあね君と。いづれこゝろづよし。

朝良の齋院。さかりすぎて。やんごとなき御か

たがたよりもひるし。宮す所の御ありさまにも心づきぬべし。宇治の姉ぎみ。とし月にあさからぬ御心ざしと見たてまつりながら。とかくにのがれてやみにしこゝろづよきは。たぐひあらじかし。

群書類從卷第三百十五

物語部九

源氏物語奥入

桐壺。此卷一の名つばせんざい。或本分ニ奧
端ニ有ニ此名ニ謬也。一卷二名也。

伊行朝臣勘。

或時はありのすさみに憎かりきなくてそ人の戀しかりける
むは玉の暗の現はさたかなる夢にいくらもまさらさりけり
八重葎しけれる宿の淋しきに人こそ見えぬ秋は來にけり
とふ人もなき宿なれとくる秋は八重葎にもさはらさりけり
此うた。其時之非ニ古歌。可レ爲ニ證歌。

いかにしてありとしられし高砂の松の思はん事もはつかし
人のおやの心はやみにあらねとも子を思ふ道に迷ひぬる哉

長恨歌。

歸來池苑皆依レ舊。

太液芙蓉未央柳。

芙蓉如レ面柳如レ眉。

對レ此如何不ニ淚垂。

在レ天願作ニ比翼鳥。

在レ地願爲ニ連理枝。

玉簾あくるもしらすねし物を夢にもみしとおもひかけきや

書ニ加之。

寬平遺誡。

外蕃人必可ニ召見レ者。在ニ簾中ニ見レ之。不レ可ニ

直對ニ耳。李環睽已失レ之。新君愼レ之。

三條右大臣家屏風。貫之。

とふ人もなき宿なれど云々。

命婦。女房の五位に叙するを云。令曰。謂。婦

人帶五位以上。曰爲内命婦。五位以上妻曰外命婦。

まくらごと。あけくれのことぐさのよし也。なき人のすみか尋いでたりけんかたみのかんざし。

長恨歌傳。

指碧衣女。取金釵鈿合。各折其半。授使者。曰。爲我謝大上皇。謹獻是物。尋舊好。としびをかげつくして。

同長恨歌。

夕殿螢飛思悄然。

(探イ) 秋燈挑盡未能眠。

あさまつりごとをこたらせ給ふ。

春宵苦短日高起。

從此君王不早朝。

右近のつかさの殿居申の聲きこゆるはうしに
なりぬるなるべし。

亥一刻。左近衛夜行官人初奏時。終子四刻丑一刻。右近衛宿申事至卯一刻。内豎亥一刻奏。

宿簡。

延長七年二月十七日。當代源氏二人元服。垂延長七年二月十七日。當代源氏二人元服。垂母屋壁代。撤晝御座。其所立倚子御座。孫庇第二間有引入左右大臣座。其南第一間置圓座二枚。爲冠者座。西面。又圓座外置圓座。又其外置理髮具。皆盛柳莖。先兩大臣被召着各圓座。引入了還着本座。次冠者二人立座。退下於侍所。改衣裳。此間兩大臣給祿。於庭前拜舞。不着從仙花門退出於射場。着沓撤祿。次冠者二人入仙花門。於庭中拜舞退出。參仁和寺歸參。先是震儀御侍所倚子。親王左右大臣以下近臣等同候。有杯酒御遊。兩源氏候此座。雖四位親王之次。依仰奥方壁下也。深更大臣以下給祿。兩源氏宅各調屯食廿具。令分諸陳所々。

天慶三年親王元服日屯食事。內藏寮十具。穀倉院十具。已上檢校大政大臣仰レ之調レ之。衛門府五具。督仰儲レ之。左馬寮

五具。御監仰
儲之。列立南殿版位東。其東春興殿西立。

辛櫃十合。件等物。有宣旨。自長樂門出入。

上卿仰弁官一分給所々。史二人勾當其事。

仰檢非違使令分給弁官三。大政大臣二。左

右近三。左右兵衛二。左右衛門二。藏人所二。内

記所一。藥殿一。御書所一。内堅所一。校書殿

一。作物所一。内侍所四。采女一。内教坊一。糸

所一。御匣殿一。

一籌木。

伊行朝臣。

春日野の若紫のすり衣しのふのみたれかきりしられす

しかりとてとすればかりかくすればあないひしらすあふさきるさに

蓮葉のにこりにしまぬ心もて何かはつゆを玉とあさむく

觀身岸額離根草。論命江頭不繫舟。

引寄はたゝにはよらて春駒のつな引するそ名は立ときく

飛鳥井に宿りはすへし影もよしみもひも寒しみま草もよし

いつくにか宿りとるらむ朝ひこのさすや岡への玉さゝの上
塵をたにすへしと思ふさきしより妹とわかぬる常夏の花

それをたに思ふ事とて我宿を見きとなかけそ人のきかくに
相坂の名をはたのみてこしか共へたつる關のつらくも有哉

戀しさを何につけてか慰めん夢たにみえすぬるよなければ

風俗。

玉たれのこかめをなかにすへて。あるしはも

や。さかなもきに。さかなもとめに。こゆるき

のいそにわかめかりあけに。

催馬樂。

和歌伊戸波。止波利帳を毛たれたるを。於々支

美支万世。无己爾世無。美左可奈爾奈爾與介

无。安波比左多乎嘉。加世與介无。安波比左太

乎可。加世與介无。

二道。父家に居住せば孝心可有。男家に居

住せば嫂に仕をせよと云事なり。

三史。史記。漢書。後漢書。

五經。毛詩。禮記。左傳。周易。尚書。

三道。紀傳。明經。明法。

注加。

窓のうちなるほどとは。

楊家有^(有イ)女始長成。 養在^ニ深閨^一人未^レ識。

ふたつのみちうたふをさけ。

文集秦中吟。

天下無^ニ正聲^一。 悅^レ耳即爲^レ娛。 人間無^ニ正色^一。

悅^レ目即爲^レ姝。 顔色非^ニ相遠^一。 貧福即有^レ殊。

貧爲^ニ時所^一弃。 富爲^ニ時所^一趣。 江樓富家女。

金縷繡羅襦。 見^レ人不^レ歛^レ手。 嬌癡二八初。

母見未^レ開口。 已嫁不^ニ須臾^一。 綠窓貧家女。

寂莫二十餘。 荆釵不^ニ直錢^一。 衣上无^ニ眞珠^一。

幾回人欲^レ娉。 臨^レ日又踟躕。 主人會^ニ良媒^一。

置酒滿^ニ玉壺^一。 四座且勿^レ飲。 聽^レ我歌^ニ兩途^一。

富家女易^レ嫁。 嫁早輕^ニ其夫^一。 貧家女難^レ嫁。

嫁晚孝^ニ於姑^一。 聞^レ君欲^レ娶^レ婦。 娶^レ婦意何如。

なかゞみ。 天一神也。 世俗所^レ稱奈加中神也。

金櫃經云。 天一立^ニ中央^一爲^ニ十二時^一。 定^ニ吉凶^一。

斷^レ事者也。 此文者。 中字無^ニ不審^一歟。 件方忌事。 古今處違來也。

なか川。 見^ニ李部王記^一。 今京極河也。 古人稱^ニ

中川^一。 法成寺之始は。 人中川の御堂と云。 在^ニ行

成卿說^一。

一 空蟬。 并一。

夕やみは道たとくし月待てかへれ我せこそまにもみむ

いよのゆのゆけたは幾ついさ知す數へすよます君そしる豎

鈴鹿川伊勢をのあまのすて衣しほたれたりと人やみるらん

とりかへす物にもかなや世中を有しなからの我みと思はん

うつせみ二のならびとあれど。 はゝ木々のつぎ

なり。 ならびとは見えず。 一説には。 卷第二。 か

がやく日の宮。 このまきもとよりなし。 ならび

の一。 はいさゞうつせみは。 このまきにかはる。

夕顔。 并二。

世中はいつくかさしてわかならん行とまるをそ宿と定むる

打渡す遠方人に物申す我そのそこに白く咲るは何の花ぞも
老ぬれはさらぬ別れの有といへはいよく見まぐせし君哉

世中はさ（は）らぬわかれのなくも哉千代もとい（な）のる人の子の爲

七月七日長生殿。夜半無レ人私語時。

在レ天願作二比翼鳥一。在レ地願爲二連理枝一。

天長地久有レ時盡。此恨綿々無二絶期一。

にほ鳥のおき中川はたえぬとも君にかたらふ言つきはせし
思ふとていとしも人にむつれぬしかならひてそめは戀しき
いはぬまは千年を過す心地してまはまことに久しかりけり

貞信公於二南殿御後被レ取二劔石付一給握レ劔給。

八月九月正長夜。千聲万聲無二止時一。

ねぬなは（）苦しかる覽君よりも我ぞ増田のいけるかひなき
こりすまに又もなきなは立ぬへし人憎からぬ世にし住へは

亥一刻侍從名對面。起レ自二延喜元年一瀧口武士

名對面事。亥一刻侍從奏レ之。後延喜九年五月

廿日藏人源揚候瀧口輩。三ヶ夜以上無レ故

不參預着到二宜待一後仰一者。

揚名介。此事源氏第一難義也。末代人非下可二

勤知一事歟。

一若紫。三。

雲の住そここのみるめもはつかしく歳に生けるわかめをそかる
從レ冥入二於冥一。法花經。

かつらきの天良の末戸名留や。止與良の天良

の爾之奈留や。江の波井爾之良たま之つ久や。

末之良たましつくや。をしとをしとんと。しか

してはくにそさかへんや。和以戸良曾。と美せ

むや。おゝ之屯止。おゝ之屯止。おゝ之屯止。

君をいかに思はん人に忘らせてとはぬはつらき物としらせん

いのちたに心になふものならは何かは人を恨みしもせん

堀江こくたなゝし小舟行かへり同し人にやこひんと思ひし

人しれすみは急けとも年をへてなとこえさらん相坂のせき

あしわかの浦にきよする白波のしらしな君はわかおもふ共

風俗常陸歌。

ひたちには田をこそつくれたれをかね山をこ

え野をこえさみかあまたきませる。

しらぬともむさしのといへはうとまれぬよし

やさこそはむらさきのゆへ。
くらぶの山。定有二證歌一歟。未レ勘。

伊毛可々度。世奈可々度由支須支かね天や。和
可由可波。比知可左の。比知可左の。雨もふら
奈んしてたをさ。あまやとり。笠やとりてまか
らんしてたをさ。

千早振神のいかきもこゆる身は草の戸さしに何かきはらん

一末摘花。并一。

琴詩酒友皆抛我。

雪月花時尤憶君。

我袖はなにしたつ末の松山か空より波のこえぬひそなき

あは雪はけふはなふりそ白妙の袖まきほさん人もなき間に
紅をいろこき花とみしかとも人をあしたにうつろへにけり
新玉のとし立かへるあしたよりまたるゝものは鶯のこゑ
百千鳥囀る春はものことにあらたまれとも我そふりゆく
夢と社思ふへけれと覺束なねぬにみしかはわきそかねつる
書加。

北窓三友。文集六十三。

今日北窓下。自問何所爲。欣然待三友。

三友者爲誰。琴罷輒舉酒。酒罷輒吟詩。

三友遞相引。脩環無止時。一彈愜中心。

一詠暢四丈。猶恐中有間。以醉詠縫之。

おもはすは思はずとやはいひはてぬなと世中のたま櫛なる
したにのみ戀れは苦し山のはに待るゝ月のあらはれはいかに
ふるき。貂フルキといふけだもののかはのきぬ也。

文集秦中吟。

夜深烟火盡。霰雪白紛々。幼者形不蔽。

老者體無溫。悲端與寒氣。併入鼻中辛。

求子の歌を。春日にてはみかさの山とうたふ。

平仲が妻の歌にて。

我にこそつらさは君か見すれとも人に曇つく顔のけしきよ
にほはねとほゝゑむ梅の花をこそ我もおかしと折て詠むれ
わかんどをり。王孫をいふ。

夢かとぞみるとうちずして。伊行釋不相

叶可勸之。

一紅葉賀。四。

青海波詠三。多久行説。小野草作。

桂殿迎初歲。桐樓媚早年。煎花梅樹下。

蝶燕畫梁邊。

此樂。嵯峨天皇の御時。ひやうでうなりしを。
ばんじきてうになさる。

我宿にまきし撫子いつしかも花にさかなんよそへてもみむ
いせの蜚の朝な夕なにかつくてふみるめに人の飽由もなし
保曾呂俱世利。樂名。狛笛。右樂也。

大あらきのもりの下草老ぬれは駒もすさめすかる人もなし
ひまもなく茂りにけりな大あらきの森社夏の蔭はしるけれ
おもふこと昔なからの橋柱ふりぬる身こそかなしかりけれ
にくからぬ人のきせける濡衣は思ひにあへす今はききなん
戀しさの限たにある世也せはつらきをしみて歎かさらまし
山しろの駒のわたりのうりつくり。なよやらい
しなやうりつくり。うりつくりはれうりつ
り。われをほ之止伊不伊かにせ无。名よや良伊
之名也左伊之奈也。いかにせんいかにせん波
禮いかにせん。なりやし奈ましうりたつま。天
仁也良い之奈也左いしな也。うりたつまてに。
東屋。

あづま屋のまやのあまりの雨そゝぎ我立ぬれ

ぬその戸ひらかせ。

かすかひも戸さしもあらはこそ。そのとのと
我さゝめ。をしひらいてもきませ。われや人つ
ま。

わかせこかくへき宵也さゝかにの蛛の振舞かねてしるしも
紅のこそめの衣したにきんうへにとりきはしるからんかも
わかれての後そかなしき涙河そこもあらはに成ぬと思へは
犬かみのとこの山なるいさら川いさと答へて我名もらすな
夜聞_ニ歌者_一。文集卷第十。

夜泊_ニ鸚鵡洲_一。秋江月澄徹。隣船有_ニ歌者_一。

發調堪_ニ愁絶_一。歌罷繼以_レ泣。法聲通復咽。

尋聲見_ニ其人_一。有_レ婦顏如_レ雪。獨倚_ニ帆檣_一立。

娉婷十七八。夜淚似_ニ眞珠_一。双々墮_ニ明月_一。

借問誰家婦。歌泣何凄切。一問一霑_レ巾。

低眉竟不_レ說。

一花宴。五。

なをあらしに。詞万葉第七點然不有。

なをあらしと言なし草にいふ事を聞しれとては少かりけり

てりもせずくもりもはてぬ春夜の臘月夜にしくものそなき千里歌也。其題嘉陵春夜詩。今載于此物語。或釋歌合判詞。以之爲夏夜證歌。可謂道之耻。不_レ明不_レ暗。臘々月。非_レ寒非_レ暖。漫々風。

貫河。

催馬樂律。

ぬき川の瀬々のや波良たまくら。やはらかにぬる夜はなくておやさくるつま。おやさくる妻はましてゐるはしも。しかしあらは。やはさのいちにくつかひにかむ。

今こそあれ我もむかしは男山さか行時もありこしものを

見る人もなき山里の櫻花外のちりなんのちそさかまし

石河。

石河のこまうとに帶をとられてからさくひする。いかなる帶ぞ。花たの帶のなかはたへたる。一葵。六。

ひとだまひ。人給。今出車。權記多有此名。

我を思ふ人をおもはぬむくひにや我おもふ人の我を思はぬ

さゝのくまひのくま河に駒とめて暫し水かへ影をたにみん伊勢の海に釣する蟹のうけなれや心ひとつを定めかねつる悔しくそくみそめてける淺ければ袖のみぬる、山の井の水身を捨ていにやしにけん思ふより外なるものは心なりけりおもはしとおもふも物を思ふ也思はしとに思はしやなそ結をきし形みのこたになかりせは何に忍ぶの草をつまゝし時しもあれ秋やは人のわかるへきさるは夜寒に成る比しも神無月いつも時雨はふりしかとかく袖ひつる折はなかりきしら雲の九重にたつ峯なれば大内山とむへもいひけりいろならは移るはかりも染てまし思ふ心をえやは見せけるみ鞠木のみ馴そ馴ていなれなはおくれさきたつためし成覽末の露もとの雫や世中のをくれさきたつためしなるらん若草のにみ手枕をまきそめて夜をや隔てんにくからなくにみ狩する狩はの小野の檜柴のなれはまさらて戀そまされるあたらしく明る今年も百年の春やきぬると鶯のなく

鴛鴦瓦冷霜花重。

舊枕古衾誰共爲。

有所嗟二首夢得。

庚令樓中初見時。武昌春柳似腰支。

相逢相失雨如夢。爲雨爲雲今不知。

鄂渚濛々烟霧微。女郎魂遂暮雨歸。

只應長在漢陽渡。化作鴛鴦一双飛。

夢得。白樂天同時人也。おもふ人におくれて作詩也。

一神。七。

ちはやふる神のいかきも越ぬへし大宮人の見まくほしさに

天の原ふみとゝろかし鳴神もおもふ中をはさくる物かは

世にふれはうさこそまされ吉野山岩のかけ道踏ならしてん

せきぶ人。戚夫人。趙王如意母也。

史記。呂后本記。

呂后怨戚夫人及其子趙王。囚戚夫人。斷手足。去眼。燂耳。飲瘖藥。使居廁中。命曰人彘。

天の戸を押明方の月みれはうき人しもそ戀しかりける

古のしつのをたまきくりかへし昔を今になすよしも哉

ちかきよに。未勘。

漢書。昔荆軻慕燕丹之義。白虹貫日。而太

子畏之。

山櫻見にゆく道をへたつれは霞も人のこゝろなるへし

數ならぬみのみ物うく思ほえてまたるゝまでも成にける哉

吾にきく松か蒲嶋けふそみるむへも心あるあまもすみけり

甕頭竹葉經春熟。階庭薔薇入夏開。

高砂。律。長生樂破。

たかさこの左伊たこの。たかさ古の乎の戸に

たて留之良た末つ波木。たまや名き曾禮もか

止さ卒。末之もか止末之もか度。禰利乎左美乎

の見曾かけにせ卒たまや名き。名に之かも沙

牟名に之かも名に之かも。古々呂も末多伊介

牟。由利波名の沙由利波名の。介た伊たる波

川波名にあ波末之もの乎左由利波名の。介左

左伊多類波川波名に。あ波末之ものをさ由利

波名の。

史記。魯世家。

於是卒相成王。而使其子伯禽代就封於魯。

周公戒伯禽曰。我文王之子。武王之弟。成王叔父。我於天下亦不賤矣。然我一沐三提

髮。一飯三吐哺。起以待士。猶恐失天下之賢人。子之魯。慎無以國驕人。

周公旦者。文王之子。武王之弟。自知其貴。

忠仁公者。皇帝之祖。皇后之父。世推其仁。貞信公第三妻。江相公。

一花散里。八。

かこはねと逢のまかき夏くれは植し垣ねも茂りあひにけりいにしへのことかたらへは時鳥いかにしりてか鳴聲をす

一須磨。九。

いへはえにふかくなしき笛竹の夜こそや誰ととふ人も哉ことなしにて。

君見すて程のふるやのひさしにはあふ事なしの草を生けるあひにあひて物思ふ頃の我袖はやとる月さへぬるゝ顔なる時しあらば。

いとゝしく過ゆく方の戀しきにうら山しくもかへる浪かな三千里外。

わくらはに問人あらはすまの浦にも汐たれつゝ侘と答へよ
いける世にとは。

白浪は立きはくともこりすまの浦のみるめは菊んと思ふ
せき吹こゆる。

行平中納言歌。可尋之。能宣朝臣詠之。

三五夜中新月色。二千里外故人心。

去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此。捧持毎日拜餘香。

思ひきやひなの別におとろへて海士のはたき漁せんとは

驛長無驚時變改。一榮一落是春秋。

史記。

趙高指鹿謂馬。秦二世時。

王昭君。〔大江朝綱。〕

翠黛紅顏錦繡粧。

〔改イ〕注尋沙寒出家鄉。〔兼イ〕

邊風吹斷秋心滿。〔曉イ〕瀧水流添夜淚行。

胡角一聲霜後夢。漢宮万里月前腸。

昭君若贈黃金賂。定是終身奉帝王。

白風斯。

たゞこれにしに行也。未_レ勘。

文集。

五架三間新草堂。石階松柱竹編牆。

十年三月卅日。別_二微之於澧上_一。十四年三月十

一日〔夜〕。遇_二微之於峽中_一。停_二舟夷陵_一。三宿而

別。言不_レ盡者以_レ詩終。

一別五年方見面。語到天明竟不_レ眠。

生涯共寄蒼波上。^(滄波)鄉國俱拋白日邊。

往事眇茫都似夢。舊友零落半歸泉。

醉悲灑淚春盃裏。吟苦支頤曉燭前。

いもか門過行かねつひちかさの雨もふらん雨かくれせむ

明石。十。

浪にのみぬれつるものを吹風のたよりうれしき海人の釣舟

あさりするよさのあま人ほこるらし浦風ぬるみ霞渡れる

程ふるも覺束なくはおもほへすいひしにたかふと計はしも

あはちにてあはとはるかに見し月の近きこ宵は所からかも

嵇叔夜夢。伶人教_二廣陵散_一。

あさ人の中にてだに。

またよひにうちきてたゞくくゐなかな

伊勢のう美の喜與支名支左爾。之保加比爾名

の利曾や津末牟。か比や比呂波牟や。多末や比

呂半。

うちなれたるやうらの浪風はふかねどもさゝ

ら波たつ。

おもふには忍ふる事そまけにける色には出しと思ひし物を

うれしきを昔は袖につゝみけりこよひは身にも餘りぬる哉

ありぬやと試みかてら逢みねはたはふれにくき迄そ戀しき

あたら夜の月と花とを同じくはあはれしれ覽人に見せはや

久方の月けの駒をうちはやめきぬらんとのみきみを待かな

おもふとちいさみにゆかん玉津嶋入江のそこにしつむ月影

眞木の戸をやすらへに社さゝめいかにあくへき秋のよな覽

忘れしとちかひし事もあやまたす三笠の山の神もことはれ

日本世紀。

二男蛭兒生。而體如_レ蛭。及_二三年_一不_レ起。其父

母之乗_レ船流。

わすらるゝ身をは思はずちかひてし人の命のおしくも有哉

あき人の中にてだに。ふることさゝはやす。

文集琵琶行。

今年歡笑復明年。秋月春風等閑度。

弟走從軍阿嬖死。暮去朝來顏色故。

門前零落鞍馬稀。老大嫁作商人婦。

商人重利輕離別。前月浮梁買茶去。

去來江口守空船。遠船月明江水寒。

夜深忽夢少年事。夢啼粧淚紅闌干。

我聞琵琶已歎息。又聞此語重唧々。

同是天涯淪落人。相逢何必曾相識。

我從去年辭帝京。謫居臥病潯陽城。

潯陽小處無音樂。終歲不聞絲竹聲。

今夜聞君琵琶語。如聽仙樂耳暫明。

莫辭更坐彈一曲。爲君翻作琵琶行。

感我此言良久立。却坐促絃々轉急。

悽々不似向前聲。滿座重聞皆淹泣。

就中泣下誰最多。江州司馬青衫濕。

まくなき。可引注詞有之。可尋勸一。

晉書嵇康傳。

嵇康遊洛西。暮宿華陽亭。引琴彈。夜分忽有

客詣之。稱是古人。與康共談音律。辭致清

弁。因索琴彈之。而爲廣陵散。聲調絕倫。遂

以授康。仍誓不傳人。亦不言其姓字。

一戡盡。十一。

みくまの浦よりをちにくく船の我をはよそに隔つるかな

佐ぬれは今はた同じ難波なるみをつくしても逢んとそ思ふ

しまこぎはなれ。

一蓬生。并一。

あげまき。わらはの惣名なり。

岩そゝくたるゐの上のさわりひのもえ出る春に逢にける哉

世中は昔よりやはうかりけん我みひとつのためになれるか

みよしの山のあなたに宿も哉よの憂時のかくれかにせん

五濁。法華經。

蔣翊。字元卿。舍中竹下開二三逕。

いと、社まさりにまされ忘しといひしにたかふ事のつらさは引うへし人はむへこそおいにけれ松の木たかく成にける哉顔叔子と云人。男他行の間その男のうたがひのために。塔のうへをこぼちて。夜もすがらともしあかしてゐたる事なり。

一關屋。并二。

つくばねの山もふきこす風もうきたる心地して。可尋。

戀ぞつもりて淵となりける。此歌不叶。

みねのもみぢば落つもり。又不叶。

一繪合。十二。

橋。本文不見歟。

一松風。十三。

みなれ木のみなれをなれて。

あれはてぬ命まつまの程計うき事しけく思はずも哉

夜光玉。

富貴不歸故郷。如衣錦夜行。史記。

みさこゐるあら磯浪に袖ぬれてたか爲ひろふいける貝そも斧のえはくちなは又もすけか。むうき世中にかへらずも哉千代へんといはひし物を姫松のねさしとめてし宿は忘れず白雲のたえすたなひく山にたに住はすみぬるよに社有けれ誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに久方の中に生たる里なれば光をのみそたのむへらなる

あはぢにてあはとはるかに見し月の。

古郷は見ずもあらすおのゝえのくちし所を戀しかりける夜光玉。

齊威王二十四年。與魏王會田於郊。魏王問曰。王亦有寶乎。威王曰。無有。梁王曰。若寡人。國小也。尙有徑寸之珠。照車前後各十二乘者十枚。奈何以萬乘之國。而無寶乎。威王曰。寡人之所。以爲寶與王異。吾臣有檀子者。使守南城。則楚人不。敢爲寇。東取。泗上。十二諸侯皆來朝。吾臣有盼子者。使守高唐。則趙人不。敢東漁於河。吾吏有黔夫者。使

守ニ徐州。則燕人祭ニ北門。趙人祭ニ西門。徒而從者七千餘家。我臣有ニ種首者。使レ備ニ盜賊。則道不レ拾ニ遺。將ニ以照ニ千里。豈特十二乘哉。梁惠王慙。不レ憚而去。

寡人は諸王の。かたみになのる名也。

一薄雲。十四。

宿かへて松にも見えすなりぬればつらき所のおほくも有哉恨ての後さえ人のつらからはいかにいひてかねをも鳴へきつらからん物とはかねて思ひにき心のうらそ正しかりける櫻人。呂。

左久良比止曾乃不禰知々女。之末川多乎止万知津久禮留見天可戸利己牟也。曾與也。安春可戸利己牟也。曾與也。己止遠己曾安春止毛以波女。乎千可太爾川万左留世那波。安春も左禰己之也。曾與や。安春も左禰己之也。曾與也。

世中は夢のわたりの浮橋かうちわたりつゝ物をこそ思へふかくさの野への櫻し心あらは今年はかりは蟬染にさけ

いにしへの昔の事をいとしくかくれは袖を露けかりけるむすほをれもえし烟もいかせん君たにこめよ長き契を
晋石李倫居ニ金谷。春花滿ニ林。作ニ五十里錦障。文集。草堂。

春有ニ錦繡谷。夏有ニ石澗雲。

秋有ニ虎溪月。冬有ニ爐峯雪。

梅か香を櫻のはなににほはせて柳か枝にさかせてしかな打かへし思へは悲し世中をたれうきものとしらせそめけん

一榷。十五。

戀せしのみそきは神もうけすとか人を忘るゝ罪ふかしとてきみかかといまそ過ゆくいてゝ見よ戀する人のなれる姿をすまのあまの鹽やき衣なれ行はうとくのみ社成まさりけしなてゐるや片岡山の飯にうへてふせる旅人あはれおやなし身をうしといひこしほとに今は又人のうへとも歎くへき哉かけていへは涙の河の瀬をはやみ心つからや又もなかれんしはすの月夜といふ。

たまさかにゆきあふみなるいさら川と答へて我な漏すな

此歌不レ入歟。

一未通女。十六。

孫康家貧無_レ油。常映_レ雪讀_レ書。

車胤字武子南平人。好_二讀書_一無_レ油。夏月則絹

囊盛_二數十螢_一照_レ書。

落葉俟_二微風_一以_レ隕。而風之力蓋寡。孟嘗遭_二雍

門_一而泣。琴之感以未。

更衣。呂。私律。

己呂毛加戸世牟也。左支牟多知也。和加支ぬは乃波良之の波良波支の波奈須利也。左支牟多知也。

霧ふかき雲の鷹もわかことやはれせず物の悲しかるらむをとめこか袖ふる山のみつ垣の久しきより思ひそめてき安奈多不止。介不の多不止左也。伊仁之戸も波禮。伊耳之戸毛加久也。あ利介牟也。介不の多不止左也。あ波禮曾己與之也。介不の多不止左也。五節にことづけて。なをしなど。さまかはれるいろゆるされて。

雖_二六位昇殿_一。蒙_二禁色雜袍之宣旨_一歟。

定有_二先例_一歟。可_二尋勘_一。

寮試。

寮頭以下各一員。博士以下各一員。參_二着試廳_一。

出_二員舉交名等_一。博士加_レ署渡_二寮頭_一。頭見了下。

允以下。以_二箒匣三合_一置_二試衆座前_一。又以_二讀書

等_一置_二頭博士秀才_一。謂_二之試博士_一。并_二試衆等前_一。次第召

試衆。試衆把_レ卷進_二出幔門下_一。允仰云。版爾。試

衆揖立_レ版。允又仰云。敷居_二。試衆揖。於_二敷

居下_一。脱_レ沓。着座置_レ帙。頭仰云。箒。衆唯之探

冊。三史之間。今云_二讀冊_一也。膝行置_二試博士前_一。試博士對_二寮

頭云。史記乃本紀乃一乃卷。三乃卷。世家乃上帙

乃五乃卷。下帙乃一乃卷。傳乃中乃帙乃七乃卷。頭

仰云。令_レ讀與。試衆各披_レ帙把_レ卷。引_二音讀_一之。

頭仰云。古々末天。試博士對_レ頭云。又得タリ。頭

云。注セ。寮掌捧_レ簡。稱_二注由_一了。試衆退出。堂

監於幔外。仰_二登科酒肴事_一。

女選豪士賦序云。落葉俟_ニ微風_一。以隕。而風之力

蓋寡。孟嘗遭_ニ雍門_一而泣。琴之感以未。何者欲

隕_レ葉無_レ所_レ假。烈風將_レ墜_レ之。泣不_レ足_ニ繁哀_一

響_一也。注曰。草木遭_レ霜者不_レ可_ニ以遇_一風。又

云。雍門周以_レ琴見_ニ孟嘗君_一。孟嘗君曰。先生鼓

琴。亦能令_ニ文悲_一乎。對曰。臣竊爲_ニ足下_一有_レ所

悲。千秋万歳後。門墓生_ニ荆棘_一。游童牧豎躑_ニ躑_一

其足_一。而歌_ニ其上_一曰。孟嘗君之尊貴若_レ是乎。於

是_ニ孟嘗君喟然大息_一。涕承_レ睫而未_レ下。雍門引

琴而鼓云。徐動_ニ宮徵_一。揮_ニ角羽_一。初終而成_レ曲。

孟嘗君遂獻_レ歎而就云。是琴之感以未也。

玉鬘。十七。

我はわすれず。

世中にあらましかはとおもふ人なきかおほくも成にける哉
いつとても戀しからすはなけれ共あやしかりける秋の夕暮

文集樂府。縛戎人。

涼源郷井不_レ得_レ見。

胡地妻子虚弃捐。

日本紀。ひるのこ。

かそいろはいかに哀と思ふらん三歳になりぬ足たゝすして
一はつね。并一。

あふみのや鏡の山をたてたれはかねてもみゆる君か千歳は

けふたにも初音きかせよ鶯の音せぬ里はすむかひもなし

聲まちいでたる。

櫻花さける岡へに家しあればともしくもなし鶯のこゑ

万春樂。踏歌曲也。

此殿。呂。

己乃止の波牟戸毛止美介利左支久左の。安波
禮左支久左の波れ。左支久左の美津波與津波
乃奈可爾止のつ久利せり也。とのつくりせり

也。

はちすばのなかのせかひ。下品下生の心也。

世のうきめ見えぬ山路へ入んには思ふ人こそほたし成けれ
いたはりなきしろたへの衣。

音にきく松が浦嶋。

みづむまやとは。水驛と云詞也。

竹川。呂。

多介か波の。波之のつめ奈留や。波之のつめなるや。波奈その爾はれ。はなそ野に加禮乎波名底や。和禮乎波奈天也。女左之多久戸天。

踏歌式。

新儀

正月十四日。

高巾子冠自所給之。打熨斗囊持着二位袍。

當夜

内藏寮當御前立高机。積綿百屯。歌頭以下相率集中院。暫之自月花門參入。行列右近

陳前庭。

時刻出御御座。

孫庇南四間。平文御倚子。

内藏寮昇

祿綿机立前庭。

南第

王卿依召參上。

簀子南第三間管圓

座。人多在

賜酒肴於王卿。

御厨子所供御酒。

踏歌人進南殿西頭。始奏調子。訖入仙花門。

列立庭上。踏歌周旋。三反。後列立御前。言次

進出。當綿案立奏祝詞。喚囊持。二聲。囊

持稱唯。進而計綿數。奏誦鴨曲。次奏此殿

曲。訖着座。列立間。掃部寮當御階南庭一許

丈立床子。爲歌頭以下舞人已上座。相對北

爲上。仁壽殿西階南立床子。爲管絃者南面

座。南廊壁下東上。敷疊立机爲打熨斗囊持

座。若有諸司二分吹管者。同着之。同壁下

北面上。敷疊爲侍臣座。内藏昇四尺臺盤三基。

立舞人已上座。八尺臺盤一基爲管絃者座。

辨備肴饌。次王卿已下殿勸盃。侍臣所雜色

以下。行酒三四巡後漸奏調子。唱竹河曲。即

起座列立。三四唱後。舞人已上双舞。進半上東

階。内侍二人相分被綿。且舞且還。女藏人二人持綿匣一候。内侍

後。但彈琴者已下男藏人二人。傳取御簾中。於

庭中被之。奏我家曲。退出自北廊戶。其後

踏歌所々。曉更歸參。御所如初。歌頭舞人賜

座立庭中。相對管絃者在橫切。北面上打熨斗

囊持座在。西上出御之後。歌頭已下依召

參入。王卿先着座賜酒饌。此間奏管絃。數巡

之後。賜祿有差。事了退出。歌頭支子染掛各一領。歌掌踏掌同色袈一條。

吹物彈吹襖子一領。

打熨斗囊持絹一疋。

一胡蝶。并二。

かめのうへの山。蓬萊の心也。

樂府。

眼穿不見蓬萊嶋。不見蓬萊不敢歸。

童男艸女舟中老。徐福文成多誑誕。

青柳。長生樂序。拍子十二。各六。

安乎也支乎加多伊止爾與利天於介也。宇久比壽の於介也。う久比壽の奴不止以不加佐波於介也。宇女の波名加左也。

さゝれ石の中におもひは有なから打いつる事の難くも有哉
わかそのゝ梅のほつえに鶯の音に鳴ぬへき戀もする哉

風生^レ竹夜窓間臥。月照^レ松時臺上行。

戀佐ぬおほ田の松のおほ方は色にいてゝや逢んといはまし

文集第十九。早夏朝歸閑翁獨處。

四月天氣和且清。綠槐陰合沙隄平。

一ぼたる。并三。

我みからうきよの中をなけきつゝ人のためさへ悲しかる覽

一とこなつ。并四。

そのおち葉をだにひろへや。

我宿とたのむ吉野に君しいらは同じかさしを、さし社はせめぬき川。

垂乳根の親のかふこの藹こもりいふせくも有か妹にあはすて
つくは山は山しけ山しけゝれと思ひ入にはさはらさりけり
垂乳根の親のいさめしうたゝ機は物思ふ時のわさに有ける
人しらぬ思ひやなそとあし垣のまちかけれ共あふ由もなし
立よらはかけふむ計近けれとあひみぬ關を誰かすえけん
あひみては面ふせやにおもふへしなこそその關におひよ帯木
しらぬ共武藏野といへはかこたれぬよしや草はの紫のゆへ
憎さのみ増田の池のねぬなはゝいとふにはゆる物にそ有ける
あしきてを猶よきさまに水無瀬川底のみくつの數ならす共
みよしのゝ大河のへの藤浪のなみに思はゝわかこひめやも
とにかくに人めつゝみをせきかねて下に流れし音なしの瀧
一野分。并六。

おほ空におほふ計の袖も哉春さく花を風にまかせし

宮きのゝ本あらの小萩露をゝもみ風を待こと君をこそまで
人のおやの心はやみに。

いづくのゝべのほとりの花。

一みゆき。并七。

仁和二年十二月十四日。戊午。寅四刻。行幸芹

河野。爲用鷹鷄也。式部卿本康親王。常陸大

守貞固親王。太政大臣藤原朝臣。左大臣源朝臣。

右大臣源朝臣。大納言藤原朝臣。良世。中納言源

朝臣。能有。在原朝臣。行平。藤原朝臣。山蔭。以下參

議皆扈從。其狩獵之儀。一依承和故事。或考

舊記。或付故老口語而行事。

乘輿出朱雀門。留輿砌上。勅召太政大臣三

皇子源朝臣。定。宜賜佩劍。太政大臣傳勅定。

一拜舞輿前。帶劍騎馬。皇子源朝臣。正五位下

藤原時平。權着摺衣。午三刻。巨獵野。於淀

河邊。供朝膳。漁人等獻鯉鮒。天子命飲。右

衛門督諸葛朝臣奏歌。天子和之。群臣以次歌

謳。大納言藤原朝臣起舞。未二刻入獵野。放

鷄擊鶉如前。放隼擊水鳥。坂上宿禰獻鹿

一。太政大臣馬上奏之。乘輿還幸。於左衛門

權佐高經別墅。供夕膳。高經獻贊。勅叙正五

位下。太政大臣率高經拜舞。

一藤袴。并八。

東路の道のはてなるひたち帯のかこと計もあはんとそ思ふ

戀わびぬ今はた同じ。

三從。女をさなき時は父にしたがひ。さかり

なる時は男にしたがひ。老て後子にしたがふ

也。

よし野の瀧をせかんより。

一眞木柱。并九。

おもひつゝねなくに明る冬の夜は袖の氷のとけすも有かな

きみかすむやとの梢を行々もかくるゝまてにかへり見し哉

百千鳥さへつる春はものことにあらたまれ共我そふりゆく

春の野に莖つみにとこし我そのをなつかしみ一夜ねにける

すまのあまの鹽焼煙風をいたみおもはぬ方にたな引にけり

乎志多加戸加毛左戸支井留。波羅の伊介の也。

多末毛波万禰なかり曾於比毛須か禰也。万禰

奈利そ也。

立ておもひ居てもそおもふ紅のあかもたれひきいにし姿を
かたみなる色に衣はなりぬれば花のかはせに常ならなくに
いはぬ間をつゝみし程に口なしの色にやみえし山ふきの花
堀江こくたなゝし小船こきかへり同し人をや戀わたるへき

一梅枝。十八。

君ならで誰にか見せん。

无女加江爾支ゐるうぐひすや。波る加介天。波

禮。八留加計天名計止毛伊万た也。由支波不利

つゝ。あはれ曾己與之也。由支波不利つゝ。

いつ迄か野へに心のおくかれん花しちらすはちよもへぬへし
ありぬとや心みかてらあひみねはたはふれ憎き迄を戀しき
いつはりとおもふ物から今更にたか誠をか我はたのまん

一藤裏葉。十九。

夏にこそ咲かゝりけれ藤花まつにとのみもおもひける哉

文籍にも家禮。

漢高祖幸父太公之家。以家禮敬之。高祖雖

子君也。太公雖父臣也。

春日さす藤のうらはのうらとけて君しおもはく我も思はん

安之可支末可支加支和介。天不己春止於比己
須止。波禮。天不己春止多禮可々々々己乃己止

乎。於也爾末宇與己之介良之毛。止々呂介留己

乃い戸。己乃伊戸のを止與女。於也爾万宇與己

之介良之毛。安女川知乃可見毛。可美毛志與宇

之多戸。和禮波万宇與己之万宇左春。須賀乃禰

の春可名。須可奈支己止乎和禮波支久。和禮波

支久可奈。

加波久知乃せきのあ良可支や。せきのあらか

きや。まかれともはれ。まもれともいてゝわれ

ねぬや。いてゝわれねぬやせきのあらかき。

かつらをありし。

晋書云。郗詵。字廣基。舉賢良。對策爲天下第

一爲羅州刺史武帝於東堂會_レ筵。帝問_レ詵曰。卿才自何。對曰。臣對策爲_二天下第一_一。猶_二桂林一枝崑山片玉_一。

今以_レ之。課試及第之事作來也。

數しらす君かよはひをのはへつゝなたゝる宿の露となら南君かうへし一村薄虫の音のしけきのへとも成にける哉

秋をきて時こそ有けれ菊の花移ろふからに色のまされは

宇陀法師。和琴之名なり。

新儀式。四月旬儀。

若有_下奏_上絃歌_上事_上者。近衛府音樂訖內侍奉

仰。於_二御屏風南邊_一召_二大臣_一。大臣起座。跪候_二

御屏風南頭。卽勅。可_レ召_下堪_二管絃_一。親王公卿

等。大臣奉_レ仰退歸。召_二出居_一令_レ置_二草蓐_一於御

帳東。東西一許丈。大臣先進着_二草蓐_一。次依_レ召

移着。大臣召_二書司_一。書司一人執_二和琴_一出_二東障

子戶_一獻_レ之。謂字多法師。各奏_二絲竹_一。召_二加殿上侍臣

能歌者_一預_レ之。王卿遞勸盃。數曲之後奏_二見參_一。

長保二年十一月十五日。小野右府記。新宮之後初出_二御南殿_一。日。大臣以下管絃人着_二御前草蓐_一。次召_二書司_一。書司女孺取_二宇多法師_一。出_二自_二御障子戶_一。置_二草蓐_一前。又絲竹之器以_レ次取出。皆書司女孺役_レ之。

御遊之時召_二宇陀法師_一。和琴。其詞云。御タナラシ。此詞有_レ故云々。

宇陀法師以_レ檜作_レ之。先一條院御時。內裏炎上之時燒失云々。

一若菜。二十。

春のよのやみはあやなし梅花。

子城陰處猶殘雪。街鼓聲前未_レ有_レ塵。

おりつれば袖こそ匂へ梅花ありとやこゝにうくひすのなく

なきなそと人はいひて有ぬへし心とはゝいかゞ答へむ

村鳥の立にし我名今更にことなしふともしるしあらめや

いにしへの賤のおたまきくりかへし昔を今になすよしも哉

ちとせをかねてあるふつるの毛衣。

席田。第二反。

吹風も心しあらは此春はさくらをよきてちらささらなん
見すもあらす見もせぬ人の戀くはあやなくけよ詠め暮さん
けふのみと春を思はぬ時たにも立ことやすき花の陰かは
ちはやふる神のいかきにはふ葛も秋にはあへす紅葉しに鬼
紅葉せぬときはの山は吹風の音にや秋を聞わたるらん
ひらの山さへ。

秋のよのちよを一よになせり共ことは残りて鳥やなくらん
花のかを風の便りにたくへてそ驚さそふしるへにはやる

毛詩云。女感陽氣春思男。男感陰氣秋思
女。

よるかたもありといふなる有そ海にたつ白波のおなし所に
我心なくさめかねつさらしなやはすて山にでる月をみて
戀しなはたか名はたてし世中のつねなき物といひはなす共
まてといふにちられてしとまる物ならは何を櫻に思ひまさし
残りなく散そめてたき櫻花何かうきよに久しかるへき
夕暮はみちたとくし月待て歸れ我せこ其まにも見む
いかばかり戀の山路のしけくれは入といりぬる人まとふ覽
夏の日のあさ夕すみある物をなと我戀のひまなかるらん

うきにまざれぬ戀しさの。

冬なから春のとなりの近ければ中垣よりそ花は散ける

わかなのまき。一のな。もろかづら。

史記。楚有養由基者善射者也。去柳葉百步
而射。百發而百中之。左右觀者數千人。皆曰
善射。

掛冠。縣車。

東觀漢記曰。王莽居倚。子宇諫莽。而莽殺之。
逢萌謂其友人曰。三綱絕矣。不去禍將及
人。即解冠掛東門而去。

蒙求。逢萌掛冠。

後漢逢萌字子康北海人。掛冠避世於橋東。
古文孝經曰。七十老致仕。懸其所仕之車。置
諸廂。永使子孫監。而則正而立身之終其要然
也。

漢薩廣德爲御史大夫。凡十月免歸。沛太守迎
之界上。沛以爲榮。懸其安車。傳子孫。
師古曰。懸。

其所賜安車。以乘榮也。
致仕懸車。亦古法也。

一 柏木。廿一。

かくもよの思ふ心になはぬか誰も千とせの松ならなくに
夏虫の身をいたつらになす事もひとつおもひによりて成鬼
人世を老を果にしせましかはけふかあすかも急かさまし
歎きわひいてにし玉のあるならんよ深くみえは玉結びせよ
我こそや見ぬ人こふるくせつけれ逢より外のやむ藥なし
とりかへす物にもかもな世中を有しなからの我みと思はん

文集五十八。自嘲詩。

五十八翁方有後。靜思堪喜又堪嗟。

持盃祝願無他語。慎勿頑愚似汝爺。

白樂天は。子なくして老にのぞむ人也。老の後。

初て生遅といふ子いできて。むまるゝ事あそ
きによりて生遅と付たり。そのこにむかひて
作りたる詩也。

春ことに花のさかりはありなめとあひ見ん事は命なりけり
よりあはせて鳴なる聲をいにして我涙をは玉にぬかなん

一 横笛。廿二。

春ごとに花のさかりは。

君がうへし一村ずすき。

浅ちふの小さゝか原にをく露そよのうき妻とおもひ亂るゝ
戀しさの限りたにあるよなりせは年へて物は思はさらまし
しらくもにはねうちかはしとふ鴈の數さへ見ゆる秋夜の月
片糸をかなた此方によりかけてあはすは何を玉の緒にせん
伊もとあれといるさの山のやまあらゝき。て
なとりふれそや。かほまざるかにや。とくまざ
るかにや。

柏木の後の事也。

一 鈴虫。廿一。

十方佛土之中。以西方爲望。九品蓮臺之間。

雖下品可足。

蒼范霧雨之霽初寒汀鷺立。重疊煙嵐之斷處晚

寺僧歸。閑賦。

三五夜中新月色。

目蓮初得道。眼見母生所而墮地獄。碎骨

燒_レ膚。仍乘_二神通_一。自行_二地獄_一。逢_二獄卒_一。相代乞_レ請_二母苦_一。獄卒答云。善惡業造者。自受_二其果_一。大小利法也。更不_レ可_レ免。則閉_二鐵城之戶_一。成不見。目蓮悲_レ之歸。但如_二經文_一者。墮_二餓鬼中_一。仍七月十五日設_二孟蘭盆_一救_レ之。是明事也。橫笛同年夏秋也。

夕霧。廿三。

歸るさの道やはかはるかはらねとくるとるに惑ふ今朝の淡雪夕きりに衣はぬれて草枕たひねするかもあはぬ君ゆへなきなど人にはいひて。

身をすてゝいにやしにけん思ふより外なる物は心なりけり心にはちへに思へと人にいはぬわか戀つまをみるよしも哉かねてよりつらさを我に習はせてにはかに物を思はする哉あまのかるもにすむ虫の。

秋なれは山とよむまで鳴鹿に我をとらめや獨ぬるよは秋夜の月の光の清ければ小倉の山もこえぬへらなりいかにしていかによからんをの山のうへより落る音無の瀧かひすらも妹せはなへて有物をうつし人にてわか一人ぬる

夏の夜は浦嶋か子のはこなれやはかなく明てくやしかる覽云いてゝはたかなか惜き信濃成木曾路の橋のふみし絶なはず月やあらぬ春や昔の春ならぬ我みひとつはもとの身にしてにくさのみすす田の池。

大かたの我身ひとつのうきからになへていよをも恨つる哉とりかへすものにもがなや。

うへて見しぬしなき宿の梅花色はかりこそむかしなりけれ

今案。此卷猶橫笛鈴虫之同秋事歟。

無音太子のとが。

婆羅王之太子。其名沐。魄容端正。生而十三年不言。人不聞聲。諸臣婆羅門道士等誹謗。地下作_レ城欲埋_レ之。時大臣伏_二其車前_一。重悲_二此事_一。太子云。我將不言者。皆欲_レ生_二聾盲_一。于時國王夫人行迎_二太子_一。曰。我昔先身為_二國王_一。以_二正道_一。雖_レ治_レ國。有_レ所_レ過墮_二地獄_一。六萬餘歲。苦難_レ忍。我怖_二地獄_一。故卷_レ舌不言。遂請_二出家_一。母聞_レ之許_レ之。入_二深山_一求_レ道。命終生_二

都率天太子者釋迦如來也。

御法。廿四。

ちりひちのよゝの口數にありへてそ思ひ集むる事も多かる

採菓汲水。提婆品。

法花經をわかえし事は藉こり菜つみ水くみつかへてそ(えい)

たきどつくとは。ほとけのうせさせ給ふを

申なり。

百千鳥さへづる春は。

秋吹はいかなるいろの風ならん身にしむはかり人の戀しさ

空蟬はからをみつゝもなくさめつ深艸の山烟たにたて

此卷。夕霧の後歟。

幻。廿五。

おほぞらにおほふ計の。

光なき谷には春もうとければ咲てとくちる物おもひもなし

深艸の野べの櫻し。

いろかへぬ花橋にほとゝきす千世をならせる聲きこゆなり

秋夜長。夜長無寐天不(眠)明。耿耿殘灯背壁影。

蕭々暗雨打窓聲。

古のことかたらへはほとゝきすいかにしりてか鳴聲のする

かなしさそまさりにまさる人のみにいかに多かる涙成らん

人の身にならはし物を今迄にかくてもへける物にそ有ける

夕殿螢飛思悄然。

秋燈挑盡未(挑イ)能眠。

神無月いつも時雨は降しかとく袖ひつる折はなかりき

何にきく色染かへしにほふらん花もてはやす君もこなくに

あくるまでをきゐる菊の白露はかりのよおもふ涙なるへし

うなひ松。未勘。

一句兵部卿宮。廿七。

此卷の一名。かほる中將。

ぬししらぬ香こそにほへれ秋の野に誰ぬきかけし藤袴そも

春の夜のやみはあやなし。

降雪にいろはまかひぬ梅の花香にこそ似たる物なかりけれ

太子のわが名をとひえけんさととりもえてしが

など。

七陀太子は是釋迦佛也。

耶輒陀羅之子。羅睺羅尊者。佛出家之後經ニ六年ニ誕生。仍大臣等疑レ之。耶輒陀羅抱レ子投コ入火。太子不レ燒。

有ニ女人身。猶有ニ五障。法花經。

賂射還饗。

大將先着座。垣下座上設ニ管圓座。親王來着ニ次將上。次將着ニ奥座。賂射還饗ニ依ニ倉卒ニ也。相撲時數ニ土敷圓座。或延上敷レ之。次垣下公卿着座。相撲時數ニ土敷圓座。或延上敷レ之。次將着座。相撲時數ニ土敷圓座。或延上敷レ之。次立レ机。或次將机先立。三獻訖有ニ絃歌之興。給ニ祿有ニ差。或命ニ東遊。將監以下舞レ之。天祿例也。相撲之時。三獻之後。示ニ次將。令レ召ニ相撲人。少將臨レ檻。召ニ相撲所將監。仰レ之。數巡之後。有ニ相撲布引等事。少將。固仰ニ三番。

多久行説。

かたの大將かへりあるじの日。かみのますと謡は風俗にて候。八乙女と申はうたにて候也。此うたは二段之歌なり。

二段。

神のますこのみやしろに。たつややをとめ。たつややをとめ。やをとめわかやをとめ。たつややをとめ。たつややをとめ。

神のやすともうたひ候事も候。

このこと葉に。みづのおち候。

かくのごときのことども。今の世には下らうのしりて候はず。かく申上候へども。もしひが事もや候らん。

一紅梅。并一。

君ならで誰にか見せむ。

釋迦佛涅槃之後。阿難昇ニ高座。結ニ集諸經之時。其形如佛。仍衆會疑ニ佛再出給ニ。

あたら夜の月と花とを。

かはふえん。或人云。猶笙を云べき歟。

一たけかは。并二。

樂府。上陽人。

未レ容ニ君王得レ見レ面。已被ニ楊妃遙側レ目。妬

令潜配 上陽宮。

いろよりもかこゝ哀とおもほゆれたか袖ふれし宿の梅そも
梅かえにきゐるうぐひす。

花の香を風のたよりに。

このとは。

おもふにはしのぶることぞ。

櫻さくさくらの山のさくら花さく櫻あれは散さくらあり

櫻花ちりかひくもれ老らくのこんといふなる道まかふかに

櫻色に衣はふかく染てきん花のちりなん後のかたみに

戀しなはたか名はたゞし世中の常なき物といひはなすとも

史記。吳世家。

季札之初使_レ北過_二徐君_一。徐君好_二季札劍_一。口弗_ニ

敢言_二季札心知_レ之_一。爲_レ使_ニ上國_一。未_レ獻。還至_ニ

徐君_一。君已死。於是乃解_ニ其寶劍_一。繫_ニ之徐君冢

樹而去。從者曰。徐君已死。尙誰予乎。季札曰。

不然。始吾心已許_レ之。豈以_レ死倍_ニ吾心_一哉。

春の夜のやみはあやなし。

あづまぢの道のはてなる。

多久行。

踏歌曲。

万春樂のことは。

ばんずらく。二反。くはうえんそう。かくせんね

ん。二反。くゑんせい。くゑんそくゑんか。ねんくはう

れい。二反。

いつれの人にもつたへ給はす。多氏はかり

にはつたへて候。すへてたうかには。我家。此

殿。ばんずらく。なにぞも。所々のさいばら

四をうたひ候。是皆れうし也。

二優婆塞。廿八。一名橋姫。

宇治川の波の枕に夢さめてよるは橋姫いやねさるらん

ぬししらぬ香こそにほへれ。

還城樂。陵王をあやぶめんとす。ひのくるゝは

ちして。日をむまにかへすと云事也。くはしく

知らず。

此等事可否難弁。

史記。魯陽以_レ矛廻_二落日_一事歟。

鷹の鳴嶺の朝霧はれすのみおもひつきせぬ世中のうさ

さす棹の雪にぬるゝ袖の上に身さへうきてもおもほゆる哉

琴の音に峯の松風かよふらしいつれのをよりしらへ初けん

一椎本。廿九。

わきてしも何句ふ覽秋のゝにいつれともなくなひくお花に

經云香山大樹緊那羅。於_二佛前_一瑠璃之聲。彈_二

八万四千里音樂_一于_レ時迦葉尊者。威儀忘舞給。

つゝに行道とはかれて聞しかと昨日けふとは思はさりしを

さゝのくまひのくま河に。

蓼衣はつるゝ糸はわひ人の涙の玉の緒とそなりける

末の露もとのしづくや。

蚤の住里のしるへにあらなくにうらみんとのみ人のいふ覽

神なひのみむろの岸やくつるらん立田の河の水のにこれる

あさか山かげさへ見ゆる。

一角總。三十。

身をうしと思ふに消ぬ物なれはかくてもへぬる物にそ有ける
よりあばせてなくなるころ。

七條后崩之時。伊勢歌。

糸による物とはなしに別れ路の心ほそくもおもほゆるかな
かた糸をこなたかなた。

おく山のはれぬしくれそ佳人の袖の色をはいとましける

王昭君。

邊風吹斷秋心緒。

(讀イ)
瀧水流添夜淚行。

文集。

晨鷄再鳴殘月沒。

征馬連嘶行人出。

角總。呂。

安介万支也。止字々々。比呂波可利也。と字と

字。左加利天禰田禮止毛。万呂比安比介利。止

字と字。加興利安比介利。止字々々。

いなせともいひはなたれず愛物は身を心ともせぬよ也けり

世中をうもと言てもいつくにか身をはかくさん山なしの花

なかしとも思ひそはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれは

尋ねくる身をし問すはよさの海に身も投つへき心ち社すれ
ほり江こくたなゝし小船漕かへりおなし人にや戀わたる覽
若草のにる手枕を卷こめて。

山しろのこはたのさとに。

世中を何にたとへん。

いそのかみふるの山里いかならんをちの里人霞へたてゝ
夢にだに見ゆとは見へし。

あふ事は遠山鳥のはつかにも有としきかは戀つゝもをらん
いかなれはあふみの海そかゝるてよ人をみるめの絶ておひねは
いて人はことのみそよき月草のうつし心はいることにして
とりかへすものにもがなや。

うらわかみねよけに見ゆる若草を人の結はん事をしそ思ふ
初草のなとめつらしき言のはそうらなく物を思ひけるかな
樂府。李夫人。

漢武帝初哭李夫人。夫人病時不肯別。死後留
得生前恩。君恩不盡念未已。甘泉殿裏令寫
眞。丹青畫出竟何益。不言不笑愁殺人。又

令方士合靈藥。玉釜煎鍊金爐焚。九華帳中夜
悄悄。返魂香降夫人魂。夫人之魂在何許。香烟
引至焚香處。既來何苦不須臾。縹緲悠揚還滅
去。去何速兮來何遲。是耶非耶兩不知。翠娥勞
鬢平生貞。不似昭陽寢疾時。魂之不來君心
苦。魂之來兮君亦悲。背燈隔帳不得語。安用
留來還見違。傷心不獨漢武帝。自古及今
皆若斯。君不見穆王三日笑。重壁臺前傷盛
姬。又不見秦陵一掬淚。馬嵬路上念楊妃。假
令妍姿艷質化爲土。此恨長在無銷期。生亦惑
死亦惑。尤物惑人忘不得。人非木石皆有
情。不如不遇傾城色。

あすしらぬ我みと思へと暮ぬまのけふは人社悲しかりけれ
岩そゝく山井の水をむすひあけて誰爲おしき命とかしる
いにしへも今もむかしも行末もかく袖ひつる折はあらしを
みなと入のあしわけ小船。

遺愛寺鐘敲枕聽。香爐峯雪捲簾看。

涅槃經。雪山童子。半偈投^レ身。

諸行無常。是生滅法。生滅々已。寂滅爲樂。

いかて猶つれなき人にみをかへてくるしき物と思ひしらせん
伊勢集。

つねになやましくせさせ給けるを。つゐに六月八日になんかく^{イナシ}れ給ひにける。とさましくいみじくて。つかふまつりし人^{イナシ}ながらあつまりて。よるひるなきかなしみ戀^{イナシ}たてまつるに。後の御わざのをりにやうやくなりぬ。雨のふる日。おもひうしといひて人しもき^{イナシ}ななこもりゐたりける。うへの人あつまりて。御わざのくみをなんしける。しもなる人糸はより^{イナシ}はてたまふひなり。たゞいま何わざをかし給ふ。こゝに雨をなん見^{イナシ}だしてながめ侍と。いひあげたりければ。うへのおもとたちのかへしには。いとよりはてし。今はねをなんよりあはせてなき侍と。いひをこせたれば。しもな

るひと。

よりあはせてなくなる聲を糸にして我涙をは玉にぬかなん
一さわらび。卅一。

日のひかりやふしわかねは曉の上ふりにし里に花も咲けり
戀しくはきても見よかし人傳にい^{イナシ}はせの杜のよふことり哉
春霞たつを見すて、行鷹は花なき里に住やならへる
やとをはかなし。未勘。

今そしる苦しきものと人またん里をはかれす問へかりけり
五月まつ花たちばなの。

一やとり木。卅二。

銷^{イナシ}日不如^{イナシ}碁。文集。

文選。歎^{イナシ}逝賦。

譬^{イナシ}日及^{イナシ}之在^{イナシ}條垣。雖^{イナシ}盡而不^{イナシ}悟。

なにかゝれると。いとしのびて。事もつゞかず。

あくるまざきてと。

あさまだきまたさにけり。

松蘿契。夫妻之事也。

古詩。

與_レ君結_二新婚_一。菟絲附_二女蘿_一。

さとはあれて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋のゝらなる
山里は物怪しかる事こそあれよの憂よりはすみよかりけり
わが心なぐさめかねつ。

ありはてぬ命まつまの程計うき事しけくおもはすも哉

いなせどもいひはなされずうき物は。伊勢

戀をしてはねをのみなけは敷たへの枕の下に海士そ釣する

うきながらうきえせぬ物は身也けり。

うくもよを思ふ心のかなはぬか誰も千とせの松ならなくに

戀しさの限りだにあるよなりせば。

戀わひぬねをたになかん聲たてゝいつく成らん音なしの瀧

こがねもとむ。王昭君事なり。たくみは畫工

也。

佛の方便にてなん。かばねのふくろ。

經の文也。觀音勢至の子にておはしましける

に。まゝ母のためにころされにければ。そのお
やのかばねをくびにかけ給ひて。つゐに佛道
えたまへること也。

花ふらせたるたくみ。未_レ勸。

むすびをくかたみの子だに。

長恨歌傳。

方士乃竭_二其術_一。以_レ索_一之不_レ至。又能遊_レ神馭

氣。出_二天界_一。沒_二地府_一。以求_レ之。又不_レ見。又旁

求_二四虛上下_一。東極_二天海_一。跨_二蓬壺_一。見_二最高仙

山上多_二樓閣_一。西廂下有_二洞戶_一。東嚮闔_二其門_一。署

曰_二玉妃大眞院_一。方士抽_レ簪叩_レ扉。有_二雙鬟童

女。出應_レ門。

于_レ時雲海沉沉。洞天日晚。瓊戶重闔。悄然無

聲。言默憫訖。指_二碧衣_一。取_二金釵鈿合_一。各折_二其

半_一。授_二使者_一。曰。爲_レ謝_二太上皇_一。謹獻_二是物_一。

いかならんいはほの中に。

大方の我身ひとつのうきからになへてのよをも恨つるかな

不^レ是偏花中愛^レ菊。 此花開後更無^レ花。

とんじき。 屯食とは。自^ニ内藏寮^一諸司にたぶ物也。あらとんじき。もりとんじき。ふたやうに有也。人のしなにしたがひてたぶなり。ごてのせに。 碁手錢とは。公事にをんさになりて。ごうつかけものなり。いゝは紙をするなり。

ふんじゆく。 粉熟とは。これも公事に。飯よりさきにさへあるものなり。節會にもあり。なにかしのみこの花めでたるゆふべぞかし。伊勢海。見^レ上。

をりつけ袖こそ匂へ梅花有とやこゝにうくひすのなく楊貴妃のかむざし。

於^ニ御前^一奏^ニ人々名^一事。

親王。 其官の御子。無官。其名御子。

大臣。おほきおほいもうちぎみ。ひだりのおほいもうちぎみ。みぎのおほいもうちぎみ。

大納言以下三位以上。其官姓朝臣。有^ニ兼官^一人。其兼官姓朝臣を申す。四位參議。名朝臣。四位同上。五位は名。殿上六位は同。五位地下六位は加^レ姓。太上天皇東宮同^レ之。親王以下三位以上申詞。親王は其官のみこ。無官をば郎のみこ。大臣をば其大殿。大納言以下。其官或加^レ姓。四位をば其官朝臣。不^レ云^レ。五位をば名朝臣。六位をば名。有^レ官。左右大將をばひだりみぎとは申さず。左大將右大將と申。

あづまや。

大かたの我みひとつのうきからになへてのよをも恨つる哉大ぬさの引手あまたに成ぬれば思へとえこそ頼まさりけれ大ぬさと名に社たてれ流てもつゐによるせは有とこそきけ思はんと頼めしことも有物をなき名はたてゝたゝに忘れぬふす程もなくあけぬる夏夜はあひてもあはぬ心ち社すれうつろはん事たにおしき秋萩に折るはかりもおける露かないがたうめ。 可^ニ尋勘^一。

苦しくも降くる雨か三輪か崎さのゝわたりに家もあらなくに
我戀は空しき空にみちぬらしおもひやれとも行方もなし
哀わかつまとも君を思はくやあかすてのみそ返り見かちに
斑女聞中秋扇色。

楚王臺上夜琴聲。

うき舟。

戀しくはきてもみよかし千早振神のいさむる道ならなくに
こひしなん後はなにせんいける日の。

あかさりし袖の中にや入にけん我玉しみのなき心ちする
しのゝめのほから／＼と明行はをのかきぬく成そ悲しき
心にはした行水のわきかへりいはて思ふそいふにまされる
さむしろに衣かたしき今宵もや我を待らん宇治の橋ひめ
いぬ上のとこの山なるいさら川。

山城のこはたの里に馬は。

恨てもなきてもいはんかたそなき鏡まみゆる影ならすして
たらちねのおやのいさめしうたゝねは。

行舟の跡なき波にましりなはたれかは水のあはとたにみん
わひぬれは身を浮草の根を絶てきそふ水有はいなんとそ思
白雲のたえずたなく嶺にたに住はすみぬるよに社有けれ

戀せじとみたらし河に。

道口。律。

見知乃久知。た介不の己不爾われはありと。お
やにまう之多戸。己々呂あ比のかせ屋。左支无
太知也。

君にあはんその日いつと松の木の苔のみたれて物を社思へ
けそうする人のありさま。いづれとなき。やま
と物がたり。万葉集にあり。をとめのつかの事
也。

わが戀はむなしき空にみちぬらし。

大國以^レ羊爲^ニ食物。如^ニ馬牛^一飼置。臨^レ食相具
屠所步行也。隨^レ步死期近。以^レ之世間人如^ニ相
待^一。無常喻^レ之。短歩々近^ニ死地^一。人命亦如^ニ是^一。

けふも又牛の貝をそふきつなるひつしのあゆみ近つきぬ覽
一かげろふ。

わきも子かきてもよりたつ眞木柱その陸しやゆかりを思へは
樂府。

人非_ニ木石_ニ皆有_レ情。不_レ如_レ不_レ遇_ニ傾城色_一。

なき人の宿にかよは_ニ郭公われかくこふとなきてつけなん

大抵四時心惣苦。就_ニ中腸斷是秋天_一。

たれをかもしる人にせん。

ねたましがほに。

遊仙窟。

容貌似_レ男潘安仁。外甥氣調如_レ兄。崔季珠之小

妹。

故々將_ニ纖手時々弄_ニ小絃_一耳。聞猶氣絶。眼見

若爲_レ怜。

ことよりほかを。

手習。

もゝとせに一とせたらぬつくも髪我をこふらし面影_{〔たにイ〕}のみゆ

爰にしも何にほふらん女郎花人のものいひさかにくき世に

山里は秋社ことにわひしけれ鹿のなく音にめをさましつゝ

世のうきめ見えぬ山路へ入んには思ふ人こそほたし成けれ

樂府。陵園妾。

陵園妾。顔色如_レ花命如_レ葉。命如_ニ葉薄_一將奈何。

松門到_レ曉月徘徊。柏城盡日風蕭瑟。

月やあらぬ花_{〔マユ〕}やむかしの一

此愚本。求_ニ數多舊手跡之本_一。抽_ニ彼是_一用_ニ捨短所及琢磨之者_一。未_レ及_ニ九牛之一毛_一。井蛙之淺才寧及哉。只可_レ扣_ニ嘲哂_一。纔雖_レ有_ニ勘加事_一。又是不足。未_レ及_ニ尋得_一以前。依_ニ不慮事_一。此本披_ニ露於華夷遐邇_一。門々戸々書寫預_ニ誹謗_一。雖_ニ後悔_一無_レ詮。懲_ニ前事_一。卷奥所_レ注付_ニ僻案_一。切出爲_ニ別紙_一之間。歌等多切失。旁難_レ堪_ニ耻辱_一之外無_レ他。向後可_レ停_ニ止他見_一矣。

非人桑門明靜

秋南光雄

群書類從卷第三百十六

物語部十

原中最秘抄上

桐壺卷

一太液芙蓉事

一高麗人來朝并鴻臚館事

一太藏卿藏人勸理髮事

帚木卷

一たぢろさといふ事

一ひゝちゐたりといふ事

一中河の事

一衣のをとなひさやかにばら／＼ときこえてと

いふ事

夕顔卷

一揚名介事

一しびらだつ物といふ事

一八月十五夜與夕顔上交接事

一右近着服事

若紫卷

一聖德太子金剛樹念珠事

一あづまをすがゞきてひたちには田をこそつく

れといふ歌をといふ事

一おきゐてみ給ふ鈍色のこまやかなるがうちめ

なえたるを着てと云事

末摘花卷

一わかむどぼりの兵部少輔事

一えびの香いとなつかしうと云事

一しゝまと云事

一ひそくやうの物の事

一聴色の衣并ふるきの裘事

一松の雪あたゝかげにといふ事

一鏡臺からくしげかゝげの宮事

紅葉賀卷

一御ささき詞事

一青海波の入あやの事

一母なき子もたらんといふ事

一藤壺御産延引事

一さうのこと巾のほそをの事

花宴卷

一柳花宴の舞事

一明王の御世四代事

一櫻の唐のきの御直衣えびそめの下襲事

葵卷

一あやしき山がつたびしかはらと云事

一大將のかりの隨身殿上のそうの事

一法界三昧普賢大士事

一このもちゐあすのくれにまいらせよと云事

一三日の夜のもちゐ三が一といふ事

一かうこの箱事

賢木卷

一とのゐ物の袋事

一しはふるひ人の事

一白虹日をつらぬくと云事

一月影はみし夜の秋と云歌事

一文王子武王弟事

鴈磨卷

一おさめみかはの事

一屏風のおもての書事

一むすやのおさにくしとらする事

一海龍王の物めでする事

明石卷

一 廣陵といふ樂事

一 まくなぎつくるといふ事

水臬卷

一 源氏大納言内大臣になり給ぬくつろぐところ

一 なかりければくはゝり給と云事

一 河原大臣の例童隨身事

蓬生卷

一 ちやうこぼちたる女事

繪合卷

一 御くしのはこうちみだれかうこの宮事

一 くんえ香百歩の外すきにほふと云事

松風卷

一 よるひかる玉事

一 にはかなる御あるじと云事

一 こ鳥つけたるおぎの枝事

乙女卷

一 をしかいもとあるじの事

一 窓の螢枝の雪事

一 夕霧大將受_ニ寮試_ニ事

一 御としみの事

玉鬘卷

一 かためつづれ足おれと云事

一 はつせ日の本もろこしにきこゆる事

一 のしひとへの事

胡蝶卷

一 こしざしなどたまふ事

一 孔子のたうれと云事

常夏卷

一 ことつひと云事

桐壺。

一 たいえきのふようも。げにかよひたりしかたち色あひ。からめいたりけむよそひは。うるは

しうけうらにこそはありけめ。

太液芙蓉未央柳。對レ此如何不_ニ涙垂。芙蓉如
面柳如_レ眉。口。私云。亡父光行。むかし五
條三品に。この物がたりの不審をたづね申
はべりし中に。當卷に。ふにかけるやうき
ひ。かたちはいみじき繪師といへども。筆か
ざりあればにほひすくなし。太液のふよう
未央柳とかきて。びやうの柳といふ一句を
みせけちにせり。これによりて。親行をつか
ひにして。楊貴妃をば芙蓉と柳とにたとへ。
更衣をば女郎花と撫子とにたとふ。みな二
句づつにてよくきこえはべるを。御本。俊成
卿本事也。未央の柳をけたれたるは。いかなる子
細のはべるやらんと申たりしかば。我いか
でか自由の事をばしはべるべき。行成卿の
自筆の本に此一句をみせけちにし侍き。紫
式部同時の人に侍れば。申あはするやうこ

そ侍らめとて。是も墨を付ては侍れど。いぶ
かしさに。あまたたび見し程に。若菜卷にて
心をえて。おもしろくみなし侍なりと申さ
れけるをかたるに。若菜卷には。いづくに同
類侍とか申されしといふに。それまでは尋申
さずと答侍しを。さまゝはぢしめ勘當し侍
し程に。親行こもりゐて。若菜卷を數反ひら
きみるに。其意をえたり。六條院の女試樂に。
女三の宮を。きさらぎの中の十日ばかりの
あをやぎのしだりはじめたらん心ちしてと
あり。柳を人のかたちにとへたる事あま
たなるによりて。みせけちにせられ侍にこ
そ。しかあるを京極中納言入道の家の本に。
びやうの柳とかゝれたる事も侍にや。又俊
成卿の女に尋申侍しかば。此事は傳々書寫
のあやまりに書入けるにや。あまりに對句
めきて。にくいけしたる方もはべるにや云

云。仍愚本これもちひず。けうらは希有羅。
又交羅也。

一こまうどまいる中に。かしこき相人あり。宮
の内にめさむことは。宇多の御門の御いまし
めあれば。この御子をこうくわんにつかは
したり。

延喜御時。相者狛人參入。天皇御_ニ于簾中_一。
聞_ニ御聲_一云。此人爲_ニ國王_一歟。多上少下之聲
也。叶_ニ國躰_一。天皇恥不_ニ出御_一。

寛平遺戒。外蕃之人必可_ニ召見_一者。在_ニ簾中_一
見_レ之。勿_ニ直對_一耳。定家卿釋。

鴻臚館事。日本の玄蕃寮にあたるなり。外國
の人ををく所也。鴻は聲の義也。臚は傳也。外
の國の人の聲を傳る心也。鴻臚館。むかしの
羅城門の石ずへなり。但北へよれり。

一大藏卿藏人つかうまつる。

大藏卿は理髮也。藏人は役送也。内藏頭は理

髪をつとむべし。故障のあいだ。大藏卿つと
むる歟。

筭木。

一たぢろき。

とゞろき同事歟。五音通ずる故也。展々轟
動。

一ひゝちゐたり。

賴隆卿說云。此詞鴨よりおこれり。ひえ鳥の
ほこりたる時。ひゐり羽たゝくといふ事あ
り。われはがほなる氣色なり。輕粧。日本紀。

一中河。

李部王記云。以_ニ京極河_一爲_ニ中河_一云々。舊記
云。賀茂河謂_ニ東河_一。桂河爲_ニ西河_一。京極河爲_ニ
中河_一。

一衣のをとなひさやかに。はらくときこえて。
夏の女の衣。皆以すゞしなり。はらくとな
るべきにあらず。鈴虫の卷にも。夏ぎぬのを

となひとあり。不審也。此事定家卿に尋申之處に。誠に不審也。但夏もすりひとへとて。女房の衣にかさぬる事あり云々。又あはせの衣ともある也。いづれも上古事也。

夕顔

一やうめいのすけの事。

一云。諸國介也。又云。無_二所望_一之仁。除目に作名舉也。吉野春風三輪車持之類也。又信西云。正權之外介也。不_レ預_二公解_一云々。或云。山城介也。

宇治殿仰云。揚名關白有_二何詮_一云々。近來執政爲_二御虛名_一之由御述懷云々。

昔東三條院法興院殿御女。圓融院后。被_レ舉_二申揚名介_一之時。御堂殿被_レ申_二任因幡介_一了。旁以有_二子

略_一者也。

以前兩條簡要也。以_レ之可_レ加_二了見_一。秘義畧_レ之。

一しびらだつ物かごとばかりひきかけて。

枕草子云。もはちほうみのしびら。榮花物語云。女房四五人ばかり。うす色のしびら。かごとばかりゆひついたり云々。しびら。褶。覆袴之衣也。

延喜式云。荷與丁褶。私云。女房装束のう

へに着_レ之。しびらは。もからも同事也。行

阿云。堀河相國定實公説云。しらこしだつ物也。白腰也。からきぬの上にかけたる裳を。し

ろこしと云也。海賦の裳桐竹ともに白腰也。しろこし。此字をかきまぎらはしたる也。

かごととは誓也。小事也。こゝにては。すこしといふ事也。

一八月十五夜くまなき月の云々。

八月十五夜。九月十三夜。婁宿也。

仙術法云。朔望晦夜等。不_レ行_二陰陽_一云々。

唐書云。王安好_レ色。八月十五夜與_レ女會合云

云。此例歟。

一ふくいとくろくして。かたちなどよからねど。或説云。昔は服者も。黒衣に赤脊はきて出仕しけり云々。又趙武は。程嬰が服を三年着_レ之。延光大納言は。村上天皇の御服を一生ぬがず。此類おほし。

私云。素服事。父母にかぎらず。天子主君のために舊例着_レ之歟。右近夕顔の上になれつかへしかば。彼服を着せん事無_二子細_一歟。俊成卿女殊に此義を立申され侍き。但かの上かくれ給し事。かくし忍給よし。物語のおもてにも見えたり。色ことなる黒服をきて。初參旁はゞかりあるべし。ふくいとくろくしてかたちなどよからねどと書つゞけたる詞のにほひ。衣裳などのよせなきにや。只ふくらかにといふべきを。ふくとばかりかきたるは。つゞきなきやうなれど。和語のならひ

詞を略する事不_レ可_レ勝_レ計歟。あなかしがましを穴かまとも。久しきをばひさとも。さやかにをば。さやともいふ事おほければ。世俗の詞に。人の形の肥たるをば。ふくくも。したるなどいへば。必ふくく_二の重點なくとも_一。などかふくくろくともいはざるべき云々。愚按。着服之義可_レ然歟。

若紫。

一聖德太子のくだらよりえたまへりける金剛すのずを。

欽明天皇御時。太子六歳十月に百濟國より經律并種々の重寶等を吾朝へ渡さるゝ中に。伴の御念珠有之歟。大和國法隆寺へ。文永の頃能海法印良觀上人同道して參詣之次。彼寺重寶等拜見之時。御念珠兩三連在_レ之。其中に金剛子數珠相交者也。

一あづまをすがゞきてひたちには田をこそつく

れといふ歌。

和琴。

日本紀。

行阿云。伊弉諾伊弉冉

尊つくりいだしたまふと見えたり。凡菅根をあつめて。其音をかきいだして。すがき秘曲とす。和琴のかたち。弓を六張たてならべて。その姿につくれり。本はせばく末はひろし。又常陸歌云。常陸には田をこそつくれ。

あだごころかぬとや。君は山をこえ野をこえ云々。親行許へ。和琴大夫教豪狀云。あ

づまをすがきしてひたちには田をこそつくれとは。盡身にいとなむ事に候を。みな被

知食て候らめども。あづまと申候名は。和琴をばたゞも申候へども。是は東調と申て。

道の秘事にて候。ひたちには田をこそと候は。風俗の秘事四首の内第一候也。あづまのしらべにて。すがき候て。風俗をばうたふことにて候を。今はくはしくしりて候人も

すくなく候らん。それをしらん人は心みよと。書置て候けるやらんと思候間。涙難禁候。如何云々。行阿云。若菜上に柏木衛門督のすがきしたるとあり。其所より三四行がかみに。しらべにしたがひてあとあるべしとみえたる也。若紫此段と若菜上の詞と符合せり。

一やうくおきゐてみ給ふ。にび色のこまやかなるがうちなれたるどもをきて。

外祖母の喪に。輕服なれば用鈍色一鯁。但本朝着輕服事久絶了。然而此物語比猶着之鯁。

私云。或女房。此物語の才學をたてゝよみ侍しが。見給にと。にの字を上へつけて。ひいろのこまやかなるとぞよみ侍し。且は紅葉賀の卷にも。まばゆき色にあらでをとて。くれなゐうす色紫のちのかぎりなどあり。彼

紅は則火色也。輕服の時も鈍色ばかりにあらず。火色紫などを用事もあり。しからば火色とも心うべきか。さりながら俊成卿女云。紅葉賀の卷に。外祖母之服。三ヶ月之後除服云々。然間にび色たるべし云々。

末摘花。

一わかむどほり。

定家卿釋云。王孫をいふ。花山入道右大臣家説大同之。法花經云。世雄無等倫。王家無等倫也。

或説云。和漢に通たる達者の事也。此義不可用之。わかむどほりとよむべし。やがて王の字を書べし。浮舟卷。なまわかむどほり。うばそくの宮の御女。あづまやの君の事をいへり。以之可レ知。

一えびのかなつかしう。

裛被香也。香の衣につけるなり。裛懷。

一いくそたび君がしゝまにまけぬらん物ないひそといはぬたのみに。

しゝま。誓。しゝまとはちかひて物いはぬ事也。又無言。八講論義の時。證義問答の是非をさして。磬を打て勝負を決す。其後は所存のこる事あれども。兩方共に口を閉て無言す。無言をばしゝまと讀也。然ば。いくたびか君が無言にまけて物ないひそと。いはざる契のある也といふ也。然ば鐘をうたざる前の事也。即此返歌云。かねつきとぢめむことはさすがにてこたへまうきぞかつはあやなきと云。此歌のこゝろは。鐘つきたらば閉口すべきを。いはんとすればあやなき也。御たいひそくななどやうのもろこしの物なれど。

類説曰。今之秘色磁器。世言。吳越錢氏時。越州より燒進す。平人はもちひず云々。俊成

卿女説云。醬色茶椀。具足云々。

一ゆるし色のわりなううはじらみたる。

聴色とは紅紫二色也。うはじらみたると

は。五節以後黃菊の衣をさす。件の色歳暮の

頃着用の衣也。可_レ爲_二紅梅_一歟。

ふるきのかはぎぬ。貂也。てんといふ獸也。

裘也。

一松の雪のみあたゝかげに。

としさむき時。もろく_二の木_一。霜雪にをかさ

れておれおつれども松ひとり緑也。此故云。

松は陽木也。

一さやうだい。からくしげ。かゝげの箱。

鏡臺。唐匣。搔上函。

紅葉賀。

一人のみかどまでおぼしやれる。御ささきこと
は。

人のみかどとは。他國の朝廷と云心也。さ

さき詞とは。孝範卿云。后詞也。ひじり詞。お
きな詞。わらは詞などいふ事あり。同前也。
後漢書后妃傳云。有_二四德_一。一云婦德。二云婦
容。三曰婦言。四曰婦功。后言は婦言也。

一いりあやの程そとろさむく。此世の物とも見
えず。

狛氏流云。入綾也。舞手に。綾引手。綾取手。
綾織手とも云て様々の秘説有。青海波の末
つかたなれば。入あやといふ也。この世の物
とも見えずとは。龍宮の舞たるゆへ也。其故
は輪臺青海波は。婆羅門僧正渡朝之時。惡風
によりて輪臺國に吹よせらる。始て此舞を
みる。彼國の伶人舞_二輪臺_一之後。龍神二人
浮_二海上_一。いはほを冠とし。劔をはき。大海浦
を裝束として。青海波舞云々。

一はなき子もたらん心ちして。

行阿云。賀若弼兄の子をやしなふ。母なくな

りて。弼慈愛のあまりに乳出て。此子を養立云々。

二月十よ日の程に。おとこ宮生れ給。

行阿云。藤壺御懷妊事。若紫卷の。春の末ざま。三月ばかりになれば。しるくみたてまつるとあり。末摘花卷に。その年くれ春になりぬ。朱雀院の紅葉賀の行幸神無月也。其年くれ春たちて。源氏君朝拜にまいり給へるを。宮藤壺。御几帳のひまよりほのみ給。この御事。しはすもすぎにしかば。この月也。正月はさりとともまつに。つれなくてたちぬといひて。同二月十よ日の程に。男宮生れ給とあり。然間。懷孕のはじめと誕生の時とを勘れば。年は三ヶ年。月は廿六月也。此事古今沙汰せず。尤不審なり。懷妊延引。和漢の例是をいだす。

應神天皇御母神功皇后。御懷妊八ヶ年之後。

仲哀天皇崩御。三韓又退治して生給歟。又武内大臣者。孝元天皇御孫也。此人胎内にある事六十年にて生る。又耶輸多羅比丘尼は。羅睺羅尊者母也。佛出家六年之後誕生す。又老子は母李氏胎内にある事八十一年にてむまる。此等例歟。

さうのことは中のほそを。

季通流には一より七まではふと絃。八より十までは中の絃。斗爲巾をばほそ絃といふ。普通説。四すぢづつを三にわけて。ふとを。中のを。ほそをと云。巾は又ことにほそし。
見別抄

花宴。

柳花苑といふ舞。

此樂舞圖婆羅門僧正持來。女形也。其姿如吉祥天女。鉢。柔々靜々而已。

一明王御世四代にあひ侍れど。

或説。淳和仁明文徳清和歟。然者可_レ爲_二忠仁公_一。

私云。世繼云。宇多醍醐朱雀村上。ことさら明王と見えたり。然者貞信公歟。

一櫻のからのきの御なをし。えびぞめのしたがさね。しりいとながくひきて。みな人はうへのきぬなるに。あざれたるおほきみすがたなまめきたるとて。いつかれ入給。

直衣布袴事。直衣に下襲を着する也。正暦年中曲水宴の日。御堂殿その時左大臣にて。此装束を着し給。紅梅織物直衣云々。其後内大臣公季堀川左大臣俊房公等着_レ之云々。あざれたるとは宿の字。日本紀にざれたるとよめり。あは語のおこり也。只ざれたる也。うへのきぬは袍也。おほきみすがたはなをし姿也。大君。王。なまめくとは。姁。娜。媚。艶。窈。窕。皆同。

いつくとは。寵。嚴。葵。

一山がつ。たびし。かはら。

山がつは山兒也。日本紀。度子は。わたしもり也。考羅は。あみひき也。私云。民代は人を身の代とする也。いふかひなき下藨也。たびしのびの字。みの字と五音通ず。枕草紙にもたびしかはらとあり。其義同じ。海邊にもあらず。わたしもりあみひき其よせなし。

一大將のかりの隨身。殿上のどうなどのする事は。つねの事にはあらず。めづらしき行幸などのありのわざなるを。今日は左近藏人のどうつかうまつれり。

大將の和名。みかさ山。おほきちかきまもりといへり。私云。かりの隨身とは。其日ばかりなどいふころ也。殿上のどうとは。左右近將監の藏人をかけたるなり。さて殿上の

どうといふ也。近衛府大將はかみ。中少將はすけ。將監はぜう。將曹はさうくはんにあたる也。此卷には左近藏人のどうとかき。須間の卷には左近のどうの藏人とかけり。同事也。

一法界三昧。普賢大士。

法界三昧とは。法界衆生普賢と同躰なる義なり。中堂修正。六時作法。南無法界三昧普賢今相と云。是傳敎大師御作也。大士今相同事也。

一このもちる。かくかず／＼に所せきさまにはあらで。あすのくれにまいらせよ。今日はいまいましき日なりとの給。

行阿云。亥子の餅はいつも亥の日の事也。何ぞいま／＼しき日といはんや。しかるを三日夜の餅との給はん事。さすがはづかしければ。重日なるに事よせて。あすとのたまふ

を。惟光心さとき物にてさぞと心えて。いくつかまいらせんと申せば。三が一にてあらんかしとの給に。心えてたちぬ。又重日は凶事ばかりに忌也。

三日の夜のもちる。みつが一にてもあらんかし。

或説。三日夜餅は女房の年の數を用云々。しかるを十三か。又一をくはへて十四ぞと。かくしやうに被^レ仰敷。十をば略せられたり。又云。三日夜餅は。銀小土器三に白き餅のまろきを。三におなじやうに盛也。仍三が一と云々。三坏一具と心得べし。

一かうこのはこを一さしいれたり。

香壺の箱ならば。薰物を納たるをとりあげて。件餅をいれたる敷。又云。かうと讀きりて。此箱といふべき也云々。

賢木。

一さぶらひにとのゐ物の袋あさ／＼見えす。

行阿云。さぶらひは殿上也。とのゐ物の袋

とは。圓明寺殿仰云。御簡入られたる袋歟。

牘の長三四尺ばかりなるに。四位より六位

にいたるまで。殿上人の名字を書載たるを。

日給の簡と號す。此簡入たる袋歟。又云。宿

直する物の袋也。其故は源氏いまだ公卿也。

其時大臣にあらず。日給の簡もたつべから

ず。あさ／＼といふにて知ぬ。御とのゐする

人のやう／＼まれになれるをいへる也。

爲家卿云。此事全分不知云々。

一このもかのもに。あやしきしはふるひ人ども。

あやしきとは下賤也。しはふるひ人とは。

鍬古人。老人の心歟。又云。柴振人歟。日本

紀。折枝葉人とあり。此義にかなへり。邊土

のあやしきしづ。柴のかゝりたるをふるひ

あとすたぐひの事歟。

一白虹日をつらぬけり。

史記。燕太子丹。荆軻をかたらひて。秦王を

ころさんとせし時。此瑞あり。源氏を太子に

たとへていへり。仍源氏はどかりて。さきを

しのびやかにおはする也。

一文王の子武王のをとゝとうちずんじ給へる。

御なのりさへぞめでたき。成王のなにとかの

たまはむ。

史記。魯世家。周公戒伯禽辭曰。我文王之

子。武王之弟。成王叔父也云々。

文王 武王 成王

周公

文王をば桐壺帝に比す。武王をば朱雀院に

比す。成王をば冷泉院に比す。源氏みづから

周公に比す。しかれば冷泉院には叔父の分

なれども實は父なれば。なにとかのたまは

むといふ也。

販磨。

一 おさめ。みかはやうなどまで。

長女。長部。曹司。御河。

おさふる女。みかはたとて。大なる桶に物いれていたゞきありく卑販女也。御河はひすまし也。

一 色々の紙をつぎつゝ手ならひし給。めづらしきさまなるからの綾などに。さまゝゝ繪などもなどすさびかき給へる屏風のおもてなど。いとめでたく云々。

昌泰三年西府にて作らせ給たる詩をあつめて後集と名づけて。延喜三年御心神漸違例ありしに。箱におさめて長谷雄卿のもとへつかはさる。此例歟。屏風の繪。おもてうら兩説あり。此物語には繪のあるかたを面に用之。西宮左大臣繪を面にする義をもちふる間。此物語彼大臣事をかけり。一説は。蘇

芳の方を面になす。大臣大饗之時此義也。又車寄の四枚屏風。蘇芳を面にもちひる也。

一 ひまやのおさにくしとらする人もありけるを。ましておちとまりぬべくおもほえける。

大鏡第二。菅家配所に趣せましゝける時。明石の驛にておさのいみじく思けるを御覽じて。つくらせ給ける御詩の事をたとへていへり。

くしは口詩也。日本紀にも口號の歌といへり。口にていひて書ざる也。其御詩云。

驛長莫驚時變改。一榮一落是春秋。

おちとまりぬべくは。菅家はあそばしつけられず。いま源氏書つけられたれば。落とまりぬべき也。

一 海の中の龍王のいたく物めでする。

彦火々出見尊。海にてつり針を失て。海童宮へ尋おはしましたりけるに。龍王めでて。御

娘玉依姫にあはせたてまつりて。聲に成給しに比していへり。

明石。

かうれうといふ事。

晋書。嵇康落西に遊ぶ。くれて花陽亭に宿す。夜琴を彈ず。客ありて來て琴を彈ず。廣凌散といふ。つゝに康に授^レ之。よりてちかひて人にさづけず。異說等あれども大概如此。一のそちのむすめの五節。あひなく人しれぬ物思さめぬる心ちして。まくなぎつくりてさしをかせたり。

行阿云。太宰帥。大中納言任^レ之。九州管領之職也。五節は天武天皇吉野山に入給し時。琴を彈じ給に。神女來て曲に應じてまふ。他人見ることなし。袖をあげて五たびひるがへす。よりて五節と號す。

まくなぎは。みだれとぶ小虫也。蟻蠓也。

日本紀云。忍坂のおほなかつ姫と申后。昔凡人にておはしける時。園に遊び給けるに。馬にのりて行人申やう。いでその蘭一本とこひければ。后。なにの料ぞと問給ければ。山をゆけば。まくなぎ拂はんと云けり。奥州人の説云。旅にも木こりに山へ行にも。まくなぎといふ虫おほくて。顔にも目にもとりつきてむづかしきに。蘭をおりて笠にもさし簍にもつくれば。この虫よらずと云々。此小虫。其形ともしられぬ舂の物なれば。五節たれともしらせて。歌をさしをかせたれば。まくなぎつくりてといへり。されば源氏。つくしの五節が手と見おほせて返歌をつかはされたるにも。たれともしらせぬ心みえたり。清少納言が枕草子に。いでそのまくなぎといへる義。又おなじ心也。所詮たれともしらざる心蠓。

水臬。

一源氏の大納言内大臣になり給ぬ。かずさだまりて。くつろぐ所なかりければ。くははり給なりけり。

大政大臣左大臣右大臣を三公といふ。内大臣は本朝始めてをく。三公くつろぐ所なきに。又内大臣をくはふる心也。

一河原の大臣の例をまなびて。童隨身を給り給。私云。河原大臣は。嵯峨天皇第十二皇子。諱は融也。此大臣童隨身召具する事無所見。御堂殿。長徳年中童隨身六人を賜と云々。又四人被召仕之由。有所見歟。蓬生。

一昔物語に丁掌。こぼちたる女もあり。むかし魯に顔叔子といふ人あり。暴風の夜。隣のやもめなる女わしりてきたり。叔子燭をとらしむるにたへず。屋の板をぬきてと

もして。うたがひをされり。此事歟。是は堂の義なり。堂は人の家なり。又桂中納言物語云々。大夫さる物もなければ。ふるき木丁のかたびらを衣にぬいてきたり云々。是は丁の義なり。所詮兩義也。

繪合。

一えならぬ御よそひにも。御くしのはこ。うちみだり。かうこなどやうのはこども。

よそひ粧装。男女装束の惣名也。くしのはこ櫛匣。うちみだり打亂。宮巾箱正字也。廣蓋のごとし。もろくの調度ををかるゝ物也。長一尺一寸。廣一尺五寸。高一尺三寸。面に花梨木をふせて貝をする螺鈿也。裏に錦をす。置口在之。式之送物之時用之。かうこなどの箱とは。香壺宮事也。御厨子式の調度也。諸香を此つぽに入らる。

一くさぐさのたき物どもくむえ香。またなきさ

まに。百歩の外をおほくすぎにほふまで。

くさくさのたき物とは。沈丁子等一種づつにて。いまだあはせぬ名也。愚按。此義如何。只諸方事歟。くむえかうは。合薰物の

惣名也。またなきさまとは。いまだなき也。又とはよむべからず。

一さしぐしのはこの心葉に。

搔頭。文集。刺櫛。催馬樂。匣。玉。此匣は。立后。

齋宮。齋院。若は五節の童に用之。中古以來やうやく絶たり。其宮のすがた。五節の櫛のごとくにて。えふの入たる匣也。櫛のすがたも同前也。心葉とは組綬。組の惣名也。所詮

心の葉也。行阿云。小忌衣を着之時。かね

にて梅花風情の枝をつくりて冠にさす也。

蘿糸をも付る也。又むすび袋の心ばともい

へり。箱にも袋にも心ばなけれども。入たる

袋の心葉也。袋のくゝりの兩方をいふ也。た

とへば袋の糸の端に。藥玉などのやうに結たるに。文をも歌をも付也。

松風。

一よるひかりけむ玉のやうにて。

夜光玉は楚の臣隨侯。蛇をいけて蛇の報答に口にふくみし玉也。よるひかるによりて夜光の玉といふ也。

一にはかなるみあるじ。

あるじとは飯の事也。諸社祭に飯すへよと催時。上卿詞云。みあるじつかうまつれといふ。日本紀云。主といふ所に先飯といへり。

一野にとまりつるきんだちも。こ鳥しるしばかりひきつけたるおぎの枝などつとにて。まいりあつまれり。

小鳥とは雲雀也。萩の枝に九の鳥を。頸翻のしたをはさみて。ほそき山菅にて三づつに

あたりたる所をゆひわけたる也。永觀年中朱雀院へ備進の小鳥付様は、荻の枝一筋に雲雀五を馬の尾にて鼻をとをして付と。宇治寶藏日記繪にみゆ。此事等。他抄物已下所々にあり。仍略之。

乙女。

一すぢことなりける方のまじらひにて。右大將民部卿などのおほなくかはらけとり給へるに。あさましうとがめいでおろす。をしかいもとあるじはなはだひそうにはべたぶ。

教隆卿説云。すぢことなるまじらひなれども。右大將民部卿同じ座につきて。さか月とり給へるを。かたじけなきよしをことごとくしく申て飲くだす心歟。かならず辭事ばかりをとがむるにあらず。

私云。おろすとは盃の事也。右大將民部卿などの土器とりたまへるに。右大將民部卿な

らぬ人の事に。何となき事をとがめいでおろすも同事也。且彼大内記。世のひがものと見ゆ。をしかいもとあるじとは。凡垣下主。愚按。凡垣下饗歟。

一窓の螢をむつび。枝の雪をならし給。

車胤といふ人。書をよむに油なし。夏は螢をふくろに入て書をてらす。孫康といふ人。家まづしくして油なし。常に雪に映じて書をよむ。枝の雪とは。燈に九枝五枝あるゆへ歟。

一大將左大弁式部大輔右中弁ばかりして。御師の大内記をめして。史記のかたき卷にれうしうけむに。博士のかへさふべきふしうを引いて。

れうしは寮試也。大學寮にて學生の讀書已下をこゝろむる儀あり。博士のかへさふ

とは。學生に難儀のところををししかへし問也。

一御としみの事。

行阿云。御國忌歟。帝のかくれ給へる御年忌歟。としみのいもじをりやくしていへるなり。公繼公記云。試樂事也。其詞に。かく人まひ人のさだめなどかけり。そのよせあれども。次の詞に。經ほとけ講師のさうぞくなどうへにていそぎ給ふとあり。猶年忌歟。

玉鬘。

一天下にかた目つぶれ足おれ給へりとも云々。

漢の代醴泉わきいづ。是をのむ物すがめあしなへの外はみないゆといへり。唐醫華佗といふくずしもあきじりそこ目をばいやさずといへり。これによりて。かたき事をいはんために。なにがしはつかふまつりやめてむといふ歟。

一佛の御中に。はつせなむ日のもとにあらたなるしるしあらはし給。もろこしにもきこえあなり。

長谷寺流記云。唐僖宗皇帝千人の后をもち給。其中に馬頭夫人といふ顔ながくして馬の面に似たり。然而心に情ふかくして。帝の寵愛二心なし。自餘の夫人是をそねみて。此面を分明に見たまはぬによりて寵愛あり。白晝にかたちをみせたてまつらんと相議して。陽州の錦羅國に。後十五日ありて。花見の行幸を申すゝむ。此馬頭夫人。我面の人に似ざる事を歎て。穀城山に居たる仙人をめてこれに歎くに。仙人云。日本國長谷寺觀音。極位の大薩埵也。彼國は是より東方也。彼方に向て祈請しましまさば感應あるべしと申す。仍禮拜をいたし。名號をとなへていのり給に。七ケ日にあたる曉。異僧來て。瓶

水を夫人の面にそぐと思に。心勸喜^{マツル}して。鏡をえてみれば。端嚴美麗になれり。其後后妃の中に交に。上下目を驚さずといふ事なし。是偏に泊瀬觀音の利生なりと悦て。大唐國乾符三年^丙七月十八日。諸侍女をひきゐて明州の津に出て。寶物十種を本朝にくられけり。是等の事を此物語に如^レ此いふにや。

一のしひとへ。

上代には未^レ嫁女着也。俊成卿云。薄衣事也。胡蝶。

一しろき一かさねこしざしなどつぎ／＼給ふ。

こしざしとは引物。錄物の異名也。舊記。饗料こしざしと云。

一右の大將。まめやかにこと／＼しきさましたる人の。戀の山には孔子のたうれまねびつべきけしきに。

髯黒は才學の人なれば。かしこき人の失錯したるたとへ也。此詞たうりなり。れとりと聲かよふゆへ也。倒履とは。くつをさかさまにすと也。孔子むかし盜跖といふ惡人にをそれ。迷惑のあまりに履を倒にすといふ説あり。されば倒履なり。それをたうれといへり。たうるゝにあらず。

常夏。

一ことつひいになくいまめかしうおかし。

琴粒。狛氏十卷秘抄云。ことつき。ことつひ。ことさい。三説あり。ことつきは。人のかほつきなどいふ心也。ことつひは。その姿おきつぼみたる物から。もの／＼しくけだかくこまやかにあひたる也。自餘の曲にをせみたる姿あり。それに同じ。をせむとは。はやさもののからしづかなり。たとへば人のおほ足にはしると。小あしにはしる風情也。又

云。ことつひのことは事也。和琴にあらず。

行阿云。此ことは和琴也。和琴は弓六張也。

巫の梓の眞弓をならして昔のことをいふと云は。神代の起を申也。彼絃打の枝のながさ一尺八寸。それを表して。ことのさきは一寸八分也。

原中最秘抄下

御幸卷

一はねをならぶるやうにておほやけの御うしろ
みもつかうまつらむといふ事

一おちくり色の袴の事

一かたきいはほもあは雪になし給べきといふ事
眞木柱卷

一御めしうどたちてつかふまつりなれたるもく
の君中將のおもとといふ事闕

一いまはとてやどかれぬともといふ歌事闕

一ざめきさはぐ聲といふ事闕

梅枝卷

一孫王の御いましめの二の方の事闕

一右近の陣のみかわ水のほとりになずらへて西
の渡殿の下より出るみぎはちかううづませ給
事闕

一女の事にてなんかしこき人昔もみだるゝため

しありけるといふ事聞。

藤裏葉卷

一ついたち頃御前の藤の花いとおもしろうさき
みだれてといふ事聞

一 文籍にも家禮といふ事

一 たいの上みあれにまうでたまふ事

一 あをきあかきしらつるばみすはうえびぞめな

どいふ事

若菜上

一 當卷立上下事

一 おほいまうち君に先ぜられてといふ事

一 ニ君とそろえていとちかく候ひ給ふくすしな

どやうのさましてといふ事

一 まことのおば君はたゞまかせたてまつりてと
いふ事

一 佛の御弟子の聖だに薪つきけるよのまどひは
ふかゝりけるといふ事

一 しほたれたる枝すこしをしおりてみはしのな
かのしなほどにぬ給ぬといふ事

一 つばいもちゐなしかうじ様のものさるべきか
ら物ばかりしてといふこと

同下

一 明石の御方はことくしからで紅梅ふたり櫻
ふたりあをしのかぎりにてあこめはこくうす
くと云事

一 かへり音にみなしらべかはりてりちのかきあ
はせなつかしう琴はこかのしらべあまたの中
にこゝろとゞめて引給べき五六のはらといふ
事

横笛卷

一 御寺のかたはらちかき林にぬき出たる筍の事
夕霧卷

一 物をぢしたる鳥のせうやうの物といふ事
一 無言太子事

幻卷

一うなる松事

一丁をたてゝかたびらをあげずば風も吹よらじ

といふ事

一さもこそはよるべの水にといふ歌事

一そこにこそ此門はひろげ給はめといふ事

雲隠卷

一當卷有名無實准據事

匂兵部卿卷

一くい太子のわが身に問けるさとといふ事

一賭射還饗事

紅梅卷

一皮笛事

竹河卷

一のちのおほい殿の事

一よそにてはもき木なりとやといふ歌事

橋姫卷

一みちもみえぬしげきのなかをわけ給といふ事

一扇ならでも月はまねくべかりけりといふ事

總角卷

一海仙樂といふ物をふきてといふ事

一紅におつる涙もといふ歌事

早蕨卷

一しなてるやにほの水海にといふ歌事

寄生卷

一なにかゝれるなどいと忍ていひけち給へる

ほどいとよく似たまへるといふ事

一浅香のおしき高坏どもにて粉熟まいらせ給へ

りといふ事

一さいつごろわたしもりが孫の小童さほさは

づしておち入侍にけりといふ事

手習卷

一人々に水飯などやうの物くはせ君にもはすの

みやうの物いだしたればといふ事

夢浮橋卷

一むかし物がたりに玉殿にをきたりけむ人のたとひといふ事

一此まきを夢のうき橋となづくる事

御幸。

一はねをならぶるやうにて。おほやけの御うしろみもつかうまつらんと思給しを。

漢惠帝太子たるときに。父高祖惠帝弟趙王如意を愛してかへんとす。張良がはかりごとによりて。南山四皓をよびて。太子にしたがひて高祖に朝せしむ。高祖のたまはく。羽翼すでになれり。われうごかしがたし。此事歟。

一あをにびのほそなが一かさね。おちくりとかや昔の人のめでたくしける色したるあはせの

はかま。

青にびの細長。吉事に用事不審也。されど末摘花。いふかひなき人にて。色ふしなどもしらぬよしをかける歟。細長は上臈のおさなき時の装束也。又可^レ然人。女御まいり立后の時。おとなしき女房も着^レ之。組にて紐をつけたる物也。色さだまらず。おちくり色。あはせの袴。古弊の事歟。おちくり色は。下地を薄紫に染て。うへを紅にてこく染たる也。此色の袴。上古晴にも用^レ之云々。

一かたきいはほもあは雪になし給べき。

天照太神。素盞烏尊の天にのぼり給しを。いかりまし^くしこと也。さて末のこと葉にも。天のいは戸さしこもり給なんとあり。此事日本紀第一にみゆ。源氏秘抄いろはの加文字部に見ゆ。

藤裏葉。

一文籍にも家禮といふ事のあるべくや。

漢高祖父太公の家に幸して。禮敬をいたさる。家人父子の禮のごとし。太子後に簪をもちて門にむかへて禮せらる。父なれども高祖天下の君なる故也。これによりて太上皇とす。

一たいのうへ。みあれにまうで給とて。

賀茂祭の前の日。御垂跡の石の上にて有_ニ神事_一。これを御形_{ミカタ}と云。

一かたちおかしきわらはべの。やんごとなき家の子どもなどにて。あをきあかさしらつるばみすはうえびぞめなどつねのごと。例のみづらに。ひたいばかりのけしきをみせて云々。

私云。つるばみの事。もろく生物をいふ也。此事殊なる秘事也。色は節に隨て染_レ之。仍あをきあかさしらつるばみとあり。染草。延喜式に載_レ之。圓明寺殿云。至極之晴の時。

可_レ然之人白橡を着す。生物同前。俊成卿說云。つるばみ。うつぶしぞめ。しゐしは。あらはしすみぞめ。こげ色などは。出家の外はこれを歌によむべからず。

つるばみの衣ときあらひまつち山ふしにし日より猶しかすけり。

又伶人光氏說云。舞に切紫の曲とて秘事あり。其時しらつるばみを着云々。是舞の装束各別の橡の事歟。當卷は舞の時のしらつるばみと見えたり。又つるばみとて六位の袍也。黒き色也。

若菜。

一此物語五十四帖内。以_ニ一名_一分_ニ上下_一例事。

漢書帝紀第一卷。高紀上下。後漢書百卷内。呂后紀上下。

日本紀。神代上下。うつぼの物語。源順作。第五吹上。の上。同下。

又立並例事。うつせみタがほは帚木。の並也。自餘推而可_レ知。宇津保物語

第五の並。一まつりの使。二菊の宴。

一おほいまうち君に。せんぜられてねたく覺侍。

私云。おほいまうち君とは太政大臣也。おほきおとど同じ。朱雀院女三宮を心ぐるしく覺しめして。夕霧を致仕のおとどよりさきにむこにとらざる事を御後悔の詞也。行阿云。おほいまうち君は太政大臣也。このおとど。藤裏葉卷に太政大臣になりて。當卷に致仕の表たてまつり給。よりておほきの詞を略しておほいまうち君といへるにや。

一御まへにことに人もさぶらはず。あま君とこそえて。いとちかくさぶらひ給云々。くすしなどやうのさまして。いとさかりすぎ給へりやなど。

染殿の后に。大峯のひじりちかづきまいらせけるに。上古にはいかなる非常の事あれども后などの御あたりちかくは。なべての

男はまいりよらぬ事にて侍けるほどに。鴨繼といひける醫師。御身ちかく候けるに。彼ひじり青き鬼に成て后の御そばにありけるを。からめとりたりけり。

私云。寄木の卷にも。くすしなどのつらにても。みすのうちにはさぶらふまじくやはとあり。

一まことのおば君はたゞまかせたてまつりて。

祖母也。祖母をばおほはし。祖父をばおほちち。仍おぢともおばともいふ。假名の字を略する常の事也。行阿云。物語のおもて。ま

明石尼君

ことこの祖母

ならず。さりながらまさしくおばとみえたり。但若此おばの字は。姫の字なるべき歟。又老嫗と書て。源順あうなと點ぜり。中宮の御年のわかきに對して明石の上を姫君といへる歟。葵の卷に。源内侍のすけをおばおと

とといへり。年たけたる女の儀也。

一佛の御弟子のさかしき聖だに。わしのみねをば。たとくしからず。たのみきこえさせながら。猶たきとつきけるよのまどひはふかゝりけるを。

釋尊入滅之時。十六羅漢。五百大弟子。梵釋四王。九万八千衆生。一心に悲哀し。迦葉尊者滅期にあはずして歎給し事也。法華經云。佛此夜滅度。如薪盡火滅。

一しほたれたる枝すこしをしおりて。みはしの中のしなのほどに給ぬ。

舊記云。蹴鞠入興之餘に。かゝりの枝を折たる事あり。其例云々。又資雅卿懸の枝を腰にさして蹴たりけるよし申傳たり。蹴鞠は震旦國軒轅皇帝作始めらる。我朝には皇極天皇御代にわたれり。天智天皇太子御時。鎌足大臣相共法興寺にて令蹴給云々。又堂上

にて鞠見物之事よのつねならず。しかるを大二條殿公良實或時入興之餘。自簾中出給御覽之由傳之。今此卷。おとゞも宮も。すみのかうらむに出て御覽ずとかけり。是堂上也。又蹴鞠砌にて飲食事。難波方には梨甘子柿浸ばかり也。二條流并飛鳥井方盃酌等可任意云々。當卷云。つばいもちゐる梨甘子やうの物。人々そぼれとりくふ。から物ばかりして御かはらけまいるとあり。飛鳥井などの流の義とおなじ。

一つばいもちゐ。なし。かうじやうの物ども。さまざまはこのふたどもにとりませつゝあるを。わかき人々そぼれとりくふ。さるべきから物ばかりして。御かはらけまいる。

椿餅合藥事。又在河海集。仍略之。そぼれとりくふとは。たはぶれくふ心也。からものばかりしてとは。五種削物風情之肴也。

同下。

一あかしの御方は。ことくしからず。紅梅ふたり。櫻ふたり。あをしのかぎりにて。あこめはこくうすく。うちめなど。えならできせ給へり。

釋云。六位の装束を青衫とかけり。うちめなどえならでとは。いにしへはみなきらをつくべき物をうちたる也。やがてうちどのとてあり。

一いとかどある御ことのね也。かへり聲はみなしらべかはりて。りちのかきあはせどもなつかしう。いまめきたる琴は。こかのしらべあまた手のなかに心とどめて。かならずひき給べき五六のはら^{珠等}を。いとおもしろくすましてひき給ふ。

かへりごゑとは。万秋樂の五六帖半帖より破にかへるを云。こかのしらべ胡笳の調。又云。五丁調。孝行説。五丁調は在_二琴曲_一。

搔手片垂水宇瓶着海波鴈鳴調。又五六のはらのらの字を。ちの字とす。撥之字也。此儀まざる歟。琴は伏羲の作なり。五絃也。宮商角徵羽也。周の文王武王兩絃をくはふ。文の絃は宮に似たり。武の絃は商に似たり。各細し。故に小宮小商と云。

琴圖。闕。

横笛。

一御寺のかたはらちかきはやしに。ぬきいでたるたかうな。そのあたりの山にほれるところ。私云。西山より女三宮へまいらせらるゝ筈。三月とみえたり。しかるを筈はうちまかせては五月の物なり。然而詩に作例あり。

春風吹起簾龍兒。 戢々満山人未_レ知。

夕霧。

一物をぢしたる鳥のせうやうの物のやうなる。鷹の小は雄鳥也。大は雌也。鷹は雄は雌にし

らをあげずば風も吹よらし。

唐穆宗皇帝。宮中の花のさかりに帳をたて帷をかけて。風をふせぎて賞せらる。此事を括春と名づけたり。奉行する官を惜春御史といふ。

一さもこそはよるべの水に。

よるべの水とは。社頭の水也。賀茂にも餘社にも作例あり。此事見河海集等仍略之。

一そこにこそ此門はひろげ給はめ。

漢の代于公といふ人。門をたかくおほきにしていはく。われ獄をつかさどりて陰徳あり。子孫おこるべしと云。後に子于定國大臣になりて。駟馬高蓋の車この門より出入す。

雲隱。

一當卷有_二名題_一無_二其辭_一准據事。

天台に立ところの四教は。三藏教は有門。通

教は空門。別教は亦有亦空門。圓教は非有非空門也。有門をば毗曇論にとく。空門は成實論にとけり。亦有亦空門は毘勒論にのべ。非有非空門は迦旃經にとけり。しかるを毗曇成實は漢土にわたれども。毘勒論迦旃經は天竺にとゞまりて此土に來らねば。名のみありてすがたなし。此雲隱。卷名のみありて詞みえず。此例歟。私云。雲隱は幻の次也。然而根本より此卷なし。ふるき目錄にも。本よりなしとかけり。紫式部自筆とてありけるも。五十四帖と申傳たり。或説云。雲がくれの卷をよみける人。みな道心をおこして出家しけるほどに。宣旨を下されて。當卷ばかりをやかせられけり云々。此義不足_二信用_一と也。

匂兵部卿卷。薰中將とも。

一くい太子のわが身にとひけるさとりをもえて

しがなとぞひとりごち給ける。

法華文句第二云。羅云是瞿夷子。文。同疏記第二云。昔日瞿夷今日耶輸。今日瞿夷乃是天女。耶輸多羅之子羅睺尊者。佛出家之後經六年而誕生。大臣等疑之。耶輸多羅懷子授_レ火。不_レ燒也。

一のりゆみのかへりあるじのまうけ。

賭射還響。のり弓の後。大將かたのすけをひきて。我亭にて種々の響應の儀あり。

紅梅。

一かはぶえふつかになれたる聲して。

皮笛とは歌笛なり。また云。嘯なり。

天慶五年正月七日。引_二青馬_一。酒盃十一巡。王卿有_二酒氣_一。吹_二皮笛_一。今日李部王記。吹_レ嘯之由有_レ之。

又云。天曆之比。廣幡中納言九條有丞等宴會記云。今日公卿等。入興之餘吹_二皮笛_一云々。

又云。自_二故今出川入道相國_一被_レ下_二遣新渡笛於大神式賢_一云。此笛未_レ知_二其名_一。可_二勸申_一云々。此笛中間有_二如_二針穴_一。穴裏張_二羊皮_一。宛如_二薄様_一。人々雖_レ稱_二歌笛之由_一。式賢獨成_二皮笛之疑_一云々。

竹河。

一これは源氏の御どうにもはなれ給へりしのおほいどのの。

夏野を雙岡大臣と號す。嵯峨野のかたはらなるによりて野路大臣といふ。夏野才人なるゆへに。髯黒も又かしこき人なるによりて。彼に摸して野路の大臣と號す。又説。後の大臣なり。

一よそにてはもきゝなりとやさたむらんしたにほゝゑむ梅のしつえを。

もきゝは茂木也。しづえとは沈枝也。又下枝なり。又云。もきゝとは無_レ枝木也。杭字

也。

橋姫。

一御馬にてなりけり。入もて行まゝに。霧ふたがりてみちもみえぬしげきの中をわけ給に。いとあらましきかぜのきほひに。ほろ／＼とおちみだるゝ木の葉の露。ちりかゝるもいとひやゝかに。人やりならずいたうぬれ給ぬ。

柿本人丸歌に。よそにありて雲井にみゆるいもが家はやくいたらんあゆめ黒駒。しげきの中とは。しげき野中なり。一説しげ木の中也。其故はほろ／＼とおちみだるゝ木の葉の露のちりかゝるも。いとひやゝかにといへり。野中ならば。この葉の露心えがたし。宇治の山はこだしげき山路歟。筑波山葉山しげ山思入心なるべし。あらましきとはあら／＼しき也。人やりは人やりのみちならなくにといふ歌の義也。

一あふぎならで。これしても月はまねきつべかりけりとて。さしのぞきたるかほ。いみじうらうたげに。にほひやかなるべし。そひふしたる人はことのうへにかたぶきかゝりて。いる日をかへすばちこそありけれ。さまことにも思ひをよび給ふかなとて。うちわらひたるけはひ。いますこしおもりかによしづきたり。およばずとも。これも月にはなるゝ物かはとて。

永範卿説云。漢書に扇にて月をまなぶと云事あり云々。是は團扇也。日本蝙蝠扇は白延喜一始。入日をかへすとは。還城樂陵王をあやぶめんとす。日のくるゝに。撥して日をかきかへす事也。淮南子曰。魯陽公與韓構難。戰酣日暮。投戈而擲之。日爲之反三舍。これも月にはなるゝ物かはとは。琵琶撥は隱月におさむる故也。

總角。

一海仙樂といふ物をふきて。

此曲。承和御時行幸神泉苑。令伶人乗レ船奏レ樂。爰勅云。一匣於中嶋之間。新作レ曲可レ奏者。笛師清上。篳篥師尿鷹等。一匣中作レ此曲。

一紅におつるなみだも。

紅のふりいでてなく涙には袂のみこそ色まさりけれ。

早蕨。

一しなてるやにほの水うみにこぐ舟のまほならねどもあひみし物を。

私云。しなてるやにほの水海にこぐ舟のまほにもいもに逢よしもがなとあるは人丸歌なり。兩首不相變。不審也。しなてるとは湖光とかけり。

寄生。宿木とも。又は真鳥卷。

一なににかゝれるなど。いとしのびてこともつ

づかず。

藤なみに松の嵐の音せずばなににかゝれる花としらまし。

一せむかうのおしきたかつきどもにてふずくまいらせ給。

ふずくとは粉熟也。稻麥大豆小豆胡麻此五穀を五色にかたどりて。粉にして餅になして。ゆでて甘葛かけてこねあはせて。ほそき竹の筒をして。その中にかたくをし入て。しばしをきて突出して。其勢雙六の調度のごとくまなぶべし。五穀は式たりといへども。五色をそなへたるあひだ色々をみせんとおもふには。青色にははこの草餅。若は米の粉をうつし。花をときて染てかたむべし。黄なる色には栗を色こき荳安にても支子にて。も。そめてかたむべし。赤き色には小豆。白き色には米。黒き色には胡麻たるべし。衝重

に土器をすへて。青黄赤白黒と。かみより次第に。たかさ三四寸がほどすゑひろにもるべし。其中に銀もしは瑠璃のこきなどに。甘露に麝香をすこしすりて入くはふべし。又此五種を。めしに隨てあまづらをそへて。一二づつなどとりわけてまいらす事あり。

一さいつ頃。わたしもりが孫のわらは。さをさしはづしておち入侍にけり。

近曾とは。一日比などいふよりはとをき心なり。又日本書紀云。大山守皇子墮菟道河而没といへり。渡守の子これに准據せる歟。手習。

一人々にすいはんなどやうの物くはせ。君にもはすのみやうの物いだしたれば。

水飯。遊仙窟云。蓮子の盃とあり。藕實是歟。

夢浮橋。法の師とも。

一むかし物語に。玉殿にをきたりけむ人のたとひを思出て。

定家卿説云。宇津保物語のこゝろなり。

漢高祖后呂后納山陵。數百年後。赤眉の黨山陵の寶をとらむとて。これを堀おこすに。死人の形美麗にしていけるがごとし。仍彼惡黨みなこれを犯すること千人におよぶ。異朝には死人の口に玉をふくませて墓にうづむ。玉を含みぬれば形不破也。我朝にも上古の帝王如レ此也。垂仁天皇已來此事止畢。又殯殿とかきてたま殿とよむ也。

一此卷の名の事。

經云。生死涅槃猶如昨夢。一部の種々の説皆夢也といふ心也。此説可レ謂レ近レ理歟。

又云。伊弉諾伊弉冉尊。天の浮橋の上にして。めがみお神となり給し濫觴をとりて。夢の浮橋と此物語の終の卷を名づくるなり。見二

河海集。
仍略之。

原中最秘抄者。光源氏物語先覺行阿法師
所撰述也。補苴紫明水原之罅漏。包羅
和漢典策之舊事。可謂勤矣。今依台命。
芟夷其繁辭。撮取其典要。以便後學之
觀覽。仍詠和歌二章。以擬跋語云。

一本をちゝにそめなす紫の色を見ながらわく人やなき
そこふかき君か心の源をうつす水くきあともたえせし

耕雲山人明魏朱印

右原中最秘抄雖多誤脫依不得類本不能校正

群書類從卷第三百十七

物語部十一

弘安源氏論議

弘安三のとし神無月のはじめの三日の夜。この夕よりふりつる雨なをやまず。嵐のをとさへあらましうなりまさりて。ものむづかしきよのさまなるに。伏見東宮の御かたには。侍從の三雅有位。範藤。兼行朝臣。長相朝臣。爲方。定成などさぶらふなるべし。しめやかなる宵のつれ／＼になぐさむばかりの事をめん／＼に申いだしあらそひて。はて／＼はくじにかきて。この御かたへ爲方もてまいりなどするほどに。明る夜といふは四日なり。こよひ源氏のうちのおぼつかなきことを。二くさづつ問をいだして。

六日論議すべきにさだまりぬ。其よし爲方奉行す。四日はなにとなくてすぎぬ。五日。竹田殿へ御幸せさせたまふ。そのさきにたがひに問題をいだし。見參に入べきよしおほせくださる。なをざりなりしきのふならひにたゆまれて。なにごとをみさたすることもなし。いまとなりていとあはたゞしきこゝろまどひなり。五日酉の時ばかり。廣御所にて二ヶ條の不審をとりちがへて。あすの夜まいりあふべきよしをさだめていでぬ。うとき人にはとひたづぬることもかなはず。我身ひとつにはくらきやみにまよへる心地して。くれやすき日も

ほどなくぬのはじめにもなりぬれば。なにとなくいたづらごとをよみおぼえてまいるも人しくていとおかし。ねのはじめにことはじまる。西の公卿の座のかうしふたまをよろし。みなみむきのつまどのみすをたれて御座とす。左。東のたゝみに西むき。北をかみとす。侍従三位。のりふちの朝臣。長相朝臣。具顯。右はにしのたゝみにひんがしむき。おなじく北を上とす。康能朝臣。兼行朝臣。爲方。定成さふらふ。座さだまりて後きこしめさる。右まづ問をいだし。

一番問曰。右。

康能朝臣

河原大臣の例をまなびて。わらはずいじんぐすることおぼつかなし。

答曰。左。

侍従三位雅有

河原大臣の例。かの傳に見及候はず。但長徳の比の記にかきのすること有にや。こまかに引

見ず。追てかんがへ申べきよしを申さる。右申。長徳の比なを近例なり。ふるき證據侍らむ。菅原大臣といふ説も又はべるにや。ふるきを存ぜられば。くはしく申出さるべし。

左申。長徳の比の記に。ふるきをのせて侍り。くはしきこと猶申出がたし。しりぞきてしるし申べし。

此番の勝負いかにとさだまるべきかといふ沙汰あり。たがひにふかくこの道を熟す。心こめてことばにいださず。彼潯陽の波のうへいまだ曲調をなさざるに。まづなさけありけん琵琶の音もかくやとおぼえてえんなり。深溪にのぞまざれば地のあつきことをしらず。雌雄さだめがたければ。しばらく持にてをかる。

二番問云。左。

侍従三位

光源氏元服のところ。大藏卿藏人理髪仕事おぼつかなし。

答曰。右。

康能朝臣

大藏卿の藏人のこと。藏人頭は理髪をつとむることなれば。大藏卿の藏人といふべきか。藏人頭にて大藏卿をかねたる人。さだめて例侍らんか。かれに准じて心得侍るべきにや。

左申。さらば藏人頭の大藏卿とぞかくべかりける。大藏卿の藏人わづらはし。此物語あまた本見合せ侍るに。なべては大藏卿藏人仕とあり。大かたは大藏卿藏人仕といふにつきて。儀あるべきにや。

右申。藏人の大藏卿とかくべきこと。此物語のならひ。人の名字をかくこと不同歟。本々家につたはれり。大藏卿の藏人見及處なりの文字なくして儀侍らば。くはしく申さるべし。左申。藏人はすべて理髪の名にて侍るやらん。ふるき記録に見をよぶこゝちす。しからば大藏卿といふ人。藏人をつかふまつりけると見

えたり。

右申。理髪藏人のこといづれの記にはべるぞや。

左申。さる事有とばかり見をよび侍れ共。いまだ勤へ覺悟し侍らずとて。猶くはしき事も申さず云々。

此番。ふかき故をかくして。其理あらはならざれば。勝負さだめがたし。たゞし其記をひかずといへども。此儀すでにあらはれぬるうへは。右つよくや。

三番問云。右。

兼行朝臣

なにがしのぬんといへる。いづれの所になずらへたるにや。

答云。左。

範藤朝臣

なにがしのぬん。もし六條坊門万里小路の河原院をいへるにや。

右申。源氏物語は業平をおもひてかけりとい

ふ説あり。それにづきて是をあんずるに。月やあらぬとよみける五條わたりにや。あれたるさまもおもひよそへられたり。

左申。五條わたりのことあれたるばかりにて。准じがたかるべし。夕良のやどりよりほどちかきこと。五條わたり河原院いくほどの事なし。なにがしの院といへるにて河原院とは聞えたり。こだまにとらるゝこともおもひよらるゝ事侍り。寛平法皇京極の御息所を具したてまつりてくるまのたゝみをしきて密通したまひけるに。おくのくるゝ戸より人のをとす。たそとはせ給ふに。とをるに侍り。御息所給はらんと申す。法皇おほせられて云。なんぢ存命のむかしは臣下としてつかへき。生をへだつといふとも。いかでかむかしのれいをうしなふべきとのたまはするに。御息所の御腰をいだく。その後なかばたえ入たまふ。淨藏法師

をめして加持せさせ給ふといへり。靈におかざるゝことも。思ひよそへられて侍るものをや。

此番。右はひとおもてのおもむきをさたして。さらに勝負を執せず。左はひろくかんがへふかくあんじて。勝負を心にかけたり。彼是ころのすぢかはれり。思ひの道へだたりてきゝ處あり。たゞし左靈物。まことによそふるところ故ありとて勝とさだめらる。

四番問云。左。

範藤朝臣

吉祥天女をおもひかけんとすれば。ほうけづきくすしからんこそうるさけれといふ。いかなることぞや。

答云。右。

兼行朝臣

はゝ木々の品さだめに。かみしものしなをさだめ。やさしくたのみ處あり。人々をいひあはせても。まことのよりどころはありがたく。お

らばおちぬべき萩の露。ひろはゞきえなんと
する玉簾のうへのあられなどいへることも。
おもふまゝなることはかなはねば。吉祥天女
をおもひかけても。ほうけづきくすしき難は
ありなんといへるよりほかは。なにともし思ひ
わくかたなく侍り。

左申。たゞ物語のおもてにても。心えられたる
に似たれどもこれもふかきゆへ侍り。四天王
經曰。乃往過去に王ありき。四大香王となづく。
一の女子あり。極好女といふ。吉祥天女也時に四國

に各一王あり。東は藥王。南は藥光。西は明達。
北は福田といふ。此四王極好女を娶んとして。
皆集會する時に。好女忽然としてかくれたり。
これにより。いぬゐのかた四十七万八千九百
里をすぎて。大海の龍王にとられて。大海の底
にあり。そのとき父王四國王大海にいたりて。
好女をえて本國にかへるといへり。おもひか

けたる本説。これに准じ侍るべし。
左方又申處分明なりとてかちとす。

五番問云。右。

定 成

大將のかりの隨身に。殿上のぜうなどぐする
こと。つねの事にあらずといへり。如何。

答云。左。

長相朝臣

かりの隨身に殿上のぜうぐすること。すべて
大將の行粧をひきつくろふとき。近衛司將曹
にいたるまで供奉すべきにて侍れば。源氏又
他にことなれば。殿上のぜうをぐせられける
なるべし。

右申。ひきつくろふ時。府官をぐすること其理
ありといへども。つねのことにあらずといふ
例。さだめてある歟。

左申。西宮記に見えたり。

右申。いかにとしるし。なにと見えて侍るぞや。
左申。くはしく覺え侍らず。府官みな供奉すべ

きよし侍るにや。たしかなる准據の例はべらば申さるべし。

右申。准據之例くはしく存知なしとて申むねなし。此番。又持とさだめらる。

六番問云。左。

長相朝臣

月かげばかりぞ八重むぐらにもさはらずといへる。いかなるゆへにや。

答云。右

定 成

此詞は八重むぐらしげれる宿のさびしきにといへる歌をもて。高祖父伊行が釋し侍り。此うへは餘儀ありとも。これをそむきがたきか。

左申。かの八重むぐらの歌は時代たがへり。定家卿。八重葎にもさはらざりけりといふ貫之が歌をいだし侍り。如何。

右申。八重葎の歌は惠慶法師が歌。拾遺にいれり。拾遺は花山の御選なり。時代たがはざる物をや。貫之は新勅撰のうたなり。おぼつかなし。

拾遺の作者の歌を入たる例と。家集の歌を入たること。ともにおぼつかなし。存知にしたがひ申べきよし。おほせいださるゝといへども。左右無^レ音。仍爲^レ持。

七番問云。右。

爲 方

女御更衣あまたさぶらひ給ふとあり。女御更衣の濫觴なにもてこれをいへるぞや。おなじくこのつゞきに。桐つぼの更衣を。或みやす所とあり。おなじことなるべきか。又各別たるべきか。由緒おぼつかなし。

答云。左。

具 顯

女御更衣のことそのおこりはるかにして。勸出に及ばず。たゞし女御は。雄略天皇七年に稚媛をもとめて女御とすといへり。これやはじめにて侍らん。更衣の事は。漢朝よりことありてはべるにや。漢の孝帝國中の陵上に寢をたつ。寢のかたはらに別殿をたてゝ更衣とす

といへり。同注にのきのしたにて衣をかふる

由見えたり。又史記外戚世家に衛皇后のこと
をいへるにも。おなじく衣をかふる故と見ゆ。

我朝には承和三年正五位上紀朝臣乙魚從四位
下をさづく。柏原の天皇の更衣なり。これぞ始
にて侍る。みやす所のことたしかなる所見侍
らず。さだめて由緒はべらん。物語のおもてに
つきてはみやす所ののち更衣とかき。更衣の
後御息所とかけり。前後不同也。御息所は御や
すみ所とみゆ。更衣おなじく御やすみ所のた
ぐひなり。かれこれの儀かよふにつきて。ひと
つものとや申べからん。

右中。女御更衣の濫觴。御息所のことくはしく
陳申せり。女官十二司の中に更衣みやす所を
いれず。しかれどももし各別の由申されば。そ
れにつきてくはしく子細を申べき由を存侍れ
ども。すでに同躰のよし申侍る。重て難を加る

にをよばず。

此番。右は書籍にくらからず。記録にあきらか
なり。とふ處も深く。こたふることつまびら
かなり。左は短才にて愚蒙なり。あへてをよび
がたしといへども。古人の舊艸をひろひ。先賢
の遺文をもて。かたのごとく勘へあつめたり。
言葉とゝのほりて。しかもこゝろざしあらは
れたるによりて。左右水魚のおもひをなして。
勝負雌雄わきまへがたし。志合ときは吳越昆
弟たりといへるも。かゝる事にや。

八番問云。左。

具顯

にはかにかんがへ引見るところ。おぼつか
き事をしるし出すにをよばず。よて日比の不
審をとひて。身の才覺とせんとなり。わかむど
ほりといへることおぼつかなし。

答云。右。

爲方

わかんどをりは古來の難儀なり。たゞし家々

の説おほしといへども。伊行定家の難儀について心得るに。王孫といへるさらに相違なし。たがへる所なきによりて。他の説をとひさだするに及ばず。

左申。ちかき世の人。儀をたてことばをつくして釋すといへども。所詮はたゞ王孫なり。そのうへ。わかんどをりを王孫とは。いかにしていへるにかといふ不審あれども。是までのさだ入べからず。はしの兵部大輔さだめて侍らん。おくのなまわかんどをりといへるも。王孫の儀相違なきうへは。右方申旨子細なく侍る。

委しく釋したる儀あらば申べきよし。仰出さるゝにつきて。親行が釋する處の王家無等倫。史記殷本紀に。王家をおさむといへり。法華經化城喻品に。世雄無等倫。といふことあり。かの大史公がかしこきあとをひき。この一乘經の妙なる詞を引合て釋せり。これについ

て案ずれば。をはりに國をもて性とすといへるも。おもひよそへられ侍り。たゞし此儀も。せんずるところは王孫の一儀に歸るうへは。子細あるべからざるよし具顯申。仍又爲レ持。

九番問云。右。

康能朝臣

初瀬なん日本にあらたなるしるしみせ給よし。もろこしにも聞えあんなりといへる。もろこしの聞え何ごとぞや。

答云。左。

侍從三位

このこと初瀬の緣起に見及び侍らざるうへは。くはしきこと勘出に及ばず。もし百濟國の事にや。如何。

右申。百濟はもろこしにあらざるか。胡國のきさき舟に寶をつみてかの寺へをくるといへることあり。くはしきことさうなく申出がたし。左申。胡國はもろこし。うたがひあるべからずやいかん。猶もろこしたるべきかのよし沙汰

ありて暫右を勝とす。

十番問云。左。

拾遺三品

卷々にならびをたつること。そのゆへおぼつかなし。

答云。右。

康能朝臣

ならびを立ること。言葉のうつりによりてかけるにや。うつぼの物がたりにならびといふことあり。かれに准すべきか。

左申。うつぼの物語のならび。愚本にみざる所なり。かのものがたりも。ことばのつゞきおぼつかなし。まことに言葉のほひとみゆる所もあり。おもひかけざることをいへるもあるべし。尙書のおもかけをうつせるか。いかゞ。右申。尙書のおもかけ。さもやと覺えはべり。たゞしその外文集の篇も。ことばのおもかけおもひよそへられ侍る事おほし。尙書ひとつにかぎるべからずとなり。

左右の間答無_レ左右_二勝負わきま_一へがたしとて爲_レ持。

十一番問云。右。

兼行朝臣

かはぶえふつゝかにといへる。いかなるものぞや。

答云。左。

範藤朝臣

かはぶえの事。樂器のうちに見をよびはべらず。たゞし天曆の比の記に。宴會のとき諸卿入興のあまり。かはぶえをふくといへり。おなじ日の小一條左大臣の記に。諸卿うそをふくといへり。亦文範卿。節會のときかはぶえをふく。諸人嘲哂すといへるもおなじことにや。文選には金革にかたどるともいへり。又鳳凰來儀すなども侍るにや。

右方とりわき申むねなし。仍左爲_レ勝。

十二番問云。左。

範藤朝臣

朱雀院の御賀は十月。准據の例いづれぞや。

答云。右。

兼行朝臣

延喜六年十月の朱雀院の行幸御賀の例にてやはべらん。

左申。延喜の御賀兩度侍にや。十月おぼつかなし。十一月にてはべるやらん。其度御子の舞にたつことなし。延喜十五年三月の御賀に當代の御子重明親王舞の袖をかへす。源氏中將またそのとき御子にて侍るやらん。大納言昇院の別當にて正三位に叙す。源氏中將同く舞の賞に。上階かたぐちおもひよそへられて侍り如何。

右申處。用捨ことなり。賀の詞につきては左の申所いはれあり。紅葉の賀の詞によりては。右の十月も便あり。准據の例彼はさだめがたしとて爲レ持。

十三番問云。右。

定成朝臣

忠仁公の例になずらへて。白馬見給ふことお

ぼつかなし。

答云。左。

長相朝臣

忠仁公の例にてあをむま見給ふこと。かのおとは清和の外祖にてもてなされ候。此源氏の大臣は。冷泉院おぼしうたがふことあるゆへに。かれになずらへて。内裏にとのゐ所を給はりて。み給ひけるなるべし。

右申。内裏にて見ることは。小舎人下部にいたるまで見侍るらむ。とりわきなずらへられ侍るも。准三后の宣旨下さるゝにより。引わけられけるにやとおぼえたり。

左申旨なし。仍右をかちとす。

十四番問云。左。

長相朝臣

物おぢしたる鳥のせうやうのものといへる。なにといいへることぞや。

答云。右。

定成

とりのせうやうは。婦のためにこくせられた

るとりのやうにといへり。

左申。かの鳥なに鳥をいへるぞや。またくこの義にあらず。せうやう小揚なり。すこしあがれる儀なり。鳥のすこしあがれるは見にくければよそへいへる也。

右申。女にくせらるゝといへるにて。鷹といふことあらはなり。この外秘説なり。

左右勝負さだめがたし。説あらば品々申出すべきよし仰出さるゝにつきて。鳥のせうは。とりの丞やうといへり。竹取のおきなが竹をすてゝ出ることかと申す。かのものがたりもよそへられたること多し。かならずと満座申によりて猶爲_レ持。

十五番問云。右。

爲 方

えわけ給ふまじきよもぎの露を。馬のむちしとあり。たゞかの蓬生の景氣か。また由緒ありや。如何。

答云。左。

具顯朝臣

このこと日比もおもひよらず。又難儀釋にも見及び侍らず。しからばたゞ景氣ばかりを申すべきか。たゞしおもひがけず聞をよぶことあるによりて。この間の後あひとぶらひ侍るにつきておもひよそへらるゝこと侍り。梁の元帝の間のことに。庭草を馬のむちしてといふ事あるにや。もしこのゆへにてはべるやらん。右申。此事相違なくはべり。

元帝のふるまひにはあらず。すべてかの時代おさまりて。茅茨きらず。彩椽けづらずなどいへり。又重難にをよぶべからず。同爲_レ持。

十六番問云。左。

具 顯

六條院にをきて准據の人おほし。致仕のおとどたれの人になすらへたるぞや。

答云。右。

爲 方

致仕のこと准據の例ひとつにさだめがたし。

但光源氏を高明に准ぜば。其時の致仕をや准ずべからん。致仕おほくして。おもひよそへらるゝ人さだめて侍らんと覺ゆれども。間につきて致仕をいだし侍り。醍醐天皇の御時の致仕良世なり。かれとやいふべからん。

左申。まことにこの事致仕をむねとすべし。おほかたは清愼公相似たる事おほく侍るにや。貞信公の子清愼公なり。致仕のおとゞも太政大臣の子と見えたり。かの花の宴の春かとよ。明王の御代四代といへるも貞信公のおもかげあり。そのうへ母宮腹のこと。清愼公母は亭子院の御女なり。藏人少將ならびに頭中將へたる事。女御入内のこと。紅梅の右府廉義公など昇進おなじきこと。弁の少將右大弁をへて丞相の位にのぼる。西宮左大臣と相ならぶことも。源氏によそへらるゝか。たゞし致仕のことむねと准ずべきに。清愼公は天祿元年五月に

攝政にて薨ずと見えなれば此儀相違す。かれこれなずらへて朱雀院の論議におなじきか。右申。清愼公を准ずることまことになずらへらるゝところおほしといへども致仕またむねとあるべし。このほかたがへることも。重難を

くはへばおほかるべしといへども。准據の例ひとかたにさだめがたければとて猶爲し持。

勝負のことさだめらる。左方かちとす。一まさるよしをの／＼さだめて。左勝にて座をたつ。その時鶏人曉をとなへ。鳧鐘かた／＼に對す。なごりあかぬ心地ながら。玉のみぎりに夜をあかすべきにもあらねば。寅のなかばに。人々後日をちぎりてまかりいでぬ。

次日七日の夜いぬの刻に。女房の奉書にて。夜部の論議問答神妙にきこしめされき。ことにかんじおぼしめさるゝによりてことさら仰下さるゝよしあり。生涯の面目一期の喜悅この

ことにあり。みづから身をほむるに似たりと。いとかたはらいたけれども。かたじけなきおぼせの身にあまり。未證爲證。未得爲得のとがをわすれて。自讃の詞をくはへて。しるしをはりぬることしかなり。

ぬての木のにくきかたち四の位の下のしな男山の流具顯やすよしの朝臣のすゝめによりてきゝし所のおぼゆるばかりを十分が一かきつゞけてきたりしを。女房のなかに内々御覽じせさせてのち。御所さままでひろうせられにけるとぞ。なかがきの本手いらすなりぬるくちおしさに。またおもひいでてかきつけぬる。いととおちたる事おほからんと。かたはらいたくおかしながら。はこのそこにおさめて窓の外にいだすべからざるものなれば。人の目をはづべきにあらず。かたゝはばかりおほし。ゆめゝおもひよらずゝ。

光源氏は。式部が心をたねとして。よろづのこの葉とぞなれりける。よの中にある人ことわざしげきものなれば。こゝろにおもふことを。見る物きくものにつけてよそへいへるなり。花にすまぬはこ鳥。山になく鹿のこゑをきくまでも。いきとしいけるもの。いづれかこれをのせざりける。ちからをもいれずして山河をこき。めに見えぬをにがみをもまこととおもはせ。男女の中をもやはらげ。たけきもののふの心をもなぐさむるは。源氏ものがたりなり。この物語。ひろく^宣ひろき^弘年のほどよりいできにけり。しかれども世にもてなすことは。すべらぎのかしこみ御代には。やすく^康やはら^和げるときよりひろまり。くだれるたゞ人のなかにしては。宮内少輔^{伊行}が釋よりぞあらはれける。一條三條のふるき御代には。人のさとりふかくして。をのゝこゝろをわきまへけるに

や。ちかき世となりては黄門定家禪門の筆にぞ。おぼつかなきことを明らめたる。かくてぞこと葉をあらはにし。例を引詩を釋し歌をかんがへける。千里の外もいでたつあしもとよりはじまりて。月日ををくり。たかき山もふもとのすこしちりよりなりて。しら雲かゝるまでおひのぼれるがごとくに。この物語もかくのごとく成べし。小萩がもとをの言葉はみかどのおほせなり。かざりとての歌は更衣のわかれよりよみて。このふたうたは源氏のちゝははのなからひにて見はじむる人もまづよみおぼえける。そもく歌のさま六くさなり。一には

みかどのよませ給へる御うた。

宮城野の露ふき結ふ風の音に小萩かもとをおもひこそやれといへるなるべし。二にはやさしき歌。

見ても又あふ夜まれなる夢の内にやかて紛るゝ我身とも哉といへるなるべし。三にはおもしろき歌。

袖ぬるゝ戀路とかつは知なからおりたつ川子の自らそうきといへるなるべし。四にはものはかなき歌。うき身世に馳て消なは尋ねても艸の原をはとはしと思ふといへるなるべし。五にはひなびたるうた。君にもし心たかはゝまつらなるかゝみの神もかけて誓はむといへるなるべし。六にはこゝろえぬうた。ひたちなるするかの海のすまの浦に波立いてよはこ崎の松といへるなるべし。今の世中いろをたて人の心花になりけるより。あだなるものがたりはかなきことのほのみいでくれば。歌よみの家にはむもれ木の人しれぬこととなりて。有職の所には花すゝきほにいだすべきことにもあらずなりたり。そのはじめを思へば。かゝるべくなんあらぬ。いにしへのすける人。春の花匂ひ秋の月の色につけてものしれる人々ととぶらひて。源氏を沙汰しあきらめける。あるはまりをみると。おほけなき戀にまどひ。あ

るはつきげの駒にいざなひてしるべある道を
たづぬる心々をみもてゆきて。やさしくをろ
かなりとたづねしりけむ。しかあるのみにあ
らず。いさら河とくちかため。いるさの山にか
けて身をうらみ。よろこび身にすぎ。たのしみ
心にあまり。しばのけぶりにつけて民のあは
れをしり。雲井のかりに身をなげき。高砂の老
木の松もはづかしくおぼえ。大内山の月のか
げを。入かたみせぬといふまで。ものがたりに
むかひてぞ心得ける。又はるのあしたに花の
えんを見。ふゆのゆふべにもみぢの賀をきい。
あるはとしのはじめにかぐみの影を見て。か
ねてみゆるちとせをいはひ。中河の水いづみ
のながれをのぞきて風俗を詠じ。あるはきの
ふはさかへ。家をはなれて司をうしなひ。世に
したしかりしもうとくなり。あるは松山のな
みをかけ。よるべの水のみくさをあはれみ。小

萩が露をはらひ。霜ふかきよのきぬくのわ
かれをなげき。あるはみちのさゝはらのわり
なさを人にいひ。身をうづ河にひきて世中を
うらみきつるに。うき舟もみをなげ。宮もおも
ひやるかたなしとなくさみにけりとさく人は。
源氏の草紙をみてぞおもひやりける。いにし
へよりかくつたはれるなかにも。堀川の院の
御時よりぞもてなされける。また今の世には
三のくらゐ藤原のまさありなん。源氏のひじ
りなりける。これは君も人も皆ゆるせるなる
べし。また藤原のやすよしといふ人あり。あや
しく源氏にたへなりけり。まさありはやすよし
がかみにたゝんことかたく。やすよしはまさあ
りがしもにたゝんことかたくなありける。

まさあり。

大藏卿理髪の事。 まき／＼のならびの事。
やすよし。

河原左大臣の例にてわらは隨身ぐする事。
はつせなん日のもとにあらたなるしるしみ
せ給ふ事。

この人々ををきてすぐれたる人々も。さゝた
けのよゝにきこえ。しら糸のより／＼にたえ
ずざありける。これより先に源氏を釋して。難
儀抄と名付たる。こゝにいにしへのことをも。
源氏の心をもしれる人。わずかにひとりふた
りなり。しかれどもこれかれえたる處えぬと
ころたがひになんある。かの堀河院よりはと
しはもゝとせにおほくあまり。世はとつぎに
あまたすぎたり。こゝにいにしへのことをも
源氏をもしれる人おほからず。いまこのこと
をいふに。つかさくらゐたかき人をばめしく
はへざればいれず。その外にこのたびいれる
ひとく。すなはち少將ながすけは。問題をい
だしたれどもこたふることすくなし。たとへ

ば繪にかけるをうなを見て。いたづらに心を
うごかすがごとし。

月影ばかりぞ八重葎にもさはらずといふ事。
とりのせうやうのもの。

藤原ののりふぢは。そのこゝろあまりて詞と
とのほれり。さかりなる花の色ありて匂ひふ
かきがごとし。

吉祥天女。 朱雀院御賀。

ふぢはらのためかたは。ことばたくみにてそ
のさま身にあへり。たかき人のよき衣きたら
んがごとし。

女御更衣。 蓬生の鞭。

藤原のかねゆきは。こと葉かすかにしてはじ
めをはりたしかならず。いはゞ秋の月を見る
に。あかつきの雲にあへるがごとし。

なにがしの院。 かはぶえ。

ふぢはらのさだなりは。いにしへの伊行がな

がれなり。たしかならぬは。よくおぼえぬなるべし。

忠仁公の例にて白馬見給ふ事。

大將のかりの隨身に殿上の丞ぐする事。

源のともあきは。そのさまいやし。いはゞたきざおへる山人のくち木のかげにやすめるがごとし。

わかむどをり。

致仕の准據。

このほかの人々。その名きこゆる。野邊におふるかつらのはひひろごり。はやしにしげき木の葉のごとくおほかれど。源氏とのみおもひて。そのゆへしらぬなるべし。かゝるにいま。あまねき御うつくしみの波。八嶋のほかまでながれ。ひろき御惠のかげ。はるのみ山のふもとにしげくおはしまして。よろづのまつりごとをきこしめすいとま。もろくのことをすてたまはぬあまり。源氏のことをもわすれ

じ。ものがたりのおもむきをもしろしめさんとして。弘安三年十月五日。從三位藤原朝臣。さきの中將藤原の朝臣。右少弁藤原朝臣らにおほせられて。源氏のうちの不審を。問題をたてまつらしめてなん。それがなかに長徳の記をひき四天王經の文をとなへ。胡國のきさをかゝんがへ。御賀の儀を准じ。西宮の説をたて。竹取の翁がことばをいだし。良世の致仕をおもひあて。乙魚のはじめをなずらふるまで。まきまきところの難儀を論じて。十あまり六として。名づけて源氏の論議といふ。かくこのたびさだめられて。みざりゆく水のながれきよく。庭の眞砂の數つもありぬれば。今はものがたりの方東なきふしもなく。難儀のあらはるるをぞいたみける。夫まくらことばの花にほひすくなくして。むなしきなのみ筆の海のながれいやしきをかこてれば。かつは人のみゝ

にをそり。かつはものがたりの心にはちおもへど。たなびく雲のたちゐ。鳴鹿のおきふしは。ともあきがこの御世におなじくむまれて。この事にあへるをなむよろこびぬる。定家なくなりたれど。ぐふんじの事とゞまれるかな。夏びきのいとたえず。まきのしたばの色かはらずして。すがのねながくつたはり。ふでのあとひさしくとゞまれらば。源氏のことをもしり。物語の心をもえたらん人は。あきらけき朝日のかげをみるがごとく。このときをあふぎていまのかしきをしらざらめかも。

おなじ年十月廿二日。極熱の草藥おもひたちて。こもりゐたるつれに。わすれがたくおもしろかりしことの。つきせず心にかかりて。いにしへのはかなしごとを見るついでに。おもひよそへらるゝ事おほければ。かきにせたるなり。我身のゆくゑを。深山木

のかげの山人とまでもたとへぬるは。いとかたはらいたく。わびしけれども。さりとは人なみにめしくはへられたりしかばとて。しるし入ぬるになん。前後ともに心ひとつにかきつらねて。引かくすべきこゝちなりしを。なかがきはおもひかけず。御所ざまにとゞまりて。むげにあとなきも本意なくて。又おもひ出てかきてをきぬる。ふたつながらいかにおかしき事おほからむも。いとつゝましくわびしきそゝろごとどもなり。後にはひきやりて火になげ入べし。

ともあき

右弘安源氏論議以屋代弘賢藏及流布印本校合畢

群書類從卷第三百十八

物語部十二

仙源抄

長慶院法皇御抄

源氏物語色葉聞書之事。

伊

いはほも山も残るまじう。長阿含經ノ説。

いと。最也。〔文集。〕

いとど。〔同上。〕いよ／＼の心也。いとどハ聊替

歟。

いちハやう。最强。早速トモ。スミヤカナル心。

いちめ「あき人」。市女〔イナシ〕「也」。商人。〔イナシ〕「市女」筈

キテ物ヲウル鬻女也。

いかにあたる。五十日也。子生〔産ノイ〕テ五十日ヲ

祝。百日ヲバモ、カト云。柏木ニモ薰君イカ

ノ程ト有。

いかめし。認也。文選。又可畏。魏々。私。威猛。

いがたうめ。伊賀刀女也。中媒也。タウメト

ハ齋宮寮部女狐也。〔或云。〕ヲマツリシケル

者也。イナリノ返坂ハ。カレガシケル〔ツクレルイ〕トナン。

いぬき。犬公也。昔上ワラハヲバ何きと云リ。

世俗ニアネキ。ヲデキト云同心。古ノ犬公ガ

飼シ雀ノ子飛アガリシヤウシト思ヒシ。

いかき。辛。カラキ也。忿怒ノ心。六條御息所付

給時。夢中ニタケクイカキヒタブルト有。愚

案。イカノシキナド「云」世俗ニ云言歟。

いたづく。勞也。煩也。イタハリカシヅクニモ

用。心ヲイタヅカ〔ハ〕シウスルトモ云リ。〔ニイ〕〔用イ〕

いたがき。板ヲナラベテ。フチヲシテヨリ付〔ウチイ〕

たる物也。〔かきイ〕

いたしや。傷也。〔又〕勞也。〔可〕隨所。痛歟。〕

いたう。甚。傷〔万〕。痛〔万〕。

いさめ。諫〔也〕。諫諍。〔禁。〕〔イサメ〕制ス。

いどミ。挑。

いりあや。入綾〔也〕。舞ノ手也。舞ニ〔綾引手

又〕アヤドル手トテ有。

いそしく。インガハシキ也。又カルラカナル

心。近江君ヲ云リ。

いつへの扇。冬ノ扇也。〔ニアリイ〕三重ノ扇ノ所ニ委ア

リ。手習ノ君ニ成タルカミノ事。五重ハ餘

アツキト也。

いづミ川。木津川也。元ハいとみ川と云。〔ミイ〕

いなび給。辭也。

いらゝき。寒鉢也。烏ハダ〔ウデイ〕ハツ心。〔ノ立タルケシキ也イ〕

いぶかし。未審。不審。ヲボツカナシノ心。

いきたらじ。不生也。〔玉かづら。〕

いへかまど。家〔也〕。烟也。

いまめかし。今也。

いふとうじ。主人女。〔遊仙窟。〕

いろう。求子。神樂。二名。

いんつくる。印也。〔眞言。常夏。〕

いむ事。戒也。私〔云。〕物ヲ禁ズルハイム也。

いきす玉。〔私云。〕生靈也。御息所靈也。〔遊仙

窟云。窮鬼故調人。注云。魄與鬼通云々。〕

いつかしき。〔私云。〕嚴〔字〕也。嚴重ノ心。

いつゝのにごり。五濁也。

いミじく。忌也。稱美ノ詞ニモ云。

いひそし。云衍。シラヌコトヲ云歟。云殺シヌ

バカリト云心。〔云殺也。シヌ計云也。又云。是

ハ心別也。凡此詞万事ニ渡ル也。〕

いたち。居立也。居起。東屋。ヒタチノ詞。い

たちの侍らんとハ。マカケサシタル心。

いうなる。優也。

いつき。イック。カシヅク心。寵也。古今ウツクト

有。イックシク。「嚴。是ハ嚴重莊嚴心也。可レ隨レ所。」

いうそく。優息。又族。又ハ優俗。有俗。所ニ可

依也。「有識也。又右族也。華族ナド云心也。」

いますからうや。ヲハシマス心。

いとゞしく。ハ、木々。ツカサ位。イチ

ハヤキ心。

いとなく。無暇也。無隙心。「空蟬ニ。」春な

らぬ木のめもいとなく。

いわけなき。幼稚「形」。無意分。日本紀。所ニ

可レ依。各別。

いふよしなう。無云由。詞も不レ及ノ心。

いでたち。世に出立マジル心。「旅ナドノ出

立ハ各別也。」若紫ニ明石入道ヲ云ニ。大臣

ノ御後ニテ。出立モスベカリケルヲ。「私。」

是ハ出身ノ心。

いまやう色。今様色。聽色。何も紅也。「紅ニナ

ラベテハゆるし色ト云ヒ。紅ニ擬スル時ハ

今様色ト云。私云。モシ紅梅ノ直衣カ。」紅ノ

ウスキ也。えゆるすまじとハ。餘わか／＼敷

と云心也。祐子内親王。後朱雀院ノ御女。紅梅ノ十二ヲ

奉ヲ内ノ御使ニ中納言局ノ女參テ。ウツク

シノ今様色やと申ケリ。

いさまき。意氣卷。息卷。いミじく目出心。イ

カル貞也。又ムセカヘル心。「愚案。イヅレモ

不ニ相叶。猶可レ尋。サリトテハ紫明ノ義ニテ

コソアラメ。」

いもい。齋。精進。程へて來給へるに。かたふ

たげてと有。「文集云。十三年來坐對山。唯

得ニ無事。化ニ人間。齋時往々聞ニ鐘笑。一食如

何不レ可レ閑。」

いちちちてうに／＼ちのをたてゝ。壹越調ハ

土用ニトル也。撥ノ絃ハ調子ヲツカサドル。

宮ノ絃ヲ云歟。宮ノ絃初ノヲ、云ハ。絃一越

調。箏ハ八絃ニテ。發合手ズサミニモアレバ

ナリ。

いましめ。警命。誠告。ツゲシラスル也。明石ニ。イマシメノ日ヲスグサズ。此由ヲツゲ侍也。入道ノ夢ノ告ヲ云也。可レ依_ニ所_ニ也。

いそ寺。若菜下。イソ寺ノ御ズ經。寺名不_レ用。五十ノ寺ナリ。源氏ノ四十ノ賀ニ四十寺ト云同心。

いびき。鼾睡。槿卷。桃園女五宮ヲ云。イビキトカキハモシラズト云。

いてハなち給。横笛ニ。源氏若君見給テ。歌ニ。コハ捨ガタキ物ニゾ有ケル。私。弓ニテ矢ヲ射放心歟。

いでぬん。出居。榊卷。御息所ノ詞ニ。イデインガ今更ニツハマシト有。出てゐ給心也。

いミをだに心の鬼に。若菜下ニ。茵ノ文ノ所ニ小侍從詞。サバカリノイミヲダニ心ノ鬼ニト有。忌字歟。人ノ思ハンコトヲイミハバカル心歟。

いよす。柏木ニ。イヨスカケワタシテトア

リ。伊與スダレナリ。

いひくたさまほし。早蕨ニ。中君勾宮へ迎ラレ給所ニ薰歌。マホナラネ共逢ミシ物ヲト云クタサマホシト云詞。「云」ケツ心。言腐。いしぶし。「石臥。小魚也。」鯉。常夏。近き川ノイシブシ。西川ノ鮎。

いで。請心ニヤ。又さてもなど云心也。「厭乞。ヲシテコフ。俗ニ人ニシツコク物ヲ乞フ。いで乞ト云也。」

いて人ハことのミそよき月草のうつし心ハ色ことにして我をのミ思ふとあらハ有へきをいてや心ハ大ぬさにしていざよふ「月」。やすらふ也。猶豫。「山ノ葉ヲ出ントスルヲ云。十六夜月ヲモ云。タゞ月ノサシ出タルヲモ云歟。」

いさけき。吉武者也。

いさおし。忠有也。

ぬなミくつして。居並屈スル也。苦スル心歟。

「又ハくんじてトモアリ。」

ゐんふたぎ。掩韻。古詩ノ「韵ノ」字ヲフタギ

テ下句ノ末字ヲ何文字ト推シテ勝負ニスル事。

いやく。恭。「イヤ／＼シ。日本紀。」ウヤ／＼

敷也。

ゐんしども。

院司共。漂落。判官聽。召次所。トラザムライ別

納所。御服所。進納所。(特イ)所衆武者所。御隨身所。

路

ろなう。無論也。柏木。衛門夕霧ニカタル詞。

侍ケレバロナウト有。

六十卷。天台宗本書也。「本書卅卷」。玄義。文

句。止觀。各十卷。天台大師御作。「末書卅卷」。

釋籤。疎記。弘決。各十卷。妙樂大師釋六十卷

ト云。文。北山僧都所ニテノ事。

ろうせらるゝ。嘲哂。かるめろうせらるゝと

有。「輕弄也。又輕論也。」

六十僧のふせ。大般若ノ義歟。又七僧も六十

僧ノ中ニ可有之歟。其例略レ之ナルベシ。

半

はうちすきて。齒透。

はかりごちて。人ヲハカリゴチテ。ヘカリゴツ詐。「私

云。」アザムク心カ。

はかせ。葉風ニソヘタリ。博士也。藤のうら葉

ニ。藤内侍ノ返歌ニ。ハカセナラベテハトキ

コエタリ。折桂葉風ニ。博士ヲソヘタリ。又太

刀ヲ云。早蕨ニ。中君匂宮ヘ渡給所ニ。薰ヨリ

御前ヘハカセナド奉給ト有。可レ勘。

はれたるまミ。腫眉也。空蟬ニ有。末ツムニ

モ腫ル也。其外ハ晴也。

ばんそう共ハありて。柏木ニ伴僧共。又夕霧

ニアリ。ハソウドモ。

はづしてん。さてはづしてん。取ハヅシテン

ハト云心。

はなとり。春梅ニ鶯。夏ハ橘ニ時鳥。「是ヲ鶯

ト云也。定家卿說歟。」但是ニ不限。

はなじろめる。乙女ニ「鼻白」。臆シタル心。鳴

呼ノ氣色也。

はなふらせたるたくミ。ヒダノタクミガ花

ヲフラセタルコト有。

はなちがき。放書。文字ヒロイ共云。童文字一

ヅ、書ヲ云。手本放書ヲモ云歟。〔私云。手本

ヲ放レテ心ノマヽニ書ヲ云歟。〕

はらから。兄弟。〔日本紀。同服。〕

はらきたなき。腹グロキ也。マヽハヽナンド。

ばんすんらく。万春樂。踏歌ノ曲。

ばうそくなる。〔もてなし。〕傍側。飽足。可

レ依ニ所ニ。

はんさいの帶。班犀帶。四位五位ノ人常ニ用

レ之。公卿服ハ烏犀帶。

はぐゝむ。育。

はまのたち。濱館。

はいをくれ。灰。

はふれ。流離也。放埒。私。ヲチブルヽ心。身

ハ捨ツ心ヲダニモハフラサジ。

はいあひがたき。灰難^レ合。榎柱ノ歌ニ。カク

バカリ灰合がたき紫^ニト有。紫〔ヲ〕染ニ〔ハ〕

椿ノ〔^{ライ}焼テ〕アクノコト也。〔古歌云。〕柏木ノ

いはた染てふ紫ノ逢んあハじハ灰ノ心ニ。

はうとう經。方等經。

はうし。拍子。

はる秋の行幸。朝覲也。禮記ニ。春見云〔朝〕

秋見云〔覲〕。

ばう。春宮坊。桐壺。

はへある。有^レ榮。有^レ光。無^レ見。ハヘナシ。

はすのミ。蓮子。藕實。手習ニ。スイバンハス

ノミヤウノ物。蓮子ノ如ナル青磁盃也。〔遊

仙窟ニ蓮子トアリ。コヽニテモ其心歟。〕

はこ鳥。万。杲鳥。春鳥。容鳥。若菜ニ。深山木

ニねぐらもとむる杲鳥もいかでか花の色に

あくべき。或カホ鳥。

はぶかせ給。省。羽茸。乙女ニ。紫上六條院へ

移給時。世ノソシリモヤト羽茸給。榎柱ニ。

踏歌ノ參ヲ云ニ。六條院ニハ所セシトテ羽
ブキ給。若菜ニ。御息所物ノ氣ニ出テ。コト人
ノ云ヲトシメンダニハブキカクシ給ヘトコ
ソト有。此ハブキハ只ミカクシ給ヘト也。

ばい給ハズ。「奪也。」夕霧ニ。アリシヤウニモ
バイ取給ハズ。雲井鴈ノ文「ヲ奪取シ事」也。
ハ木々。ソノ原ニハ、木々森有。歌アリ。
「木シゲクテ杜ノ下ニテハ有トモ見ヘヌ也。
又説ニ。筈ニ似タル木アリ。近クテ見レバウ
スル也。」

はえなし。無レ見。榮光絶無。

はしたなき。無レ庶。半無。非常。私云。カラクハ
デガマシキ心也。タケクコハキ心可レ有歟。可
レ依ニ所ニ。「はしたなる女ナド云ヘルモ。人
の多きイマダ世ノ常ノ人ニ及バザル也。中
半ノ心也。」

はかなき。無道。日本紀。無レ墓。私。アダナル心。
はしたなめ。鬼鬼。日本紀。ハヂシムル心。ハシ

タナゲニトモ。イマシムル心モアリ。
はださむき。膚寒。將寒。「膚寒ハ」極寒入^{トアル}ニ
骨ニ。「將寒ハ」秋風大入。

はるの鶯さえづる。春鶯囀ト云舞。一越調也。
はなのなかやどり。蓮ノ世界。

はつしやう。八省。中務省。式部省。兵部省。治
部省。刑部省。宮内省。大藏省。民部省。神ニ
八省ニ立ツバケタルト有。「愚案。大極殿ヲ
云ヘル歟。」

はちふく。發服。蜂吹。發服ハラダツ也。若菜
ニ。女三宮侍從ナニシニ參ツラントハチフ
ク。松風ニ。宿間ハナ打アガメテ。ハチフキ
イヘバト有。紫明ニ蜂吹ト云ハ「蜂ヲ」拂心
也。是ハ澄テ可レ讀。

ばうがね。匂宮坊がね也。春宮ニ可レ成シタ
デト云心。伊勢物語ニ。ムコガネト云ゴトシ。
はなまじろぎ。はなまばゆけれど。紅葉賀。追
從シタル心。追從シタル人ニハ。鼻ノ動ホヤ

メク也。目ノ動ラメマジロギト云ガ如。

はにふのこや。赤土小屋。カベヌリタル家也。

はやう。早。手習ニ。尼君ハヤウイマメキト

ハ。ソカハリシサカリヲト云心。ハヤウスミ

シナド云心。昔住シ所也。〔以前ト云心也。〕

はくこう。白虹貫日ヲ。〔漢書文也。〕史〔記

ニモアリ〕。荆軻慕_ニ燕丹之義_一。白虹貫日。太

子畏_レ之。燕丹太子ノ故事。應邵曰。燕丹太子

養_ニ荆軻_一。令_レ刺_ニ秦王_一。精誠感_レ天。白虹貫日。

はげまして。勵。思カクル心。

耳

にうがく。入學也。

にのまぢ。二町。次なる心。

にし川。西川ヨリ鮎奉ル。桂川也。常夏。

にぎハハし。富饒。又賑也。〔等木雨夜物語。〕

にこやか。濃艶。梅が枝。〔完爾。ニコノ笑ト

云。〕

にバめる。服衣ノ鈍色メカシキヲ云。

にげなからず。〔不脱離〕無_ニ似氣_一。不_レ無_ニ人間_一。ハ私云。

非_レ無_ニ似氣_一歟。〕是ハ似相たる也。ニツカハ

シキ心。

になく。無_レ二。第一ト云心。無_レ並也。

にほハし給ハざりける。若菜下。兼テイハヌ

ト云ル心也。

にげついたる。似氣付。玉かづらのきぬくバリ

の所ニ有。其人ニ似相たる〔ヲ〕知ント云心。

暮

ほをゆがむ。方曲也。中川ノ方違。姫君ニ權ヲ

奉給時ノ歌ヲ。ホウユガヲテ語ヲ源聞給事。

ほとく。殆也。

ほそびつめく物。絹櫃。

ほとけおなじちやうだい。頂戴。

ほんさい。本妻。本才。夕霧。一條宮ニ通給所

ニ僧都ノ言。

ほがらか。朗。アキラカノ心。

ほうし。法事。又法師。〔所ニ隨ベシ。〕

ほそなが。未通女ノキルカリギヌ也。〔狩衣

ノくびかみノ様ニタテ、ミハタツノ物也。
水源ニ云。未通女着用也。然共可_レ然人。若ハ
后達女御〔參時〕ヲトナシキモ着用也。組ニ
テ紐ヲ付ナリ。

ぼきたる。摸規。メヅラシキ也。

ほぐ。反古。ホングトヨムベシ。

ほうさうじ。法成寺。^{イナシ}法性寺。宇治邊〔也。用
之。又法成寺。〕

ほそ殿。弘キ殿〔ノホソ殿。廊。〕秘説也。

ほうけづく。法氣付。吉祥天女。佛法めかし
く。醫師毒ナド、テモノキライセント也。

ほのきめ。髻髭。ホノカナリ。〔側。同。閑同。〕

ぼむじとかいふ。梵字。若ナノ上ニ。柏木ノ
コトヲ云。

ほけたり。ホレタルナリ。

ほとく敷。驚々敷。宮作るヒダノ工ノテウ
マ

フトホト／＼シカルメヲモ見哉。

法界三昧普賢大士。大唐西院和尚禮拜ノ曰。

南無法界三昧普賢菩薩トアリ。

ほろけ。ホロメキタル心。名香ニ〔蜜ヲマ
ジヘズシテ〕ホロ、ケタルトハ。^{コトイ}蜜ハ生類ノ

〔成〕故也。カハキタル心。

ほつえ。木末。万。含_レ花枝也。

邊

へ。御へ。尊也。定本ニハ此句ナシ。古今ニ御

ヘト云ル。大嘗會ノ義也。何もまつる心也。

へちなう。別納。納所ナドノ居所也。夕顔ニ。

ベチナウノ方ニフサウシナドシテンベカン
メルト有。又同所ナガラ各別成心。

へんぐえ。昔アリケンヘンゲ。三輪明神物語

〔并江記〕ニ。糸ヲ付行衛ヲ知ト云事有。

へんもハなれぬ。弁尼薰ニ。東屋ニ故北方ノ

御メイヘンモハナレヌ中ライト云。邊歟。若

又縁ヲ云歟。本ニテ可_レ勘_レ之。

へいしなどとらせ。瓶子。シヤク取也。

へん。篇。橋姫ニ。琴ヲシヘ。碁打。ヘンツキ

〔オホ也イ〕
大君。中君ノ事。

べいじう。倍從。舞。

登

とゞろかす。轟。動同。

どち。共也。

とぢて。マツリゴト閑テ。

とを君。遠君也。せり川大將。紫明ニハ大君

ト有。〔オボツカナシ。〕

とよむ。響。

どうなき。無レ動也。〔ウゴキナク也。〕

とうで給。取出給也。

とうきやうき。東京錦。〔唐ニモ〕東京西京有。

〔東京ノ錦スグレタル歟。是ハ日本ノ錦也。

からのト云ヘルオボツカナシ。舒明御宇ニ

摸用ト云ヘリ。〕

とこよ。常世也。〔日本紀。〕

としまかり入て。年寄テノ心。

としミ。御としミ。試樂也。〔御賀也。徳大寺

公繼公ハ試樂也云々。或説注云。御年滿ト書
レ之云々。〕

ところせき。所狹也。

とゞめじ。〔停也。惡事不可レ留ニ於後代也。

然バとゞめじと可レ讀。但定本ト、メタル

ト有。〔但極樂寺入道所持本定家卿自筆ニ。

とゞめたるトアリ。〕是ハ澄テ可レ讀。〔愚案。

濁テヨムモ誠一義也。然レドモ定本ニハ〕人

ノ心マケタル事ハアラジト有。〔定家卿説ニ

ヲキテハ無ニ異論一歟。〕

とけて。ツカサトケテ。解官也。トケタリシ

藏人トアリ。

とをつら。十列也。住吉詣。童隨身十列。樂人

十人グシテ。社頭ニテ求子ナド舞事有。

とじき。屯食。トンジキト可レ讀。ツ、ミ飯ト

云。下膳ニタブ饗也。

といで。取出。外出。常夏ニ。姫君ヲスコシト

イデ。外出也。又物ヲ取出ス事。〔兩義各別。〕

とりゆ。取由。箏ノ左手ニ有。七爲ノ紋也。琴

ヲホムルニ由ノ音フカクト云リ。

とうをひねりて。双六也。近江君簡ヲヒネリ

テ。セウサイノトコウナリ。〔筒。双六ノ賽

ヲ盛ル竹也。〕

とのもりのくそ。殿守屎。其所ヲモル人ノ名

也。手習ニ。トノモリノクソト有。女ノ名也。

古今ノ作者ニモ有。

とこ。獨鈷。三鈷。五鈷。佛具也。北山ノ僧都

トコ奉ルト有。

とぢめん。閑。やミトマル。

とう給ハぬ。問不_レ給也。〔不_ニ問給。トヒ給ハヌ

也。〕若ナニアリ。

とミ。イツギト云心。トミノコト。俄ノ仰也。

ときよくて。時好。源内大臣ト對面ヲ云。

とし。〔初音ニ。〕千年ノカゲニシルキトシノ

ウチノ祝ゴトシテト云。ヲノガトシナリ。

ときぞ共なく。いつ共なき心。

遅

ちうげに成ぬ。中間也。

ちえだつねのり。千枝常則。二人繪師也。高

明録^{〔高イ〕}ニアリ。

ちやうじ染。丁子染。香の黑色。

ちかきまもり。近衛大將。

ちすのさま。帙簀。チスノカザリト云リ。〔竹

ニテすヲツクリテ錦ナドニテヘリヲシ面ニ

モツケテくみノ緒ヲツクル也。經ニカギラ

ズ書籍ニモ用_レ之也。〕竹ヲ簾ノ如編。錦綾ヲ

裏ニ付テ經書籍ニ用也。

ちりがましき御丁。塵ノツモリタルト云心

也。又フリタル心。

ちりぼい。玉カヅラニ。筑紫ニテハ口惜カラ

ヌ人。京ヨリチリボー來。〔私云。〕チリバミ來

也。〔サシモナキもの。〕チリニマヂル心。

ちやうこぼちける女。塔ト書タル實ノ居所

ニアラズ。堂ノ字用也。顔叔子ノ事也。カツ

ラノ中納言物語ニ。木丁ノ帷ヲキヌニヌイ
テキタル女也。

ちやうぶそうし。長奉送使。齋宮司人也。天
曆御時。萬代ノ始ト今日ヲ祈置テ今行末ハ
神ゾシルラン。

ちしのへう。大臣上表也。前官致仕大臣。年
老テ官ヲ返スナリ。

ちうさす。柱。琵琶左手。ビワノ柱ハ四也。四
絃ヲ一柱ゴトニノセテ。各四々十六也。一乙

行上一柱。口下七八二柱。凡十比ト三柱。トツ^{穴藏}乞

天也。四柱^{突乞}。一柱口下七八ニ凡十比ト三

ニシユヒコンセン。四ニト乞之也。一乙行上。」

ちしき。地敷。若ナノ上ニ。イシナドハタテ
ズ。御チシキ四十枚ト有。唐筵ニ大文高麗ベ
リ付たる物也。〔ヒロムシロ。〕

里

りよの歌いとかうしもあはぬ。呂。定本ニハ
律ト有。〔ソレニ就テ延元後醍醐宸筆ニテ。梅

枝此殿ハ。〕呂ノ歌勿論也。律ハかうしもあ
はぬ〔を□ニテヨクあひタルト云ヘルナリ
トシルシ付サセ給ヘリ。〕也。^{イナシ}此説用ベシ。
りうじのもてあそび。りんじ共有。リウジカ
クハ臨時客也。

りんじのまつりのてうがく。臨時祭調樂。第
本。臨時祭十一月中午賀茂ニテ可有樂ヲ。

内裏ニテ調給也。臨時ノ祭ハ寛平九年十一
月ヨリ始。北祭ト云。南祭トハ八幡ノ臨時ノ
祭也。

りんので。輪^{（輪イ）}説。樂ニ珍キ手ヲ引ヲ云。筭
琶。

怒

ぬかづく。額突^ハ也。又額付。又〔稽首。

ぬき川。貫川。催馬樂。律。

ぬさ。幣也。麻。旅行時道祖神ヲ祭テ。錦錢散

米ヲマクヲ云。勸^レ酒祭^レ神。人ニモ勸^レ之。餞
送ト云。

ぬすまハレ。末ツム「ニ」。ヌスマワレ給ヘト云心。ヌスマレ出給ヘト云ハ。吾身ヲ人ニシラレズヌスミ出ルナリ。

留

るり君。玉かづらの童名。

るい。親類也。大夫監ルイヒロクトアリ。

越〔於合。私云。をハ音緒平聲。おハ音尾去聲。以此平去也。響自餘之詞モ可レ知也。〕

をしツ、ミ給へる。文ヲタテフミタル心。水

原ニ結たる文ヲツ、ムト云リ。宸筆ニ「テ結

ビタル文ヲツ、ム也ト」カ、せ給へる也。

をのがじし。各競ヲノガシ、「日本紀。」各自身。各自恣。

「万ニハ」各寺師。我もくノ心。又我トウジ

ノ心。秋風ノ四方ノ山ヨリヲノガジシ。

をちくり色。落栗色。コキ紅ノ袴ト云々。但紫

ト云説有。紅色ノ常ヨリ黒ミタル也。晴ノ時

用也。「普通紅ヨリハ少シ黒キ色也。古ハ晴

ノ時用之云々。」

おかし。可レ咲。又比興なる共。所ニ可レ依。ヨ

キ事珍事ホムル詞也。小野篁記ニ。ヲカシキ事ヲヤサシカラマシト云「々」。此詞多ヲロキ事ヲユ、シト云ガ如シ。ウラヲ返云也。

をよづけ。助及。日本紀。

おもやう。而立。面目アル躰也。

ありびつ物。折櫃也。

おほそう。大惣「也。大總也。幕木。」

をち。川ヨリヲチトハ。アナタナリ。

をこの物。ヲロカナル者也。

をすかるべき。ヲンキ心。追付。ヲイスガル

トモ。

おいらく。老也。

をいすがいぬれ。ヲイツ、キタル心。追過タ

ル心。

おいこれハまして。ゑいと云心相通也。〔也又音カヨヘリイ〕

おはさうず。ヲハシマス也。

おぼれぬたり。溺。おぼれ同事也。ヲイサキ。

「をいさき。苗。ヲイサキ。小大。」

おいささこもれる。

生前〔以下十九字イナシ〕寵窓ノ内。苗ヲイサ

キ。生先。私。ヲイサイハ老テ若ヤグ心。

おほどか。義穂穂。ヲホドカ。おほどき相通。

同心。〔穩也。又おほめきたる心トモ云。愚案。

常ニハをいどかト讀ヲホドカニシテ之かヲボツカナシ。下

説又不審。令席ニ。義穂。情理難レ通云々。〕

おそき人。宿木ニアリ。ヲソロシキ人也。

をぞまし。形遠。文選。ヲズマシ同。ウトクヲ

ソロシキ心。

〔おほち。〕大路也。〔万。〕御路。〔日本紀。〕

おなじかざし。一族ナドヲ云也。

おとしかけの高所。東屋ニ有。紫明ニ自レ高

至レ低。道ノ凸凹心也。〔道ノあしき也。〕

おほひちりき。大筆策。一尺八寸。舌一寸八

分。天台大師ノ御作。〔今無。〕末摘ニ。大ヒチ

リキ。サクハチト有。〔筆策ニ大小二種アリ。

又立筆策。横筆策アリ。〕

をの〔れ〕ら。己等。若菜〔上〕ニ有。

おほえどの。大江殿。〔わたなべノ橋ノ東ノ岸

ニ昔駢樓アリケリ。今モ樓ノ岸ト云。おほい

どの。おほきどのナド書タル本不レ可用之。〕

おまし。御座也。寢殿也。史記ニハ薙也。

おきなか川。興中川。又興長川。名所ナリ。〔古

抄物ニモ國タシカナラム所ト見タリ。〕

おくまり。奥也。

おほしくだす。思碎。思下也。

〔おほしくたせる。思下也。箋曰。思腐ス義歟。

下ノ義如何。〕

おもと。侍者。ヲモトビト。某ノヲモト、女

ヲ云〔稱號常ニアリ。〕或御許。〔兩義。〕

をれもの。ヲロカ者也。〔箋曰。然共をれて年

ふるモ愚老ノ義歟。〕

おほミあそび。大君遊歟。大ナル御アソビ也。

おは。北方。祖母。〔和名。〕ヲバヲト、。或ハ大

北ノ方ト云。祖母ヲオホハト云。祖父ヲオ

ホチハト云。

おさく。漸々。〔和名。〕幹了者。〔フサクシキヒト〕日本紀。優長。軌

制。同。治天下。〔匡房記。〕

〔をとなひ。喧響。日本紀。箒木ニ衣のしはらはらとして云々。〕

をとなび。生長。〔イナナシ〕喧響。日本紀。〔私。ひノ字濁テヨム。兩義各別。〕

をれく敷。ホレくシキ也。ヲレテ年フル同心。

おほい君。大君。王姓也。諸王〔孫王〕ヲ〔モ〕云。玉かづらニ。〔和〕琴ヲシヘケル〔モ〕フルヲホ君ト云リ。

おぼしたち。〔高也〕思立。テトチト音通。生立。ヲウシタツル。〔箋曰。此義不審。〕

〔おほしたち。生立也。たノ字ス。兩義各別。〕をびれ。ヲサナビレ也。權ニ。薄雲女院事ヲヤハラカニヲビレタルト有。

おほ君すがた。直衣姿也。人ハ皆ウヘノキヌナルニ。アザレタル大君スガタト云リ。

おほしく。男々敷。大ヤウニケダカキ心。私。雄略。日本紀。雄。同。拔。同。

おさめミかハ。長女御溝。八雲云。ヲサメハ下女也。ミカハハヒスマシナリ。家中ニ物ヲ納ル下女也。不淨ヲ川ニテ洗捨也。丸ト云桶ニ不淨ノ有ヲ。生好ノ絹二幅ヲヌイレテ。兩ノ端ヲ結合テ。此丸ヲヒチニカケ持出也。此女〔ヲ〕ヒスマシト云。〔スマスハ〕濯也。

をこたり。懈怠ニ非ズ。身ノヲロカナル歎也。浮雲ニ。〔舟イ〕ツキセズ戀シキニ。身ノヲコタリト歎ソヘタリ。

おくたかき。臆高。乙女ニ。ヲク高キモノト云ハ。物モヲボエズトハ臆スル心。物モヲボエズト有ハ臆病ノ高也。〔用ニ此義。一義ニ〕奥高ハ奥義ヲキハメタル高才者ト云々。

をいやきし人。ヲイサリくトウナヅキ。領納也。宿木ニ。薰大將宇治ニ來車ヲ問給ヘバ。常陸ノ前司ノ姫君ト申。ヲイヤキハシ人

ナンナリト云々。領納ノ詞也。

おほんとしミ。御賀也。或説。試樂云々。又注云。御年滿ト云々。

おほん。詩歌タキ物ナド。皆誰御ト有。若ナノ下ニ。大將ノ御内侍ノスケバラノ次郎ノ君。紫式部記ニ。上東門院御産所ニ。内侍カミノ御中務ノメノト。姫君ノ御少納言ノメノト、有。御ヲ上ニ付テ可_レ讀。人ヲ御某ト不_レ可_レ云哉。

おほミおほつぽ。「可_レ爲_ニ大便_一歟。屎壺也。愚案。此事常儀相違歟。不審也。」御ミ大壺。御ノ重點。近江君詞。私云。小便筒事。ヲホツポ。尿器也。

おにしき人。鬼メカシキ人也。玉かづらのケサウ人大夫監ヲ云。青表紙ニハヲソロシキ人トアリ。

おいらか。眞實コトナリ。老人ハ事ウルハシケレバナリ。誠ヲ云心歟。所々ノ詞同心也。

をしかいもと。乙女ニヲシカイモトアルジ凡垣下主

ハナハダヒザウニハヘタウ。垣下公卿也。甚非常

おほんべ。賛也。御幸。御べ。同。「私云。」古今御

ベト云。大嘗會事也。何モマツル心。

をし。宿木ニ。盃ヲサ、ゲテヲシトノ給。進

食。日本紀。神功皇后時。火前國松浦縣ニノ。

進ニ食於玉嶋里小河之側。

おいかれたれど。老枯。總角ニ。阿闍梨老カ

レタレド。イトタウトク。クウツキテ。

をくらさせ給。「殿文字也。」論語鞭殿。「若紫（原イ）

ニ」北山へ公達御迎ニ參給時。アサマシウヲ

クラサセ給ト恨也。

おほけたる。ボケタル也。饒云々。

あきなこと。翁言也。夕顔ニヲキナビタルト

有。

おほどけたる聲。抄ニ。馬カイナド大ヂニヨ

バ、ル聲「ト云々。私云。大どかなる聲トハ

上臈シクケダカキ聲也。ソレハ別也。所ニヨ

ルベシ。」

おもゝちあゆまひ。面持歩様。御幸ニ内ノヲ

トイフ云。

大君げしき。大様ニノサナル心。

あやなしに。源内侍ノスケニニ成テ後。桃園

ニテ源へ申詞。「無禮。ヲヤナシ。日本紀。不恭也。

科照や片岡山に飯にうへてふせる旅人あは

れあやなし。」

をやミなき雨。無ニ小止ニ雨。

をちかへり。百千反。

をちかた。遠方。彼方。日本紀。

おほやけ。公。

おほいまうち君。大臣。おとゝも大臣也。

おほきおほいまうち君。大政大臣也。

おほい殿。大臣殿。

おとゝ。殿。

をりたつたご。居立田子。

おほんでうど。御調度。

おぼろげならず。不ニ少縁。

和

われかのけしき。我が我ニモアラヌ心。

わざ。行幸事。

わらげて。童氣。ワラハシキ心。

わう命婦。女ノ司也。王氏也。

わりなく。無レ分。無レ理。無レ破。

わた花。綿ニテ花ヲ作。冠ノヒタイニサス事。

わかんどをり。王家無ニ等倫。法花經ニ云。世

雄無ニ等倫。佛ノ御事。説々雖レ多。以ニ王孫

爲レ正。「或説。王家通トモ和漢通トモ云ヘリ。

愚案。無ニ等倫ノ説モサル事ナレド餘リコト

ゴトシクヤ。」

わかな。若ナニ。正月廿三日子日ナルニ。右

大將北方ワカナマイリ給。

わうけづく。王氣付。柏木ニ。女御宮タチハ

御門ノ御方様ニ王ケ付。

わうばん。宿木。中君御産五夜ニ。カホル大

將産養ニ。屯食五十具。コテノ錢。ワウバン。

わかがミ。若髮。初音ニ。花散里ノ上ヲ云。サ

バカリトミエシ御ワカバミハ。年比ニヲト

ロイマシテ。

わか君ハらまれ給。冷泉院ノ事。若君ト云リ。

男子ナレバ勿論也。女子モ可然人ヲバ云也。

わたり川。三途川。三ツせ川。

わろもの。虚俗。〔遊仙窟。〕

わがたちの人。我館。

わらゝかに。ワラハカニケチカク物シ給ト

螢ニアリ。〔和也。わらくかトモ同事也。和字

歟。〕

わかなへ色。ウス〔青ノ黄ノ少シ過タル色

也。宿木卷。〕萌黄〔色〕也。

わらハへの口ずさミ。童謡也。

われぼめ。自讃也。

わらわけて。方分也。カタワケテ。又童シキ

心。〔カタワケテト云也。朝顔卷。〕

わらふだ。圓座也。

わけなう。無妖氣。

わう女御。朱雀院御女昌子内親王。冷泉院へ

參給テ如レ此申也。

わかれのくし。素戔烏尊ニ。油津ノ爪櫛ノ例

ヲ引。齋宮下向ニ御門櫛ヲサシ給トアレ共。

其説不_レ用歟。

わくらハ。邂逅。

賀

かいまみ。垣間見。視ニ其私屏。〔日本紀。〕フキ不

合ノ尊産屋ヲ〔火々出見尊〕見給シ也。

かいねり。搔練。兩面フクサニテ。ナカヘナ

シ。只絹ノフクサバリナリ。白モ赤モ。〔又云。

ひかいねりトテ下襲ニアリ。ひ色ハ裏面ミ

ナ打タリ。かいねりハ面ハリタルモノ也。〕

かはらかなり。ナマメクニ對シテ云心。〔キ

ヨゲナル心也。〕

かべしろ。壁代也。

かはぼり。扇也。蝙蝠ノ羽ヲ見テ作初也。

かはぶえ。説々雖多不用。定家説筈也。

かち弓。步射也。大弓也。若ナノ下ニ。小弓ト

ノ給シガ。カチ弓ノスグレタル上手ト有。弓

ニ眞草行有。ムユミハ眞射也。カサガケハ行

ノ射也。犬ハ草射也。勝弓ト云説モ有。私云。

かち弓ハ步弓也。又睦弓ト云説アリ。」

かよれる。タラシル也。匂宮。ヤドリニマヒ

テカヨヒケル袖。舞ノ袖返ス事也。初音ニ。

竹河ウタヒテ。ナヨレル姿ナツカシキ聲ト

有。是モ同心。コエカヨヘル歟。

かどくしう。廉才也。日本紀。才學也。

かへどの。栢殿。栢梁殿。紫明東宮ノ御所

也。愚案。此注不審也。大后御在所也。」

かどひろげさせ。門廣也。于公事也。

かりの御さうぞく。狩衣也。かりの御ぞ。」

かゝげのはこ。搔上篋。男具。」

かたほ。片毫。カタクナシ。又ハ規也。凡也。

私云。」イトケナクカタナリノ心。

かたかど。片才也。片廉。等木品定。其かた

かどだになきやらんと源問給。

かたの少將。英明少將カタノニ宿事。

かたむ。奸。カタマシキ心。

かれうびん。淨土ノ池上ノ鳥也。法華經

釋義曰。在卵中^{以下イナ}有聲。勝衆鳥^{以下イナ}鳴。法花

ノ釋也。

からどまり。筑紫^{前イ}ニアリ。

かれず。不離也。愚案。不^レ斷心歟。」

からの本。若菜卷。唐人ノ書たる手本也。

から國に名を殘ける人。屈源ガ事。

かんざし。髮也。

から崎の^レはらへ。近來無^レ之。内野ニテ陰陽

師勤^レ之ナリ。

かんだちめ。上達部。公卿也。

かすい樂。酣醉樂。河水樂。タヨリ有也。壹越

調ハ酣醉樂。右樂。何モ時ノ興ニ合ベシトモ

ヲボヘズ。酣醉樂ハ右樂ニテヒソメキタル
如何ト覺ユト云ヘリ。」

かうけに事よせ。高家也。

かづらきの神。橋渡ス神也。〔形姿ク見水原イ〕水原ニミユ。

かつらひげ。雜色ナドハ。ヒゲニ鬘ヲカクル

也。又ハ葛ノゴトク生ヒロゴレルヲ云。ヲモ

ツラヒゲ也。

かうれう。廣陵散。琴秘曲也。嵇康夜宿ニ洛

西。有客授ニ此曲。〔夢ニ老人來テ嵇康ニ授

シ曲也。〕

からうす。碓也。

がくさう。學生也。

かうこの箱。香壺。最秘説也。身高三寸五分。

弘九寸〔七分〕。長同。〔又云。香粉箱也。〕

かうこんじ。高巾子也。

かうじ。大やケノ勘事。勘當也。考辭。不考。

〔日本紀。〕鈴虫〔イナナフシ〕ニ講師。

〔かうじ。〕講師也。鈴虫ニ。堂かざりはてし講

師まうのぼり。」

かくとう。定本ニ歌頭ト有。樂頭誤歟。

かいなで。かきなで也。又平均ノ儀也。

かけくしく。懸〔々〕也。

かたえ。片枝。片方。傍輩ヲモ云。

かしこき。カケテモ賢也。威。左傳。又賢ハ恭

也。恐也。〔日本紀。〕是各別。

かくれば。隱庭。

かみさび。神宿世。神閑共。可レ依ニ所ニ。

かえう。荷葉。夏ノ薰也。春ハ梅花。秋ハ菊侍

從。冬ハ玄方。

かみろ。紙繪也。

かゝづらう。カケシロフ也。カヽリヘツラフ。

かこかなる。松風ニ有。カコヤカノ心。コマ

ヤカノ義。〔私云。圍ヤカナル也。〕

かんわざ。神事也。

かやしく。カヤスク也。浮舟ニ有。

かんく敷。神々敷。夕霧ニ有。神也。カウガ

ウシトモ。

がやぐ。ガイぐ敷也。カシマシキ心。

かきほ。垣本。〔カキホ。〕垣尾。垣蕙。垣外。

かごと。誓言。誰カゴト。加言。コトバクハヘ

カコツクル。カコチガマシ。ツトチト同音也。

かるめろうする。輕睨。

かミながらの人。上ザマノ人也。

かいせん樂。海仙樂。近代海青樂。黃鐘調。

かたかけて。肩掛。人ニ仕奉公スルヲ肩入共。

肩懸共云。〔松風卷。〕

かざミ。汗衫。童女ノ上ニ着也。〔葵卷。〕

かはぐち。催馬樂也。〔藤裏葉卷。〕

かほにみえつゝ。万葉八卷ニ。高圓ノ野邊ノ

容花おもかげにみえつゝいもハわすれかね

つも。家持ガ坂上大娘ニ遣也。此歌叶侍り。

〔本歌心ナラデ只山吹ノかほニ見へつゝト

云ハン事如何。此歌ハ〕秋ノ花ヲ云リ。〔春日

ヲ山吹ニ引カヘテ云ヘル心。一キハ面白ク

コソキコヘ侍レ。かほ花ハ容花ト書リ。貞鳥
ノ注ニ委ク見タリ。〕

かほ鳥。貞鳥。杲鳥。兩説。春鳥也。若ナノ上ニ。

深山木ニネグラモト〔サダメ〕ムルハコ鳥ノ爭カ花ノ

色ニアクベキ。万ニ。杲鳥ヲ用也。宿木ニ。貞

鳥ノ聲モ聞シニ通ヤト茂木ヲ分テ今日ゾ尋

ル。或云。常州ニ貞鳥ト云〔鳥〕有。此鳥鳴テ

後郭公來也。下説ニカツホウ鳥ト云。又杜若

ヲ貞ヨ花ト云。此花咲時此鳥來ト云々。或説。

梟ト云。〔愚案。〕餘リケフトクソアレバ。八

雲ニモ。容鳥容花ノ事。定家モ不レ弁。只ウツ

クシキ花鳥ト可ニ心得也。〔アレバト説ヲ用ベキ也イ〕

かへさひ申。覆。ウケヒカヌ詞也。乙女ニ。レ

ウジウケンニハ。博士ノカヘサフ〔ベキ〕フ

シブシト云々。〔私云。〕是ハクツガヘス心歟。

又冊子ナドマヲヒロゲテ返ス心モアリ。又

ウケガヒ申トノ心モアリ。可レ依所。〔タキリノコトヲ〕

かうさく。邊迹。けうさく同心。藤ノウラバ

ニ。真人ヲイトカウサクニト云リ。

かミなどの空に。「延喜ノ御子。母時平公女。」
雅明親王。大井川行幸時。七歳ニテ面白舞給
ヲ。神ノメデ、ウセタル事有。

かいつ物。海物。カイヅモノ日本紀。髻廣物。ヘタノヒロモノ髻狹物。ヘタノサモノ磯物
等。須磨。

からのとうきやうき。唐東京錦。日本ニモ有
レ之。「或説。東京トハコノ錦也。仍テ唐ノ
字ヲ加ト云説アレ共只」唐ノ錦上品也。

かたき巖あわ雪になし。物ノタトヘ也。「或
説」經文也「云々。可レ尋之。愚案。日本紀第一
云。踏」ニ堅庭ニ而陷レ股。若ニ沫雪「以蹴散。是ハ
素戔嗚ノ尊ノ天ニ昇シ時。天照大神怖畏ヲ
ナシ給テ。威ヲフルイ給ヘル御姿也。女神ノ
御事ナレバ。爰ノタトヘニ引也。

かくしうに有けん昔の人。紫明ニ。文君ナド
云ケン昔人トアリ。「水原ニハ兩説ト見タ
リ。」

かざしのわた。男踏歌。十四日。以綿花ヲ作。

冠「ノ額ニ」サス。綿ノ花カザスト云。私。高
巾子懈冠共云。此殿ノ聲サヘスメル雲井哉
かざしのわたの白き月夜ニ。

かざしのたい。挿頭花。又頭花。菊ヲカザスト
有。

かミの色にこそ調侍けれ。紙ト同色ナル花
ニ仕ベキ「歟」ト見えたり。

かしらやうく色どりて。御導師ノ頭。シラ
（待イ）
（かはりイ）

ガライタルヤ。「愚案。白髪ノ見ヘワク程そ
らザランモ心得ズヤ。」但シラガナラネド。
年老「ヌルカシラ」ハ髪ノ色「モ」カハル也。

かぜの音も秋に成つる。秋きぬとめにハさ
やか之歌心。秋風樂ヲ吹ト聞えタリ。次ノ詞
バンジキテウニ面白ト云リ。古事トバカリ
心得レハ無念ニヤ「侍ベキ」。

かいしろ。垣代。輪臺舞ニ有。或廿人或四十
人。舞臺ノ廻ニ立。

かとり（ハネイ）のなをし。縦ハ上下ヒトシク悲歎ノ

時着用歟（トモ）甚長卿説。」私云。夏ノ下襲

ニ用也。歎時ノミニ非。歌有。

かく（ハネイ）。難キ也。又カツノ心。淡雪ノツモ

レバガテニクダケツ。

からくしげ。唐匣。私。賭弓日着用（スル也）。

箋曰。此注不審。」

かけり（トモ）こまほしげ。翻來。來タゲナル心。

かうせち（トモ）。講説。鈴虫ニカウセツ。セチトモ

有。

かけはなれたべる。カケハナレ給ヘル。

かとう。歌頭。竹河ニ。右のカトウ。男踏歌ノ

歌頭也。源侍従。「右のがく頭ト云説アリ。謬

也。」

かくごむ。藤袴。恪勤給文。

かこ。御法。卒午名也。私。河鼓ノコトカ。

からのけもんれう。唐花文綾。俊成本。眞名

ニテ書レ之。

かじけたるめの童。カケチイサキ也。「樵碎

也。」東屋。未サカリナラザル童。私云。悴ノ

字也。「蘭ニ。」カジケタル下ヲレバ。霜モヲ

トサヌ小篠也。

かうさしの。初音。カウサシノ世ハナレタル。

定家青表紙ニナシ。

かずより外の權大納言。還任員外納言。明石

源住給。

からもり。ハこやのとし。かぐやひめ。唐守。

藐姑射刀自。耀姫。繪合。皆物語ノ名也。唐守

ヲヤハラゲデ。カウモリトヨム。

かやしく。浮舟ニ。カヤスクト有。

夜

よるべ。縁（トモ）ヨルベ。日本紀。」

よるべの水。杜水邊也。「俊成女説。」

よそほしく。粧也。ホメタル詞。

よし。シヅクモヨシ。能（トモ）「々」也。「愚案。此注

不審。」

よそへ。御ヨソへ。タトへ「タル」也。

ようぜず。不要也。不能也。惡シタラバヤ。

「又云。あしくせバト云也。愚案。下説可用歟。」

よぎりおハシ。除過也。來ヲモ云。

よし／＼しう。由アル心。

よちみち。除道。其所ヲ去テ過也。過ト云注

除心歟。同心。吹風ニアツラヘ付ル物ナラバ此一本ノヨギヨトイハマシ「を同心也。能路也。又説過路也。」

よせおもく。縁重。〔寄イ〕「縁ヨセ。日本紀。桐壺。」

よごもりて。世籠也。明石。

ようし給。〔筭木ニ。〕源氏中將内ニノミサ
プライテヨウシ給。

よそぢ。四十也。若ナニ。折櫃ヨソヂト有。源
四十賀所。〔箋曰。四十トヨム如何。〕

よつかハしく。ヨシメキナドモアラヌ心。ヨ
ツカヌ也。

よる光玉。夜光玉。齊威王與ニ梁惠王ニ會。惠王

云。吾國雖ニ小國。有下徑寸珠照ニ車〔前後〕十
二乗ニ者十枚。奈何以ニ万乘國ニ而無寶乎。

よもぎのまろね。蓬丸寢。あさくらや木の丸

殿の歌心歟。此心かけあはざる歟。然共イ
ヤシキ家ヲ蓬ガ宿トイヘバ。カク云テセル
歟。又彼詞ノ上ニモ。聞シラヌナノリヲシツ
ツ打ムレテ行トアレバニヤ。東屋蓬生宿カ
リニスル心。

よすが。〔資也。〕便也。ヨスガノ定ルト云ハ。
人ノ女ナド儲事。便ノエタナキ心ヲヨスル。
紫上子無事ヲ云。又源ノアタリニサリヌベ
キ人ノナキ心。

堂

たい。對屋也。西對。ハナレタル「タイ」。タイ
ノ姫君ナド云同心。

だいとこ。大徳。法師ノ官也。〔職名イ〕

たい／＼しき。退々也。

たどられし。尋也。

たきのばん。彈碁（碁イ）。碁（碁イ）。碁（碁イ）。後漢書藝經云。

彈碁ハ兩人對局「白黒各六。」先「別碁相當更先」彈也。「其物以石爲之。」

だいひざ。大悲者。觀音也。

たゞよハしく。漂也。

たゞハしきかんだから。糺。タバシキ也。嚴

重ノ心。定本「ニハ」イツクシキトアリ。

たいこをさへかうらんのもとに。鐘鼓有庭。

琴瑟有堂ノ心。「さへト云ヘルモ此心歟。」

たゆたい。浮動。盪々也。猶豫也。イデ我ヲ人

ナトガメソ大船ノユタノタユタニ物思比

ゾ。浪ニユラレタル心。

たゝり。結蝶。和名。愚案。此注委シカラ

ズ。八雲「ニハ」たゝありと書り。万葉垂

有ト書也。木ヲミタテヲハマク物也。神宮ナ

ドニモアルモノ也。總角ニ。ムスビアゲタル

タハリト有。糸操器ナリ。

だつ。冬ダツ。野分ダツ。冬メク心。澄テモ不

苦也。

たうのはい。答拜也。

たとしへなし。無以前也。タトヘナキナリ。

「無諭也。し文字ハヤスメ字也。」

たうびて。給て也。

たらぬたとへ。兄弟契也。

だいぞう。大乘也。

たうまじう。不可堪也。

たうバリのつかさ。御給之官爵也。太上天皇

ノ御給ニ。除目ノ時官位ヲ被下也。冠給ト

ハ始ヲ爵スルヲ云。爵トハ勅授ノ始從五位

下叙スルヲ云。

たすき。手襦。日本紀。襦。襦。同。帶シタル様

ノ心。襦タスキ。少人ノ姿ヲ云。薄雲ニ。明

石姫君ノ袴着ノ所ニアリ。

たき殿の心バへ。「瀧殿。フルキ」名所也。「大

覺寺ニアリ。」又ハ瀧ト殿ト云々。又瀧ト野

トヲ云「ト説アリ。」私云。大覺寺ノ南ニ全瀧
ナシ。只泉殿ヲ云ト口傳也。瀧モ殿モ大覺寺
ノ「地」景ニヲトラヌトナリ。

たきのよどミ。 シラガノ事ヲ云也。古今ノ歌
ニミユ。

たびしかはら。 民代也。清少納言枕草子ニ。
タミシカハラ。シハ辭「字」也。紫明ニハ。カ
ハラハ渡守也。綱引ト注せり。山がつたびし
かはらまでと云々。民氏河原民也。ミトビト
同音。河原ハ穢多也。

だミたり。 詞ダミタリ。ナマルヲ云。だびた
ると云同心。孝經ニ語迂タリ。
（序 講送イ）

たまどの。 殯殿。私云。葬禮先出所也。夢ノ浮
橋ニ。玉殿ニヲイタリシ人。見ニ源秘秒。
（秘イ）

たきみち。 三川水ノ水上也。

たひけ。 褐。楊。餞別。送物。「ぬさノ注ニ見ユ。」
たんぬん。 探韻。小野宮記云。重陽宴。各分ニ
一字於御前。取ニ韻字。探得何字「云々。以

レ之可レ知レ之。「各分ニ一字」詩也。」

たゆけ。 隨窺。史記。ヲチブレヲコルケシキ。
無隙義也。窺ヲバ石マトヨム。「史記。土器
ヲ作ニ石マナキ詞也。タユシハ音也。訓ニ非
ズ。桐壺。」

たくミ。 内匠寮。桐壺。里ノトノハ。モタ。ス
リ。タクミ。

たまも。 玉ハホムル義也。浦邊ナレバ藻ヲ裳
ニヨソヘタリ。「後撰ニ大伴黒主歌アリ。」

たき口のとのゐ申。 「夕顔。」亥一刻侍臣名對
面。延喜元年侍臣後瀧口武士廿人。
（名對面イ）

たゆふのけん。 大宰府ニ。帥大貳小貳大監小
監監代ナド云司有。五位ニ叙スルヲ。大夫監
（叙 尉 考イ）

ト云。「玉かづら巻。」

たうぶ。 乙女ニ。アルジハ甚ヒサウニ侍。タ
ウブバカリノシルシト云リ。又同所ニ。大ヤ
ケニツカフマツリタウブ。嗚呼ナリ。給也。
たハやすき。 タヤスキ也。歌ニ。霰ふる深山

ノ里ノ淋ハキテタハヤスクトウ人ゾナキ。
たれどき。アハタレ時。タソガレ時。

だいばん。臺盤。殿上ニ有。

だい床子飯。膳。委奥ニ有。

たをやか。嬋娟。躑躅。

たけふちゝりちわたる。私。詞ヲ琴ニ引事。

古キ事ナリ。

連

れうし。寮試。寮司。大學寮ノ司。乙女ニ。今

ハレウシセサセン。同所ニ。レウシウケント

有。同卷ニ。レウシ上達部ノ車云々。或寮門。

大學。

れうもん。大學寮門也。右ニ注ス。

れうわう。陵王。樂也。

れんし給。練也。宿木ニ。レンシタル心ナラ

ネバト有。注ニ戀ノ字ヲ付タル如何。

楚

そひぶし。副臥。引入大臣ノ女十六。其夜ヤ

ガテソヒブシニ成給。

そはく敷。觚。ソバダツ心。文選。觚稜。ソ

ハソハシ。

その駒。神樂ノ名。其駒ヤ我ニ草カウ。

そゑの鷹がい。諸衛六府也。近衛府〔被服〕拔官也。

そこにこそ。足下也。此詞史記ニ多シ。〔又

云。某也。或用濁。〕文選廿一ニ。李陵答ニ。

蘇武頓首ス。季陵子卿足下ニ云々。等列ヲ恭

詞也。下ノ字ヲコト讀コト。毛詩ニ宗室窓下〔本ノマ〕

ト云リ。

そゐろかなる。央〔央イ〕。スルドナル心。御幸ニタ

チソバロカニト有。長高キ心。

ぞう。將監也。殿上ノゾウ。左近ノ藏人ノゾ

ウ云々。私。將監ニ不レ可レ限。官ゴトニカミ

ゼウサウ官可レ有。近衛府ニテハ。將監ゼウ

タルベシ。大將ハカミ。中將ハスケ。右中將

ハ右ノスケ。少將ハスナイスケ。

そのかたのふミ。愚案。夢ノ事ヲイハタレバ。

ソノ方ニハ夢文ナドヤウノモノ歟。「定本ニハそノ字ニアリ。然ラバーヲバ上ニツケテ其方トヨムベキ歟。又そくトアルベキヲ書誤レル歟。下ノ詞ニモ内敷のかたトアレバ俗典ト云ヘル共可ニ心得ニヤ。」

そぎゐ給へり。ソバメキ也。鈴虫ニソバヘルト有。互ニイトナミアヘル心。紫上ヒイナヲソバキゐ給ハ。心別ナリ。

そよ。領納ノ詞也。宿木ニ。薰ノ詞ニ。ソヨ繪師モイカデ云々。

そぼち。濕也。露ニソボチ。涙ニソボツ。カハカヌ心。「濡也。ヌレテ乾カヌ也。」

そしらハしげに。宿木ニ。女ニ宮大將ヘ參給事ヲ云ニ。急參給事ヲソシラハシゲニ云人有ト云々。ソシルナリ。

そうぶん。處分。そうぶ共。讓與事也。

そらめ。虛目。ヒガメ也。

そくら。賄賂。東屋ニ大臣ニナラレ。ソクラ

ウヲトラン。常陸介詞。

そがならハし。タガナラハシト也。

そく。シゲくソク。重職。シゲキソク。

ぞくのかたの。若ナニ。コナソゾクノカタノト云々。俗也。外典ヲ云。

そうわう。孫王。梅が枝ニ。ソウワウノフタツノイマシメト有。皇孫ト云義也。

そきやう殿。承香殿也。蘭ニ。内侍督。君ノ御局ニナル。

そんじや。尊者ノ大臣。若ナノ下ニ。致仕大臣ツカウマツル云々。

そこハかとなく。無ニ其計。又無ニ其墓。そこひ。底モシラヌ也。ソコキナキ淵ヤハサハグ。

そらをのミみる。病者ノ死相。但不可限

其ニ。「愚案。非ニ病者。アナガチノ詞歟。」

そひくしき心ち。人ノ姿「ノ」チイサヤカナルヲ云。是も物ハヅカシク。身ノスヘラ

ル、「ト云」心「歟」。

そほひやかに。ヒソヤカニ。ノビヤカニ。

そほろ。座。^{イハ}無端。^{和名}スバロ共。ソバロハ

シ。ソバロ寒ク。ソバロハシ。「皆同心歟。」

そしうなる。花の宴ニ。大井殿詞ニ。只大ヤ

ケゴトニ。ソシウナル物師ノアリト云々。如

在心地。紫明ニハ。カタンナル物師ト有。

そぼれゐたる。タハブレザレタル也。ホコリ

タル共。初音ニ。トシノウチノ祝事ノソボレ

アヘルト云々。「ほノ字論アリ。」

ぞう。族。孫。玉鬘。大夫監ゾウヒロク。族也。

竹河ニ。是ハ源氏ノミゾウ。族也。宿木ニ。中

君懷妊事ヲ云ニ。イミジク命ミジカキゾウ

ナレバ。是ハ孫也。兩義所々多し。「ひとぞう

一孫也。一族也。愚案。下義可_レ然歟。ぞう類

ト云モ族類ト心得ベキ歟。」

そして。存。率。衍。敬。帚木。イヒソシテ。定

本ニハ。イヒハゲマシテト有。明石ニ。サケ

シイソシ「ト云ハ酒族。殺也。」此卷可ニ引訴

トモ。酒ヲシイソシテハ殺字也。若ナノ上ニ。

明石ノ姫君ヲ云々。此等ハ存也。楨柱ニ。心

ケサウシソシテ。率也。ソシル心不_レ行。大概

殺ノ字ナルベシ。詩ニモ愁殺笑殺ト在。「切

ニ深クテ猶ザリナラヌ心トゾ覺ヘ侍。」強シ

キツヨクイヒタル也。ヨシメキソシテ。

そらより出たるやうなる事。天運ノ事。

そハ心なる。それハ心なる也。

そねミ。猜也。

門

つと。万。山里ノ土産。集。日本紀。都ノツト。

「桐壺。私云。ツブト、讀ベシ。」

つくも所。造物所。内裏仙洞有。若ナノ下ニ。

ツクモ所ノ人メシテ。

つなしにくき。強顔。ニクキ也。「れ文字ヲ略

シタリ。」中略詞也。俗ニツラニクシトノ心。

漂落。ツナシニテコソソヘ給。ツナシニクム。

つねのり。經範。繪師也。「在^ニ高名錄。須磨卷。」千枝同。「紫明ニハ常則云々。」

つまじるし。文ノ不審ナル所ニ。爪ニテシルシヲスルコト。

つゝら折。九折。盤折。文集ニ。山下望^ニ山上^ニ。

初頻不^レ可^レ攀。誰知中有^レ路。盤折通^ニ巖巔^ニ。若紫北山事。

つまごゑのやう。近江君詞也。細々ニモト也。

又物ノハシト云心。

ついきり。フツキリ也。若ナノ下ニ。柏木小

侍從ニ語給詞。

つまかけなどを。末ツムヲ折々ツマカケナ

ドヲシニ云々。折々ノ「ツ」マ歟。「かけハツ

キタル詞也。」又ハ面顏ナド云同義也。ツマ

ゴエモ同躰也。「河海抄。」

つへたましく。申ツヘタマシク。柏木。

つたミ。小兒ノチアマス事。津ノ字。横笛乳

上。

つねからず。不^レ常。若ナノ下ニ。キウナル人ハ久ツネカラズ。初音ニ。サエカラズト云ガゴトシ。

つばいもちゐ。椿餅也。鞠座ニ獻^ニ椿餅^ニ事

見^ニ舊記^ニ。ホシ飯ヲ粉ニシ。丁子ノ粉ヲ加テ。

アマヅラニテカタメテ。椿葉二枚ヲ合テツ

ツミテ。上ヲ「重ネノ」ウスヤウヲ細切二分

計ニテ帶ニユイタル也。「公世二位申ハ。」近

衛關白ヨリ被^レ尋^ニ「タリ」シニ。公世二位造テ

參セキ。ハウニコソ様ハアレ。人不^レ知^ニ「云

云」。「箸ヲソウベキニヤ。私云。今時分ナラバ。

砂糖ヲ入^ニ「ナシ。當時ナラバ砂糖ニテ辛ミヲ

加^ニテ可^ニ珍重^ニ。「葉上ニ覆ヲバ龜甲ニ切テ少

シ交ヘタルモアルニヤ。」カラミヲモ加ヨカ

ルベシ。又枝ニ片葉ヲ付^ニ「ナガラ」カ。カタハヲ

オホヘル「モ」アリ。「二三葉。」

つきじろふ。突^ニ也。花宴卷。「詞ニ「ハ」不^レ書

シテ互^ニ「ニ」心^ニ「ヲ」知^ニ「スル」也。

づしやかにしもあらねど。ヲモノシキ心也。

づしやかなる。シヅカナル也。梅枝薫合時。權齋院玄方。螢。兵部卿判給詞也。又實信心也。

つき紙ノ本。卷物也。

つばいち。大和長谷詣ノ道ニ有。海石。榴市ノヤソノチマタニタチツラン結シ紐ヲトカマクラシモ。万葉。

つしなき。マコトナキ^(ルイ)也。ゲニシキ物

ヲバ。ツシ^(マ)ナキト云々。マヲ略ス^(ル)詞也。

つぼさうぞく。市女笠キテ絹ノ中ユイタル也。玉かづら卷。

ついたち比の月夜。浮舟ニ。朔日比ノ夕月夜。七ムキスサキニト云。藤裏葉。四月一日比御前^(ノ)藤花^(ノ)イト面白咲亂タルニ。七日ノ夕月夜影ホノカナル云々。阿佛記ニモ。七日ノ

月ヲ一日比ノ夕月夜ト云リ。一日ノ月ト云ニ非。朔日ハ^(ノ)始也。月ノ始ノ月ナルベシ。つくりゑ。何ニモカハント思物ヲ。シルシバカリ書。繪ノ具ニテ書ン下繪也。是ヲつくりゑトモ。うハゑトモ云也。

つらづえ。支頤。交集。事シゲキ心ヨリ咲物思ノ花の枝をツラヅエニツク。

つるバミ。椽。忌ノ時キル衣也。但其ハ色黒歟。小野ニテ少將ト云女。シラミタルモカラギヌヲキテタ霧大將ニ對面セシト有。

つしやき。實信心也。

つまびき。琴能引事也。

ついえたれど。費。ツイヤス。私。ソコノフ歟。つゝしり。噫。ハハキバニモ。ツハシリウタフト有。

彌

ねぢけ。倭人。表裏アル也。ネヂケ人。ニクキ人ト云心。日本紀ねびれて同事歟。

ねびれて。ねびたれ同心。倭ノ心歟。「ネヂケタル同事歟。ネビタレ。ヨシバミテ也。」

ねびたる。生長。老人。ネビマサル。御幸。ネビタル年預。

ねたます。「妬也。」勵「也」。ハゲマス心。妬聞。ネタマスシイスキコへ。

ねごめうつろふ。根籠也。伊勢物語。垣越也。

早蕨句「宮」歌。袖フレシ梅ハカハラヌ句ニ

テネゴメウツロフ事ヤコトナル。後撰ニ。伊勢イ垣

ゴシニ散タル花ヲ見ヨリモネゴメニ風ノ吹

モコサナン。根ナガラ風吹コセト云心。

ねぎごと。禰宜言。ねがひ事也。又神ニ祈事。ネ

ギゴトヲ餘リ。「古今はてハなげさの杜歌。」

ねうばうのさぶらひ。大盤所。

ねさう。年三也。正五九。一年ノ中ニハ此三

ヶ月也。一月ノ中ニハ六齋日也。取分可行

月日也。年三。長年經ニミユ。「玉かづら。」

ねのこの餅。葵卷。紫上新枕所ニ有。ネハ「私

云。「亥ノ「コノ」翌「日ノ」夜ナルニ依テ。ネノコノ餅ト惟光「時ニ取テ」云也。三日祝ヲ

「必」ネノコト云ニ非歟。スヤイ「有秘説。口傳。」

那

なよく。柔々。ナへく也。ヤハラカノ心。

なべてならず。「不並也。をしなべて。」駒ナ

ベテ。ナラベテ也。

なよびかに。シナヤカニ也。

なだらか。平也。朽。論語。糞土墻不レ可レ朽。

なづさひ。ナヅサウ馴尹。昵近也。馴心。ナレ

ムツブル心。

なしく。無難。ナムナクト可レ讀。

なま／＼の上達部。ナマメキ不用歟。「愚案。

生ノ義ニテモ侍ベキニヤ。椎本ニモなま孫

わめくナド云ヘル心モカヨヒテヤ侍ラン。

私云。「ナマジイノ上達部ト云心。未熟ノ心

也。ナミ／＼也。マトミト通音也。

なめげ。滑。無禮。ナメシ共有。私。ナンメゲ

ナルト可^レ讀。〔箋曰。不可^レ然。〕

なげの。筆ヅカイナイガシロ也。ナヲザリ也。

なやらう。追難。ヲニヤライ。

なりハひ。農。稔。順〔和名。〕民業。〔日本紀。〕家業。

〔遊仙篇。〕

なか川。京極川也。李部王記。古人稱^ニ中川^一。

云々。賀茂川ハ東。桂川ハ西。仍京極川ヲ稱^ニ中川^一。

〔法性寺。始ハ皆人中川ノ御堂ト云ケリ。〕

權記并世繼ニモ見タリ。〕

なを人。直人。〔下薦也。又說高家也。愚案。此

說難^ニ信用^一之。〕諸太夫。帚木ニ。ナヲ人ノ上

達部迄成上。我ハガホニテト云々。ナヲナ

ヲシキ人ト云ハ。正直ニ實有人ヲ云。〔心別

也。〕

なか神。中神。長神。中神ハ日フタガリ也。又

一夜廻天一神也。一說。長神。手習ニ。イトセ

バクムツカレク忌^{シカ}ベカリケレバ宇治ノ院ト

云シ所思出テ二三日ヤドラン云々。二三日

ト有ハ一夜回ニハアラザル歟。〔安家ニハ中神ト云。賀家ニハ長神ト云。委注略^レ之。中ハ澄。長ハ濁ル。〕

なごやか。透迤。〔遊仙篇。〕婀娜。柔。ヤハラカニ

穩ナル心。アツブスマナゴヤカニメネタレ

共君トシネ、バハダヘサムシモ。

なごら。梅枝ニ。コマカニナゴラナツカシウ。

ウツクシウ滑ナル也。是モナゴヤカト同詞。

ないえん。内宴。弘仁四年始有^ニ〔内宴〕^一。唐太

宗〔之〕舊風也。正月一二三日間ニ子日〔者〕

行之。〔藏人〕式。清涼殿記等〔云〕。廿一二三日

ニ子日有。便^{〔使イ〕}用之。〔私云。内宴ハ内々ノ儀

也。〕君臣獻^ニ詩歌^一。君ヲ奉^ニ祝也^一。久癢シタリ

シヲ。後白河院御時。信西法師申行〔テ再興

アリシ〕也。其後又癢畢。

なぞり。納蘇利。右樂名。ナツソリト可^レ讀。

なれ姿。馴。成姿。兩儀也。ナレルスガタ。馴

馴敷スガタ。是ヲミヨ人モトガメヌ戀スト

テネヲ鳴〔虫のなれる姿を。是ハナレル姿也。〕

なれて聞ゆ。物馴テキコユ。〔又イ〕メナラシ聞ユ。

なれき。馴公。女ノ名也。ヒゲ黒ノ大君ノ女。

なをくし。直々〔也。ホメヌ詞ト見タリ。〕

末ツムノ源ニヤル直衣ナヲくシク。質朴ナル躰。私。スナヲニカザラザル躰歟。

なにがしの院。亭子院京極御息所同車ニテ河原院ニ渡給事有。是モナズラヘ也。

なにがしのたけ。秘説。釋迦ノ嵩ヲ云也。

なだ。難灘。ヒキノナダ也。

なにがしのためし。昔ノタメシ也。紫明。昔

男ノ命ニカハリテ。母ヲタスケタルモノアリ。〔愚案。此事難信歟。可尋之。〕

なんずべきくさび。可難種。

なかさだ。〔中央。ナカサダ。文集。〕兩説。中定。中

比。末摘ニ。御年ナカサダノスヂニテト有。

私。中昔過テト云心。〔用之。さだ過テト云

モ比過テ也。サカリ過タル心。〕一説。長定能書也。此模様ト云心歟。先ハ中頃過テヲ用也。〔中定ハ〕中古ノ心〔ニ〕ヨリタルニヤ。

なかばなるけ。半偈。諸行無常。是生滅法。生

滅々已。〔寂滅爲樂。〕雪山童子半偈ニ投身

給事。總角。ナカバナルゲ訓ケン物ニモカケ

云々。

なで物。撫〔物〕。宿木。祈ニコナタヨリ身フ

レノ物。鏡帶ナドヲ陰陽師方ヘ遣ス物也。

なずらひ。明石ニ。岡邊ノ御文。目出タシト

ナズラヘナラヌ身ノ程。卑下ノ心歟。ナズラ

ヘナラズ。ナズラヘ歌。擬〔也。〕准也。

なへバミ。宿木ニ。勾宮人々ノケハイムヅカ

シキ程ニ。ナヘバミタメリ云々。衣ノナヘバ

ミタル也。フクダミタル心。又人ノ貞ニモ通

ベシ。健。スクヨカナラズヲナヘバムト云。

なよれる。初音。〔踏歌。かよれるトモたをれ

るトモアリ云々。〕武川。ウタイナヨレル姿。

カヨレル同心也。カヨレルハ袖カヘス也。又
タヲレル姿共アリ。

なミ／＼の人。箒木。カタ違ニナミ／＼ノ人
ナラバコソ云々。並々歟。〔私云。〕次々ノ人
也。〔如ニ〕日次月次^{（ツキツキイ）}等也。同心。

なだいめん。禁中亥一刻侍臣名對面。同刻侍
臣奏^レ之。後瀧口武者名對面。

な。宿木。コレナ〔ト〕オコセ。オキネハミ云
云。私云。ナウト云心。人ヲ呼起詞ナリ。

ないけうばう。内教房。内裏女樂舞妓居所別
當有。今ノオホトノキニ有。

ないしのすけ。典侍。内侍ノスケトヨム。尙
侍ハ内侍ノカミナリ。

なをしなど様かハれる色ゆるされ。六位ニ
テ禁色雜袍ヲユルサレケル歟。^{（リタル也イ）}

なよ竹をミ給へ。ハハ木々。ナヨ竹ノ心ちし
てと有。タヲヤカニソシカモヲレヌ物也。

なかのほそを。十ノ緒中ニ用中ノト云。是ハ

一ヨリ七マデフトヲ。八九十迄中ノ緒。ト爲
巾ヲホソフト云也。抄音院ノ流ニハ。一ヨリ
四スデヅ、フトヲ也。中ノヲ、バチトホソ
クスル也。大方中ニ細キヲ中ノホソフト可
心得。秘説也。

なかのを。箏ノ事ハ右ニ有。中ノ緒トハ和琴
ノ二緒ヲ云也。

なん付まじく。難付マジキナリ。

なでんの櫻〔の〕宴。康保二年ニ此事ハジマ

レリ。〔見ニ記録。略レ之。〕
なごみツ、和也。慰也。

なも當來導師。彌勒ノ御事也。

なかや。中居也。

なにがしの僧都。覺忍僧都。北山ノ僧都ト名
付也。

なのめにだにあらぬ。ヨノツネニアラス。ナ
ベテナラス心。

なまめく。媚。ヤサシキ心也。タヲヤカト云

字。コバシウナマメイタルト紅葉賀ニ有。

「たゞしなまめいたるトハ生ノ義。新シト云

心也。愚案。是モ」エンニヤサシキ心（イモ）「サマト

コソオボユレ」。

なでしこの青葉（わかば）の色。モエギノウスキ也。

なめし。無禮。「菅家万葉。輕。同。日本紀。」ナメゲ

ト同心。

なしかんじ。ツバイモチノ事也。椿餅ノ事右

ニ有。

羅

らうたし。勞。良。ヤハラカニホケタル心。

らうく敷。亮（ヤ）々也。良（ヤ）々也。ナツカシキ

也。私。オホドカニヤハラギタル心（ナツカシキイ）。上ラウシ

キ方ニヨレリ。稱美言。「りやうく」ト云モ

同心ナルベキ歟。蘭卷ニ。けはひのらうく

敷ト玉かづらヲ云ヘリ。」

らうし給。領スル也。

らでん。螺鈿。若ナノ上。カイスリタル也。

らうの程。辛勞ノ程也。

らざう。亂聲。ランザウト可レ讀。

らうろう。牢籠。若ナノ下。督君言カ、ル折

ニ牢籠ナラデハト有。

らうあり。勞也。

らにの花。蘭花（ハ）也。蕙蘭ノ蘭ハ別也。箋曰。此

儀如何。藤袴ニ。ラニノ花ヲト有。私云。假

名ニハ。ムヲニ、用也（トイ）。紫蘭シヲニ。牽牛子

ゲニゴシ。駒膽クタニ。樺櫻カニハザクラ

「等也。」

らうけ俄におこりて。母ノ尼老氣也。又靈氣

也。

らいし。壘子（いかつき）。衡重ノ上ニフチヲ高ノ。四方

或六角ニ色紙ヲ立テ。菓子ナドモル也。横笛

ニ。御前近きライシト云々。

らうがハしく。亂。狼藉也。

無

むべ。宜諾。承諾也。ムベシコソハサコソ也。

ムベモトミケリ。皆ゲニモ也。

むくつけ。蠡〔也。又〕貪〔也〕。ヲソロシキ也。

又深恨心歟。又ムヅカシキ心歟。

むくくし。蠡々。是モムヅカシキ心。ヲソ

ロシト同詞。

むごに。無期也。宿木柏木ニモ。ムゴニムカ

へ。スベテスバロゴトヲ〔サヘキコエ〕ノ給

ヲ。今ハ言ズクナニテ云々。對ニ小侍從ニ事。

むとく。無德。無得。又有德ト云コト有。

むつまし。昵也。ムツゴト。親言也。〔睦也。同

心也。〕

むねくし。ムネヲ立ル家。ムネトノ人ト云

所モ有。

むかいばら。當服也。

むかい火つくり。向火也。横柱〔又〕竹河ニ在。

日本武〔尊〕故事。野火來時。我方ノ草ヤキテ

フセグ事ヲ云。一説。カタハライタキニハ。向

火ナガラ〔イタク〕モノイハヌヲ云。人ニ物

イハセジトテ。〔イタク〕ニコヤカニ物イハ

ヌハ。來火ヲフセグ心也。

むらい。無禮。

むさいの人。無才人。

むしのこども。虫籠。〔虫ノ屋ヲ云也。〕

むごん太子。釋尊因位也。〔其外説々注文別

ニアリ。〕

むざんの法し。無懺法師。

むすびとめ給へ。人玉ノ事也。

むらさきのにバめる。紫色にび色ニかよひ

たるナリ。

むもれいたき。埋痛也。ウヅモレタラント云

心。ハレバレシカラヌ心也。

むかし物語のたとへ。伊勢物語ニ。鬼〔ハヤ〕

一口ニクイテケリト云〔ヘル〕事〔歟〕。

むねに手を置たる。愁ノ心ムネノ中ニヒシ

トアリテ。手ニテムネヲ抑ラレタル様也ト

云事。

むもんの櫻のほそなが。 櫻色ハ面ハウスク

ウラハコキスワウナリ。

むら／＼しき。 竹河ニ。コトノ情ヲクレ村々

シサ過シ給ヘリトアリ。

むつき。 ソラハノヒタシト云モノアリ。

むねこがるゝ。 三教指歸云。「寧莫」術婆伽

「燒胸中。」見紫明抄「術婆伽」ト云者有。「魚ヲ

トル人也。」后ヲミテ戀ノ已ムネホムラト成

テ燒死。其身ニ不相應ノ事ヲ「思物ヲ」バカ

ト云。

むつごと。 ムツマシキコト也。

有

うけバリ。 受張。承。請。諾。「桐壺。」

うちつけに。 ヤガテサシヨリナル心。

うちぎ。 掛。大小有。可然人或家アルジノキ

ル也。私云。掛ハウハギ也。上襦ヨキ下ニ着

也。桐ツボ「ニ」加冠祿。引入大臣祿ニ白大褂

ヲスルハ流例也。

うつくしミ。 愛也。

うけへバ。 ノロフ心也。ウテヒ共云。ツミモ

ナキ人ヲウケへバ。

うけハし。 うけふる。若ナノ上。咒咀也。ウケ

ハシメ。是ハ諾也。別心。又ハ不_レ受詞ニヤ。

うたゞある。 ウタテアル也。ウタバトハ彌々

ノ心。

うるせかりし。 ウルハシカリシ也。

うつぼのとしかけ。 物語名也。順作。卅卷。繪

合ニアベノオホシガ千々ノ金ヲ捨云々。カ

ラモリ。何も物語也。

うつしぎま。 現心。ウツシ心。マコトノ心也。

ウツシ心ナウスハ。狂亂ノ心也。

うつし人。 現人也。貝スラモイモセハミエテ

有物ヲウツシ人ニテ我ヒトリヌル。

うし車ゆるされて。 牛車宣旨。私云。中重ノ

ウチヘ牛ヲカケナガラ出入スル事。「輦車ノ

宣ヨリハ規模タリ。」

うへの五節。或本上ノ五節ト有。恒年ハ公卿

二人。殿上受領二人。代始ニハ受領五所也。

殿上人マイラスレバ。上ノ五節ト云ナリ。

うすびき出きて。クチヲツボメ肩ヲスヘタルケシキ也。身ノサムキ風情也。

うちどの。擣殿。綾打所也。玉かづら。爰かし

このうちどのかり。〔箋曰。板引ナルベシ。〕

うちきらし。打霧也。キリタル也。御幸ニ。打

キラシ朝曇セシ御幸ニハサヤカニ空ノ光ヤ

ハミシ。拾遺家持。打キラシ雪ハ降ツ、シカ

スガニ我家ノソノニ驚ノナク。

うちみだれの箱。^{〔ライ〕}巾箱也。サシグシノ箱。ウ

チミダレノ箱。^{〔ライ〕}カウコノ箱。綬〔字也。繪合

卷。〕コハロバ。

うたづかさ。雅樂寮。

うをゐろさせ給。藤裏葉。鶉ノ事也。

うら嶋のこが。夕霧。浦嶋ガコノ心ちなん云

云。浦嶋が箱ノ故事也。〔別注。〕夏ノ夜ハ浦嶋

が子の箱なれや。

うつしの馬。鞍名也。東屋。鞍置タル馬也。

うたゝね。假寝。

う治の院。平等院。

うちぎすがた。男ハ下ニキル物也。女ハ〔可

然〕貴人ノキ給也。^{〔イモ〕}

うちまさ。横笛ニ。若君ツタミナドシ給ヘバ。

ウチマキシチラシ云々。ヲサナ子ノ事有時。^{〔事イ〕}

ヲシ桶ト云物ニ白米ヲ入タルヲマキチラス

ナリ。又ハ道ナドニテ打マクナリ。

うつたへ。ウチツケト同心。ヤガテト云心。

ウチタヘナリ。〔蘭ニ。らにの花云々。うつた

へに思もよらでとり給。〕

うめき給。詠也。

うだのほうし。宇多法師。〔又云。宇田法師。〕

慈賀禪門事歟。^{〔也イ〕}〔彼禪門寛平御師也。奉レル

人ノ名ヲヤガテ名ニツケラレタル也。愚案。

慈賀ハ仁明天皇ノ御師也。時代以外相違歟。

重可ニ尋決。」和琴也。延久四年宇治殿命之。
於ニ南殿ニ御遊之時召ニ宇多法師和琴。其詞
「云」御タナラシ。此詞有レ故也。以レ檜ヒノ作サシ之。
内裏燒上時失却畢。宇多御門御名サシアヘ
バ。法師二字濁テ讀。秘説「口傳」也。寛平御
師ニ成。奉人ノ名ヲ名付也。

うちたれがミ。時鳥百千度ナケウナヒコガ
ウチタレ髪ノ五月雨ノ比。躬恒。

うない松。馬鬣松。馬ノタチガミノ如クナル
松也。墓所ノ松ト云々。「幻卷。」

うつせ。蜻蛉。イツレノ底ノウツセニマジリ
ケン。私云。無實貝ハ大カタ海ニコソ有ベケ
レ共。水ノ底ナレバカヨハシテ云也。

うみ松。「漂落ニ。」明石「君」五十日送。海松
や時ど共なきかけにゐて浪ノあやめもいかに
わくらん。

うへつぼね。對屋ナラデ。殿舎ヲ一シメタル
ヲ云也。「舊院御勘云。」中宮マウノボラセ給

折ハ。清涼殿ヲ二間「ヲ」上「ノ御」局ニシツ
ラウ也。「晝御座ノかた」の二間也。」

うづち。卯槌。或本卯杖。江次第云。春宮被

レ獻ニ卯杖。大進着ニ腋陣。付ニ藏人ニ進レ之。次

大舍人進ニ卯杖六十束。次糸所進ニ卯槌「卯

杖」。御机組并縫覆打鋪料糸十兩二分。三川

組料七兩二分。已上申請。納殿藏人取レ之。

結ニ付晝御座御帳角柱。副ニ立細木ニ爲レ柱。槌

末出ニ五寸「計」。

うむじて。孝子經。溫歟。漂落ニ。ミヤス所モ

思ウンジテ別給ニシトヲボス云々。螢ニ内

ノ乙戸夕顔上事ヲ云出スニ。ハカナキ物ウ

ンジヲシテ云々。「私云。」屈スル心也。

うまやのをさにくしとらする。驛長口詩「ト

ラスルコト。昔」天神筑紫へ趣給時。須磨卷

ニ有。口詩ヲ給ハス。其詩云。驛長無驚時變

改。一榮一落是春秋。只今五節君歌ヲ奉ニ。

源返歌ヲクチヅカラモキカセザル事ヲ恨テ

云也。

うたかた人。無^レ定人。未^レ必人。ウタカタ〔日本紀〕又少シト云心歟。

うたゑ。歌繪也。

うしろめたく。影護也。

うれたく。愁也。〔怨也。〕

うりうゐん。（スイ）雲林院也。〔紫明。定本ニハ雲林

院トカケリ。此說淳和ノ離宮也。後ニ常康親

王ニ傳ハリテ佛閣ニナレリ。愚案。家本古今

ニハうり院トモカケリ。如^レ此ノ假名トモカ

クモ有ベキニヤ。〕

うちハシ。打階也。

うちきの人めして。裴東奉仕ル人也。

うけひき給。ウケビ給共。承引也。〔又受也。〕

う近の君。將監ニアタル。下薦名歟。（ヘアリ）

うす物。羅也。

うなづく。顔許。又領狀也。

うるハシ。麗華。

爲右ノイニアリ。

乃

のら。草。万。野原。

のばりて。延也。ノバ、リトモ。

のしひとへ。玉カヅラニ。〔ウヘニ〕ノシヒト

ヘメク物ト云々。定家青表紙ニハ。ウヅキノ

ヒトヘト有。ノシヒトヘハ布帷歟。サレバコ

ソキナカビタル姿トハアレ。清少納言枕草

紙ニ。ヤセ色黒キ人ノ。スバシノヒトヘキタ

ルハ〔イト〕ビンナシ。同コトスギタレ共。ノ

シヒトヘハ。カタハトモミエズ。是ハネリノ

バリタル一重ト聞タリ。ヒトヘヲハリタル

上ニ。ノシヲカケタレバ。ノシヒトヘト名付

タリ。俊成説。ウスギヌ也。キヌト云ハウラ

ノ有物也。一重ト云ハウラナキ物也。此説不

用。〔衣ガヘノひとヘナルベシ。不^レ及ニ不

審。〕

のり物。賭。勝負ノ掛物也。賭弓。宿木ニ。御

門薰中將ト碁打給所ニ。ヨキノリ物ハ有ヌ
ベケレド云々。女ニ宮御帶ヲノ給也。以レ菊
賭トス。

のぢのおほい殿。野路。後ト云説有共。證本每
ニ野路ト有。瀬多ノ東ノ野路ノ事歟。行成自
筆本ニモ野路ト有。〔此上ハ是非ニ及ガタケ
レ共。物語ノ面ニハ見ヘタル事モナシ。如何
ナル子細ニテ云ベキニヤ。〕夏野ノ大臣ヲ野
路ノ大臣ト云リ。才學優長ナル人也。是ニナ
ズラヘタルニヤ。〔ト云説モアレド古ノ人夏
野ニ限ラズ。其うヘ居所マデヲなずらふる
ナラバ官ヲモかふベカラザル歟。只愚ナル
心ニハ〕又ハ忠仁公昭宣公共。前後ノ號有ケ
レバ。〔それに〕准タル共可レ申哉。私。紅梅卷
ニ。今物シ給ハ。ノ^{シイ}チノオホキヲトバノ御娘。
楨柱ハナレガタクミ給シ君云々。鬚黑事ヲ
前人ニナズラヘテ云歟。男子三人女子二人。
玉鬢腹ニ有。鬚黑ウセ給テ後歟。

のり弓のかへりあるじ。賭射還饗。匂宮卷ニ。
夕霧六條院ニテミ給トミユ。^{シイ}〔私云。〕ノリ弓
ノ歸ニ饗〔應〕ヲシテ。射手達并上達部雲客
ヲ招請スル也。饗ヲアルジト云。

のゝしる。匂。シカル心。拆檻ノ義也。

のもせ。道もせさにや成ぬる何狭也。セバキ
心。

のどめ。私。長閑心歟。

於端ノをニ加う。

具

くらづかさ。内藏寮。穀倉院。^イ桐ツボ。^ナ

くわざ。冠者。クワンザノ御座共。桐ツボ。乙女。

くら人所の鷹。〔桐壺。御〕鷹〔ハ〕藏人所ノ役

〔所也〕。馬ハ左ノツカサノ役。

くさバひ。種。右近玉カヅラノ事ヲ語ニ。源

氏スキ物共ノ心盡スクサバイニセン。

くま。隈。曲。阿。熊ハ獸也。獸ノ名ナレ共。黑

〔キ〕カゲ也。

くれなゐのこし。女ノ袴ノ腰也。

くつろぎがましう。箒木。アバラナル也。私。

極心ニ實ナルハ。ツヽマシヤカニツマル心。

其對ニメアバラニシドケナキハ。クツログ

心。〔仍云歟。〕

くれなゐのきぬ。總角ニ有。ゆるし色ノツマ

ナド氷トケヌカトミユト有。紅ノ衣ハ氷ノ

ヤウニミユルトアリ。

くろき車。服者車也。

くづをれ。顔。人ノヲトロヘタル也。退屈也。

くわん佛。灌佛。藤ノ裏バ。〔四月八日。〕

くんふかう。薰衣香。くのふかう同前。朱雀

院ノウツサセ給テ。公忠朝臣朱雀院此道ノ

長也。〔教隆卿説。あはせたき物ノ惣名也。爲

家卿云。薰衣香トとのゐ物のふくろトコト

ナル大事也。くぬえかうト云ヘルモ同事也。

愚案。たき物の一方ノ名ニテ今モ合セ侍メ

リ。惣名ト云ヘルおぼつかなし。梅枝。公忠

朝臣のことにゑらびつかうまつりし百歩の方云々。〕

くさのむしろ。草席。若紫。古ノクモイノ庭

ニアツマリシ草ノムシロモ今や敷らむ。慈

惠大師〔歌〕。

くし給。苦也。或屈也。退屈ノ心。薄雲ニ。明

石上ノビワヲ云。イカデカクシケン云々。

一ニハクンジケン。薰習ノ心。二ニハ具。濁

テ可^レ讀。箏トピワトヲ具シケン也。二共ニ

ヨクスル心也。可^レ依^レ所。大方濁テ可^レ讀。親

打グシテト云モ具也。

くしいたう。苦痛也。屈痛也。若ナノ上ニ。柏

木女三宮ヲミ奉。此夕ヨリクシイタウ。モノ

思ハシクテ云々。

くぞたち。屎達。手習ニ。トノモリノクゾ。同

卷。イヅラクゾタチ。古今作者ニモ在。クゾ

濁テ可^レ讀。貫之童名阿古屎。今世ノ人クズ

ト云リ。ゾトズト同音。青表紙。但定本ニイ

ヅラゴタチトアリ。

くねくしき。御幸。スクヨクナクヨハキ心。〔カイ〕

〔私云。〕クネリガマシキ心也。

くわろ。火爐。御幸ニ。野ノ行幸ノ所。

くちう。九重。宮中歟。椎下ニ。クチウナドニ

テ。〔愚案。定本ニハ宮中トツケタリ。九重都也。〕

くミハかり給ハぬ。斟計也。鈴虫ニ有。推察ノ心也。

くい太子。〔瞿夷太子。〕匂宮ニ有。羅護羅尊者。佛出家後六年經テ誕生スト。〔大臣〕疑之。抱レ兒投レ火入レ之。全テ不レ燒。〔悲華經。〕くるすのさう。久留守野庄。大將殿御領。夕霧くわんず。蜻蛉。カノ卷數ニ書付給ヘリ。浮舟母ノ方ヘ〔ノ返事〕。

くすりのこと。御門御惱〔ナド云心〕也。明石くしとらす。須磨。驛長ニ口詩むの字所ニ有。〔むまやのをさにくしとらすトハ口詩

也。或說駢使也。愚案。初說可レ用レ之。其上定本ニハク文字ナシ。後說イヨくヨリ所ナシ。聖廟ノ御事誠其よせアリテ哀ニキコユ。又櫛といふ人モアル歟。五節ニツキタル了見ナルベシ。不レ可レ用レ之。〕

くわさう色。萱艸。幻ニ有。

くさじるし。椎下ニ。僧都芹巖奉所。トコロ

ニ付テ。カ、ル草ヅルシモミスルト有。證本ニ無歟。〔此詞イ〕

くしをしたれて。梳押垂。笄髪アゲタルナリ。

末ツム卷。源氏カイマミノ所。

くわ。紅葉賀ニ末ツムノ返事ヲ太輔命婦ニ

トラスルニ。クワト有。篝火ニ。人ノアヤシト

思ラントワビ給ヘバ。クワヤトテ云々。サラ

バトテ出給心。

くるく戸。樞。〔ナンド也。〕

くろ木の鳥居。黒モンザト云木ニテ作也。

くだしける。思下也。ヲボシ下也。

くた／＼し。細碎。文集ニ。石竹金錢何ヲ〔ツイレ〕細碎〔クダシキ〕。

くさ／＼のたき物。種々。沈丁子香共也。

くせ。癖。

くらうど。藏人。男女共ニ雲上人同。〔ニカヨフ所ニシタガフベシイ〕

くす玉など。藥玉。私。五月五日ニ用之。或

語云。作以ニ百艸花一貫以ニ五色縷。懸ニ續命縷。則益ニ人命云々。

くしのたぶれ。孔子ノタブレ也。〔盜跖詞也。〕

屋

やむことなき。無ニ止事。

やまがつ。山兒。〔ヤマガツ。〕山賤ノカキホアル

共。山下人同。〔筈木。〕

やまのざす。〔マシイ〕山座主。

やそうぢ人。八十氏人。

やうめいのすけ。夕顔ニ。ヤウメイノスケナ

リケル人ノ家ニト有。源氏第一ノ秘事。

やうましき。ヤ、マシキ心。やましき心也。

又疑心。ヤウガマシキ心也。〔ワヅラハシキ也。又云。カシガマシキ也。又心ヤマシキ心也。御法。〕

やましげなり。病也。心病敷同心。

やつがれ。御幸。某ト云詞也。神代ノ詞。

やゝみ。良。〔ノ字イ〕漸歟。宿木。常陸泊瀬ヨリ歸時宇

治來。大將ノゾキ給。車ヨリヲル、ニ。〔此〕

人々ヤ、ミテ久ト有。〔クオリキザリヌイ〕

やかのたつミ。家〔ヤカ〕也。異也。

やぶはら。藪原。

やうの物。一樣有テヲカシキ物也。〔トツイ〕〔所々ニ見タリ。〕私云。物ニ付詞也。ハスノミヤウノ

モノ。

やまびこ。山彦。樹神。〔山孫也。こだまナド云同事也。〕

やうき。樣器。土器也。今樣ノ物。宿木。産養

銀ノ樣器。

やハたのごし。八幡五師。寺官也。貞觀八年

別當安宗以^{イモ}違如法師^{イモ}補^{イモ}五師。玉かづら。
八幡詣ニ昔ノゴシヲ尋也。

やくなし。無^レ益也。又無^レ役歟。

やまとさう。和國ノ相人^{イモ}也。

やまとこと。歌也。和國ノ事共云リ。和琴非^ズ。

やしま。八十嶋歟^{イモ}同事也。八十嶋使ナド云
事アリ。」

やうめいたる舟。カラメイタルト有。龍頭鰐
首也。

やさし。ハヅカシキ也。古今。年ノ思ン事ぞや

さしき。恥也。玉嶋ノ此川上ニ家ハアレド君
ヲヤサシミ、セジトゾ思。松浦仙人。皆恥也。
やらう。追ハラウ也。日本紀。追難^{ナヤラフ}。文選。夕霧ニ。

立ドマルベウモアラズヤラハセ給。

満

まめだち。斂^{イモ}也。マメダツ。遊仙窟。皺眉同上。」真

立。文選。マコトシキ心。

まめくしき。真々敷。同上心。

まめ人。展季。文選。真人。夕霧。大將ヲ指云。

まほ。「真帆。万。舟ニ」真帆片帆トテ。隨風引
也。マホナラヌハスグナラヌ也。「正シキヲ
真帆ト云心可^レ知。」

まどころ。政所。家司也。

まがく敷。「狂言。万。總角。」魔香々々敷。私。
イマくシキ心。

まうと。真人。朝臣ナド云類也。筈木。アネ君
ヤ真人ノ後ノヲヤ。源氏紀伊守ニノ給詞。私
云。真人ハ尸也。姓ニヨリテ尸ハ替ル。源平
藤橘ハ朝臣也。坂上ハ宿禰。田使ハ真人。其
外姓尸多シ。マツト、ヨムヲ。ヤハラゲテマ
ウト、云也。石川ノマウトニ帶ヲトラレテ。
カラキクイスルト云ヲ。扇ヲトラレテト云
云。花宴ニミユ。「又只汝デナド云トオボシ
キ所モアリ。」

まか^{イモ}はら。目皮。カウキヤウトマカフラタカ
ニノ。源内侍ヲ云。女ノサカリ過タルハ。目

皮黒ク成也。「まかふらト云説不_レ可_レ然。愚案。此説サモト聞ユ。定本ニハまかはらトアリ。おぼつかなし。」マカハ。マナブタノヲチ

入タルヲ云。

「まかはら。高_{カクヤウトマカフラダカニ}。眶。眶ハ目皮也。マカ

フラ。マナブタ。源典侍事。」

まし。「乃_{イマシ}。爾。ナンヂ也。イマシト云ヲ。イヲ

略シ。マシト云。惟光吾子ヲ云詞。冠者君使

ニ妹ノモトニ文持テ來時。又我ト云心。紫明

ニ丸也。

まくなぎ。

瞬_メ。瞬_メハス_也。物ヲカクシ忍ニハ

目クハシスト云。蛾。此云ニ魔愚那岐_{日本紀}。忍

タル心歟。又「奥州ニハ彼虫多テ。狩ニモ薪

取ニモ。アラ、ギト云草ヲ笠ニ取付也_{イモ}」タル

バヨラズト云。私云。此虫ノ事ヲ云ニ如_レ蛹

ニシテ少ナル虫。飛デ」目ノ回ヲ飛ヲミテ。

目ヲシゲク「マ」タ、クナリ。仍目クハシス

レバ。此虫ヲマクナギト云也。何モ瞬ノ字ノ心ナルベシ。

まかり申。暇乞ノ心。辭申。「日本紀。」イトマ申也。賽。カヘリマウシスト云字。

まさぐり物。モテ遊物。手マサグリト云。弊字ナリ。打もねぬねやの扇のまさぐりに。

まへしりへ。繪合ニ。左右ニサウヅキ分テ。

弓イル時左右ヲ前ウシロト云。若ナニ。六條

院小弓ノ所。前シリヘノ心ニコマドリニカ

タワカチテト云。

まうち君。大夫ヲ云。惣テ殿上人ヲ云也。

までこし。詣籠也。カシコニマデツキテ。京

ニマデコシ。皆詣也。柏木ニ。一條ノ宮ニマ

デタリ云々。マデトブライモ同。

まづの人。先ノ人也。若ナニ。ヤンゴトナキ

マヅノ人。

まなこゐ。眼睛居也。横笛。

まかびるさなの。若ナノ下。「終ノ語ナリ。」

摩訶毘盧遮那。言語道斷ノ心ト書。留所ナケレバマカビルサナノ如クト云バテタル也。深心ナルベシ。胎藏界闕伽觀ノ文ニモ。〔無始〕無終極重罪苦忽然蕩除ノ心也。

またゝ。玉鬘ニ。右近姫君ニ行逢詞ニ。ヨミチノホダシニモ。煩聞エテナンマタハキ侍ルト云。私。長イキノ目ノ働ト云心也。又夕顔。火ハマタハキテ。一説火ハ未焼テ。〔不_レ用_レ之。〕一説ハ灯ノ風ニ吹〔レテ〕動ガ目ヲタハクニニタルト云心。此説可_レ用也。

またぶ。叔極。〔音砂鴉。〕浮舟ニ。卯槌マタブリ山タチバナ。私云。禁中ニアルウヅチマタブリヲマネビテ。宇治ノ浮舟ノ方ヨリ中君ヘ送ル。

まゐ。的射。圓居。的射。若ナノ下。カハルマトキ有ベシト聞傳テツドイ給。是弓イル也。古今。思ドチマトキセル夜ハカラニシキタハマクラシキ物ニゾ有ケル。圓居也。〔凡

ハ團欒云。座スル也。〕

またや。大夫監詞ニ。マテヤイカニオホセラ
ルハ事ゾ云々。マテシバシ也。

まくらごと。枕言也。〔如ニ枕草紙事也。〕常
ニミル心也。〔一説ニハ〕朝暮ノコトグサナ
リ。

まふし。柏木ニ。マフシツヘタマシウ。

まづ鶯とハでや。先也。非_レ待。

まくらがミ。枕上。

まげさせ給へ。道理ヲ枉也。曲也。

まめやか。眞實。正首。

まとハレ。纏。マツウトヨム。〔紫明云。迷也。

愚案。此儀不_レ叶歟。〕

まつの下葉の紅葉。下紅葉するをバしらで
松のはの上のみどりを頼ミける哉。此歌ノ
心也。〔松ノ葉ノフルキガ色カハルト云ヘル
ナルベシ。〕

まかない。賄賂。可_レ依_レ所。

氣

けしうハあらず。不^レ恠。アヤシム。不^ニ下習。人ノミメ形ヲ云ニハ不^ニ下習。澄也。病ヲ云ニハ不^レ恠。澄也。〔或説けしからぬナド云詞ニテ可^ニ心得。〕

けせう。見證。顯證。玉かづらに。ケセウニ人シゲクモト云々。私云。ハレガマシク也。イチジルクアラハナル心。ケンセウ共。

けぢめ。結目。其キハヲイチジルクミセス也。げさう。見參也。濁。又ケサウ人ト云。心別也。けんぎ。嫌疑。横笛ニ。ヨノツネノケンギ。柏木ノ笛ノ事ヲ云也。

けいめい。葵^{ケイメイ}娘。〔遊仙窟。〕敬命。ウヤマイシタ

ガウ心也。花鳥驚心とアリ。〔經營也。〕

けそく。花足。〔ワラヒテナド云テ〕足ヲ高メワラヒテナドスカス也。葵ニ。ネノコノモチ入物。

けそん。家損。家ノキズト云心。常夏ニ。ヲノ

ヅカラケソン侍ケレ。

けやけし。尤。ケヤケフハシタナシ。イチジルキ心也。藤裏葉ニ。アシ垣ウタフヲ。オトドケヤケフモツカフマツレルト有ハ。無^レ憚ウタヘルト也。

けそう。化生。夢浮橋。ケセウノ人ナン。イカナル鬼ニカト云々。〔又顯證人。〕

けんざ。驗者。

げさくのよせ。外戚縁。

けちえん。掲焉。イチジルキ也。ハレガマシキ心。

けうのこと。希有。手習ニ。アヤシクケウノ事ト云々。

けうやく。校易。物ヲカヘタルヲモ云。カリソメゲニ物ヲ作ヲ云。

けんそ。見所。竹河。碁打所。

けハひ。箒木。景氣也。形勢。〔じねんにそのけはひ。氣^{ケイ}日本紀。形勢。猿樂記ニ景氣。〕

けちさす。「闕也。」結「也」。空蟬。恭打所。

げかけたる金。鈴虫。偈掛也。

けうせんの心。孝也。親ニ孝セントノ心。常

夏ニ有。孝行事也。けうしつかう給へる共有。

孝事也。シハ助字也。

けうじのぼさち。脇士菩薩也。觀音勢至也。

鈴虫。

けもんれう。花文綾。唐顯文紗也。

げざやか。寒。「サヤカ」。清。「同」。明。伶亮。「同」

所ニヨルベシ。」

けさハがしう。氣噪也。松風。内ノ大殿ノ御

堂チカクテ「カノワタリケサハガシウ。」

けんぞく。眷屬。

けれい。文籍「ニ」モ家禮也。「漢高祖朝太公

以ニ家禮ニ敬レ之。愚案。此事不レ叶。猶可レ尋

之。」又ハカレイ。

けうそく。脇足。（息也イ）

げんもあらせんかし。驗也。

けいしう。堅々。

けだかう。氣高。氣遠。ケナツカシウ。

けしのか。芥子香。護摩ニケシヲタク事。

けしきバむ。氣色也。

けさうし。身ヲよくつくろひ。やさしき躰也。

けしやうする。假粧。

けうら。交羅。

布

ふいに。不意。思ノ外ノ心。「思ハズニト云也。」

ふ動の本の誓有。其日數を延給へ。正報盡者

能延ニ六月「法」ト云「經文也。」

ふんつくりて。符作也。若紫。

ふようなる。不用也。

ふりハへて。態也。「ウチハヘト云心也。」

ふれはい。振舞。又フレハシ。（ミイ）フルハイ。（マイ）

ふるきのかハぎぬ。黑貂。フルキ。順和名。豹。

フルキ。毛詩。取「彼」狐狸。爲ニ公子裘。注

云。狐貉之厚以居。孟冬天子始裘。玉造小町
衣裝ヲ云ニ。菟裘豹裘。偶時紅藍色濃也。高
光少將入道〔如覺。〕ニ。中宮ヨリフルキ〔ノ〕
カラノ御ゾトテ給由集ニ有。夏ナレド山ハ
寒シト云ナレバ此カハギヌハ風ヲフセガ
ン。古ノ御門ハキ給トナリ。

ふぢの袂。素服也。藤ノヤツレ同。〔乙女。〕

ぶたう。舞踏。庭上ニ下テ君ヲ拜奉ル。

ふけう。不孝也。

ふりがたく。難^レ舊。不^レ舊。年老タレドフル
イガタキト也。フリセヌナリ。

ふんのつかさ。圖書寮。收^ニ納樂器^一所也。藤
裏^ニバ。ケウセツナル程ニ。上ノ御遊始テ。フ
ンノツカサノ御事ト云々。

ふつゝか。太也。ケスシキ心。フトシタル心。

〔愚案。下説オボツカナシ。〕

ぶんじんぎさう。文人ハ文章生也。擬生〔ハ〕
擬文〔章生〕。擬進ト云。〔箋曰。是ハもんにん

ぎさう也。もノ字ニ入ヘシ。〕

ふくつけら。ヨクガマシキ心。

ふところ紙。紅梅。フトコロ紙ニ取マセテ云
云。

ぶんず。文集。

ふびやう。風病也。又ハ腹痛〔トモ云ベキ〕歟。

ふさハシ。庶幾也。不祥。〔日本紀。〕フサハシカ
ラヌハ十分ニソキセヌ也。

ふてうなる女。不調也。

ふる物あつかひ。玉鬘ニ。内ノ乙^{〔大匠我イ〕}戸御女トシ
ラデ。源ヲヨクムヅカシキ古物扱哉ト云ケ

チ給。舊縁ヲ尋^{〔尋イ〕}悦テモテナスト也。

ふぢハこなたのつまに。藤ハ東ニウヘシト
也。

ふずく。粉熟。食物也。金谷苑記云。獻^{〔台イ〕}赤粉
餅。寄木ニ。中宮五夜ノ産養カホルサタノ所

ニ。センカウノ折敷。タカツキ共ニテ。フズ
ク參給。藤ノ宴ニ。宮ノ御方ヨリフズク參給

有。「調之樣別注之。」

ふでのしり取ハかせぞなかるべき。「侍從筑紫へ下リナバ誰ガシのヲモ詞ヲモをしふべきぞト也。愚案。侍從ガ筑紫へ下ル事ハ蓬生ト見タリ。只今源氏ハいかでか思やるべき。いかに云ヘルニカ。又筆の尻トルトハ」ヲサナキ人ニ物カゝスルニ。手ヲ「トラヘテカゝスル事ヲ云ヘルナラン。」取訓心。侍從筑紫へ下ナバ。誰カハ詞ヲモヲシヘントナリ。

ふさいのかた。夫妻。

ふくいとくろうて。服黒色也。フクラカニコヘテ色黒人歟。光行説相違也。初テ參人着服ト云リ。「俊成ト光行ト談合ノ句ヲ切り聲ヲサシケルニ。墨ニテサシタリケリ。其イハレハ初參人着服不可然。ふくらかニ肥タル人也。ふくと計云テラ文字ナキ事と語ノ習也。然ルニ俊成女説ニハ服也云々。相違シタルオボツカナシ。阿佛房モ服ト云ケリ云

云。愚案。ふくらノ義尤不審也。此女宮仕ノタメ初參スルニ非ズ。彼夕顔ノ形見ニモトテ召寄ケルト見タリ。黒服何ノ憚カアラン。其人ノ心ヲ思ニ。いく程ノ日數ヲ過サズ服ヲヌギ捨テ宮仕ニ出タツベキ物ナラヌニヤ。其うへかたハならぬわかうとなりト云ヘリ。色ノいと黒カラン事如何ト覺也。いとト云ヘルニテモ了見アルベクヤ。」

ふかう。不幸。

古

こよなう。無^(輕イ)越。閑雅。幽玄儀也。無ニ此世ノ物ノマサリタル心。「タトヘバ事ノ外ト云心ナルベシ。」

こもの。木物。獻物。色々説有共籠物ヲ用。ことえり。言撰也。

こいら。巨々等。多キ心。「多々等。日本紀。」こといみ。言忌。事忌。可^レ依^レ所。御幸ニ。天子ノ出御「之」時マシマス

床也。^{〔座イ〕}御倚子。

こめき。委也。古メキコメカシキ。又ハカナクヲサナガマシキ心ニモカナヘリ。コマヤカナル心。〔コ、シキ同心也。〕

こゝろじらひ。心知也。又心遣也。

こまやか。濃也。〔私云。非ニ稱美之詞。歟。愚案。コマヤカナリトハ色ノコキ也。〕

こゝのしな。九品〔也〕。上品上生〔等〕。夕顔ニ。大ニノ乳母所。源詞。

こゝしき。古々。巨々。若ナノ下ニ。スコシココシキテツキ共ヲコソマセメ。古々也。乙女ニ。ニホヤカニココシク。濃ナル心也。

こゑたてぬ念佛。夕顔。万歳身後抄云。葬送以前無言念佛。立歸歸則〔限ニ佛事〕。懃之。こだい。古代。末ツム。衣箱ヲモリヤカニ。古鉢用之。

こゝろバシリ。ムナサハギスル事也。こまのくるミ色のかミ。ウスヤウノカミ。ウ

ラ白シ。面香色。但面ハ白歟。高麗胡桃色紙。こまのうすやうの紙。内ハ白シ。外ヨリハ香色也。〕

ことなしひ。無爲。須磨。古今。村鳥の立にし我名今更ニコトナシフトモシルシアラメヤ。こうらう。古老。或考老。

このさうのめいばく。今生面目。

こゝろば。梅枝ニ。沈ノ箱〔ニ〕ルリノツキニスヘテ大ニマロガシツ。心葉。紺ルリニハ五葉ノ枝。白ニハ梅ヲエリテ。同引ムスピタル糸ノサマト云々。拾遺歌。淺からぬ契結べる心葉ハ手向ノ神ぞ知べかりける。心葉事。〔多聞ニハ〕箱或クリガタヲ云説有共。〔箱ニ付タル緒ノクミト心得タリ。然ルヲ或人五葉ノ枝梅ナドヲ金銀ニテエリタリトアルハ。箱ノクリガタト見タリト云々。又心ばニ歌ヲ書トアルハ箱ノクリガタニハ書ベカラズ。緒ノクミカト覺ツカナシ。其モ組ニハカ

キニクシ。書テ付タル歟。所詮金銀ニテエル
トアレバクリガタ、ルベキ歟。又答曰。或云。
金銀ニテエル。クリガタ勿論也。其「クリ方
ニ結付タルクミ也。詞ニモ結付タル糸ノサ
マト有。既ニ綬ノ字コ、ロバムトヨマセタ
リ。猶々組ヲ以爲正。〔むねとノ葉也。〕
ごち。獨言。ヒトリゴチ。

こたみ。今度也。コタビトモ。

ころくし。ホレくシキ心。コトくシキ
也。

こともなく。ヨキ事モ云。柏木ヲ云ニ。オナ
ドコトモナク云々。

こまかげ。コマカニ也。乙女ニ。女房ノサウ
シマチ共アラくコマカゲゾ。大方ノ事ヨ
リモ目出カリケル。或本アテくコマケウ
ト有。私。コマトル儀也。若ナ。左右ニコマト
リテト云モ。アラく左右ニ分タル也。是
モ局ニ分タルナリ。コマケウ。コマカナル心。

〔コマカ也ト注スル。或本ニ。コマケウトア
ルニ付テ注スル歟。〕

こまとる。狗取。狛歟。細取。細分ナドイヘル
成ベシ。コマ〔カ〕ゲ同心。

ごくらく寺。極樂寺。在ニ深艸。昭宣公建之。

私。昭宣公芹河行幸。仁明天皇時。筭ノ造爪
ヲ落シマシマシテ求ニ遣ス時立願。仍求出
テ奉給。果シテ後ニ。其所ニ建立シ給寺也。

ことぶき。〔祝言。日本紀。〕言吹。〔同。〕説言。壽。
日本紀。源氏詞。ワレコトブキセント打ワラ

ヒ給。

ごかのしらべ。五ケ調。又胡笳。若ナニ。アマ

タノ中ニ。琴ニ有五ケ調。搔手。片垂。水。
蒼海波。鴈鳴調。或胡歌。胡笳。

こと共。絃物名也。圖書寮。藤裏バ。フンノツ
カサノ御コトモ。

ごのからの君。權守君。ゴンノカウノ君ト可
レ讀。

ごろくのハラ。若ナニ。五六ノハラヲ面白ク引給。万秋樂五六帖初コソカハレ。皆破ニ返付也。仍五六ノ破等ト云也。〔或云。〕五六ノ撥トハ。調子ニツカサドル絃也。不_レ用。

こに女こそ。コニ。爰也。若紫ニアリ。

こしん。北山僧都。〔若紫ニ。〕護身マイル。加持スル事。

ごたち。女房惣稱。後達。御達。子達。女ハ夫ノ後ニ居也。後漢〔書〕云。夫ノ後云々。〔鄭玄注ニ云。禮記云。在ニ夫之後。故后ト云。〕故后ト云モ後ノ義也。仍〔女ヲ〕後達ト云。〔又御達ハカシヅク義也。母御。姉御。妹御ト云ガ如シ。〕子達ハ女實名ヲ何子ト云。何子達ト云。澄テヨム。又木立。庭ノコダチ。家ノコダチ。別也。

ごてのぜに。〔圍碁出錢也。愚案。圍碁手錢〔歟〕。宿木ニ。中君ノ産養五日夜。薰ノサタノ所ニ。屯食五十具。ゴテノゼニ。ワウバン

ナド有ト云リ。攤打事也。又親王誕生圍碁ヲ打出錢。

こて給。東屋ニ。御門ノクチヅカラコチ給ヘ_ル。御詮アルノ心。コチ〔コト〕コテ同心言也。こだに。木蛸。宿木。コダニナドスコシヒキトラセト云々。〔深山木ニ浮草ノ姿ノ蔦ナドノやうニヒシト取ツキタル物也。〕

こむがうしのずい。金剛子念珠。若紫。僧都ノ奉ル數珠也。〔法隆寺ニアリ。〕

ごけい。御襖。ハラエ也。

こうじて。困。花守クタビルハ心。屈シタル也。又ハクルシム心。須磨。〔いたくこうじて。〕明石。蜻蛉〔ニ。物きハこうじて。〕

こんぢの袋。紺地〔ヲ〕可_レ用。コト比巴袋也。こもき。女ノ名。犬公。アテキ。ナレキ同。公字也。

ごぜん。

御前。前驅隨身。

こだう。小堂也。

ことつい。琴粒。秘書云。事粒也。狛氏十秘抄云。コトツキ。コトツイ。コトサイ三説有。コトツキハ人ノカホツキナド云心。事粒「ハ」其姿カキツボミタル物カラ。物々敷ケダカク。コマヤカニアヒ「ア」タル心也。コトサイハ人ノアシクヨミ付タル也。不_レ可_レ用_レ之。琴ト云字非事也。

こうろ館。鴻臚。在_ニ七條坊門西朱雀。貞觀十四五十七鴻臚館芳_ニ問渤海客。伊勢物語。渤海トハ高麗也。七歳ニテ逢_ニ高麗作文例。ウツボノトシカゲニアリ。桐壺。」

ころの御とくなきやうなれバ。^(トイ)「イマダサカリニハアラヌ也。或説みづからナリト云々。愚案。」或本。孤露ト付タリ。シナシコノ頼ガタナキ心也。

こうさう。業障。又興盛。夕霧。ゴウサウニマトハレテ。

こうらうでん。後凉殿。俊成「説ニ。りやうト

ヨムベカラズ。大カタ假名書ノ物正字ノ如クヨメバ強クキコユ。他事可_レ准_レ之。愚案。常ニハコウリヤウト云歟。親範口傳ニモリやうト侍シヤラン。桐壺。」リヤウトヨム。コハキト也。

こうにおもき。重切。「ツムル心也。」

こうつきにけり。業盡也。

こだま。木神。空谷響同。

こちたし。無_レ骨也。「此注不_レ叶。但可_レ隨_レ所歟。」

こゝろバセ。心操也。

こがしたる。扇ナド薰ノ香フカクコガシタル也。

こゝろづきなし。無_ニ心付_一也。「又無_ニ心月_一こまの物語。古物語「名也」。^(イナナシ)スカウノ枕草子

ニ有。クマ_一。^(トイ)「物語ト書タル本モアリ。證

本ことにこまトアリ。愚案。こほくまの_一物語トアリ。」如何。

ごぜんの人々。御前人々。供奉人也。

こめやかくなる。コメカシキ也。クハシキ心。

「こめきたるトモ。ホメタル詞也。」

こせのあふミ。巨勢。姓也。

ことかハすべき。言通也。

こしのべて。休息ノ心。

こゝろバミたる。ヨシバミタル也。心有躰也。

こもち。宿木ニ子持也。

ことがなかに。殊中。コトナル中ニ也。

こゝろいられ。イソグ心也。

ことゝありくなれバ。態ガマシキ心也。

こまかへる。若反也。ワカヤグ心。

このミ「の」心。好心「也。愚案。定本ニハこの

みの心も見まほしうトアリ。」此御心共「ヨ

ムベキ歟。」サレ共「此所ニテハ」好色「猶」叶

ヘリ。

こゝろバへ。意見也。「日本紀。」

ごくねち。極熱也。

こくさうぬん。あさめ殿ノ事。「穀倉院。桐壺。」

衣「江字上聲ニ讀ベシ。へ平聲。ゑ去聲。

但下ニ引レテ聲不レ定。」

え。エニクミ給ハズ。「ジイ、イ」エモイハズ。「シ」吉字「也。

住吉。スミノエ。日吉。ヒエ。此類也。」

えにこそ有けれ。縁也。

えならぬ。艶也。ホムル詞。「愚案。ならぬト

云ヘル心也。カタキ様ナレ共。スサメスト云

ニモ兩儀アルニヤ。心へ侍ベキ。」

えさらぬ。敢。「イナシ」吉最不レ去也。

えんずれバ。怨也。ヤサシキ方ニ用。嫉妬也。

又エンタチ。物ハヂスルハト云ハ艶也。縁ノ

所モ可レ有。別也。

えごゝろ。艶心也。

えびのか。衣被香。タキ物也。ゑびかう共云。

えびかづら。蒲萄鬘。エビカヅラノツクロヒ

給云々。伊弉冉尊カヅラヲナゲ給ヘバ。エビ

ト云カヅラニ成タルト也。「又」俊成ノ女

〔説〕。カヅラトイハン爲ニソヘ給ト也。〔タリイ〕

えびぞめ。葡萄色也。紫ノ黑色也。

ゑひまき。纓。冠事也。着服人卷ニ冠纓。

ゑかのきんだち。垣下公達。竹河。大キヤウ

ノエカノキンダチ云々。公事等ニ有レ之。大

饗大臣〔來〕公卿達事。

ゑかう。回向。督君尼ニ成所。源氏ノ詞有レ之。

總角。イトタウトクツクエカウノスエトア

リ。

えがちにおハす。若ナニ。若君ヲ云々。ヲヨ

スゲテエガチニヲハス。笑也。

えだをかハさん。秋ちぎる言葉だにもかハ

らずバわれもかハせる枝と成なん。

ゑぶの身。閻浮ノ身ナレバト有。エンブトハ

人界ノ身ナレバトノ心。

傳

てくるまのせんじ。輦〔車〕宣旨〔也〕。輦ヲ手

車ト云。〕如レ輿ニテ手ガキニスル也。尊者

蒙ニ宣旨。乗ナガラ宮中ヲ出入スル也。牛車

ノ宣ハ猶下ノ事也。牛〔ヲ懸〕ナガラ〔内裏〕

出入スル〔也〕。桐ツボノ更衣マカデ様ニ宣

旨有。又檠柱ニ。尙侍出給ニ御輦ヨセテト有。

或本ニ。常ノ車ヨリチイサクテトミノヲ長

シ。六符〔所敷〕ノ官人役ニテ。カキテ出入スルトナ

リ。

てハ紀の貫之。能書也。繪合ニ道風ニ番〔也〕。

てん上のゝり弓。殿上賭射的。正月十一日

〔式日也〕。

てんげん。天眼。冥鑒也。冷泉御詞。〔定本ニ

ハ天のまなこ云々。〕

てがく。手〔搔也〕。夕顔ニ。あなかまとてが

く。〕人ニシラレジトテ。言ニ不出ノ手ニテ

招也。

てうがく。調樂。〔箒木。〕臨時祭ノテウガク。

私。賀茂臨時祭。宇多御門ヨリ始。十一月午

日北陣ニ幄〔屋〕有ニ儀式。有ニ饗膳勸盃。

てうはい。朝拜。元日ニ。

てうじ出給。調出也。

手うたぬ心ちし侍。「心モトナキ心也。」人ヲ

呼トテ手「ヲ」打也（イモ）「ツハ心モトナカルマジ

キ心也。愚案。此注難信之。」何事ぞ心にか

けて手をうたぬ。又手打ホコリ祝心モアリ。

又ハ風度シタル事ノ有ニモ打也。又眞言師

「行法ニ」拍掌トテ手ヲ打「ツモ」歡喜ノ心也

「トゾ申侍メル。」

てん人のかけりてびハの手をしへける。西

宮ノ高明親王ノ事。

てのさきばかり引たすけ聞えん。初テアイ

タル男。三途川「ヲ」引コスト云事アリ。「本

文可尋之。」

てんべん。天變也。

でうど。調度。

てんつかるまじさふるまひ。テンカチラル

マジキト。人ニホメモソシリモセラルマジ

キトナリ。

阿

あいなう。無_レ愛。無_レ間。「私云。無間ハタヘ

マナキ也。」心別歟。

あつしう。靈運。當遷。日本紀。「庭。劣。同。庭。

アヤウキ心也。」桐ツボ更衣ヲ云。ヨハキ心。ア

ヤウキ心。

あぢきなう。無爲。勘心也。日本紀。無道。「同。」

無端。「無狀。同。無爲。日本紀。漢書。無事。万。」

あはづかに。淡付也。アハノ敷也。淡惡也。ア

ハタバシキナリ。「頓。日本紀。迅永。古語拾遺。」

あかるゝ。分散也。「簿本ニ。まかりあかるゝ

に預」別也。御アカレ同。別也。ナカレト云心

有歟。「わトカト同音。あかれノ下ニ合見ベ

シ。」

あはめにくむ。淡惡也。阻。アバムル。カルシ

メニクム也。

あへ（イイ）か。アキラカ也。

あいたれ。愛垂。キツトモナキ躰。ナヨビタル心。〔カド〕シキケモナクなよび過タル氣色也。〕

あえかなる。ヨハキ心。夕顔ノ上ヲ云ニ。ラウタゲニアエカナル云々。八雲ニ。ウツクシクヒハツナル也。若ナニ。マダイトアヘカナル御程ト。女三宮ヲ云リ。

あてはか。嬖妍。〔アテハカ。日本紀。〕又風流ノ心。タヘニハカナキ心。妙ニウツクシキ心。

あやめ。綾目。綾文也。八雲ニ〔ハ〕。善惡ヲ〔モ〕ミワカヌト也。〔イモ〕或説。是非シラヌ也。〕

あざへたる。近江君アザワラウ。あざれかくれハ。ザレカハル也。アハサ、ゲ物。あざり有て。アザリアリケ共。皆ザレタル也。

あをに。青丹。アヲニヨシ奈良トツバケタリ。〔委見ニ袖中抄。〕

あを。襖也。〔關屋。〕色々ノアヲノツキシキ。括染ノサマ云々。

あてき。妙公。葵上童也。〔紫記ニ。たくみの藏人なげしの下に升て。あてきがぬふ物のかさねひねりをしへねども云々。如〔此記〕者〕アテキハ司人物名トミエタリ。何キト云類多。其時ノ司人ヲアテキト云歟。〔又公ノ字ヲ用フ。〕

あを馬。白馬節會。正月七日。私。青馬七疋。青陽色春。七ハ陽數。馬ハ陽獸。見レ之除ニ年災。

あるじ。饗。〔アルジ。飯也。〕又主。〔所ニヨルベシ。〕賭弓還饗。人ノマウケノ饗。諸社祭ニ飯スヘヨト催コトヲ。上卿ノ詞曰。ミアルジツカウマツレ〔云々。飯ヲモヨホス詞也。〕

あまそぎ。フカソギ也。薄雲ニ。此春〔ノ比〕ヨリオボス御クシアマソギノ程ニテ云々。或本ニハ。アマノホドニテトアリ。

あそびめ。遊女。青表紙ニハアソビト在。漂落。住吉詣ニ。アソビト有。あそびをこのむ。〔以下イナシ〕

タハレ女。遊女也。只遊戯ノ心。依^レ所也。

「あそびをこのむ。タハブレアソビヲコノ

ミ。乙女。遊女也。愚案。漂漂卷ニ云ヘルハ誠ニ遊女ナルベシ。乙女ノハ遊戯ノ心ナルベキ歟。」

あまがつ。天兒。^{アマツツ}松風ニ。御ミハカシアマガ

ツ三歳迄用^レ之。諸事凶事ヲ是ニヲホス。

あをじ。青磁^{アヲサズ}也。又云。青衫^{イモ}也。愚案。此注不審。處可^レ尋之。

あふさず。玉かづらニ^{トイ}オボシアフサズ。

「河海ニハ放埒也。^{ミテレドモ}」孝經^ス「云」。満而不^レ溢。

あふより。アナタヨリノ心。玉鬘ニ。御手ノ

スヂアフヨリニタリ云々。昔ニヨリ古様ナル心。「あふトハアナタト云也。行成卿説。愚案。此注猶不審。」

あまえ。^{アマエ}幻ニ。サヤウニアザヘタル。同詞也。

ザレタル心。

あまへたる。甘得。アザヘタル薰。又甘臭。ア

マクサキ物也。

あざれたる。鰺。論語。私。損タル也。直衣ノフ

クミアザレタルト云ハ。フクダミ損タルナ

リ。花宴ニ。アザレタル大君姿ト源ヲ云ニハ。

鰺字不^レ叶。宿木ニ。右大臣六君ニ。勾宮初テ

渡所ニ。物々敷アザヤキテ。紅葉賀。アザレ

タル打キ姿。各花宴ノ心ト同。アザレアザヤ

ク同詞歟。又ハ装束ノシバラノキタルナド

モ可^レ云歟。所ニ可^レ依也。ア文字サ、ゲ物

也。ヨシバム共可^レ心得。又タハブレタル詞

也。俊成口傳ニ。ハイカイ歌ヲバ。ザレウタ

ト云リ。「宿^{アザレタツ}日本紀。宿老。同。」

あくらう。惡靈也。

あくら。幄等。舞^立時樂所也。柱ヲ四立。マ

シマクノ様ニ物ヲハリタル也。

あけたてバ。明立也。^朝「夜ノアクル也。」

あのごと。如^レ案也。アムノゴト、可^レ讀。ア

ノゴト、モアリ。

あらまじき。荒也。宿木ニ。アラマシキ男云云。浮舟。風ノ音モ「イト」荒マシク。

あげまき。末ツムニ。ヨモギフノ宿ニハナチ放

カウアゲマキト云々。童ノ馬牛飼也。頭（頭イ）ノ總角ナルニヨテ也。童ノ惣名也。又車ニモアリ。

又催馬樂ノウタイ物也。「總角ハわらハノ髪ユイタルカタチ也。」

あたへかへして。ホコリタル義。又アミタ歟。

あへまじ。帚木ニ。タテヌフ方ヲノドメテ。

長キ契ニゾアヘマシ云々。アヤカラマシ也。

アヘ物ト云ハ。アヤカリモノ也。

あべし。アルベシ也。アンベシト可レ讀。

あへなん。有ナン。初音ニ。山臥ノ身ノシロ

衣ニユヅリテアヘナン。敢南ハ別也。

あはせの袴。古ハ「ネリ」袴ニ綿ヲ入ル。サレ

バ取分テ合袴ト云リ。ネリタル也。今ノ女房

ノ馬上ニキルサシヌキト云是也。

あて人。妙人。アテヤカニウツクシキ人也。

あふささるさ。左右ト云心。コナタカナタ也。

ソヘニトテトスルモカクアルモトノ心。（古今モヘにと云タイ）

あべのおほし。安倍ノ多シ也。繪合。繪名。ウ

ツボノトシカゲ。クラモリヒネズミ。

あしがき。催馬樂。藤裏葉ニ。弁少將ウタウ。

あくるまさを。明間開也。宿木。朝顔ノ事。

あふなけに。無レ奥也。御幸ニ。アフナケニノ

給。澄テ可レ讀。又老心。所ニヨリテ濁テヨム

ベシ。

あだげ。（化。日本紀。アダゲ。）アダナル氣色「歟。若菜

上。ふりせぬ御あだげ。アダナルケノいつも

タヘヌト云也。」

あへなからん。末ツムニ。アカハランハアヘ

ナカラシ。アリナシト云詞。

あかれぬ。玉鬘ニ。ケフノアフセニ身サヘナ

カレヌ。又アダナル心。アカレヌト云詞。ワカ

レヌ心。不分別ノ心歟。「思ワカレヌ歟。不審。

分別ノ心也。又ハ不ノ字也。箋曰。身さへな
かれぬト青表紙ニハアリ。あかれぬノ義不
審。」

あしこもと。宿木。アソコモト也。若ナ上ニ
モアリ。シトソト同。〔音通イ〕

あゝ。若ナノ上。明石姫君ヲ耳モヲホ〜シ
ケレバ。アハト傾テキタリ云々。

あかとき。曉也。宿木ニ。弁常陸〔又イ〕宮泊瀬歸
ニ「逢テ」曉ヲハシツキ。

あいぎやうづき。愛形付。愛敬也。

あハたゞしき。周章也。

あいしう。愛執。罪也。〔夢浮橋。〕

あをバの山。「青羽山」。奥州ニ有。〔イモ〕又云。尾

張ニモ有。又ハ只も「青葉ナル山ヲモ云ヘ
リ。夢浮橋ニモ見タリ。」

あをずり。青「文アル唐」紙也。五節ノ比便有
也。

あなかま。穴喧。

あだしの。清輔抄ニ。名所ト見タリ。〔レドモイ〕但アダ
ナル心〔イモ〕「事ニヨセテ云ヘル」歟。

あんにおつる。如案也。「案ニ落ル也。」

あづまあそび。「和琴也。愚案。此注難用歟。

可レ爲ニ東遊也。

あづまをすがゞきて。琴ヲ引心也。アヅマト

計モ琴也。又東詞トテ道ノ秘事也。常陸ニハ

田ヲコソツクレ。風俗ノ第一也。東ノ詞也。

スガバキテ。是ヲウタウ事。今ハ知タル人ナ

シ。其ヲ知ン人ハ心得ヨトテ書置也。「和琴。

大夫狀云。あづまト申名ハ和琴ヲバタバモ

申候へ共。東調トテ道ノ秘事ニテ候。常陸ニ

ハ田ヲコソツクレト風俗ノ秘事第一ニテ

候。東ノシラベスガバキテ。是ヲウタウ事。今

ハ知タル人モスクナク候ラン。其ヲ知ン人

ハ心得ヨトテ書置テ候ヤラント思候へバ涙

難禁候。」

あてに。高貴妙也。ウツクシキ事也。

あつゐ給。アツシク「ト云ヘル」也。「愚案。定本ニハあつゐトアリ。あつゐ給トヨムベキ歟。」

あこへ侍。過分「之」義也。

あふミ。相覽。巨勢ノ相見也。金岡同時ノ人歟。但「高名錄ニハ」金岡以前ト見タリ。「紫明ニハ相見トアリ。」

あざなつくる事。字名也。「藤寮。源榮ナド云

名也。」

あさハカ。淺也。

あき人の中にふること聞ハヤ寸。ビハキン

ニ見タリ。

あさがれいの氣色バカリ。朝餉。清涼殿朝供

御也。大床子飯ハ夕供御云々。勘^(云イ)之。大床子

ノ御膳號ニ晝御膳。朝夕ノ供御。藏人以下四

位侍臣「陪膳。四位」五位六位役ニ送之。陪膳

有番。仍自陪膳。上首モ役送常之事也。是モ

上古ハ女房陪膳也。是寛平御「遣」戒。

あざむかれ。欺。「又」詐。睨セラレン也。此詞

二義有。八雲抄云。一ニハ表ル心也。誰カハ

秋ノ來方ニアザムキ出テト云ハ此心也。又

一ニハ愛ル心也。何カハ露ヲ玉トアザムク

ト云ルハ愛心也。「大方此詞ハ本書ナドニモ

多クハ」人ヲ僞出シヌク様ナル心ニモ有^(云ヘリイ)。縦

バ有事ヲモ無ト云。無事ヲモ有ト云ガ如シ^(以下十三字ナシイ)。

タバカリヌク心モアリ。「テ人ヲハカル也。

愛スル心ハ見ヘ侍ラネドモ。八雲ニ載ラレ

タレバ所ニ隨テ了見スベキ歟。」

あしよハ車。輪ノヨハキ也。

あせずバ。ヒズバ也。

あしで。葦手。双紙名也。歌ナド思々ニカケ

トノ給ヘバ。アシデ色葉ト云々。

あじろ屏風。遷篠。竹ニテクミタル屏風也。

あまびたる^(云ハ)。尼額。

あしゆいのくミ。只足ヲユウニハ非。スハシ

ノ糸ヲ色色ニ染テ。マハリニアハビ結ヲシ

テ。足ヲカラミ〔テ〕長ク打ハヘタリ。スソゴニソムル〔也〕。

あつ物。若ナノアツ物也。

あしきけのゝぼりたる。氣上ノシタル事也。

あかの花。紅ニアカノ花ノタハブレ（タハブレ）。闕伽。

土器ニ佛（イモ）ニ供スル花ノタハブレ也。

あさハなだのかいふのもん。大浪ヲ文ニヲ

ル也。海浦ノ文ナリ。

あつかハしき。オボエモラナシ也。心ヲツヨ（テ職）

クモテハナレアツカハシキ也。蟬ノ聲アツ

カハシキハ熱也。モテアツカイタル心。

ありか。有所也。〔又栖（アリカ）。當。古語拾遺。〕スミカ

同心也。古今。風ノ上ニありか定めぬちりの

ミハ行衛もしらず成ぬべらなり。

あふなく盃取給。懇ノ心。一説アブナく。

兩説歟。

あまぎる。空ぎるなり。うちきらし。打霧也。

あんゑ内供。安恵。天台座主慈覺大師弟子。

此時始任ニ阿闍梨云々。

あなたうと。安名尊。催馬樂呂ノ歌。

散

さぶらひ。殿上ヲ内ノサブライト云。〔又殿

上ニツバキタル所ヲバ下侍ト云也。勘云。侍

所トハ殿上也。臺盤所ヲバ女ノさぶらひト

云也。〕

さけず。御アタリサケズ。不遠也。又不離

也。

さすらふ。伶俐。龍鐘。タハヨウ也。〔若ナ。〕

さうじミ。正身。正自身。〔同。正員也。〕所ニ付

テ〔ツコノ〕主人ヲ云。

さゝやか。少々。狭々。細々許。〔サハヤカニシテ。〕

ホソクチイサキ心。

さしすぐひたる。サシ過タル也。

さがりバ。下場。カミノサガリバナリ。〔愚案。

は文字濁テヨムベキ歟。〕

さんし五經。三史〔ハ〕史記。漢書。後漢書。五

經「ハ」周易。禮記。毛詩。左傳。尚書。

さうとゝ。タハブレ也。藤裏葉。

さくら人。風俗。

さらぼいて。サラボフ。読。莊子。老サラボイテ。

さうどく。早速。イソガハシキ心。常夏。水飯

ナド取々サウドキクウ。

さが。様也。アカサタハマヤラ同音。世ノサ

ガハ世ノクセ。世ノ習也。

さうくし。サウザシキ也。サビシキ心。寂

寞。閑。

さうぎやう三昧。常行三昧也。

さゝめく。甘言也。「万」又私語也。「文集」

さうのこと。箏也。繪合ニ。昔ヨリサウハ女

ナシヒキトル物ナリト云々。只サウ共云リ。

さくらのからのきの御なをし。カラノキ。

「綺也。カンハタ。」唐織物也。直衣ニ下襲常事也。

さくじり。鐺。角錐結解器也。如_レ錐。冠者君

ヲ云。小人ノヲトナ心有ヲ云。「私云。」毛詩云。童「子」ニ_レ佩_レ鐺。鐺ハ成人ノ佩也。小人ノ大人「ノ」佩ヲ帶ト云心叶歟。

さうかの殿上人。唱歌。サウカノ殿上人アマタサブラウ。唱歌ハ上首所爲也。不審。床下歟。藤裏バニ。サウカノ殿上人。御階ニサブラフ中ニ。弁少將聲勝タリ。若ナニ。サウカノ人々。御階ニ召テ勝タル聲ノ限り出シ返音ニナルヨノ更行ト云々。猶唱歌タルベシ。上首所爲トアレ共。所々ニ殿上人御階ニテトアリ。

さとびたる。キナカビタル也。田舎聲ノナマリタルハ。サトゲニ聞ユ。浮舟ニ。里ビタル犬ト有ヲ。里馴タルト思ウケタル僻「事」也。サトゲニ利覺。サトクトガムルト也。（犬イ）

さうぶれん。想夫戀。常夏ニ。想夫戀バカリコソ心ノ中ニテマギラハス人モアレ云々。夕霧ニ。一條宮所ニモ有。昔ハ男ヲ思テ戀ト

云樂。^{〔ナイ〕}サレバ女ニハイミテ不^レ傳^{〔有リケル〕}

歟。孝道雅談抄云。妙音院相國。名ヲイミテ。

御臺盤所ニ訓給ハザリシ。尾張ヘウツサレ

給シ後。譜ヲ書テ。今ハ此譜ニテイカニモ引

給ヘト申サレケル。遠所ヨリ譜ニテ教タル

例也。

ざえからず。初音ニ。明石ノ上ノ手見給所ニ。

サウカチニモザエカラズカキ。不才。オガマ

シカラズ也。

さみだれがミ。螢ニ。サミダレ髪ノ亂ル、モ

シラデ云々。拾遺。躬恒。時鳥ヲチ歸リナケ

ウナイコガウチタレ髪ノ五月雨ノ比。

さら共。皿也。葵ニ。ネノコノ餅。惟光在所御

サラドモ。イツノマニカシイデケンドアリ。

さかしミ。賢也。カシコキ心。サカシ。領納詞。

さまよふ。様好。容儀ヨキ也。吟^{サマヨフ}。立サマヨ

フ。依^レ所。此心別歟。

さバのほか。娑婆^{〔界ノ〕}外^{〔也〕}。若菜上。

さくぢやう。幻ニ。錫杖^{〔ノ〕}聲ト有。

さしくミ。サシヨリ^{〔ニ〕}ト云心。ヤガテノ心。

橋姫ニ。薰ト弁少將ト物語ノ所。

さばミむ。浮舟。サラバミンノ心。

さゝのこと。少様事。

さへかひ申さでなん。若ナノ上。優也。復歟。

さらぬ別。不^レ去別。不^ニ通避^一別。須磨。

さうげん。讒言。柏木ニ。督君夕霧ニ語ル詞。

イカナルザウゲンノ有ケル。

さゝめごと。文集。ビハ行。小絃ハ切々如^ニ私

語。

「さうやく。草藥也。ひる也。筈木ニ。極熟ノ

草藥。平聲。澄。可^レ隨^レ所。」

さうやく。雜役。若ナ。總角。濁也。草藥。澄。

ざけ。邪氣。

さうじあろして。請下。橋姫。アザリモサウ

ジヲロシテ。

さらぬ鏡。須磨。紫上歌。身ハカクテサスラ

へス共君ガアタリ。鄭人曹父行ニ遠國ニ時。破鏡一片ヲ妻ニ與シ也。

さすがね。ヨコ笛。懸金。

さかの院。宿木ニ。サガ院ニモ。六條院ニモ。

カクレテサガニヲハシマス。(シケルイ)

さたすぎ。年ノサカリ過タル心。又心トクサ

シ過タル心モアリ。若ナノ下ニ。六條院我ト

サタ過人ヲモ同トアリ。又中史ナカサダ。五

十餘ノ事也。

さがなミ。サガナク。不良也。ヨカラズト也。

恐惡。

さうし。常陸所領。庄々也。東屋ニ。サウ

シサウシニ有物共召出テ云々。紫明ニハ。曹

子ト注ス。

さかしら。さかさま事也。進止。〔方。〕玉鬘ニ。

末ツムヲ云ニ。サカシラニモテ煩給。

さうに。玉鬘。監詞。サウニナオボシ憚ソ。サ

ヤウニ也。

さび。敷。初音ニ。黒キカイネリサビ。

敷ハリナシト有。(方敷)

さねこん。實來。早來。宿來ト書。催馬樂。サネコン

さいつ頃。〔近曹。〕一日比〔ナ〕下云ヨリ〔ハ〕

遠〔キ〕心也。

さとの殿。二條院。更衣ノ舊跡也。

さかの念佛。釋迦也。

さくびやう。笏拍子也。

さのこと。シカノ如キ也。

ざえ。敷。才々也。

さうじ物。精進物。

さてハづしてハ。取ハヅシテハナリ。

さじき。棧敷也。

さばれとおぼせど。サラバサテアレト云心

歟。

されくつがへる。左禮覆也。

さるべきかうの物。若ナノ上。〔注云。〕干物

魚也。〔可レ勘也。〕若バミソ歟。

さぐりもよしと。總角ニ。大君ノナヤミ給所

ニ。中納言サグリモヨ、トナキ給云々。

さをきまでしろく。色ハ雪ハづかしく白シ。

餘白ハ青ミユル。さほくとしたる同心。

〔箋曰。さほにしるくト青表紙ニハアリ。〕

さばかりおほミなる。總角。匂宮。今夜イト

サバカリオホミナルホドニ碍多シ。

さんのくち。弘キ殿北南へホソクトアル戸

有。北ヨリ第三ニ當テ〔格子〕ヤリ戸アリ。

さぶらふと聞え給。定本ニハ。サブラハセヨ

トアリ。殿上ヲ内ノ侍ト云。又殿上ニツハキ

タル所ヲ下侍ト云。侍所トハ殿上也。臺盤

所ヲバ女ノ侍ト云。侍ニマカデ給。同心也。

さぶらひわらハ。殿上ノ童也。普通ノ〔青侍〕

童ニ非ズ。

さくらの三重がさね。清少納言枕草子云。ナ

マメカシキ三重ガサネノ扇。五重ニ成ヌレ

バ餘リニアツクテト有。〔私云。〕又ヒ扇ノ兩

方三枚ヅ、春ハ櫻ノウスヤウナドニテ包

テ。色々ノ糸ニテトデテ。末ヲ〔長ク〕アハビ

結ニシ。可レ然女房ナド是ヲ持。定本ニハ櫻

重トアリ。

ざいご中將。在原業平。阿保親王第五王子也。

さくハちのふえ。大ヒチリキ。尺八ノ笛。

さぞな。ゲニゾノ心。私。サコソト云所モ有。

さしながら。サナガラ也。

さながら。其まゝ也。

幾

さよう。淨（マ、）羅。清也。

さよろし。清宜。〔箒木。〕

さびは。稚（イ）。〔日本紀。〕キビハナル程ハ。アゲヲ

トリヤ。源元服事。〔イトキナキ也。桐壺。〕

さずを求。吹（イ）毛求（イ）疵。漢書。ナヲキ、ニマガ

レル枝モ有物ヲケヲ吹疵ヲ。後撰。

さんもち。〔或云。〕公望。〔高名録云。〕繪師名（イモ）

〔公茂。金岡男也。〕

さうだい。及第。乙女卷。

さすんらく。喜春樂。

さんぢ。汝也。乙女ニ。惟光ガ子ノ童殿上ス

ルヲ父ノ「云」詞。

さなる泉。黄泉。冥途ヲ云。

さすく。健也。浮朴ノ躰也。木強也。

さりかけだつ物。人不^レ知トテ秘ス。ダツ物

トハ。何メカシキナド云心也。大嘗會時多分

用^レ之。陳座ノ前ニ常ニ立物也。水原ニミユ。

別ニ口傳。

ざしきくわん。儀式官。末ツムヲ云ニ。ギシ

キ官ノヒデ持ノ様ニ出仕時。召具スル番長

ナドノコハバリ着タル。臂持也。

ざやうかう。行香。法事時殿上人ナドノ所役

ニテ。明香ヲ臺ニ入テ焼テメグル。

させい大とこ。恭勢大德。手習ニ。イトキセ

イ大德ニナリテ。肥前掾橘良利法名寛蓮房。

碁ノ上手也。

ざ。薰中將宇治宮ニ詣テ。法文ノ給所ニ。阿

闍利モサウジヲロシテ。ギナンドイハセ給

ニ。儀也。難儀。コモンノキ小文綺。各別也。

ざさう。文人擬生。又擬進士。「乙女。」

ざざミ。品々也。

ざんのふ。琴譜。宿木。

ざほへる。競也。アラソフ也。虫ノ音ニキラ

ヘル。

ざた山。鞍馬寺ヲ云。

ざたのまん所別當。紫上ノ結構ニ依テ云也。

北の院。「宿木。」二條院。薰ノ居所ヨリ北也。

ざぬの音なひ。喧響。夏モスバシニハリヒト

ヘヲ重也。

ざつねならん。欽明天皇御時。イナシ三川國ミノハ

國ニ有ケル事也。「水鏡ニ見タリ。」狐人ヲバ

カシテ妻ニシタル事有。「扶桑記ニ見タリ。」

さなるすゝしのひとへ。女郎花ノヒトヘナ

リ。

さく^レのけしき^ハめる枝にこき^ハあをにびの紙な
る文を付て。菊ノ枝ニハ白色ニテモ紫ノ紙
にても有ベケレ共。未開ハ青ニビノ紙ニ付
テ葉ノ色ニト也。

さ^ハず。思崩。思ソムル事ヲ草木ノ初テ萌ニ
ヨソヘテ云也。

さ^ハやかに。俄ナル心。縦バ善惡分明ノ体也。
さびしく。蜜。ヒソカ。カクス。

さやうさく。形跡。敬策。遑迹。ウルハシクサ
アリヌベキ心。アラハナル心也。サトクシル
心。若ナニ。ワカケレドキヤウサクニヲイサ
キ云々。眞人ヲ云。

さささがね。后ニ可^レ成人ヲ云也。ムコガネ
トモ。ムコノ器量也。

遊

ゆくりなく。不意。^{〔日本紀〕}又風度。不^ニ取敢^ニ
心。大和物語ニ見エタリ。ユクリカト。ユク
リナクトハ心相違スベシ。無^ニ行衛^ト云釋

不^レ叶歟。

ゆるし色。聽色。論語紅紫不^レ褻ノ服。ユルシ
色ノキ青ナルハ。クチバノ色歟。紅ノウスキ
ハ今様色也。聽色。同色歟。延喜式。紅ニ取ハ
聽色。紅梅ニ。擬シキハ今様色也。柏木ニ。女
三宮ノ尼ニ成給姿ヲ云ニ。ニビ色共ノキガ
チナル今様色ナドキ給云々。源ノ姿ヲ山ガ
ツメキテ。ユルシ色ノキガチナル云々。

ゆげいの命婦。靱負。^{〔トイ〕}「左右衛門也。」紫明

「云。」令第一衛門督ヲ點云々。ユゲイ「ノ君」
左右ニ有^レ之。堀河院御時歌合作者靱負藏人
云々。蒙^ニ帝命^一之故命婦ト云。長恨歌傳云。
^{〔ウチトノミヤウブカ、ヤイテカゲノゴトクシヌガヘリ〕}
内外命婦焜耀景從云々。

ゆくて。過様ニアカラサマナル心。三笠山キ

テモトマラヌミチ人ニツラキ行手ノカケル^{〔ソイ〕}

ツレナサ。^{〔キイ〕}

ゆめ氣色なく。努々也。「ユメ／＼」ナド云事
也。」

ゆミのけち。弓結。花宴。三月廿日アマリ。左

ノヲトバノ弓ノケチニト在。又云。ツカウ心。

ゆする。沐也。風ニ髪ケヅラセ。雨ニユスリ

アミスト云。湯アミ髪洗也。沐同。浴ハユア

ムル也。勾宮。中君ノ事ヲ云。

ゆくゑもしらぬおほうミの原。カタ／＼物

語ニ有。

ゆげた。伊與國溫泉有。其湯ニ桁ヲ渡也。シ

ゲク多也。歌「云。いよのゆのゆげたはいく

つえぞしらぬ。ひだり九ツ右ハ八ツ。なかは

十六やれかとうとトクリ返シ／＼ウタヒテ

酒宴以下サマ／＼ノ事」有。十月ゴトニ神事

有。神人此歌ヲウタフ。

ゆたかなる心ばへをえミせぬ。寛。紙繪ハ限

有ト也。山水ノ躰ナド繪ニハ不畫心也。

ゆの音。由音。箏ノ左手ニ有。七ト爲トノ絃

也。

ゆゝしき。保言。珍色。同。忌也。イマ／＼シ

キ心。

ゆきもよ。雪夜也。新古。草も木も降まがへ

たる雪もよに。是ハ催ス心ニ叶リ。又雨もよ。

雨ノ夜也。

ゆすりみちて。動也。

ゆめにとみしたる。富貴ヲ夢ニミテ。覺テ實

ナキ心。

ゆづる。弓絃也。

ゆし給。由也。

ゆたけき。寛。ユタカニヒロキ心。

ゆするつき。髪水入器。土器。

ゆをびか。寛也。「若紫」

ゆらぐ。ノブル心也。玉ユラ。暫時ノ心。

ゆたのたゆた。湯谷絶谷。我心ゆたのたゆた

にうきぬれバへにも沖にもよりやかねま

し。あつかふ心也。

ゆくかたも歸らん里もしらぬ。劉晨。阮肇。

天台「山」ニ入テ路ヲウシナフ事也。此事さ

もこそと聞ユ。仙女樂ヲト、ノヘ。天氣常ニ
二月ノ如シトアレバ。ナズラヘテモ云ベシ。

免

めざまし。目覺。「万。」目醒。此注不_レ叶。目ザ

マシ草ト云ハ。愛也。興ズル心也。澄テ可_レ讀。

桐ツボ更衣ヲ云ハ。嫉妬シ惡ム心也。濁也。

めもあやに。又ハ目モアヤシ。定家説。綾文

也。私云。必シモ綾ニ不_レ可_レ限。物ノ紋ノア

テニ嚴心也。紅葉バ、錦ニミユト聞シカド

目モアヤニコソケサハ成ヌレ。後拾遺。稱美

ノ言。「或説。あやめト同詞ト云不_レ可_レ用。多

分稱美之事歟。さならぬ事ニモ云ヘリ。愚

案。今モ世俗ニツカフ詞也。其儀無ニ相違ニ歟。

あやしう不思議ナル事ヲ云。たとへバ目モ

アヤシト云ヘル心歟。善惡ニかよふ事ウタ

ガヒナシ。」

めしうど。召人。可_レ然人。御思人ヲ云也。又

蘭ニ。メシウドタチテツカフマツルモクノ

君ト在。召出ソツカフ人ヲ云歟。

めをそ_バめつゝ。長恨歌傳云。京師長吏爲

之側_レ目。「遙側_レ目。」

めづやかに。メヅヤカニ。ナキハレテト在。

めづらかに。梅豆羅。「日本紀」珍也。「同長_{イハメツラ也}今。」

東南水。」

めいわうの御代四代。宇多ヨリ四代貞信公

ニナズラヘタル歟。忠仁公ナラバ。淳和ヨリ

ナルベシ。

めゝ敷。コメカシク心ヨハキ也。

めぐらい侍。橋姫ニ。弁ガ詞。薰ニカタル。廻

也。立メグル。

めぞめ。目染。紫ムラゴニソメタル也。

めおやだちて。女親也。

めくハす。瞬。

めおに。目鬼也。無_レ目兒事也。手習ニ。昔有

ケンメモハナモナカリケンメ鬼ニヤ云々。

見

みつのつかさ。三位也。

みちのくにがミ。檀紙也。「奥州ヨリ始テスキ出セリ。みちのくのまゆみのかみトモ云ヘリ。」

みぞかけ。御衣架。襦架。「ミヅカケ。延喜式。」

みこき。御國忌。天子ノ崩御ノ日ヲ云。「私云。

ミコツキト讀ベシ。」

みすべしたらん。空蟬ニ。ヌギスベシタル衣

ト在。ヌギスベラカシタルナリ。「河海。」

みさをつくりて。操也。此心叶歟。心バセヲ

心操ト注ス。ミサホ作ベ。心ニクゲナル姿ヲ

作也。別ノ心。古歌ニ。夕されバみさほにも

ゆる螢哉聲タテツベキコノヨト思フニ。是

ハナヲザリノ心也。松柏ノ操ハ。スミテヨム

ベシ。

みうちきの人。御装束師。紅葉賀ニ。上ハミ

ウチキノ人メシテ出サセ給。紫明ニ。御ケヅ

リグシノ人。童頸紙ナル無紋ノ紫ノ直衣ヲ

給ヲキタル。是ヲミウチキノ人ト云々。

みき。三木也。又三季。ミツマタナル木ノウ

ツロニ飯ヲ入テ。雨降カ、リテ酒トナレリ。

「ト云説アリ。」又云。冬ヨリ酒ヲ作。夏ニ至

テ開ト云説有。

みつのみち。三途。三徑ハ閑居也。三ツノ道

トタドラル、ト云ハ。草深クテノ心也。門道。

井道。廁道。是三逕也。陶淵明歸去來辭云。三

徑就ニ荒ニ松菊猶存ス云々。松風ニ。天ニ生

ル、人ノアヤシキ三ノ道ニ歸。是ハ三途也。

三途惡道。是各別也。死出ノ山三途ノ川。此

子細大事也。ミツノミチニクダラントガト

有。

ミづむや。水驛。驛路事也。水驛ハ宇佐ノ

使ヨリ起リタル事也。是水原ニ私ニ注ス。初

音踏歌所。

みあれ。賀茂祭前三日。「イモ」カモ山ノオク垂跡。石

上ニ出給テ有ニ神事。號ニ御跡。私云。又御靈

也。紫上マウデ給。「箋曰。みあれは御生所ト
カケリ。」

みや柱めぐりあひけん。明石。伊勢宮造廿一
年也。

みへがさねの扇。清少納言枕艸紙ニ。ナマメ
ガシキ物ハ三重ガサネノ扇。五重ニ成ヌレ
バ餘アツクテト云々。檜扇ノ兩方上三枚ヅ
ツヲウスヤウニテ包。色々糸ニテトヂテ。末
ヲアワビ結ニシタル也。五ヘモ同風情也。花
宴ニ。源臈月夜ニ取カヘ給扇ハ。櫻ノ三重ガ
サネ也。コキ方ニカスメル月ヲ出テト有。

みあるじ。御饗也。飯ヲアルジト云也。諸社
ノ祭ニ。飯スヘヨト云ニ。上卿詞云。ミアル
ジツカフマツレ。玉カヅラ。ミアルジノ事共
イソグト云々。御饗ハ夕飯也。或本ニアヤシ
共有。

みやうのめしつぎ所。聽召次所。或本チャウ
ノ召次所ト在。

みつわくみて。嬾組。「ミツハグム。支離。同。」年

フレバ我黒カミモ白川ノ。年老ヌレバ腰カ
ガミテ。二ノ膝ノ中ニ頭マジリテ。三輪ヲク
ミタルガ如シ。又伊弉冉ノ尊産彦水神マス。
罔象ト云。其貞老嫗ノゴトシ。夕顔。

みやびか。閑都。花麗ノ心。私。なよびかなる
心。「媚也。美麗也。閑雅也。毛詩ニハ都ヲミ
ヤビカトヨメリ。」

みおもひ。御思。夢浮橋ニ有。

みのしろ衣。皮衣也。簑代也。

みくしあげのでうど。女房ノクシ箱ヲ始テ
様々具足ヲヒロブタニ入。是ヲ云也。又カン
ザシノデウド共有。

みてこそ。玉鬘。上童。青表紙ミルコ。胡蝶ニ
岩守ノ文取ツグ人。

みとも。御供。御車ミトモ。御共人也。

みあかし。御灯事也。初瀬詣ノ所。

みなわ。水淡也。

みあかし文。御燈文。願文〔歎〕。

みよの御門。淳和仁明文徳也。

みあふる。楨柱。火取ノ灰ノ所ニ。ヤ、ミあ

ふる程も云々。見合也。

みやにも御つゝしミ。内ニも御ツゝしミ。春

宮ノ御事也。太后ノ事トモ可レ言ニヤ。

みやうかう。總角ニ。ミヤウカウノ糸引亂リ

テ。行香ノ臺ノ角ニ結タレタル糸事也。ミツ

ヲ除ハラ、カシテト有。蜜ハ生類ノ故。行香

ニハ不レ入歟。但アマヅラヲ用ニ有。何煩哉。

みずほう。御修法。

みそか心。密惡ノ儀也。不レ言心。物がくしす

る心。

みやうぶ。令曰。謂。婦人帶ニ五位以上〔目イ〕爲ニ内

命婦。五位以上妻曰ニ外命婦。

新

じ。時。夕霧。不斷經ヨム時。定本ニハ不斷經

ヨムトテカ〔キイ〕ハリテトアリ。如ニ此説ノ。時ト

聲ニヨムベシ〔キイ〕歟。書生ノアヤマリナラン。

しとゞに成て。ヌレタル心也。万ノ歌ニミエ

タリ。草木ニ埋ル心。

しはふる人。老人。シワ有テフルキ人也。依

レ之定本ニハシハフルト有。私。柴振人。山賤

ナドノ心。〔教隆説。老人之皺アリテフルキ

人也。私云。柴振人。日本紀ニ折枝葉人トア

リ。タトヘバ賤シキシづノをナド頭ニモ身

ニモ柴ノカ、ルヲ朝夕ノ袖ニテ打振ヨシ

也愚案。アナガチ袖ニテ打振ハズ共。柴ヲモ

チアリクヲ柴フル人ト云ニコソ。定本ニハ

しはふるいひトアリ。紫明。皺又ハ柴ノ兩義

也。本草ニ埋モレタルしづノ女しづノを也

云々。或ハ皺古人歟云々。シワタ、ミタル老

人ヲ云。」

じやう三ぬ。正三位。繪名。繪合ニ。君ノ心高

クト云々。上三キノ心。濁テヨムベシ。

しひらだつ物。褶。シイラ。ウハモ也。〔世繼并

ニ枕草子ニミエタリ。何モモ也。ダツ物トソメカシキト云詞。切カケダツ。家ダツ。

しろき扇。夕顔ニ。花スヘヨト云扇也。タキ

物ヲコガル、程焼シ也。白扇事有秘説。「口傳。檜扇ト云説不_レ可_レ用_レ之。かハほりなり。」

しどま。末摘歌ニ。イクソタビ君ガシバマニ

マケヌラン物ナ云ソトイハヌ頼ニ。誓言也。

俗ニ無言。シバマカネツクト云。止嶋也。「一

説ニ自志任。カノ人ノ心ノマ、ニト云歟。愚

案。説々不審多端。猶可_レ尋_ニ識者_一。」

しらつるバミ。白椽。舞ノ裝束也。若ナニ。青

キ赤キ白ツルバミト有。涼闇ノ時ハ黒キ歟。

「又云。舞人有_ニ子細_一着_レ之事有_レ之云々。説

説多シ。原中最秘抄ニ委注之。」

かミゑりふかう。御幸ニ。シカミエリ源ガ

キタマヘリ。シカミハ。フルイチバミタル也。

エリフカノハ。エリ入タル様ニ書たる也。文

字ツヨキ心。

しどきて。退也。シンゾキテトヨムベシ。

じやうずめかし。上手也。上ラウメク心。

しばく。數々。頻也。

しづ心なき。無_ニ閑心_一。

しう。執。執着心也。柏木ニ。サルシウノソイ

タルト有。

したと。舌迅。「舌早也。」

しげきそく。重識也。「事シゲキ職也。」

したいならぬ。不_ニ進退_一。

しばやすむべき。暫可_ニ休息_一也。竹河。

しうとく。宿徳也。

しうども。浮舟。集共。草子也。

しミ深く。采深。「日本紀」色ドル。

じやうふ經。常不經。法花經也。品ノ名。

しミづ寺。シツミ_(ミツ)ノ觀音。筑前ニアリ。

しらぎ。新羅也。蜻蛉ニ。モロコシシラギト

有。

しれもの。白物。〔シレモノ。〕

しわざ。事也。〔日本紀。〕

しかな。理や聞えたがへるもしかな。サナド云心也。

したひも。袴ノコシ也。

しんじて。夢ヲ信ノ。〔信也。〕

しのゝめ。〔小竹目。シノ、メ。〕篠目。〔同。〕曉也。〔同。〕

しうねき物の氣。強也。

しミ。橋姫。紙魚。蠹魚。〔衣魚。〕

しミける。染也。手習ニ。サリシ句ノシミニケルニヤトアリ。同心也。

しげきの中。道もみえぬしげ木の中。〔然ルヲ〕證本〔ゴト〕ニシゲキ野中トアリ。〔おぼつかなし。愚案。滋木ノ中勿論也。〕

しなどのかぜ。東南風ヲしな土ノ風ト云。中臣稔詞ニモ。アマノ八重雲ヲ吹ハラフナリト有。

しそく。紙燭也。指燭。浮舟。何バカリノシヅクニカハトハ親族也。

しづむべき。思沈也。思鎮心ヲコリヌレバ。思シ〔サカシム〕ソム。

しもつかた。松風ニ。明石ノ姫君紫上ニ養給ヘト云所。シモツカタモマギラハサント思ヲ。メザマシトオボサズバ。ヒキユイ給ヘカシト有。シモツカタハ腰也。引結給ヘハ袴着也。

しらざりみゆる。玉鬘へ。常陸宮送給ニ。紫ノシラギリミユル霞地ノ御コウチギト有。しいづ。作出也。宿木ニ。匂宮ノ若君ノ五ケ日ヲ薰ノミ給ニ。道々ノサイソ様々ノコト共シイヅメリ。所々ニ多シ。

しちそう。七僧。法事。蜻蛉ニ七僧ノコヘノ事。

しほうなる。私法物ノ心歟。モテツケタル心。

しづえ。沈枝。

衛右ノ元ニ有

飛

ひぢて。泥漬。濕。涙ニヒヂテ也。〔漬也。ヒタ

シテ也。〕

ひたすら。太。毛詩。大。左傳。ヒトヘ也。

ひたぶる。頓。一切。永迅。日本紀。〔永頓。同。〕

ひたやごもり。直隱也。歌有。

ひとときざみ。第一也。〔万葉。只又一キハト云

ヘル所モアリ。事ニヨルベシ。〕

ひとの國。日本ニ對スルハ異國。京ニ〔對ス

ル時ハ〕田舎ヲ云。

ひとま。人間也。

ひき入の大匠。加冠事也。〔桐壺。〕

ひさうなき。無_ニ貧相。澄。無_ニ美相。

ひるこのよハひ。日神ノ御弟西宮夷。カゾイ

ロハイカニ〔アハレトオモフラン三トセニ

成ヌあしタ、ズシテ。〕

ひうちゐたり。輕々敷粧也。鴨ノ羽タ、キン

ホコリタル姿ヲ云。又我ハガホナル心。定本

ニハヒ、ラキキタリト有。〔羽タ、キテ鳥ノ

轉キタル姿也。〕

ひとそ。一疏也。一族。

ひ水。ツメタキ水也。常夏。

ひそみ。少シメリタル心。竊眉ヲヒソム也。

私。泣時ハ眉間ノアツマルヲ云。物ヲ取ヒソ

ムト云ハ。ヒソカナル心。顰。ヒソム。口出ル

也。〔顰也。〕

ひそく。末摘ニ。御タイヒソクト有。磁器也。

世言。錢氏從_ニ越州_一燒テ奉_ニ巨甕_一。依_レ能

用_レ之。秘色ト云。

ひぢがさ。聚雨。俄雨。袖ヲカブル故ニ。臂笠

雨ト云。須磨。巳日稜所ニ。在_ニ催馬樂ノ歌_一。

イモガ門。

ひの御よそひ。緋ノ御裝束歟。其日ノ裝束歟。

火色ハ裏表共ニ打物也。中倍有。搔練ハ無_ニ

中倍。又云。前姿ヲ改テヒルノヨソイニ成給
ヲ云歟。

ひえのほうけだう。比叡法花堂。

ひぢゝか。土近也。神代ノ詞也。土ヲヒヂト
云。乾土ヲスヒヂト云。泥土ヲウヒヂト云
也。ヒ濁テヨムベケレ共。言葉ニ澄テモ可
レ讀歟。

ひいろ。火色。私。緋色歟。表裏共ニ打物也。

中倍入タル也。搔練ハ裏ハ紅ノハリタルニ
テ中倍ナシ。賭弓ノ日カイネリヲ着也。火色
ハ宿徳ノ大臣。母屋ノ大饗尊者ナドキルト
ゾ云。私云。三條内大臣火色ノ下襲ト思テ搔
練ヲ被_レ用。傍輩見_レ之搔練ト云。内府不_ニ分

別_一人ノ僻事ト思ヘリ。火色ハ如此。搔練ハ
兩面共ニフクサバリ也。次ノ晴時用_レ之。

ひた_一け。叩。ヒタ_一ク。混ニゴルトヨム。若
菜。叩ミダリガハシ。

ひだのたくミ。サル者一人有ケル様ニ人思

タル哉。應和御記云。來月廿三日〔午刻〕召
修理大夫重言朝臣。此日於_ニ隔廊_ニ賜_ニ造内裏
行事所并以下修理内匠寮宮人以下工夫飛彈
工等饗祿。各有_レ差云々。代々造内裏記。番匠
何十人。飛彈工何十人ナド有_レ之。非_ニ一人ノ
名_ニ〔万葉云。〕トニ角ニ物ハ思ハジヒダ、
クミ打墨ナリノタバヒトスデニ。

ひめをく。秘藏也。

びなき事。無_レ便也。ビントヨムベシ。

ひじり詞。聖〔詞〕也。

ひらバリ。平張。左右樂人樂屋也。幄等同歟。

ひら。枚也。梅枝。白き赤ケチエンナルヒラ。

草子也。

ひはりご。檜破子。

ひこむき。緋金錦。金ヲ織付タル錦也。梅枝。

コマウドノ奉ケル綾ヒコンキ。

ひざう。非常〔ニ侍ト云也〕。乙女ニ。博士詞

ハナハダヒザウナリ。

ひさきり。引切也。夕霧ニ。引キリニハナヤイ。

ひた。手習ニ。ヒタ引ナラスト在。鹿ノヲド

ロカシ。

ひだうにも。非道也。

ひはつに。鹿也。「アツシキ也。」

ひんがしの院。二條院ヨリ東ナルニヨテ云

也。

ひすいだちて。薰中納言君事也。髪ヲ云。末

スコシホソク翡翠也。ヒスイノ如ナルト也。

椎下在。

ひやくふのほか。百歩「之」外。「百歩ハ」六十

丈也。百歩ノエカウハ衣香ナリ。「愚案。此注

不審也。」

ひあやうし。誰何火行。史記。

ひさほし。引干。海藻ナドニテ調也。

ひげして。卑下也。

びよう風の面。ウラヲモテト云心。「繪アル

方ヲ面ト云。又裏ナリト云説アリ。別ニ注

ス。」

ひあけ。タキ物火取也。愚案。普通ノ火桶ニ

ヤ侍らん。何處ニテモ火取トコソ思メレ。椎

下ニモ。スミナラヌ御火桶取出テ。チリウチ

ハライナドスルニモト。猶レウケンスベシ。

ひかる源氏。敦慶親王。亭子院第四「子」二品

式部卿。玉光宮ト號ス。好色無双ノ人也。是

ニナズラヘタルナリ。

ひ。明石ニヒフリ「ト云ヘル」雹也。常夏。カ

ゲロウニ有ハ氷也。「蜻蛉」御手ニヒヲ持ナ

ガラ云々。年中行事四月一日ヨリ氷ヲケン

ズ。

ひつじのあゆみ。屠所羊事也。無常ノ心。

びらうげ。檳榔毛車廿兩也。女二宮ノ薰「大

將」へ渡給時事。「或云。」毛車「也」。公卿ノ事

「也」。

ひとしなミ。等烈。大夫監詞ニ。スヤツバラ

トヒトシナミニハシ侍ランヤ。玉鬘ニアリ。

ひとめもなし。人目モ思ヌ也。須磨ニ。源ノ御供ノ人々弘キ殿ナドヲモ不_レ憚心。

ひありの日。引折日也。瓦折日。

び央柳。芙蓉ト柳トニ楊妃ヲタトヘ。更衣ヲ

女郎花ト撫子トニタトウ。行成自筆ノ本ニ

モミセケチニシ侍キ。紫式部同時人ナレバ。

申合様侍ツラン。若ナノ卷ニテ心得タル事

有キト云々。縦バ女三宮ヲ柳ニタトヘタリ。

此タトヘアマタニナルニ依テケチ侍歟。後

ニ心得侍ヌ。然ルニ俊成女ニ尋ニ。書寫ノ誤

也。因_レ玆愚本不_レ用。定家自筆ニテ。太液芙蓉

未央柳モ。ゲニカヨイタリシカタチノオボ

シ出ニ。花鳥ノ色ニモ音ニモヨソフベキ方

ゾナキト有。幾度ニモタトヘン事。有_ニ何妨_一

乎。又女郎花撫子ノ句。定本ニ不_レ見。

ひがごと共のまじりて。源氏ノ御する。

にと竹河ニ有。是ハ冷泉院玉鬘薫ノ事也。

裳

もゝしき。百城。百官座ヲ敷ニヨリ云。

もとつ人。本ノ人也。本ヨリノ人也。

もとつか。本香。紅梅ニ。本ツカノ句ヘル君

ガ袖フレバ。

もんざうハかせ。文章博士。

もとめご。求子。神樂。

もく。木工寮。桐壺。里ノ殿ハモクスリタク

ミヅカサト有。

もじやう。文字様。梅枝。

もろこしのうた。詩也。

もんにん。文人也。

もゝか。百日。五十日ハイカ也。

もろこゑ。諸聲。

もろ戀。相互戀慕。チハヤブル神モマサシキ

神ナラバ我カタ戀ヲ「モロ戀ニセヨ」。

ものけたまはる。物承也。帚木。物ノ氣色承。

河海。宿木ニ。モノケタマハシ。食物給ハる。

物クウ也。

もよほしがほ。虫聲モヨヲシガホトヨムベシ。イナシ雅頼説。「愚案。」哀傷ヲモヨホス心「マヅハ相叶タル心チス。いかゞ。」

ものいミ。物忌也。神名也。此名ヲ書テ身ニ付レバ。鬼神モヲカサズト云リ。又六日御物忌ト云ハ。ナカ神ノ物忌ノ御方達也。

ものへだてぬあや。物不_レ隔親。祖父ヲヘダテタルヲヤト云心歟。

もくの君。女房ノ名。楨柱。螢。兵部卿宮上。式部卿宮女御出給所ニ。モクノ君ハ殿ノ御方ノ人

ニテトアリ。

勢

せうよう。逍遙。アソビ也。

せうそこ。消息也。

せんじがき。宣旨書。「ミづからカ、ズノ」人ニカハスルヲ云。

せん。先。手習。碁打所ニ。センサセ奉。又センセラレテトアリ。

せんかの翁。蟬歌「翁」。蟬丸事也。若ナノ上。せんけう太子。匂宮卷。センケウ太子ノ我身ニトイケン_ト在。

せちぶ。節分。宿木ニ。セチブトカ云事ト有。セチブント可_レ讀。

せり川の大將。古物語也。

せな。夫也。脊男。「万。兄。日本紀。」

せし侍なん。施也。若ナノ上。明石入道詞ニ有。クマオホカミニモセシ侍ナン。

せんぞの大臣。先祖也。

せう。鷹ノ雄ヲ小ト云。雌ヲ大ト云也。とノ字ノ所ニ具ニ有。

せうわの御いましめのふたつのほう。梅枝ニ。承和ノ御イマシメノ二ノ方ト有。承和ハ仁明天皇御事也。薰物ニ長ジ御ス。二ノ方トハ侍従ト黒方也。侍従内ニ四種香合六種合ノ二ノ方共云リ。イカデ聞傳ヘ給ケン_トハ。此方ヲ男ニ傳ジノ御イマシメアレバ。源氏

イカデ聞傳給ケン共。八條式部卿ハ仁明第七皇子本康親王「母穩子。名虎女。」御事也。サレバ親子ノ方ノ遊^{ライ}ソ親ゲナキ御遊心ト云也。

せんざう。セジャウ共。軟障也。障子代々用^レ之。唐綾ニテ張。結纈ニテメグリラス。又云。殿上ノ引物也。白絹ニ松ヲ繪ニ書。高松ト號也。須磨巳日稜ノ所。藤ウラバ。玉カヅラ泊瀬詣所ニ有。姿ハ幔ニニタリ。赤モ青モアリ。せうと。男ヲバ。ヲト、ヲモセウト、云也。女ヲバ。アネニテモヲト、ト云也。アネヲ妹ト云事。歌道也。

せんわう。彼先王。延喜ノ御事也。定本ニハ先大王ト有。此說可^レ然侍リ。大王トハ帝王ヲ書誤歟。又ビワヲ延喜ヨリ傳テ三代ト有。是シヤウノコト也。イカニ云ルニヤ。定本ニハ四代ニナリ侍トアリ。ぜひしらず。宮不^レ知ニ是非^一也。

せんかうのかけばん。淺香也。

せまりたる大がくのしう。大學衆セマリタルト「ハ」才學ノウスキヲ云歟。只儒者ノ道セバキ様ニ。人ノ心ニ覺ベカンメルヲ云。

せいわうの何とかの給はん。文王子武王弟。成王叔父。「我」於^ニ天下^一不^レ賤ト周公自云ル詞也。冷泉院ハ弟共難^レ云ケレバ。成王ノ何トカノ給ハントスラント。不審シタル様ニ云ル歟。冷泉未位付給ハネバ。何トカノ給ハント也。疑有マジクヤ。

せきふじんのミけんめのごとく。戚夫人ハ漢ノ高祖ノ妻也。趙王ノ母也。惠帝ニ取カヘんとあれバ。高祖モ同心也。而長良ガ四皓ヲヨビ出シ教訓セシ也。高祖崩ジ給後。夫人流罪也。其ウキメミル如クトナリ。彼藤ツボモ。延喜崩御後ナレバ。太后朱雀院ヘサ、ヘ給事有。花鳥ニ。戚夫人眼ヲヌカレシト有。

須

すぎやうざ。修行者也。

すやつばら。奴原。シヤツバラ也。

すがゝきて。管攪。和琴ニカギレリ。餘ノ絃

ニ不_レ可_レ有_レ之。

すくよう。宿耀。陰陽師也。

ずきやう。誦經。

ずして。誦也。私云。ズンジトヨムベシ。

すきく敷。數寄く「しき也。又逸。日本紀。」

すくよか。健ノ字。澄。スクくシモ同心。

すくくし。鈴虫ニ。カバカリスクくシウ

オホレテ年フル人。建也。スクヨカ也。又ス

グシタル心。

すだく。多集。後拾遺ニ。スダキケン昔ノ人

モナキ宿ニタバカグスメル。秋ノ夜ノ月。

すきたハめらん。數寄撓。色メキ物メデシテ。

心ツヨカラヌナリ。

すけたち。若ナノ下ニ。大將ノスケト云ハ。

中少將事也。近衛府カミハ大將。スケハ中少

將。ゼウハ將監。竹河ニ。サウハンハ將曹ニ
アタル。官毎ニ有_レ之。

すがく。速々。「日本紀」清々。速々也。

すげなう。無_レ人望也。

すまひのあるじ。相撲饗也。賭弓還饗ナド云

同心也。

すがやか。速也。スガくト同心。

ずいぶに。隨分也。

すい給はん。御幸。源三條宮ニテ中將ノ事

ヲ申給ニ。如何ハサモ取返シス、イ給ハザ

ラント有。濯心歟。

すり。修理職。モク。スリ。

すべなく。無_レ便也。「無_レ爲也。」

すほう。修法也。

すいはん。水飯。湯ヅケノ事。

すちく。筋々也。

ずんながる。巡流也。盃ノ順ニ下ル心也。

すさび。愛スル義。荒也。取虵尾。手ずさびと

云心。駒モスサメズ不^レ愛也。

すミの山。須彌山也。〔若菜上。〕

すゑ摘。紅ハ末ヨリ花サクニヨリテ。次第ニツム也。

すざくゐん。朱雀院也。三條朱雀四十町也。

號^ニ後院ト。延喜六年十月十一日此院ニ行幸有テ御賀。又同十六年三月ニ行幸御賀アリ。

〔重明親王延喜御子。敦忠左大臣子。舞之。此タビノ事はニナズラヘタル歟。愚案。南北四丁ナド舊記ニモ見ヘ侍レ。四十町ナド云ヘルオボツカナシ。〕

すさむ。倦心也。又荒淫。是ハ愛スル義ニハ非歟。

すきく。をとなび給。ツキくト云心。

すミすぎて。若ナノ下。能事過タル事也。

すなどる人。橋姫ニ。アヤシキスナ取人。田舎ビタルヤマガツト云々。或本ニ。アヤシキ下スト有。

すきて。苔を袖松の葉をすく山臥ハ世のい

となミを忘やハする。總角ニ。松ノ葉ヲスキテツトムルト云々。食スル也。又スカセ奉ル。ノマスル事也。符ノ事也。

すにをしよせて。簾押寄。椎下ニ。二間ノスニヲシヨセテト有。

すさめぬ。不^レ旨。〔スサメヌ。〕二義有。一ニハ愛也。一ニハ不^レ愛ナリ。〔可^レ隨^レ所也。〕古今歌ニ。人モスサメヌ櫻ト有。駒モスサメヌモ不^レ愛心。後撰ニハ。谷深ミいまだすだゝぬ鶯の鳴聲わかミ人のすさめぬト有。此物語ニスサメヌ四ノ君ト云。帚木ニ。宮バラノ中將ノ事ヲ云ニ。右ノヲトバノカシヅキ給栖ヲバモノウクシテト在。

ずさ。大夫ガ從者。

すゞろ。心ならず也。

すゞりにハ書付ざなり。菅御記。硯ノ面ニ物不^レ書トナリ。

〔右仙源鈔辨雲作源語類字

兩抄兼載而勒以爲一卷。穿鑿之說々雖有之。不追削除之。見者可加用捨而已。

永祿庚申仲冬

亞槐翁實澄

弘和のはじめの年三のあまりのあり。ながき夜のつれづれもなくさめがたく侍しまゝに。光源氏物語をとりてみるに。おぼつかなきことゝもおほかりしかば。ふるき釋どもを尋ね見侍るに。いづれも簡要はすくなく。枝葉はおほし。又同釋共所々にありて。ひらきみるにわづらひあり。是によりて。水原抄五十餘卷。紫明抄十二卷。原中最秘抄二卷の中。古人の解釋よりはじめて。句を切聲をさすに至るまで。一ふしある事をのこさず。又定家卿が自筆本に比校して。相違の事をかんがへつゝ。同じ文字なる詞をいろはの次第にあつめとのへて

見れば。六十餘卷只一帖につゞまり。文字のつゝを尋ねれば。掌をさすがごとし。殊なるふしもそはねば。あながちに秘すべきにあらずれども。沙をひらきて金をひろへばその數をつくすことかたしといふたとへ思へば。たやすく人に見せんこと彼抄物作者の本意をそむくかたも侍べきにや。そのうへをろかなる心にいかゞとおぼゆる事をさへかきつけ侍ぬる。はゞかりおほきやうなれど。もとより物がたりにはじめてとりむかはん物の。先賢の注釋などをも見とく事かなはざらん人のためにと。思て。かくのごとくめやすにしろし侍れば。これにつきて一の了見のたよりにもなり侍らんかしとて。とゞめずなりぬるなり。かの抄にのせざることは。たまゝ思ひえたる事も注しつくるにあたはず。抑文字づかひの事。此物語をさたせんにつきては。心うべき事なれば。

つゐでに申侍るべし。中比は定家卿さだめたと歟いひて。かの家の説をうくるともがら。したがひもちゐるやうあり。おほよそ漢字には四聲をわかちて。同文字も音にしたがひて心もかはれば。しさゐにをよばず。和字は文字一に心なし。文字あつまりて心をあらはす物也。さればふるくより聲のさたなし。或は別の聲を同音に用たるあり。をは遠。上聲又は去聲也。伊は伊。平は入聲也。いは以。上聲也。伊には丹ニ也。或は訓を音に假たるあり。とは止。ト、ムル也。えは江エ也。此たぐひこれにかぎらず。万葉を見てひろく心うべし。まづいろは四十七字の内。同音あるは。いぬ。を。ち。え。ゑ。也。此外に。はひふへほわゐ(本マム)うえをとよむは。詞の字の訓につきてつかふ文字也。しばらくいろはをつねによむやうにて聲をさぐらば。お文字は去聲なるべし。定家が。於文字つかふべき事をかくに。山のおくとかけり。まことに去聲とおぼゆるを。

おく山とうち返していへば。去聲にはよまれず。上聲に轉ずる也。又おしむ。おもひ。おほかた。おぎの葉。おどろくなどかけり。これはみな去聲にあらず。この内おしむは。おしからぬといふおりは去聲になる。思も。おもひ／＼といふおりは。はじめの五文字は去聲。後のは去聲にはよまれぬなり。去聲なるべきに。ふえ。たえ。えだなどかけり。すべていづれの文字にも。平上去の三聲はよまるべきなり。たとへばか文字とみ文字とをあはせよむに。かみ。神也。かみ。上也。かみ。紙也。又一字にては。は。木葉也。は。樂破也。しかのみならず。同心にて同字をよむに。上下にひかれて。聲かはる事あり。天竺悉曇の法に。連聲といふことあり。又内典の經などよむにも。聲明の音便によりて。聲をよみかふる事のあるもみなこのたぐひなるべし。かみ。かみ。神也。といふに。はじめのか文字は

去聲によまる。又一字にとりても。序破急といふありは。平聲によまれ。破をひく。破をふくなどいふありは。去聲になるたぐひのごとし。これにてしりぬ。和字に文字づかひのかねてさだめをきがたきことを。定家かきたる物にも。緒之音を。尾之音於尾。などさだめたれば音につきてさたすべきかときこえたり。しかれども。そのさだめたる所四聲にはかなはず。また一字に義なければ。其文字其訓にかなふべしといひがたし。音にもあらず。義にもあらず。いづれの篇につきてさだめたるにか。おぼつかなし。しかれどもにわかはこのついでをあらたむべきにあらず。又ひとへにこれを信ぜば音義に叶べからざるによりて。此一帖には文字づかひをさたせず。かつは先達の所爲をさみするに似たりといへども。音に通ぜむ物は。をのづから此心をわきまへしるべしとなり。

「應永第三のきさらぎの末つかた。柴のいほりのしばしのつれづれもやなぐさむとて。ふるほんごひらきみるついでに。先人の遺毫にて此御草本ありければ。かたのごとく清書のこころざしをのぶ。さだめてふでのあやまりも心えのひがごとものがるまじう侍らむなれど。さのみためらはむ事は。かやうにえらびをかれたる御心ばえも無になる心地して。をのが及ばざらん事をしらずなりぬるは。後の人のあざけりぐさもかこつかたなかるべけれども。一たびはこの一帖の撰ぜられたるさまのたえなる事を思ひ。一たびはかの物語のおぼつかなさをもはれむがために。うちをかずなりぬるはまめやかに空もおそろしう侍れども。このまゝひたぶるにしみのすになさん事はねんなくこそ。」

此抄者。長慶院法皇聖製也。源氏物語五十四帖中秘訣。只此一冊中究而盡矣。可謂簡而要哉。今依台命。拭老眼繕寫之畢。因詠一首以擬跋。

山水のその源を清めてそちゝの流れもにこらさりける

耕雲散人明魏誌

右抄物。依難去溫命。不顧惡筆。狼狽未熟所誤雖不少。難默止。碎硯氷染禿翰了。昔天正元稔從獵月至翌年睦月夙日。不懈令勞積者也。比興々々。

〔應永三年二月十七日以先皇之御草本如形遂清書之功〕

求法之沙門判

耕雲自筆本與書

山みつのその源をきよめてそ

ちゝのなかれもにこらさりける

耕雲山人跋

源語類字與書云。

此一冊則依有可相傳之子細。改舊本錯亂而難見。忘老味之苦身而呵凍筆。以新所寫出也。秘決口傳等悉以注之。云斯道之奧區云製作之根元尤以可者哉。假雖親戚畏友。輒不可許一見者也。身後相殘經眼路者。敢莫忘懇真而已。

傳授子細別紙注之。

永享三年季冬日

釋竺源 惠梵行年七十一在判

本云以宗紙庵主持本寫之。〔綠音判〕

右仙源抄以天正元年所書之本書寫之雖不審多姑任原本耳

以三條西家所藏本水滴色葉類聚抄補訂畢

群書類從卷第三百十九

物語部十三

源語秘訣

後成恩寺關白兼良公

- 一無服瘍の事
一揚名介の事
一女房男の指貫きたる事
一翁もほとゝの事
一かりの隨身の事
一ねの子の餅三が一の事
一いまはざるもじの事
一とのゐもののふくろの事
一まくなぎの事
一たすきの事
一をしかいもとあるじの事
- 桐壺卷
夕顔卷
同卷
花宴卷
葵卷
同
同
賢木卷
明石卷
薄雲卷
乙女卷

一水鳥の陸にまどふ事

玉葛卷

一高巾子の事

初音卷

一日の御よそひの事

胡蝶卷

一四月朔日比の事

藤裏葉卷

一かつらの院の事

松風卷

桐坪卷云。

みこはかくても御らんぜまほしけれど。かゝる程にさぶらひ給ふ例なき事なれば。まかで給ひなむとす。

無服の瘍の事は令條の文に見えたれど。七歳以下の人の親の喪にあひて服假の事は。

法令にみえざるに依て。延喜七年二月。保明太子五歳の時。姨の服ありし時。法家に尋ね被_レ仰しかば。七歳以下は服假あるべからざるよし勘申。其詞云。

勘申。東宮間_ニ食姨喪_ニ。雖_ニ未成人_ニ可_レ有_ニ御服_ニ以否。又假令無_ニ御服_ニ者。例行神事不停止_ニ否事。

右蒙_ニ上宣_ニ稱_ニ上件兩事臨_レ時有_レ疑。宜_ニ勘申_ニ者。喪葬令云。姨服一月。假寧令云。職事官遭_ニ一月喪_ニ給_ニ假十日。又條云。無服之瘍。一月服給_ニ假二日_ニ者。今案_ニ件文_ニ。七歳以下服。親死日給_ニ假法也。七歳以下不可_レ着_ニ親服_ニ。令條無_レ之。名例律云。七歳以下雖_レ有_ニ死罪_ニ不可_レ加_ニ刑。又職制律云。可_レ着_ニ服人聞_ニ喪_ニ。匿不_ニ舉哀_ニ者。其徒罪以下也。由_ニ是案_ニ之。死罪之重不可_レ加_ニ刑。何況徒罪以下。無_レ可_ニ更論_ニ。既無_ニ罪者_ニ不可_レ有_ニ御服_ニ。又神祇令云。散齋

之内。不_レ得_ニ弔_ニ喪間_ニ病者_ニ。據_ニ檢此文_ニ。吊_ニ喪間_ニ病爲_ニ穢_ニ。然則既無_ニ御服_ニ。行_ニ諸神事_ニ者有_ニ何妨_ニ哉。仍勘申。

延喜七年二月廿八日

大判事兼明法博士惟宗朝臣善經
主計頭兼明法博士惟宗朝臣直本

又延長四年勘狀云。

勘申。七歳以下人遭_ニ親喪_ニ并件親遭_ニ七歳以下人喪_ニ之間。各行_ニ神事_ニ以否事。

右檢_ニ假寧令_ニ云。無服之瘍。本服三月假三日。一月服二日。七日服一日。注云。生三月至_ニ七歳_ニ。式云。緣_ニ無服之瘍_ニ請_ニ假者_ニ。限日未_ニ滿_ニ被_ニ召參入_ニ。不_レ得_ニ預_ニ祭事_ニ者。據_ニ此等文_ニ。除_ニ假之外無_ニ疑_ニ神事_ニ。又七歳以下之人無_ニ可_レ着_ニ服之由_ニ。然則於_ニ行_ニ神事_ニ有_ニ何妨_ニ哉。仍勘申。

延長四年十一月廿五日

明法博士兼左衛門佐惟宗朝臣公方

今案。醢御門の御世に。七歳以下の人。親の喪に着服の有無の事如^レ此。兩度まで法家に仰て勘申さしむ。いづれも服假不^レ可^レ有由を申き。此物語の桐壺の御門を延喜帝に準らへ奉りて。しかも源氏君三歳にて更衣にはなれて。宮中を出給ふは。服假あるべきに定れり。それをいかにといふに。法家に仰て服假あるべからざるに定れるは。延喜七年の事也。源氏君の母の喪にあひて退出し給ふ事は。七年以前服假の有無いまだ定らぬ時の事に見侍るべきなり。一義云。七歳以下の入服假あるまじきと云は。二等以下の親の喪なり。父母一等の喪に至ては。本文たしかならざれば。猶神事にはぐかるべしと云べし。後の代の事なれど。堀河院崩御の時。鳥羽院五歳にて諒闇の事あり。則以^レ日易^レ月の義をもて。錫紵を着し給。是等に准

據すべきにや。又一義云。延喜七年法曹の勘狀に。職制律の可^レ着^レ服人の聞^レ喪匿不^レ舉哀^二者徒罪以下と云は。職制律の文を見るに。聞^二父母若夫喪。匿不^二舉哀^一者徒二年。聞^二祖父母外祖父母喪。匿不^二舉哀^一者徒一年とあり。父母の喪をかくすも既に徒罪といへり。又七歳以下雖^レ有^二死罪。不^二可^レ加^レ刑とみえたるうへは二親の喪たりといふとも不^レ可^レ着^レ服之由は無^レ疑ものなり。是によりて今の世に及まで。七歳以下の人は父母の喪にも着服の事はなき也。鳥羽院の五歳にて着^二錫紵^一給ふ事は一人の義天下の人の心喪なれば各別の事也。凡庶の禮に比すべからず。故に源氏の君の宮中を退出し給ふは。延喜七年以前のこととみ侍るべきなり。夕顔卷云。

やうめいのすけなる人。

清慎公記云。康保四年七月廿二日。宰相中將延光

來言ニ雜事。次言ニ主上追レ日本病發給ニ之由。

左兵衛佐佐理云。高聲歌ニ給田中之井戸或法

用ニ云々。左衛門督師氏又來云。今日候ニ殿上邊之

渡殿。放歌御聲甚高。其御歌者。子奈良波云

云。近衛官人皆承ニ御聲。頗ニ以不便。明日可

レ有ニ除目ニ云々。如レ此之間何被レ行ニ公事ニ乎

云々。往代聞ニ武猛暴惡之主。未レ聞ニ狂亂之

君。如レ此之間。外戚不善之輩競ニ成昇進之

望。左衛門督云。藤納言望伊予大納言ニ云々。入

レ夜後。右少將雪月爲光朝臣來云。明日除目一昨

右大將與在面藤大納言在面議定畢之由傳承云々。

揚名關白早可レ被ニ停止ニ之者也。

今案。冷泉天皇は民部卿元方が怨靈により

て。狂亂におはしましける時。外戚の人々

九條殿實賴一官位昇進等の事を議定せしかば。小

野宮殿此時關白にありながら見處し給ひし

故に。述懷し侍りて。揚名關白はやくやめら
るべしと記せられ侍る。

李部王記云。天曆四年九月五日。一分除目。

令ニ一勞書生讓ニ件揚名書生ニ云々。

政事要略惟宗允亮撰卷六十七云。問。人之僕從不

レ可レ着履。但諸國揚名掾目等爲ニ車馬從ニ之

日。依ニ例僕從ニ猶可レ制哉。爲ニ帶ニ掾目ニ不

レ可レ制哉。答云々。

今案。揚名の二字は諸國の介に限べからず。

故に揚名關白と清慎公はのたまへり。又揚

名掾揚名目ともいへり。揚名は只名ばかり

といふ心也。たとへば其官になりたれども。

職掌もなく得分もなきを云り。或抄に。揚名

介は不レ給ニ籤符ニと見えたり。官符を給るほ

どにては。國へ下りて吏務をするべき故な

り。寛弘二年除目。藤原惟光望ニ揚名介ニ申文

にて。常陸權介に任ぜらる。近き比貞和二年

二月除目執筆。後普光園攝政。自給申文。藤原良清

望_ニ揚名介とありて。山城權介に任ぜらる。

愚老も先年執筆の自給に。此申文を獻じて。

常陸權介に任じ侍りき。後に思ひ侍れば常

陸の國は株を守に似たり。他國の介に任ず

べかりきか。但難にてはなかるべし。

同卷云。

おかしげなるさぶらひわらはのすがたこのも
しく。ことさらめきたるさしぬきのすそ。露け
き花の中にまじりて。

女房の男のさしぬき着る事はよのつねなら

ざることなり。西宮抄云。走孺。唐衣比禮下

濃裳平絹指貫云々。或抄云。御禊行幸之時。掌

侍命婦等張袴上着_ニ平絹指貫。如_ニ男指貫。騎馬供奉

云々。西宮抄のはしりわらはも。ともに御禊

の行幸の時の事なり。掌侍命婦女孺等馬に

のらんが爲に。かりそめに男の平絹の指貫

をきるなり。朝顔手折さぶらひわらはの指
貫きたるは。露けき花の中にまじれば。さし
ぬきをさせたり。さてことさらめきたると
は云り。馬にはのらねども御禊の行幸の例
をもてかける也。

花宴卷云。

おきなもほどくまひ出ぬべき心地なえし侍
りし。

村上天皇康保三年十月七日。有_ニ舞御覽。小

野宮右大臣實資公童にて納蘇利まひ給ひけれ

ば。御前にめされて御柏を給。其時清愼公

實資公之祖父也。實資は齊敏之子。かしこまり悦て。感にたへず

して舞給へり。子の舞て勅祿にあづかる時。

祖父若は父のかしこまりて舞事なり。此後

又後冷泉院治暦三年童舞御覽の時。中納言

顯房雅實公童にて胡飲酒を舞て御衣を給り

しかば。祖父内大臣師房公立てまひ給へり。是

等は皆醍醐の御代より後の事也。此次の詞に。ましてさかゆく春に立出させ給はましかばと云り。源氏君の御詞なり。たとへば頭中將の柳花苑舞て勅祿にあづかり給ひし時。おとどのかしこまりにたへず。立出させ給はましかば。一段めでたき後代の例にもなりぬべきとなり。康保三年舞御覽の時。小野宮關白の立て舞給へることは。延喜より後の事なれば。それを今の例にはいはず。後代のためしにもなるべきといへるは。則康保の例を後代のためしに云べき也。

葵卷云。

大將のかりの隨身。殿上の曹などのする事は常の事にあらず。めづらしき行幸などの折のわざなるを。けふは右近藏人のぞうつかうまつれり。

めづらしき行幸とは御禊の行幸の事をいへ

るにや。長和五年十月廿三日。後一條院の御禊の行幸に攝政^{御堂}。供奉し給ふ。府生以下十人。もとよりゆるされて召具し給外に。左右の將監將曹各一人づつをめしわたさる。是を一員とも又かりの隨身とも云也。おほよそ行幸の時は。左右近の官人は。皆本陣に供奉するに由て。私の隨身にめしわたす事はなきを。攝政關白は別段の事なるうへ。鹵簿の圖にはなれて。陣外に供奉し給によりて。一員を具せられし也。されども殿上の藏人の將監を一員に具する事は。すべて其例あるべからず。今の物語。齋院の御禊に源氏の大將の一員を具せらるゝ事は。本陣のさたなければ。頗其理にそむかざるやうなり。しかれども右近の藏人のぞうつかうまつると云は其例なけれども。源氏の大將をたとふるあまりに。かくは書なせるなり。かやうの

ことは能々分別すべき事也。難義なるによりて。河海などにも筆をさし置侍り。

同卷云。

ねのこはいくつかまいらすべからん。三がーにてもあらんかし。

李部王記。天曆二年十二月卅日。徽子女王入内。仍重取案内。供餅不可過今夜之故也。即有勅答參。須臾余捧御餅到殿戶付典侍。四種餅。盛以銀土器代。同箸一双安同器。納螺鈿宮一合。有頃息所退出。即餅宮付侍女。

小右記。天元元年四月十日。左大臣賴忠一女

子入内。十二日始參上。殿下同參。餅四種盛

銀盤。同盤置同銀箸。餅上置心葉。有細納

時繪宮。置一覆蓋令持候。殿下御共。殿下

傳取付加賀典侍令奉之。頗有恐詞。未

及曉更殿下退下。姫君曉更退下。

右。餅盛四坏例なり。三が一は四坏といふ義なり。

都記經信。云。寛治三年正月十九日嫁娶。知足院殿。

盛餅三坏被送。螺鈿沃懸地宮銀坏三口。

洲濱立銀鶴一双。盤上置銀箸一雙。

右。餅盛三坏例也。河海抄所載待賢門

院御入内記も三坏なり。三が一を三坏一

具といへるなり。

今案。此餅むかしは銀器四坏に盛たるを。中比より四の數をはかりて。三坏に成たるべし。されども此物語は。いまだ四坏にもりし時分の事なれば。四坏の説を用ゆべきなり。三が一とは四の數をいみて。源氏の君のとりあへずの給ふ也。河海は中古よりの儀をもて注せり。それが時分相違すべき故なり。次に三が一と云名目。左傳十九卷にあること也。絳縣の老人といふもの。人に年を

とはれて答るやうは。臣生歲正月甲子朔四百有四十五甲子矣。其季於今三之一也云。此老人は七十三になるものか。ありのまゝには答ずして。生れたるより此かた。今日迄の日の數をかぞへていへるなり。たとへば甲子の日は六十日に一度まはる物なるを。生れてより此方四百四十五度の甲子の日にあひて。其最末の甲子の日より今日までは三が一にあたると云り。六十日の三が一といふは廿日なり。甲子の日よりかぞふれば癸未にあたれり。今此問答は十二月廿七日癸未の日の事なり。四百四十五の甲子は六十日にまはる物なれば。是をあはせてかぞふれば。日の數二万六千六百六十日なり。是を横筭にをきてたてざまに取なして見る時は。亥といふ字になるなり。三。二。万六千六百六十の筭のすがたかくのごと

し。三。亥の字に似たれば。亥字の筭とは名付たるなり。亥の子の餅につきて。亥の字の筭の三が一といふ詞をとれり。又甲子の數をとれば。子のこともいふなり。周代の十二月は子月を正月にする故に今の十月の亥の月は十二月なり。ゐのこも十月の事なれば自然に相叶へり。十月は一陽はじめて地下に生じて万物をはらむ月なり。嫁娶のはじめのいはひにたよりある月なるべし。

同卷云。

まことにいまはざるもじ。いませ給へ。よもまじり侍らじといふ。

いまはざるもじを。今はと句をきりて。さるもじとよむ人あり。あやまれるなり。いまはざるもじとよむべし。不諱とは死する事也。いみてもいまれぬこゝろ也。乍去祝言の夜の事なれば。さすが又あらはにはいはずし

て。餅四坏をも三が一といふは。四の聲をい
むなり。いまはざるもじも死の字なり。惟光
が弁にいひきかせたれば。弁も心得て。詞に
もつかはぬといふころに。よもまじり侍
らじと云るなり。

櫛卷云。

さぶらひにとのゐ物のふくろあさくみえ
ず。

北山抄云。至于近衛次將。帶劔上殿無妨。

仍宿侍之時。副於宿物持上之。

李部王記。天慶九年九月十日詔。裂藏人右
衛門尉中原助信宿直衣云々。昨夕主上御
殿上侍。披見助信所隨身之裏中衣。紅色
頗深。仍所破。或云。宿衣私物。非人主可
開看。頗涉苛酷云々。

今案。とのゐ物のふくろの事。宿衣の袋也。ふ
くろをばつゝみともいふ故に。李部王記に

はつゝみとあり。囊の字を則つゝみともよ
む也。さぶらひとは殿上を云。二條院の殿上
なり。宿直する人もやうくまれになると
いはんとて。とのゐ物の袋あさく見え
ずとかけり。若紫の卷にも。とのゐ物とりにつ
かはしてとあり。ことなる事もなきことを
秘事がましくいへる也。今更云あらはさん
もいかじなれば。別には是をしるすものなり。
色々の説あり。いづれも皆あやまりなり。信
用すべからず。

揚名介。子のこの餅。とのゐ物の袋。是を
三箇の秘事といひつたへたり。

明石卷云。

まくなぎつくりて。さしをかせたり。

しらずがほなることをば。みさほつくりとい
ふやうに。またきする事をば。まくなぎつ
くると云也。まくなぎといふちいさき虫の

とびちる時は。目たゝきをするゆへに。其虫の
のとぶ時の様にまたゝきをする也。又まくな
ぎと云は。またゝきと云瞬の字をかくなり。
いしくなぎを庭たゝきとも云。くなぎはたゝくこゝろなり。扱またゝきといふは。ま
くばししたる心也。五節の君の文を源氏君
の方へ參らす時。其使いづくよりともい
はずして。まくばしばかりして指置たるを
いへるなり。作惘然など云も。みさほつくと
同じ。つくるはわざと事をつくるを云な
り。河海等の諸抄にいへる皆あやまりなり。
用ゆべからず。

薄雲卷云。

わが君のたすきひきゆひ給へる。

舊例。男女ともに着袴の時は小袖をば着ず。
構を用るなり。一條院御はかまぎより始て
御小袖を着し給へるなり。構は白ねりのあ

や。文小葵。うら白き平絹なり。三幅。懸緒の
廣さ三寸に帖^レ之。大略如^二打敷^一云々。治承
四年東宮安德。御着袴の時。着御のやう存知
の人なきによりて。沙汰ありて用意せられ
たれども。着御はなかりしなり。

乙女卷云。

をしかいもとあるじははなはだひざうにはへ
たぶ。

西宮抄云。東脩饗獻盃事。獻盃者二人。内外
相分執^レ盃進居。有司云。其方乃垣下客何戸
をか給へると申ス。獻盃稱唯云。下の階を給
侍。有司云。然者戸第正久して給へ侍り給と
云。獻者唯稱。飲畢擬^レ把^二放盃^一之後立退。

今案。東脩と云は學生の入學する時。その師
に束脩の禮をいたす。二字の心。脩は脯也。
ほしたる肉十挺を一束にして。唐の禮には
せしを。本朝の令に。其代に布一端を師に贈

るなり。其入學の時。垣下に着座する人あり

て。酒食をすゝむることあり。戸第と云は。

上戸下戸の品によりて酒をしゐるなり。垣

下と云事は万の事にあり。加茂八幡の臨時

の祭。又賭弓のかへりあるじにもある事也。

たとへば其日の饗應に請伴するこゝろなり。

今の物語にをしは凡の字也。凡河内の姓

にも凡をゝしとよめり。おほよそと云詞なり。

かいもとは則垣下也。あるじは饗也。垣下

につきたる公卿の饗を。かいもとあるじと

いへり。ひざうは非常なり。よのつねならざ

る心なり。はなはだ過分の由を謝すること

葉なり。冠者の君の字つき給ふ時。六條院に

てをこなはれし時。儒生どもを請じて饗を

まうけたる垣下の請伴に。公卿をめし着せ

られし事を。儒生の過分なると謝せる事也。

舊説さまざまにいへり。みな證據もなきこ

となり。用るにたらず。

玉葛卷云。

たゞ水鳥のくがにまどへるこゝちして。

毛詩棠棣篇云。鶉鴒在_レ原。兄弟急難云々。註

云。鶉鴒雛渠也。箋云。雛渠水鳥也。而在_レ原。

失_ニ其常處。猶_ニ兄弟之急難_一云々。

今案。庭たゞきは水鳥なり。原にあるは。く

がにまどへる也。豊後守兵部の君など兄弟

にてあるが。佳馴し所を別れて。たづきなき

ことを。水鳥の陸にまどへるにたとへたり。

棠棣の心をのづから相當せり。舊説あやま

れり。

初音卷云。

さるはかうこじの世ばなれたるさま。

男踏歌に高巾子の冠とて。巾子をたかくし

て。白ききぬにてはりたるを二口。藏人所に

用意有て。六位の舞人にさせられて。綿にて

面をつゝむことあり。常に見なれぬすがたなるにより。世ばなれたるといへり。是は禮記玉藻篇云。縞冠素紕既祥之冠。垂纓五寸。惰遊之士也云々。陳氏傳云。此言縞冠素紕。而綏

之垂者長五寸。盖以_二其爲_一惰遊失業之士。使_レ之服_レ此以恥_レ之耳云々。惰遊之士をば失業と釋して。何事をもなさず。流連するいたづらものを云。それをはづかしめん爲に。縞冠の白き冠をさせしむ。今の男踏歌と云も。正月十四日。京中の游子の明月に乗じて所へ推參せる事也。惰遊失業の人と同じ。其心に高巾子の冠を着せしむるなり。末代に千秋万歳など云は。男踏歌の餘風なり。後嵯峨院の御時にもはやりし事也。

胡蝶卷云。

やすみ所とりつゝ。ひの御よそひにかへ給ふ人々おほかり。

榮花物語廿六云。さるべき四位五位六位などの御ともにつかうまつるともは。さやかにひのさうぞくをしたる物から。うたてげなる物をうへにきたり。

是は尙侍殿の御葬送の時のことなり。

枕草子云。昨日は車ひとつにあまたのりて。ふたあゐのおなじさしぬき。あるはかりぎぬなどみだれて。すだれときおろし。物ぐるをしきまで見えしきんだちの。齋院のゑかにとて。日のさうぞくうるはしうして。今日はひとりくさうくしく乗たり云々。

今案。ひのよそひの事。諸抄にあやまれり。束帶を着するを。ひのよそひとも。ひのさうぞくともいふなり。なをしきたるをば。とのぬすがたと云。よるのよそひなり。それに對して束帶たゞしきをば。ひのさうぞくと云。晝のよそひを云なり。

藤裏葉卷云。

四月ついたちごろ。御まへの藤の花いとおもしろう咲みだれて。又下詞に云。月はさし出ぬれど。花のいろさだかにもみえぬほどなるを。この物語に。朔日比といへるは。まことは四月七日の事也。それを朔日比とは云り。曆道に。曆をつくる事をば推歩の術と云。一月の曆をば四段に分て。朔上望下とかぞふる也。故に上の弓はりのときまでをば。朔日比といふ也。さて月さし出ぬとかけり。七日の夕月夜をいふなるべし。浮舟の巻にも。ついたり比の夕月夜とあり。證文を外に求るに不及。是も舊説様々にいへり。信用にたらざる事なり。

此一帖。後成恩寺入道殿下之製作。花鳥餘情之別注之秘訣也。已三箇條之事被_レ載_レ之。如

惜_二眼命_一。深可_レ停_二外見_一耳。借_二請宵柏_一小
弟寫_二留之_一。余多年留_二心於彼物語_一。依_二道之
冥加_一。及_二今書寫_一。珍々重々。

文明十三年十月十日從一位源朝臣通秀判
灯下_レ按_二合之_一畢。

松風卷云。

かつらの院。

桂の院は。桂川のほとりに有べし。河海に。
今の桂宮院其跡と申され侍れど。太秦と桂
とははるかにへだたりたり。桂の院は桂川
のほとりなる事。其證據おほきなり。此下の
詞にも。鶺鴒どもめす事あり。又川のわたり
あやうげなるまで人々ふみだれてとあり。
桂川のほとりうたがひなきなり。承保三
年。京極大閤桂川の遊覽の時。於_二桂院_一有_二
盃飲事_一。見_二經信卿記_一。うつば物語かつらの

卷云。おとゝ桂川のわたりにある所を持侍り。

花鳥餘情の別註此外無_レ之。十五ヶ條に加_二此一ヶ條_一者十六ヶ條に候。十七ヶ條之由承候。無_二所見_一候。不審候。

此一通。以_二後妙華寺關白自筆_一寫_レ之。件一通。從_二准后_一借_二給之_一也。

永正十七曆十一月五日 左幕下判

右源語秘訣以屋代弘賢藏本按焉

源氏物語竟宴記

永祿三庚申年十一月癸酉。今日源氏物語講竟宴也。余愁攝祿_{縁座}に生れ調宰の官にありながら。はからずひととせ北闕をさりて南泉におもむき。徒に年をつもりの浦にをくり。たのみを住吉の神にかけたるしるしにや。ほいにはあらねどひそかに歸京して。都のありさま身のうへなどみ侍るに。もろこしの周公旦。我國の伊周公などのためしまで心にうかべり。盛者必衰のことはりも。年のかさなるしるしには。身につみてあはれも深き。此ことはりふかく知べきには。源氏物語にしくはあらじと心をかけし也。手づから一部をうつしつゝ見るにも。猶意味をふかくしらまほしくても。齡すでにかたぶくゆへ。いかゞと思ひながら。朝にさく理りに思ひかへし。入道前_{公餘}右府に此物語相傳

の事あながちに望しに承諾あり。二條前博陸。讀是もこの志深くおはしければ。あひかたらし。

彼亭にて弘治元年閏十月廿七日桐壺卷をはじめ。次第あなたこなたにて講ぜられしに。橋姫卷にいたりて。永祿元年の六月まで聽聞するに。又はからざる泉州兵おこりて立歸り。中絶する事頗尺魔也。然に此比靜謐せしかば。八月廿九日に上洛して。暮秋の期に再興し。仲冬丁卯に功終ぬ。歡喜の心譬をとるに物なし。事なし。類齡此卷の數に逢こと。是又過去の宿因あさからざるもの也。仍冥慮を感じ。石山寺を圖して。紫式部此趣向を思ひめぐらすかたち。則如意輪觀音の尊像を觀じて。繪所土佐將監に圖さしむ。其讃云。

紫式部者。越前守爲時女也。候_ニ上東門院_一焉。古傳云。上東門院令_ニ式部作_ニ源氏物語_一。詣_ニ石山寺_一祈之。于_レ時八月十五夜也。遙見_ニ湖水之

月。趣向忽然生。則須磨明石兩卷書_レ之。歸_レ京錄_レ之。終_ニ一部之功_一云々。

爰九條入道博陸殿下。耽_ニ翫此物語_一年久矣。公餘予亦至_ニ七旬餘之類齡_一。猶手_レ之不_レ廢。似_ニ元凱之癖_一。頃詣_ニ殿下_一讀_ニ申之_一。殿下不_レ獲_レ止。命_ニ畫工_一圖_レ之。維時永祿三仲冬五日。

仍覺

あけうはふ色はあやしな咲藤のさかへ久しきやとにうつして此物語に心をかけぬ人なければ。貴賤をえらばず。この卷の名を採題にして。又觀音法樂として。影前にて三十首を講ず。且又入道前右府の發句にて。連歌百韻以下。左に載者也。

行空九條關白通公入道

きりつほ

ちきりをや結ひこめけんもとゆひのこき紫にこゝろそめつゝ

はゝきゝ

澄空伏見殿貞親王入道

とひよるにありしにもあらぬ簪木の本のねさしやかこゝろけん
うつせみ

重保藤田中納言

人からのなこりをそ思ふ空蟬のなつかしき世を今もこひつゝ

夕かほ

經元甘藷寺右中辨

さしてその名は人めきて尋みむしるへはかりをゆふ顔のはな

わか紫

長慶三好修理大夫

ゆかりあるかいまみなからそれもかと若紫に思ひそめてき

末摘花

長澄若桐伊豆守

なにゝこのすゑつむ花の露のまにうつろひやすき色をみす覧

紅葉の賀

季遠四辻六納言

紅葉はの色にたちそふ青海の波のなこりもあかぬおもかけ

花の宴

任助仁和寺宮

きさらきや花のえむてふ時にありとみはしの櫻けふ匂ふらん

あふひ

晴豊勤修寺左少辨

たのむそよ倂をのみみたらしの河せの水の深きこゝろに

さか木

公朝西園寺左大臣

まかへつゝ折といひしも神垣ののこる名やなをしけき柳葉

花ちる里

覺恕曼殊院宮

しのひ音もよしやおしましたち花の花ちるかさねとふ時鳥

須磨

家輔花山院右大臣

月のすむ空もひとつの光にて浪にひたゝくすまの浦かせ

あかし

親氏水無瀧宰相

なかもつゝ月を明石のうら波もたちこそかへれ風のまに／＼

身をつくし

實福三條宰相中將

かすならぬ手向も神にみをつくし深き心はしるしなしやは

よもきふ

種直富京路藏人

ふりまさる五月の雨の露のなをわくる道なき庭のよもきふ

せきや

公古滋野井宰相中將

むかへくる人こそあらし關屋よりいてゝかすゝあふ坂の山

繪合

宗養

光そふ玉つくりえの秋はあれとおほる月よのすまの浦波

松かせ

宗繁安宅殿律師入道

幾秋もあはちの嶋に見し月の空吹はらへ松かせの聲

うす雲

示統富小路判官藤氏直入道

春秋の花のにしきもおり／＼の時につけつゝなかもせよとや

朝かほ

晴季菊亭左大將

時のまの色にやとりてつゆもなを花にきえゆく庭の朝かほ

乙女

藤賢右馬頭

をとめこか袖ふきかへす風にこそ天つ空とはあやまたれけれ

玉かつら

通興久我右大將

忘れぬ露のゆかりの玉かつらかゝるやなかき思ひなるらん

はつね

兼孝九條三位中將

初音なく鶯さたつ松たてる池の砌のはるはわすれし

こてふ

壽 印

春に又こゝろをよせは花園のこてふもさそへ秋の宮人

ほたる

雅教飛鳥井少將

うきおもひありと計にをのれのみもえて鶯のいつちゆくらん

とこなつ

松夜叉磨中院

すゝしさはいつくはありとも撫子のとこなつかしき露の朝顔

かゝりひ

道 安

やり水のなかれさこそと心ひくまゆみこふかき庭の篝火

野 分

直 盛

いはほさへうこくはかりの野分にもうつろひ残る花すゝき哉

みゆき

爲益冷泉院卿

行幸せし其代のふるきこと草もよそふるけふそ名は遺りける

藤はかま

資定細原一位

あかさりし野邊のあはれを藤袴かけて幾世の露に咲らん

まきはしら

仍景里村卿二郎

立なれし影やとまると思ひいてゝ横のはしらもむつまじき哉

むめかえ

公陸三條中納

ななき日もあかすくらしつ鶯の聲うちそへてうたふ梅か枝

盡のうらは

幸孝三賢院殿

紫の色をましへて咲かゝる藤のうらはやいつれ松かえ

若菜の上

禪興松樹記

萬代を摘てふためのわかなそと君にいはねの松のことの葉

わかなの下

宣清矢野大藏丞

あさりせし明石のうらにおりくは思ひやかよふあまの心を

かしは木

義俊大覺寺殿

柏木の梢のこらすちりゆけは人ならすへき陰としもなき

よこ笛

永相高倉右衛門督

今までは吹つたへをく横笛の音にふかき世のあはれをそしる

すゝむし

孝親中山大納言

庭のおもはむかしにふりぬ鈴虫の聲こそあらめ月のさやけき

夕きり

寛欽圓修等宮

小野山やたちいてんかたも白雲にあはれふかむる秋の夕霧

みのり

元 理

ときのこす御法の水のたえすのみむすふ契やよゝの行末

まほろし

俊定彌正六郎

咲藤に立そふ雲もむらさきのうへのうへなる色やなからん

雲かくれ

傳專圓福寺

さらにその哀をいはゝかきりなくめてこし月も雲かくれつゝ

匂兵部卿宮

紹 惠

ふかきよの袖はあやなし追風の吹くる方をゆくゑとやせん

紅梅

清種中務卿少輔

折てこそ梅はにほひもまさりけり色もえならぬ花のくれなゐ

竹川

爲仲五辻

更るよはいとゝ聲そふ竹川にうち出るふしはよそにたにしれ

はしひめ

邦輔伏見殿

うちわたす河霧ふかし橋姫のかたしく袖は波にかさねて

椎か本

公順西宮僧正

二月やときはかきはの椎かもともとみし花やなこり成らん

あけまさ

親俊嵯峨新右衛門

ゆきかへり船はまちかきいと竹の聲をへたつるうちの河波

さわらひ

空圓正親町一位入道

みぬかたのゆかしき春も山人のおるてにしるき峯のさわらひ

やとり木

紹巴

吹まよふかたもさためす紅葉はは風の行衛をやとり木にして

あつまや

玄載

手すさみにかきあはせたる東やの軒の松かせかことかましや

うき舟

淳慶

河嶋やわれてなかるゝあた波にうきたる舟そよるかたもなき

手ならひ

三月盡

小野山や松の門には葉のうすきをしへもきよき曉のかけ

夢のうき橋

仍覺嵯峨院三條西公條公

たつねみよ蓬か嶋もとをからしおもはぬ山もゆめの浮橋

永祿三年十一月十一日

三十首

初春浦

うちとけて氷のうへも道しある春をむかふるしかのうら波

梅香入夢

季遠

さそふとも風のまゝなる手枕に梅か香のこす夢の明ほの

門柳

公陸

とはるへき人こそみえね門のまへたつる柳はしるしなからに

尋花

紹巴

たつねゆく心にちかしもろこしのよしのゝ山の花のしほりは

朝見花

兼孝

みるまゝに白雲かゝる山櫻花よりあけてにほふ日の影

吹花隨水去

爲益

ますけ生るみ山の水に花朽てうらみし風の行衛をそしる

杜若

示紘

かけふかき水の面にも紫の色はへたてぬかきつはたかな

三月盡

心前

いかにせん惜むとしてしも行春のひかすきたまるけふの限は

七夕鳥

傳 惠

七夕のあひみる夜半の餘波とてあす迄かけよかきゝきのはし

庭 萩

爲 仲

ななき夜は萩の葉よりやしらすらんねさめかちな床の秋風

野女郎花

公 古

あたし野になひくもあやし女郎花かさしの玉の露亂れつゝ

山路月

義 孝

あたらの影とは何を思ひけんくまなき月にこゆる山道

湖寺月

親 氏

志賀の浦や波こゝもとに古寺のむかしわすれす月はすみけり

瀬月

經 元

小舟さす河風はれてよる波のせゝにたゆたふ月の影かな

聞 虫

仍 景

うつしうふる秋の花のをしたふとや砌にちかき虫の聲々

霜菊曉愈

宗 養

くれぬまはうつろふとみし花の上にをけは色そふ霜のしら菊

忍 戀

宣 清

身のほとを思ひかへせは深くしもしのはんといひし便悔しき

契久戀

元 理

初 戀

直 盛

なれてこそあはれをもしれほのみてし姿よりなをまさる心は

會稀歲月戀

俊 定

逢ことはまはらにかこふ増柴のしはゞ過る年月もうし

後朝戀

種 直

ひとたひはわたりし中のなみた川立もかへらぬ波の間そうき

遇不逢戀

實 福

逢みてもさすか心はなよ竹のおるへくもあらぬ契りあやしき

旅 戀

玄 載

くれなはとたのためぬ宿の草枕いひしらぬ夜のなこりしもうき

山 櫛

仍 覺

山はけさ櫛は八たひをく霜をいかにまかへて雪のかゝれる

暮雨濕村橋

善 樟

村々暮矣雨聲濃。詩客吟殘橋畔東。易地皆然秦阿房。人須言

不レ舞何虹。

朝眺望

波とをき興津嶋山あけわたり煙をのこす松のこふかさ

掩淚別郷里

空 圓

別ゆく袖はゆたかにたちもせて涙にまかふ故里のみち

泉郎

永相

なれてしもすめはこそあれあま人のつりのいとまも波の浦人

寄源氏物語祝

行空

此巻のそのかすにあふとしなみのたちかへりつゝ春秋をへん

右同日御當座一首不足

賦何路連歌

のこりなく聞や落葉に朝あらし

いくちたひ見ん霜の松かえ

影高き峯はよなく月まちて

それとはかりに遠きしかのね

旅たちて故郷おもふあきのくれ

やはたさむき玉ほこのすゑ

急雨のはれゆく水の一すちに

入日かたわく河かせのをと

つま木とるふもとの小車さし捨て

おくははるかにつゝくやまみち

かすかなる鐘はたか佳里ならむ

霜を枕にかたしきの月

わりなくもおもふ心をしれかしな

なくさめかねつうちとけぬほと

蒼

玖

池

宰相

傳惠

宗養

元理

紹巴

玄載

仍景

紹惠

心前

玖

蒼

籠のうちに聲する鳥のあはれにて

かせやめにたつ雲かへるらん

山松の木の根もしろし花の色

おのへにのこる雪のあけほの

春の夜の雨の沾を軒端にて

竹のさら／＼いこそねられね

かさねてもひとりさはさゆるから衣

そなたはいかにあかしはてけむ

待わふるころをすくせる郭公

風のにほひのうすきたちはな

くれそむる雲の行衛に雨落て

しめるけふりやみねの松かせ

人けをもいとふはかりの山里に

ひるなく犬の聲はすさまし

かきやるに文のかよひもまれなれや

おもふをあとの旅のかなしき

あさな／＼梢は花のちりにけり

ねところしるきそのうらくひす

たちそめてかすむみきりの山近み

やつれもゆくかとのへもる袖

宰

池

養

傳

巴

理

景

載

蒼

玖

紹

理

傳

養

池

巴

玖

載

景

蒼

宮城野の露分出て見る月に

夕かけふかきむしのこゑく

秋風やいまこからしに成ぬらむ

岩ほもうこくいそのしらなみ

かくれかは世を海中にもとめはや

くちてとしふるたなゝしを舟

かたふくもたゝ一もとの松さひし

目影しくれてとをき野のはら

やとりをもいつち行てかたのまゝし

ちきりあまたにかくるあた人

ふりにたる身をわするゝは戀ちにて

むかしはかゝる物もおもはし

ななき夜の月やたらぬとうち佗ぬ

きぬたのうへにふかきつゆしも

鷹かねやをのか羽かせもしほるらん

ころともみえぬ春のさむけさ

ちる色は雪の夕の山さくら

杉むらかすむかねほのかなり

關越ていそかしたつるみやこ人

あしとき駒もつちきわかれち

養 巴 理 玖 蒼 池 巴 養 傳 景 養 理 玖 蒼 載 紹 景 巴 蒼 載

はけしさもかけはなれぬ心にて

風のとたえの夢のうきふし

くれ竹のはいりの小屋のうたゝねに

月ひとりすむよはのあはれさ

をしてるやにほの水海秋更て

霧こそ山をよそにへたつれ

くれわたる空にをくれてなく鳥

市路のかへさみえぬゆくすゑ

遠近の煙立そふ霜ふりて

あさまたきより日やのほるらむ

河波をしのくは遅きたかせ舟

世にふるわさは何かやすかる

あやしきはたゝ仙人の住居にて

いはけなきにもあかぬかいま見

うき思ひ誰にかならひそめつらん

うつろひにけりはなの一えた

瓶にさす梅はかほりもふかいらて

春まちえてもうつみひのもと

かたるにやあつきめくみはしらるらん

つたへもてこし家々のかせ

池 養 傳 理 玖 蒼 巴 養 傳 池 紹 玖 養 巴 理 蒼 巴 養 池 傳

山よりも雨雲はるゝけさの月
 わかれし袖の露いかゝせむ
 しのふ草そめしとむすふ契にて
 たへてこゝろのまつもはかなや
 秋ちかく成ても影のあつき目に
 さそなとおもふうつせみの聲
 五月雨は木の間に瀧の落合て
 なみこゆるかのふるの高はし
 年月のごひわたるをはいひかたみ
 まけしうらみもおほきわかた
 ひたすらにすてぬ心の中にして
 うきことの葉もかきつめてをく
 かくてこそ折々しのふかたみなれ
 とひきてくやし蓬生の秋
 さくからに人まつむしの鳴たえて
 野はいつのまに冬ちかき空
 風なから月の河霧しくるらし
 溪の戸くらきをはつせの山
 あきらけきしるしみするけ佛にて
 をしへのまゝに法やたもたん

載 蒼 理 景 巴 傳 池 理 蒼 紹 玖 養 載 蒼 養 玖 巴 景 理 蒼 載

たてをくもこふるも庭の花盛
 岩かきつゝきかゝるふちなみ
 なかれそふみかさや春の雨そゝき
 かへしてたみの世はゆたかなり
 さゝくるもゆるす御貢の限あれや
 ことふきのみの九重のうち

蒼十三句

玖十一句

池九句

宰相二

傳惠九

宗養十三

元理十

紹巴十二

玄載八

仍景七

紹惠五

心前一

右源氏物語竟宴記以屋代弘賢藏本按畢

大和田 五月
 尾崎 明憲 校
 知念 武雄

昭和三年十一月廿五日 印刷
昭和三年十一月三十日 發行
昭和十四年十二月廿五日 再版發行

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會代表者

太田藤四郎

東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九

永島喜代次郎

東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九

新英社印刷所

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八

續群書類從完成會

振替東京六二六〇七 電話大塚七一八

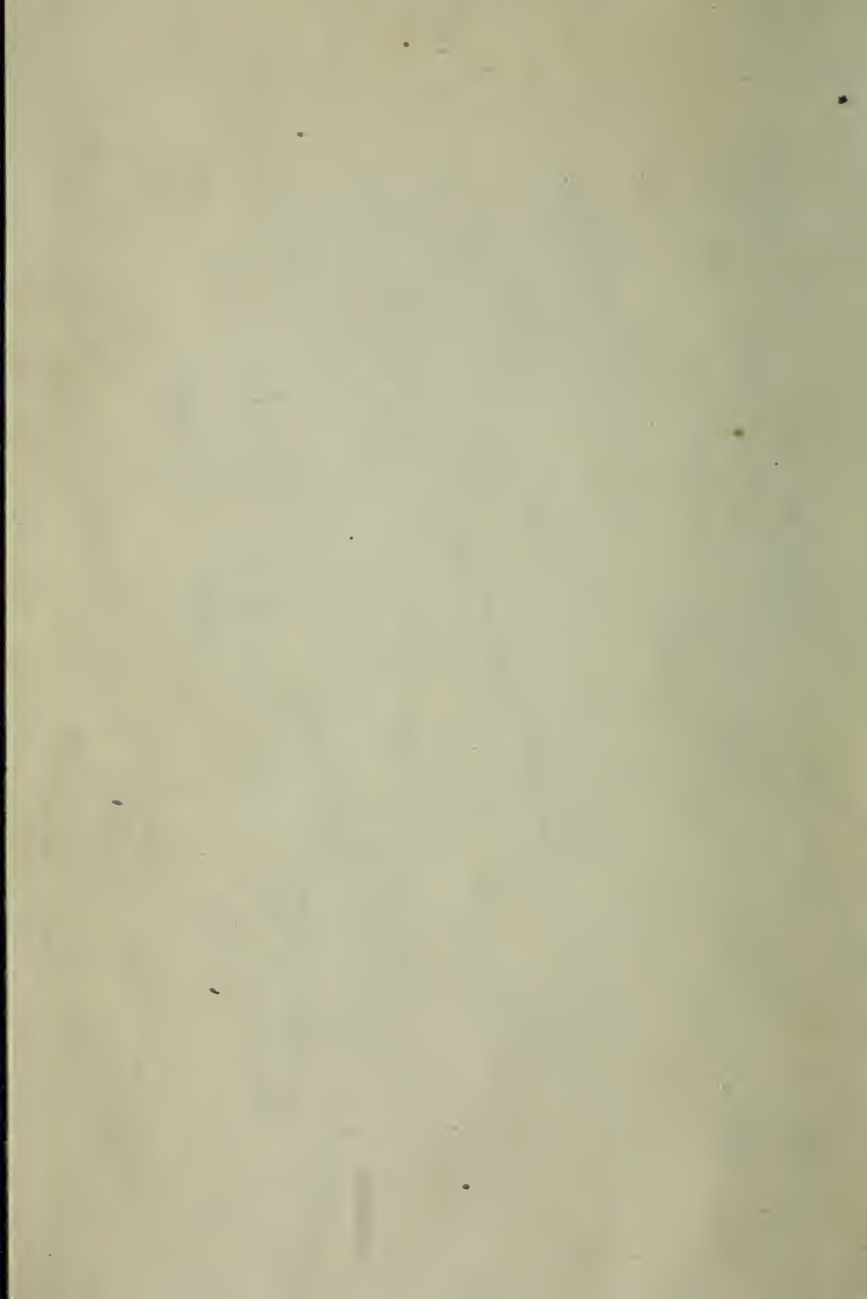
不許
複製

發行者

印刷者

印刷所

發行所



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02964 7971